愛知県埋蔵文化財センター調査報告書　第 172 集

惣作遺跡 II

2012

公益財団法人　愛知県教育・スポーツ振興財団
愛 知 県 埋 蔵 文 化 財 セ ン タ ー

序

愛知県西三河地方は、現在は自動車生産を中心とした工業地帯となっており、日本の経済の一翼を支えるまでに発展しています。その産業や文化を育んできたのが、西三河の中央を南流する矢作川とその流域に広がる沖積平野および広大な碧海台地です。明治用水の開削以降、碧海台地の土地利用の幅が急速に広がり、今日の発展の基盤となっていますが、それ以前からも碧海台地の縁辺部や谷筋を中心にした一帯と沖積低地の微高地には多くの遺跡が存在します。近年はこれらの遺跡の発掘調査が進み、鹿乗川流域も特に弥生時代から古墳時代にかけて多くの集落遺跡が点在していたことが明らかになってきました。

公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団　愛知県埋蔵文化財センターでは、平成20年から21年にかけて、鹿乗川の河川改良工事に伴う事前調査として、安城市木戸町に所在する惣作遺跡の発掘調査を行いました。その結果、弥生時代中期から古墳時代前期にかけての竪穴建物跡や土器棺、河道、平安時代の竪穴建物跡などが見つかり、弥生土器や土師器、多種多様な木製品などの遺物が大量に出土しています。特に木簡は古代の碧海郡浅井郷の様子を知る上で重要な資料として注目されています。

本書はこれらの成果をまとめたものであり、今後学術的な資料として広く活用されるとともに、埋蔵文化財の理解への一助となれば幸いです。

最後になりましたが、調査に対してご理解、ご協力を賜った関係諸機関並びに地元の皆様、発掘調査や資料整理に参加協力していただきました多くの方々に厚くお礼を申し上げます。

平成24年3月

公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団
理事長　　加藤　高明

例　言

１　惣作（そうさく）遺跡（遺跡番号 540132:『愛知県遺跡分布地図 II（知多・西三河地区）』1995 による）は、愛知県安城市木戸町惣作に所在する遺跡である。

２　本書は、愛知県建設部河川課が計画する中小河川改良工事（鹿乗川）に伴う事前調査にかかる発掘調査報告書である。発掘調査は愛知県建設部から愛知県教育委員会を通じて委託を受けた（公益）愛知県教育・スポーツ振興財団　愛知県埋蔵文化財センターが実施した。調査対象面積は 2100㎡である。

３　発掘調査及び遺物水洗作業は平成 20 年９月から平成 20 年 12 月、および平成 21 年９月から平成 21 年 11 月にかけて行われ、その後報告書のための整理作業を平成 22 年９月から平成 23 年３月の期間実施している。なお出土遺物は、コンテナ 89 箱を数える。

４　調査担当者は鈴木正貴、成瀬友弘（以上 2008 年度）、池本正明、永井邦仁（以上 2009 年度）である。現地における発掘調査は玉野総合コンサルタント株式会社と株式会社島田組と株式会社シン技術コンサルの業務支援を受けて行っている。調査スタッフは、現場代理人 : 坂倉政樹・調査補助員 : 服部孝信・測量技師 : 森本辰美 , 前田武志（玉野）、現場代理人 : 中川健二・調査補助員 : 角上寿行・測量技師 : 北畠誠司（島田組）、現場代理人 : 光松章・調査補助員 : 安生素明・測量技師 : 半浦聖智 , 川久保亮（シン）である。

５　調査にあたっては本センター理事・専門委員をはじめ次の各関係機関のご指導とご協力を得た。

愛知県教育委員会文化財保護室、愛知県埋蔵文化財調査センター、安城市教育委員会、安城市埋蔵文化財センター、愛知県建設部河川課

６　調査区の座標は、国土交通省告示に定められた平面直角座標 VII 系に準拠した。表記は世界測地系を用いている。

７　遺構は以下の分類記号を用い、原則調査時に使用した表記をそのまま使用した。

SB：建物、SI：竪穴建物、SK：土坑、P,SP：ピット、SD：溝、SE：井戸、SN,ST：水田、SX：その他の遺構、SZ：墓、NR：自然流路

調査区表示は調査時には 08 A区～ 08 C区、09 A区～ 09 C区としており、本文中でもそのまま用いている。既報告である 2004 年度の調査区は 04 A区～ 04 H区と表示した。

８　本書の執筆は下記のとおりである。

第２章第５節～第７節・第３章第１節 (2)・第２節 (5)　永井邦仁
第３章第２節 (1) ～ (4)・(6)・第５章第１節　樋上昇（調査研究専門員）
第３章第３節　川添和暁（調査研究主任）
第４章第１節　鈴木茂（株式会社パレオ・ラボ）
第４章第２節　黒沼保子（株式会社パレオ・ラボ）
第４章第３節　佐々木由香・バンダリ スダルシャン（株式会社パレオ・ラボ）
その他は全て鈴木正貴が執筆している。

９　発掘調査および本書の作成に際しては次の方々のご指導とご協力を得た。

浅岡優、浅野啓介、天野暢保、岡安雅彦、北村和宏、黒坂貴裕、桑田訓也、鈴木とよ江、鈴木裕明、中村一郎、福岡猛志、古尾谷知浩、山田昌久、李浩基、渡辺晃宏（敬称略、順不同）

10　樹種同定・種実同定・プラントオパールの各分析については株式会社パレオ・ラボに、遺物の実測・トレースについては国際航業株式会社と株式会社文化財サービスに、写真撮影については写真工房 遊に委託した。また、本書の編集・図版作成については株式会社文化財サービスの協力を得た。

11　発掘調査及び整理については、多数の発掘作業員・整理補助員のご協力を得た。

12　調査記録（図面・写真資料・日誌等）は、本センターにて保管している。

13　出土遺物は愛知県埋蔵文化財調査センターで保管している。

目次

第１章　調査の概要　1
　第１節　調査の経緯
　第２節　調査の方法
　第３節　地理的・歴史的環境

第２章　遺構　6
　第１節　遺構の概要
　第２節　09C 区の遺構
　第３節　08A 区の遺構
　第４節　08B 区の遺構
　第５節　09A 区の遺構
　第６節　09B 区の遺構
　第７節　08C 区の遺構

第３章　遺物　50
　第１節　土器・陶磁器類
　第２節　木製品
　第３節　石器

第４章　自然科学的分析　128
　第１節　惣作遺跡のプラント・オパール
　第２節　惣作遺跡出土木製品の樹種同定
　第３節　惣作遺跡から出土した大型植物遺体

第５章　考察・まとめ　148
　第１節　出土木製品からみた弥生時代後期～古墳時代前期の
　　鹿乗川流域遺跡群
　第２節　総括

抄録　174
遺構図版　175
写真図版

挿図目次

第１図　遺跡位置図（１）　1
第２図　遺跡位置図（２）　3
第３図　調査区位置図　4
第４図　004SN ～ 010SN 遺構図　7
第５図　011SN ～ 013SN 遺構図　8
第６図　014SN ～ 017SN 遺構図　9
第７図　021SN ～ 023SN 遺構図　11
第８図　117SI 遺構図　12
第９図　194SA・195SA 遺構図　13
第 10 図　08A 区土層断面図　15
第 11 図　08A 区 003NR 木製品出土分布図　16
第 12 図　08A 区 003NR 土器類出土分布図　17
第 13 図　077SB 遺構図　18
第 14 図　078SB 遺構図　19
第 15 図　084SB 遺構図　20
第 16 図　344SB 遺構図　21
第 17 図　345SB ～ 353SB 遺構図　22
第 18 図　354SB ～ 356SB 遺構図　23
第 19 図　291SE 遺構図　24
第 20 図　08B 区基本土層断面図　26
第 21 図　08B 区 003NR 遺構図（１）　27
第 22 図　08B 区 003NR 遺構図（２）　28
第 23 図　08B 区 003NR 遺物出土分布図（１）　29
第 24 図　08B 区 003NR 遺物出土分布図（２）　30
第 25 図　08B 区 003NR 遺物出土分布図（３）　31
第 26 図　08B 区 003NR 遺物出土分布図（４）　32
第 27 図　08B 区 003NR 土層断面図　33
第 28 図　007SB 遺構図　34
第 29 図　001SD・002SX・064SX・065SX 土層断面図　35
第 30 図　09A 区遺構図　36
第 31 図　09B 区３面遺構図（１）　37
第 32 図　09B 区３面遺構図（２）　38
第 33 図　09B 区４面遺構図（１）　39
第 34 図　09B 区４面遺構図（２）　40
第 35 図　023SI・028SI 遺構図　42
第 36 図　049SB・050SB 遺構図　45
第 37 図　066SB・067SB 遺構図　46
第 38 図　073SD 遺構図　47
第 39 図　068NR 遺構図　48
第 40 図　A 期の出土遺物（１）　51
第 41 図　A 期の出土遺物（２）　52
第 42 図　A 期の出土遺物（３）　53
第 43 図　A 期の出土遺物（４）　54
第 44 図　A 期の出土遺物（５）　55
第 45 図　A 期の出土遺物（６）　56
第 46 図　A 期の出土遺物（７）　57
第 47 図　A 期の出土遺物（８）　59
第 48 図　A 期の出土遺物（９）　60
第 49 図　A 期の出土遺物（10）　61
第 50 図　A 期の出土遺物（11）　63
第 51 図　A 期の出土遺物（12）　64
第 52 図　A 期の出土遺物（13）　65
第 53 図　A 期の出土遺物（14）　66
第 54 図　A 期の出土遺物（15）　67
第 55 図　A 期の出土遺物（16）　68
第 56 図　A 期の出土遺物（17）　69
第 57 図　A 期の出土遺物（18）　70
第 58 図　A 期の出土遺物（19）　72
第 59 図　A 期の出土遺物（20）　73
第 60 図　A 期の出土遺物（21）　75
第 61 図　A 期の出土遺物（22）　76
第 62 図　A 期の出土遺物（23）　77
第 63 図　A 期の出土遺物（24）　78
第 64 図　A 期の出土遺物（25）　79
第 65 図　A 期の出土遺物（26）　80
第 66 図　A 期の出土遺物（27）　81
第 67 図　A 期の出土遺物（28）　82
第 68 図　A 期の出土遺物（29）　83
第 69 図　A 期の出土遺物（30）　84
第 70 図　A 期の出土遺物（31）　86
第 71 図　A 期の出土遺物（32）　87
第 72 図　A 期の出土遺物（33）　88
第 73 図　A 期の出土遺物（34）　89
第 74 図　A 期の出土遺物（35）　90
第 75 図　A 期の出土遺物（36）　91
第 76 図　A 期の出土遺物（37）　92
第 77 図　B 期の出土遺物（１）　94
第 78 図　08B 区 003NR B 期の遺物出土分布図　95
第 79 図　B 期の出土遺物（２）　95
第 80 図　B 期の出土遺物（３）　96
第 81 図　B 期の出土遺物（４）　97
第 82 図　B 期の出土遺物（５）　98

第 83 図　C 期の出土遺物　100
第 84 図　木製品（1）　102
第 85 図　木製品（2）　103
第 86 図　木製品（3）　104
第 87 図　木製品（4）　105
第 88 図　木製品（5）　106
第 89 図　木製品（6）　108
第 90 図　木製品（7）　109
第 91 図　木製品（8）　110
第 92 図　木製品（9）　111
第 93 図　木製品（10）　112
第 94 図　木製品（11）　113
第 95 図　木製品（12）　114
第 96 図　木製品（13）　115
第 97 図　木製品（14）　116
第 98 図　木製品（15）　117
第 99 図　木製品（16）　118
第 100 図　木製品（17）　119
第 101 図　木製品（18）　120
第 102 図　木製品（19）　121
第 103 図　木製品（20）　122
第 104 図　木製品（21）　123
第 105 図　木製品器種・樹種組成図（1）　124
第 106 図　木製品器種・樹種組成図（2）　125
第 107 図　石器　126
第 108 図　プラント・オパール分析試料採取位置　128
第 109 図　北壁断面試料のプラント・オパール分布図　129
第 110 図　T15 断面試料のプラント・オパール分布図　129
第 111 図　惣作遺跡のプラント・オパール　131
第 112 図　惣作遺跡出土材の光学顕微鏡写真（1）　136
第 113 図　惣作遺跡出土材の光学顕微鏡写真（2）　137
第 114 図　惣作遺跡出土材の光学顕微鏡写真（3）　138
第 115 図　惣作遺跡出土材の光学顕微鏡写真（4）　139
第 116 図　惣作遺跡出土材の光学顕微鏡写真（5）　140
第 117 図　惣作遺跡出土材の光学顕微鏡写真（6）　141
第 118 図　惣作遺跡 003NR から出土した大型植物遺体（1）　145
第 119 図　惣作遺跡 003NR から出土した大型植物遺体（2）　146
第 120 図　鹿乗川流域遺跡群の遺跡分布　149
第 121 図　弥生～古墳時代の木製品器種組成比較　150
第 122 図　鹿乗川流域遺跡出土掘削具ほかの集成　151
第 123 図　鹿乗川流域遺跡出土威儀具ほかの集成　153
第 124 図　鹿乗川流域遺跡出土建築部材の集成　154
第 125 図　鹿乗川流域遺跡出土その他の木製品の集成　155
第 126 図　下懸遺跡出土木製品器種別樹種グラフ　157
第 127 図　惣作・姫下遺跡出土木製品器種別樹種グラフ　158
第 128 図　下懸遺跡出土木製品樹種別器種グラフ　159
第 129 図　惣作・姫下遺跡出土木製品樹種別器種グラフ　160
第 130 図　下懸遺跡出土木製品樹種別木取りグラフ　161
第 131 図　惣作・姫下遺跡出土木製品樹種別木取りグラフ　162
第 132 図　下懸遺跡出土弥生時代木製品の復元径・年輪数グラフ　164
第 133 図　惣作遺跡出土木製品の樹種別復元径・年輪数グラフ　165
第 134 図　下懸遺跡出土古墳時代木製品の復元径・年輪数グラフ　166
第 135 図　姫下遺跡出土木製品の樹種別復元径・年輪数グラフ　167
第 136 図　鹿乗川流域遺跡群の樹種組成比較グラフ　169
第 137 図　A―2 期における甕の変遷　171
第 138 図　惣作遺跡の遺構変遷　173

挿表目次

第 1 表　試料 1g 当たりのプラント・オパール個数　130
第 2 表　樹種別集計　132
第 3 表　樹種同定結果一覧　135
第 4 表　大型植物遺体試料一覧　143
第 5 表　003NR から出土した大型植物遺体　144
第 6 表　弥生～古墳時代の木製品器種組成比較　150
第 7 表　鹿乗川流域の遺跡別樹種組成表　168

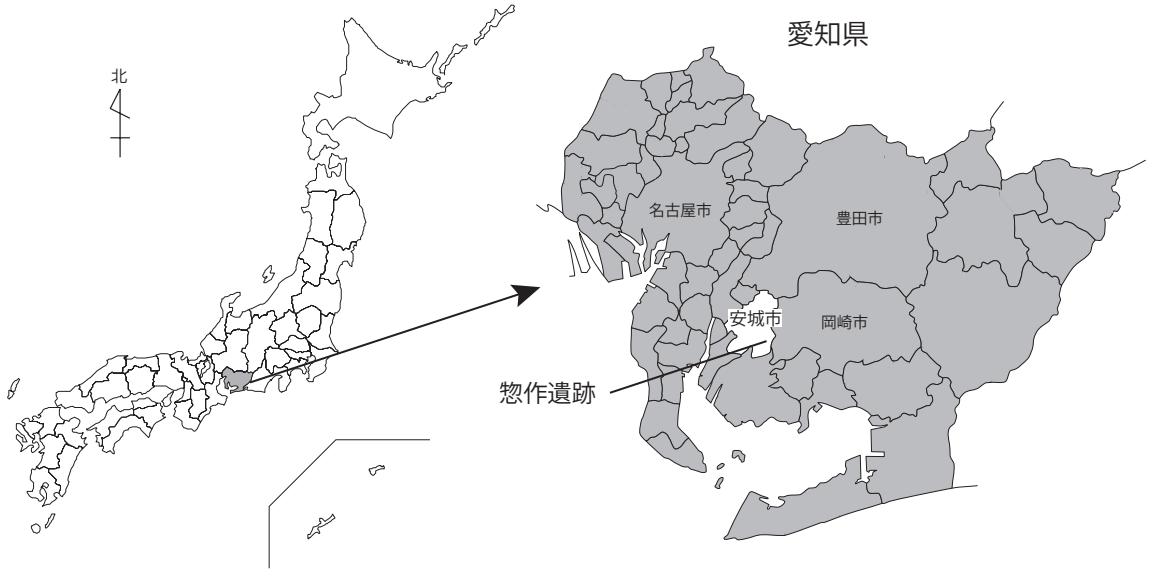
第１章　調査の概要

第１節　調査の経緯

今回の惣作遺跡の調査は、中小河川改良工事（鹿乗川）に伴う事前調査として、愛知県建設部から愛知県教育委員会を通じた委託事業として行った。鹿乗川河川改良工事予定地には『愛知県遺跡分布地図Ⅱ（知多・西三河地区）』（愛知県教育委員会 1995）に記載された惣作遺跡が所在することが認識されていたが、さらに詳細に遺跡の範囲を決定することを目的に、平成 12 年３月に愛知県埋蔵文化財センターによって予定地内の範囲確認調査が行われた。この結果、遺跡の範囲を 04 Ａ区北端から 04 Ｈ区南端までと判断され、平成 16 年度に旧水田用地で堤防建設予定地を中心に 3295㎡の範囲を発掘調査した（報告書は『惣作遺跡』第 156 集）。
その後、平成 20 年度には、平成 16 年度調査区の西側に相当する旧堤防部と調査区に挟まれた道路部の発掘調査を実施した。具体的には、04 Ａ区・04 Ｂ区の西側を 08 Ａ区、04 Ｄ区の北側と西側を 08 Ｂ区、04 Ｇ区・04 Ｈ区の北側と西側を 08 Ｃ区と設定した。

04 Ａ区の発掘調査では、北東―南西方向に走る標高約 6.4m の微高地の北肩と北側に広がるゆるやかな落ち込みが検出され、落ち込み部分では遺構は希薄になり、範囲確認調査の指摘通り 04 Ａ区の北側は遺跡の範囲ではないと認識されていた。しかし、08 Ａ区の発掘調査において、北部の微低地部分で古代を中心とする水田遺構が検出され、それが調査区の北側にまでその範囲が拡がることが高い確率で予測された。また、惣作遺跡と下懸遺跡の間に所在する五反田遺跡の範囲確認調査においても遺跡の存在が確認された。この結果、惣作遺跡の北方は水田遺構を挟んで五反田遺跡と下懸遺跡に接していることが明らかになった。これを受け、愛知県教育委員会と愛知県建設部は対応を協議し、まだ開発工事が進んでいない 08 Ａ区の北側を遺跡と認識し、発掘調査を行う必要性があると判断した。

上記の経緯から、平成 21 年度には、前年度までに調査ができなかった寺領橋東側の市道部分（09 Ａ区・09 Ｂ区）と、新たに追加された 08 Ａ区の北側（09 Ｃ区）を発掘調査した。これで、河川改修関連の現鹿乗川の東側の惣作遺跡の発掘調査は終了したことになる。



第１図　遺跡位置図 (1)

第２節　調査の方法

発掘調査は、平成 20 年度では玉野総合コンサルタント株式会社の支援を受け、08 Ｂ区→ 08 Ｃ区→ 08 Ａｂ区→ 08 Ａａ区の順に実施した（第３図）。調査担当者は鈴木正貴・成瀬友弘である。平成 21 年度では株式会社島田組と株式会社シン技術コンサルの支援を受け、09 Ａ区と 09 Ｂ区→ 09 Ｃ区の順に実施した。調査担当者は池本正明・永井邦仁である。

調査方法は、はじめにバックホウにより表土掘削を実施した。調査地点により堆積状況は異なるが、概ね築堤盛土や道路盛土および近世から現代までの旧水田耕作土となる灰色粘土または粘質シルトなどの表土を除去し、平安時代を中心とした遺構面となる黒褐色粘土層上面まで掘削した。多くの遺構は黒褐色粘土の上面から掘り込まれていることから、全ての調査区においてこの面で遺構検出を試み、１面遺構として調査を行った。その後、多くの調査区では黒褐色粘土を除去していわゆる基盤層である灰色シルト層上面で遺構検出を実施し２面遺構とした。ただし、黒褐色粘土など遺構埋土が厚く残存する部分ではこの限りではなく、３面・４面調査を行った部分もある（09 Ｂ区）。したがって、各調査区相互の遺構面の対応関係は合致しない場合が多くなっているので、この点は注意が必要である。本書では調査区ごとに遺構の説明を行うので、個別の状況はそれを参照されたい。

各調査区の最終遺構面の調査が終了した段階で、いわゆる基盤層を構成する灰白色中粒砂の厚い堆積をバックホウにより「深掘調査」を実施している。この砂を中心とした堆積物は古矢作川が出水時に一気にもたらした堆積と思われ、そこで遺構が展開したと想定することは難しいが、弥生時代中期を中心とする土器群が良好な状態で出土することが知られている。この堆積を掘削する際は湧水が激しく安全を確保して遺物を採取するために、採取の際は重機を使用している。本書で深掘とした遺物は全てこの重機掘削した際に出土したものである。

調査区内は、国土交通省告示によって定められた平面直角座標第Ⅶ系に準拠した 5m グリッドを設定し、遺物は原則このグリッドごとに取り上げている。部分的に包含層を人力で掘削しながら遺構検出を行い、土坑類は半裁掘削、溝や竪穴建物跡などは土層観察用ベルトを残して掘削し、必要な記録を採取した後に全堀作業を行った。遺構の実測は電子平板による測量を実施し、成果品は全てデジタルデータで作成した。写真は６×７リバーサルフィルムとデジタルカメラによる撮影を各調査補助員が行った。調査途中の平成 20 年 12 月 14 日には現地説明会を開催し、検出された遺構と出土した遺物について説明した。約 110 人の参加者があった。また、出土した遺物は現地で遺物洗浄までの作業を終え、洗浄が終了した時点で 27 リットル入りコンテナで 89 箱に及んだ。

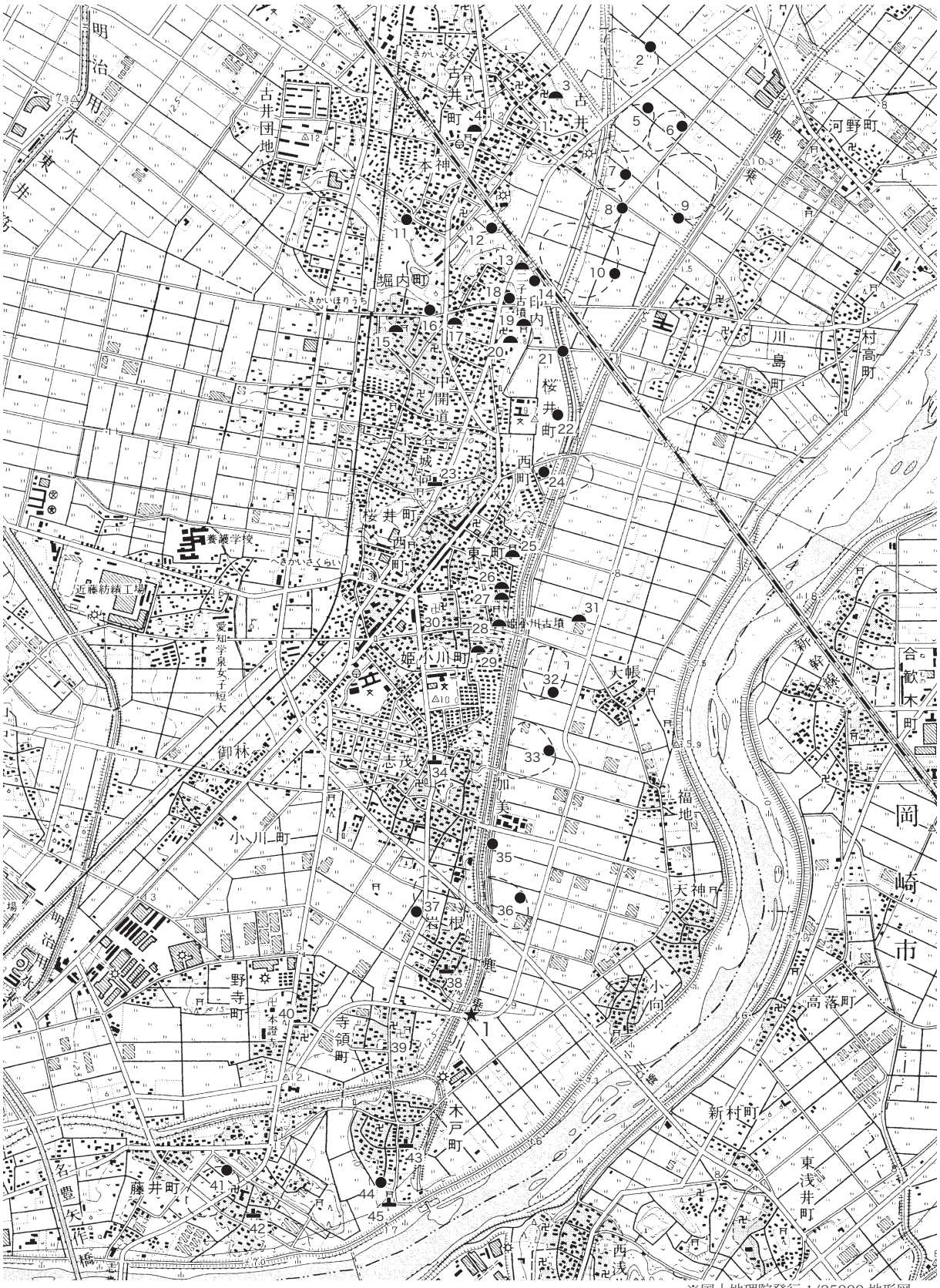
整理・報告書作成作業は平成 22 年度に鈴木が担当して実施した。遺物は整理補助員の協力を得て接合・選別作業を実施し、報告書に掲載する遺物の実測については一部を国際文化財株式会社に委託し、残りを鈴木と永井と川添が行った。遺物実測図のトレースは多くの部分を国際文化財株式会社と株式会社文化財サービスに、遺物の写真撮影は写真工房遊に、樹種同定などの自然科学的分析をパレオ・ラボ株式会社に、報告書編集作業（遺構図作成を含む）は株式会社文化財サービスにそれぞれ作業を委託し行った。

平成 23 年度に報告書印刷作業を行い，印刷は新日本法規印刷株式会社に委託した。

第３節　地理的・歴史的環境

惣作遺跡は、碧海台地の縁辺に沿って流れる鹿乗川左岸の微高地上に立地する。この微高地は矢作川及びその支流によって形成されたと思われ、砂あるいはシルト層が基盤となる。遺構検出面の標高は６～７ｍを測り、碧海台地よりも３～４ｍ低い。現在の鹿乗川は近代の改修により直線的に南流しているが、それ以前はたびたび流路を変えながら蛇行して流れたものと思われ、かなり入り組んだ地形であったことが発掘調査から徐々に明らかになっている。

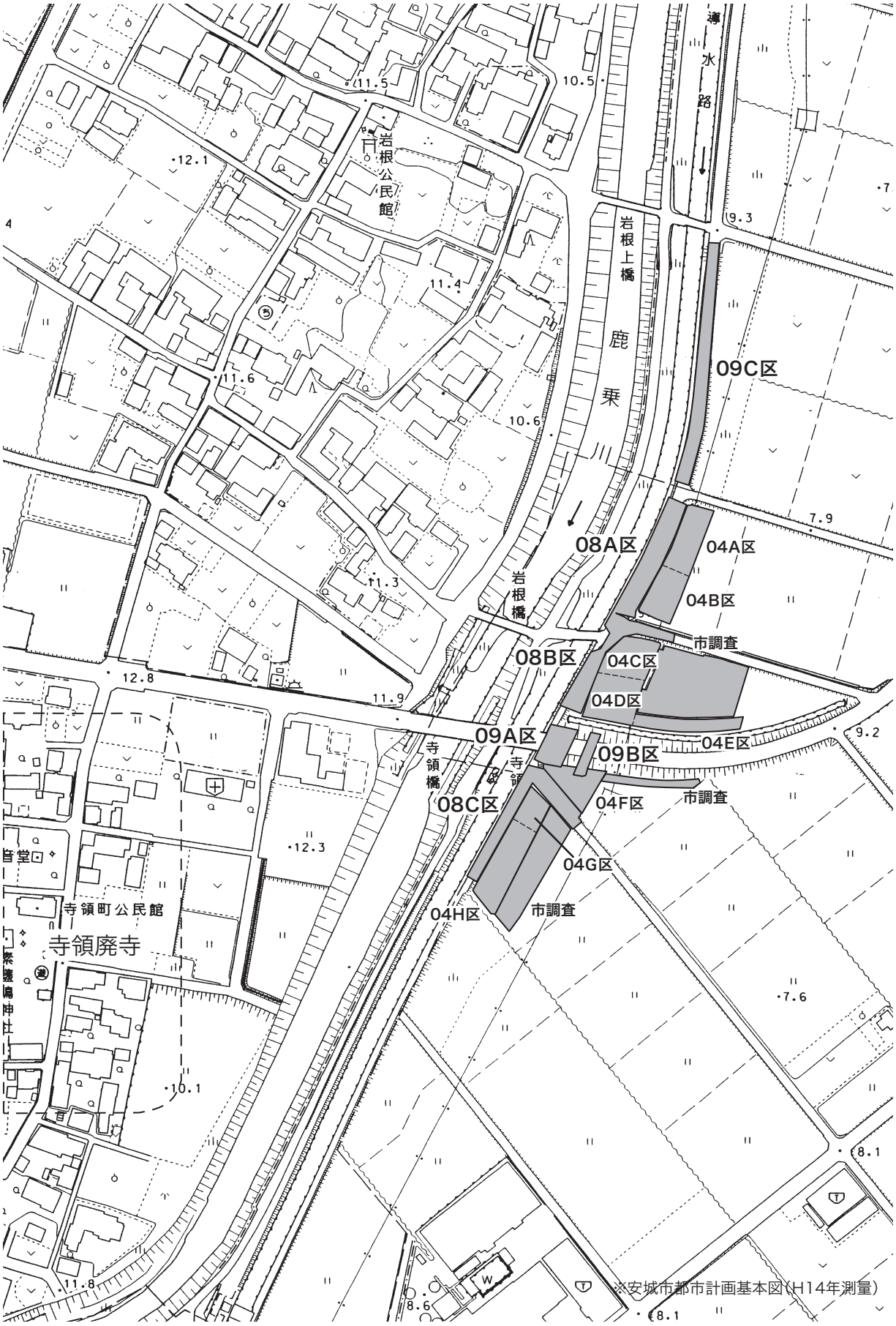
今回の調査区では、08 Ｂ区中央部・08 Ｃ区北東部・09 Ａ区・09 Ｂ区の部分は地形が高くてやや安定しており、その周辺が低地部になる。この安定した微高地が形成されるのは弥生時代中期以降であり、それ以前は 08 Ｂ区と 08 Ｃ区で厚く堆積する中粒砂を運んだ旧河川が南流していたと思われる。今回の調査では、古墳時代前期には 08 Ｂ区を中心に東西方向に走る河川が存在したことが明瞭に確認され、その左岸と右岸で遺跡の様相は異なっている。08 Ａ区北半部から北にかけては緩やか



※国土地理院発行 1/25000 地形図
「安城」「西尾」（H15 年発行）を使用

1	惣作遺跡	11	本神遺跡	21	宮下遺跡		
2	神ノ木遺跡	12	釈迦山遺跡	22	中狭間遺跡		
3	塚越古墳	13	二子古墳	23	桜井城跡	31	八ツ塚古墳	39	寺領廃寺
4	愛宕古墳	14	二夕子遺跡	24	亀塚遺跡	32	姫下遺跡	40	本證寺境内地
5	竹ノ花遺跡	15	堀内古墳	25	獅子塚古墳	33	寄島遺跡	41	大畑遺跡
6	上橋下遺跡	16	堀内貝塚	26	姫塚古墳	34	小川志茂城跡	42	藤井城跡
7	野辺遺跡	17	碧海山古墳	27	崖古墳	35	下懸遺跡	43	木戸古城遺跡
8	彼岸田遺跡	18	桜林遺跡	28	姫小川古墳	36	五反田遺跡	44	木戸城遺跡
9	下橋下遺跡	19	山伏塚古墳	29	王塚古墳	37	加美遺跡	35	木戸城跡
10	古井堤遺跡	20	比蘇山古墳	30	誓願寺境内地	38	岩根城跡		

第２図　遺跡位置図 (2)（s=1:25000）


導水路
岩根上橋
鹿乗
岩根公民館
岩根橋
寺領橋
寺領町公民館
寺領廃寺
09C区
08A区
04A区
04B区
市調査
08B区
04C区
04D区
09A区
04E区
09B区
08C区
04F区
市調査
04G区
04H区
市調査
※安城市都市計画基本図(H14年測量)

第３図　調査区位置図

に低地となり後背湿地であったと思われる。このように惣作遺跡は、基盤形成を含め、河川の影響を強く受けて立地しているといえる。

鹿乗川に沿った碧海台地縁辺部には、多くの遺跡が集中する（第２図）。最も古い時期の遺跡としては、縄文時代晩期から弥生時代前期にかけての土坑墓・土器棺墓・貝塚が出土した堀内貝塚があり、釈迦山遺跡、桜林遺跡、亀塚遺跡などでも遺物が採取されている。弥生時代になって遺跡が集中するのは、古井堤遺跡や上橋下遺跡、下橋下遺跡などが展開する区域で、これらの遺跡を古井遺跡群と総称する場合もある。古井遺跡群は弥生時代から古墳時代初頭まで地点を変えながら連続して営まれる集落遺跡で、弥生時代中期後半期に最盛期を迎える。また弥生時代中期後半の遺跡としては中狭間遺跡や加美遺跡・下懸遺跡がある。さらに弥生時代後期から古墳時代初頭になると、人面文土器が出土した亀塚遺跡、環濠と思われる溝が検出されている本神遺跡や中狭間遺跡、遺物が大量に出土した桜林遺跡・下懸遺跡など多くの遺跡が出現する。この地域の古墳で時期が判明しているものはわずかであるが、全長 69m を測る前方後方墳である二子古墳を中心とした塚越古墳・比蘇山古墳・碧海山古墳などと、全長 69m の前方後円墳を中心とした獅子塚古墳・姫塚古墳・八ツ塚古墳などに分かれる。奈良時代には惣作遺跡の西約 300m のところに寺領廃寺が建立され、沖積低地には多くの集落遺跡が確認されている。（鈴木正貴）

第２章　遺　構

第１節　遺構の概要

本書では、既報告の『惣作遺跡』（2009）で遺構・遺物の消長をもとに提示された時期区分を踏襲し、一部修正を加えた上で、北から南へ調査区ごとに記述を進めていきたい。

Ａ期　弥生時代から古墳時代初頭

Ａ―１期　弥生時代前期後半～中期前葉　水神平式期～岩滑式期

Ａ―２期　弥生時代中期後半　古井式期～凹線文期

Ａ―３期　弥生時代後期～古墳時代初頭　山中式期～廻間１式期

Ａ―４期　古墳時代前期　廻間２式期

Ｂ期　平安時代前半

Ｂ―１期　井ヶ谷 78 号窯式期～黒笹 90 号窯式期

Ｂ―２期　折戸 53 号窯式期

Ｃ期　戦国時代から江戸時代

Ｃ―１期　鎌倉時代

Ｃ―２期　戦国時代～江戸時代

Ｃ―３期　江戸時代後期以降

（鈴木正貴）

第２節　09 Ｃ区の遺構

（１）調査経過と遺構の概要

09C 区は、08A 区に北接する幅約 5m 南北長約 115m の細長い調査区である。用水脇の道路敷を調査区としており緩くカーブした形状である。ほぼ中央で水路が横切る箇所があり、そこで便宜的に北半部と南半部に分けての調査となった。表土掘削は道路舗装除去後に開始し、路盤の粘土や砕石の下で近代以前の耕作土である粘土～粘質シルトの堆積が認められた。ここでは顕著な遺構・遺物がみられないことからさらに掘り下げて黒褐色粘土層上面を検出し（第１面）、08A 区での調査成果を受けて農耕に関わる畦畔遺構の検出をおこなった。その後、黒色粘土層を掘り下げて基盤砂層上面の検出を行い（第２面）、古代を中心とする遺構を検出した。ただし調査区南半部は後背湿地であるため基盤層が落ち込んでいることや、設定したトレンチによる観察でも顕著な遺構・遺物が見出せなかったことから全面掘り下げは行っていない。

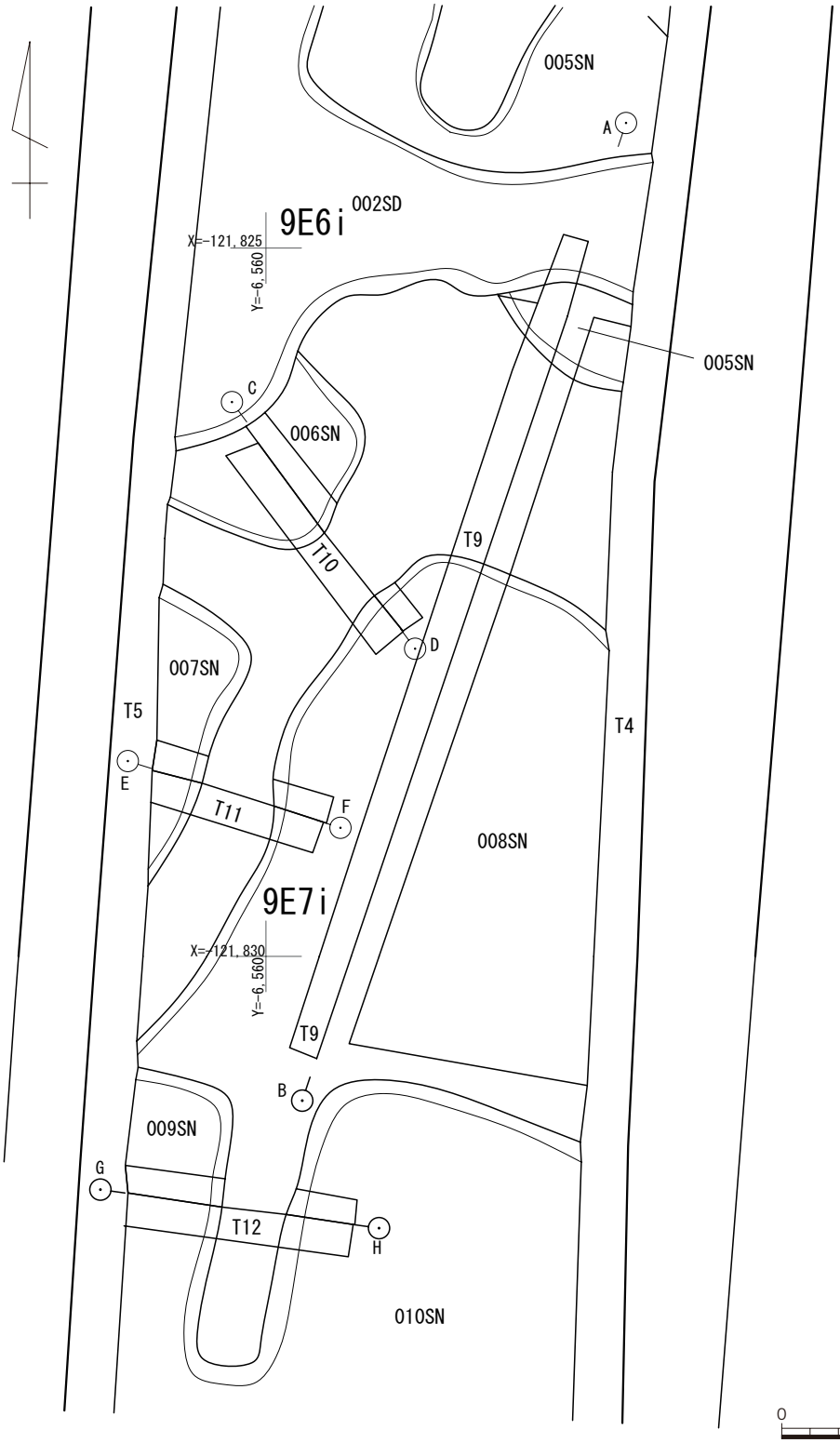
（２）第１面（水田遺構）

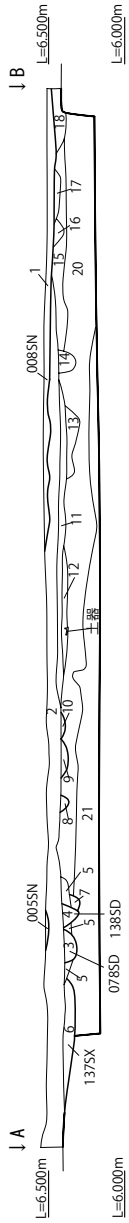
黒褐色粘土層は、調査区北半部の一部を除いてほぼ全体で検出される地層である。当該地層は上下２層に区分することができる。すなわち上層は炭化物粒が多数混じるために黒色度がより強い粘土層であり、下層はその混入が少ないため褐色度が強い粘土である。この上・下層の境は必ずしも明瞭というわけではないが、概ね区分することができる。

それらの位置づけは、上層が水田などの耕作で撹拌を受け続けた層であり、下層は耕作の届かない比較的固定化された層である。したがって下層上面はその上位に畦畔が造られると撹拌の機会が減るために同様に畦畔状の高まりとなる。つまり畦畔そのものではないが、その存在が転写されて検出される層として位置づけることができる。これを畦畔遺構と呼ぶ。なおこの転写は、基盤砂層が高くなる自然堤防頂部においては、砂層（またはシルト層）上面に対してなされる。例えば 011SN・012SN の間にある畦畔遺構がそれに該当する。

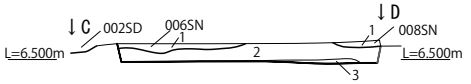
09C 区で実施した水田遺構の検出方法は、まず調査区東・西両壁に設定したトレンチで黒褐色粘土層の上・下層区分をおこない、畦畔状の高まりを断面で把握することから始める。しかしそれは明瞭な立ち上がりを伴わないので確証がない。次に、黒褐色粘土上層を掘り下げ平面検出をおこなう。畦畔遺構は溝状遺構が交差するように検出され、その両脇の黒褐色粘土上層が凹んだ田面の埋土となる。その埋土掘削と同時に、平面検出した畦畔遺構の全てについてサブトレンチを設定して土層断面の精査を実施した。それによって畦畔の幅が検出時より変動することはいくつもあったが、畦畔の存在が否定されることはなかった。

畦畔遺構の年代は黒褐色粘土上層に含まれる遺物によって一定点を得ることができる。出土遺物の大半が須恵器・灰釉陶器であったが、これは第２面遺構に関わる遺物であり、混入でもある。その中でも 706 の山茶碗は比較的大きな破片で畦畔遺構の脇で

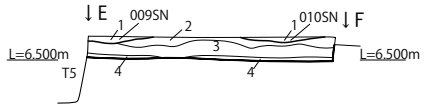




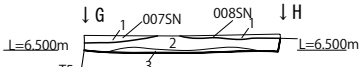
1 10YR 3/1 黒褐色粘土。 7.5Y7/1灰白色粘土の班土。炭化物。0055N。008SN。
2 5YR 3/1 黒褐色粘土。 層位上面で水田（畦畔）遺構検出（検1）
3 N3/ 暗灰色粘質シルト。 7.5GY6/1緑灰色シルトブロック。078SD。
4 N4/ 灰色粘質シルト。 7.5GY6/1緑灰色シルトの班土。138SD。
5 N4/ 灰色粘質シルト。 7.5GY6/1緑灰色シルトの班土。
6 N4/ 灰色粘質シルト。 7.5GY6/1緑灰色シルトの班土。137SX。
7 N4/ 灰色粘質シルト。 7.5GY6/1緑灰色シルトの班土。
8 N4/ 灰色粘質シルト。 7.5GY6/1緑灰色シルトの班土。
9 N4/ 灰色粘質シルト。 7.5GY6/1緑灰色シルトの班土。
10 N3/ 灰色粘質シルト。 7.5GY6/1緑灰色シルトの班土。
11 N3/ 暗灰色粘質シルト。 7.5GY6/1緑灰色シルトの班土。057SD。
12 N4/ 灰色粘質シルト。 7.5GY6/1緑灰色シルトの混土。148SK。
13 N4/ 灰色粘質シルト。 7.5GY6/1緑灰色シルトの混土。
14 10YR3/1 黒褐色粘質シルト。 7.5GY6/1緑灰色シルトの班土。
15 N4/ 灰色粘質シルト。 7.5GY6/1緑灰色シルトの班土。炭化物。
16 N3/ 暗灰色粘質シルト。 7.5GY6/1緑灰色シルトの混土。
17 N3/ 暗灰色粘質シルト。 7.5GY6/1緑灰色シルトの混土。
18 10YR3/1 黒褐色粘質シルト。 7.5GY6/1緑灰色シルトの混土。
19 N3/ 暗灰色粘質シルト。 7.5GY6/1緑灰色シルトの混土。
20 10BG4/1 暗青灰色粘質シルト。 極細粒砂含む。地山。層位上面で古墳～平安時代の遺構検出（検2）
21 10BG4/1 暗青灰色粘質シルト。 極細粒砂含む。地山。20に比べて砂質強くなる。
（記録者 永井 邦仁・安生素明）



1 10YR3/1 黒褐色粘土。 7.5Y7/1灰色粘土の班土。炭化物。0066SN。008SN。
2 5YR3/1 黒褐色粘土。 層位上面で水田（畦畔）遺構検出（検1）。
3 10BG4/1 暗青灰色 粘質シルト。極細粒砂含む。地山。層位上面で古墳～平安時代の遺構検出（検2）

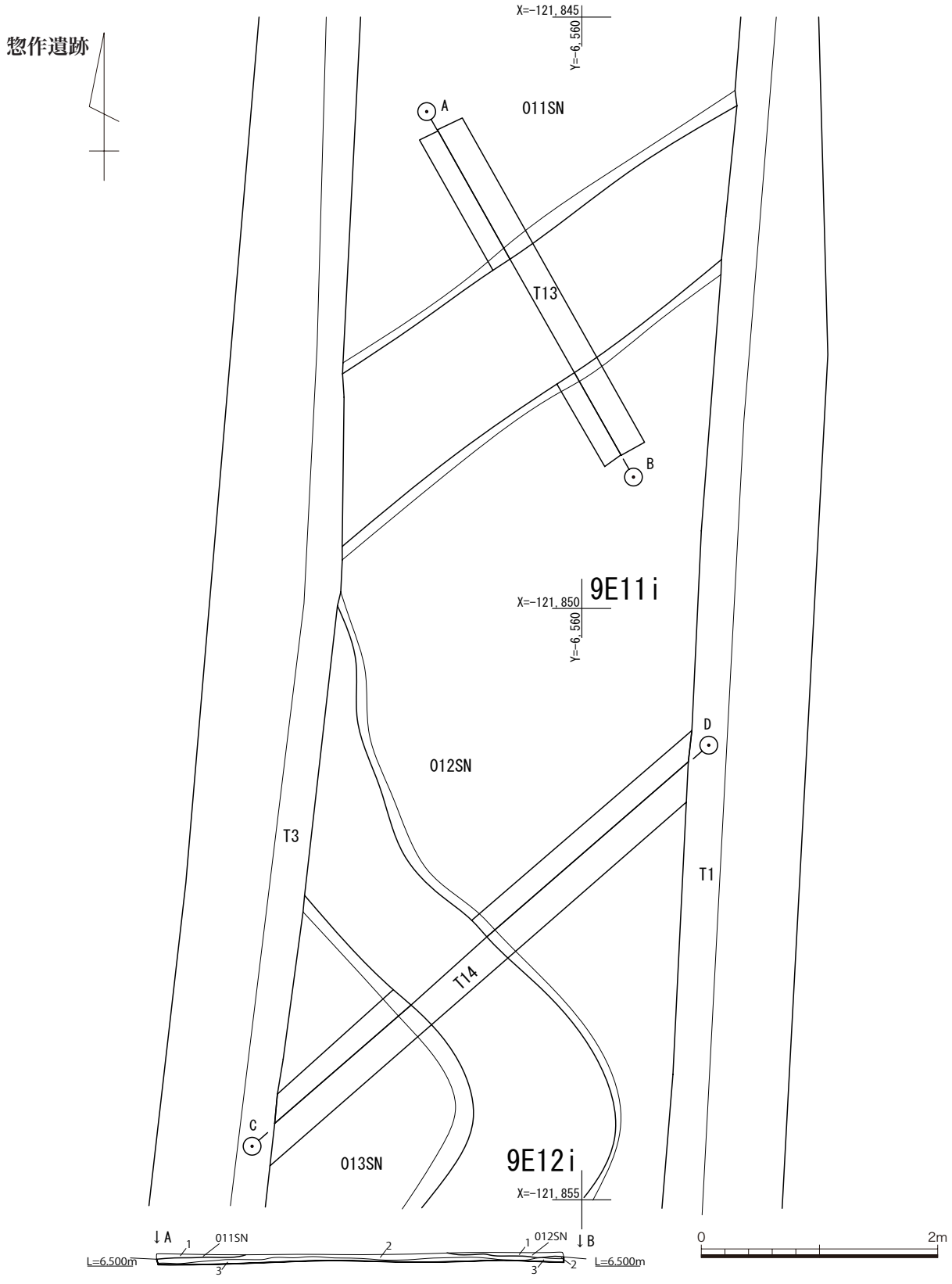


1 7.5Y7/1 灰白色粘土。 10YR3/1粘土の班土。炭化物。009SN。010SN。
2 10YR3/1 黒褐色粘土。 7.5Y7/1灰白色粘土の班土。炭化物。
3 5YR3/1 黒褐色粘質シルト。層位上面で水田（畦畔）遺構検出（検1）
4 10BG4/1 暗青灰色粘質シルト。極細粒砂含む。地山。層位上面で古墳～平安時代の遺構検出（検2）
（記録者 永井 邦仁・安生素明）



1 10YR3/1 黒褐色粘土。 7.5Y7/1灰色粘土の班土。炭化物。009SN。010SN。
2 5YR3/1 黒褐色粘土。 層位上面で水田（畦畔）遺構検出（検1）。
3 10BG4/1 暗青灰色 粘質シルト。極細粒砂含む。地山。層位上面で古墳～平安時代の遺構検出（検2）
（記録者 永井 邦仁・安生素明）

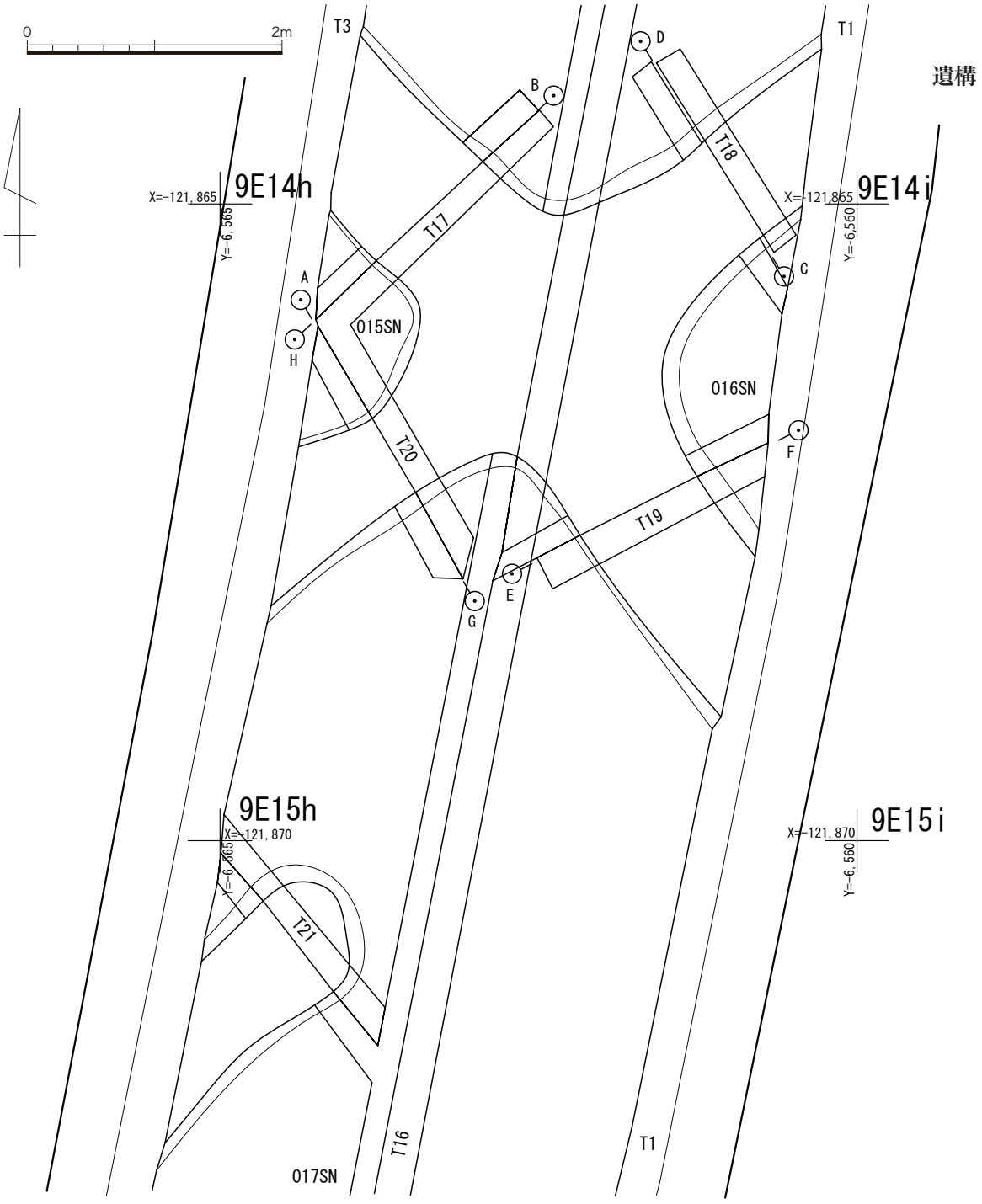
第４図　004SN ～ 010SN 遺構図

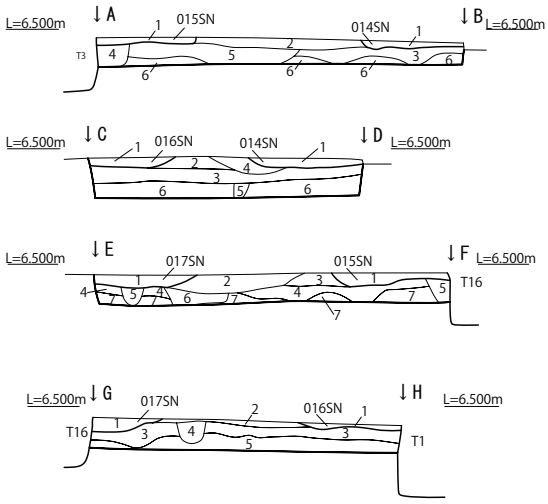


1　10YR3/1 黒褐色粘土。　7/5Y7/1灰白色の斑土。炭化物。011SN。012SN。
2　5YR3/1　黒褐色粘土。　層位上面で水田（畦畔）遺構検出（検1）。
3　10BG4/1 暗青灰色粘質シルト。　極細粒砂含む。地山。層位上面で古墳～平安時代の遺構検出（検2）。
（記録者　永井邦仁・安生素明）

1　10YR3/1 黒褐色粘土。　7/5Y7/1灰白色の斑土。炭化物。012SN。013SN。
2　5YR3/1　黒褐色粘土。　層位上面で水田（畦畔）遺構検出（検1）。
3　10BG4/1 暗青灰色粘質シルト。　極細粒砂含む。地山。層位上面で古墳～平安時代の遺構検出（検2）。
（記録者　永井邦仁・安生素明）

第５図　011SN～013SN 遺構図





1　10YR3/1　黒褐色粘土。　7.5Y7/1灰白色粘土の斑土。炭化物。014SN。015SN。
2　5YR3/1　黒褐色粘土。　層位上面で水田（畦畔）遺構検出（検1）。
3　2.5Y2/1　黒色粘質シルト。　10BG4/1暗青灰色シルトの斑土。
4　10YR3/1　黒褐色粘質シルト。　7.5Y7/2灰白色シルトブロック。
5　N3/　暗灰色粘質シルト。　7.5Y7/2灰白色シルトブロック。
6　10BG4/1　暗青灰色粘質シルト。極細粒砂含む。地山。層位上面で古墳～平安時代の遺構検出（検2）。

1　10YR3/1　黒褐色粘土。　7.5Y7/1灰白色粘土の斑土。炭化物。
2　5YR3/1　黒褐色粘土。　層位上面で水田（畦畔）遺構検出（検1）。
3　2.5Y2/1　黒色粘質シルト。　10BG4/1暗青灰色粘土の斑土。
4　7/5Y2/1　黒色粘土。　5YR3/1黒褐色粘土ブロック。014SN畦畔のつくりかえた可能性あり。
5　N3/　暗灰色粘土。　10BG4/1暗青灰色の斑土。
6　10BG4/1　暗青灰色粘質シルト。極細粒砂含む。地山。層位上面で古墳～平安時代の遺構検出（検2）。

1　10YR3/1　黒褐色粘土。　7.5Y7/1灰白色粘土の斑土。炭化物。
2　5YR3/1　黒褐色粘土。　層位上面で水田（畦畔）遺構検出（検1）。
3　10YR3/1　黒褐色粘土。　5YR3/1黒褐色粘土ブロック少量。
4　2.5Y2/1　黒色粘質シルト。　10BG4/1暗青灰色粘土の斑土。
5　10YR2/1　黒色粘土。　10BG4/1暗青灰色粘土ブロック少量。
6　N3/　暗灰色粘土。　10BG4/1暗青灰色ブロック少量。
7　10BG4/1　暗青灰色粘質シルト。極細粒砂含む。地山。層位上面で古墳～平安時代の遺構検出（検2）。

1　10YR3/1　黒褐色粘土。　7.5Y7/1灰白色粘土の斑土。炭化物。
2　5YR3/1　黒褐色粘土。　層位上面で水田（畦畔）遺構検出（検1）。
3　2.5Y2/1　黒色粘土。　10BG4/1暗青灰色シルトの斑土。
4　10YR2/1　黒色粘土。　10BG4/1暗青灰色粘土ブロック。
5　10BG4/1　暗青灰色粘質シルト。極細粒砂含む。地山。層位上面で古墳～平安時代の遺構検出（検2）。

第６図　014SN ～ 017SN 遺構図

出土していることからも水田耕作時に混じった可能性が最も高いと考えられる遺物である。少なくともこれが畦畔（水田）遺構の上限を示している遺物であり、概ね中世の水田であると考えられる根拠である。

この他、09C 区北半部では、戦国時代～近世段階の水田畦畔遺構が中世水田遺構とほぼ同一面で検出されている。前者によって後者が削平されたものと考えられる。

003SN　調査区北端で検出された水田遺構である。全体の規模は不明であるが、国土座標や現在の地割りとほぼ平行するラインであることから、比較的近代のものであると考えられる。灰白色粘土に黒褐色粘土が混じった地層である。

004SN ～ 008SN（第 4 図）　003SN の南側で展開する水田遺構である。畦畔は国土座標の北に対してやや東へ振れるラインで展開する。畦畔で区画される水田面の大きさはまちまちであるが、008SN の南側で中世水田遺構 009SN・010SN との重複し、かつ畦畔の方向が異なっていることからも別の遺構と考えることができる。時期を示す遺物は出土していないが、層位的にはあきらかに上位にあることから、004SN ～ 008SN が新しい時期の水田であることが示される。

009SN・010SN（第 4 図）　008SN と重複関係にある中世水田遺構である。それぞれの北側に位置する畦畔が 008SN 水田面に削平されている。その南側は撹乱を受けており区画の大きさは不明である。

011SN ～ 023SN（第 5 ～ 7 図）　調査区南半部に展開する中世の水田遺構である。011SN・012SN 間の畦畔遺構は明瞭に検出された。012SN からは時期の根拠となる初期段階の山茶碗が出土している。畦畔遺構の幅は概ね 1m 前後であるが、019SN・020SN 間の畦畔遺構のように幅約 2m から幅約 0.6m の細いものへと屈曲を伴いながら転換している箇所もある。この場合畦畔上で島畑のような耕作がおこなわれていた可能性もあり、均一な面積や方位で区画された例えば条里型地割の水田とは異質なものであることが示されよう。

（3）第 2 面

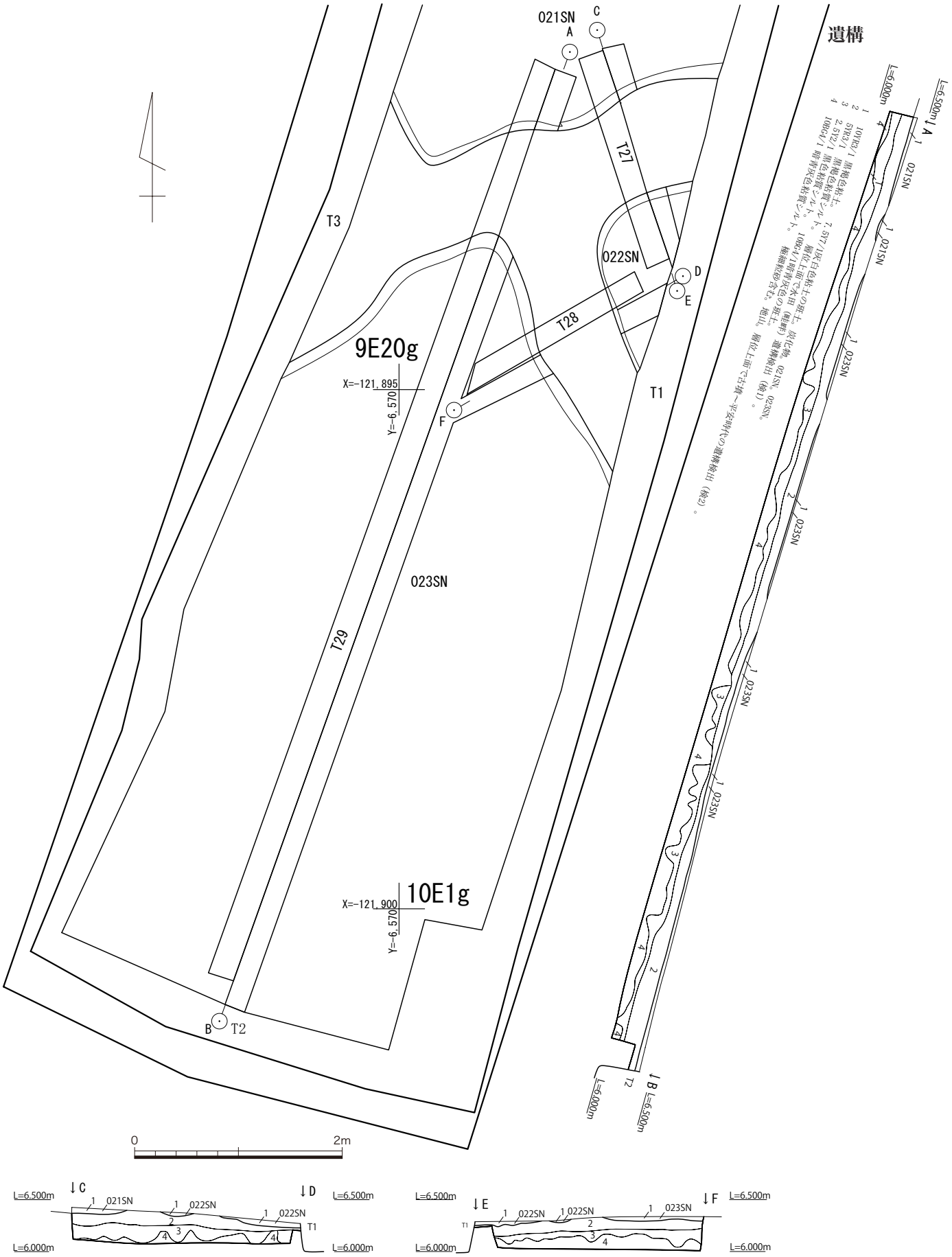
調査区北半部は自然堤防の頂部（標高 6.6m）に当たり、第 1 面調査段階で既に一部基盤砂層の露出をみている。そこから南側の後背湿地（標高 6.2m）へ下る緩斜面に遺構が集中している。遺構は概ね奈良時代以降と考えられ、中世に耕作地化するまで集落が断続的に形成されたとみられる。その後耕作地化が進むと高所は削平され続けたと考えられ、遺構の大半が浅い掘り込みとして検出される。一方、南半部は概ね全体が後背湿地の中にあり、その北端付近で基盤砂層を検出することができたものの、調査区北半部ほどの遺構はみられなかった。

057SD　調査区北半部のやや南に位置する。最大幅 1.86m の不整形で浅い溝状遺構である。若干の窪地状ともいえるものであるが、上述のように全体の削平を考えると、溝として掘削された可能性もあるだろう。特に注目されるのはその底面で検出された小溝群で、向きを違えて重複関係にあるなど、耕作時の鋤溝のような印象がある。埋土は灰色シルトで周辺のピットなどと類似する。また遺物は須恵器椀（718）と灰釉陶器椀（719）があり、当該遺構の時期は 9 世紀後半以降と考えられる。

117SI（第 8 図）　調査区北半部のほぼ中央に位置する。竪穴建物の北・西・南の 3 辺が検出されており正方形もしくは長方形と推定される。国土座標の南北軸に対しほぼ併行している。南北長は 3.53m で深さは 0.08m である。検出状況から床面はほぼ削平され掘り方部分が残存していたと考えられる。土層観察では（第 8 図セクション図）、1・2 層が該当するがいずれも貼床に相当するものであろう。底面での精査では壁溝・柱穴ともに検出されておらず、また竈やそれに関する焼土・炭化物の集積もみられなかった。

遺物は検出作業中に出土したものが多く、出土位置が概ね床面に相当しているものと思われる。須恵器（707 ～ 715）は、蓋・杯と瓶類の口縁部（714）や甕（715）があり、8 世紀中葉以前でまとまっている。土師器（716）は把手部分であるが、大きさから移動式竈のそれと考えられる。117SI で使用されたものであろう。

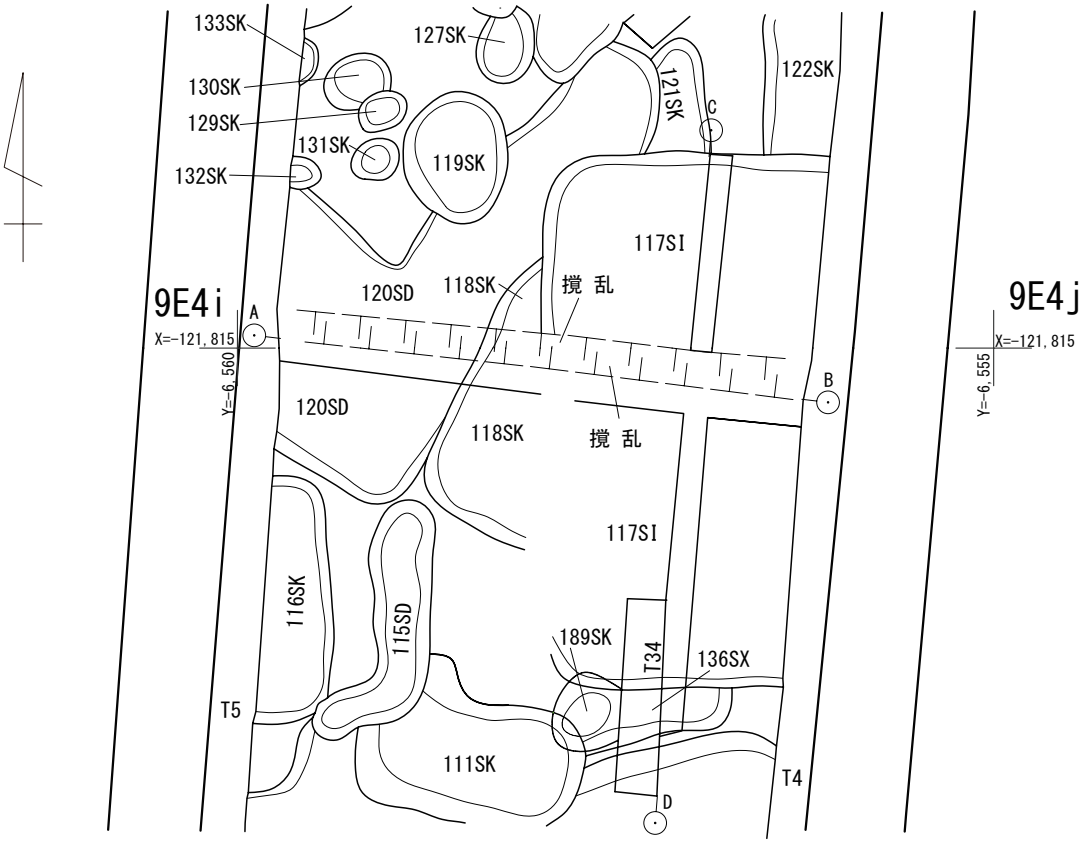
掘立柱列 194SA（第 9 図）　調査区北半部の中央やや南寄りに位置する。北西～南東方向へのびる 2 列の掘立柱列の南側のものである。該当するピットは

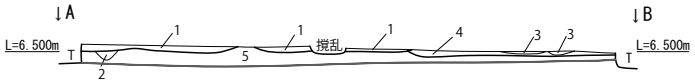


1　N3/ 暗灰色粘土。　7.5Y7/1灰白色粘土ブロック。炭化物。
2　10YR3/1 黒褐色粘土。7.5Y7/1灰白色粘土の班土。炭化物。
3　5YR3/1　黒褐色粘質シルト。10BG4/1暗青灰色シルトの班土。
4　2.5Y2/1 黒色粘質シルト。極細粒砂含む。地山。

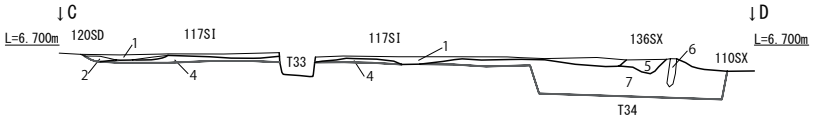
1　10YR3/1 黒褐色粘土。　7.5Y7/1灰白色粘土の班土。炭化物。021SN。023SN。
2　5YR3/1　黒褐色粘質シルト。　層位上面で水田（畦畔）遺構検出（検1）。
3　2.5Y2/1 黒色粘質シルト。　10BG4/1暗青灰色の班土。
4　黒色粘質シルト。　暗青灰色粘質シルト。　極細粒砂含む。地山。層位上面では第一平安時代の遺構検出（検2）。

第７図　021SN ～ 023SN 遺構図

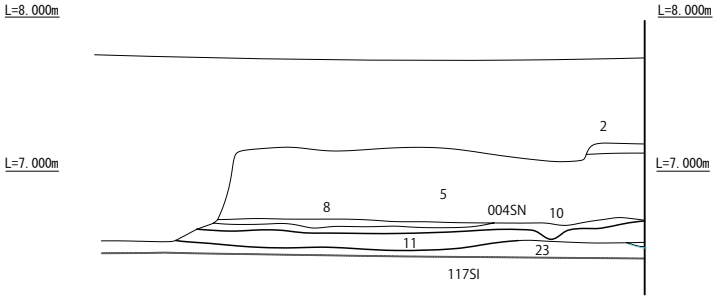




1　N3 暗灰色粘質シルト。　7.5GY6/1緑灰色シルトの混土。117SI。
2　7/5GY6/1 緑灰色シルト。　N4/灰色シルトの混土。炭化物。
3　N3/ 暗灰色粘質シルト。　7/5GY6/1緑灰色シルトブロック。
4　N3/ 暗灰色粘質シルト。　7.5G6/1緑灰色シルトの班土。炭化物。120SD。
5　10BG4/1 暗青灰色粘質シルト。　細粒砂。地山。層位上面で古墳時代～平安時代の遺構検出（検2）。



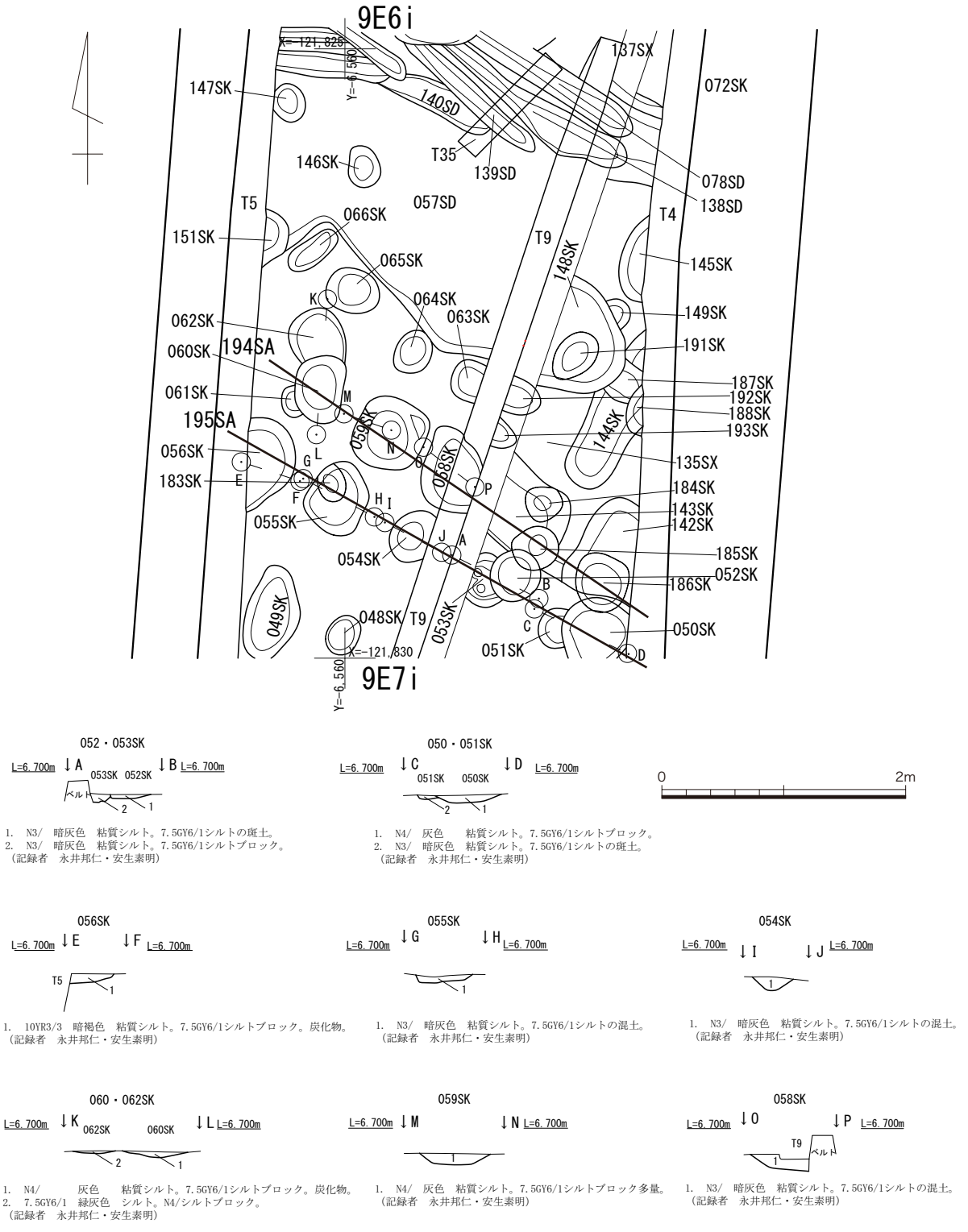
1　N3/　暗灰色粘質シルト。　7.5GY6/1シルトの混土。117SI。
2　7.5GY7/1 明緑灰色シルト。　炭化物。117SI。
3　N4/ 灰色粘質シルト。　7.5GY6/1シルトの班土。
4　7.5GY6/1 緑灰色シルト。　N4/灰色シルトの班土。炭化物。
5　10YR3/1 黒褐色粘土。　7.5GY6/1緑灰色シルトブロック。136SX。
6　10YR2/1 黒色粘質シルト。　7.5GY6/1緑灰色シルトの混土。
7　10BG4/1 暗青灰色粘質シルト。　細粒砂。地山。層位上面で古墳時代～平安時代の遺構検出（検2）。



第８図　117SI 遺構図

西から 056SK・055SK・054SK・053SK・051SK である。056SK はやや大きいが他は直径 0.5m 程度である。また深さはいずれも 0.1m 前後で柱痕は検出されておらず、顕著な遺物の出土はなかった。

掘立柱列 195SA（第 9 図） 掘立柱列 194SA の北側でほぼ平行にのびる。該当するピットは西から 060SK・059SK・058SK・185SK・186SK で ある。柱穴群の規模は掘立柱 01 と同様である。両者の重複関係はないので同時に存在した可能性も



1. N3/ 暗灰色 粘質シルト。7.5GY6/1シルトの斑土。
2. N3/ 暗灰色 粘質シルト。7.5GY6/1シルトブロック。
（記録者 永井邦仁・安生素明）

1. N4/ 灰色 粘質シルト。7.5GY6/1シルトブロック。
2. N3/ 暗灰色 粘質シルト。7.5GY6/1シルトの斑土。
（記録者 永井邦仁・安生素明）

1. 10YR3/3 暗褐色 粘質シルト。7.5GY6/1シルトブロック。炭化物。
（記録者 永井邦仁・安生素明）

1. N3/ 暗灰色 粘質シルト。7.5GY6/1シルトの混土。
（記録者 永井邦仁・安生素明）

1. N3/ 暗灰色 粘質シルト。7.5GY6/1シルトの混土。
（記録者 永井邦仁・安生素明）

1. N4/ 灰色 粘質シルト。7.5GY6/1シルトブロック。炭化物。
2. 7.5GY6/1 緑灰色 シルト。N4/シルトブロック。
（記録者 永井邦仁・安生素明）

1. N4/ 灰色 粘質シルト。7.5GY6/1シルトブロック多量。
（記録者 永井邦仁・安生素明）

1. N3/ 暗灰色 粘質シルト。7.5GY6/1シルトの混土。
（記録者 永井邦仁・安生素明）

第９図 194SA・195SA 遺構図

ある。これらの柱列北側には 057SD とした浅い溝状の凹みがあり、これとの関係も想定される。なお当該遺構からも出土遺物はなかった。（永井邦仁）

第３節　08 A区の遺構

（1）調査経過と遺構の概要

08A 区は、09C 区に南接する幅約 12m、南北長約 50m の細長い調査区である。排土処理などの都合で北部（08Aa 区）と南部（08Ab 区）に分けて調査を実施した。

08Aa 区は、09C 区と同様の堆積状況であり、北壁土層断面で上位からオリーブ黄色粘質土（第１層）、オリーブ黄色粘質シルト（第２層）、灰白色粘質シルト（第３層）、黒褐色粘土（第４層）、黒褐色粘土（第５層）、暗褐色粘土（第６層）、黒褐色粘土と灰白色シルトの斑土（第７層）、灰白色シルト（第８層）の順に堆積していた。各層からわずかに出土した遺物からみて、第１層は江戸時代後期以降、第３層と第４層は鎌倉時代～戦国時代、第５層は平安～鎌倉時代に堆積したと推測される。なお、08Ab 区では古墳時代から平安時代にかけて存続した自然河道 003NR が存在するため、第５層より下位の堆積状況が異なっていた。

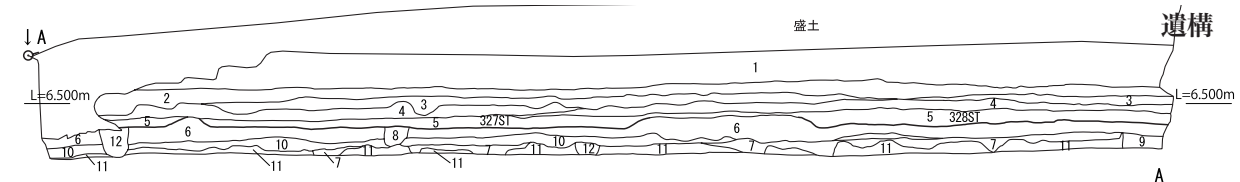
調査は、事業者による道路舗装除去後に表土掘削を行い第４層までを除去した。第１面の遺構は第５層上面付近で検出し、第５層を被覆土または作土・第６層を床土と思われる水田遺構と南側の自然河道 003NR を確認した。第２面遺構は第６層を除去し、概ね灰白色シルト（第８層）の上面となる高さで遺構検出を実施した。この灰白色シルトは北側がゆるやかに落ち込んでいて、遺構は中央部の微高地部分で竪穴建物・溝・土坑などが検出された。

（2）第１面

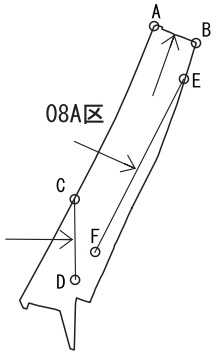
黒褐色粘土層（第５層と第６層）は調査区全体で検出される地層で、南部では 003NR として緩やかに傾斜して下がりかつ徐々に層厚が増していた。黒褐色粘土層がほぼ水平堆積する部分では、炭化物粒が多数混じるため黒色度が強い粘土層（第５層）と、炭化物粒が少ないため褐色度が強い粘土（第６層）に分けられる。第５層は耕作による撹拌を受け続けたと思われ、調査時点ではこれが水田作土もしくはそれを覆う被覆土と想定された。また、第６層は耕作の届かない比較的固定化された土壌で、調査時点ではこれが水田床土と推定され、第５層を少し下げると畦畔状の高まりとして第６層の上部が検出された。これらの状況は、最終的には 09C 区と同様に、第５層と第６層そのものが水田作土や床土などではなく、上位に畦畔が造られると撹拌の機会が減った結果として畦畔が転写されたかのように畦畔状の高まりが検出されたものとして考えた方がよいだろう。

08Aa 区で実施した水田遺構の検出方法は、調査区西壁に所在する撹乱を利用した土層断面と東壁付近に設定したトレンチ 15 の土層断面で、第５層と第６層の区分を行い土層断面で畦畔状の高まりを認識し、同時に第５層上部を掘り下げ平面プランの検出を実施した。結果、畦畔状の高まりは碁盤目状に検出され、部分的に高まりが途切れる水口状遺構も検出された。この時の調査では、全ての畦畔遺構について土層断面の精査を実施おらず、十分な検証は行えていないが、畦畔の存在が否定されることはないと思われる。

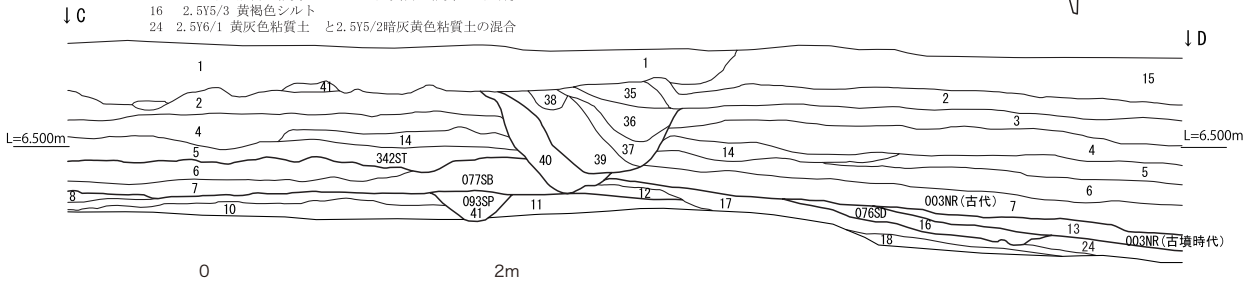
327SN（ST）～ 342SN（ST）（第 10 図）　003NR を除く調査区全面で検出された中世の水田遺構である。概ね N―25°～ 35°―Wの方位を持つ方格地割をなす形で検出され、各水田区画は短辺が 3.00m ～ 5,20m 以上、長辺が 5.86m ～ 8,19m を測る長方形を呈していた。この方位は 09C 区 011SN ～ 023SN とおおよそ共通したものとなっており、一連のものと理解される。畦畔遺構の幅は 0.5m 前後を測るものが多いが、部分的に 1.0m 程度にまで拡大する部分もある。328ST と 329ST 間、329ST と 330ST 間、335ST と 337ST 間、339ST と 341ST 間では畦畔遺構が途切れるように見受けられ、水口状となっていた可能性がある。畦畔遺構の年代は、第５層出土遺物の大半が須恵器・灰釉陶器であることと 341ST が 003NR に切られるような形で検出されたことから、調査時点では平安時代を想定した。しかし、土層断面では肝心な部分が不明であるものの、暗褐色粘土（第６層）が 003NR でも引き続き堆積して下がっており、明瞭な切り合い関係は認められない。09C 区での所見で 011SN ～ 023SN は中世と認識されており、現段階では 08A 区の畦畔

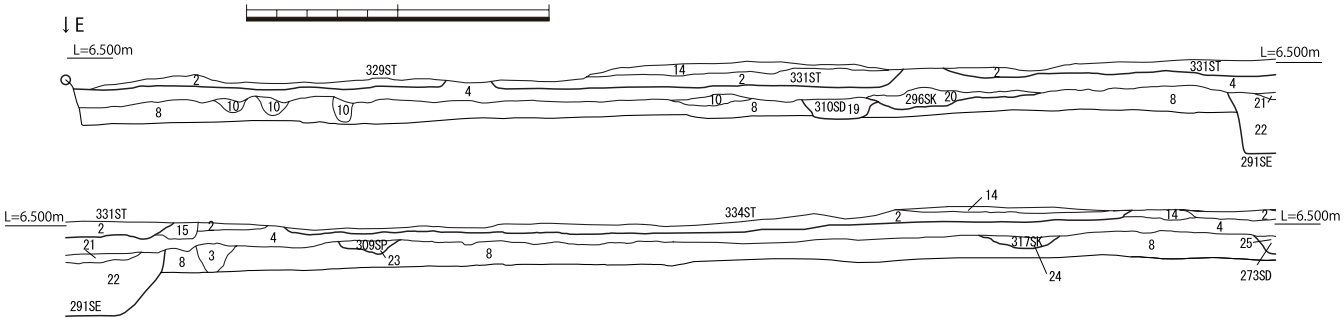


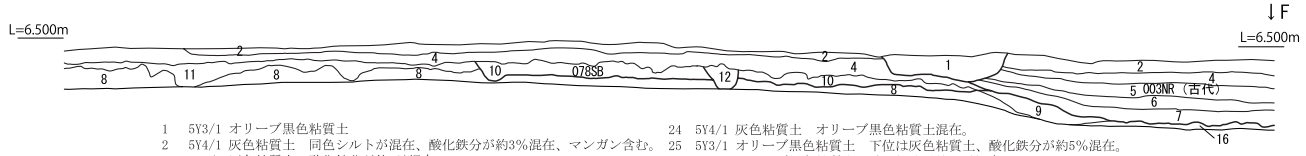
1　5Y6/3 オリーブ黄色粘質土　酸化鉄分が約3%混在。粘性は弱く、しまりふつう。
2　5Y6/4 オリーブ黄色粘質土　酸化鉄分が約15%混在。粘性は弱く、しまりふつう。
3　5Y7/2 灰白色粘質土　酸化鉄分が約7%混在。粘性は弱く、しまりふつう。
4　2.5Y5/1 黄灰色粘質土　と2.5Y6/1黄灰色粘質土の混合。酸化鉄分が約2%混在。粘性やや弱く、しまりやや強い。
5　2.5Y5/1 黄灰色粘質土　酸化鉄分が約1%点在。マンガンを少量含む。粘性やや弱く、しまりやや強い。
6　2.5Y5/1 黄灰色粘質土　粘性弱く、しまりやや強い。
7　2.5Y7/1 灰白色シルト　と2.5Y5/1黄灰色粘質土の混合。粘性なし、しまり弱い。
8　2.5Y7/1 灰白色シルト　と2.5Y5/1黄灰色粘質土の混合。粘性ややあり、しまり弱い。
9　2.5Y5/1 黄灰色粘質土　酸化鉄分がわずかに混在。粘性弱く、しまりやや強い。
10　2.5Y5/1 黄灰色粘質土　と2.5Y6/2灰黄色粘質土の混合。粘性ややあり、しまりやや弱い。
11　5Y7/1 灰白色シルト　粘性なし、しまり弱い。
12　2.5Y5/1 黄灰色粘質土　と5Y7/1灰白色シルトの混合。粘性なし、しまり弱い。



2　2.5Y6/2 灰黄色粘質土　酸化鉄分、炭化物が約1%混在。
3　2.5Y6/2 灰黄色粘質土　酸化鉄分、炭化物が約3%混在。
4　2.5Y6/2 灰黄色粘質土　酸化鉄分、炭化物が約5%混在。
5　2.5Y6/2 灰黄色粘質土　酸化鉄分、炭化物が約15%混在。
6　2.5Y4/1 黄灰色粘質土　酸化鉄分、炭化物が約15%混在。
7　2.5Y3/2 黒褐色粘質土　酸化鉄分を多く含み、炭化物が約15%と植物繊維が混在。
13　2.5Y3/1 黒褐色粘質土　と2.5Y5/3黄褐色粘質土の混合。
16　2.5Y5/3 黄褐色シルト
24　2.5Y6/1 黄灰色粘質土　と2.5Y5/2暗灰黄色粘質土の混合

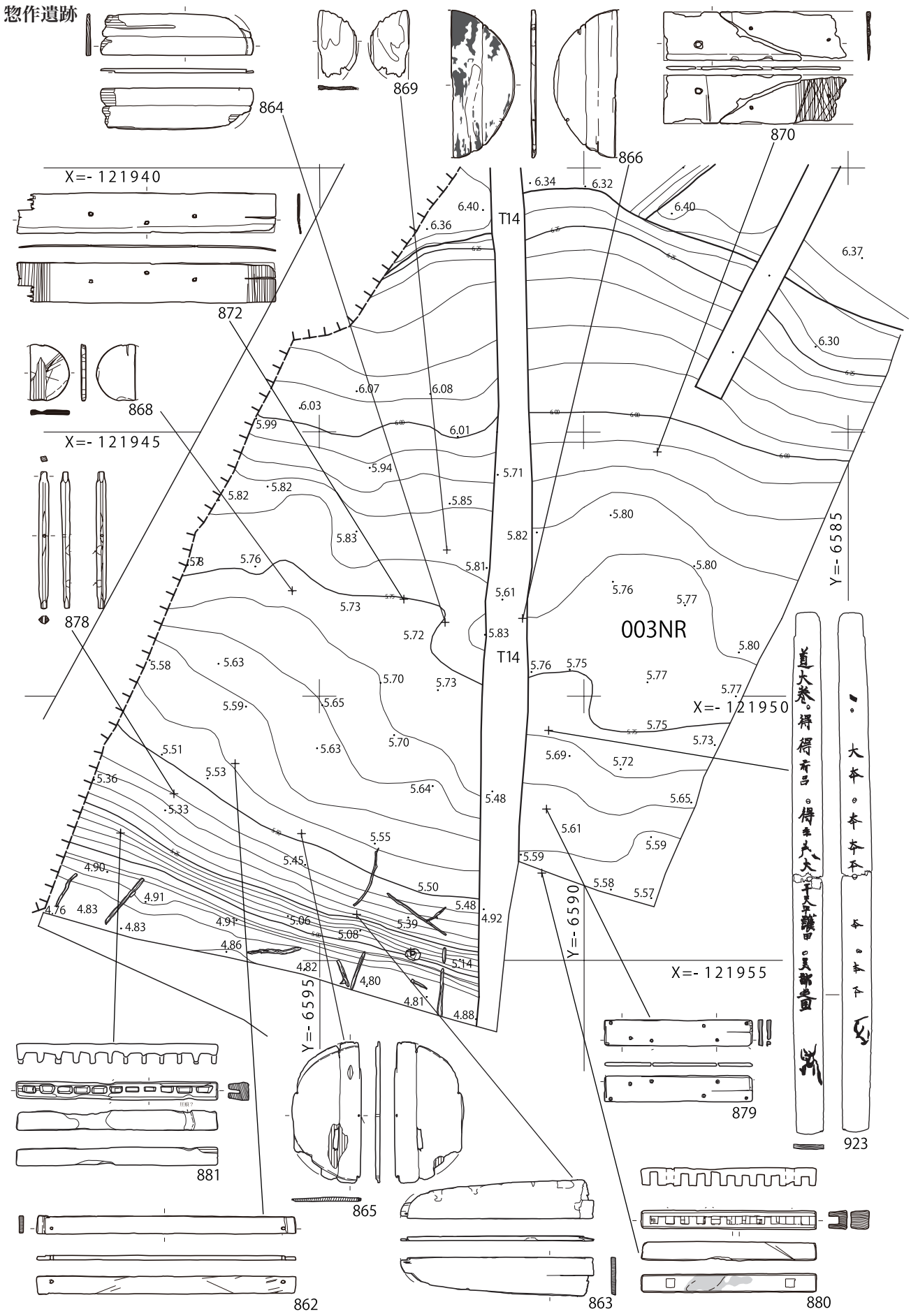






1　5Y3/1 オリーブ黒色粘質土
2　5Y4/1 灰色粘質土　同色シルトが混在、酸化鉄分が約3%混在、マンガン含む。
3　5Y4/1 灰色粘質土　酸化鉄分が約3%混在。
4　5Y3/1 オリーブ黒色粘質土　酸化鉄分が約10%混在、マンガン含む。
5　5Y4/1 灰色粘質土
6　5Y4/1 灰色粘質土
7　5Y2/1 黒色粘質土　酸化鉄分を多く含み、植物質が混在。
8　5Y4/2 灰オリーブ色粘質土
9　5Y3/2 オリーブ黒色粘質土　酸化鉄分を多く含む。
10　5Y2/1 黒色粘質土　酸化鉄分を多く含む。
11　5Y4/1 灰色粘質土
12　5Y4/1 灰色粘質土　同色シルトが混在。
13　5Y2/1 黒色粘質土
14　5Y3/2 オリーブ黒色粘質土
15　2.5Y5/2 暗灰黄色粘質土
16　5Y5/1 灰色シルト
17　5Y4/1 灰色粘質土　5Y3/1 オリーブ黒色粘質土と酸化鉄分が約20%混在。
18　5Y3/1 オリーブ黒色粘質土　灰色粘質土が約15%と酸化鉄分が混在。
19　5Y4/1 灰色粘質土　酸化鉄分が混在。
20　5Y3/2 オリーブ黒色粘質土　酸化鉄分を約1%含む。
21　5Y3/2 オリーブ黒色粘質土　酸化鉄分を約1%含む。
22　5Y3/2 オリーブ黒色粘質土と灰色粘質土が混在。。
23　5Y4/1 灰色粘質土　酸化鉄分が混在。
24　5Y4/1 灰色粘質土　オリーブ黒色粘質土混在。
25　5Y3/1 オリーブ黒色粘質土　下位は灰色粘質土、酸化鉄分が約5%混在。
26　5Y3/1 オリーブ黒色粘質土　酸化鉄分が約20%混在。
27　5Y3/1 オリーブ黒色粘質土　酸化鉄分が約3%混在。
28　5Y4/1 灰色粘質土　酸化鉄分が約5%混在。
29　5Y4/1 灰色粘質土　5Y5/2 灰オリーブ色粘質土と酸化鉄分が混在。
30　5Y4/1 灰色粘質土　5Y5/2 灰オリーブ色粘質土と酸化鉄分が混在。
31　5Y4/2 灰オリーブ色粘質土　酸化鉄分が約7%混在。
32　5Y4/1 灰色粘質土　酸化鉄分が約10%混在。
33　5Y3/1 オリーブ黒色粘質土　5Y4/1 灰色粘質土と酸化鉄分が混在。
34　5Y4/1 灰色粘質土　酸化鉄分が約1%混在。
35　5Y4/1 灰色粘質土　酸化鉄分が約3%混在。
36　5Y4/1 灰色粘質土　酸化鉄分が約10%混在。
37　5Y4/1 灰色粘質土　5Y5/2 灰オリーブ色粘質土と酸化鉄分が混在。
38　5Y4/1 灰色粘質土　酸化鉄分が約2%混在。
39　5Y5/1 灰色粘質土　酸化鉄分が約10%混在。
40　5Y4/2 灰オリーブ色粘質土　5Y4/1 灰色粘質土と酸化鉄分が混在。
41　5Y3/1 オリーブ黒色粘質土　酸化鉄分が約3%混在。
42　5Y2/1 黒色粘質土　酸化鉄分が約10%混在。
43　7.5Y3/2 オリーブ黒色粘質土　酸化鉄分を約7%含む。
44　2.5GY5/1 オリーブ灰色粘質土　酸化鉄分を約2%含む。
45　5Y3/2 オリーブ黒色粘質土と5Y4/2 灰オリーブ色粘質土が混在。。
46　5Y4/1 灰色粘質土　酸化鉄分が約3%混在。

第 10 図　08A 区土層断面図



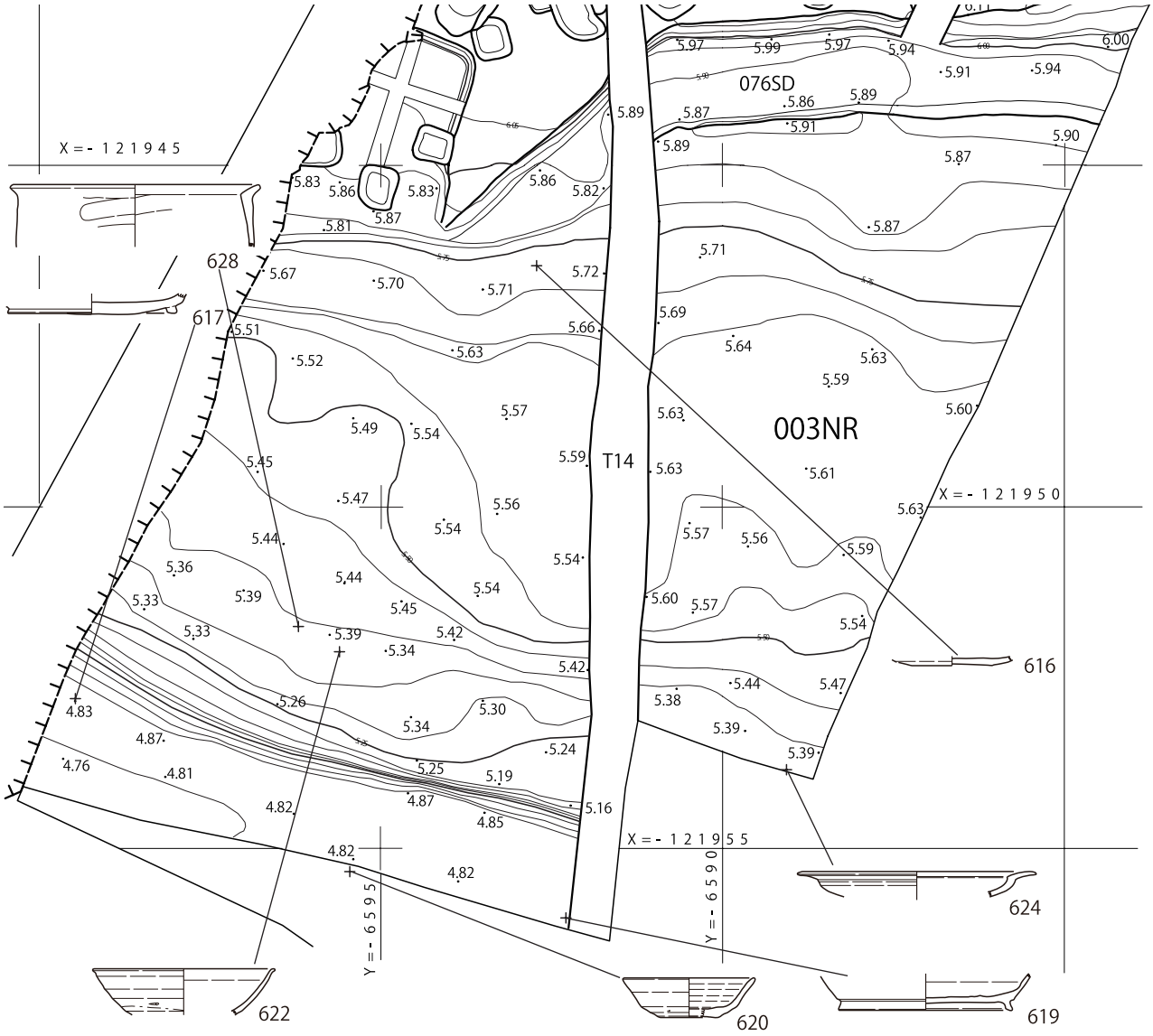
第 11 図　08A 区 003NR 木製品出土分布図（遺構図は第 1 面）

遺構もC―1期と考えておきたい。その場合、水田遺構とかつて存在した003NRとの関係が問題となるが、調査の不手際もあって不明なままである。なお、09C区北半部で確認された戦国時代～近世段階の水田畦畔遺構は、北壁土層断面の第4層で確認される畦畔状の高まりが該当するものと思量される。

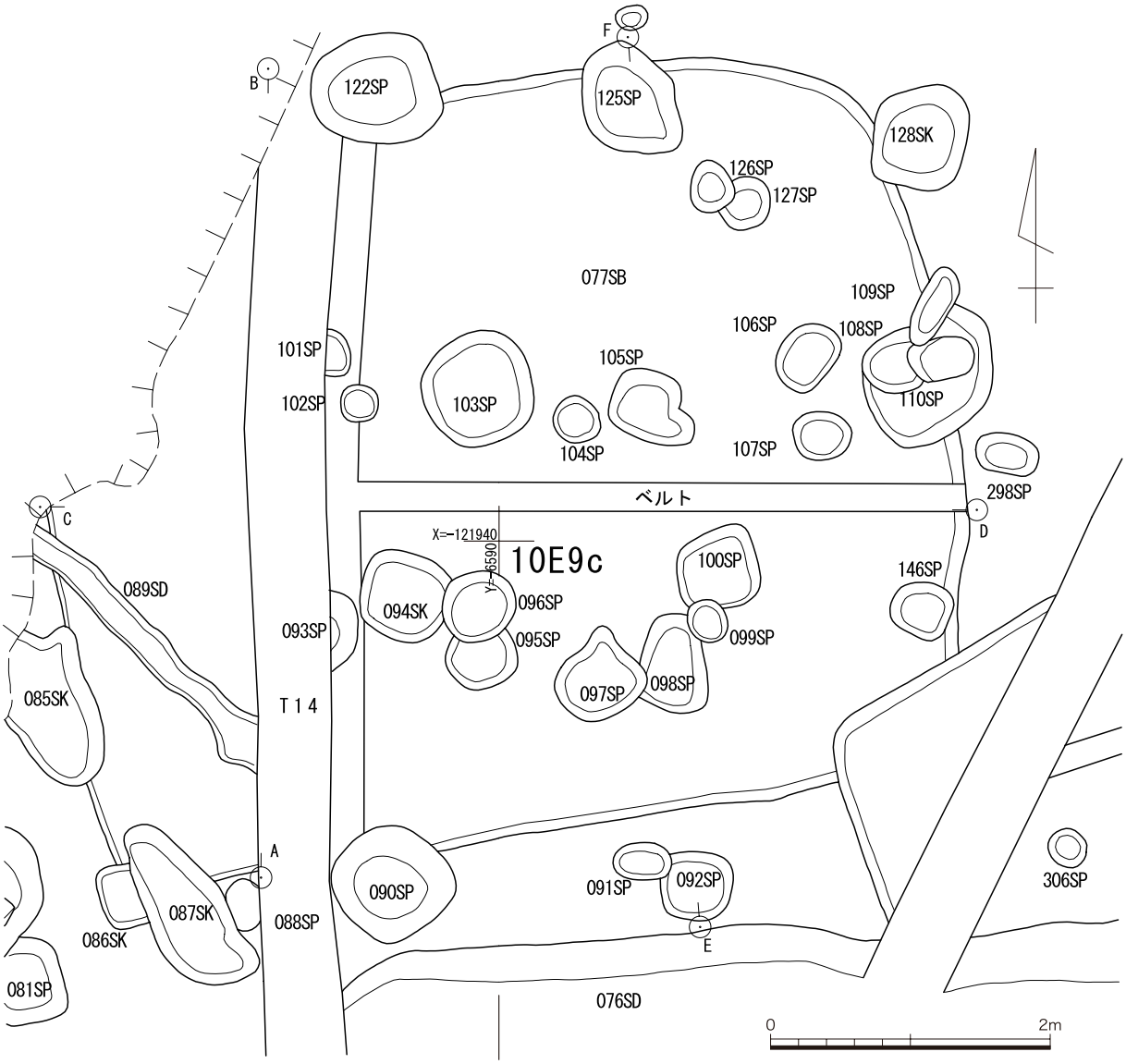
003NR（08Ab区）（第11～12図） 003NRは08Ab区から08B区にかけて概ね東西方向に流れる自然流路である。08Ab区では003NRの北岸緩斜面が検出された。調査区南端から約12m北の部分から傾斜が始まり、南端から約2m付近までは極めて緩やかに下がり、南端から約2mの部分から南は急激に落ち込んでいた。南端の深い部分は西北西―東南東方向に流れているが、傾斜際はほぼ東西方向を向く。南端部で上位から、灰黄褐色粘質土（第1層）、暗灰黄色粘質土（第2層）、木片などを含む黒褐色粘質土（第3層）、黒褐色粘質土（第4層）、木片などを含むオリーブ黒色粘土（第5層）の順に堆積するが、緩斜面部では第1層から第3層までが堆積している。緩斜面部の黒褐色粘質土（第3層）から木簡（923）をはじめとする木製品が出土しており（第11図）、須恵器や灰釉陶器片も認められる（第12図）。第3層はC―1期、第5層はA―4期に位置づけられる。

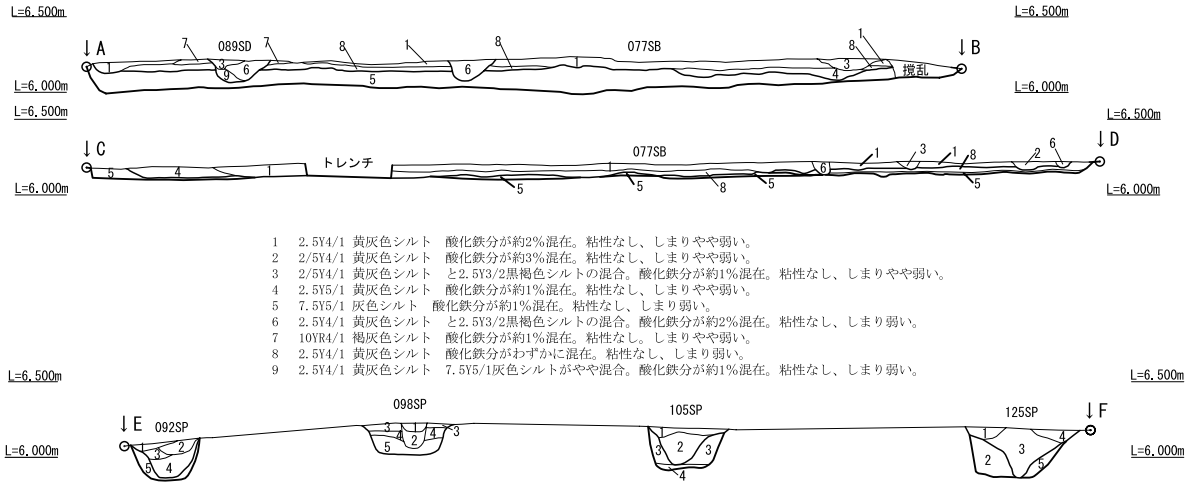
（3）第2面

調査区北半部は後背湿地（標高約6.2m）へ下る緩斜面、中央部から南部にかけては自然堤防の微高地（標高約6.4m）に当たる。第1面で水田作土相



第12図　08A区003NR土器類出土分布図（遺構図は第2面）





1　2.5Y4/1 黄灰色シルト　酸化鉄分が約2%混在。粘性なし、しまりやや弱い。
2　2/5Y4/1 黄灰色シルト　酸化鉄分が約3%混在。粘性なし、しまりやや弱い。
3　2/5Y4/1 黄灰色シルト　と2.5Y3/2黒褐色シルトの混合。酸化鉄分が約1%混在。粘性なし、しまりやや弱い。
4　2.5Y5/1 黄灰色シルト　酸化鉄分が約1%混在。粘性なし、しまりやや弱い。
5　7.5Y5/1 灰色シルト　酸化鉄分が約1%混在。粘性なし、しまり弱い。
6　2.5Y4/1 黄灰色シルト　と2.5Y3/2黒褐色シルトの混合。酸化鉄分が約2%混在。粘性なし、しまり弱い。
7　10YR4/1 褐灰色シルト　酸化鉄分が約1%混在。粘性なし。しまりやや弱い。
8　2.5Y4/1 黄灰色シルト　酸化鉄分がわずかに混在。粘性なし、しまり弱い。
9　2.5Y4/1 黄灰色シルト　7.5Y5/1灰色シルトがやや混合。酸化鉄分が約1%混在。粘性なし、しまり弱い。

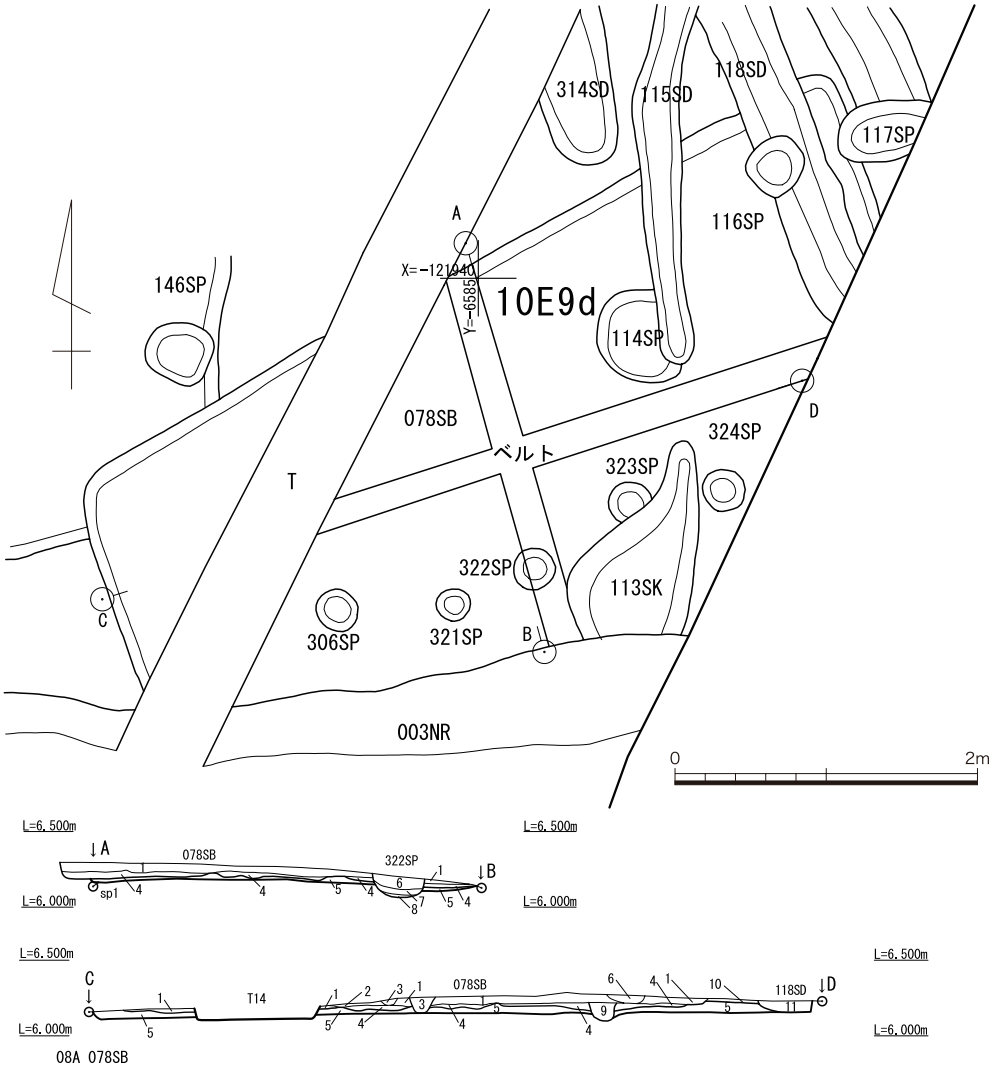
第13図　077SB 遺構図

当部を掘削した際に、既に一部基盤シルト層の露出が確認され、003NR と後背湿地に挟まれた微高地上に遺構が集中して分布する。遺構は概ね奈良時代以降と考えられ、中世に耕作地化するまで集落が断続的に形成されたとみられる。その後耕作地化が進むと高所は削平され続けたと考えられる。調査の結果、竪穴建物３基、掘立柱建物 14 棟以上、井戸？２基、溝、土坑などが確認された。

＜竪穴建物＞

077SB（第 13 図） 東西 6.60m ×南北 5.40m の小判型に近い隅丸長方形プランの竪穴建物である。南東隅は 078SB に、北西隅は撹乱によって壊され不明である。深さ 0.12m を測り、黄灰色シルトを整地して床面が造られていると思われる。柱穴と思われる土坑群が多数展開しているが、主柱穴に該当し得るものは 126SP や 093SP などが存在するのみである。周溝・火処遺構などの内部施設は検出されていない。平面プランから遺構の時期は古いものと予想したが、覆土から土師器三河型甕が出土しており、8 世紀後葉から 9 世紀初頭に属すると思われる。B―1 期。

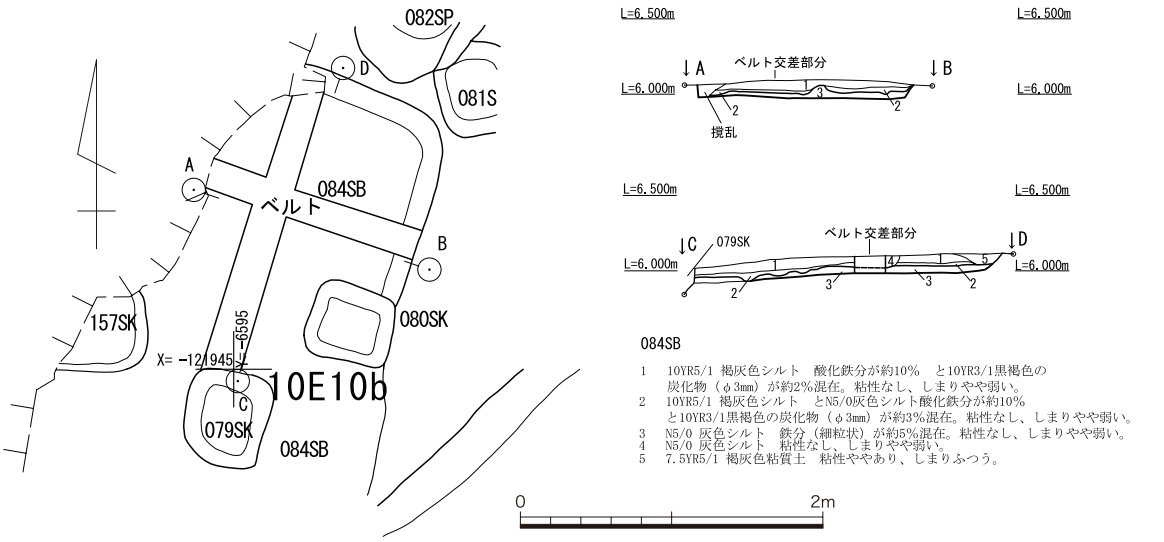
078SB（第 14 図） 東西 5.65m × 南北 2.26m 以



08A 078SB

1　2.5Y5/1 黄灰色シルト　酸化鉄分が約5%混在。粘性なし、しまり弱い。
2　2.5Y5/1 黄灰色シルト　酸化鉄分が約3%混在。粘性なし、しまり弱い。
3　2.5Y5/1 黄灰色シルト　と2.5Y4/1黄灰色シルトの混合。酸化鉄分が約2%混在。粘性ややあり、しまり弱い。
4　2.5Y6/1 黄灰色シルト　酸化鉄分が約5%混在。粘性なし、しまり弱い。
5　2.5Y6/2 黄灰色シルト　酸化鉄分が約2%混在。粘性なし、しまり弱い。
6　2.5Y4/1 黄灰色シルト　と2.5Y6/1黄灰色シルトが混合。酸化鉄分が約5%混在。粘性なし、しまり弱い。
7　2.5Y4/1 黄灰色シルト　一部に2.5Y6/1黄灰色シルトが混合。酸化鉄分が約5%混在。粘性なし、しまり弱い。
8　2.5Y5/1 黄灰色シルト　と2.5Y4/1黄灰色シルトの混合。酸化鉄分が約5%混在。粘性なし、しまり弱い。
9　2.5Y5/1 黄灰色シルト　酸化鉄分が約3%混在。粘性なし、しまり弱い。
10　2.5Y5/2 暗黄灰色シルト　酸化鉄分が約2%混在。粘性なし、しまり弱い。
11　2.5Y3/3 暗オリーブ褐色粘質土　と塊状で不定形に2.5Y6/1黄灰色シルトが混入。酸化鉄分が約1%混在。粘性ややあり、しまりやや弱い。

第 14 図　078SB 遺構図



第 15 図　084SB 遺構図

上の隅丸方形になると思われる竪穴建物で、深さ 0.13m を測る。南側は 003NR の存在で不明となっており、東側は調査区外に拡がる。黄灰色シルトを整地して床面が造られ、柱穴と思われる土坑群が多数展開する。ただし、主柱穴に該当し得るものはなく、周溝・火処遺構などの内部施設も検出されていない。077SB を切る形で検出されていることから、9 世紀初頭以降のものと思われる。

084SB（第 15 図）　東西 1.65m 以上×南北 2.08m 以上の規模を持つ隅丸長方形の竪穴建物で、深さ 0.13m を測る。南側は 003NR の存在で不明となっており、西側は調査区外に拡がる。黄灰色シルトを整地して床面が造られ、柱穴と思われる土坑群が多数展開する。ただし、主柱穴に該当し得るものはなく、周溝・火処遺構などの内部施設も検出されていない。077SB を切る形で検出されていることから、9 世紀初頭以降のものと思われる。B―1 期か。

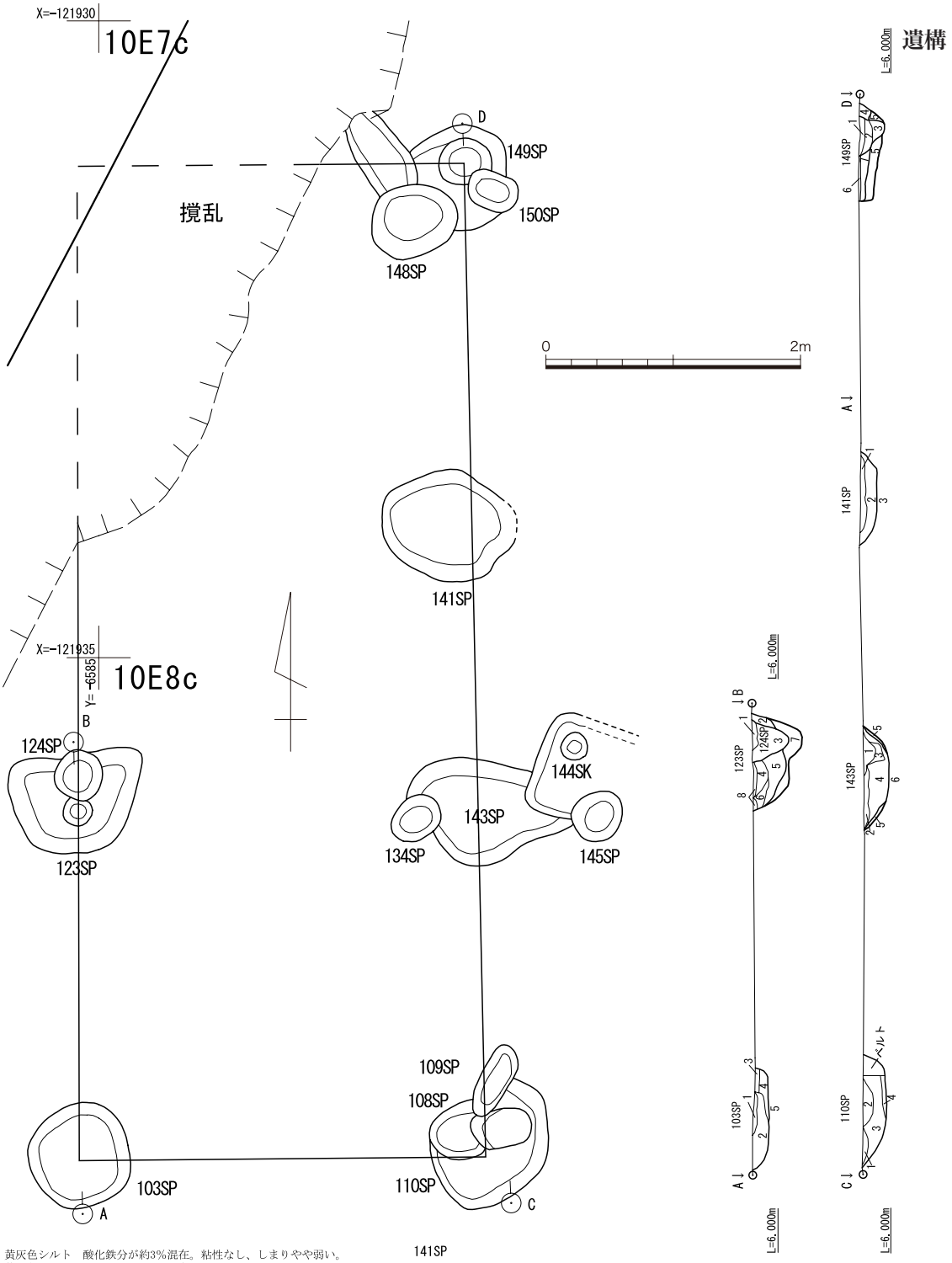
＜掘立柱建物＞

343SB（第 13 図）　現状で 1 間× 3 間に想定される掘立柱建物である。梁行約 2.25m、桁行約 5.70m の規模を持ち、ほぼ正方位を向く。該当するピットは北西から 122SP・102SP・093SP・090SP・125SP・105SP・098SP・092SP である。086SK を含めると、2 間以上× 3 間の総柱建物にも復元されるが、北に他の柱穴が続かないので、ここではその可能性を除外して考えておく。柱穴の平面形は一辺が 0.80m ～ 1.00m を測る隅丸方形となり、土層断面観察から柱材は抜き取られていると思われる。当該遺構からは出土遺物はなかったが、077SB を切る形で全ての柱穴が検出されているため、9 世紀初頭以降のものと思われ、柱穴の形状からみて中世まで下る可能性は低いと思われる。B―2 期か。

344SB（第 16 図）　梁行約 3.20m、桁行約 7.90m の規模を持ち、1 間× 3 間に想定される掘立柱建物である。北西部が撹乱および調査区外により不明であるが、ほぼ正方位となっている。該当するピットは北西から 123SP・103SP・149SP・141SP・143SP・110SP である。柱穴の平面形は一辺が 0.80m ～ 1.00m を測る崩れた隅丸方形となり、土層断面観察から柱材は抜き取られたものと思われる。柱穴からは遺物は出土しなかったが、一部の柱穴が 077SB を切る形で検出されたため、9 世紀初頭以降のものと思われ、343SB と同様に柱穴の形状からみて中世まで下る可能性は低いと思われる。

345SB（第 17 図）　1 間以上× 1 間以上の掘立柱建物で、南東部の大半は調査区外に拡がる。柱穴 280SP・284SP・293SP で構成され、柱穴の平面形は一辺が 0.45m ～ 0.65m を測る円形に近い隅丸方形となっている。柱穴からは遺物は出土せず、時期は特定できない。

346SB（第 17 図）　2 間以上× 1 間以上の掘立柱建物で、南東部の大半は調査区外に拡がる。柱穴 278SP・317SK・281SP・279SP・309SP・287SP で構成され、279SP と 287SP は束柱の可能性が高い。柱穴の平面形は直径が 0.45m ～ 0.65m を測る円形となっている。柱穴からは遺物は出土せず、時



110SP

1　2.5Y4/1 黄灰色シルト　酸化鉄分が約3%混在。粘性なし、しまりやや弱い。
2　2.5Y4/1 黄灰色シルト　酸化鉄分が約5%混在。粘性なし、しまりやや弱い。
3　2.5Y5/1 黄灰色シルト　粘性なし、しまりやや弱い。
4　2.5Y4/1 黄灰色シルト　酸化鉄分が約2%混在。水を多く含む。粘性なし、しまり弱い。

143SP

1　2.5Y4/1 黄灰色シルト　酸化鉄分が約3%混在。粘性なし、しまりやや弱い。
2　2.5Y5/1 黄灰色シルト　酸化鉄分が約1%混在。粘性なし、しまりやや弱い。
3　2.5Y5/1 黄灰色シルト　酸化鉄分が約2%混在。粘性なし、しまりやや弱い。
4　2.5Y5/1 黄灰色シルト　粘性なし、しまり弱い。
5　2.5Y5/1 黄灰色シルト　と2.5Y4/1 黄灰色シルトが混在。粘性なし、しまり弱い。
6　2.5Y6/1 黄灰色シルト　粘性なし、しまりやや弱い。

149SP

1　5Y4/1 灰色シルト　酸化鉄分が約2%、5Y7/2灰白色シルト（φ30～50mm）が約15%混在。粘性なし、しまり弱い。
2　5Y4/1 灰色シルト　酸化鉄分が約1%、5Y7/2灰白色シルトが約20%レンズ状に混在。粘性なし、しまり弱い。
3　5Y5/1 灰色シルト　酸化鉄分が約2%混在。粘性なし、しまり弱い。
4　5Y4/1 灰色シルト　酸化鉄分が約5%混在。粘性なし、しまり弱い。
5　5Y5/1 灰色シルト　酸化鉄分が約5%混在。粘性なし、しまり弱い。
6　5Y4/1 灰色シルト　酸化鉄分が約3%、5Y7/2灰色シルトが混在。粘性なし、しまり弱い。
7　5Y4/1 灰色シルト　酸化鉄分が約2%混在。粘性なし、しまり弱い。

141SP

1　2.5Y4/1 黄灰色シルト　酸化鉄分が約3%混在。粘性なし、しまりやや弱い。
2　2.5Y5/2 暗灰黄色シルト　酸化鉄分が約2%混在。粘性なし、しまり弱い。
3　2.5Y6/1 黄灰色シルト　粘性なし、しまりやや弱い。

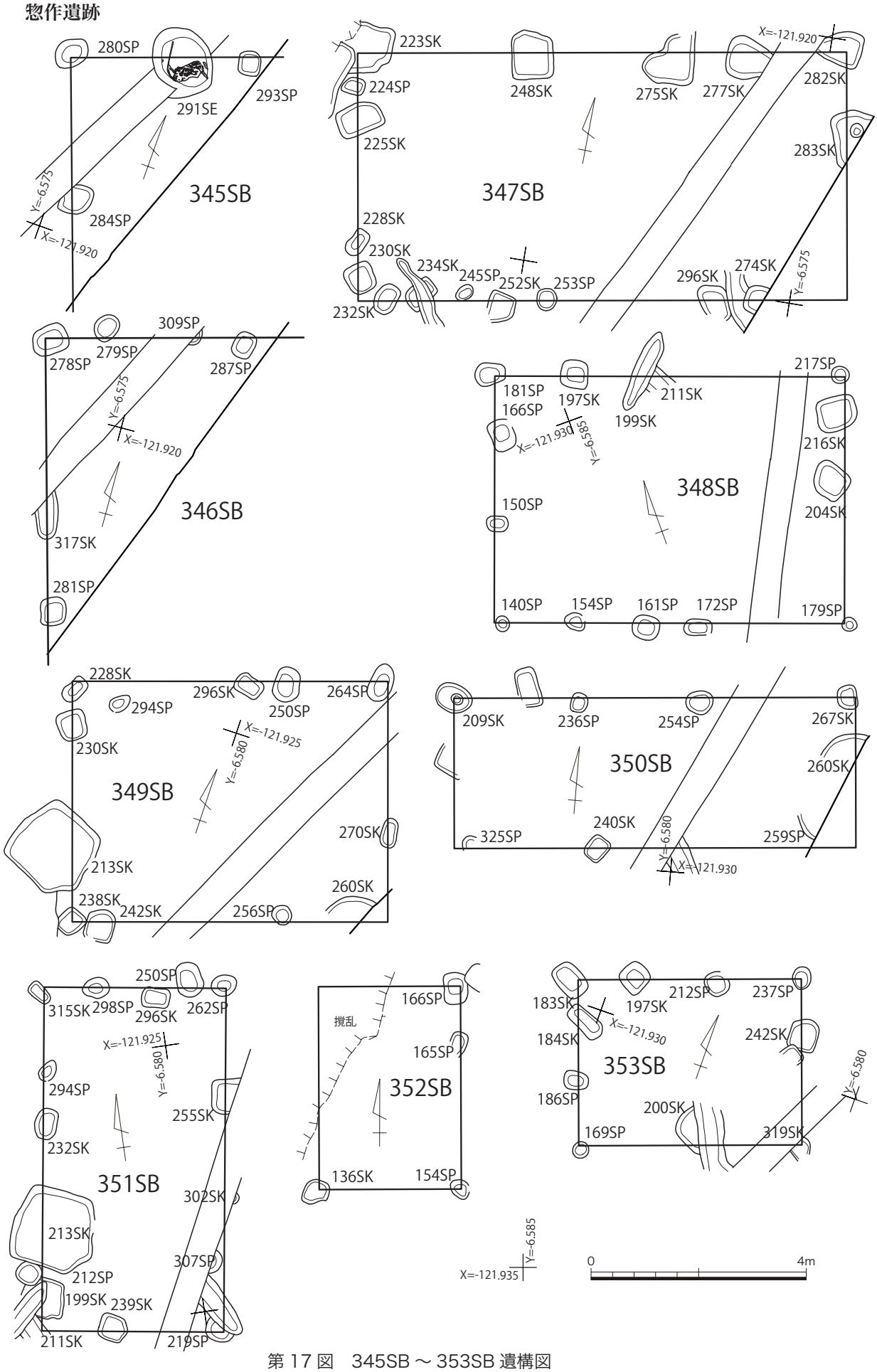
103SP

1　2.5Y6/1 黄灰色シルト　酸化鉄分約1%とマンガンが混在。粘性なし、しまり弱い。
2　2.5Y5/1 黄灰色シルト　酸化鉄分約２%混在。粘性なし、しまり弱い。
3　2.5Y4/1 灰黄色シルト　と一部に5Y3/1黒褐色シルトが混在。酸化鉄分約2%とマンガンが混在。粘性なし、しまり弱い。
4　2.5Y4/1 暗灰黄色シルト　粘性なし、しまり弱い。
5　2.5Y4/1 暗灰黄色シルト　粘性なし、しまり弱い。

123SP

1　2.5Y4/1 黄灰色シルト　酸化鉄分　約5%とマンガンおよび炭化物が混在。粘性なし、しまりややあり。
2　2.5Y5/1 黄灰色シルト　酸化鉄分約3%とマンガンおよび炭化物が混在。粘性なし、しまり弱い。
3　2.5Y5/1 黄灰色シルト　わずかに2.5Y7/1灰白色シルトと酸化鉄分約3%マンガンおよび炭化物が混在。粘性なし、しまり弱い。
4　2.5Y4/1 黄灰色シルト　酸化鉄分が約5%混在。粘性なし、しまり弱い。
5　2.5Y5/1 黄灰色シルト　酸化鉄分が約3%混在。粘性なし、しまり弱い。
6　2.5Y4/1 黄灰色シルト　一部2.5Y5/1黄灰色シルト酸化鉄分が約5%混在。粘性なく、しまりやや弱い。
7　2.5Y5/1 黄灰色シルト　水をわずかに含む。粘性なし、しまり弱い。
8　5Y3/1 オリーブ黒色粘質土　粘性あり、しまりふつう。

第 16 図　344SB 遺構図



第 17 図　345SB ～ 353SB 遺構図

期は特定できない。

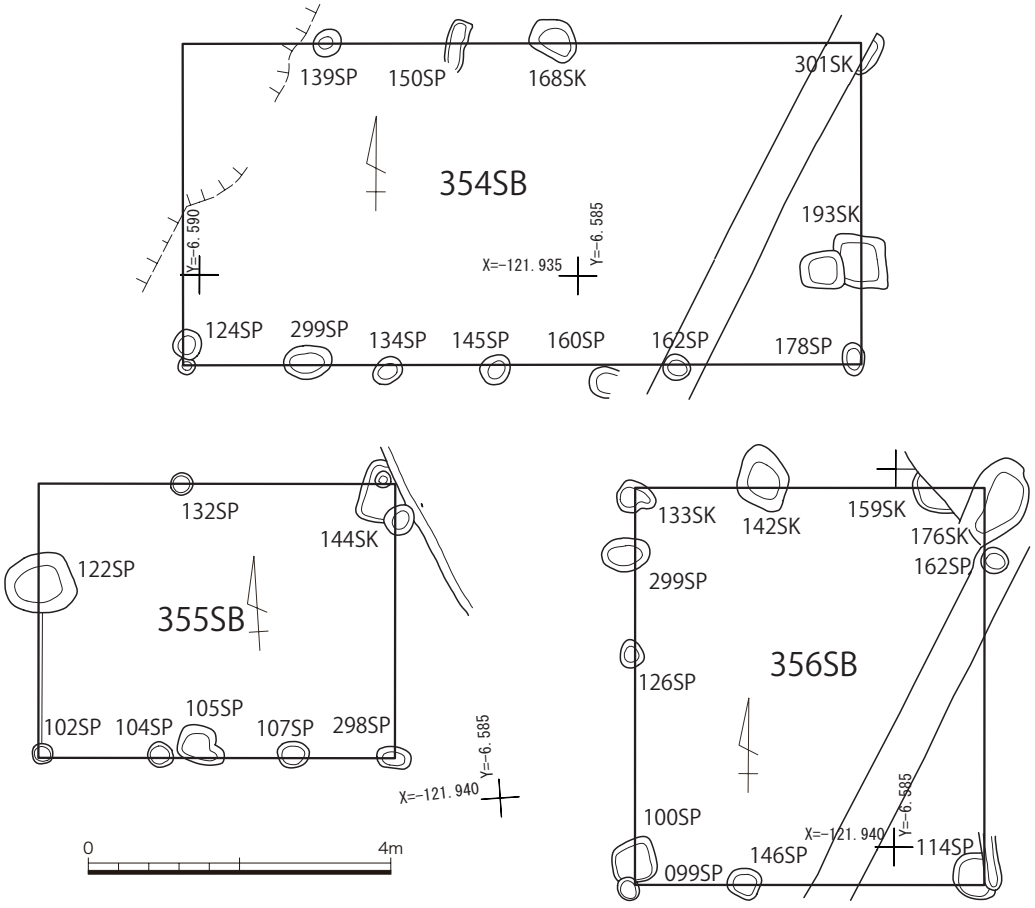
347SB（第 17 図） 9.07m × 4.59m の規模を持つ 3 間× 3 間の掘立柱建物である。南東隅の主柱穴は調査区外にあって不明だが、方位は正方位よりも北でやや西に振れる。主柱穴 223SK・248SK・275SK・282SK・283SK・296SK・252SK・230SK・225SK で構成され、この他に束柱と思われる柱穴が多数存在する。柱穴の平面形は隅丸方形を基本とし、一部の柱穴は不定形となっている。柱穴からは遺物は出土せず、時期は特定できない。

348SB（第 17 図） 6.51m × 4.63m の規模を持つ 4 間× 3 間の掘立柱建物である。柱穴 181SP・197SK・211SK・217SP・216SK・204SK・179SP・172SP・161SP・154SP・140SP・150SP・166SP で構成される。柱間間隔がやや狭く一部の柱穴が束柱になる可能性があるが，方位は正方位よりも北でやや東に振れる。柱穴の平面形は隅丸方形で小規模となっている。柱穴からは遺物は出土せず、時期は特定できない。

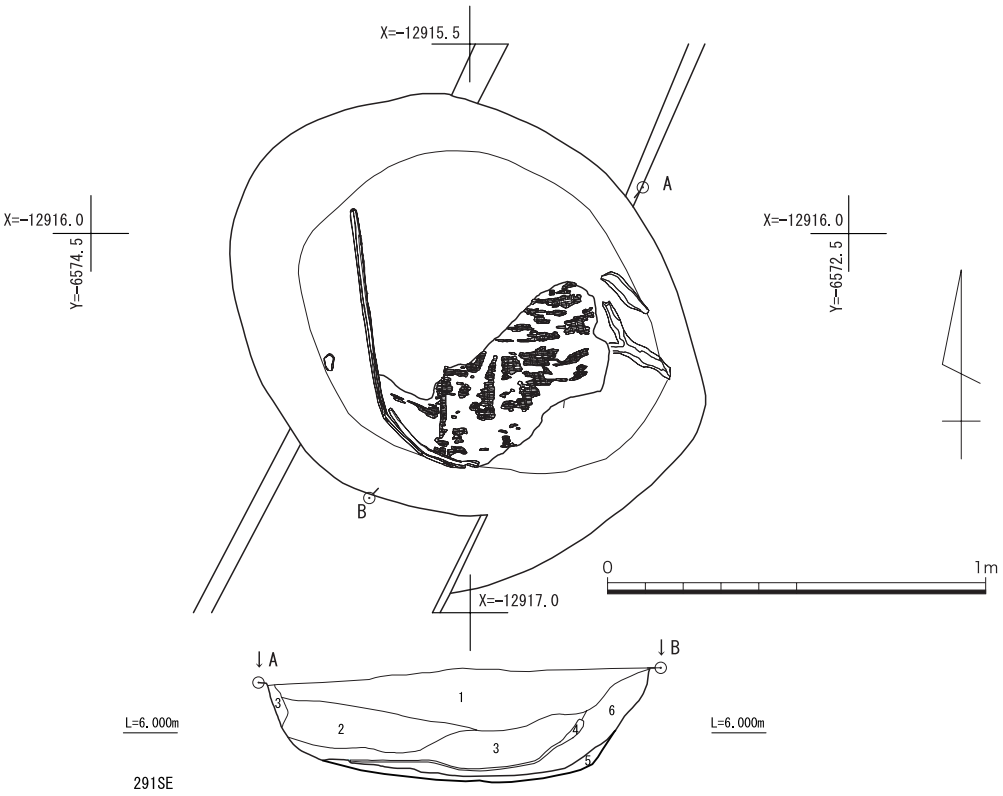
349SB（第 17 図） 2 間 × 2 間？の掘立柱建物で、5.82m × 4.48m の規模を持つ。方位は正方位よりも北で西に振れる。主柱穴 228SK・296SK・250SP・264SP・270SK・256SP・238SK・230SK などで構成され、この他に束柱と思われる柱穴が多数存在する。柱穴の平面形は円形から隅丸方形までさまざまで小規模となっている。柱穴からは遺物は出土せず、時期は特定できない。

350SB（第 17 図） 7.48m × 2.79m の規模を持つ 3 間× 1 間の掘立柱建物である。南東隅の主柱穴は調査区外にあって不明だが、方位は正方位よりも北でわずかに西に振れる。主柱穴 209SK・236SP・254SP・267SK・240SK・325SP で構成される。柱穴の平面形は概ね円形で小規模となっている。柱穴からは遺物は出土せず、時期は特定できない。

351SB（第 17 図） 4 間 × 3 間の掘立柱建物で、6.39m × 3.36m の規模を持つ。主柱穴 315SK・298SP・250SP・262SP・255SK・302SK・307SP・219SP・229SK・211SK・232SK・294SP などで構成される。一部の柱穴は所在不明だが、方位は正方位よりも北でわずかに東に振れる。柱穴の



第 18 図　354SB ～ 356SB 遺構図



1　5Y3/2 オリーブ黒色粘質土　と5Y7/1灰白色粘質土の混合。酸化鉄分が約7%混在。粘性あり、しまりやや弱い。
2　5Y3/2 オリーブ黒色粘質土　と5Y7/1灰白色粘質土の混合。酸化鉄分が1層よりやや多く混在、粘性あり、しまり弱い。
3　5Y3/2 オリーブ黒色粘質土　と5Y7/1灰白色粘質土の混合。酸化鉄分が約5%混在。粘性あり、しまり弱い。
4　5Y3/2 オリーブ黒色粘質土　と5Y6/1灰白色粘質土。粘性ややあり。しまりやや弱い。（竹箒の痕跡）
5　5Y3/2 オリーブ黒色粘質土　と5Y6/1灰白色粘質土。水分を含む、粘性ややあり、しまり弱い。

第 19 図　291SE 遺構図

平面形は概ね円形で小規模となっている。柱穴からは遺物は出土せず、時期は特定できない。

352SB（第 17 図）　1 間× 2 間の小型掘立柱建物で、3.79m × 2. 70m を測る。柱穴 166SP・165SP・154SP・136SK で構成され、北西隅は撹乱で不明となっている。ほぼ正方位となり、柱穴の平面形は概ね円形で小規模である。柱穴からは遺物は出土せず、時期は特定できない。

353SB（第 17 図）　4.19m × 3.08m を測る 2 間× 3 間の小型掘立柱建物である。柱穴 183SK・197SK・212SP・237SP・242SK・319SK・169SP・186SP・184SK で構成され、方位は正方位よりも北でやや西に振れる。柱穴の平面形は円形から隅丸方形までさまざまである。柱穴からは遺物は出土せず、時期は特定できない。

354SB（第 18 図）　9.00m × 4.27m の規模を持つ 5 間？× 2 間の掘立柱建物である。北西隅の主柱穴は撹乱により不明だが、方位はほぼ正方位となる。柱穴 139SP・150SP・168SK・301SK・193SK・178SP・162SP・160SP・145SP・134SP・299SP・124SP で構成される。柱穴の平面形は概ね円形で小規模となっている。柱穴からは遺物は出土せず、時期は特定できない。

355SB（第 18 図）　4.68m × 3.65m の規模を持つ 3 間× 1 間の掘立柱建物である。北西隅の主柱穴は検出されなかったが、方位はほぼ正方位となる。柱穴 132SP・144SK・298SP・107SP・105SP・104SP・102SP で構成される。柱穴の平面形は全て小規模な円形で、遺物は出土せず、時期は特定できない。

356SB（第 18 図）　2 間× 2 間の掘立柱建物で、5.28m × 4.66m の規模を持つ。柱穴 133SK・142SK・159SK・176SK・114SP・146SP・099SP・126SP・299SP で構成され、方位はほぼ正方位となる。柱穴の平面形は円形で小規模なものが多い柱穴からは遺物は出土せず、時期は特定できない。

＜井戸＞

075SE　長径 1.20m、短径 1.05m、深さ 0.55m の概ね円形プランの土坑で、青灰色シルトの斑土が充

填されていた。調査時点で最下部にて湧水が認められたために井戸としたが、井壁を保護する構造物の痕跡が確認されず、確証を得るには至っていない。

291SE（第 19 図）　長径 1.36m、短径 1.36cm、深さ 0.44cm の円形の土坑で、オリーブ黒色粘質土と灰白色粘質シルトの斑土で埋積されていた。下位に平網された竹製網物が敷かれた状態で出土している。最下部にてわずかに湧水が認められこともあり井戸としたが、井壁を保護する構造物の痕跡が確認できない。

＜溝＞

076SD　幅 1.47m、深さ 0.50m を測る溝で 003NR の北肩に平行して走る。青灰色シルトが充填されていた。土層断面（第 10 図）では古墳時代の堆積物と思われる 003NR 第 4 層の下位に存在しており、時期は A 期と推定される。

小規模溝群（第 10 図）　幅が 0.40m 前後、深さ 0.10m ～ 0.20m を測る小規模な溝群で、273SD・265SD・261SD・249SD・244SD・235SD・221SD・214SD・198SD・206SD・201SD・185SD・121SD・120SD・119SD・118SD が該当する。中央の微高地部分にみられた溝群で、概ね N―22°―W の方位で平行する形で検出され、概ね暗灰黄色と黒褐色砂質シルトの斑土を埋土とする。溝底には流水があった痕跡は確認されず、一気に埋め立てられたものと推量される。概ね全ての遺構に切られる形で検出され、A 期に属するだろう。このような溝群は鹿乗川流域の遺跡群でいばしば見かけられる遺構で、畑の畝溝の可能性も指摘される。（鈴木正貴）

第 4 節　08B 区の遺構

（1）調査経過と遺構の概要

08B 区は、08A 区に南接する L 字状の調査区である。東西方向に伸びる調査区では、南北幅が狭い上にそれを横断する施設が存在したために、トレンチ調査に近い状態となっている。

08B 区は 003NR の存在により下半の堆積状況が南部と北部では大きく異なる。ここでは、ちょうど現鹿乗川堤防の横断面となる南壁土層断面（第 20 図）で堆積状況を説明する。08B 区南壁土層断面では、09C 区～ 08A 区にかけて堆積するオリーブ黄色粘質土（第 1 層）が 19 層、オリーブ黄色粘質シルト（第 2 層）が 17 層、灰白色粘質シルト（第 3 層）は 25 層くらいに対応すると思われ、黒褐色粘土～暗褐色粘土（第 4 ～ 6 層）は該当する堆積が見当たらない。上位には現鹿乗川堤防際から東に伸びる造成直前の水田関連の堆積（11・13 層）があり、中央から西側では現鹿乗川堤防の堆積が確認される。堤防は少なくとも 2 回にわたる造成が行われ、8 層・10 層・12 層が古段階の造成、3 層が新段階の造成と思われる。黒褐色粘土（第 4 層）以下の堆積は近世の遺構 002SX などにより撹乱され、その直下は灰オリーブ色粘質土および古墳時代以降の基盤層となる灰白色中粒砂に至る。なお、灰白色中粒砂は弥生時代中期の河川による堆積物とみられ、深掘り調査を実施すると弥生土器が出土した。

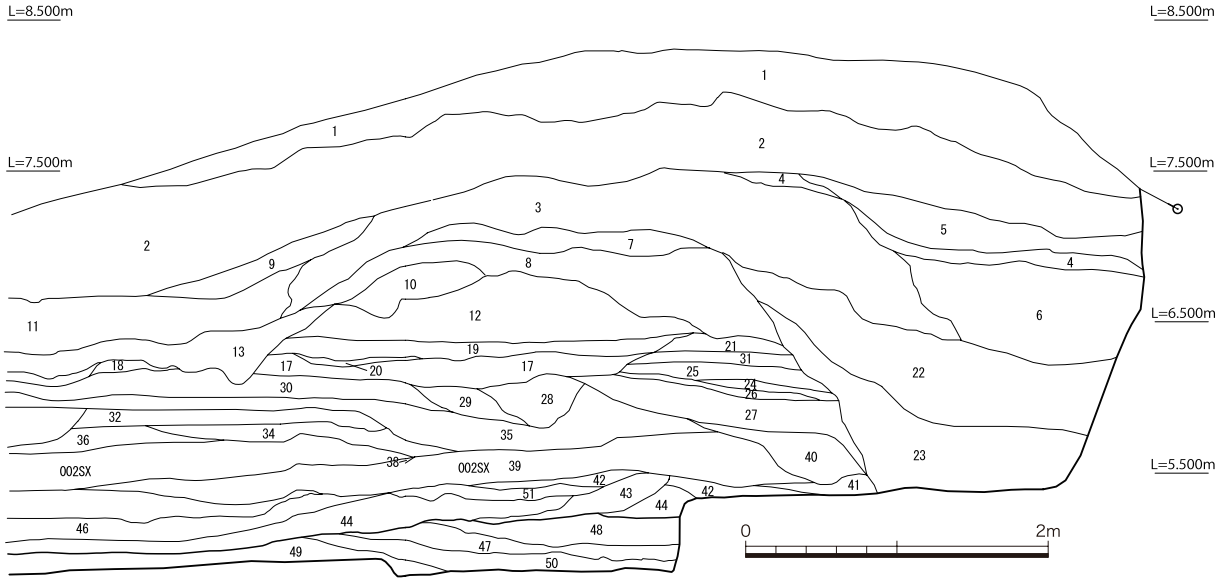
調査は、事業者による堤防や道路舗装など除去後に表土掘削を行い、08B 区南壁土層断面で 30 層付近までを除去した。南半部は近世の遺構、北半部は 003NR により第 1 面の遺構検出面の確定は難しかったが、調査区中央部は灰白色シルト上面で止め遺構検出を実施した。中央部では、竪穴建物などの遺構が確認され、それより下位には遺構は展開しなかった（第 1 面のみ）。一方、南半部は近世の遺構が重複していたためこれを 2 面に掘り分け、北半部は 003NR の古代の堆積を第 1 面、古墳時代の堆積を第 2 面として区分した。このため、この節では面ごとに記述する意味は薄いので地点ごとに分けて記述したい。

（2）北部の遺構

003NR（08B 区 ）（ 第 21 ～ 27 図 ）　003NR は 08Ab 区から 08B 区にかけて概ね東西方向に流れる自然流路である。08B 区では 003NR の河底部から南岸緩斜面までが検出された。調査区北端から約 10m 南の部分で緩い傾斜が始まり、北端から約 6m 付近で急な傾斜に変わっている。08Ab 区の所見と合わせると、流路幅は最大で約 30m、本流に相当する深い落ち込み部分で約 10m を測ることとなる。流路は調査区中央部で北側に張り出す形でやや蛇行しており、おそらく東南東方向から調査区に入り彎曲して西南西方向に流れ碧海台地端部付近で蛇行して南に向かうものと推測される。実際に、寺領橋の西橋脚北側部分の立会調査（県教委実施）で流路と

みられる厚い粘土の堆積が確認されている。

本流部では上位から、暗灰黄褐色粘質土（第１層：第 27 下図９層）、黒褐色粘質土（第２層：第 27 下図 12 層）、木片などを含む黒褐色粘質土（第３層：第 27 下図 13 層）、黒褐色～オリーブ黒色粘質土（第４層：第 27 下図 14 ～ 16 層）、木片などを多く含む黒褐色～オリーブ黒色粘土（第５層：第 27 下図 19・20 層）の順に堆積する。第４層と第５層の間で灰白色細粒砂が堆積する部分があり、第５層で大量の古墳時代前期に属する木製品と土器が出土した。南斜面部の第５層以下に相当する部分でも、北に下がって傾斜する灰色シルトなどの堆積が確認され（第 27 下図 21 ～ 23 層および第 27 上図参照）、古墳時代前期以前から同じような位置で流路が存在しシルトなどが堆積し続けたものと思われる。おそらく古墳時代前期から流路の水流量が減少して止水



1　2.5Y4/1 黄灰色粘質土　粘性ややあり、しまり弱い。
2　5Y4/3 オリーブ褐色粘質土　粘性ややあり、しまり弱い。
3　7.5YR5/6 明褐色粘質土　粘性、しまり弱い。
4　2.5Y4/1 黄灰色粘質土　粘性弱く、しまり弱い。
5　2.5Y4/1 黄灰色粘質土　粘性弱く、しまりやや弱い。
6　2.5Y5/3 黄褐色粘質土　粘性ややあり、しまりやや弱い。
7　5Y4/1 灰色粘質土　粘性ややあり、しまりやや弱い。
8　5Y4/1 灰色粘質土　粘質土の塊（φ50～200mm）が多く混在。粘性弱く、しまりやや弱い。
9　5Y4/1 灰色粘質土　粘性ややあり、しまりややあり。
10　5Y5/2 灰オリーブ色粘質土　少量の酸化鉄分、マンガンを縞状に含む。粘性ややあり、しまりふつう。
11　2.5Y4/3 オリーブ褐色粘質土　粘性ややあり、しまりふつう。
12　5Y5/2 灰オリーブ色粘質土　少量の酸化鉄分、マンガンを斑状に含む。粘性ややあり、しまりふつう。
13　7.5YR5/6 明褐色粘質土　亜角礫（φ50～80mm）が約20%混在。粘性、しまり弱い。
14　2.5Y5/2 暗灰黄色粘質土　植物繊維を含む。粘性あり、しまりふつう。
15　2.5Y5/2 暗灰黄色粘質土　植物繊維を含む。粘性ややあり、しまりふつう。
16　2.5Y5/2 暗灰黄色粘質土　粘性やや強く、しまりふつう。
17　2.5Y5/2 暗灰黄色粘質土　と2.5Y7/1灰白色粘質土の混合。少量の酸化鉄分、マンガンを斑状に含む。粘性ややあり、しまりふつう。
18　2.5Y5/2 暗灰黄色粘質土　少量の酸化鉄分、マンガンを斑状に含む。粘性あり、しまりふつう。
19　2.5Y5/1 黄灰色粘質土　少量の酸化鉄分、マンガンを斑状に含む。粘性あり、しまりふつう。
20　2.5Y5/2 暗灰黄色粘質土　粘性ややあり、しまりふつう。
21　10YR4/6 褐色粘質土　酸化鉄分が少量混在。粘性ややあり、しまりふつう。
22　10YR4/6 褐色粘質土　亜角礫（φ50～80mm）が約20%、酸化鉄分が少量混在。粘性ややあり、しまりふつう。
23　5Y3/2 オリーブ黒色粘質土　粘性ややあり、しまりやや強い。
24　5Y5/1 灰色粘質土　粘性あり、しまりやや弱い。
25　5Y5/1 灰色粘質土　粘性ややあり、しまりやや強い。
26　5Y5/2 灰オリーブ色粘質土　少量の酸化鉄分、マンガンを斑状に含む。粘性ややあり、しまりやや強い。
27　2.5Y5/2 暗灰黄色粘質土　多量の酸化鉄分、マンガンを斑状に含む。粘性ややあり、しまりやや強い。
28　2.5Y5/1 黄灰色粘質土　少量の酸化鉄分、マンガンを斑状に含む。粘性ややあり、しまりふつう。
29　2.5Y5/2 暗灰黄色粘質土　多量の酸化鉄分、マンガンを斑状に含む。粘性ややあり、しまりふつう。
30　2.5Y5/2 暗灰黄色粘質土　多量の酸化鉄分、マンガンを斑状に含む。粘性ややあり、しまりふつう。
31　5Y5/2 灰オリーブ色粘質土　粘性ややあり、しまりやや強い。
32　2.5Y5/1 黄灰色粘質土　縦縞状に微量の酸化鉄分を含む。粘性ややあり、しまりふつう。
33　2.5Y5/1 黄灰色粘質土　小礫が混在。縦縞状に微量の酸化鉄分を含む。粘性あり、しまりふつう。
34　2.5Y5/2 暗灰黄色粘質土　多量の酸化鉄分、マンガンを斑状に含む。粘性ややあり、しまりふつう。
35　2.5Y6/2 灰黄色粘質土　多量の酸化鉄分、マンガンを斑状に含む。粘性ややあり、しまりやや強い。
36　2.5Y5/2 暗灰黄色粘質土　多量の酸化鉄分、マンガンを斑状に含む。粘性ややあり、しまりふつう。
37　2.5Y4/1 黄灰色粘質土　粘性やや強く、しまりふつう。（旧調査区埋め戻し土）
38　2.5Y5/2 暗灰黄色粘質土　多量の酸化鉄分、マンガンを斑状に含む。粘性ややあり、しまりふつう。
39　2.5Y6/2 灰黄色粘質土　酸化鉄分、マンガンを斑状に含む。粘性ややあり、しまりふつう。
40　2.5Y5/2 暗灰黄色粘質土　酸化鉄分、マンガンを斑状に含む。粘性ややあり、しまりやや強い。
41　5Y4/2 灰オリーブ色粘質土　酸化鉄分、マンガンを斑状に含む。粘性ややあり、しまり強い。
42　5Y5/2 灰オリーブ色粘質土　縦縞状に少量の酸化鉄分を含む。粘性あり、しまりふつう。
43　5Y5/2 灰オリーブ色粘質土　縦縞状に多量の酸化鉄分を含む。粘性ややあり、しまりふつう。
44　5Y4/1 灰色粘質土　と一部7.5YR4/6褐色の酸化鉄分が混合。細粒砂を含む。粘性ややあり、しまりやや弱い。
45　5Y5/2 灰オリーブ色粘質土と一部7.5YR4/6褐色の酸化鉄分が混合。白色の中粒砂を含む。粘性ややあり、しまりやや弱い。
46　5Y4/1 灰色粘質土　中粒砂を含む。 5Y7/1灰白色シルトが混在。粘性ややあり、しまりやや弱い。
47　5Y4/1 灰色シルト　5Y7/3浅黄色砂質土が混在。横縞状に少量の酸化鉄分を含む。粘性ややあり、しまり弱い。
48　5Y5/1 灰色粘質土　横縞状に少量の酸化鉄分を含む。粘性ややあり、しまりふつう。
49　5Y5/3 灰オリーブ色砂質土　と7.5YR4/6　褐色の酸化鉄分の混合。5Y7/4浅黄色粗砂が表層化。粘性なし、しまり弱い。
50　5Y5/3 灰オリーブ色砂質土　5Y7/2灰白色砂が混在。粘性なし、しまり弱い。
51　5Y5/2 灰オリーブ色粘質土　と一部7.5YR4/6褐色の酸化鉄分が混合。白色の中粒砂を含む。粘性ややあり、しまりやや弱い。

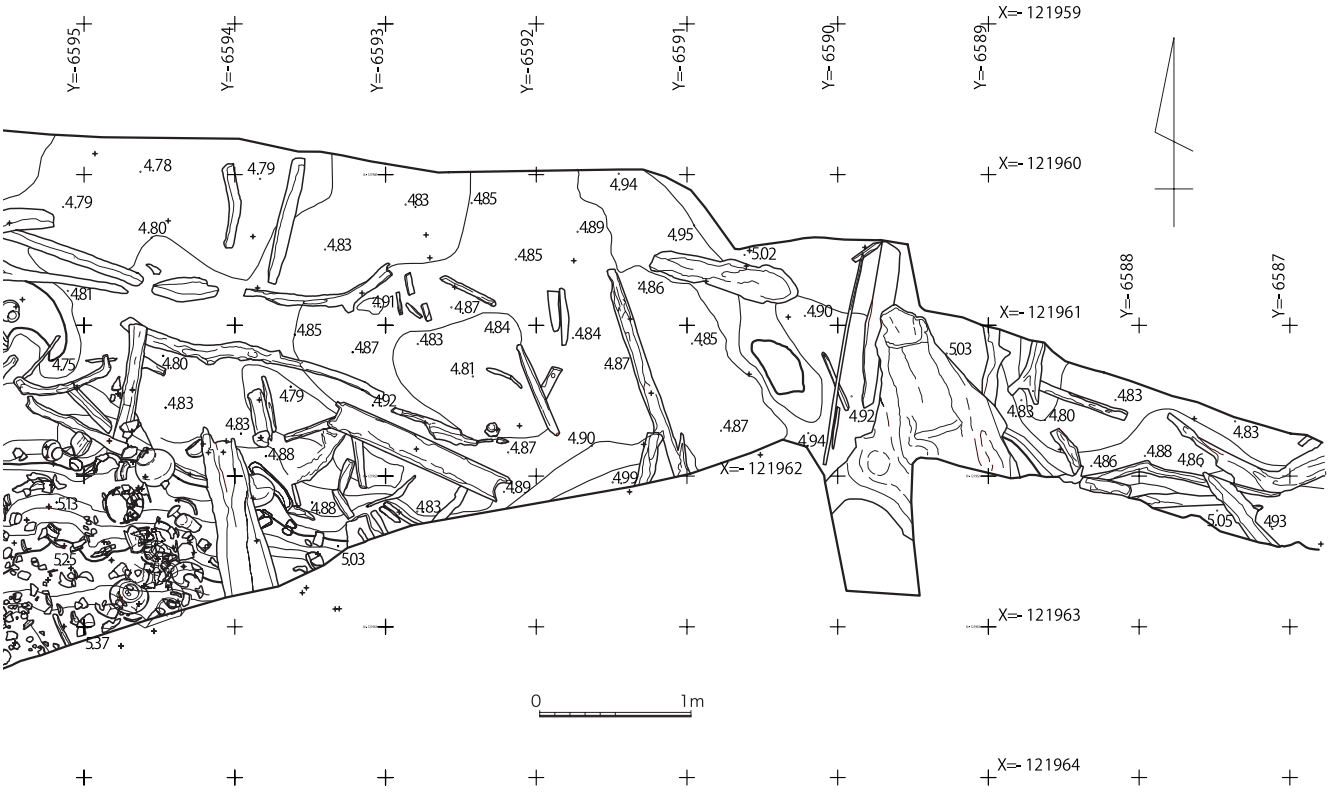
第 20 図　08B 区基本土層断面図

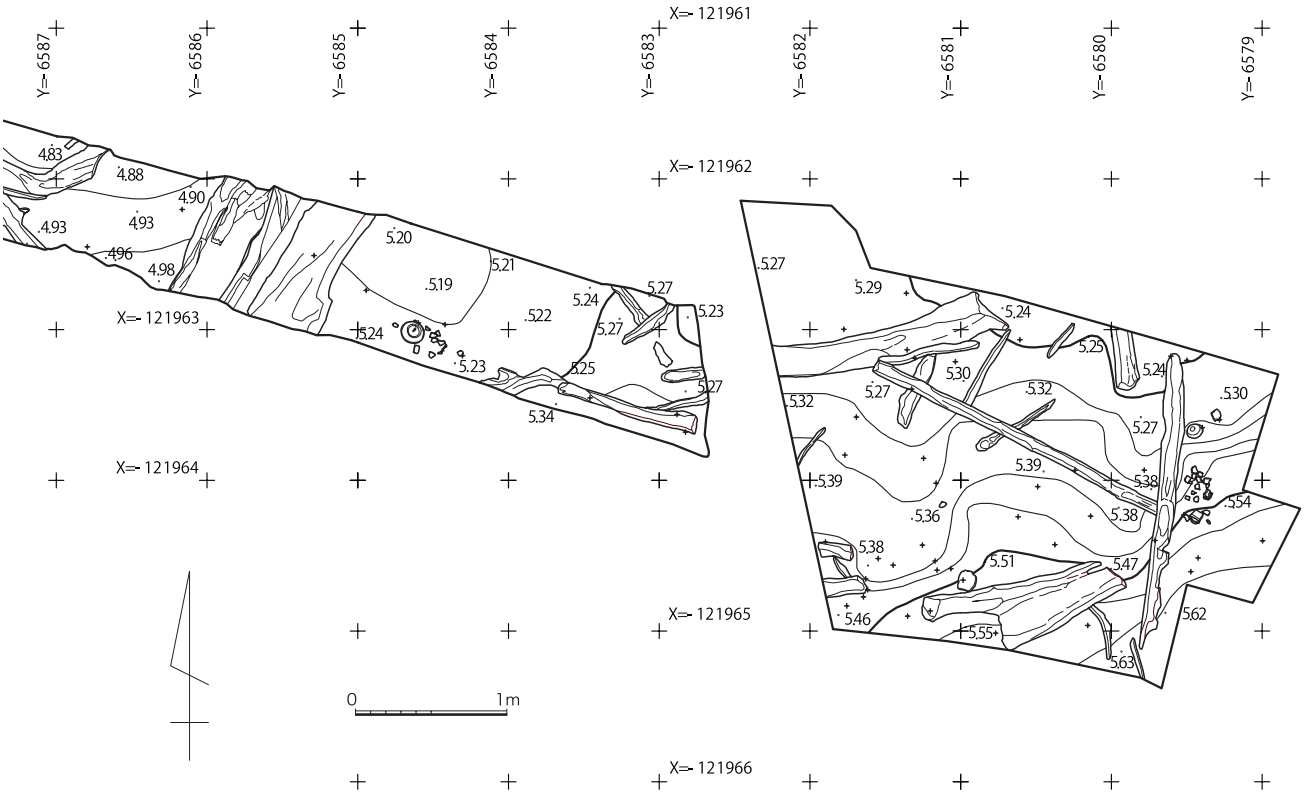
性の堆積環境になり、木製品や木材などとともに徐々に粘土が埋積していったものと推察される。

003NR 第 5 層では大量の古墳時代前期の木製品と土器とともに、多くの分割材、丸太材、削片（木っ端）、枝片、葉、種子などの植物遺体が出土している。規模の大きい主要な材木の出土状況は第 21・22 図に示したが、削片や枝片などの小型木片は部分的に集中する形で出土している。木製品の出土状況（第 23 図）をみると、ほぼ満遍なく分布しているが、団扇形木製品や装飾性が高い横斧柄など質の高い木製品は北側に張り出した先端部分で多く認められる。土器の出土状況をみると、東端部ではその出土量が少ない。詳細に検討すると、高杯は北側の張り出し部の両脇に（第 24 図）、小型壺類は北側の張り出し部の前面に、大型壺類は東側のやや南に凹んだ部分にやや偏って分布している（第 26 図）ようにみえ、甕類はあまり偏った分布は認められない（第 25 図）。

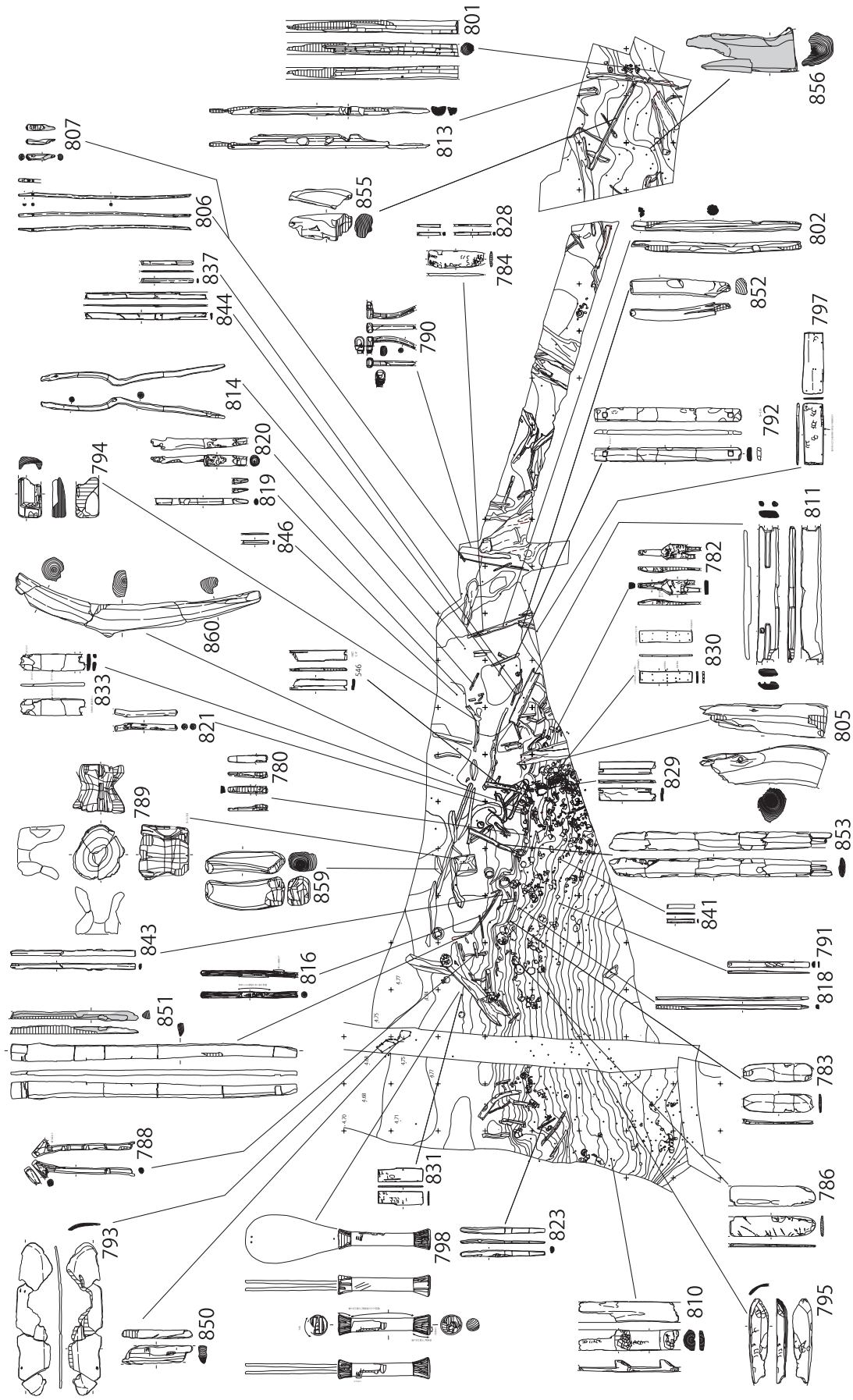
08A 区を含め、以上の所見を総括すると、古墳時代前期（A ― 4 期）の 003NR は南岸の北側張り出し部を中心に木製品を含む木材と土器が多量に出土し、その分布には器種ごとに偏りが認められた。端

第 21 図　08B 区 003NR 遺構図（1）

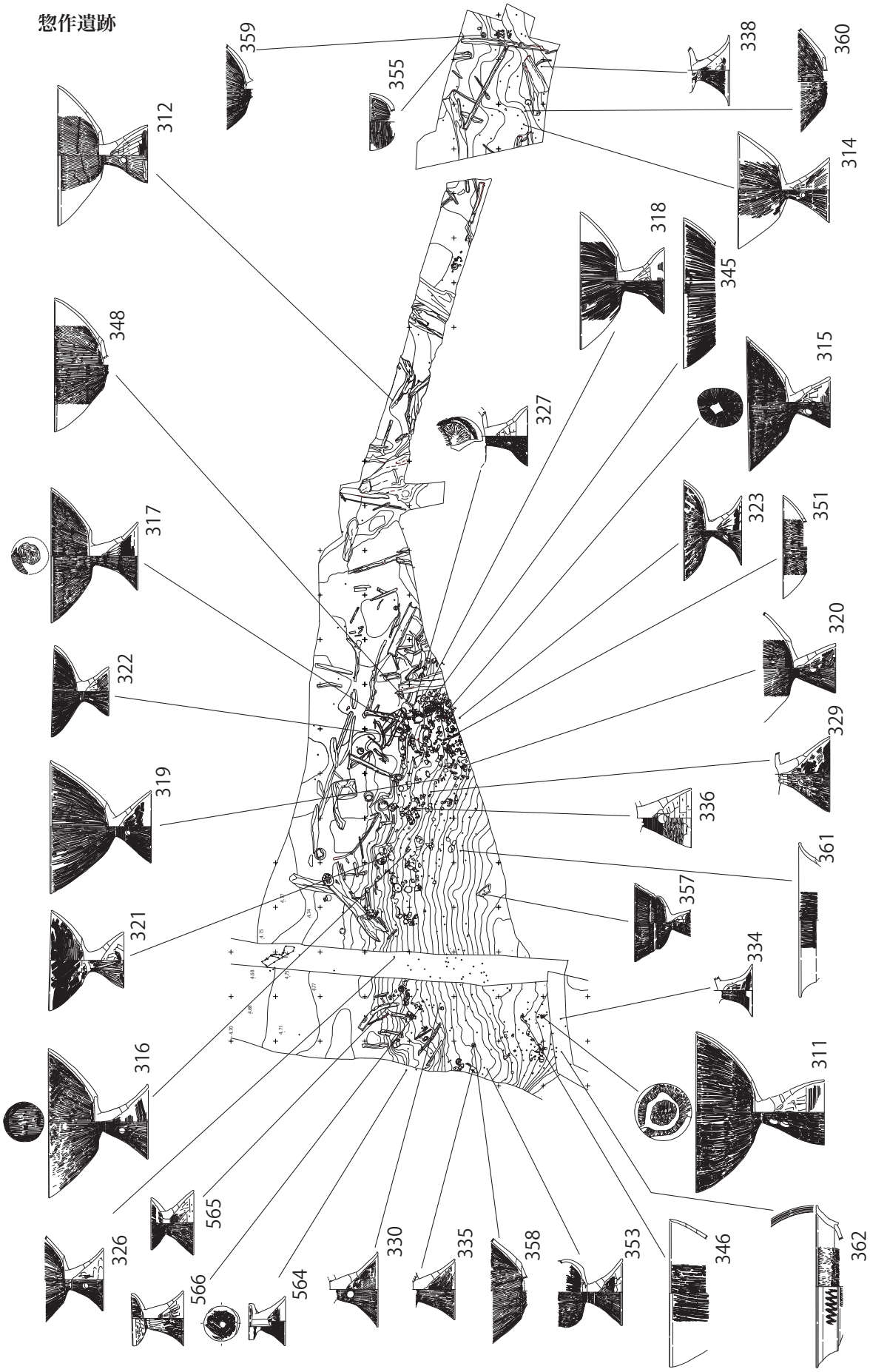




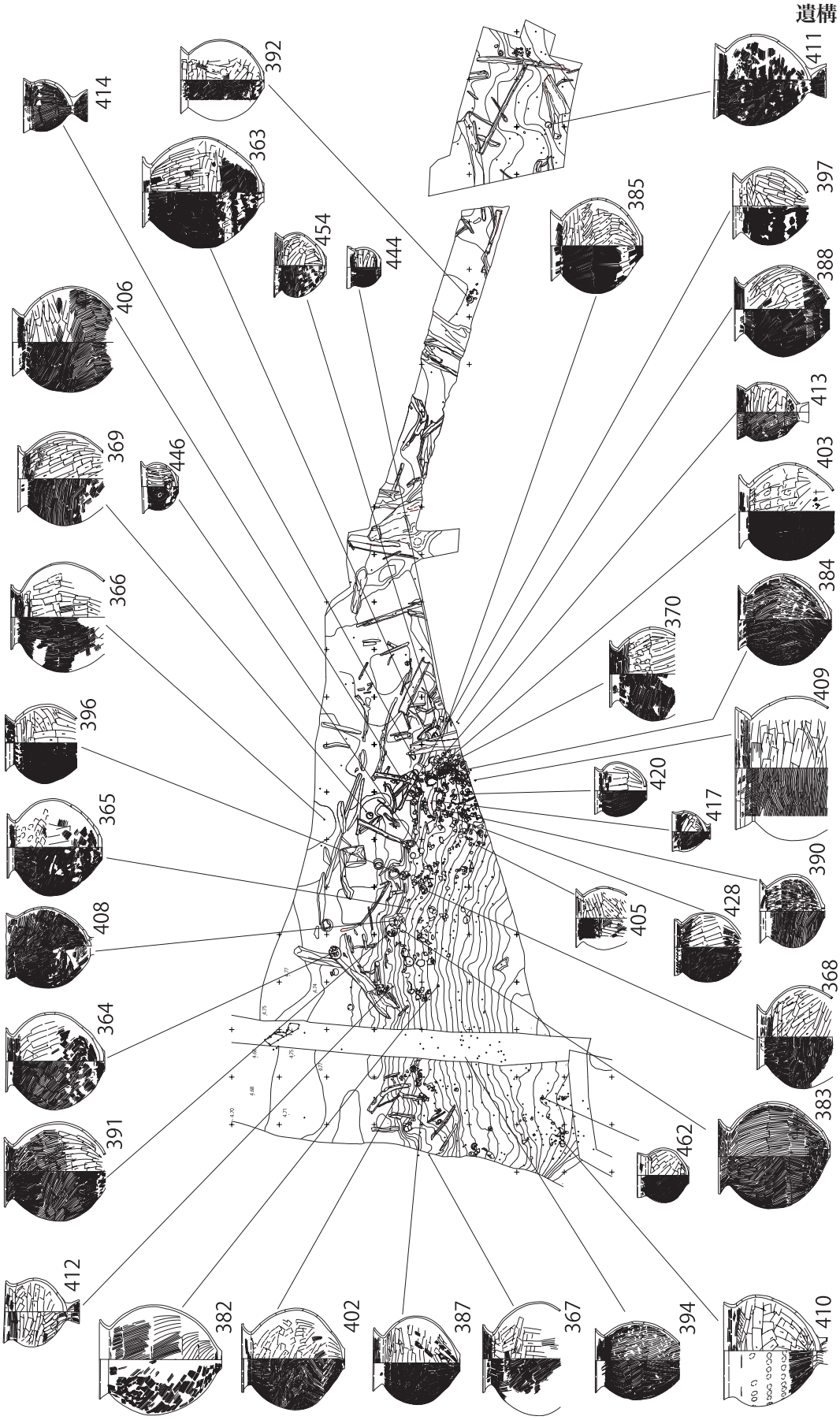
第 22 図　08B 区 003NR 遺構図（2）



第 23 図　08B 区 003NR 遺物出土分布図（1）



第 24 図　08B 区 003NR 遺物出土分布図（2）



第 25 図　08B 区 003NR 遺物出土分布図（3）

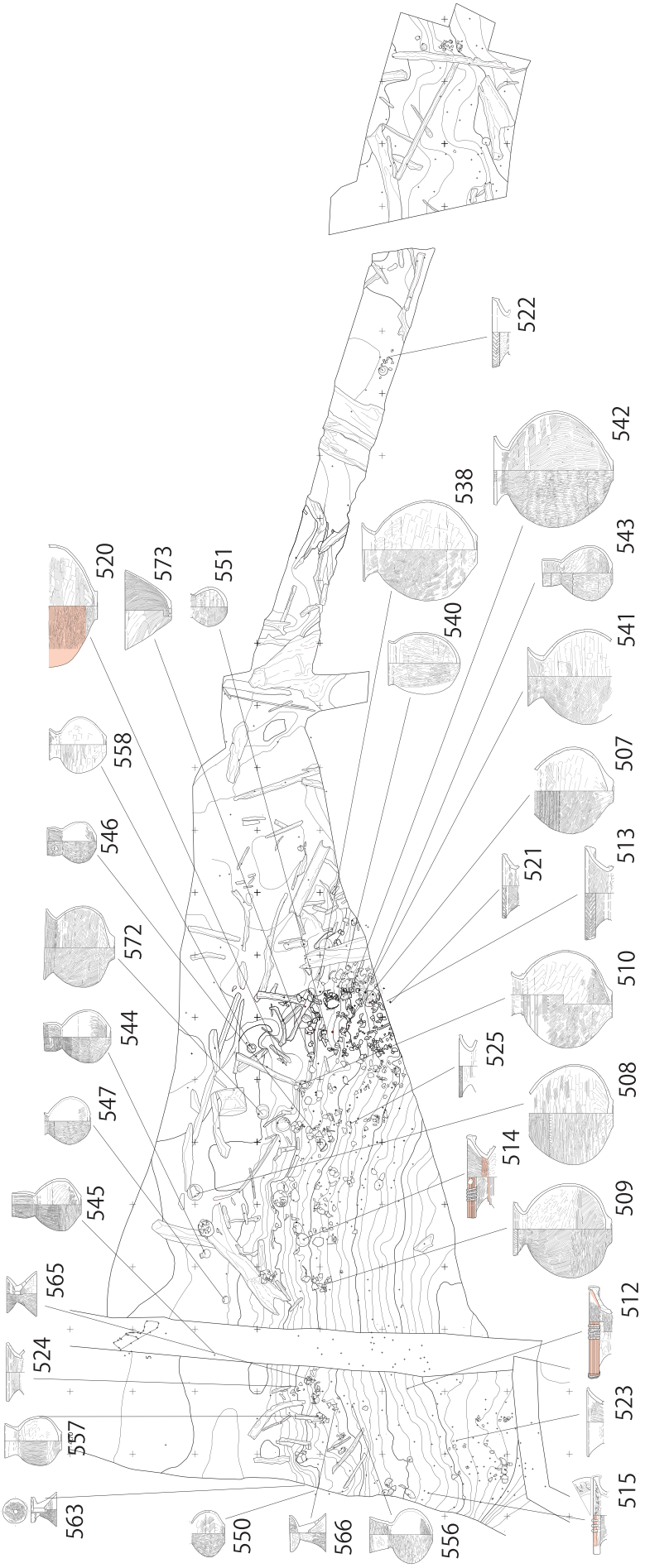
材が多く認められることから付近で木材加工が行われたものと思われるが、北側張り出し部を中心に何らかの意図的な空間利用が行われた可能性が高いといえる。古墳時代中期以降は遺物が投棄される状況は確認できないが、奈良時代末以降（B―1期）に北側緩斜面を中心に木製品と須恵器・灰釉陶器が出土するようになる。この段階では木材加工を窺わせる遺物はほとんど認められない。

（3）中央部の遺構

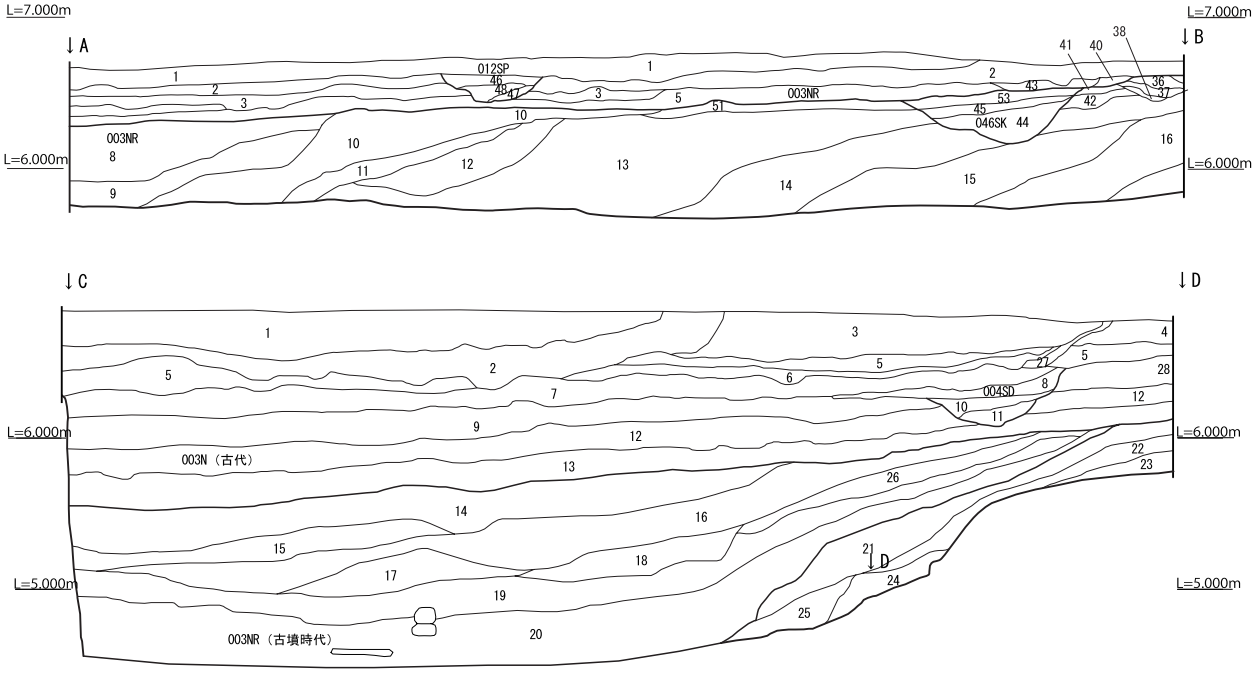
ここでは小形遺構が展開する003NR緩斜面部から001SD北端までの範囲を取り扱う。竪穴建物1基や溝・土坑などが確認された。

＜竪穴建物＞

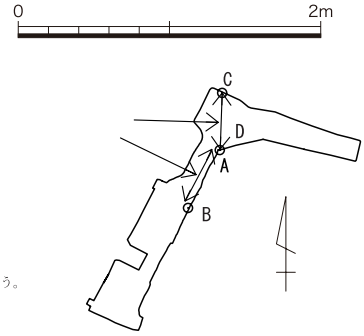
007SB（第28図）　東西4.45m以上×南北3.65m以上の隅丸長方形と思われる竪穴建物である。中央部は005SDに切られ、南部は001SDに、西部は撹乱によって壊されて不明となっている。深さ0.05mを測り、暗灰黄色粘質土を整地して床面が造られていた。柱穴と思われる土坑群が多数展開しているが、026SPなどが主柱穴に該当するものと推測される。周溝・火処遺構などの内部施設は検出されていない。覆土からO-10号窯期に属する須恵器無台碗が出土しており、B―1期に属する。



第26図　08B区003NR遺物出土分布図（4）



1　2.5Y4/2 暗灰黄色粘質土　粘性ややあり　しまりふつう。
2　2.5Y6/2 灰黄色粘質土　角礫（φ15～120mm）が混在。粘性ややあり、しまりふつう。
3　10YR6/2 灰黄褐色粘質土　酸化鉄分を約15%含む。粘性ややあり、しまりふつう。
4　10YR6/2 灰黄褐色粘質土　酸化鉄分を約10%含む。粘性ややあり、しまるふつう。
5　10YR6/2 灰黄褐色粘質土　酸化鉄分を約3%含む。粘性やや強く、しまりやや強い。
6　10YR5/2 灰黄褐色粘質土　粘性ややあり、しまりやや強い。
7　10YR5/2 灰黄褐色粘質土　粘性ややあり、しまりやや強い。
8　2.5Y6/2 灰黄色粘質土　10YR2/2黒褐色粘質土が一部ブロック状に混在。粘性ややあり、しまりやや強い。
9　2.5Y5/2 暗灰黄色粘質土　粘性ややあり、しまりややあり。
10　2.5Y6/2 灰黄色粘質土　粘性ややあり、しまりふつう。
11　2.5Y5/2 暗灰黄色粘質土　粘性ややあり、しまりふつう。
12　10YR2/2 黒褐色粘質土　（φ2～3mm）の炭化物を約1%含む。粘性ややあり、しまりふつう。
13　10YR3/2 黒褐色粘質土　植物繊維を含む。粘性ややあり、しまりふつう。
14　10YR2/3 黒褐色粘質土　植物繊維を含む。粘性ややあり、しまりふつう。
15　5Y2/2　オリーブ黒色粘質土　植物繊維を含む。粘性ややあり、しまりふつう。
16　2.5Y3/1 黒褐色粘質土　粘性やや強く、しまりふつう。
17　5Y2/2　オリーブ黒色粘質土　植物繊維を含む。粘性ややあり、しまりやや弱い。
18　2.5Y5/1 黄灰色粘質土　下位に2.5Y2/1黒色粘質土が混在。粘性ややあり、しまりふつう。
19　5Y2/2　オリーブ黒色粘質土　植物繊維を含む。粘性あり、しまりふつう。
20　2.5Y3/1 黒褐色粘質土　同色のシルトが一部混在。植物繊維や微細な木屑を含む。粘性ややあり、しまりふつう。
21　2.5Y4/1 黄灰色砂質シルト　2.5Y5/1黄灰色シルトが一部混在。粘性ややあり、しまりやや弱い。
22　7.5Y4/1 灰色粘質土　縦縞状に酸化鉄分、マンガンを含む。粘性ややあり、しまりやや弱い。
23　5Y4/1　灰色シルト　粘性ややあり、しまりやや弱い。
24　7.5Y4/1 灰色シルト　粘性あり、しまりやや弱い。
25　5Y5/1　灰色シルト　粘性ややあり、しまりやや弱い。
26　10YR5/2 灰黄褐色粘質土　酸化鉄分を微量含む。
27　10YR6/6 明黄褐色粘質土　粘性強く、しまりふつう。
28　10YR5/2 灰黄褐色粘質土　粘性ややあり、しまりやや強い。



第 27 図　08B 区 003NR 土層断面図

＜溝＞

004SD　003NR 南斜面で急に傾斜する肩部で検出された東西溝である。幅 0.75m、深さ 0.15m を測り、003NR 第 1 層上面から掘削されている。瀬戸窯産陶器の腰錆茶碗が出土しており、時期は C―３期に属する。003NR 南肩に平行して検出されており、江戸時代においても河跡が微地形として残存したものと考えられよう。

005SD　007SB を切る形で検出された北東―南西方向に走る溝である。幅 0.71m、深さ 0.15m を測り、黒褐色粘質土の斑土が充填されていた。B―２期かC 期と思われる。

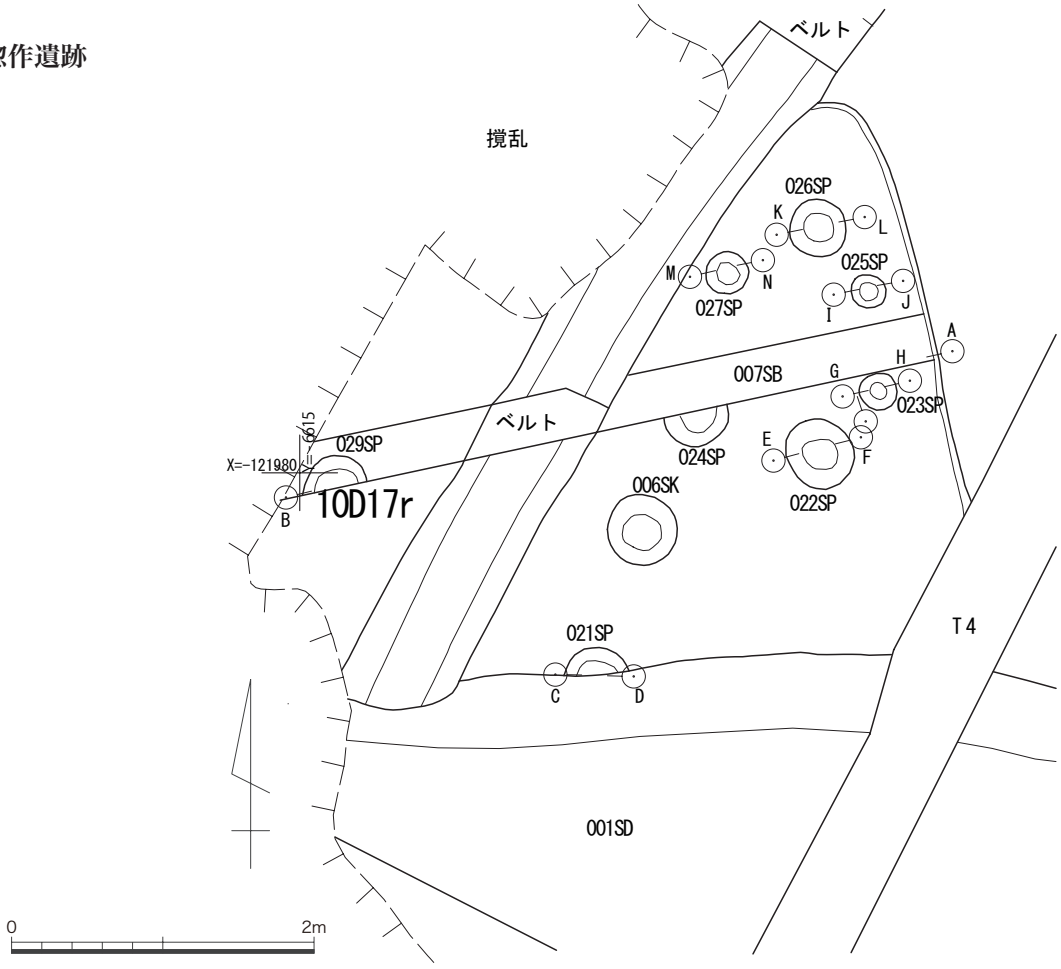
043SD　003NR 南緩斜面の上がり際で検出された東西溝である。幅 0.67m、深さ 0.05m を測り、時期は B 期以降と思われる。

＜土坑＞

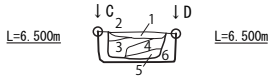
020SP　003NR 南斜面で検出された円形ピットで、直径 0.39m、深さ 0.14m を測る。内部から暗文土師器碗が出土し、時期は B―１期に属する。

036SP　003NR 南緩斜面で検出された円形ピットで、直径 0.30m、深さ 0.09m を測る。内部から山茶碗が出土し、時期は C―１期に属する。020SP と

惣作遺跡

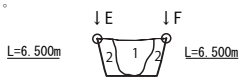


1　2.5Y3/3 暗オリーブ褐色粘質土　2.5Y5/1黄灰色シルトの塊（φ20～50mm）が約15%混在。粘性ややあり、しまりふつう。
2　2.5Y3/2 黒褐色粘質土　2.5Y5/1黄灰色シルトが約20%混在。粘性ややあり、しまりふつう。
3　2.5Y3/2 黒褐色粘質土　2.5Y5/1黄灰色シルトが約30%混在。粘性ややあり、しまりふつう。
4　2.5Y4/2 暗灰黄色粘質土　炭化物約3%と酸化鉄が約10%混在。粘性ややあり、しまりふつう。
5　2.5Y4/2 暗灰黄色粘質土　炭化物約5%と酸化鉄が約5%混在。粘性ややあり、しまりふつう。



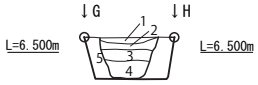
021SP

1　2.5Y4/2 暗灰黄色粘質土　と5Yオリーブ黒色粘質土の混合。
　2.5Y3/1黒褐色の炭化物（φ5～15mm）が約5%と酸化鉄分、マンガンが点在。
　粘性ややあり、しまりふつう。
2　2.5Y3/2 黒褐色粘質土と5Yオリーブ黒色粘質土の混合。2.5Y3/1黒褐色の
　炭化物（φ5～10mm）が約3%点在。酸化鉄分、マンガン、2.5Y4/1黄灰色シルトが
　一部混在。粘性ややあり、しまりふつう。
3　2.5Y4/2 暗灰黄色粘質土　2.5Y3/1黒褐色の炭化物（φ5mm）が約2%点在。
　2.5Y4/1黄灰色シルトが塊状に約5%と酸化鉄分、マンガンが混在。
　粘性ややあり、しまり弱い。
4　2.5Y3/2 黒褐色粘質土　酸化鉄分が混在。粘性ややあり、しまりふつう。
5　2.5Y4/2 暗灰黄色シルト　酸化鉄分が混在。粘性なし、しまり弱い。
6　2.5Y4/2 暗灰黄色粘質土　粘性なし、しまり弱い。



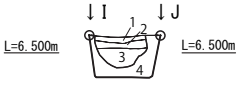
023SP

1　2.5Y4/2 暗灰黄色粘質土　2.5Y4/1黄灰色シルトが塊状に点在。酸化鉄分、マンガン
　と5Y3/1オリーブ黒色の炭化物（φ5～10mm）が約5%混在。粘性あり、しまりふつう。
2　2.5Y4/2 暗灰黄色粘質土　2.5Y4/1黄灰色シルトが縞状に混在。
　粘性ややあり、しまりふつう。



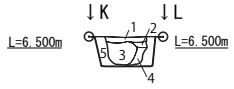
022SP

1　2.5Y5/2 暗灰黄色粘質土　2.5Y3/1黒褐色の炭化物（φ2～5mm）が約5%点在。
　酸化鉄分、マンガンが混在。粘性あり、しまりふつう。
2　2.5Y4/2 暗灰黄色粘質土　2.5Y4/1黄灰色シルトが少量点在。
　2.5Y3/1黒褐色の炭化物が微量混在。粘性ややあり、しまりふつう。
3　2.5Y4/2 暗灰黄色粘質土　2.5Y6/3にぶい黄色シルトが横縞状に混在。粘性ややあり、しまりやや弱い。
4　2.5Y4/2 暗灰黄色粘質土　2.5Y6/3にぶい黄色シルトが横縞状に混在。粘性あり。しまりふつう。
5　2.5Y4/2 暗灰黄色砂質土　粘性ややあり、しまりふつう。



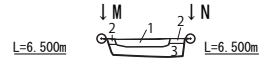
025SP

1　2.5Y4/2 暗灰黄色粘質土　2.5Y2/1黒色の炭化物（φ5～15mm）が約5%混在。
　粘性あり、しまりふつう。
2　2.5Y3/3 暗オリーブ褐色シルト　粘性なし、しまりやや弱い。
3　2.5Y4/3 オリーブ褐色粘質土　2.5Y3/1黒褐色シルトが点在、水分を含む、
　粘性ややあり、しまりやや弱い。
4　2.5Y4/2 暗灰褐色粘質土　2.5Y3/1黒褐色シルトが点在、粘性ややあり、
　しまりふつう。



027SP

1　2.5Y4/2 暗灰黄色粘質土　2.5Y2/1黒色の炭化物（φ5mm）が約15%混在。粘性あり、しまりふつう。
2　2.5Y5/2 暗灰黄色粘質土　2.5Y2/1黒色の炭化物（φ10mm）が約2%混在。粘性あり、しまりふつう。
3　2.5Y4/2 暗灰黄色粘質土　2.5Y3/1黒褐色シルトが点在、粘性あり、しまりふつう。
4　2.5Y5/2 暗灰黄色粘質土　2.5Y3/1黒褐色シルトが点在、粘性ややあり、しまりふつう。
5　2.5Y4/2 暗灰黄色粘質土　2.5Y3/1黒褐色シルトが点在、粘性ややあり、しまりふつう。



026SP

1　2.5Y4/2 暗灰黄色粘質土　2.5Y2/1黒色の炭化物（φ5～20mm）が約15%混在。
　粘性ややあり、しまりふつう。
2　2.5Y4/2 暗灰黄色粘質土　粘性あり、しまりふつう。
3　2.5Y4/3 オリーブ褐色粘質土　水分を含み、2.5Y3/1黒褐色シルトが点在。
　粘性ややあり、しまりやや弱い。

第 28 図　007SB 遺構図

036SP 以外にもその南部でピットが多数発見されており、B～C 期に流路脇に掘立柱建物跡が展開したものと推察される。

045SK　043SD を切る形で検出された不定形土坑で、015SK と 046SK が重複する。

（4）南部の遺構

ここでは南部に所在する 001SD と 002SX を紹介する。

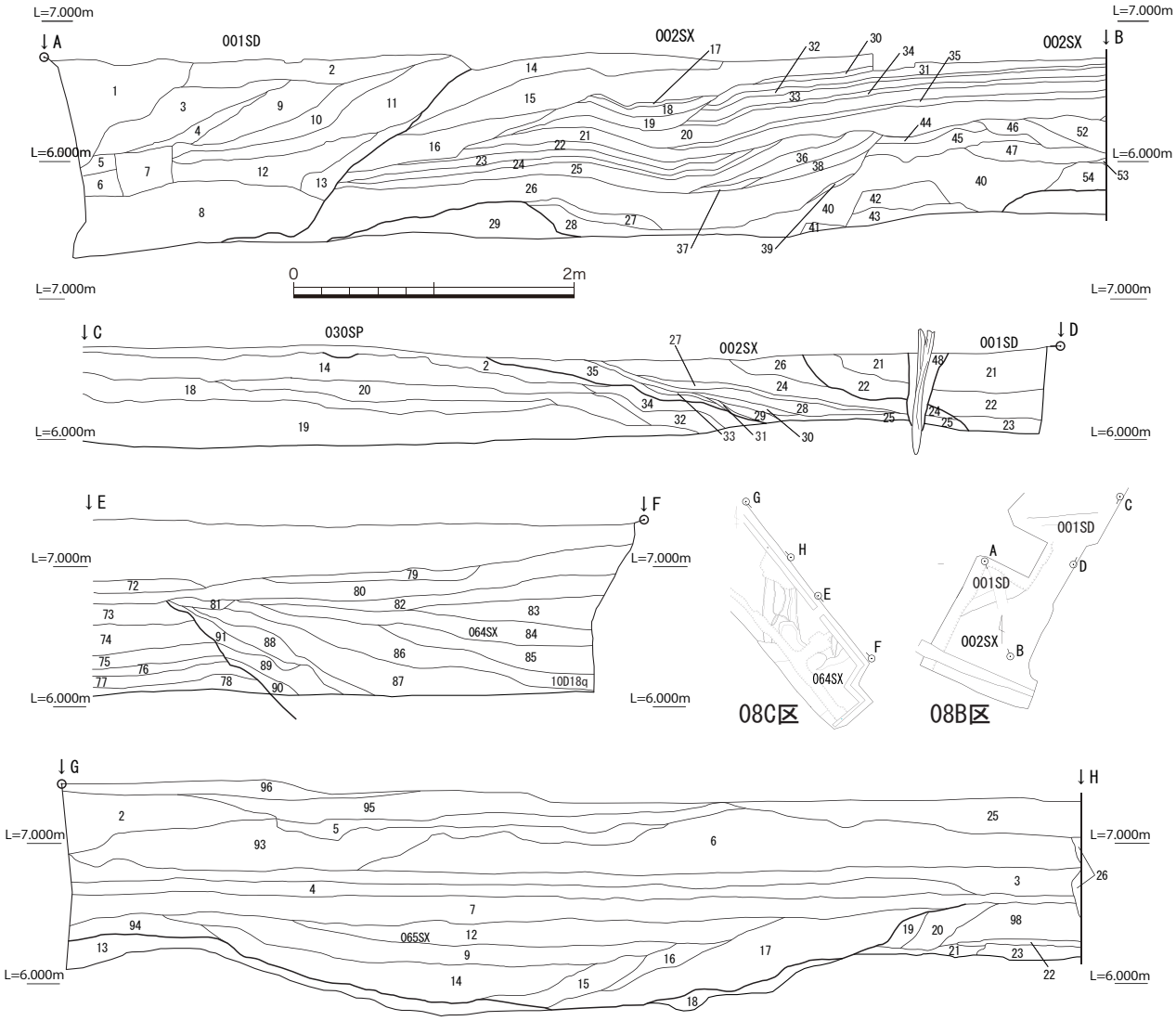
001SD（第 29 図）　橋脚の基礎により大きく破損され全形を知り得ないが、幅 8m 以上を測る概ね東西方向に走る溝である。002SX が埋積した後に掘削されている。時期は近代以降と思われる。

002SX（第 29 図）　規模や形状が不明な大型土坑である。北肩の一部が確認されたのみで、下部は粗粒砂中に灰色粘質土のブロックが混在する斑土で充填され、上部はシルトや粘質土が互層状に堆積していた。出土遺物からみてC―3 期に位置づけられる。（鈴木正貴）

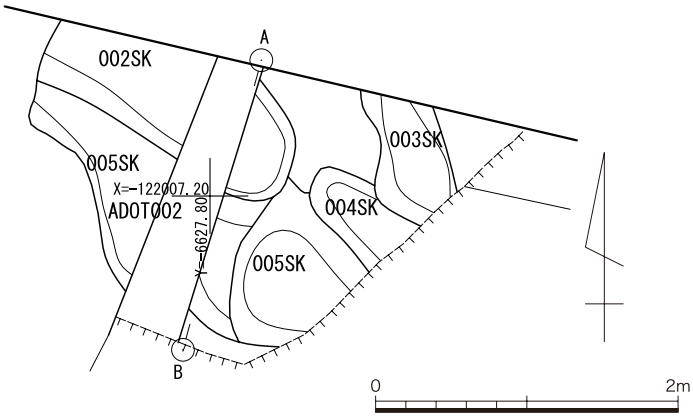
第 5 節　09 A 区の遺構

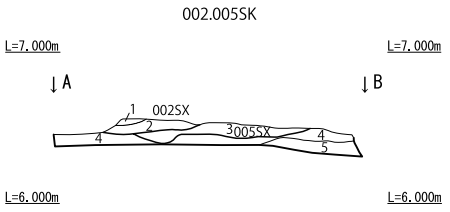
（1）調査経過と遺構の概要

調査区は市道の築堤となっていた地点であり、築堤が造られる以前は水田であったとみられる。築堤盛土を除去後に表土掘削を行ったが、盛土直下は撹乱が入っており、これを除去するとほぼ全面に粗粒砂の堆積が広がっていることが判明した。この砂層は隣接調査区で検出された近世～近代の流路と考えられ、当該期の陶器片などが出土した。砂層の堆積は厚く、中世以前の遺構面を大きくえぐり込んでい

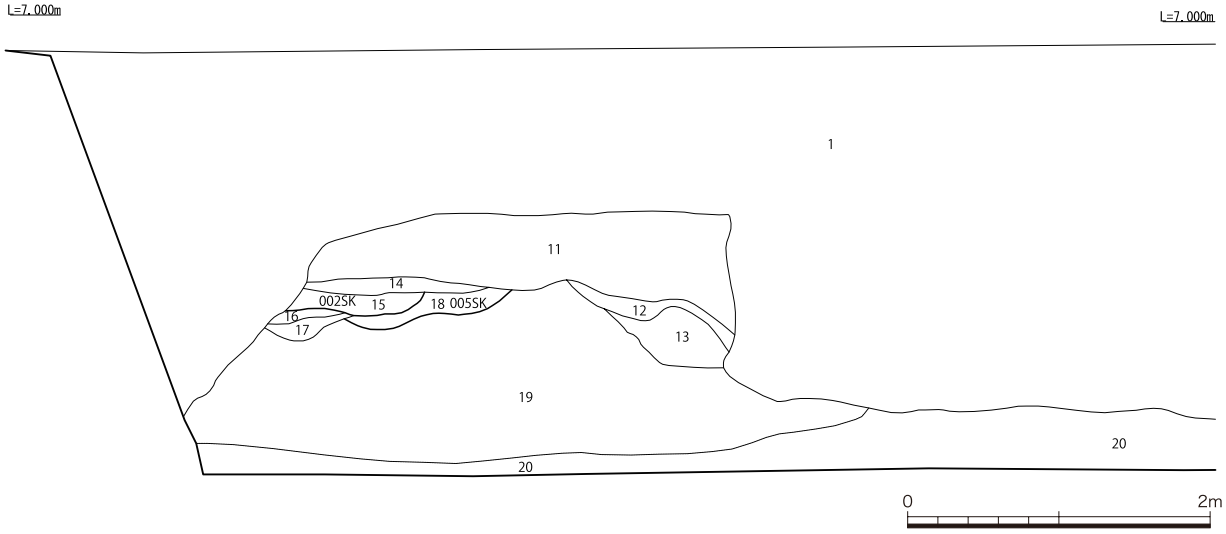


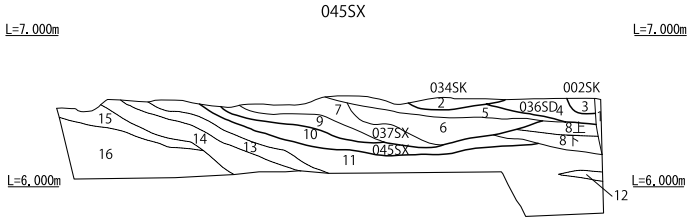
第 29 図　001SD・002SX・064SX・065SX 土層断面図

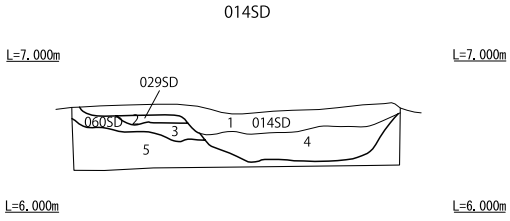




1　10YR4/1 褐灰色細粒砂。 鉄分含む(7.5YR5/6)。
2　2/5Y5/2 暗灰黄色極細粒砂。 シルト混入、鉄分含む(7.5YR5/6)。
3　10YR3/1 黒褐色砂質シルト。 鉄分含む(7.5YR5/6)。
4　5Y4/1　 灰色細粒砂。 鉄分含む(7.5YR5/6)。
5　10YR5/1 灰褐色粗粒砂。
(記録者　永井・角上)



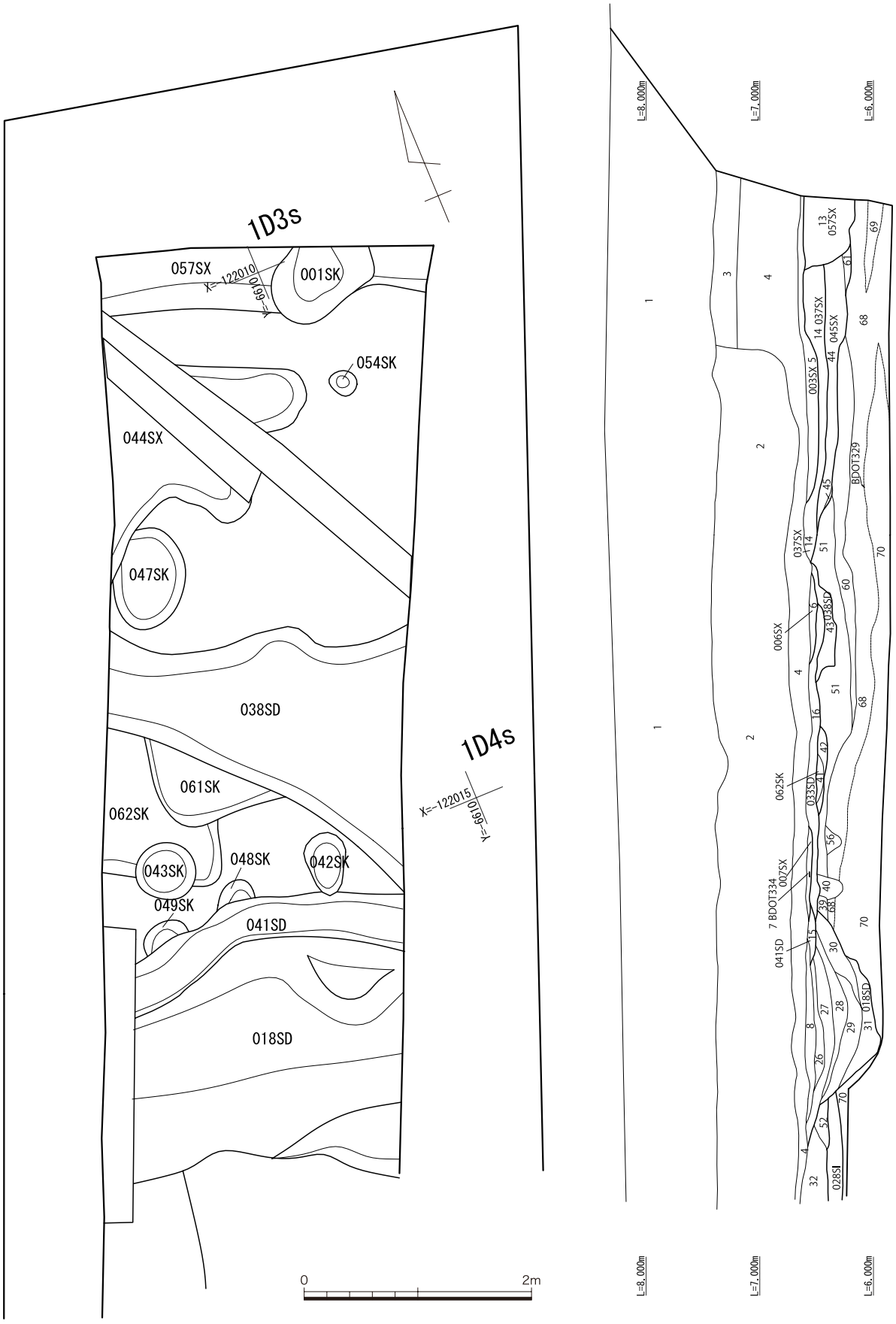




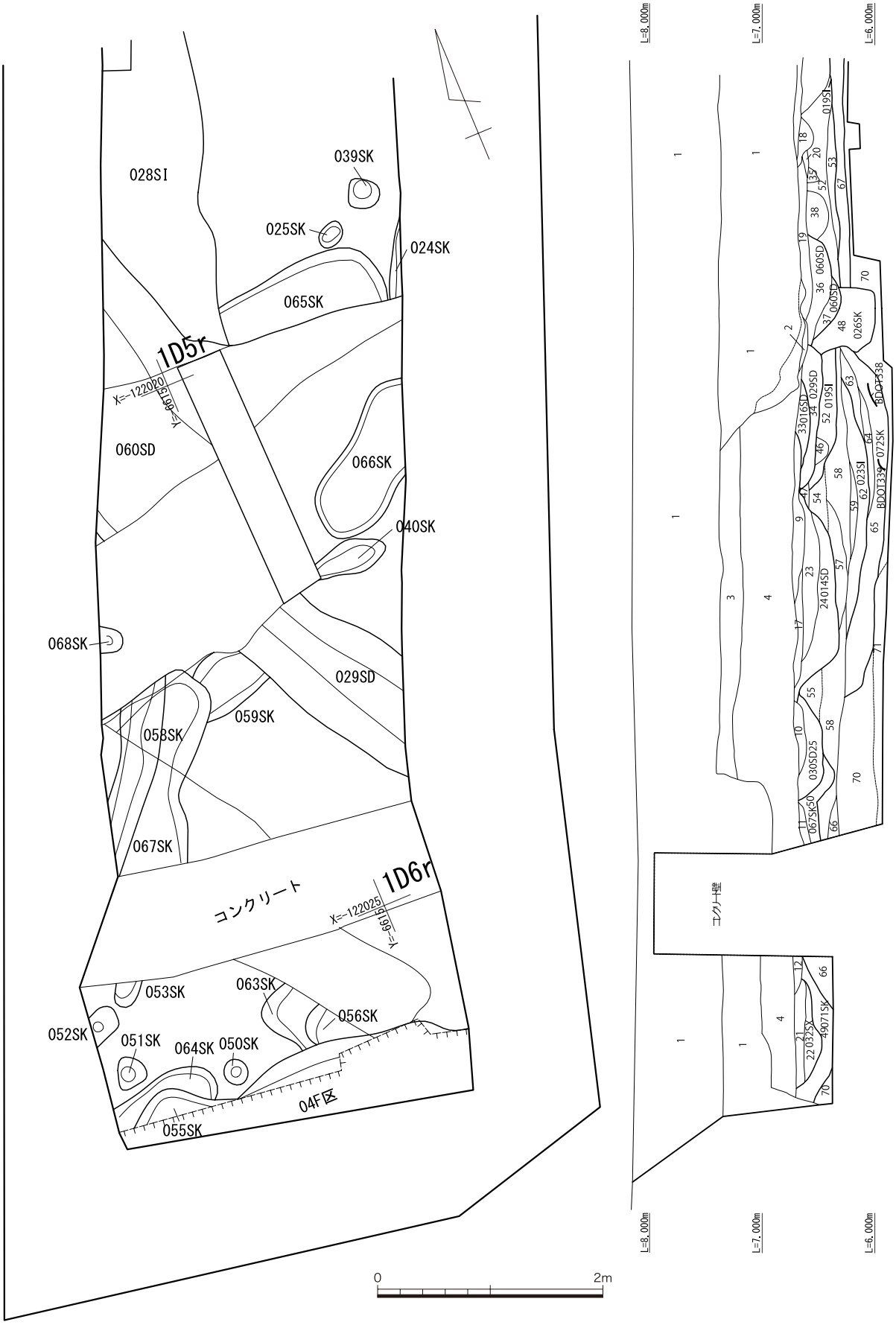
1　10YR3/1 黒褐色砂質シルト。　(砂質強い) ブロック10YR4/3にぶい黄褐色細粒砂。
2　5Y3/1　 黒色シルト。　鉄分含む (7.5YR3/3暗褐色)
3　10YR3/2 黒褐色砂質シルト。　鉄分含む (5YR3/4暗赤褐色)
4　2/5Y3/2 黒褐色シルト。　鉄分含む (7/5YR3/3暗褐色)
5　2.5Y4/1 黄灰色砂質シルト。　鉄分含む (7.5YR3/3暗褐色)
6　2.5Y3/2 黒褐色砂質シルト。　(5mm大礫) ブロック5Y4/2灰オリーブ色粘質シルト。
7　2.5Y4/1 黄灰色極細粒砂。　(シルト混入) 炭化物含む。
8上 2.5Y6/2 灰黄色細粒砂。
8下 10YR3/1 黒褐色砂質シルト。　ブロック10YR2/1黒色粘質シルト。
9　2.5Y3/2 黒褐色砂質シルト。　炭化物含む、ブロック2.5Y6/2灰黄色極細粒砂。
10　10YR4/3 灰黄褐色シルト。　炭化物。鉄分含む (7.5YR3/3暗褐色)
11　10YR5/2 灰黄褐色粗粒砂。　2.5Y5/2黒褐色砂質シルト。鉄分含む (7.5YR3/3暗褐色)
炭化物含む、全体にラミナ。
12　5Y3/2　 オリーブ黒色極細粒砂。
13　5Y3/2　 オリーブ黒色砂質シルト。鉄分含む (7.5YR3/3暗褐色) 炭化物含む。
14　5Y4/1　 灰色砂質シルト。鉄分含む (7.5YR3/3暗褐色) 炭化物含む。
15　7.5Y5/1 灰色極細粒砂。　2～3mmの礫含む。鉄分含む (7.5YR3/3暗褐色)
16　5Y4/2　 灰オリーブ色砂質シルト。鉄分含む (7.5YR3/3暗褐色) 炭化物含む。
(記録者　永井・角上)

1　7.5YR3/1 黒褐色砂質シルト。　(ブロック10YR5/4にぶい黄褐色極細シルト混入)
2　10YR3/1　黒褐色シルト。
3　2.5Y3/1　黒褐色シルト。　遺物・炭化物含む。
4　5Y3/1　 オリーブ黒色粘質シルト。　地山ブロック2.5Y4/2暗灰黄色粘質シルト。
炭化物・遺物含む。
5　2.5Y5/2　暗灰黄色砂質シルト。　ブロック1～2cm大。7.5YR3/1黒褐色シルト若干含む。
(記録者　永井・角上)

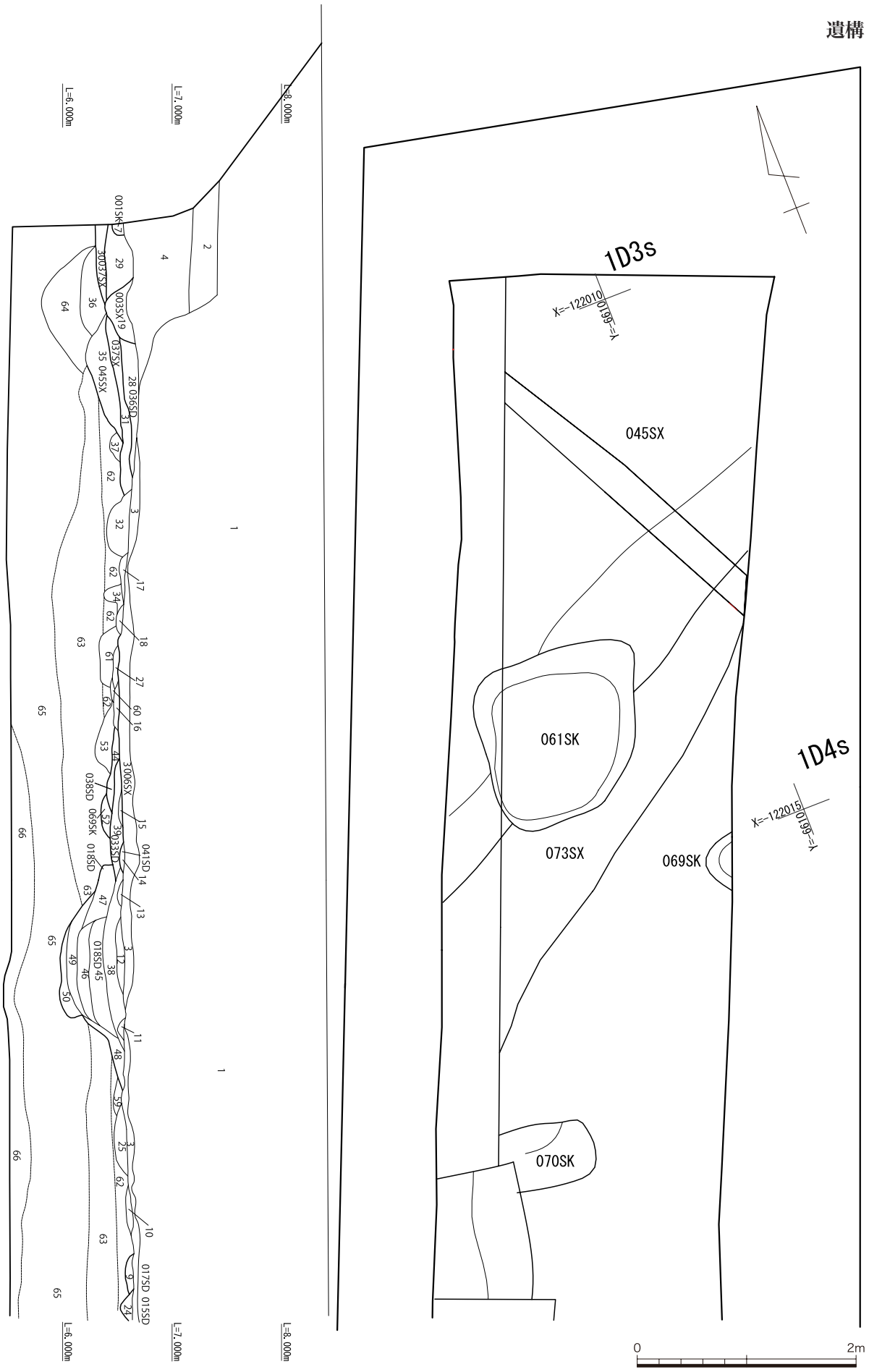
第 30 図　09A 区遺構図



第 31 図　09B 区３面遺構図（1）

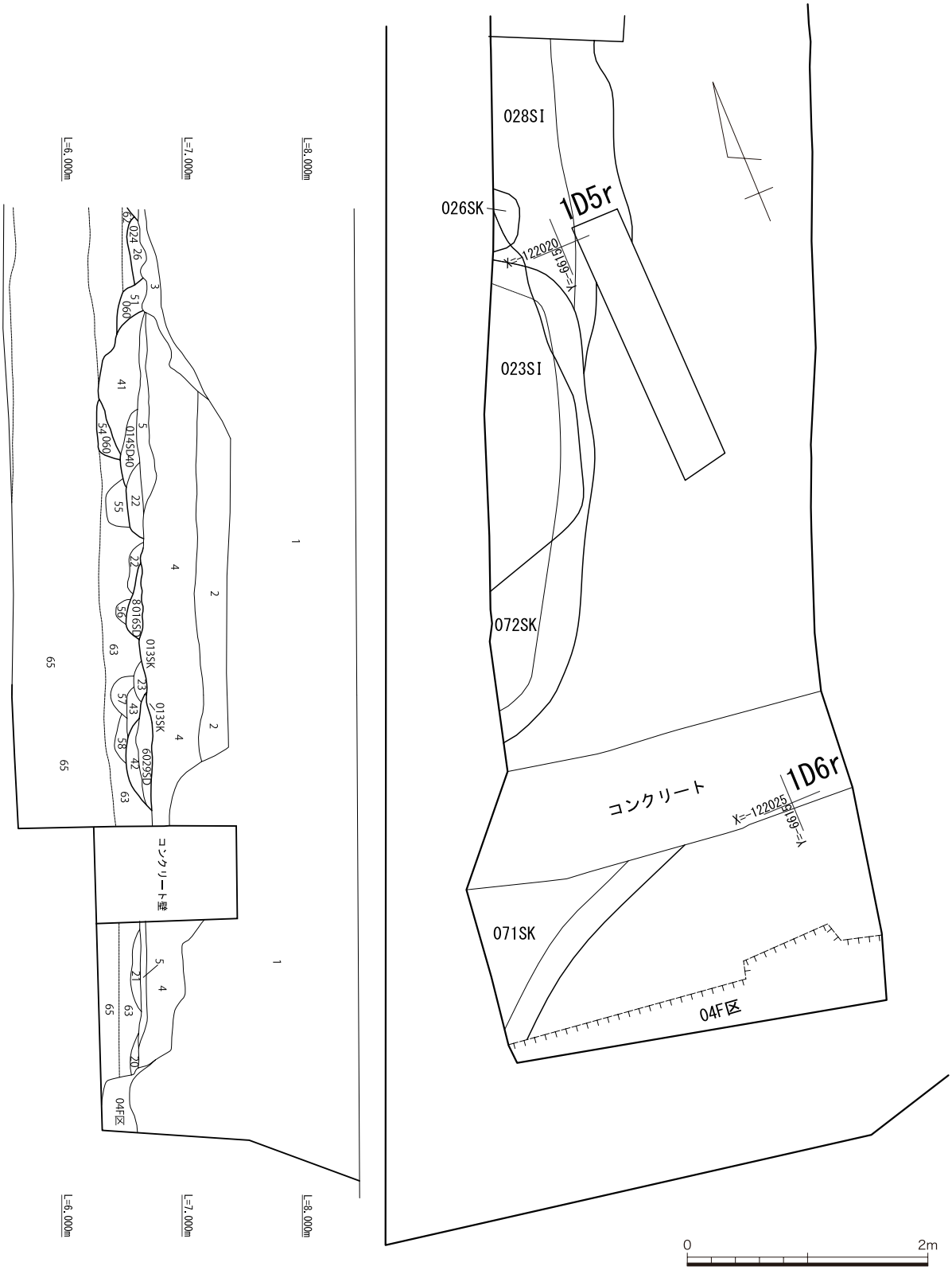


第 32 図　09B 区 3 面遺構図（2）



第 33 図　09B 区４面遺構図（1）

たため遺構の検出はほぼ不可能と思われた。しかしながら調査区北西隅では、09B 区と同様の自然堤防基盤層がわずかに残存しており、その上位で須恵器などを含む遺物包含層を約 5 平方メートル検出することができた。それ以外の箇所は、流路の底とみられる深さまで粗粒砂層を掘削し、そこで弥生土器片を含む粗粒砂層を検出したが、基本的に流路堆積とは区別が不可能でまた湧水が激しいことから遺物を



第 34 図　09B 区４面遺構図（２）

採取するにとどまった。

002SK　調査区北西隅に位置する。005SK と重複して検出された、不整形な皿状を呈する遺構である。平面検出では 005SK とは若干ずれる。土層観察では両者は明確に区分される。なお、002SK の南東方向延長に 004SK が存在しており、同一遺構の可能性がある。なお顕著な遺物の出土はなかった。

005SK　調査区北西隅に位置する。002SK と重複して下位で検出された。長軸 1.71m、短軸 1.11m の不整形な平面形状で断面が皿状の土坑である。検出面からの深さは 0.27m であり、埋土は黒褐色砂質シルトである。出土遺物は須恵器杯（674・675）が出土している。遺物から 8 世紀中～後葉の時期と考えられる。09A 区北側にあたる 08B 区では竪穴建物が検出されていることから、当該遺構もその可能性が考えられる。（永井邦仁）

第 6 節　09 B 区の遺構

（1）調査経過と遺構の概要

調査区は、09A 区の東側に位置し、同じく市道築堤下であった。表土掘削時は 09A 区同様に撹乱が約 1.2m の深さまで及んでいたが、遺構検出面には一部が達していた程度であった。このことから、09A 区と 09B 区の間で近世以降の流路および撹乱は収束していると考えられる。遺構検出面は明確なものは 1 面しか認められないが、遺構の重複は激しく、調査区全体では 2 度、調査区南部では 4 度の遺構検出を実施している。そのため一部遺構は、上位で検出された遺構が下位遺構の上層部分に該当する場合もある。ここでは遺構の種別に報告する。

（2）溝

014SD（斜行溝）　調査区南部に位置する。東北から南西方向へのびる国土座標に対して斜行する溝である。検出長は 3.34m で断面は逆台形を呈する下層部分（土層断面図 1 層）と北側へ浅く広がる上層（土層断面図 4 層）の一部分で構成される。検出面での幅は 2.28m、底部幅は 0.70m である。下層部分の断面形状から、当初は明確な区画目的で掘削されたものと推察される。土層観察によれば 029SD・060SD との重複関係ではその後に位置づけられる。これらの事実から当該調査区内で検出されたなかで比較的新しい遺構であることが示される。遺物は 029SD 出土破片などとも接合する灰釉陶器皿（680）などがり、9 世紀後半以降であると考えられる。他に須恵器椀（681）もあるが、やはり先行遺構からの混入と考えられる。

029SD（016SD・060SD）　調査区南部に位置する。当初 016SD の平面形が検出されその後 029SD が判明し、前者が後者の上層部分に該当することがわかった。またさらに遺構検出面を下げて再検討したところ、028SI 等の弥生時代竪穴建物を切り込む同形状の遺構が検出され（060SD）、029SD の下層部分であると考えた。

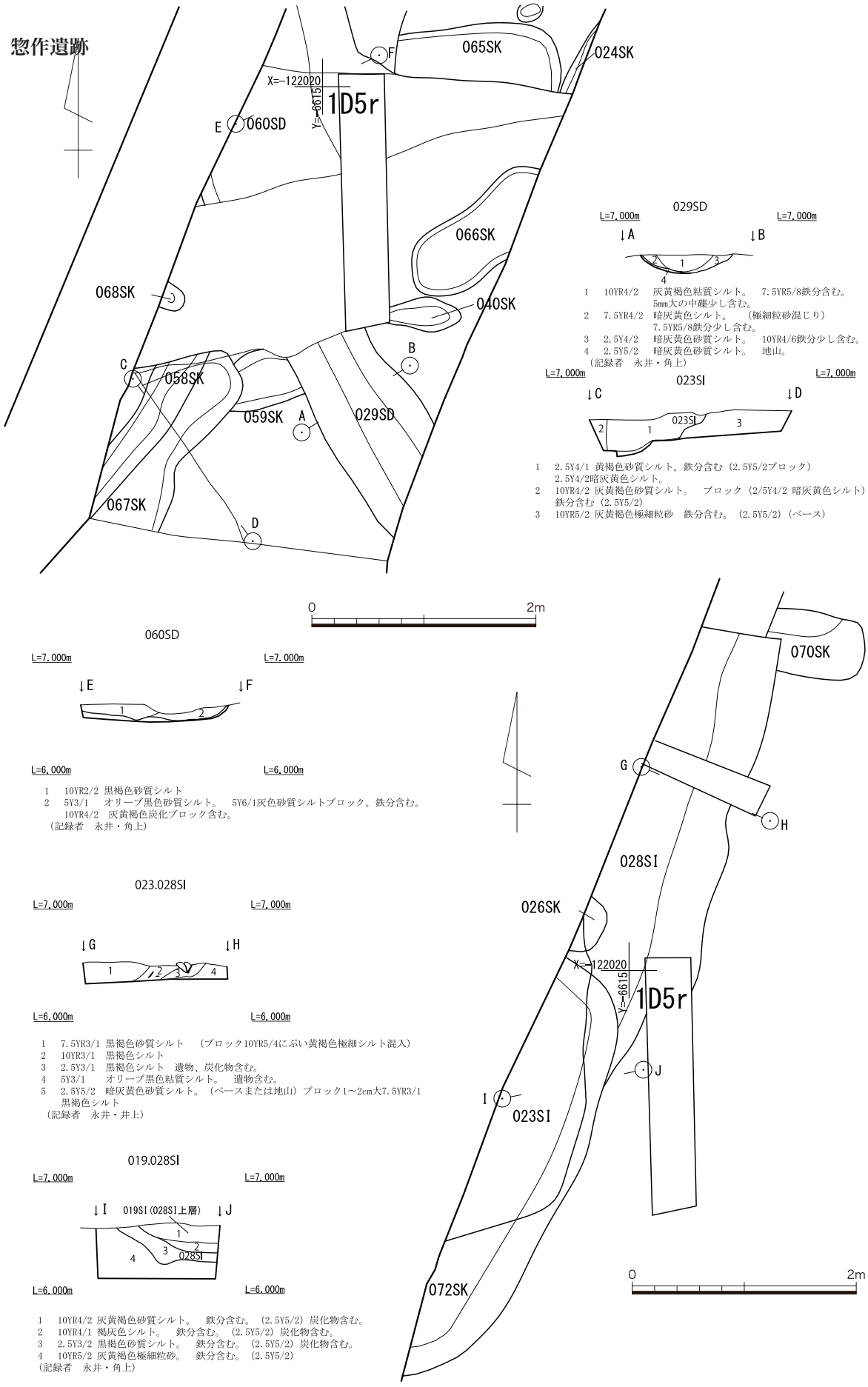
国土座標に対して西へ 30°振れて斜行する溝である。検出長は 1.33m で上層（016SD）の幅は 0.99m、下層（029SD）の幅は 0.84m である。底までの深さは 0.37m である。029SD の南東方向延長には同様の溝（04F 区 SD70）が検出されており、同一の遺構とみられる。

また、この溝の西側に併行して同規模の 030SD が検出されており、ともに灰釉陶器が出土していることから同時に存在した可能性が高いと考えられる。両溝間の幅は約 1m であるが、側溝を有する道路であったと推察される。

出土遺物には玉縁口縁の灰釉陶器椀が含まれ、K-90 号窯期で 9 世紀後半以降と考えられる。

030SD（011SD）　調査区南部に位置する。016SD 同様に当初 011SD が検出され、その後下層部分に該当する 030SD が検出された。国土座標に対して西へ 32°振れて斜行する溝である。検出長は 4.55m で上層（011SD）の幅は 0.65m、下層（030SD）の幅は 1.06m である。底までの深さは 0.22m で、断面形は U 字形である。重複関係から 014SD・016SD に先行するものと考えられる。030SD を南東方向へ延長すると 04F 区の SD68 に該当する。出土遺物は 8 世紀後葉とみられる須恵器の他に灰釉陶器片も含まれ、時期も 9 世紀以降へ下る。

018SD　調査区中央に位置する。ほぼ東西方向に延びる溝である。調査区内での検出長は 2.57m である。断面形状は逆台形であり、検出面での幅 2.26m、底面幅 0.78m、深さ 0.64m である。他の遺構との重



1　10YR4/2　灰黄褐色粘質シルト。　7.5YR5/8鉄分含む。
　　5mm大の中礫少し含む。
2　7.5YR4/2　暗灰黄色シルト。　（極細粒砂混じり）
　　7.5YR5/8鉄分少し含む。
3　2.5Y4/2　暗灰黄色砂質シルト。　10YR4/6鉄分少し含む。
4　2.5Y5/2　暗灰黄色砂質シルト。　地山。
（記録者　永井・角上）

1　2.5Y4/1 黄褐色砂質シルト。鉄分含む（2.5Y5/2ブロック）
　　2.5Y4/2暗灰黄色シルト。
2　10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト。　ブロック（2/5Y4/2 暗灰黄色シルト）
　　鉄分含む（2.5Y5/2）
3　10YR5/2 灰黄褐色極細粒砂　鉄分含む。（2.5Y5/2）（ベース）

1　10YR2/2 黒褐色砂質シルト
2　5Y3/1　オリーブ黒色砂質シルト。　5Y6/1灰色砂質シルトブロック。鉄分含む。
　　10YR4/2　灰黄褐色炭化ブロック含む。
（記録者　永井・角上）

1　7.5YR3/1 黒褐色砂質シルト　（ブロック10YR5/4にぶい黄褐色極細シルト混入）
2　10YR3/1　黒褐色シルト
3　2.5Y3/1　黒褐色シルト　遺物、炭化物含む。
4　5Y3/1　オリーブ黒色粘質シルト。　遺物含む。
5　2.5Y5/2　暗灰黄色砂質シルト。（ベースまたは地山）ブロック1～2cm大7.5YR3/1
　　黒褐色シルト
（記録者　永井・井上）

1　10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト。　鉄分含む。（2.5Y5/2）炭化物含む。
2　10YR4/1 褐灰色シルト。　鉄分含む。（2.5Y5/2）炭化物含む。
3　2.5Y3/2 黒褐色砂質シルト。　鉄分含む。（2.5Y5/2）炭化物含む。
4　10YR5/2 灰黄褐色極細粒砂。　鉄分含む。（2.5Y5/2）
（記録者　永井・角上）

第 35 図　023SI・028SI 遺構図

複関係はないが、出土遺物から斜行溝に先行する可能性が高い。層位は大別して上層と下層がある。上層は浅く皿状の堆積（調査区西壁の 17・38 層、同東壁の 8・26 層）である。下層はやや崩れた逆台形の堆積であり、調査区西壁で観察したところ、(1) 最初の掘削に伴う堆積（49・50 層）、(2) 上部で両側に広がる掘り返しに伴う堆積（47・48 層）、(3) さらに (2) を掘り返したものである（45･46 層）。これは調査区東壁に対応させると (1) は 31 層、(2) は 30 層、(3) は 27・28・29 層が相当する。上層も含めると 4 時期の変遷が想定される。遺物の大半は上層から出土したが、小片が大半である。内訳は須恵器・灰釉陶器で、須恵器は O-10 号窯期、須恵器は K-14 号窯期～ K-90 号窯期である。注目されるのは、底部外面に「寺」と墨書された須恵器杯があり、下層 (2) とする調査区西壁付近の 47 層相当から出土していることである。この須恵器は器形が判別しにくいが O-10 号窯期～ IG-78 号窯期の無台椀もしくは盤と考えられる。このことから 8 世紀後葉～ 9 世紀前葉の時期に、寺院に関わる施設が溝付近に所在しその区画として当該溝が掘られたものと考えられ、その時期は「寺」墨書土器を若干さかのぼる 8 世紀後半と想定しておきたい。

（3）土坑

023SK　調査区南部で検出された、弥生時代後期の土坑である。その大半は調査区西壁から西側に残存していると思われる。検出部分は東・南辺の一部である。平面形は隅丸正方形と推定され、その形状から調査段階では竪穴建物と認識していたが、調査区西壁での土層観察によると、平らな底面のないレンズ状堆積（54・57・58・59・62 層）が相当することが判明し、遺物も土器片が多数出土することから、廃棄土坑の一種の可能性が考えられる。また、その下部には類似する堆積状況の 072SK（後述）もあり、一連のものである可能性も高く、072SK 埋没後の凹みに廃棄が続けられたものとも考えられる。いずれにせよ検出地点は弥生時代～平安時代の各遺構の重複が最も激しく、平面形にはやや不安定な要素がある。

他の遺構との重複関係では、026SK と遺構・遺物両面から当該遺構が先行するのは確実であるが、028SI（特にその下層）との関係が 026SK によって隠れてしまい判別できていない。遺物は小片なった弥生土器が多数出土している。

026SK　調査区西壁の断面観察の際に検出された、長軸 0.52m、深さ 0.52m の底面が平らな小土坑である。弥生時代の竪穴建物（023SI ほか）との重複関係も埋土の点からも明瞭である。埋土（調査区西壁 48 層）はラミナ状堆積であり、土坑形状も合わせると素掘りの井戸であった可能性が考えられる。出土遺物は底部近くで土師器の屈折脚高杯が正位で出土した。遺物の時期から推測して古墳時代前期と考えられるが、調査区内で当該期に特定できた唯一の遺構でもある。

072SK　調査区南部にて各遺構を調査した最終段階で検出された。調査区西壁での土層断面観察によると、長軸は南北方向で 4.00m、検出面からの最大深 0.40m の椀状の断面形である。調査区西壁の土層観察では、63 ～ 65 層が該当するが、上位の 023SK と位置や堆積状況が大きく違わないことから、一連の遺構である可能性もある。遺物は 023SK や 028SI などの上位遺構ほどではないが多数の弥生土器片が出土している。

（4）竪穴建物

028SI（019SI）（第 35 図）　調査区南部で検出された、弥生時代後期の竪穴建物である。検出部分は東辺全体と南・北辺の一部である。当初は 023SI と呼称して調査していたものであるが、土層断面観察によって 028SI の埋土が上下 2 層に大区分され、その上層を 023SI として認識していたことが判明したため、それまでにおこなった遺物の取り上げ遺構名などを 028SI 上層へと振り替えている。

028SI 上・下層の関係であるが、調査区西壁での観察によると、上層は 52・53 層であるのに対し、下層は 67 層で 026SK との重複部分までしか見出すことができない。つまりこの上・下層を、1 棟の竪穴建物の埋土とその貼床と評価するのは難しいのである。加えて 023SK や 072SK が上・下層の間で形成されている点も合わせると、それぞれが別の竪穴建物埋土である可能性が指摘できる（上層が 019SI）。しかしながら、後述する遺物の出土状況からは上・下層の区分は明瞭ではないという問題があ

る。

平面形は一辺が 4.22m の隅丸正方形と推定される。検出面からの深さは 0.35m で壁溝が南東隅の一部で認められた。調査段階では明瞭な床面を把握することができず、掘り方に達したとみられる時点（028SI 下層）でようやく検出できている。

遺物の大半は、上層やそれに掘り込まれた土坑（調査区壁面でのみ確認）から出土している。東壁に接するようにして、台部を欠損しただけの台付甕（81）が倒位で出土した。他に弥生土器の破片を周辺で 7 点取り上げているが、いずれも出土層位は下層と認識している。ただし台付甕がそうであるように、出土層位が一部上層にも食い込んでいる遺物もいくつかみられ、先述したように上・下層を別の竪穴建物と認識するには困難な事象も伴っている。

（5）その他の遺構

045SX　調査区北端で検出された古代以前の落ち込み地形である。基盤砂層は調査区北西隅へ向かって緩やかに傾斜しており、その上に弥生時代～奈良時代の遺物を包含する土層が堆積している。この地形から推測すると 09B 区の東側が自然堤防の頂部になると考えられ、特に弥生時代の集落はそこを中心に展開していたと推測される。遺物は底部に刻書のある須恵器（695）が出土している。（永井邦仁）

第 7 節　08 C 区の遺構

調査経過と遺構の概要

08C 区は、09A 区と 09B 区の南に位置する V 字状に細長い調査区である。堆積状況は東端部で上位から暗灰黄色粘質土（第 1 層：第 37 図 65 層）、灰黄色粘質土（第 2 層）、灰黄色粘質土（第 3 層：第 37 図 73 層）、灰黄色粘質土（第 4 層：第 37 図 74 層）、暗灰黄色粘質土（第 5 層：第 37 図 75 層）、にぶい黄色粘質土（第 6 層：第 37 図 76 層）、黄灰色粘質土（第 7 層：第 37 図 77 層）、黄灰色粘質土（第 8 層：第 37 図 78 層）の順に堆積していた。各層からわずかに出土した遺物からみて、第 1 層は江戸時代後期以降、第 2 層は平安時代～戦国時代に堆積したと推測され、第 3 層または第 4 層の上面で弥生時代の遺構が検出された。なお、西部では江戸時代を中心とした自然河道 068NR が存在するため、堆積状況が異なっている。

調査は、事業者による道路舗装除去後に表土掘削を行い第 2 層までを除去した。第 3 層上面付近で遺構検出を行い、遺構がかなり重複していることが判明し、上位（第 1 面）と下位（第 2 面）に分けて調査した。部分的に第 3 面相当の遺構も存在する。また、全ての遺構面の調査終了後に、基盤層となる砂層を重機により掘削し、弥生土器を多数採取した。

（2）第 1 面

灰黄色粘質土（第 3 層）などの安定した堆積層は調査区東部に展開しており、大半の遺構はそこで検出された。遺構は竪穴建物 2 棟、溝、土坑などが存在する。

＜竪穴建物＞

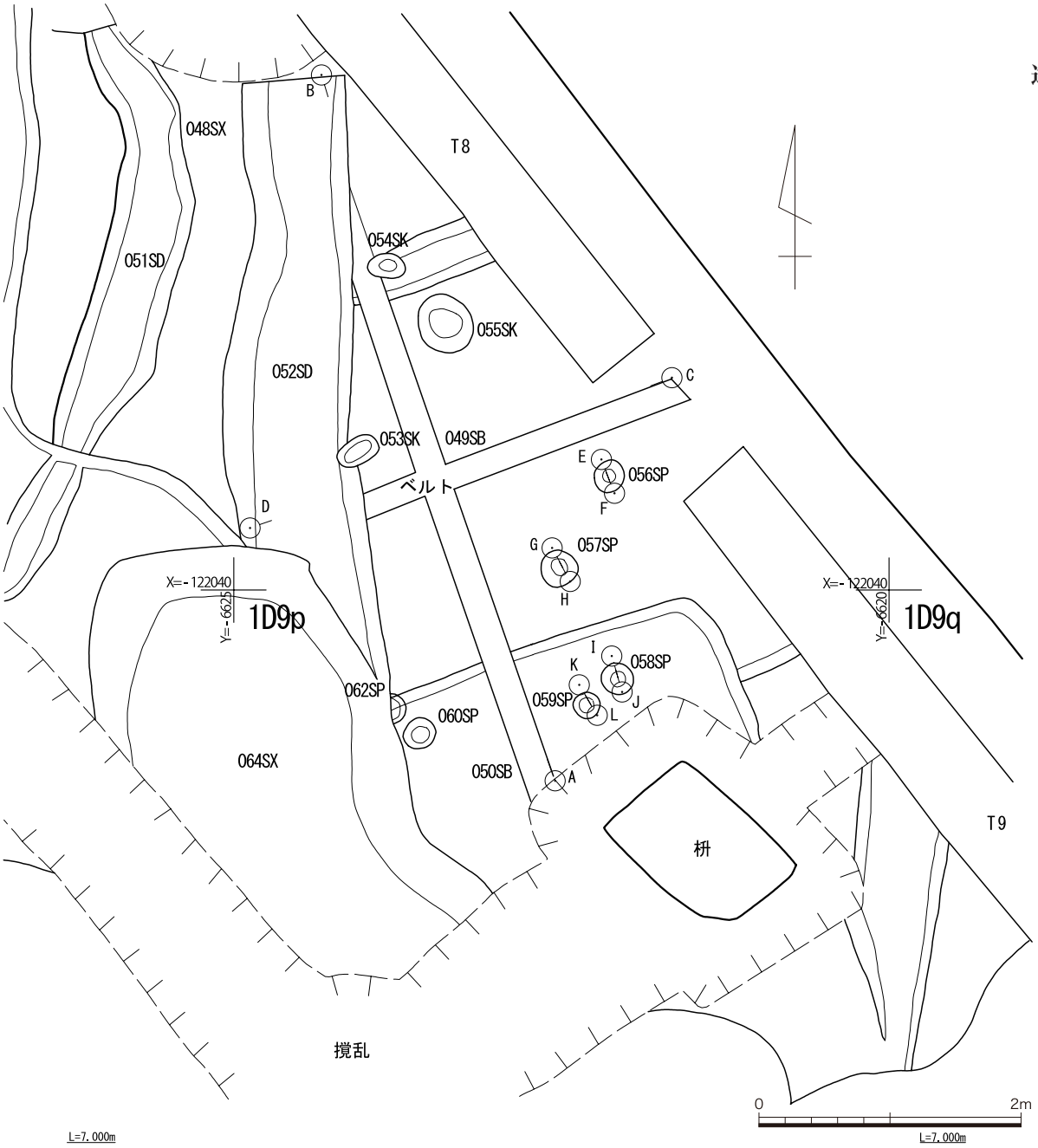
049SB（第 36 図）　北北西―南南東方向で 5.60m 以上×東北東―西南西方向で 3.06m 以上を測る隅丸長方形と思われる竪穴建物である。西部は 052SD に切られ、東部は調査区外に拡がり、南端部は 050SB に切られる。深さ 0.09m を測り、暗灰黄色粘質土を整地して床面が造られていた。北部に周溝になる可能性を持つ溝が存在するが、覆土はその外側にも拡がっており、柱穴と思われる土坑群が多数展開している。その他の火処遺構などの内部施設は検出されていない。覆土から弥生土器片（1 ～ 3）が出土しており、A ― 2 期に属する。

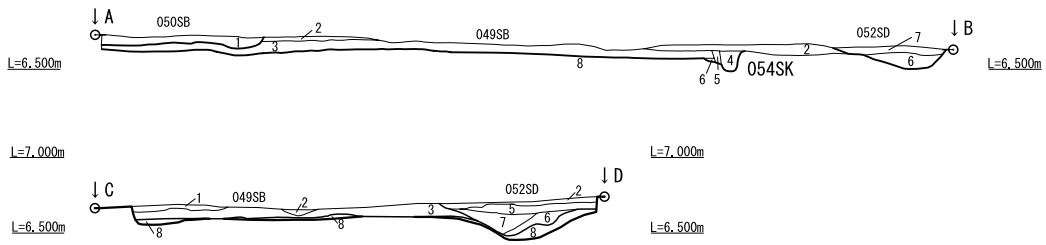
050SB（第 36 図）　北北西―南南東方向で 1.62m 以上×東北東―西南西方向で 2.60m 以上を測る隅丸長方形と思われる竪穴建物である。北隅部のみが検出され、多くの部分は 064SX によって破壊されていた。049SB を切る形で検出され、深さ 0.10m を測る。058SP や 060SP など主柱穴と思われる土坑群が存在しているが、周溝や火処遺構などの内部施設は検出されていない。覆土から弥生土器片（4 ～ 5）が出土しており、A ― 2 期に属する。

＜溝＞

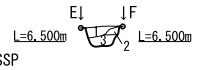
047SD　調査区東部で 049SB よりも西側にて南北に走る溝である。幅 1.20m、深さ 0.08m を測る浅い溝で、竪穴建物が展開する微高地を画するかのような配置で認められた。時期は特定できないが、新しいものと思われる。

051SD　概ね南北に蛇行して走る幅 0.36m、深さ 0.10m を測る溝である。時期は不明。



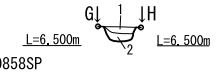


1　2.5Y4/2 暗灰黄色粘質土　酸化鉄分が約5%混在。粘性ややあり、しまりふつう。
2　2.5Y5/2 暗灰黄色粘質土　酸化鉄分が約3%混在。粘性ややあり、しまりふつう。
3　2.5Y5/1 黄灰色粘質土　酸化鉄分が約3%混在。粘性あり、しまりふつう。
4　2.5Y3/2 黒褐色粘質土　酸化鉄分が約2%混在。粘性あり、しまりふつう。
5　2.5Y5/1 黄灰色粘質土　酸化鉄分が約10%混在。粘性あり、しまりふつう。
6　2.5Y4/1 黄灰色粘質土　酸化鉄分が約1%混在。粘性ややあり、しまりやや弱い。
7　2.5Y4/1 黄灰色粘質土　2.5Y6/2灰黄色粘質土が約20%混入。酸化鉄分が約1%混在。粘性ややあり。しまりやや弱い。
8　2.5Y5/1 黄灰色粘質土　酸化鉄分が約7%混在。粘性あり、しまりふつう。



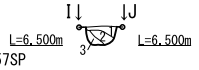
56SSP

1　2.5Y4/2 暗灰黄色粘質土　2.5Y3/1 黒褐色の炭化物（φ2～3mm）が約2%混在。粘性あり、しまりふつう。
2　2.5Y4/2 暗灰黄色粘質土　2.5Y3/1 黒褐色の炭化物（φ1～2mm）が約2%混在。粘性あり、しまりふつう。
3　2.5Y4/3 オリーブ褐色シルト　2.5Y3/1 黒褐色の炭化物（φ1～2mm）が約2%混在。粘性なし、しまり弱い。



0858SP

1　2.5Y4/2 暗灰黄色粘質土　2/5Y3/2黒褐色の炭化物が点在。粘性あり、しまりふつう。
2　2.5Y4/2 暗灰黄色粘質土　2.5Y3/1黒褐色の炭化物（φ5～10mm）が約3%混在。粘性ややあり。しまりふつう。



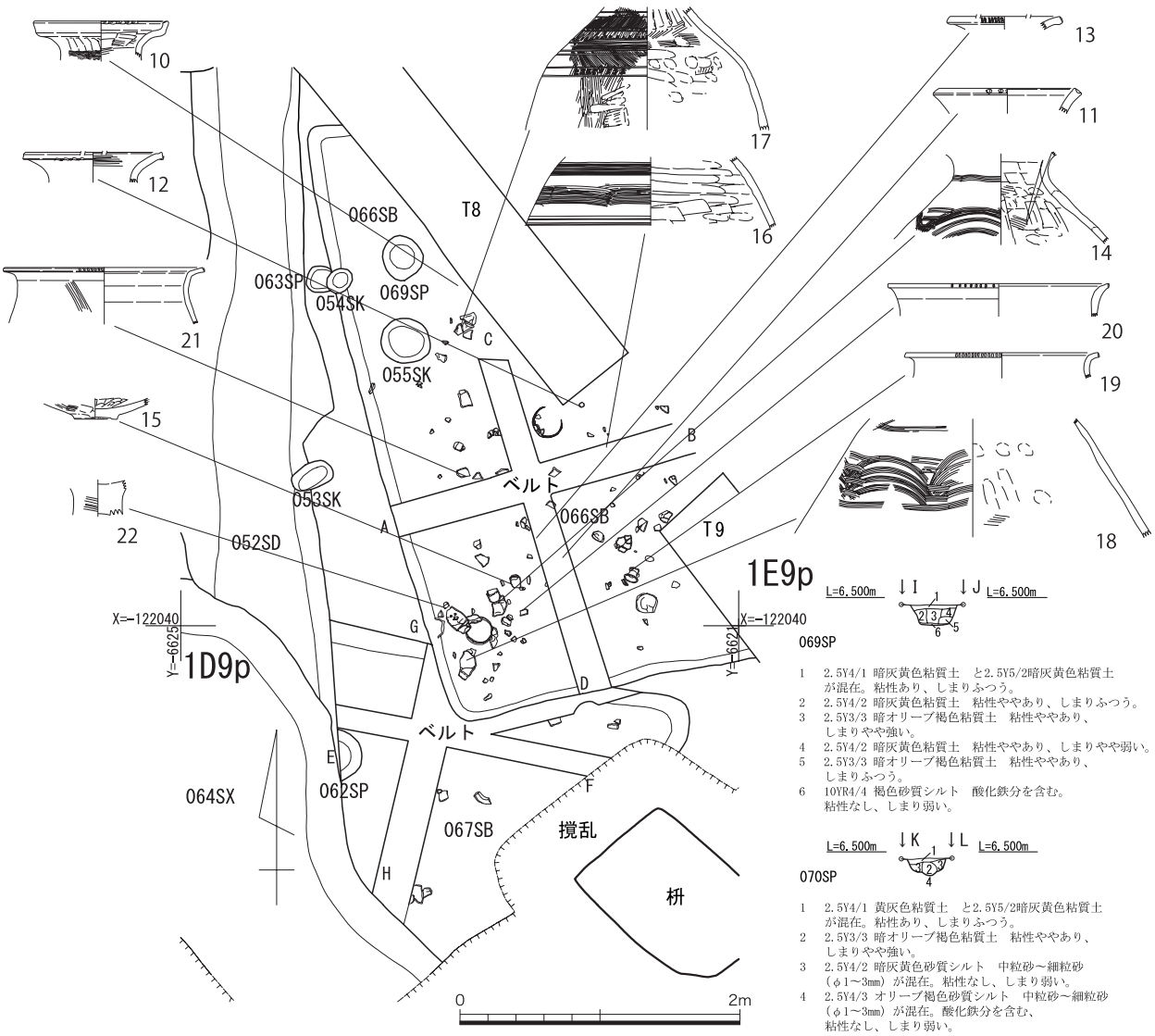
057SP

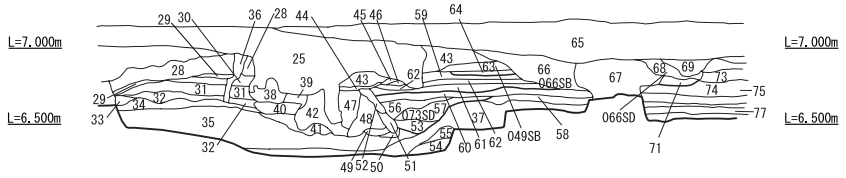
1　2.5Y4/2 暗灰黄色粘質土　2.5Y3/1黒褐色の炭化物（φ2～3mm）が約2%混在。粘性あり、しまりふつう。
2　2.5Y4/2 暗灰黄色粘質土　2.5Y3/1黒褐色の炭化物（φ5mm）が約2%混在。粘性やや強く、しまりふつう。
3　2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト　2.5Y3/1黒褐色の炭化物（φ5～8mm）が約2%混在。粘性なし、しまり弱い。

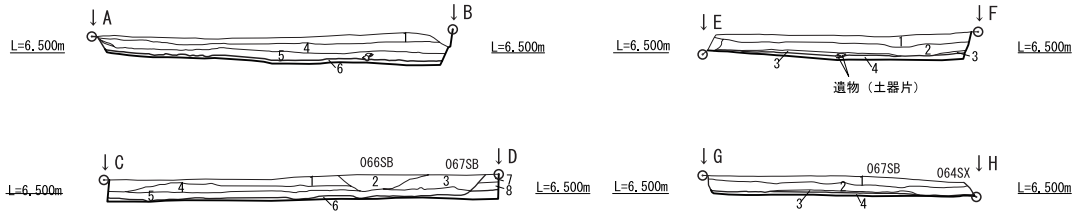
059SP

1　2.5Y3/2 黒褐色粘質土
2.5Y3/2黒褐色粘質土が約25%混合、酸化鉄分が約10%混在、炭化物が点在。粘性あり、しまりふつう。
2　2.5Y4/2 暗灰黄色粘質土
酸化鉄分が約3%混在、炭化物が点在。粘性ややあり、しまりふつう。

第 36 図　049SB・050SB 遺構図







069SP

1　2.5Y4/1 暗灰黄色粘質土　と2.5Y5/2暗灰黄色粘質土が混在。粘性あり、しまりふつう。
2　2.5Y4/2 暗灰黄色粘質土　粘性ややあり、しまりふつう。
3　2.5Y3/3 暗オリーブ褐色粘質土　粘性ややあり、しまりやや強い。
4　2.5Y4/2 暗灰黄色粘質土　粘性ややあり、しまりやや弱い。
5　2.5Y3/3 暗オリーブ褐色粘質土　粘性ややあり、しまりふつう。
6　10YR4/4 褐色砂質シルト　酸化鉄分を含む。粘性なし、しまり弱い。

070SP

1　2.5Y4/1 黄灰色粘質土　と2.5Y5/2暗灰黄色粘質土が混在。粘性あり、しまりふつう。
2　2.5Y3/3 暗オリーブ褐色粘質土　粘性ややあり、しまりやや強い。
3　2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト　中粒砂～細粒砂（φ1～3mm）が混在。粘性なし、しまり弱い。
4　2.5Y4/3 オリーブ褐色砂質シルト　中粒砂～細粒砂（φ1～3mm）が混在。酸化鉄分を含む、粘性なし、しまり弱い。

066SB

1　2.5Y4/2 暗灰黄色粘質土　と5Yオリーブ黒色粘質土の混合。2.5Y3/1黒褐色の炭化物（φ5～15mm）が約5%と酸化鉄分、マンガンが点在。粘性ややあり、しまりふつう。
2　2.5Y3/2 黒褐色粘質土と5Yオリーブ黒色粘質土の混合。2.5Y3/1黒褐色の炭化物（φ5～10mm）が約3%点在。酸化鉄分、マンガン、2.5Y4/1黄灰色シルトが一部混在。粘性ややあり、しまりふつう。
3　2.5Y4/2 暗灰黄色粘質土　2.5Y3/1黒褐色の炭化物（φ5mm）が約2%点在。2.5Y4/1黄灰色シルトが塊状に約5%と酸化鉄分、マンガンが混在。粘性ややあり、しまり弱い。
4　2.5Y3/2 黒褐色粘質土　酸化鉄分が混在。粘性ややあり、しまりふつう。
5　2.5Y4/2 暗灰黄色シルト　酸化鉄分が混在。粘性なし、しまり弱い。
6　2.5Y4/2 暗灰黄色粘質土　粘性なし、しまり弱い。

067SB

1　2.5Y4/2 暗灰黄色粘質土　と5Yオリーブ黒色粘質土の混合。2.5Y3/1黒褐色の炭化物（φ5～15mm）が約5%と酸化鉄分、マンガンが点在。粘性ややあり、しまりふつう。
2　2.5Y3/2 黒褐色粘質土と5Yオリーブ黒色粘質土の混合。2.5Y3/1黒褐色の炭化物（φ5～10mm）が約3%点在。酸化鉄分、マンガン、2.5Y4/1黄灰色シルトが一部混在。粘性ややあり、しまりふつう。
3　2.5Y4/2 暗灰黄色粘質土　2.5Y3/1黒褐色の炭化物（φ5mm）が約2%点在。2.5Y4/1黄灰色シルトが塊状に約5%と酸化鉄分、マンガンが混在。粘性ややあり、しまり弱い。
4　2.5Y3/2 黒褐色粘質土　酸化鉄分が混在。粘性ややあり、しまりふつう。
5　2.5Y4/2 暗灰黄色シルト　酸化鉄分が混在。粘性なし、しまり弱い。
6　2.5Y4/2 暗灰黄色粘質土　粘性なし、しまり弱い。

第 37 図　066SB・067SB 遺構図

052SD　南北に走る幅 2.06m、深さ 0.51m を測る溝である。竪穴建物を切る形で検出され、時期は新しいものと思われる。

＜その他の遺構＞

064SX　東側調査区の南端部に展開する不定形の大型土坑である。出土遺物からみて江戸時代以降と思われる。下部は湧水層まで達するが、その性格は不明。

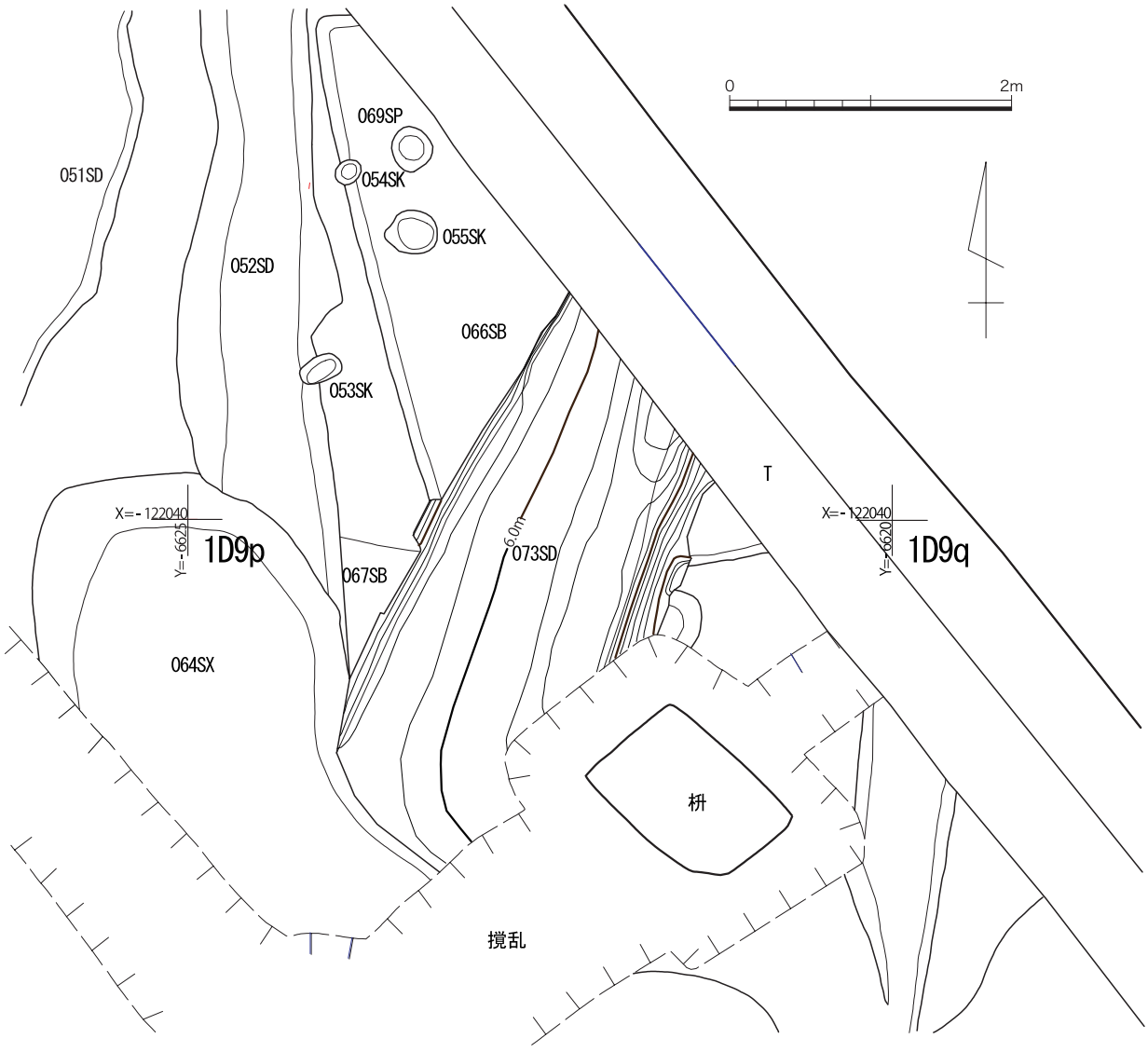
（3）第２面

第１面遺構の下位で検出された遺構群を第２面の遺構として報告する。遺構は竪穴建物２棟、溝、土坑などがある。

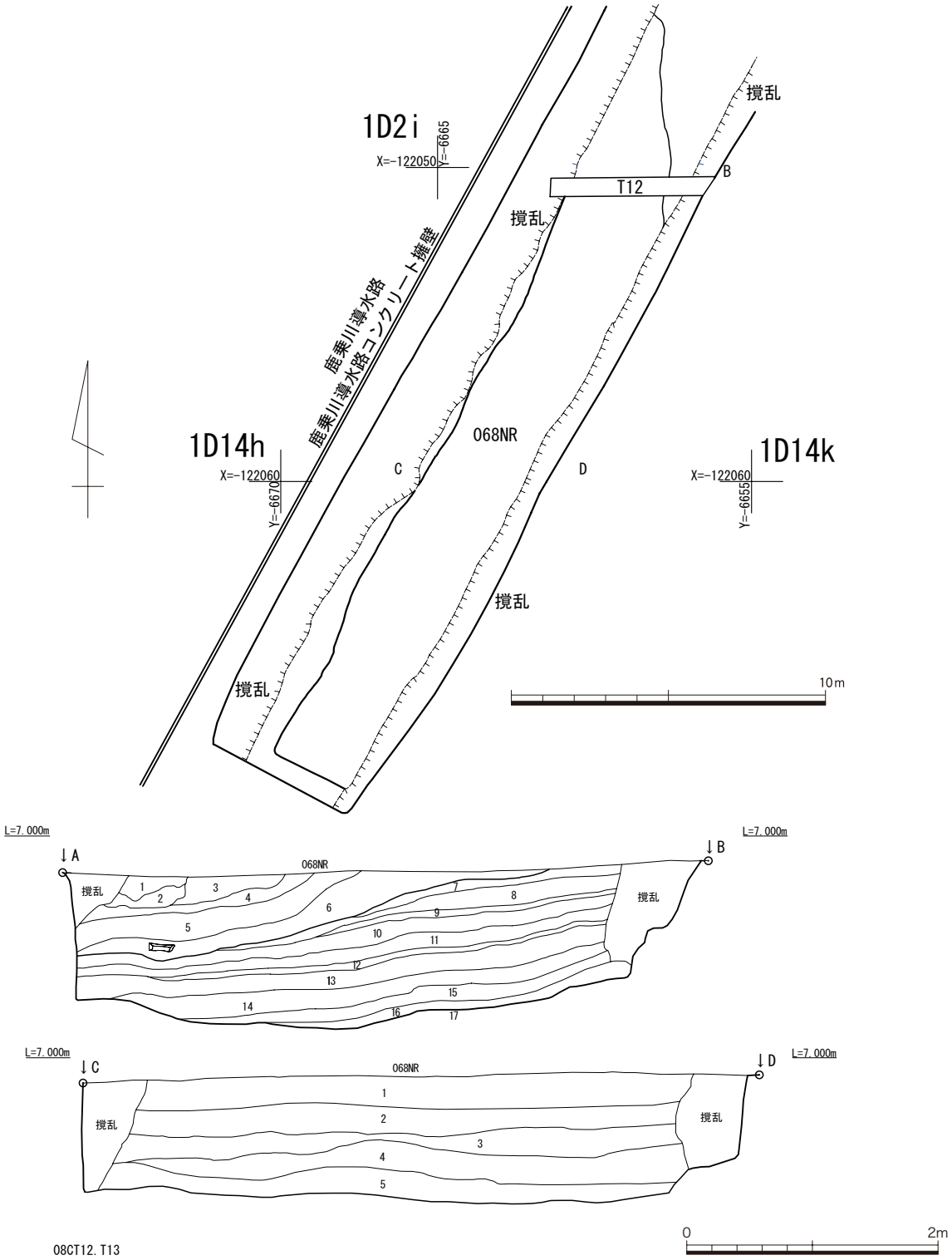
＜竪穴建物＞

066SB（第 37 図）　北北西―南南東方向で 4.38m ×東北東―西南西方向で 2.56m 以上を測る隅丸長方形の竪穴建物である。東部は調査区外に拡がり全形を知り得ない。南部で 067SB を切り、上位に 049SB、下位に 073SD が存在する。深さ 0.16m を測り、暗灰黄色シルトを整地して床面が造られ、主柱穴 069SP・070SP などが検出された。中央部に甕埋設遺構 071SZ、南西隅部に壺埋設遺構 072SZ が存在するが、これらの遺構は 066SB の貼床（整地土）より上部が欠落した状態で出土しており、ここでは 066SB 以前の遺構で 066SB 構築の際に破壊されたものと理解しておく。壁溝や火処遺構などの内部施設は検出されていない。覆土から弥生土器片（10 ～ 22）が出土しており、A―２期に属する。

066SB（第 37 図）　東西 1.78m 以上×南北 1.75m



第 38 図　073SD 遺構図



08CT12.T13

1　2.5Y4/4 オリーブ褐色砂質シルト　（φ2～3mm）の砂質シルトと粘土塊（φ50～60mm）を約7%含む。粘性なし、しまり弱い。
2　2.5Y7/4 浅黄色砂質シルト　2.5Y4/2暗灰黄色（φ50mm）の粘土塊を約7%含む。粘性なし、しまり弱い。
3　2.5Y6/6 明黄褐色砂質シルト　2.5Y4/2暗灰黄色（φ50mm）の粘土塊を約5%と酸化鉄分を含む。粘性なし、しまり弱い。
4　2.5Y6/4 にぶい黄色砂質シルト　微量の炭化物を含む。粘性なし、しまり弱い。
5　5Y4/3 暗オリーブ色シルト質中粒砂　と10YR5/8黄褐色細粒砂の互層。粘性なし、しまり弱い。

第 39 図　068NR 遺構図

以上を測る隅丸長方形と推測される竪穴建物である。052SD と 064SX に大きく切られ、北東部のみ検出された。066SB に切られ、上位に 050SB、下位に 073SD が存在する。深さ 0.16m を測り、暗灰黄色シルトを整地して床面が造られ、主柱穴 062SP が確認された。壁溝や火処遺構などの内部施設は検出されておらず、覆土から出土した弥生土器片（8・9）からA―2期に属すると考えられる。

＜土坑＞

071SZ　066SB 内部の貼床直下で検出された甕埋設遺構である。直径 0.21m、残存する深さ 0.11m を測る円形土坑全体に弥生土器甕（24）が倒立した状態で埋設されていた。上部は 066SB に破壊されたものとみられる。土器棺墓の可能性も考えられるが、確証を得るには至っていない。

072SZ　066SB 内部の貼床直下で検出された壺埋設遺構である。長径 0.18m、短径 0.11m、残存する深さ 0.17m を測る楕円形土坑全体に弥生土器壺（25）が正立した状態で埋設されていた。上部は 066SB に破壊されたものとみられる。土器棺墓の可能性も考えられるが、確証を得るには至っていない。

＜その他の遺構＞

065SX　調査区北部に所在する不定形土坑である。遺構の時期そのものは新しいものと推測されるが、弥生土器片などが出土した。

068NR（第 39 図）　調査区西部を大きく南流する自然流路で、東岸の斜面のみが検出された。深さは 1.3m 以上を測り，明黄褐色砂質シルトやオリーブ褐色砂質シルトなどが厚く堆積していた。東肩で常滑窯産赤物製品が、調査区西端部で木製品が若干量出土しており、時期はC―3期と思われる。

（4）第3面

第2面遺構の下位で検出された遺構を第3面の遺構として報告する。遺構は溝1条のみである。

073SD（第 38 図）　066SB・067SB の下位で検出された幅 1.75m、検出面からの深さ 0.15m を測る溝である。おおよそ N―20°―E の方位を持ち、南端部で溝幅が増している。調査時点では方形周溝墓の溝を想定して掘削したが、確証を得るには至っていない。内部から弥生土器壺や甕（26 ～ 50）が出土しており、時期はA―2期に属する。（鈴木正貴）

第３章　遺　物

第１節　土器・陶磁器類

（1）A期

08C 区 049SB 出土遺物（第 40 図 1 ～ 3）　弥生土器甕・壺などが出土した。1 は外面ハケ調整された甕で口縁端部下端に棒状工具による連続刺突が認められる。2 は口縁部にイタによる部分刺突が存在する太頸壺、3 は口縁部が緩やかに外反する甕で外面がイタナデ調整される。

08C 区 050SB 出土遺物（第 40 図 4・5）　弥生土器甕などが出土した。4 と 5 は台付甕の脚部でハケ調整が認められる。

08C 区 065SX 出土遺物（第 40 図 6・7）　口縁部にイタによる連続刺突があるハケ調整された弥生土器甕（6・7）などが出土した。

08C 区 067SB 出土遺物（第 40 図 8・9）　8 と 9 は口縁部端面に棒状工具による部分刺突が認められる太頸壺で、9 は口縁部にイタによる部分刺突、頸部に不揃いな工具による直線紋と大きな波状紋が施されており、古井式に属する。

08C 区 066SB 出土遺物（第 40 図 10 ～ 22）　弥生土器甕・壺などが出土した。10 は口縁部上端面に棒状工具による部分刺突が認められる受口状口縁の太頸壺で、頸部に不揃いな工具による波状紋が施される。11 は口縁端面に棒状工具による刺突、12 は口縁部下端にイタによる部分刺突、13 は口縁端面にハケによる連続刺突が施された壺である。14・16 ～ 18 は外面がミガキまたはナデ調整、内面がナデまたはイタナデ調整された太頸壺で、14 と 18 は頸部にクシによる波状紋と体部上半にクシによる横位弧紋の組み合わせ、16 は不揃いな工具による 3 条の直線紋、17 はヘラによる横位直線紋と不揃いな工具による連続刺突や斜線紋が認められる。15 は外面がミガキまたはナデ調整された壺底部である。19 ～ 21 は口縁端面に連続刺突が存在する甕で、20 は口縁部が緩やかに外反し、19 と 21 は口縁部が短く屈曲する。22 は台付甕の脚部である。これらは古井式の古～中段階に位置づけられる一括資料である。

08C 区 051SD 出土遺物（第 41 図 23）　23 は口縁部端面にハケによる連続刺突がある。

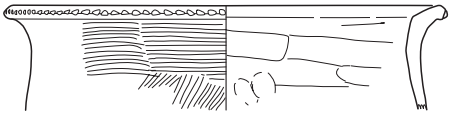
08C 区 071SZ 出土遺物（第 41 図 24）　066SB 床面下部で検出された甕埋設遺構 071SZ に埋設された甕である。口縁部端面下端にハケによる連続刺突があり、頸部以下の外面は斜位または縦位のハケ調整が認められる。

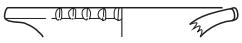
08C 区 072SZ 出土遺物（第 41 図 25）　066SB 床面下部で検出された壺埋設遺構 072SZ に埋設された壺下半部である。外面は体部上位にクシによる直線紋、胴部最大径部分が横位、それより下半が斜位のミガキ調整、内面はナデまたはイタナデ調整が施されている。底部は粘土を継ぎ足して平底に造形される。

08C 区 073SD 出土遺物（第 41 ～ 42 図 26 ～ 50）　弥生土器甕・壺・高杯などが多数出土した。26 ～ 30 は太頸壺で、26 と 27 は受口状口縁を持ち、27 には口縁上端面に棒状工具による部分刺突が認められた。28 はヘラによる連続弧紋と不揃いな工具による縦位波状紋、29 は不揃いな工具による横位波状紋が 5 条、30 は不揃いな工具による横位波状紋と斜位直線紋が施される。31 と 32 は細頸壺である。31 は口縁端面下部に棒状工具による連続刺突紋、頸部に不揃いな工具による短い直線紋、体部上半に同じく横位波状紋 5 条、最大径部から下位はミガキ調整が施される。33 は壺底部、34 は高杯の杯部である。35 ～ 47 は甕口縁部で、短く屈折するように外反するものが多い。体部外面については、36 はハケ調整が明瞭に残り、37 はハケ調整の後にナデ調整？がなされるが、それ以外は不明瞭であるもののイタナデ調整かナデ調整が観察される。内面は斜位のケズリ調整またはハケ調整が認められる。35 は口縁部端面に棒状工具による 2 個刺突が施され、上面に不揃いな工具による波状紋が施される。36 の口縁部にはイタによる部分刺突が、40 と 47 の口縁部には棒状工具による部分刺突が、37・39・41・43 ～ 46 の口縁部にはイタによる連続刺突が認められた。48 ～ 50 は台付甕の脚部で、49 は脚部上位にヘラによる横線が 2 条施される。

09B 区 001SK 出土遺物（第 43 図 51 ～ 58）　太頸壺・細頸壺・台付甕などの弥生土器が存在する。51 は受口状口縁の太頸壺で口縁部上端面に棒状工具によ

049SB

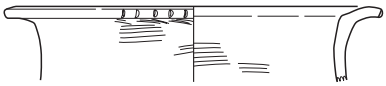


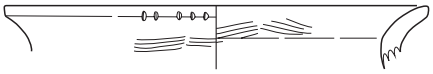


050SB

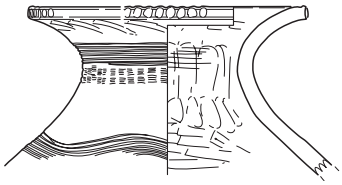
0 10cm

065SX

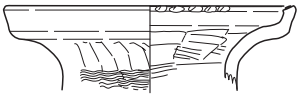


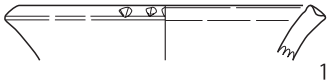


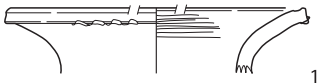
067SB

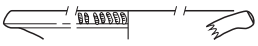


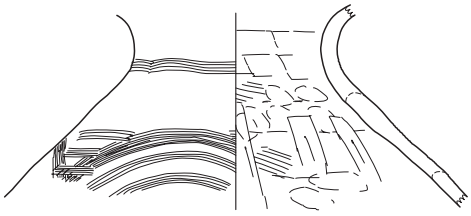
066SB

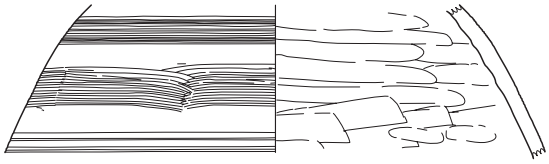


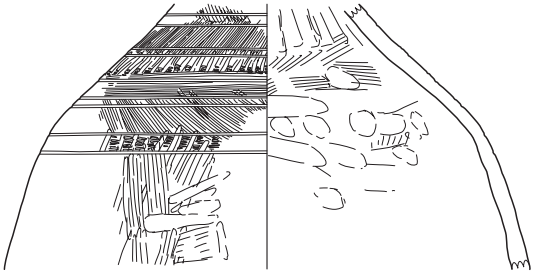


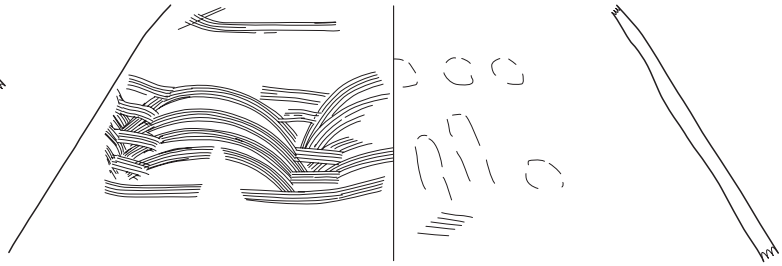


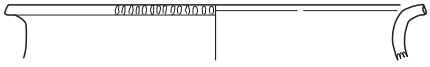


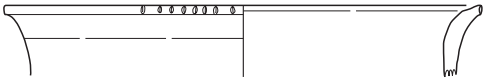


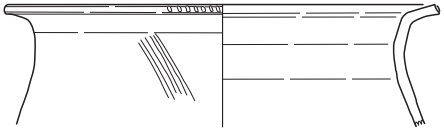


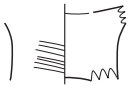








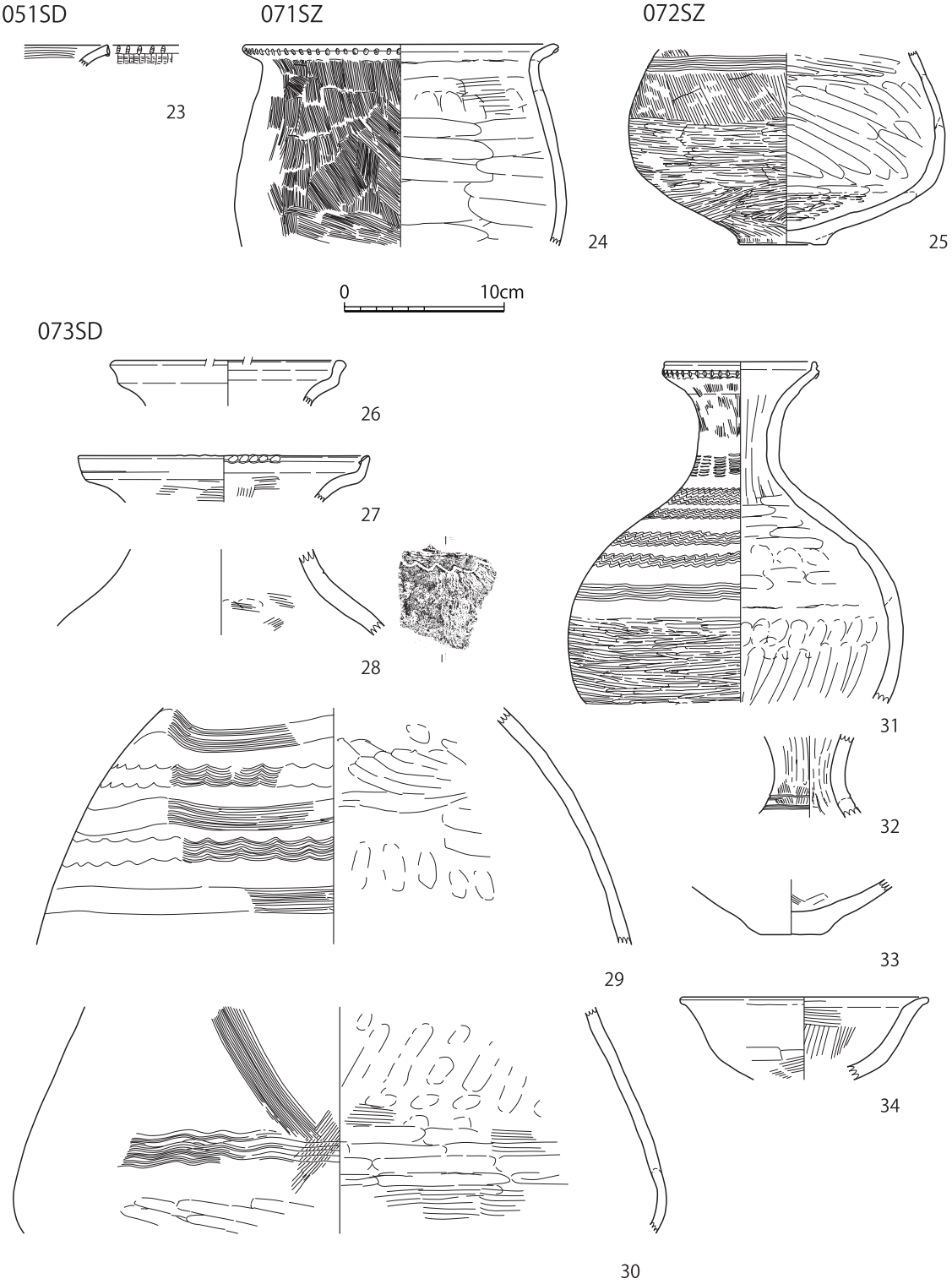




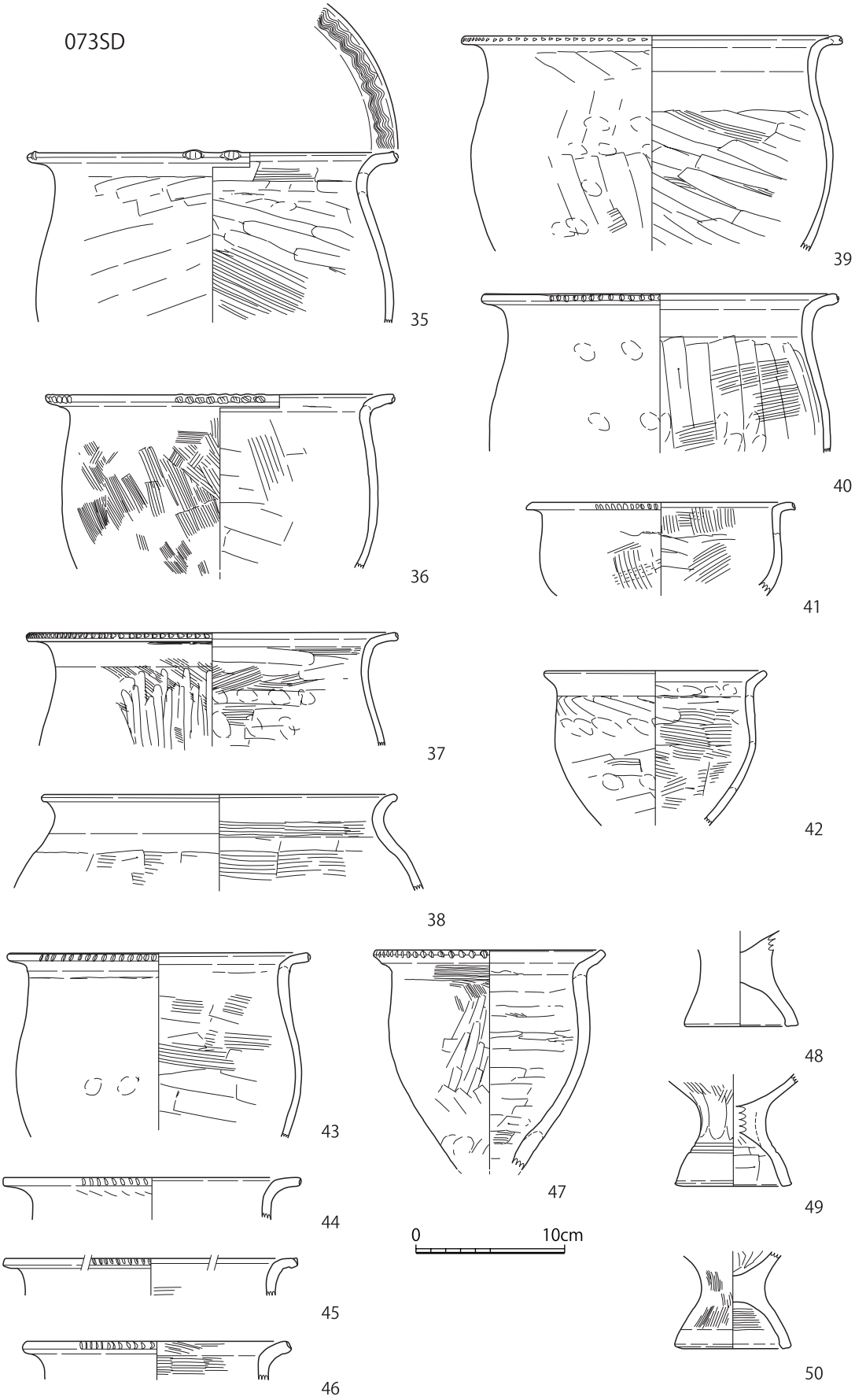
第 40 図　A 期の出土遺物（1）

る部分刺突が認められ、頸部に縦位ヘラ直線紋が施される。52 は緩く外反する口縁部端面に棒状工具による部分刺突が認められる太頸壺で、頸部に直線紋が施される。53 と 57 は凹線紋系細頸壺で、57 は凹線紋の下位にハケ原体による刺突とクシによる横位直線紋が施される。56 は頸部にヘラ波状紋と不揃いな工具による波状紋が施される。54 は台付甕の脚部である。58 は壺下半部の破片を円形に打ち欠いた円盤状製品である。

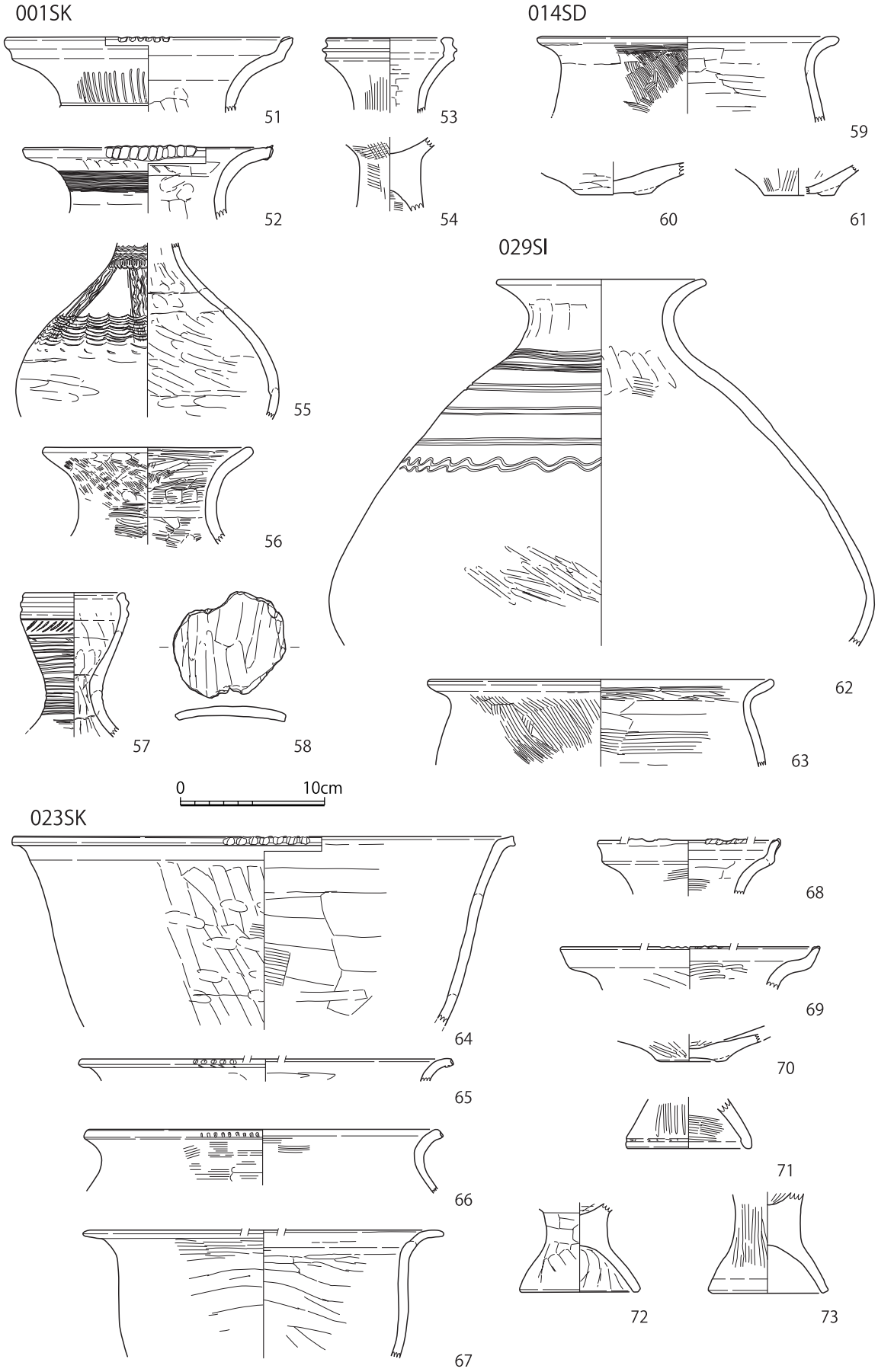
09B 区 014SD 出土遺物（第 43 図 59 ～ 61） 緩やかに屈曲する口縁部で外面にハケ調整された甕口縁部（59）と壺底部（60）と平底甕底部（61）など



第 41 図　A 期の出土遺物（2）



第 42 図　A 期の出土遺物（3）

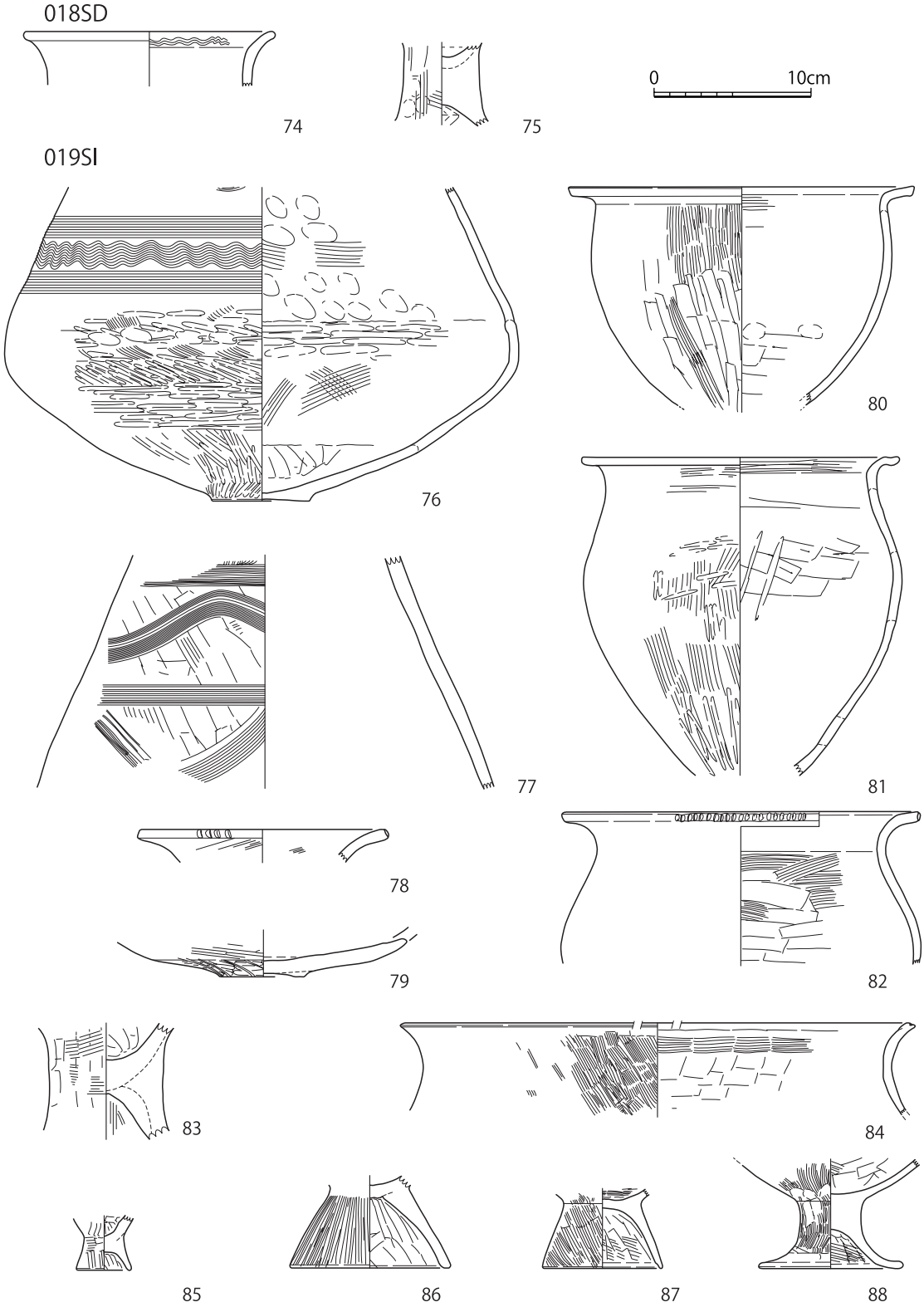


第 43 図　A期の出土遺物（4）

の弥生土器が出土した。60 と 61 は底部脇に粘土を継ぎ足して平底にしている。

09B 区 029SI 出土遺物（第 43 図 62・63） 太頸壺や甕などの弥生土器が存在する。62 は口縁部が逆ハ字状に開く太頸壺で、体部上方にクシによるゆるい波状紋が 2 条と直線紋が 3 条とやや細かい波状紋 1 条が施され、胴部に斜位ミガキ調整がなされる。63 は体部にハケ調整がなされた甕口縁部である。

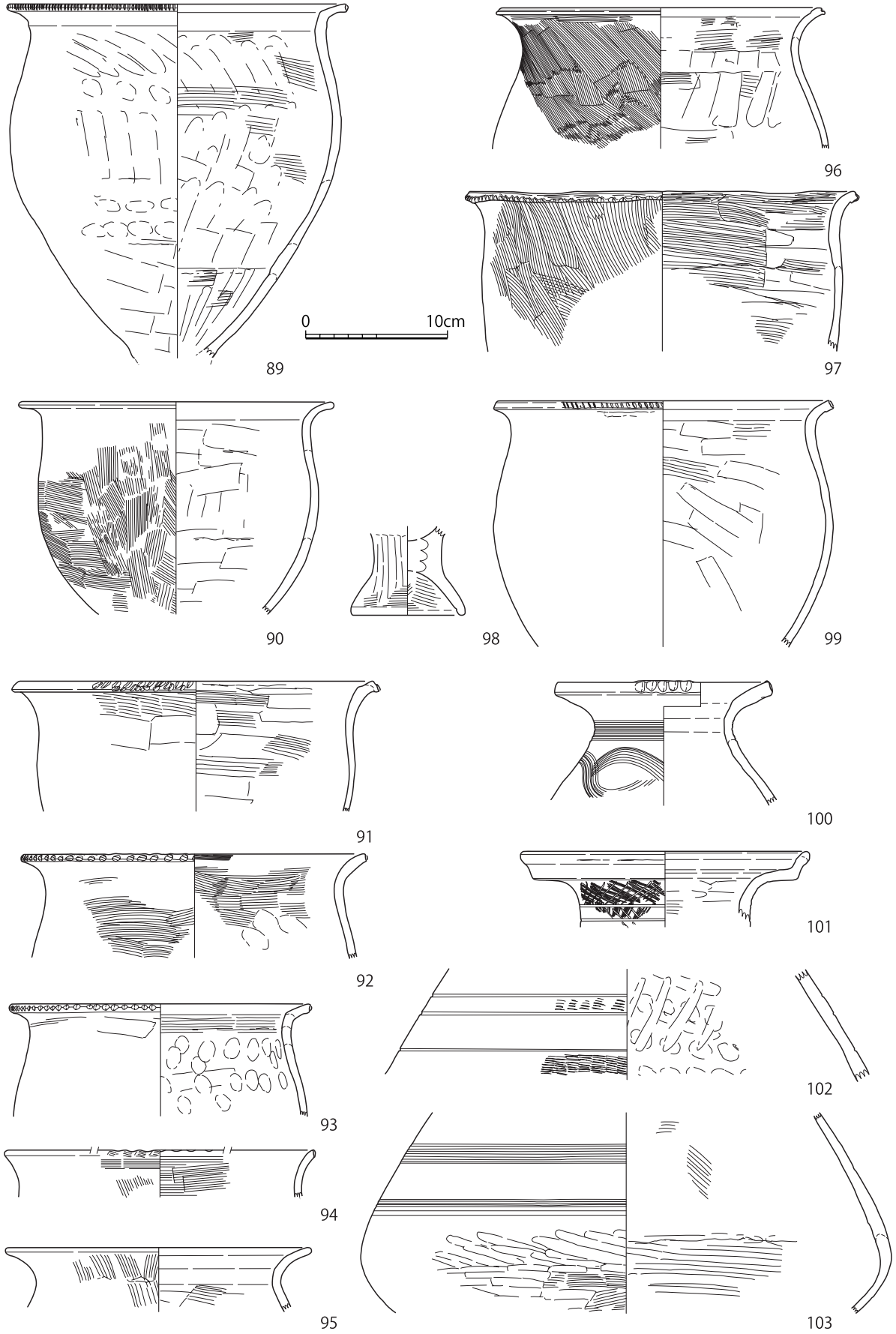
09B 区 023SK 出土遺物（第 43 図 64 ～ 73） 64 と 65 は深鉢状を呈する甕で、64 は口縁部端面に棒



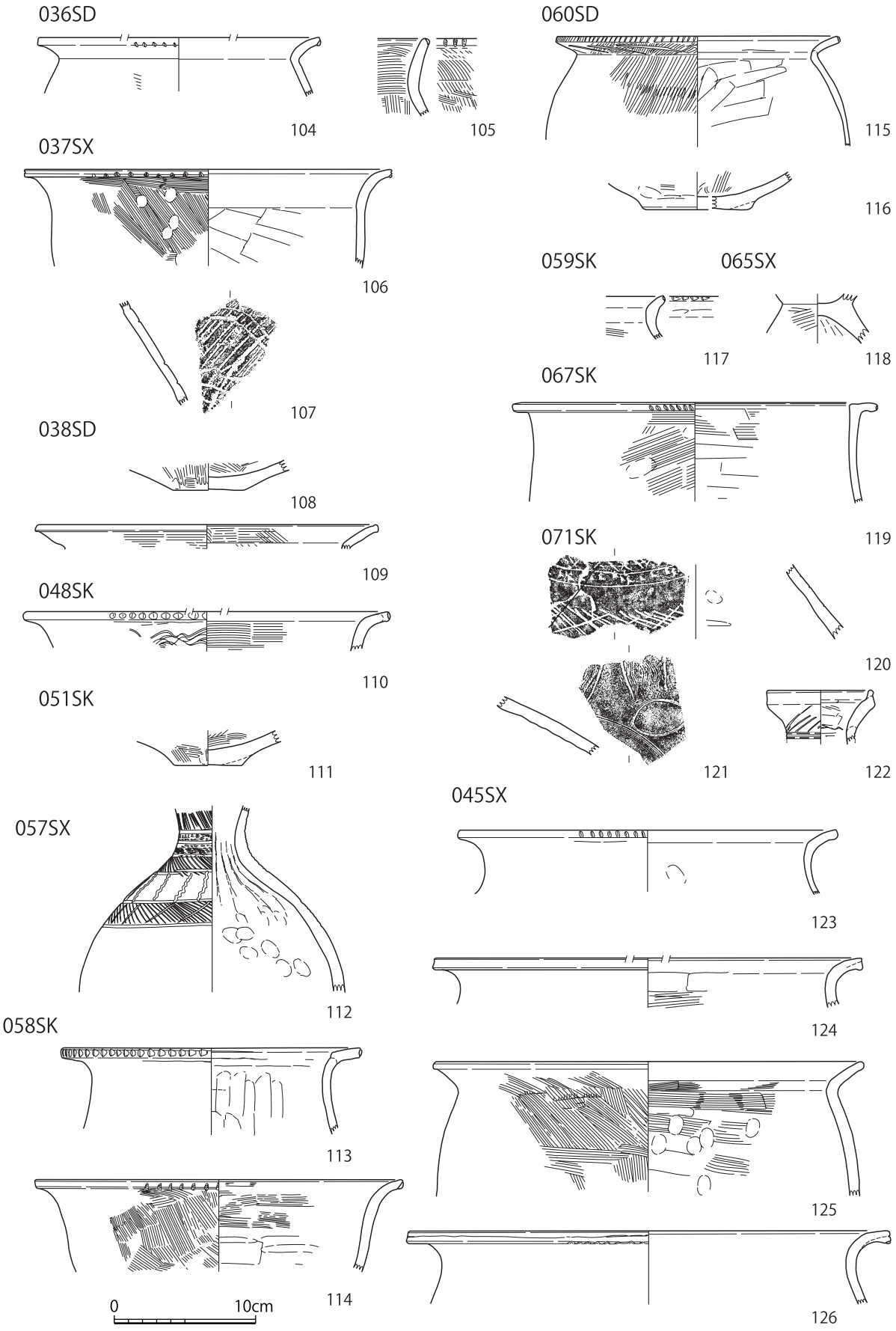
第 44 図　A 期の出土遺物（5）

惣作遺跡

028SI



第 45 図　A 期の出土遺物（6）



第 46 図　A期の出土遺物（7）

状工具による部分刺突が、65 はイタによる部分刺突が存在する。66 はく字状に折れる口縁部端面に部分刺突が認められる。68 と 69 は受口状の口縁部を持つ壺で、68 は上端面にイタによる部分刺突が認められる。70 は壺底部、71 ～ 73 は台付甕の脚部である。これらの弥生土器は概ね古井式古段階に属する資料である。

09B 区 018SD 出土遺物（第 44 図 74・75） 74 は口縁部内面に波状紋が施された甕、75 は台付甕の脚部である。

09B 区 019SI 出土遺物（第 44 図 76 ～ 88） 76 ～ 79 は太頸壺と思われる。76 の外面は体部上方で不揃いな工具による直線紋・細かい波状紋・直線紋が施され、胴部から下半はミガキ調整が施されている。77 は体部上方で直線紋と大きく彎曲する波状紋が２組施されている。78 は口縁部端面に棒状工具による部分刺突が認められる。80 ～ 82 は口縁部が横に広がる甕で、82 は口縁部端面にイタによる連続刺突が認められる。84 は口縁端部に沈線が巡る甕、83 は台付甕の脚部である。これらは弥生時代中期に属するが、85 は小型の台付甕脚部、86 と 87 は台付甕脚部、88 は台付壺の脚部で、それぞれ比較的新しい資料と思われる。

09B 区 028SI 出土遺物（第 45 図 89 ～ 103） 89 ～ 99 は甕で、89・91・93・99 は口縁部端面にイタによる連続刺突が、97 は口縁部端面下端に棒状工具による部分刺突が、92・94 はハケによる連続刺突が施されている。90 と 96 は体部外面に細かいハケ調整がみられ、92 と 97 はやや粗いハケ調整（クシ条痕か）が施される。89 は胴部最大径付近でススが付着し体部下半は表面が脆くなっていた。100 ～ 103 は太頸壺で、100 は口縁部端面に棒状工具による部分刺突が認められる。101 は受口状口縁となり、頸部に不揃いな工具による斜位直線紋とこれに交差するヘラによる直線紋が施されている。102 はヘラによる直線紋で画された間に不揃いな工具による短い直線紋を入れる紋様帯が２段存在する。103 は不揃いな工具による直線紋が２条存在し、胴部から下半はミガキ調整が施されている。概ね古井式に属する一括資料といえる。

09B 区 036SD 出土遺物（第 46 図 104・105） 104 は口縁部がくの字状に屈曲する甕で口縁部端面下端にイタによる連続刺突がある。105 は内外面にハケ調整された甕でハケによる連続刺突がある。

09B 区 037SX 出土遺物（第 46 図 106・107） 106 は深鉢状に口縁部が開く甕で口縁部端面下端にハケによる連続刺突が施されている。107 はクシによる斜位直線紋が交差する壺体部片である。

09B 区 038SD 出土遺物（第 46 図 108・109） 108 は壺底部、109 は口縁部がくの字状に屈曲する甕である。

09B 区 048SK 出土遺物（第 46 図 110） 110 は口縁部端面に棒状工具による刺突がある甕で、外面に不揃いな工具による波状紋が施されている。

09B 区 051SK 出土遺物（第 46 図 111） 111 は弥生土器壺底部片である。

09B 区 057SX 出土遺物（第 46 図 112） 112 は細頸壺の体部片で、ヘラによる沈線で画された外面には上位からクシ状工具による縦位直線紋、同じくクシ連続刺突が２段、同じく斜位直線紋、ヘラによる縦位波状紋、交差する斜位直線紋が順に施されている。

09B 区 058SK 出土遺物（第 46 図 113・114） 113 は口縁部が屈曲する甕で、端面にイタによる連続刺突が認められる。114 は深鉢状の甕で口縁部端面下端にハケによる連続刺突がある。

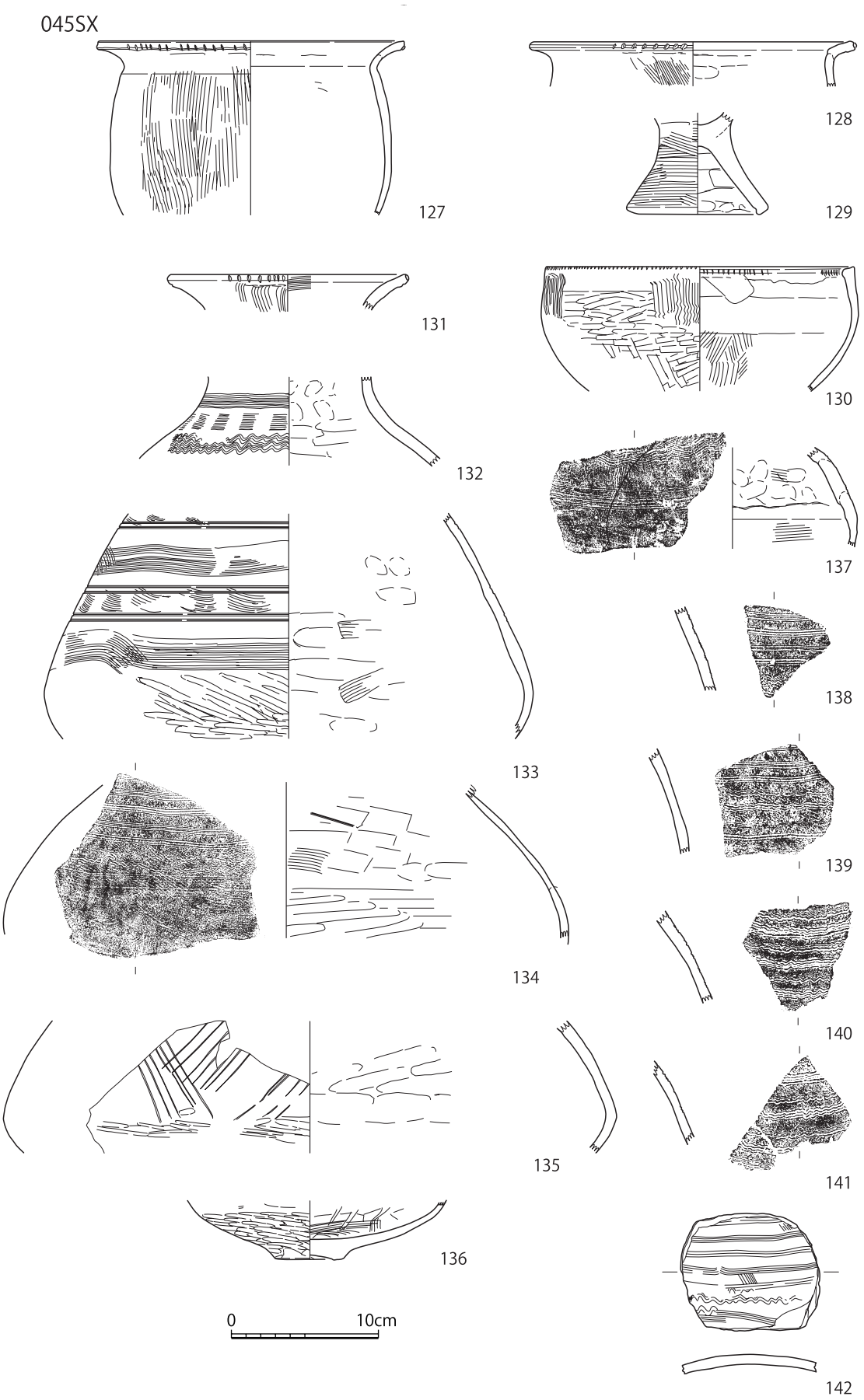
09B 区 060SD 出土遺物（第 46 図 115・116） 115 は口縁部がくの字状に屈曲する甕で口縁部端面にハケ？による連続刺突がある。116 は平底甕の底部片である。

09B 区 059SK 出土遺物（第 46 図 117） 117 は深鉢状の甕で口縁部端面にイタによる連続刺突がある。

09B 区 067SK 出土遺物（第 46 図 119） 119 は口縁部が直角に屈曲する甕で口縁部端面にイタによる連続刺突がある。

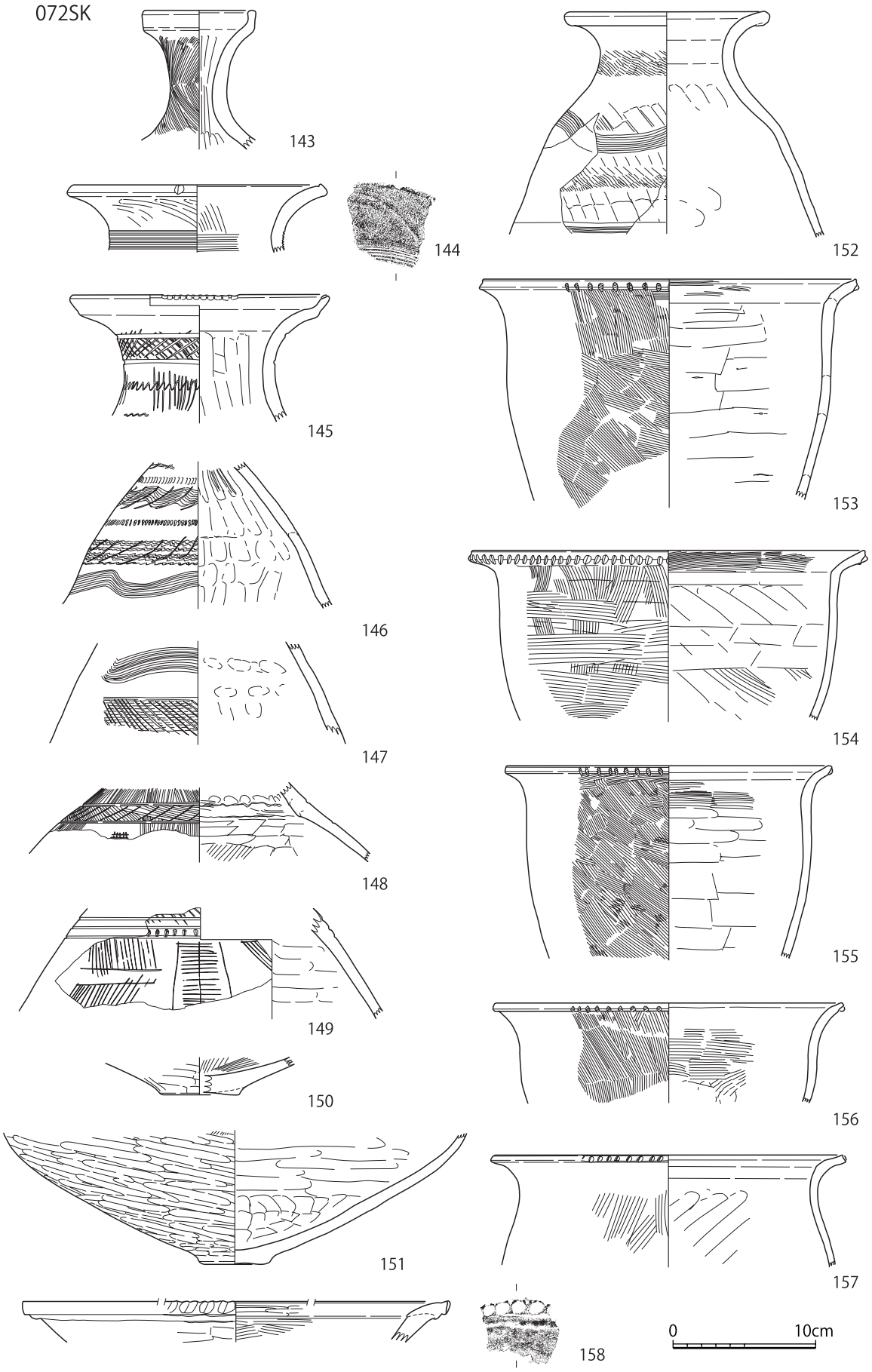
09B 区 071SK 出土遺物（第 46 図 120 ～ 122） 120 と 121 は壺体部片で外面にヘラで紋様が施されている。122 は細頸壺の口縁部で頸部にヘラによる沈線が巡る。

09B 区 045SX 出土遺物（第 46・47 図 123 ～ 142） 123 ～ 129 は甕で 125・127・128 は体部外面にハケ調整が認められる。123 は口縁部端面にイタによる連続刺突が、126 は口縁部下半に粘土が継ぎ

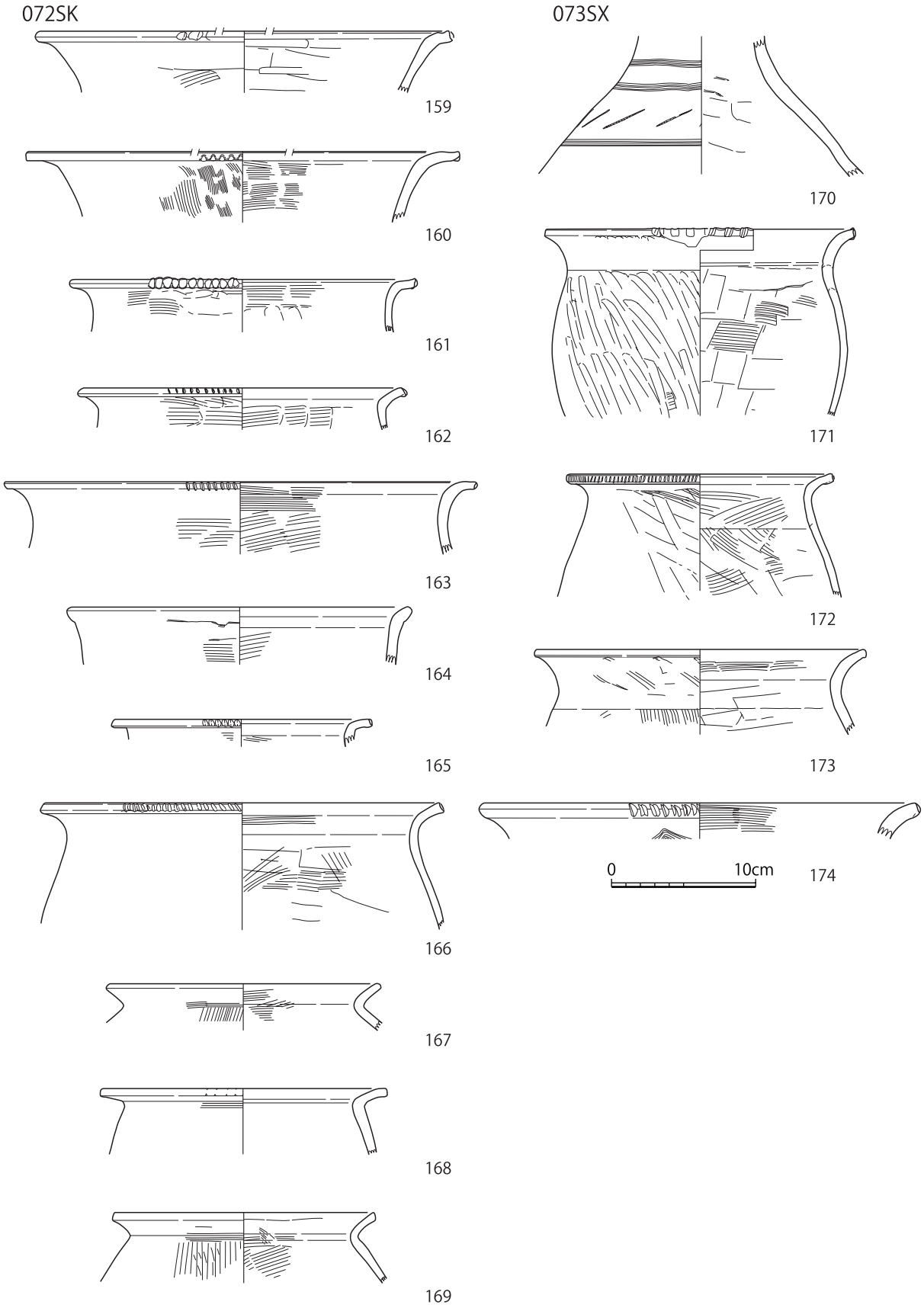


第 47 図　A 期の出土遺物（8）

072SK



第 48 図　A 期の出土遺物（9）



第 49 図　A 期の出土遺物（10）

足された後に端面下端に連続刺突が、127 と 128 は口縁部端面下端にイタによる連続刺突が施される。130 は口縁部が直立する鉢で、肥厚する口縁部端面の内側角部にイタによる連続刺突が施され、粗くミガキ調整された体部上位に不揃いな工具による縦位直線紋が推定 4 単位みられる。131 ～ 135 は太頸壺で、131 は口縁部端面にイタによる連続刺突がある。132 は頸部から体部にかけて上位からクシによる直線紋、短い直線紋、細かい波状紋が順に施されている。133 はヘラによる 2 条の沈線で画された外面に不揃いな工具による短い弧紋、緩い波状紋、短い弧紋、緩い波状紋が順に施され、胴部にはミガキ調整がなされている。134 はクシによる直線紋が数条あり、その下位に波状紋などが認められる。135 はヘラ状工具による斜位の直線紋が施されている。136 は壺底部で、外面にミガキ調整される。137 ～ 142 は壺体部片で、137 は不揃いな工具による直線紋や波状紋が、138 ～ 142 はクシによる波状紋が数条あり、142 は円盤状に打ち欠かれたものである。

09B 区 072SK 出土遺物（第 48・49 図 143 ～ 169）

143 ～ 152 は壺、153 ～ 169 は甕である。

143 は頸部が不揃いな工具による直線紋が羽状に認められる受口形細頸壺である。144 と 145 は太頸壺で、144 は口縁部端面に棒状工具による 1 個刺突がある。145 は受口状口縁部の上端面に棒状工具による部分刺突があり、頸部にヘラ沈線の区画内に斜格子紋が施され、その下位に縦位直線紋とその後にヘラによる波状紋がみられる。146 は不揃いな工具による波状紋の上にヘラによる斜線紋が重なり、その間に二枚貝（ハイガイか）による連続刺突、下部に不揃いな工具による波状紋が巡る。147 は不揃いな工具による波状紋がみられ、下部には横位直線紋と斜線紋が交差する紋様帯が巡る。148 はヘラによる直線紋 2 条により画された内部に斜線紋が交差する紋様帯が認められる。その下部は縦位直線紋で区画された部分に格子状紋がみられる。149 は上位にヘラ沈線と棒状工具による連続刺突が、下位にヘラによる直線紋を組み合わせた紋様が認められる。150・151 は壺底部で外面にミガキ調整が観察される。152 は肩部がやや角張った形状の太頸壺で、頸部に不揃いな工具による短い斜線紋が、体部に同じく波状紋と短い斜線紋と横位直線紋がみられる。

甕は深鉢形で口縁部がやや折れるもの（153・154・158）、深鉢形で口縁部が短く折れるもの（164）、深鉢形で口縁部が緩やかに外反するもの（155・156・159・160）、甕形で口縁部が彎曲するもの（157・161・163）、甕形で口縁部が短く折れるもの（162・165）、甕形で口縁部が長く折れるもの（166 ～ 169）に区分できる。153・155・156 は口縁部端面下端にハケによる連続刺突が、154・160 は口縁部端面下端にイタによる連続刺突が、157・159・162・163・166 は口縁部端面にイタによる連続刺突が、158・161・165 は口縁部端面に棒状工具による連続刺突が、168 は口縁部端面上下端部に非常に細かい連続刺突が施されている。調整は内外面ともハケ調整を基本とし、部分的にイタナデ調整が認められる。167 ～ 169 は比較的新しいか。

09B 区 073SK 出土遺物（第 49 図 170 ～ 174）

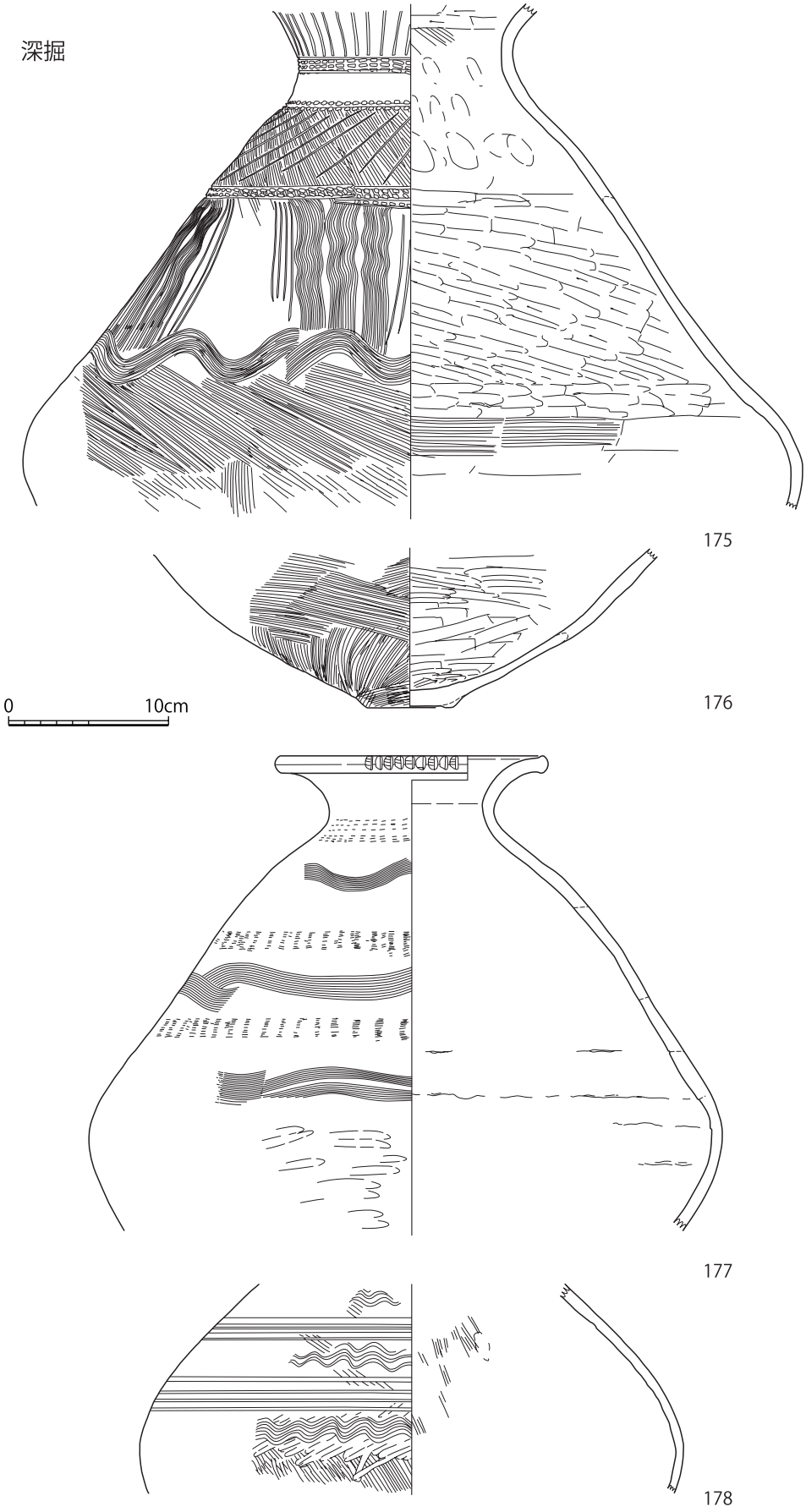
170 はクシによる直線紋とヘラによる斜位の連続刺突が存在する太頸壺である。171 ～ 174 は甕の口縁部で、171 と 172 は外面にイタナデ調整が施される。171 の口縁部端面に棒状工具による部分刺突が、172 と 174 の口縁部端面にイタによる連続刺突がみられる。

深掘調査の出土遺物（第 50 ～ 56 図 175 ～ 294）

ここでは各調査区で最終遺構面の調査を終えた後に基盤層である砂層を掘削した際に出土した資料を紹介する。この砂層は河川性堆積物の一部であり、概ね 04D 区で検出された自然河道 SD59 に相当するものと理解される。弥生時代中期の土器が多く含まれているが、遺物採取の状態が良好ではないため上位の遺物が混入してしまっているものも認められる。175 ～ 255・292・293 は 2008 年度調査区の深掘調査、256 ～ 291・294 は 2009 年度調査区の深掘調査で出土した資料である。

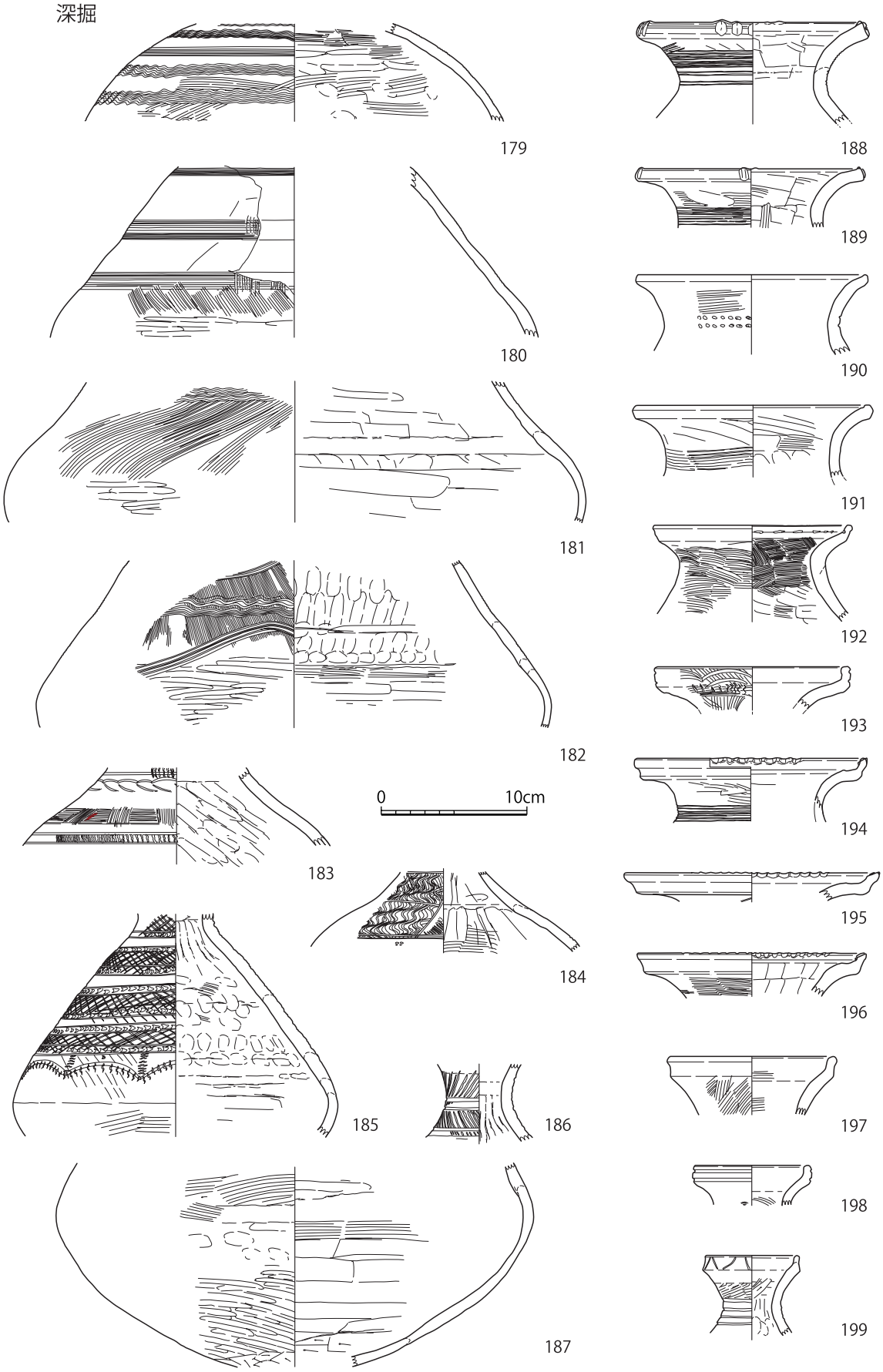
175 ～ 212 と 220 ～ 230 は 2008 年度調査の壺、213 ～ 219 と 231 ～ 253 は 2008 年度調査の甕、254・255 は鉢である。

292 は口縁部上端面に棒状工具による部分刺突がある太頸壺である。頸部に不揃いな工具による連続



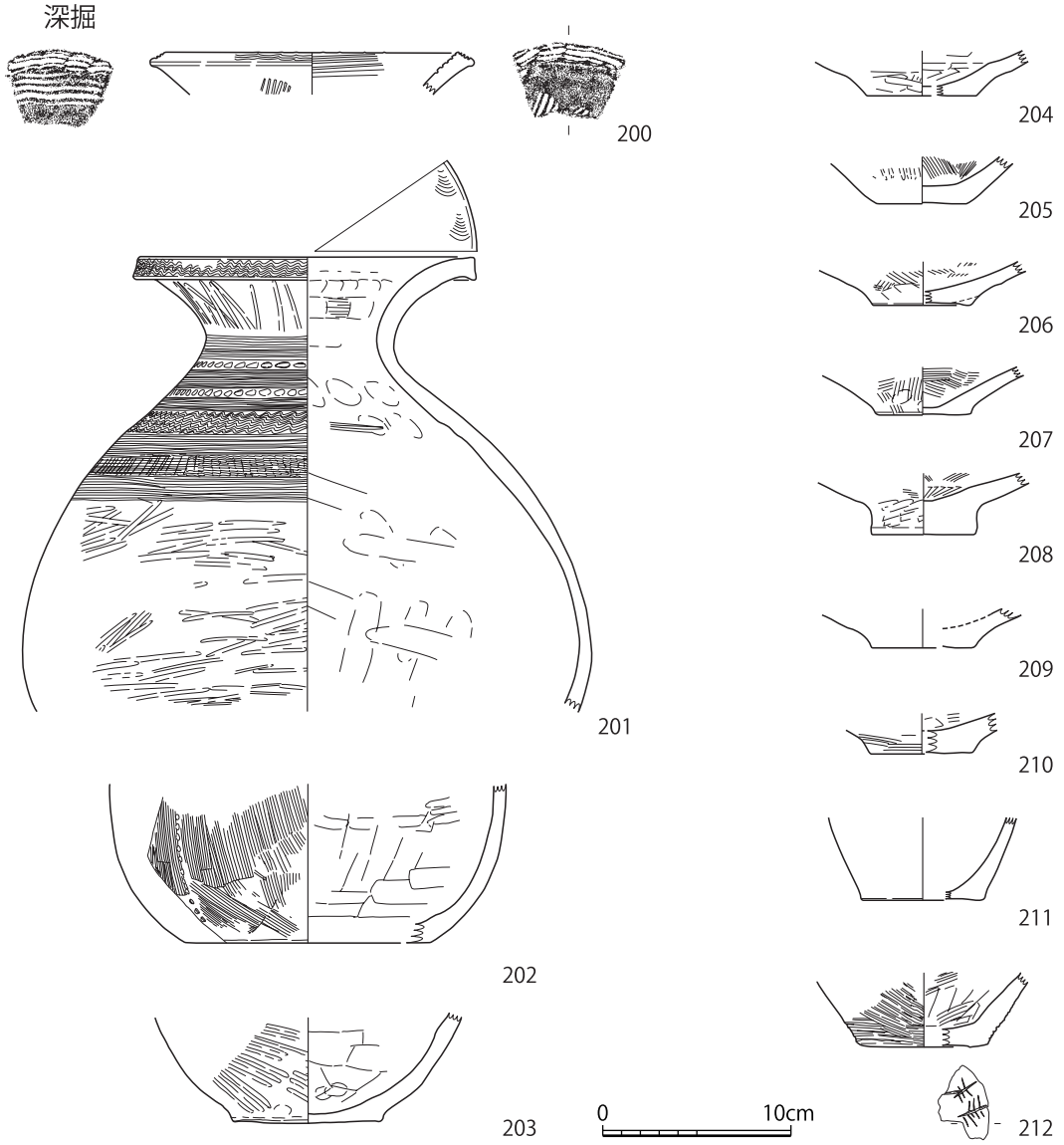
第 50 図　A 期の出土遺物（11）

深掘



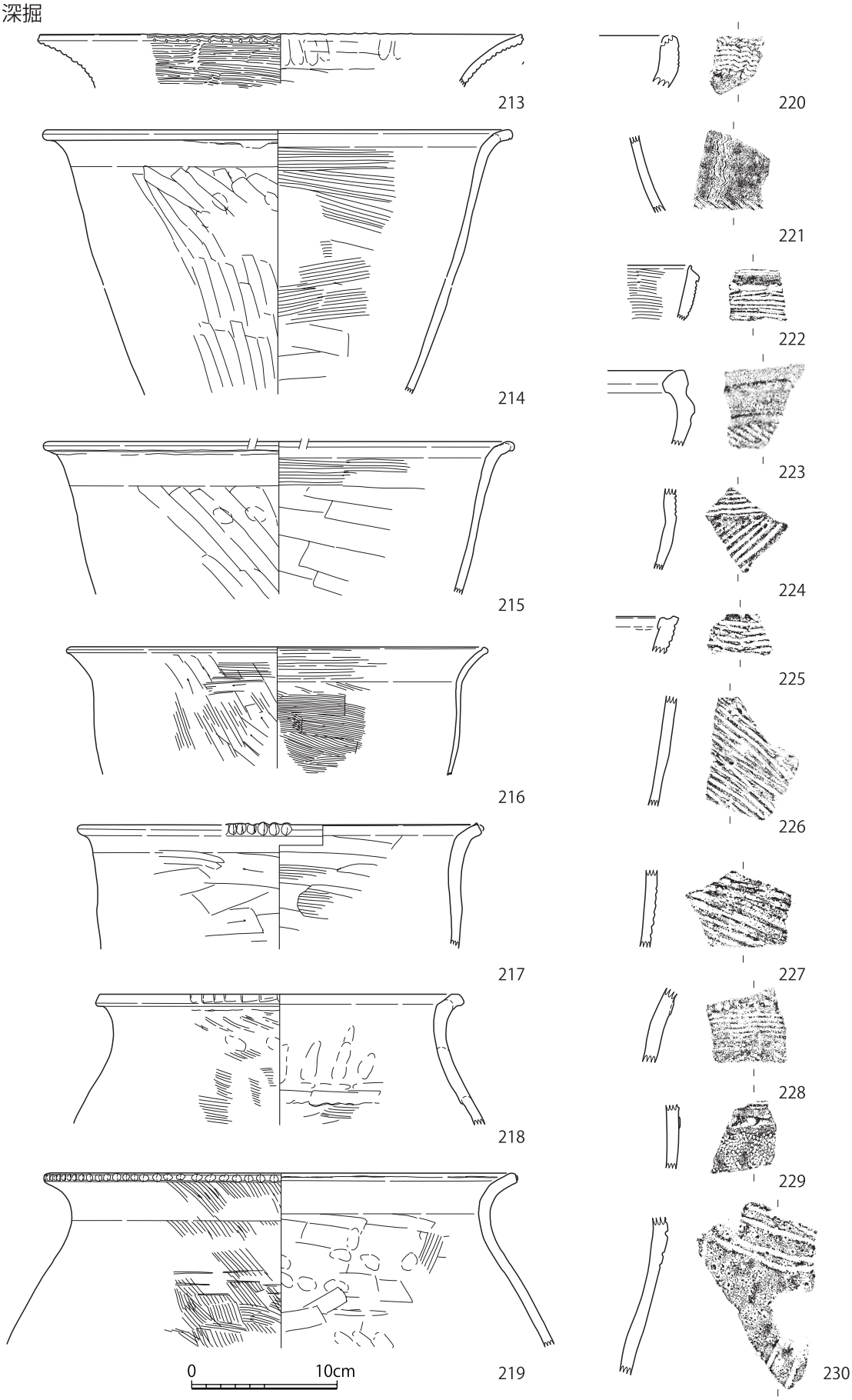
第 51 図　A期の出土遺物（12）

刺突と３条の緩い波状紋が巡る。293 は口縁部が欠ける太頸壺だが、体部上半に不揃いな工具による４条の緩い波状紋が巡り、その間にはハケ状の調整痕が残る。175 は肩がわずかに張る太頸壺である。頸部にはクシによる縦位直線紋と横位直線紋で区画された部分に二枚貝による連続刺突が巡る紋様帯がある。体部は、直線紋で区画された内部に不揃いな工具による斜線紋と交差するクシによる斜線紋、直下に二枚貝による連続刺突、クシによる縦位直線紋数状により画された内部に不揃いな工具による緩い縦位波状紋が３条、不揃いな工具による大きな横位波状紋、不揃いな工具による斜線紋の順に紋様が施されている。176 は外面にクシによる条痕が認められる壺底部で、175 と同一個体の可能性もある。瓜郷式に属するか。177 は口縁部端面にイタによる部分刺突（９個）がある太頸壺で、体部に不揃いな工具による非常に短い連続直線紋と同じく緩い波状紋の組み合わせが３段施されている。178 はクシによる直線紋と細かい波状紋の組み合わせが２段あり、胴部にハケ調整およびミガキ調整が交差する太頸壺である。179 はクシによる横位の直線紋と細かい波状紋が、180 は不揃いな工具による直線紋と短い連続斜線紋が、181 は不揃いな工具による細かい波状紋と長い連続斜線紋が、182 は不揃いな工具による斜線紋の上に細かい波状紋や大きな波状紋を重ねる紋様帯が施される。183 は不揃いな工具による横位直



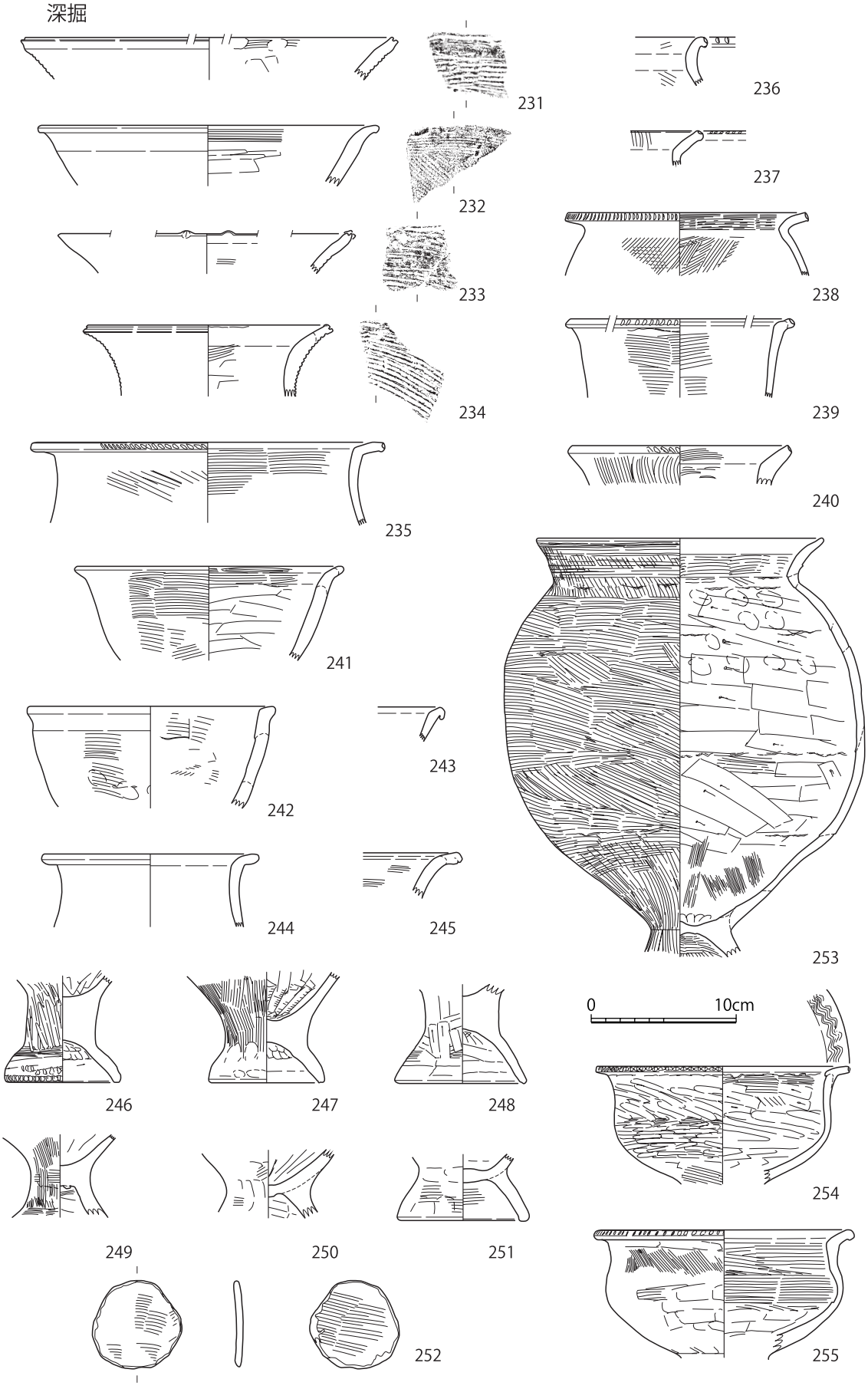
第 52 図　Ａ期の出土遺物（13）

深掘



第 53 図　A 期の出土遺物（14）

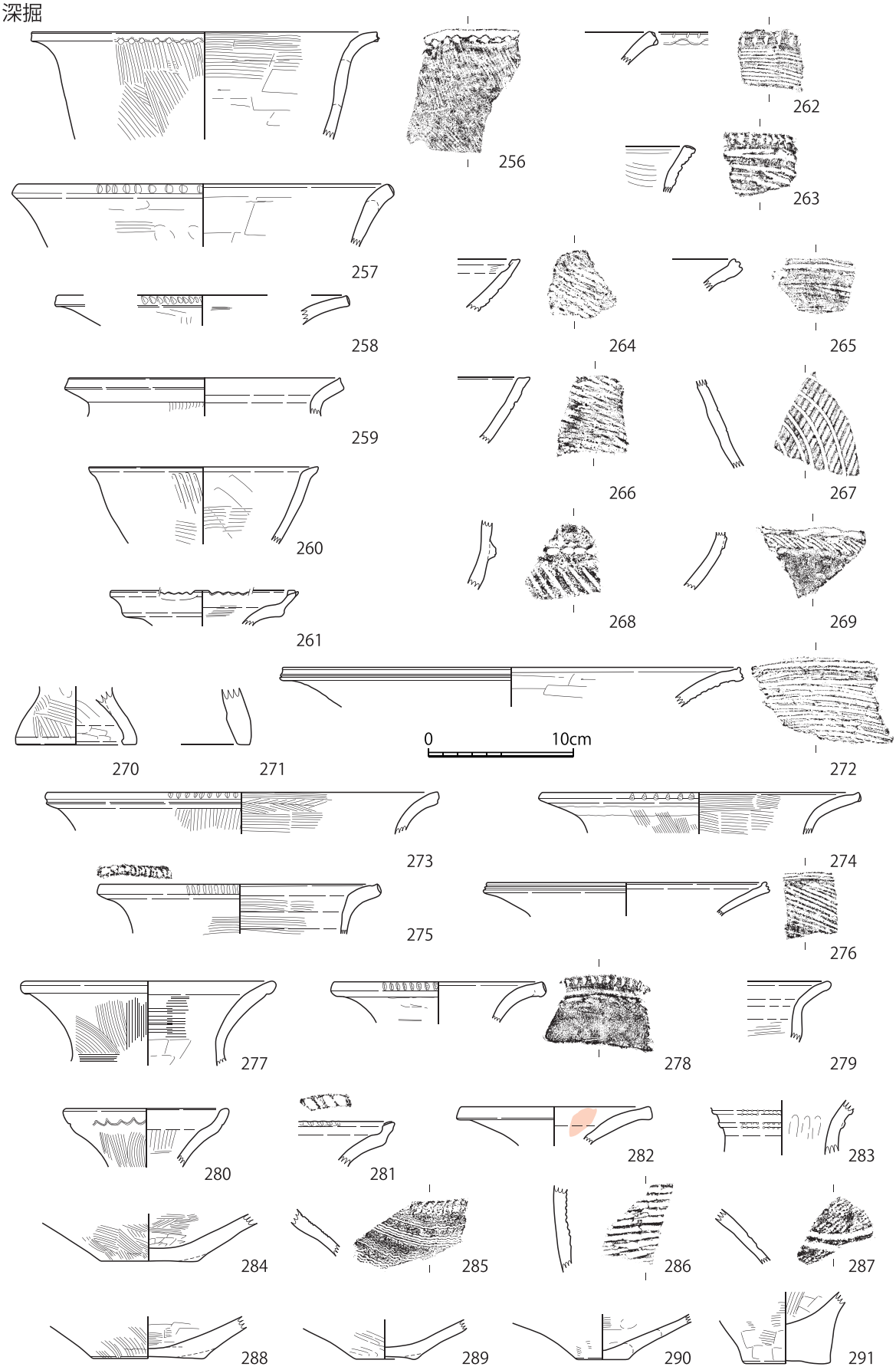
深掘



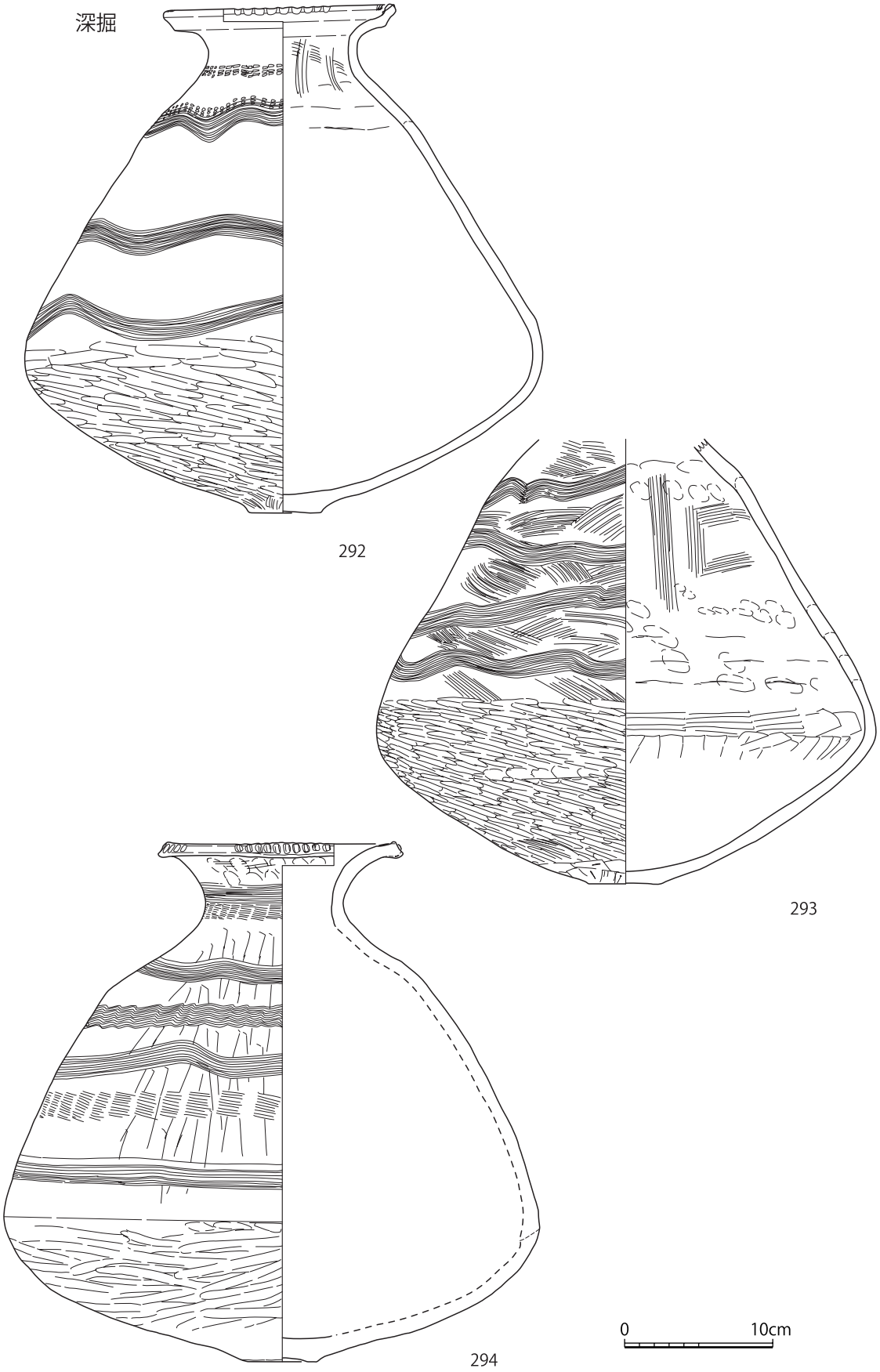
第 54 図　A期の出土遺物（15）

惣作遺跡

深掘

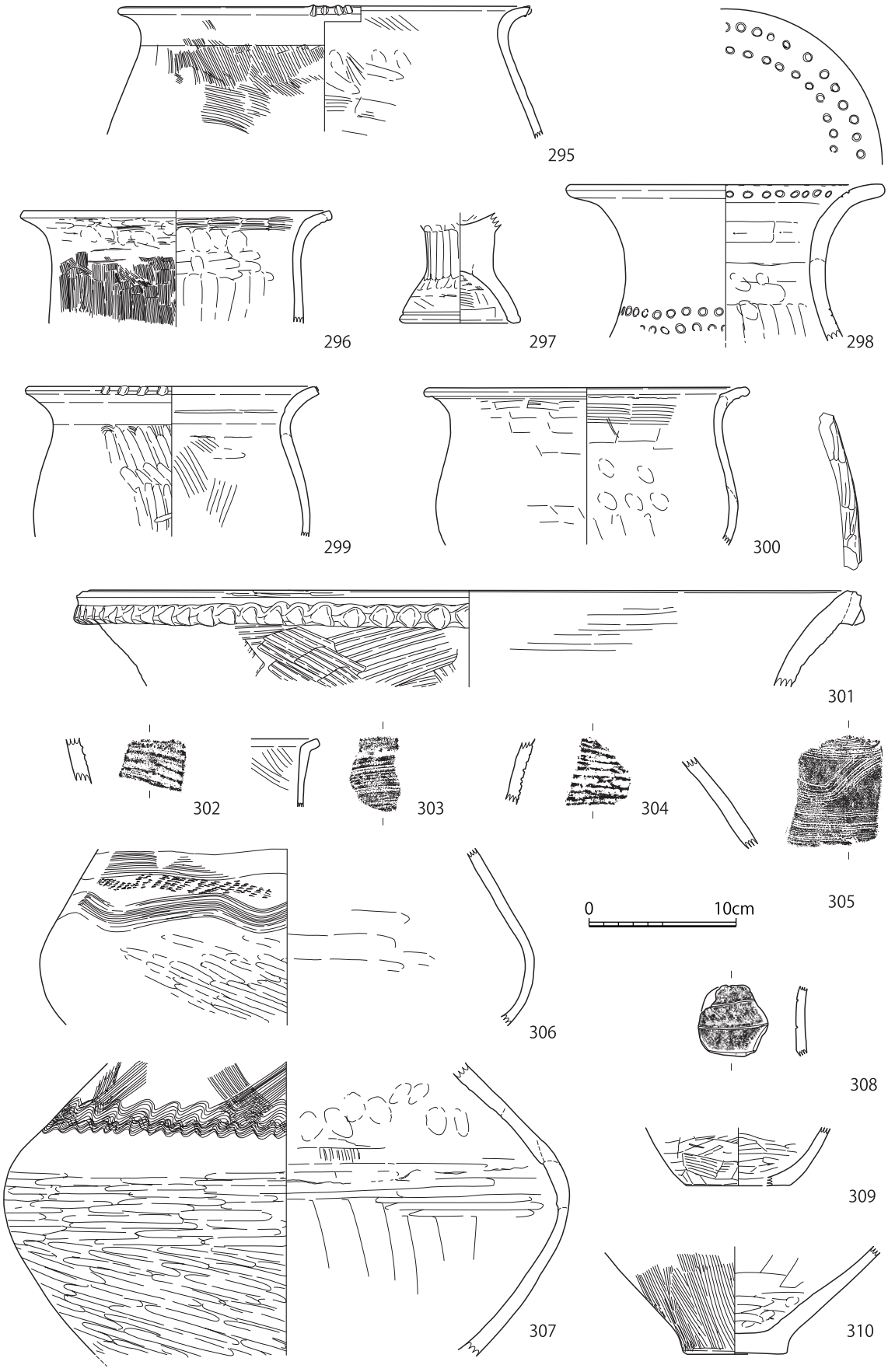


第 55 図　A 期の出土遺物（16）



第 56 図　A 期の出土遺物（17）

検出



第 57 図　A期の出土遺物（18）

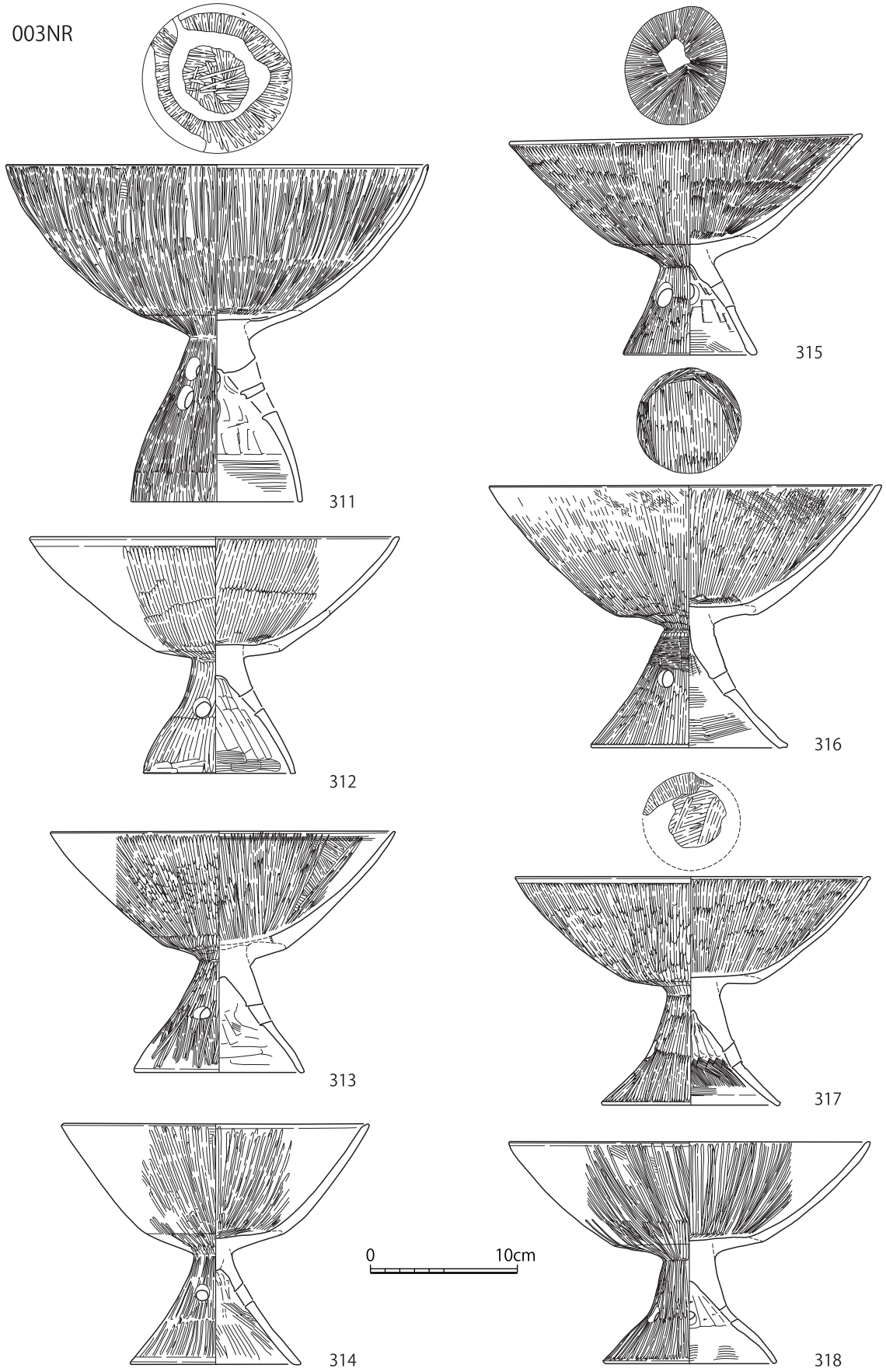
線紋に短い縦位直線紋をまばらに連続させ赤彩が施され、その下位に二枚貝による連続刺突が観察される。184 は不揃いな工具による縦位連続波状紋にヘラによる横位直線紋が施され、185 は 4 本のクシによる直線紋で画された中にヘラによる斜格子紋と二枚貝による連続刺突が入る紋様帯が 4 セット存在する。187 は外面にミガキ調整がなされた壺底部である。188 と 189 は口縁部端面に棒状工具による部分刺突があり、頸部に不揃いな工具による直線紋が巡る。190 は頸部に原体不明の刺突が巡る。191 は頸部に不揃いな工具による直線紋が巡る。192 ～ 196 は受口状の口縁となる太頸壺で、193 は不揃いな工具による斜線と縦位波状紋と縦位直線紋がありヘラによる弧紋が重ねられる。194 ～ 196 は口縁部上端面に棒状工具による部分刺突があり、194 と 196 には頸部に不揃いな工具による直線紋が巡る。197 ～ 199 は細頸壺で、197 は不揃いな工具による施紋が、198 は凹線紋が、199 はヘラによる施紋が認められる。200 は口縁部端面に押引紋があり、外面にクシによる紋様がみられる。201 は口縁部端面にクシによる波状紋、上面に扇状紋、クシによる直線紋で区画された中に連続刺突と細かい波状紋と簾状紋が施される。体部の上位からミガキ調整が施されている。202 ～ 212 は壺底部で、202 は棒状刺突が縦位に並ぶ。203 と 212 は外面に貝条痕が残る。204 ～ 210 は底部がやや突出する平底壺である。

甕は、大きく逆ハの字状に開くもの（213）、深鉢形で屈曲する口縁部が長いもの（216）、深鉢形で屈曲する口縁部が短いもの（214・215・217）、甕形のもの（218･219）、深鉢形で小型のもの（241 ～ 243）に分けられる。213 は外面に貝殻条痕が、218 と 219 はハケ調整が施され、その他はナデまたはイタナデ調整がなされる。217 は口縁部端面に棒状工具による部分刺突が、218 は口縁部端面にイタによる連続刺突が、219 は口縁部端面にイタによる細かい連続刺突がみられる。213 は岩滑式に属する他は概ね古井式に属する。220・222 ～ 228・231 ～ 234 は外面に貝殻条痕紋が施されるもので、概ね岩滑式から古井堤式までに属すると思われる。231・234 は口縁部端面に沈線が巡る。235 ～ 240 は口縁部端面にイタによる連続刺突がある甕で、235・238 は口縁部が横方向に開く。246 ～ 251 は台付甕の脚部で、底部が厚いもの（246・248）から薄くなるもの（250･251）まで存在する。246 は底部端面に棒状工具による連続刺突がある。253 は台付甕であるが、時期は古墳時代まで下る可能性がある。

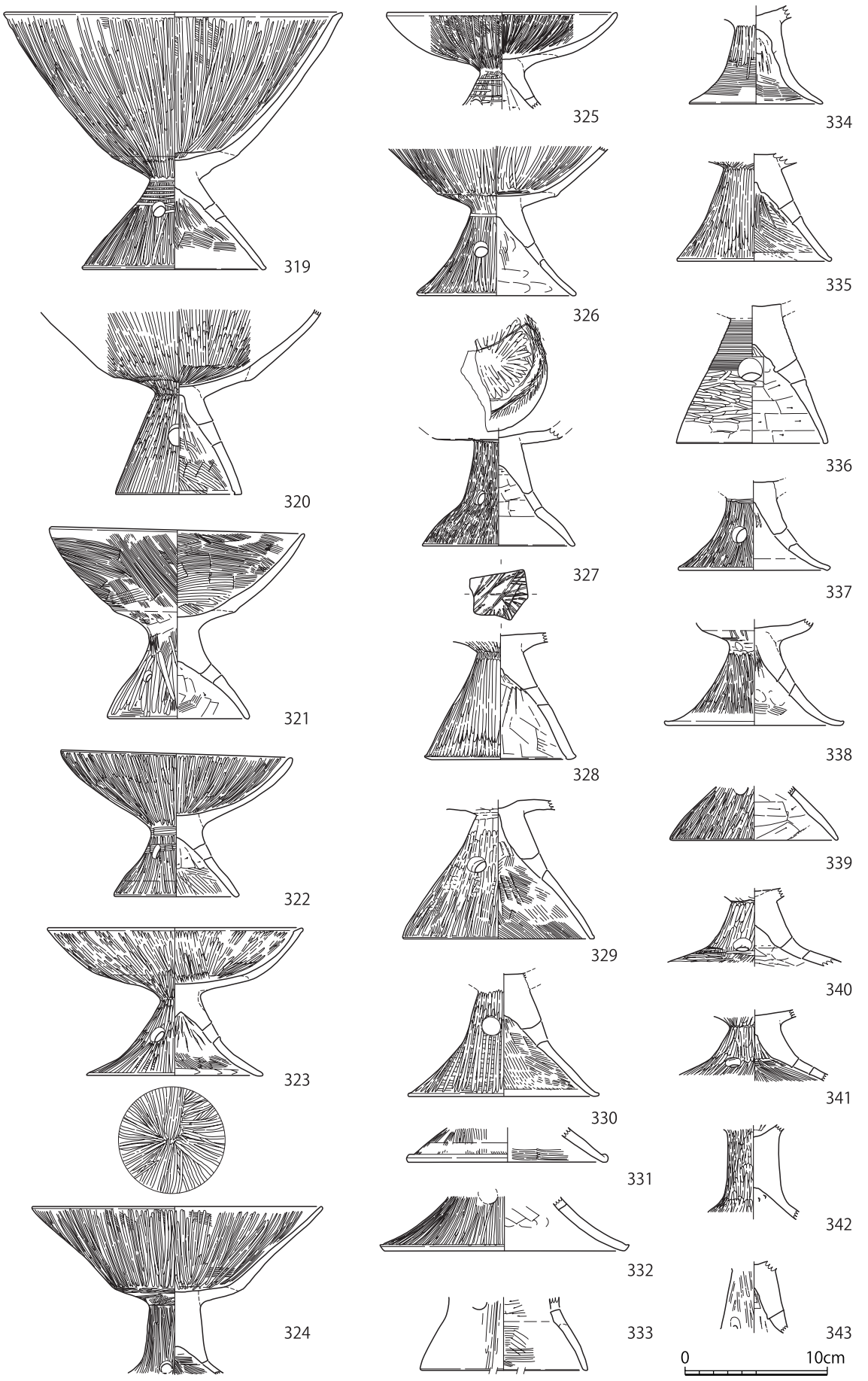
254 と 255 は口縁部が外に折れる鉢で、口縁部端面にイタによる連続刺突が巡る。254 は口縁部上端面に不揃いな工具による波状紋が施され、体部外面の大部分はミガキ調整がなされる。一方、255 は体部上半の外面にハケ調整がみられる。

256 ～ 291 は 2009 年度調査の資料であるが、2008 年度調査と比べると資料は少ない。294 は肩がやや大きく張る太頸壺で、口縁部端面に棒状工具による部分刺突が巡る。頸部に不揃いな工具による直線紋と短い連続直線紋があり、以下緩い波状紋、細かい波状紋、緩い波状紋、短い連続直線紋、直線紋の順に紋様が施される。256 は棒状工具による連続刺突が巡る深鉢形の甕で、外面にハケ調整がみられる。257・258 はイタによる連続刺突が巡る甕、259 は口縁部が屈曲する甕、260 は短く口縁部が折れるものである。261・281 は口縁部上端面に棒状工具による部分刺突がある受口状口縁の壺である。263 ～ 268 は外面に条痕紋が残るもので、263 は口縁部端面にイタによる刺突が、267 は条痕に重ねてヘラで円弧紋が、268・269 は貼付突帯が認められる。272・276 は口縁部端面に沈線が巡る条痕紋の深鉢形の甕である。273・275・278 は口縁部端面にイタによる連続刺突がある甕、274 はハケによる連続刺突を持つ甕である。277 と 278 は太頸壺の口縁部で 278 はイタによる刺突がある。280 はヘラによる連弧紋と不揃いな工具による縦位直線紋が外面にみられる細頸壺、282 は口縁部内面に赤彩がみられる壺である。288 ～ 290 は壺底部、291 は甕底部で、下部外面にハケ調整がみられる。

その他の出土遺物（第 57 図 295 ～ 310）　ここでは極めて新しい遺構もしくは遺構外から出土したＡ期に属する資料を紹介する。295 は棒状工具による部分刺突がある外面ハケ調整の甕、296 は直立する体部から口縁部が開く外面ハケ調整の甕、299 は棒状工具による連続刺突があるイタナデ調整の甕、300 はナデ調整の甕である。297 は台付甕の脚部で



第 58 図　A期の出土遺物（19）



第 59 図　A 期の出土遺物（20）

底部が極めて厚い。298 は口縁部上端面に 2 列、体部上方にも 2 列の竹管による連続刺突が認められる壺である。301 は外面に羽状条痕が施される深鉢であり、この他にも 302 と 304 にも外面に条痕紋がみられる。305 ～ 307 は不揃いな工具による施紋が施された壺で、305 は直線紋と波状紋と直線紋、306 は緩い波状紋と連続刺突と大きな波状紋、307 は交差する斜線と細かい波状紋がなされる。309 は壺底部、310 は甕底部で、共に平底で、310 は外面にハケ調整が残る。

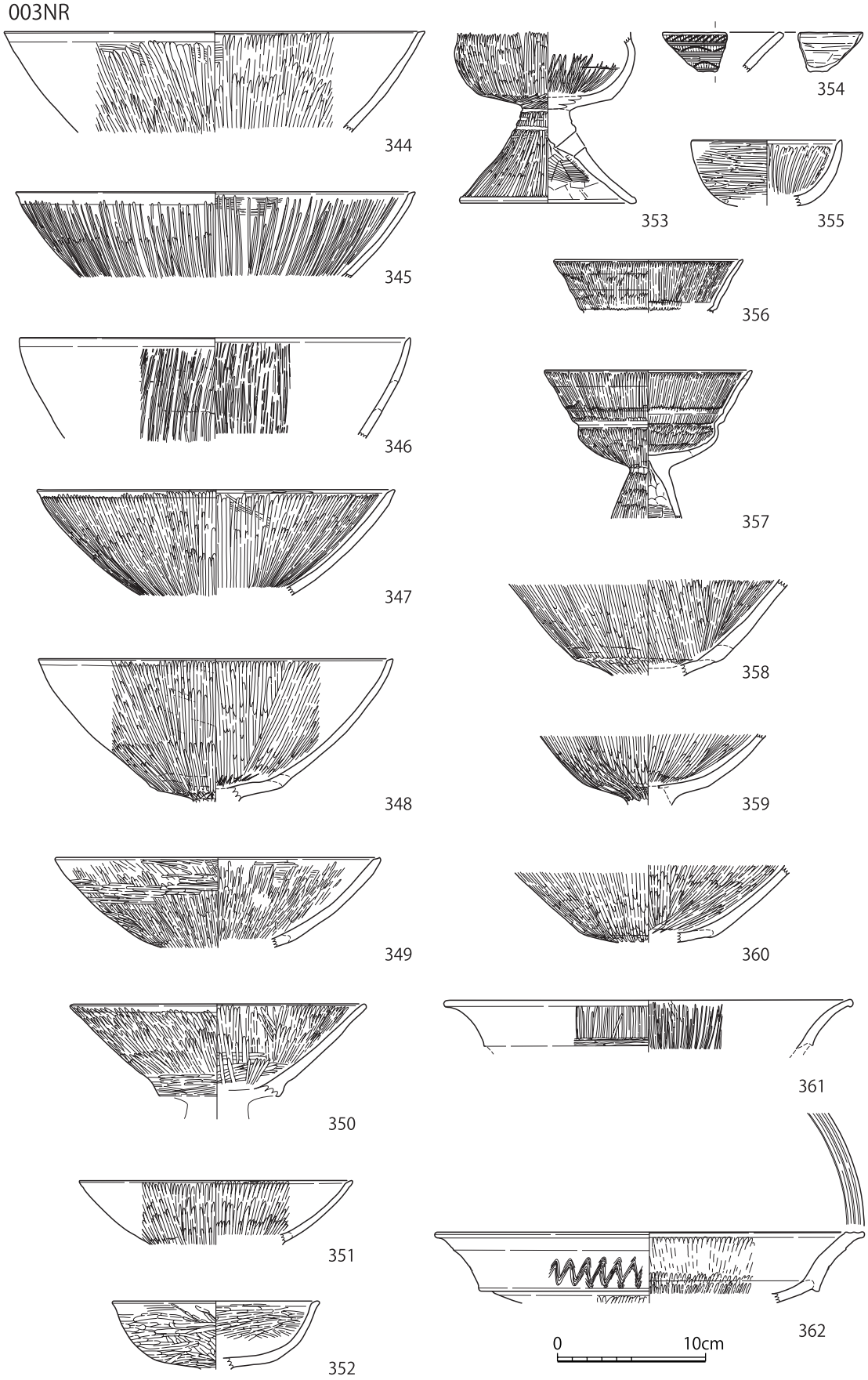
08B 区 003NR 出土遺物（第 58 ～ 75 図 311 ～ 601） 高杯・甕・壺・鉢など様々な器種の土師器が多量に出土した。B 期に属する資料は概ね第 4 層と第 5 層から出土しており、ここではその資料を中心に器種別に紹介する。主な遺物の出土位置は第 24 ～ 26 図に示した。遺物の時期は概ね廻間Ⅱ式期に併行するものと思われる。

311 ～ 362 は高杯で、形状から概ね以下の 12 類に区分できる。杯部が稜線を持たず深い椀形を呈し脚部はやや高く端部が内彎するもの（A 類：311）、浅い杯部が稜線を持たずに逆ハ字状に開き脚部が直線的に開くもの（B 類：322）、浅い杯部が稜線を持たずに逆ハ字状に開き脚部が外反して開くもの（C 類：323）、杯部が外面下部で稜線を持ちやや内彎しながら逆ハ字状に開き脚部の端部がわずかに内彎するもの（D 類：312・313・318・321）、杯部が稜線を持ちやや内彎しながら逆ハ字状に開き脚部が直線的に開くもの（E 類：316・317）、杯部が稜線を持ちやや直立ぎみに逆ハ字状に開き脚部が直線的に開くもの（F 類：314・319）、杯部が稜線を持ち逆ハ字状に直線的に開き脚部も直線的に開くもの（G 類：315・320）、杯部が稜線を持ち逆ハ字状に直線的に開き直立した脚部が屈折して開くもの（H 類：324）、杯部の屈折部が突帯状に張り出す稜線を持つもの（有稜高杯、脚部は不明：Ⅰ類：350）、杯部が稜線を持たず丸みを持つ椀型となるもの（脚部は不明: J 類:352･355）､杯部が段を持つもの（K 類：356・357）、杯部が大きく彎曲して口縁部に至るもの（脚部は不明：L 類：353）の 12 類である。

多くの高杯は成形後にハケ調整がなされ、さらにその上にミガキ調整が施されているとみられる。杯部は内外面とも縦位の（すなわち放射状の）細かいミガキ調整が、脚部は外面のみ縦位の細かいミガキ調整がなされるのを基本とする。杯部見込み（底部内面）は細かいミガキ調整が放射状に施されるもの（ミガキ a：315 など）と、一方向の平行線状に施されるもの（ミガキ b：316 など）と、放射状に近いもののそれが乱れてランダム鵜な方向を向くもの（ミガキ c：311 など）に区分が可能である。脚部には円孔透かしが概ね 3 単位設けられ、内面は上部がケズリ調整、下部はハケ調整が施される場合が多い。

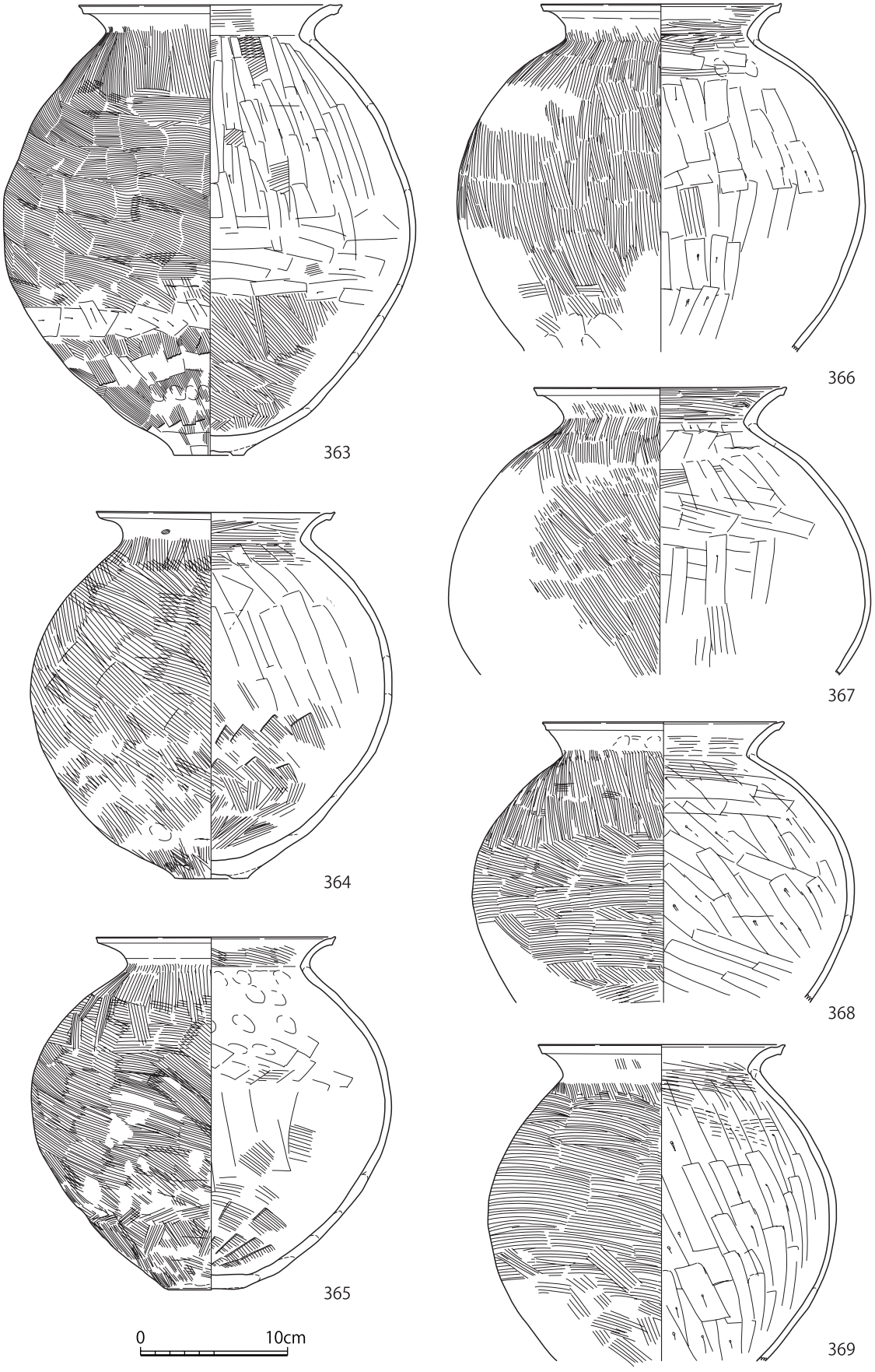
311 は高杯 A 類でミガキ c が施され、脚部の透かしは円孔が 2 個ずつ設けられていた。312 は高杯 D 類で口縁端部外面に横ナデ調整がある。313 は高杯 D 類で口縁部内面に横ハケ？調整がみられる。314・319 は高杯 F 類で口縁端部上面に面を持つ。315 は高杯 G 類でミガキ a がなされる。316 は高杯 E 類でミガキ b が施され、脚部上位に横位ハケ？調整がみられる。317 は高杯 E 類でミガキ c が施される。322 は脚部上方に横位のミガキ調整が残る高杯 B 類である。324 は高杯 H 類でミガキ a が施され、杯部の屈曲部分に横位のミガキ調整が残る。325 は杯部のミガキ調整がまばらで脚部上方に横位のミガキ調整が残る高杯 C 類である。327 はミガキ a が残る高杯 D 類で、杯口縁部の接合面に羽状の刻線が刻まれている。328 は脚部下端面が断面方形となるものでミガキ c が施される。330 は高杯 E 類に近い脚部で外面のミガキ調整がまばらである。334 は高杯 C 類の脚部と思われ、外面のミガキ調整は上部に留まっている。336 は比較的高い脚部で上方にクシ？による横位直線紋が施される。340・341 は脚部が外折するもので、340 は外面下半に横位のミガキ調整が残る。344 ～ 349 は口縁部に内傾する上端面が存在する高杯杯部で、344 ～ 348 は口縁部外面上端に横ナデ調整がみられる。349 は杯部が浅くなるもので、口縁部外面上位に横位のミガキ調整が施される。350 は高杯 I 類で内外面とも下方は横位のミガキ調整がある。352 と 355 は高杯 L 類で、352 は内外面ともほぼ全面に横位を基調とするやや乱れたミガキ調整が、355 は外面のみ横位のミガキ調整が残る。353 は高杯 L 類だが、口縁部が括れる可能性もある。脚部上位にヘラ沈線が巡る。356・357 は表面が黒色化した高杯 K 類でミガキ調整が丁

003NR



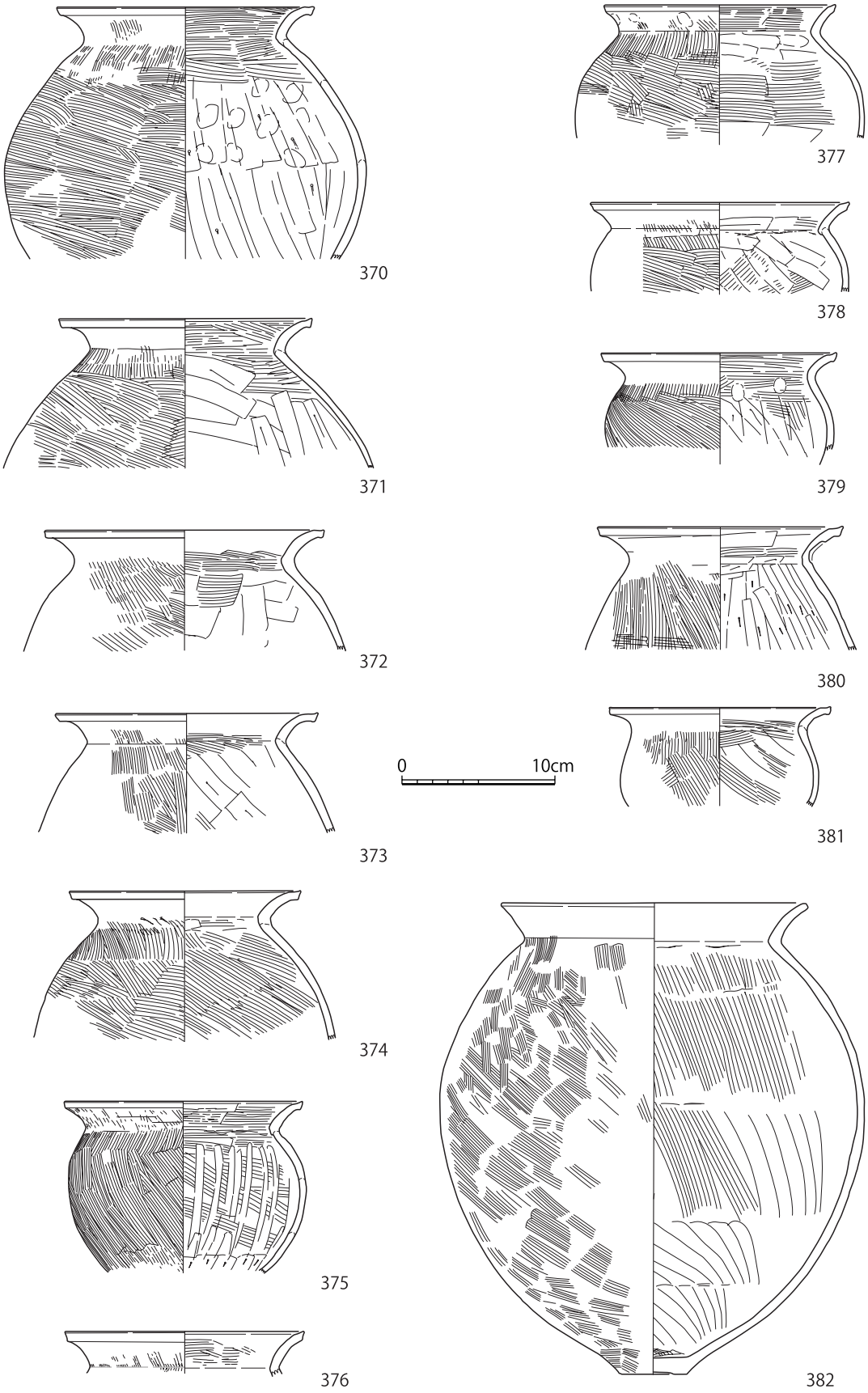
第 60 図　A 期の出土遺物（21）

003NR

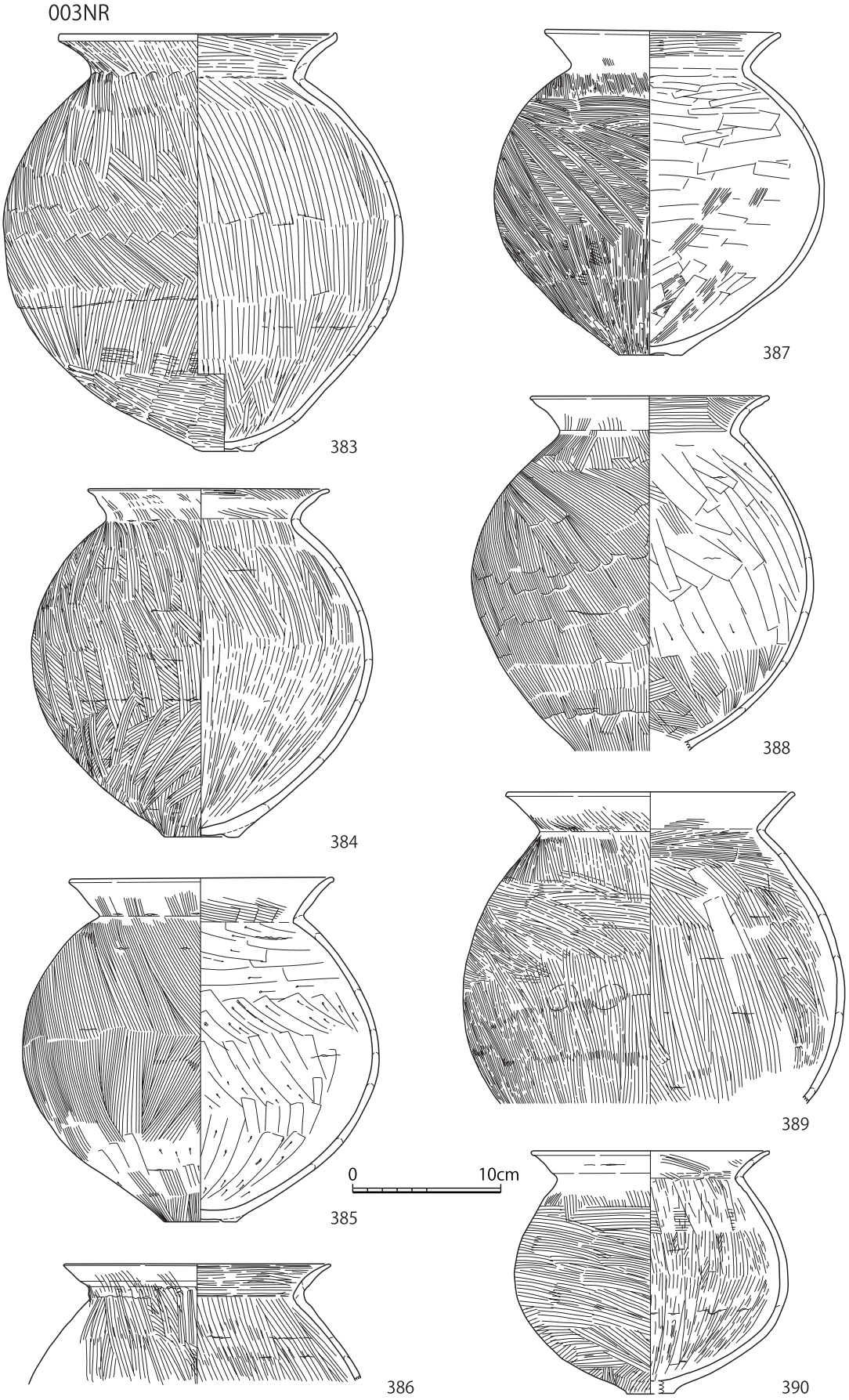


第 61 図　A 期の出土遺物（22）

003NR

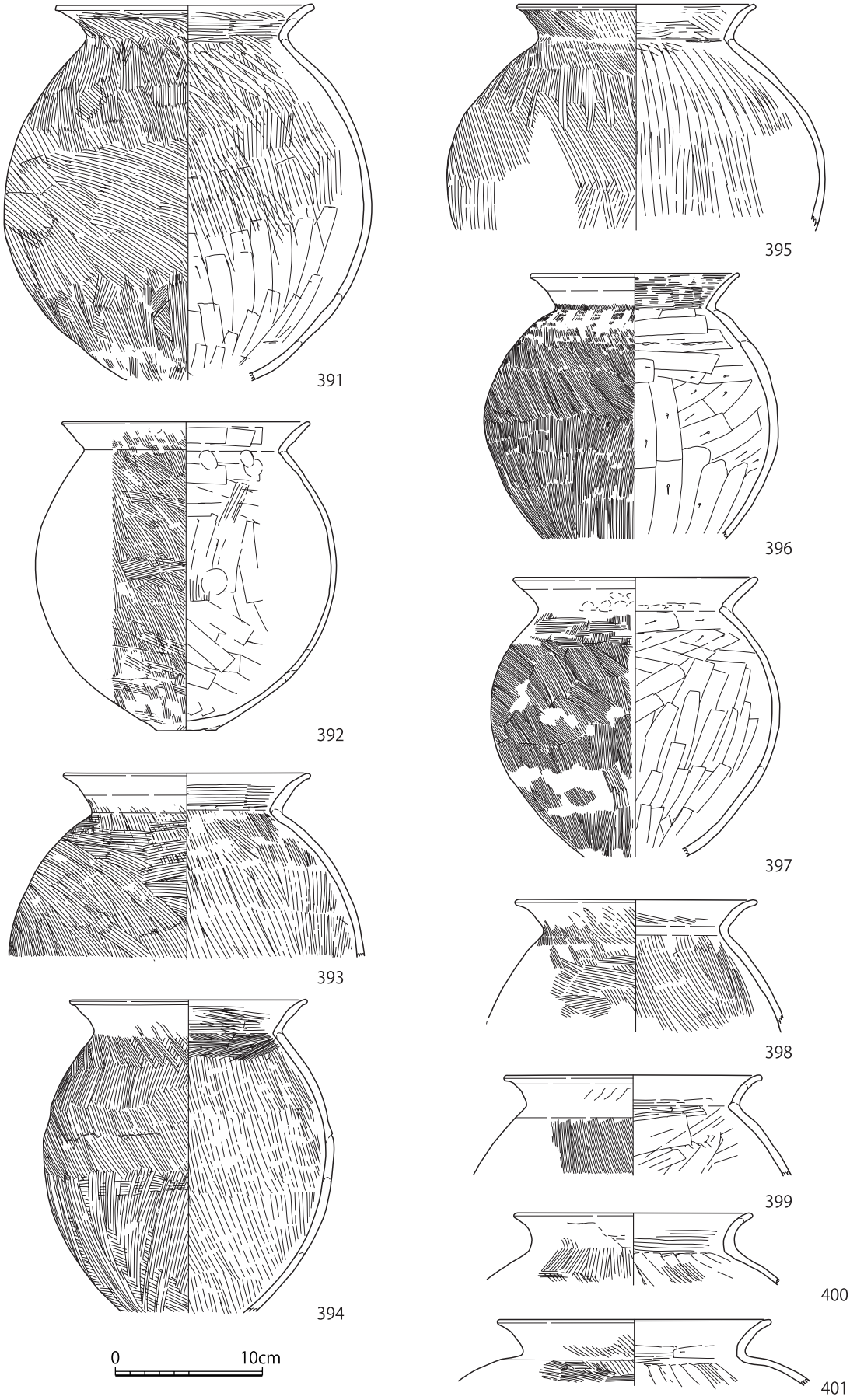


第 62 図　A 期の出土遺物（23）

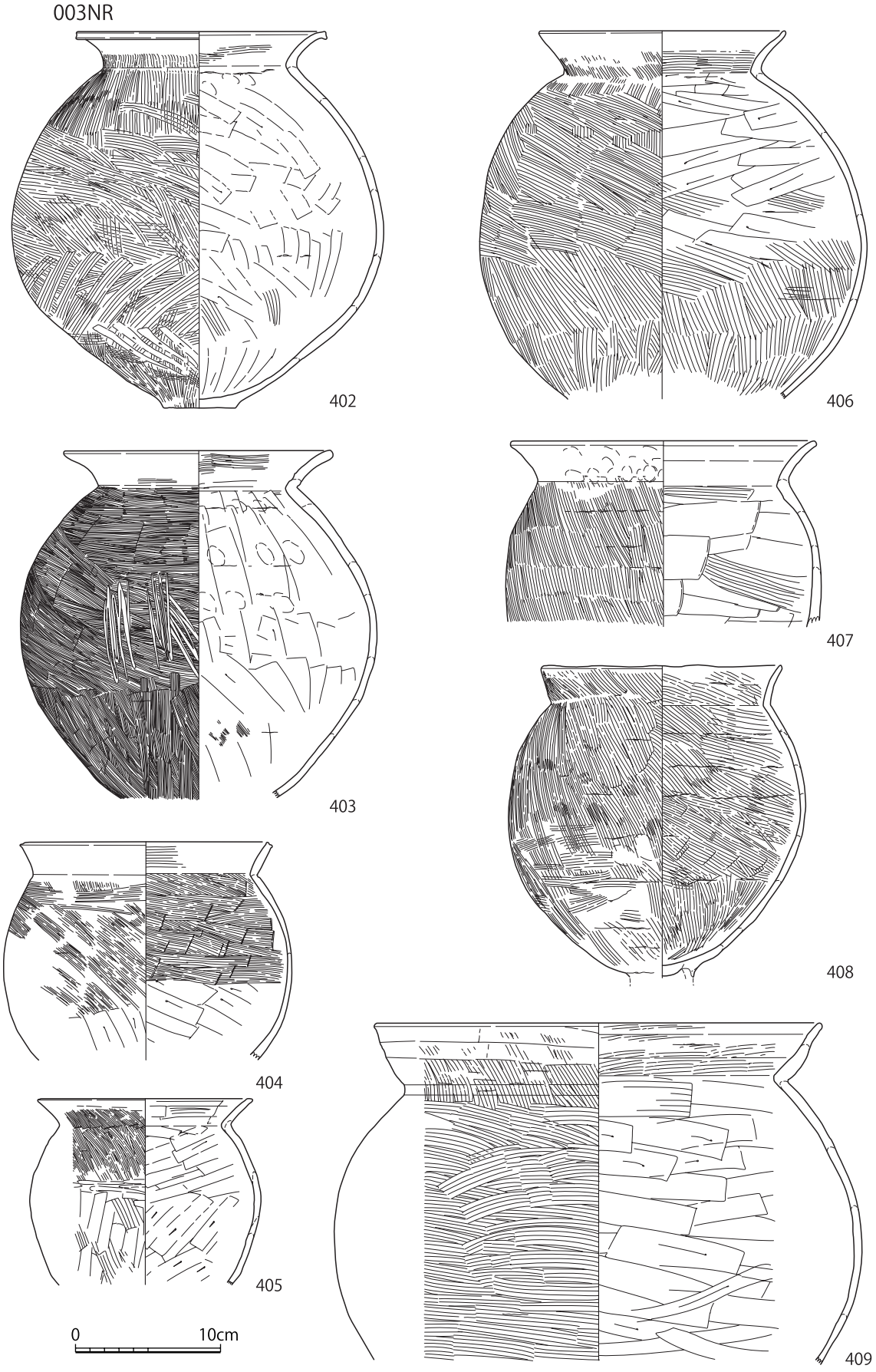


第 63 図　A 期の出土遺物（24）

003NR

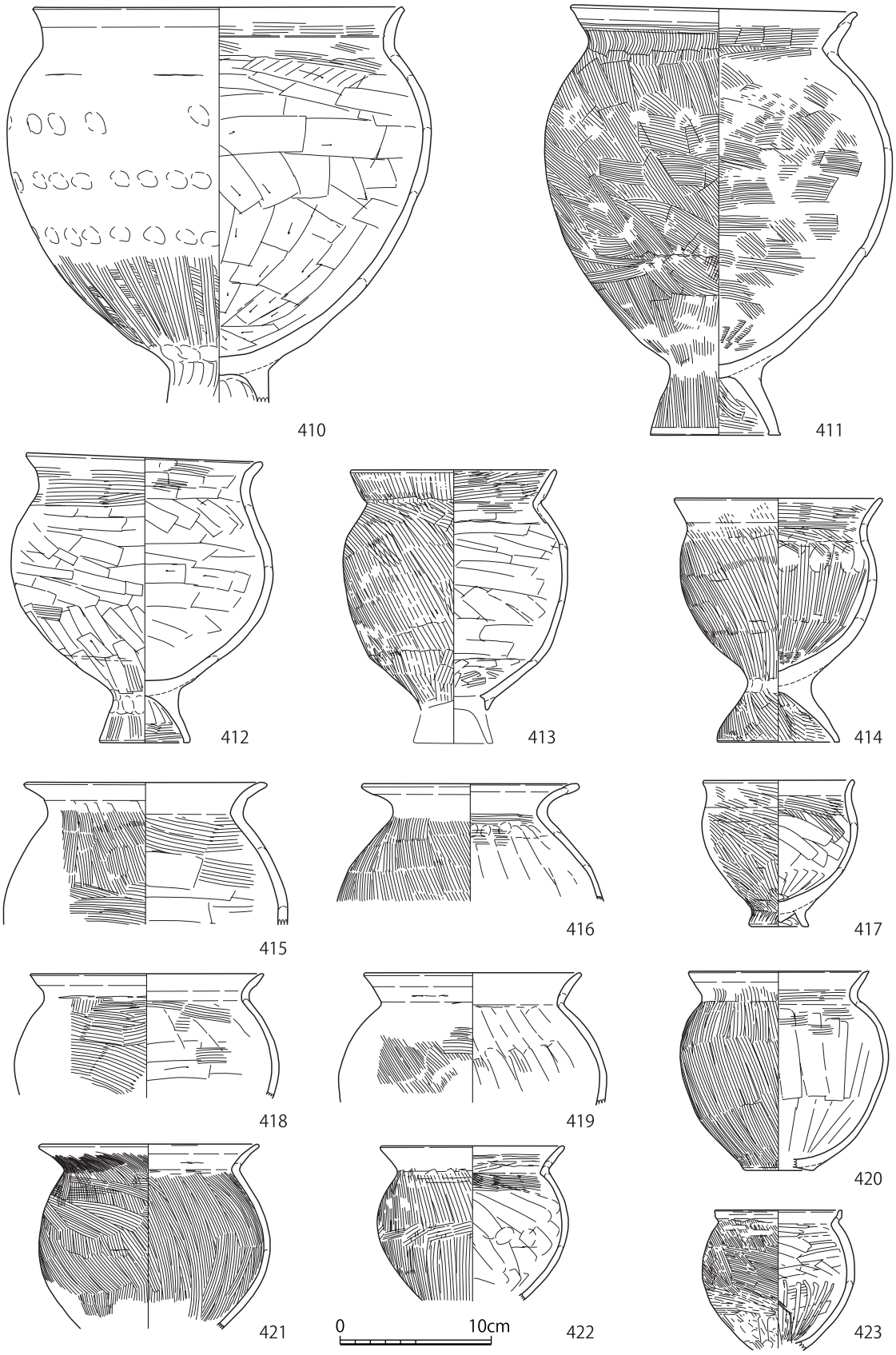


第 64 図　A期の出土遺物（25）



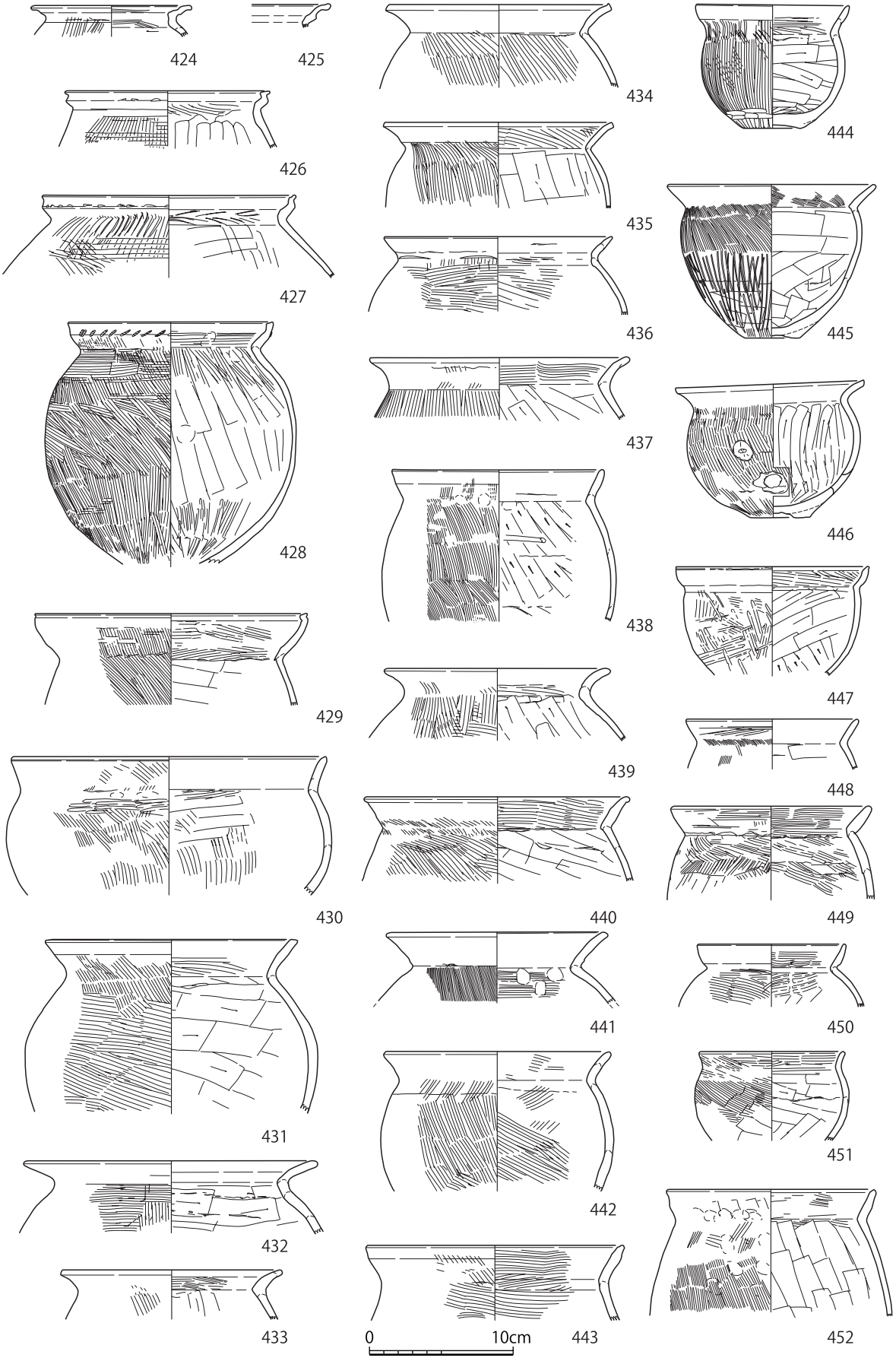
第 65 図　A 期の出土遺物（26）

003NR



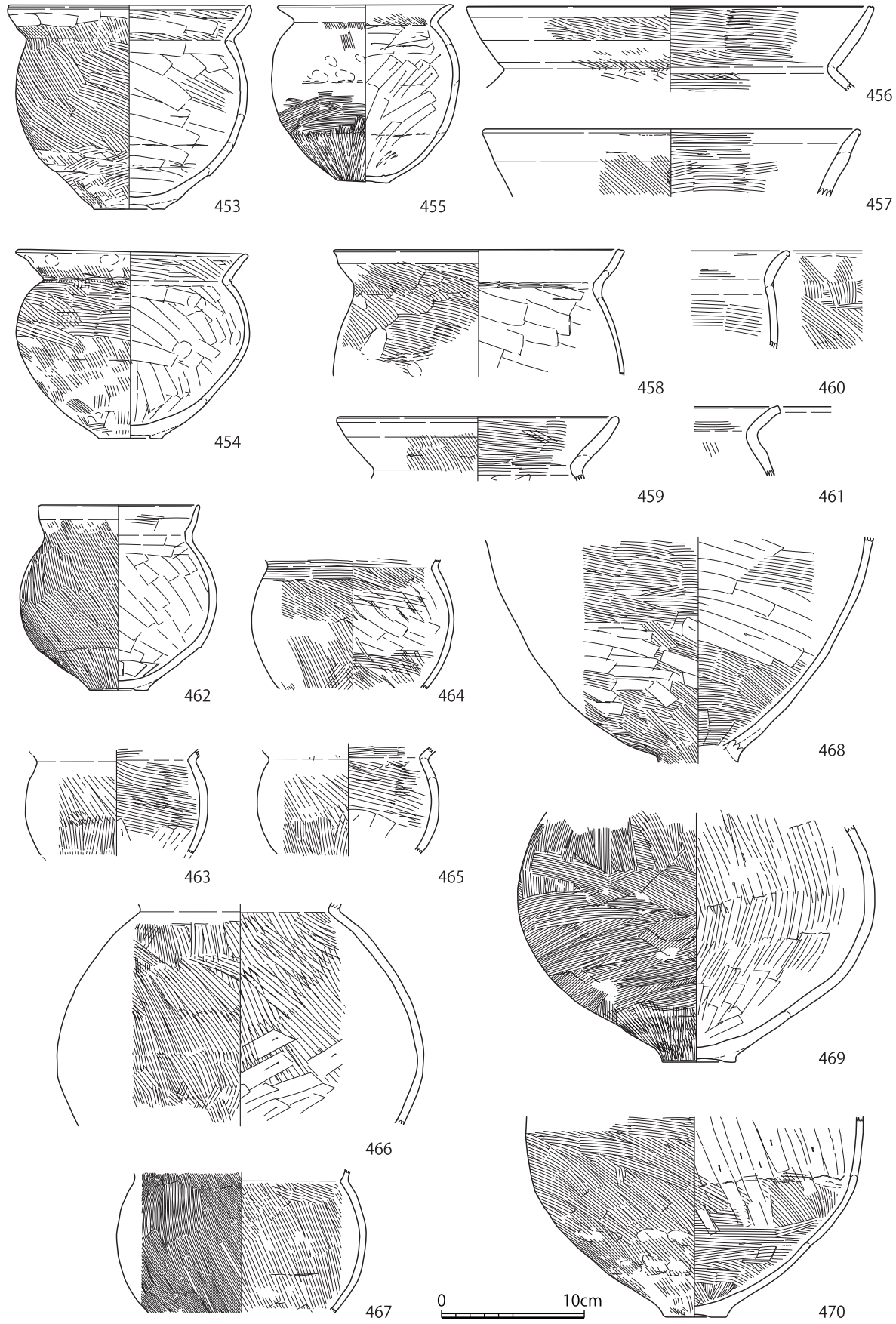
第 66 図　A 期の出土遺物（27）

003NR



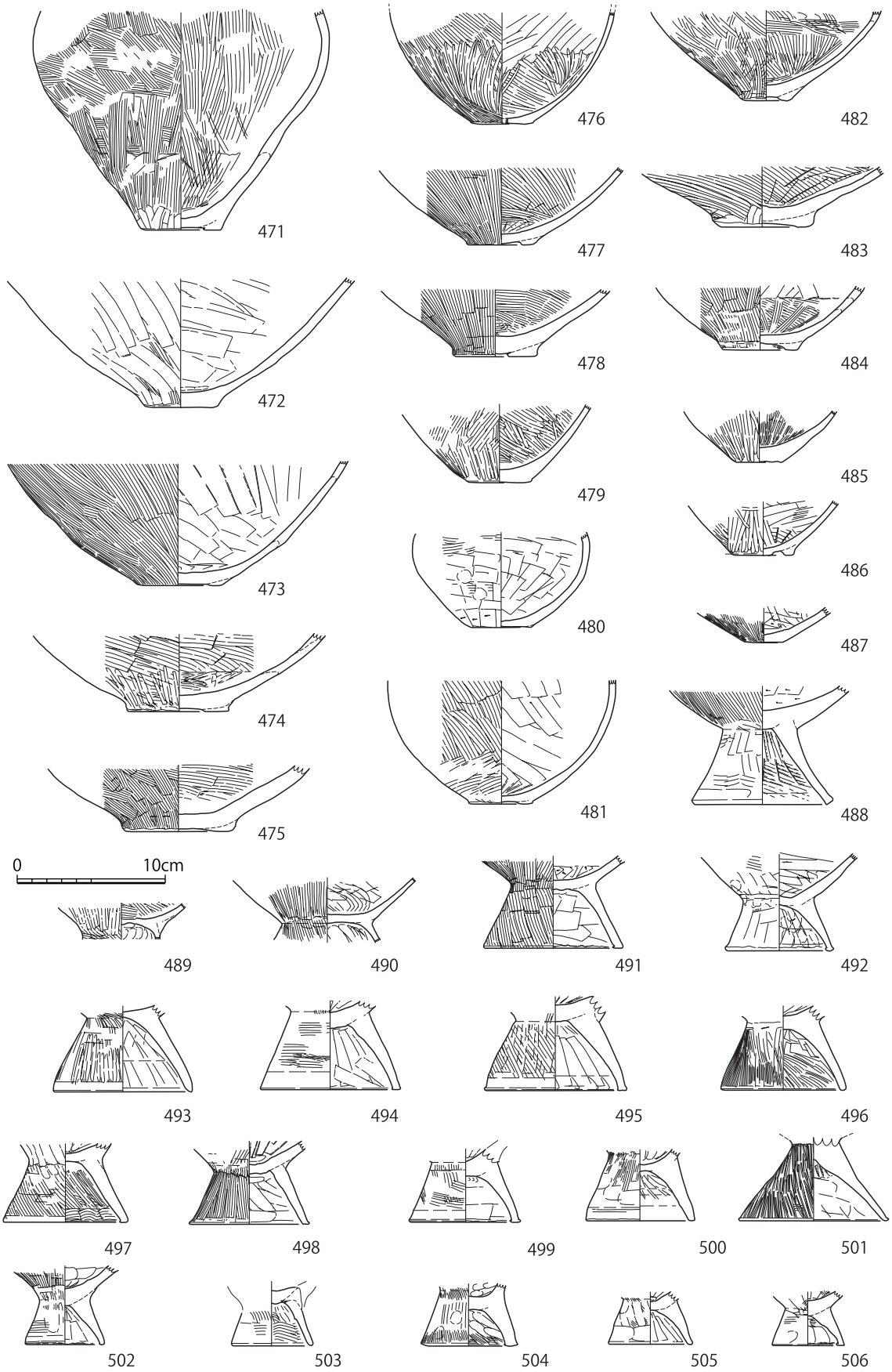
第 67 図　A 期の出土遺物（28）

003NR



第 68 図　A 期の出土遺物（29）

003NR



第 69 図　A 期の出土遺物（30）

寧に施されている。361・362 は寄道式に属する高杯で、362 は口縁上端面に沈線が、杯部外面に波状紋が巡る。

363 ～ 506 は甕で、形状から概ね以下の 12 類に区分できる。口縁部が直角に折れて外反し口縁端部にやや外傾する面を持ちさらに上部にも狭い横ナデ調整が施されるもの（Ａ類：363 ～ 381）、口縁部が直角に折れて外反し口縁端部がやや尖り気味に丸く収まるもの（Ｂ類：382 ～ 400・415・418 ～ 422）、口縁部が直角に折れて外反し口縁端部が断面方形に近い形状となるもの（Ｃ類：402・403）、口縁部が鈍角に折れて直線的に開き口縁端部が断面方形になるもの（Ｄ類：404・405）、口縁部が鈍角に折れてやや外反しながら開くもの（Ｅ類：407・408）、口縁部が鈍角に折れて開き粘土を継ぎ足すことによりわずかに段差が生じるもの（Ｆ類：406・409・411）、口縁部が鈍角に折れて内彎しながら開くもの（Ｇ類：413・438・447・453）、口縁部が緩やかに彎曲しながら折れて開くもの（Ｈ類：410・412・414・417）、いわゆるＳ字状口縁となるもの（Ｉ類：424 ～ 427）、いわゆる有段口縁となるもの（Ｊ類：428）、口縁部が短く開くもの（Ｋ類：423）、口縁部が長く開くもの（Ｌ類：456 ～ 457）の 12 類である。

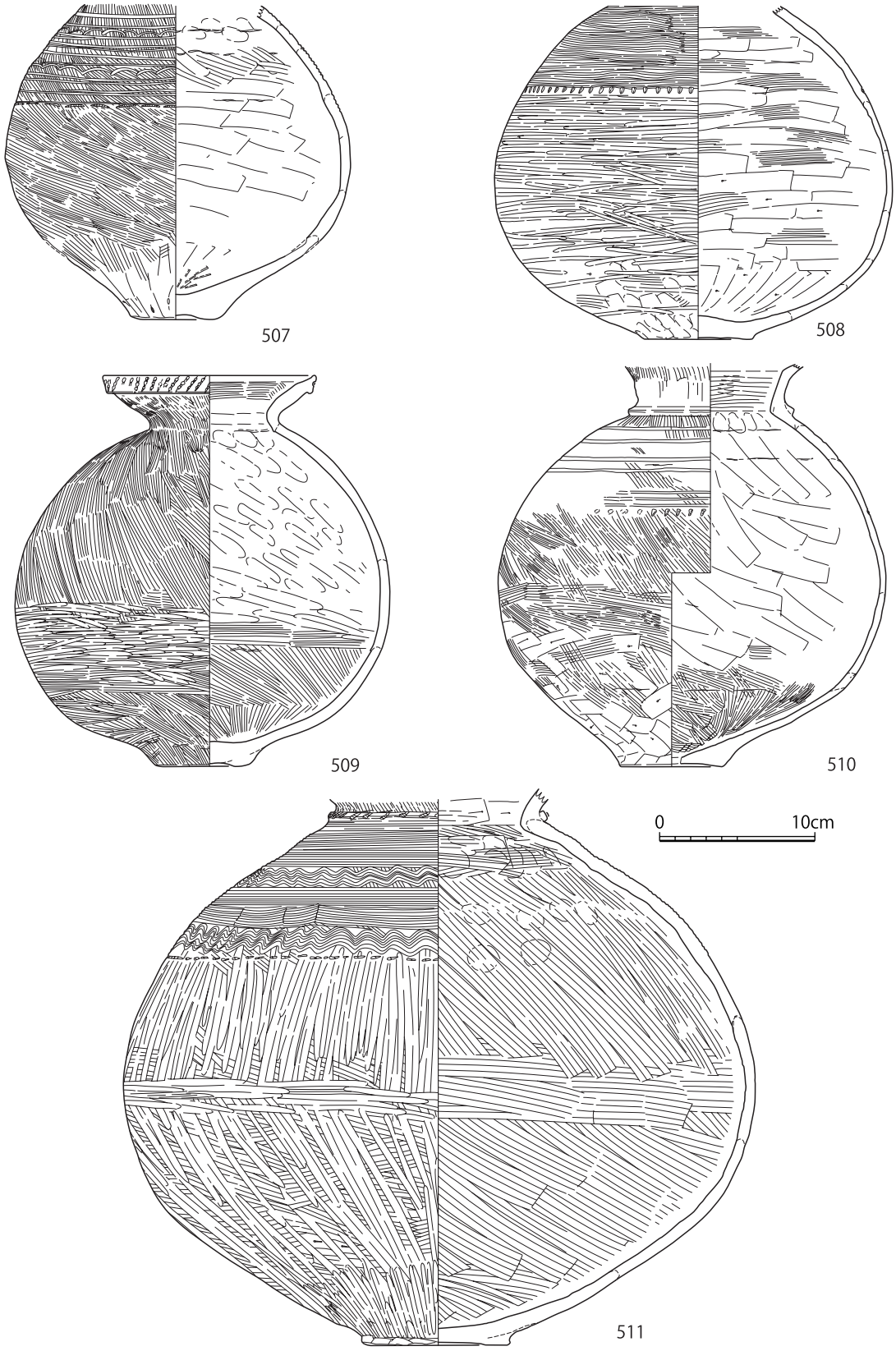
底部まで残存する資料は限られるが、概ねＡ類・Ｂ類・Ｃ類は粘土を継ぎ足して造られた平底甕、Ｅ類・Ｆ類・Ｈ類・Ｉ類は脚部を持つ台付甕と思われる。調整痕は外面が上部で縦位ハケ調整、最大頸部で斜位ハケ調整、内面はケズリかイタナデまたはハケ調整が施されるものが多い。

363 は甕Ａ類で口縁部がやや厚く体部は砲弾形を呈する。364 は甕Ａ類で口縁部がやや薄く体部は球形に近くなるもので、甕Ａ類はこの形状のものが多い。甕Ａ類の内面は口縁部が横ハケ調整、底部が斜めハケ調整、それ以外の体部の大部分がケズリかイタナデ調整が施されているが、374 は体部の大部分を斜めハケ調整。375 は体部の大部分を斜めハケ調整の後にイタナデ調整が施されている。外面ハケ調整を基調とする甕Ｂ類の中で、383・474 は下半部でハケ調整の後にタタキ？調整が認められる。403 は甕Ｃ類で体部中央に部分的なミガキが施されている。410 は台付甕Ｈ類で体部上半部の外面にハケ調整が残存していない。417 は小型の台付甕Ｈ類で脚部は著しく低い。424 ～ 427 はいわゆるＳ字状口縁台付甕で 424 はＢ類、426･427 はＡ類に属する。428 は有段口縁甕で口縁部外面に連続刺突が巡る。429 は屈曲して開く口縁部が内彎しその端部で短くＳ字状に折れるものである。445 は小型の甕Ｄ類になるが、体部下半に粗いハケ調整？が残る。446 は小型甕で甕Ａ類に近い形状を持つが、体部下半に焼成後の穿孔が施されるものである。447 は甕Ｇ類で体部外面にミガキ調整がみられる。445 は小型の甕Ｂ類で体部外面下部にミガキ調整がみられる。

468 ～ 487 は甕底部と思われる土器片であるが、壺との区別が難しい資料も存在する。476・485・486 の外面下部にミガキ調整が認められる。488 ～ 506 は台付甕の脚部で、490 はＳ字状口縁台付甕に伴うものと思われ、胎土も白色系を呈する。これらは脚端部に面を持つものが多いが，500 ～ 503 のように端部が丸みを持つものもある。

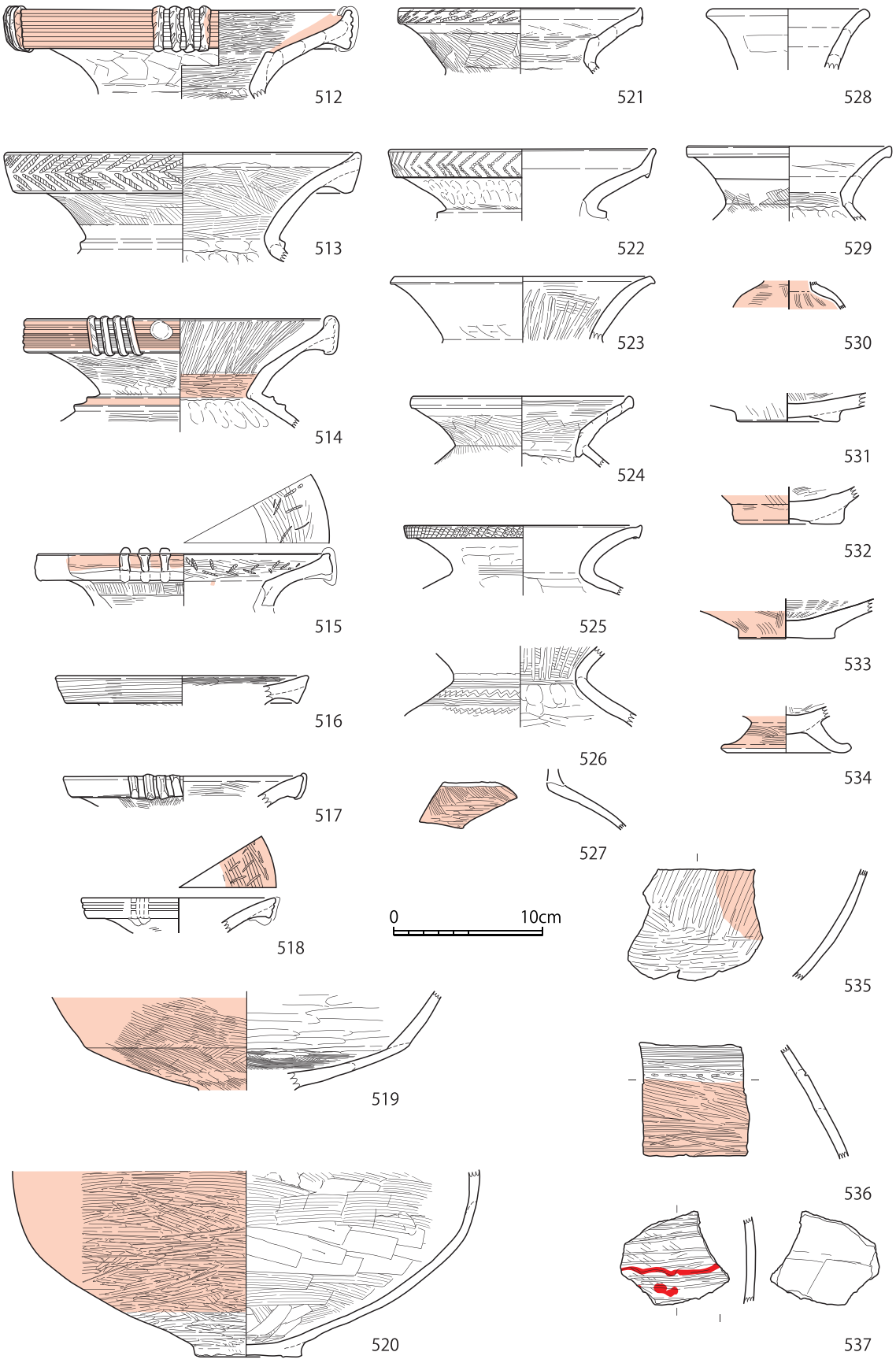
507 ～ 562 は壺類で、507 ～ 527・538・541・542 は広口壺、543 ～ 551・556 は直口壺、540・557・558 は短頸壺である。507 は体部外面全体がハケ調整された後に上部のみにヘラによる沈線と連弧紋が施される。508 は肩部にクシによる横位直線紋、胴部以下に横方向ミガキ調整がなされ、その境界部に連続刺突がある。509 はやや外傾する口縁部端面にクシによる単斜方向の連続刺突があり、胴部のみがミガキ調整される。510 は頸部と体部の境界部に突帯を持ち、体部外面上位にヘラによる沈線が巡る。ミガキ調整は確認できない。511 は頸部と体部の境界部の突帯に連続刺突があり、体部外面上位にクシによる直線紋と波状紋の組み合わせが２組存在し、その下端部に連続刺突、下半部はハケ調整後に縦位ミガキ調整がみられ、胴部最大径部のみ横位角にミガキ調整が認められる。512 ～ 522 はいわゆるパレススタイル壺である。512 と 514 は口縁部外面に擬凹線紋と赤彩の上に 4 本の棒状浮紋が 4 単位施され、内面の頸部と口縁部の境界に稜を持つ。512 は口縁部内面に部分赤彩が、514 は棒状浮紋の横に円形浮紋と頸部内面に赤彩が施される。515・518 も棒状浮紋があり口縁部内面にクシによる連続羽状刺突が巡り、518 には擬凹線紋が確認される。513・522 は口縁部外面にクシによる連続羽状刺突

003NR



第 70 図　A 期の出土遺物（31）

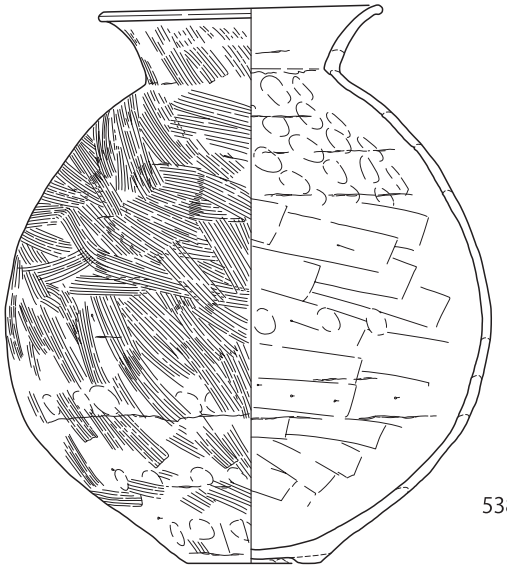
003NR

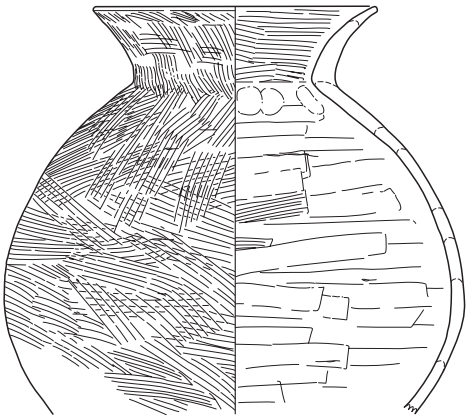


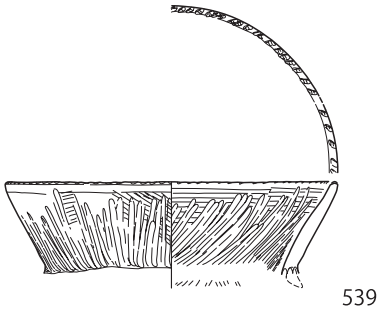
第 71 図　A 期の出土遺物（32）

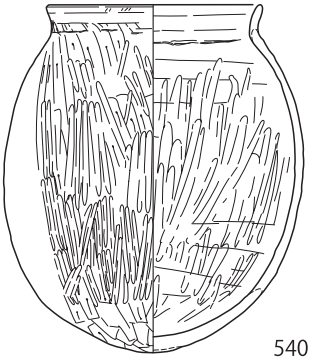
が、521 は同じ部分にクシによる連続斜位刺突が巡り、517 は棒状浮紋が施されるが、これらは赤彩が確認されなかった。519 と 520 は底部片で外面に赤彩が認められる。523 は口縁部内面にミガキ調整が残り、524 は口縁部内面に稜があり、525 は口縁部端面に連続刺突がみられる広口壺の口縁部である。526 は体部上位にクシによる直線紋と波状紋が施され、527 は赤彩が残る。528 は単純口縁の壺である。531 ～ 534 は壺底部と思われ、532 ～ 534 は赤彩が認められる。534 は外反する脚部を持つ。535 ～ 537 はいわゆるパレススタイル壺の体部片と思われる。538 と 541 は端部がやや尖り気味の単純口縁で全体には特に装飾は認められない壺形土器で、外面にハケ調整が、内面にハケ調整またはイタナデ調整が施される。539 は口縁部上端面にハケによる連続刺突がある広口壺で、口縁部内外面にミガキ調整が残る。540 は著しく低い口縁部を持つ短頸壺で、体部内外面にミガキ調整がなされる。542 は口縁部端面に連続羽状刺突がある広口壺で、外面にミガキ調整が丁寧になされる。

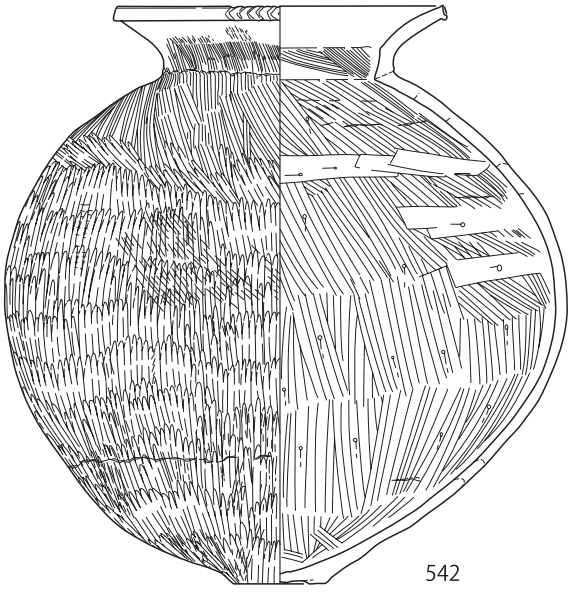
003NR







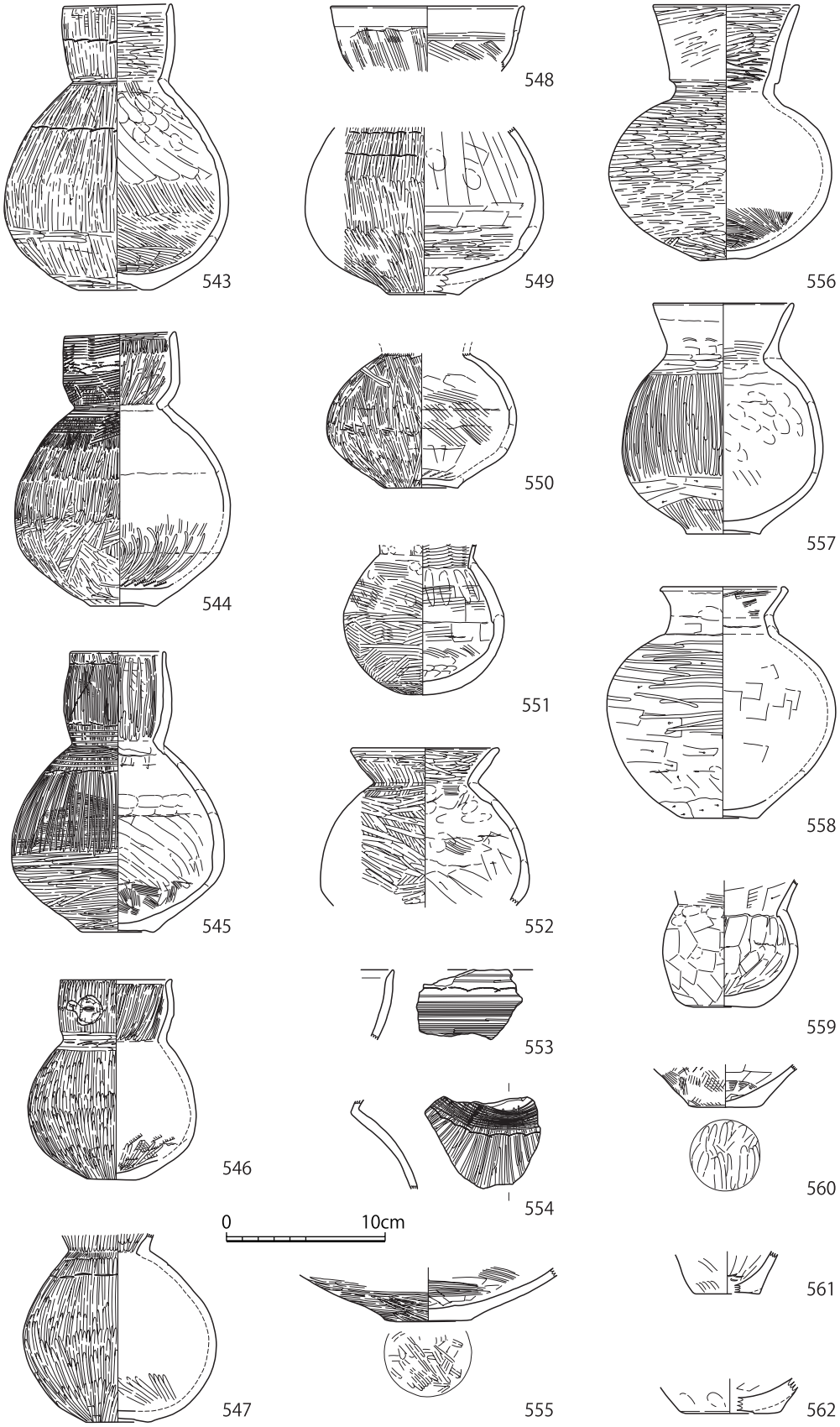




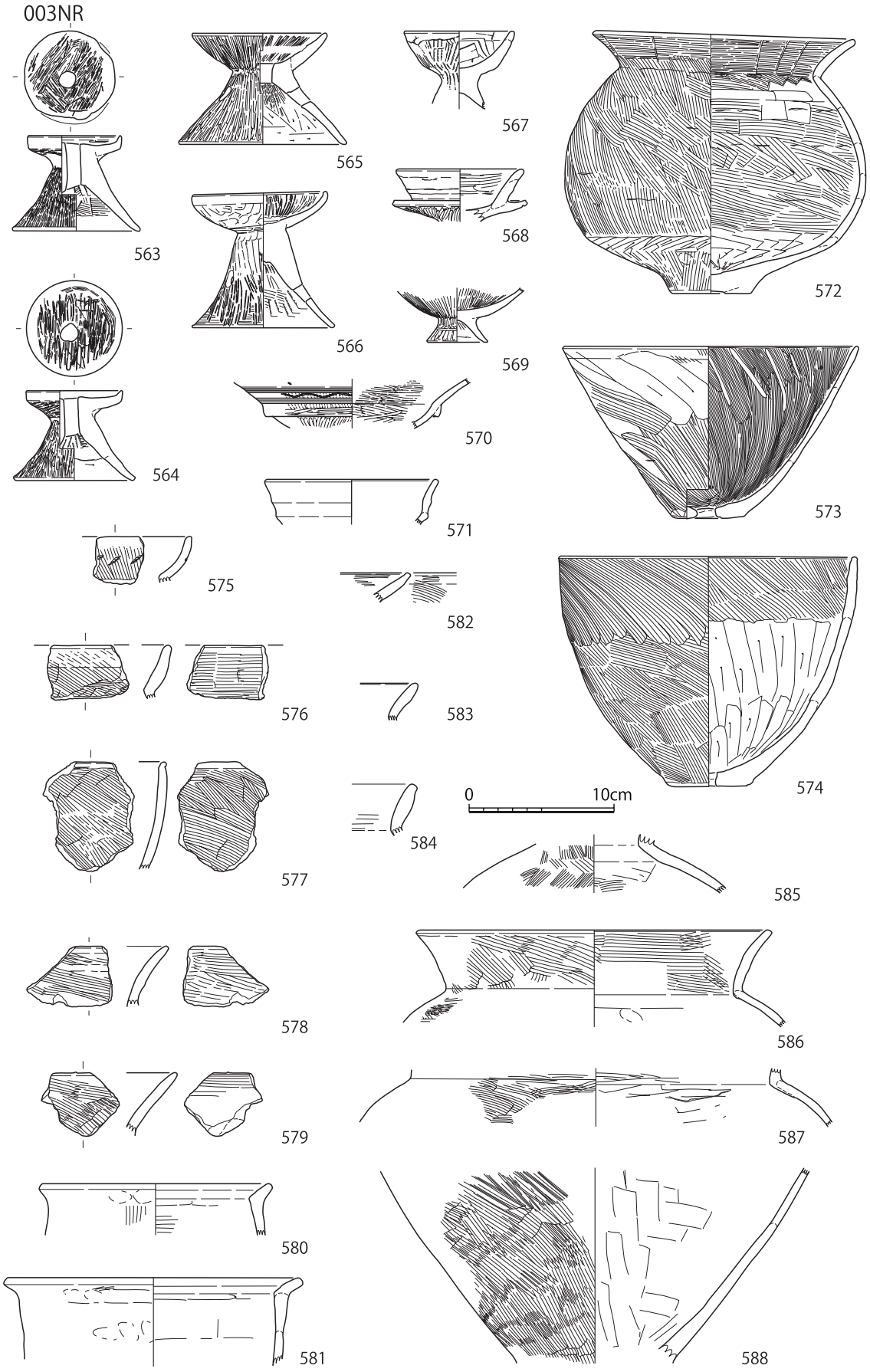
0　10cm

第 72 図　A 期の出土遺物（33）

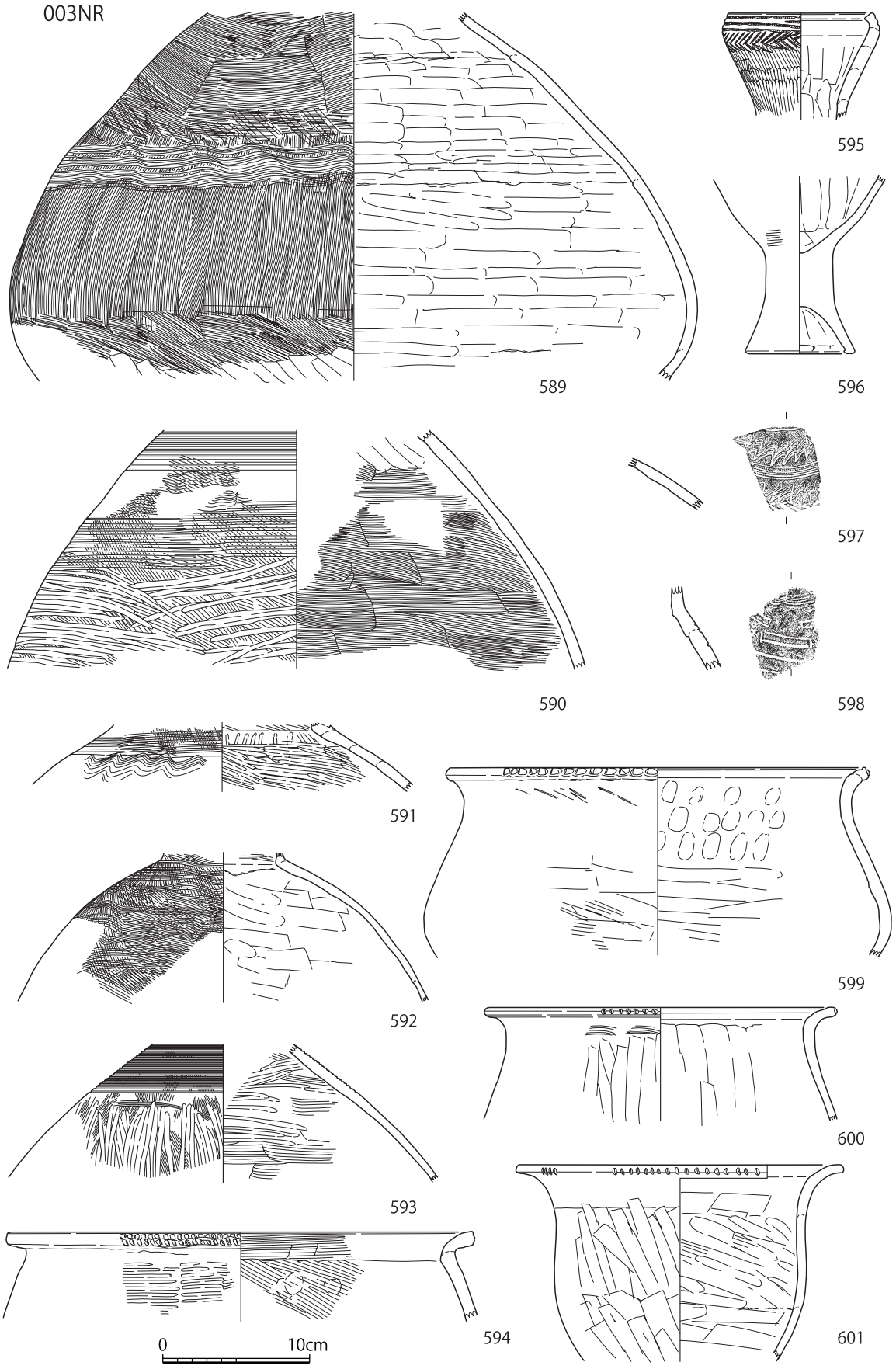
003NR



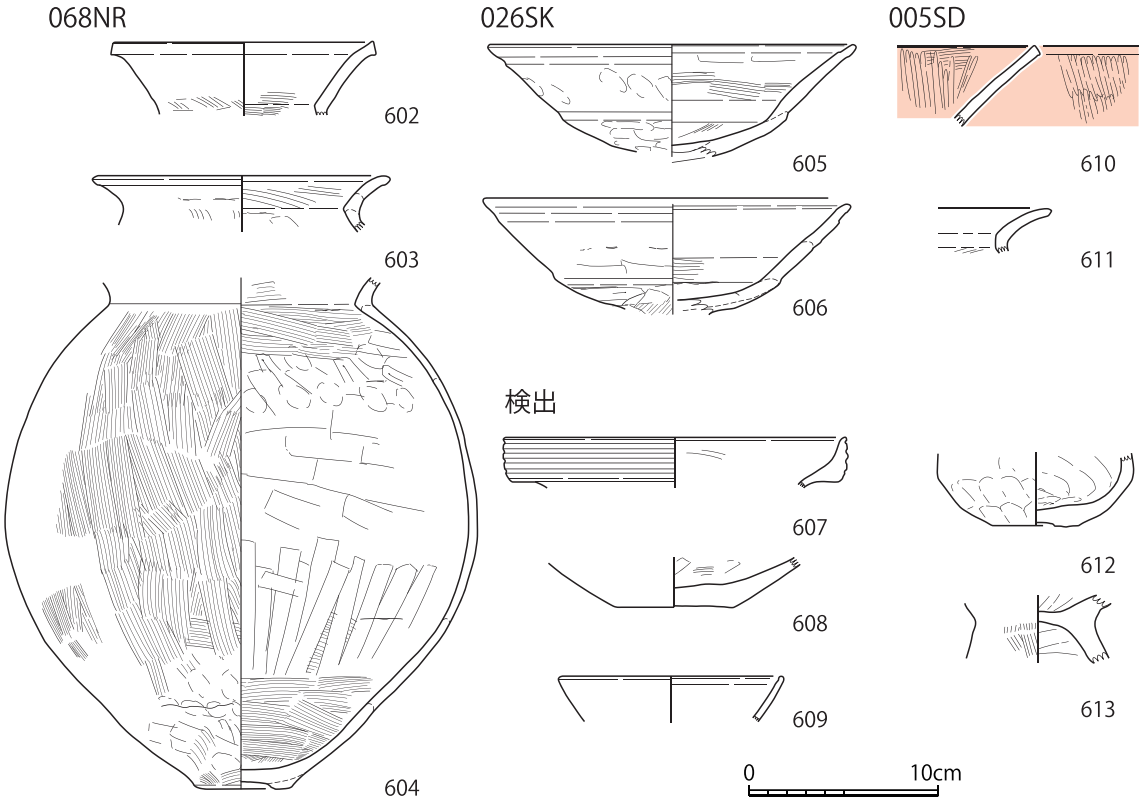
第 73 図　A 期の出土遺物（34）



第 74 図　A期の出土遺物（35）



第 75 図　A 期の出土遺物（36）



第 76 図　A 期の出土遺物（37）

543 ～ 562 は小型壺で、外面はハケ調整後に丁寧なミガキ調整が、内面はハケ調整またはイタナデ調整が施されるものが多い。543 ～ 549 はいわゆるヒサゴ壺である。543 は緩く内彎する直立した口縁部中央と体部上方の 2 ヶ所に二枚貝による横位連続刺突が巡り、最大径部直下と底部付近の 2 ヶ所に横位のミガキ調整がある。544 は口縁部のミガキ調整が分かりにくいが二枚貝による横位連続刺突が外面中央に巡り、体部上位にクシによる横位直線紋がある。外面下半はランダムなミガキ調整、口縁部と体部下半の内面にも縦位ミガキ調整がなされる。545 は口縁部外面上下両端部に二枚貝による横位連続刺突があり、その間に二枚貝による斜位刺突が並ぶ。体部上位にも二枚貝による横位連続刺突があり、その上部にクシによる横位直線紋が巡る。546 は口縁部と体部の境界部外面に横位のミガキ調整がある。口縁部の一部が剥離している。547・549・554 は体部上位に二枚貝による横位連続刺突が巡る。550 は全体がやや扁平な小型平底壺、551 は外面がハケ調整のみの小型丸底壺、552・557 は単純口縁の小型広口壺で、552 はランダムなミガキ調整が、557 は縦位ミガキ調整が残る。553 はいわゆるヒサゴ壺と思われ、クシによる横位直線紋と二枚貝による横位連続刺突が口縁部外面を巡る。555 は壺底部で外底面にもランダムなミガキ調整が残る。556 は口縁部が幅広い縁帯状となる小型壺で、外面と口縁部内面に横位のミガキ調整が施され、狭い平底となる。558 は頸部が屈曲し口縁部が開く小型壺で、粗い横位のミガキ調整がある。559 は指オサエまたはイタナデ調整される小型壺、560 は外底面にも一方向のミガキ調整が残る。

563 ～ 565 は器台で、563・564 は口縁部が短く直立するもの、565 は口縁部が逆ハ字状に開くものである。上面のミガキ調整は、563 がランダムな方向、564 は一方向、565 は放射状になされる。566・567 は小型高杯、568 は杯部の外側に鍔状の受部を持つ高杯？、569 は脚部が低く杯部が椀型となる高杯？である。570 は外面にクシによる横位直線紋や二枚貝による連続刺突が施されるもので、精製の高杯か。571 は形状が 356・357 に似るが焼成の雰囲気は異なる。

572 はくの字状口縁を持つ鉢で、外面は口縁部が横ハケ調整、体部は斜めハケ調整、底部はケズリ調整とハケ調整が施される。573 と 574 は体部が逆

ハ字状に開きそのまま口縁端部に至る鉢で、底部中央に穿孔が認められる。579 ～ 588 は 08Ab 区から出土した甕口縁部などの土器片である。

589 ～ 601 は 003NR から出土した弥生土器である。589 ～ 593 は太頸壺の体部片で、589・592 は不揃いな工具による波状紋が、590 は不揃いな工具による直線紋が、591 は不揃いな工具による直線紋と波状紋が、593 はクシによる直線紋が施される。594 は口縁部端面にイタによる連続刺突がある甕、596 は台付甕の脚部である。595 は細頸壺の口縁部で、外面上端部にハケ状工具による横位連続刺突を施して 3 条の凹線紋を模しており、その下位にハケ状工具による羽状の連続刺突が巡る。凹線紋系土器の模倣と思われる。597・598 は体部外面にクシによる施紋が残る壺片である。599 ～ 601 は口縁部端面にイタによる連続刺突が巡る甕である。

08C 区 068NR 出土遺物（第 76 図 602 ～ 604） 近世の自然流路であるが、広口壺の口縁部（602）と甕（603・604）などが出土した。

09B 区 026SK 出土遺物（第 76 図 605・606） 605・606 は高杯の杯部で底部から屈曲した口縁部は緩やかに外反するもので、古墳時代中期（松河戸式期に併行）に属する。

08B 区 005SD 出土遺物（第 76 図 610・611） 610 は高杯の杯部で口縁部は直線的に開き赤彩が認められる。611 は単純口縁をもつ甕片である。（鈴木正貴）

（2） B 期

08Aa 区水田遺構出土遺物（第 77 図 614・615） 水田遺構からは須恵器や土師器が出土している。しかし 09C 区で山茶碗が出土していることから、これらが水田の時期に直接関わらないことが判明する。614 は須恵器長頸壺、615 は土師器三河型甕で 8 世紀後葉～ 9 世紀初頭である。

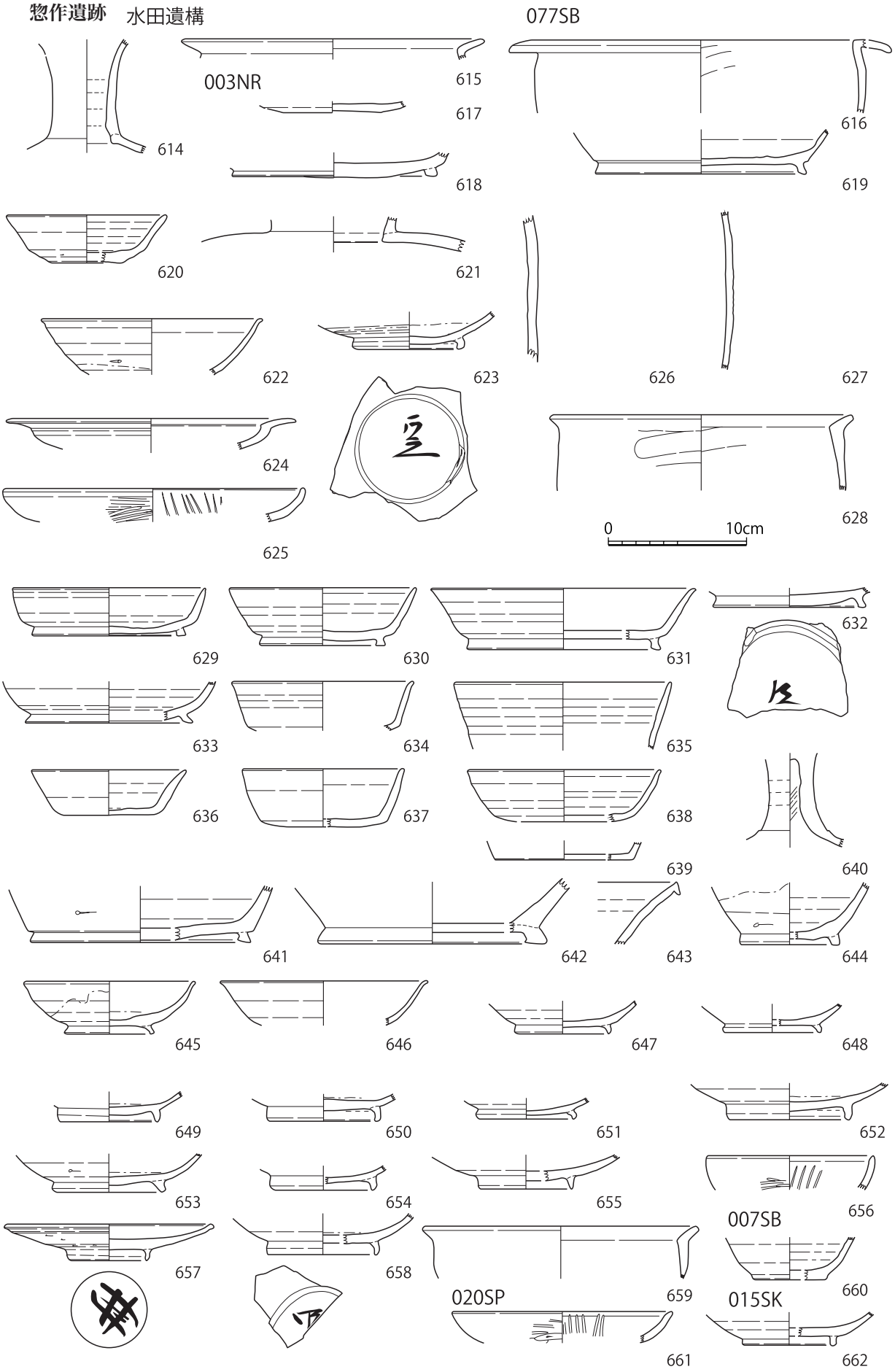
08Aa 区 077SB 出土遺物（第 77 図 616） 616 は土師器三河型甕で、8 世紀後葉～ 9 世紀初頭である。

08Aa 区・08B 区 003NR 出土遺物（第 77 図 617 ～ 659） 出土遺物は、取り上げ時に明らかに 003NR と判明したものの他、検出面やトレンチで出土しながら位置関係から 003NR に該当すると考えられるものも含んでいる。実測図は、08A・B 区各々について須恵器・灰釉陶器・土師器の順に提示する。

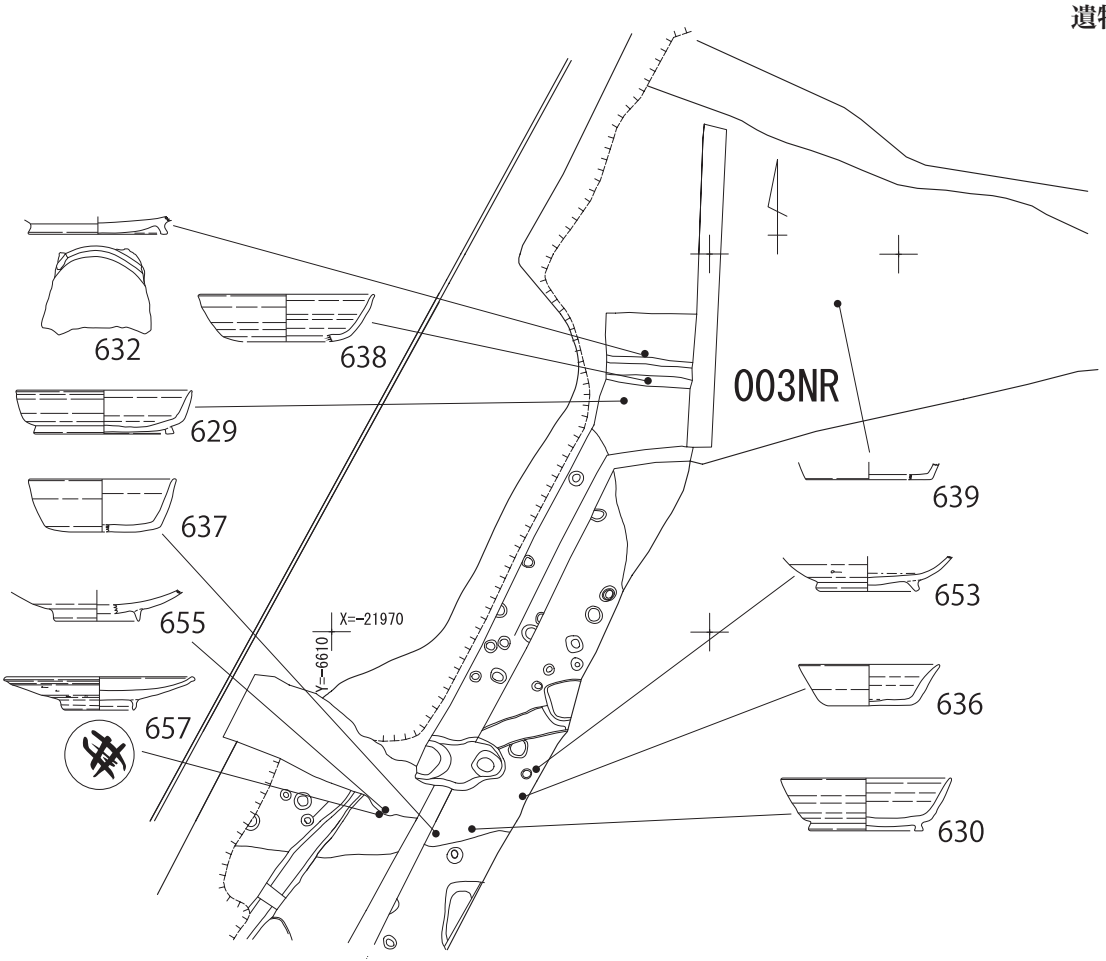
08A 区は流路右岸に相当し、同左岸に相当する。08B 区に比較して土器出土量は少なく、特に灰釉陶器では圧倒的な差がある。617・618・620 は須恵器杯で概ね 8 世紀代である。619 は平瓶の底部とみられる。621 は瓶類の頸部。626・627 は須恵器甕の胴部。622 ～ 624 は灰釉陶器である。623 の底部外面には「豆」の墨書がある。624 は段皿である。概ね K-90 号窯期と考えられる。625 は土師器皿で内面に放射状の暗文、外面は丁寧なヘラミガキがなされる。産地は不明である。628 は土師器三河型甕で、口縁が短く屈曲部が厚いことから 9 世紀後半と考えられる。

08B 区では須恵器・灰釉陶器ともに供膳具が目立つ。629 ～ 635 は須恵器杯である。629 が C-2 号窯期（8 世紀前葉）、それ以外は NN-32 号窯期～ O-10 号窯期とみられる。632 は底部外面に判読不明の墨書がある。636 ～ 639 は須恵器無台杯である。637 は C-2 号窯期、626・638 は NN-32 号窯期、639 は O-10 号窯期である。640 は高盤の脚部。641 は平瓶の底部。642 は水瓶の底部である。643 は甕の口縁部で、いずれも O-10 号窯期に相当するであろう。645 ～ 655 は灰釉陶器椀もしくは皿である。三日月形の高台が多いことから K-90 号窯期を主体とし若干 O-53 号窯期も含まれるであろう。656 は内面に暗文のある土師器杯もしくは杯である。外面横方向のヘラミガキは疎らである。産地は不明である。

08B 区では、土層断面観察による分層にある程度対応して遺物の取り上げを行なっており、流路堆積の下位（第 5 層）から上位（第 2 層）への時間的推移をたどることができる。多くは流路の緩斜面から出土している（第 78 図）。第 5 層からは 629 や 639 の須恵器が出土しており、8 世紀代に相当する。次いで第 4 層からは 634・640 が出土しており、8 世紀後葉に相当する。これら（特に第 5 層）は基本的には混入資料と思われるが、第 4 層および第 5 層上位の堆積時期を反映している可能性がある。第 3 層からは灰釉陶器が出土しており、第 2 層も合わせて 9 世紀後半～ 10 世紀前半に相当する。なお 646 の灰釉陶器は第 5 層出土とされているが、出土グリッドは調査区内でも不安定な状況下にあったため正確ではない。このように当該流路は 8 ～ 10 世紀の



第 77 図　B 期の出土遺物（1）



第 78 図　08B 区 003NR B期の遺物出土分布図

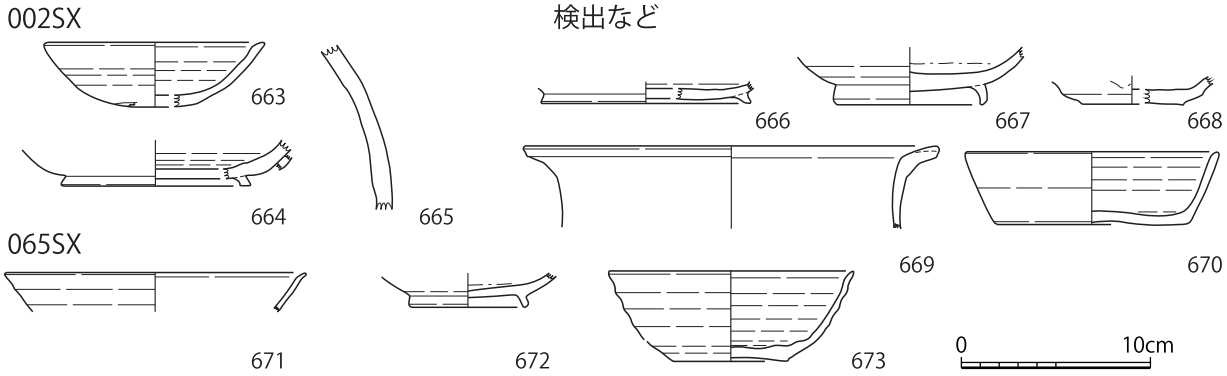
間に進行した堆積であることが示されるが、9 世紀前半に相当する遺物がほとんど見られない点は注意しておかねばならない。

08B 区 007SB 出土遺物（第 77 図 660）　660 は須恵器無台椀である。底部は糸切り離しで O-10 号窯期。

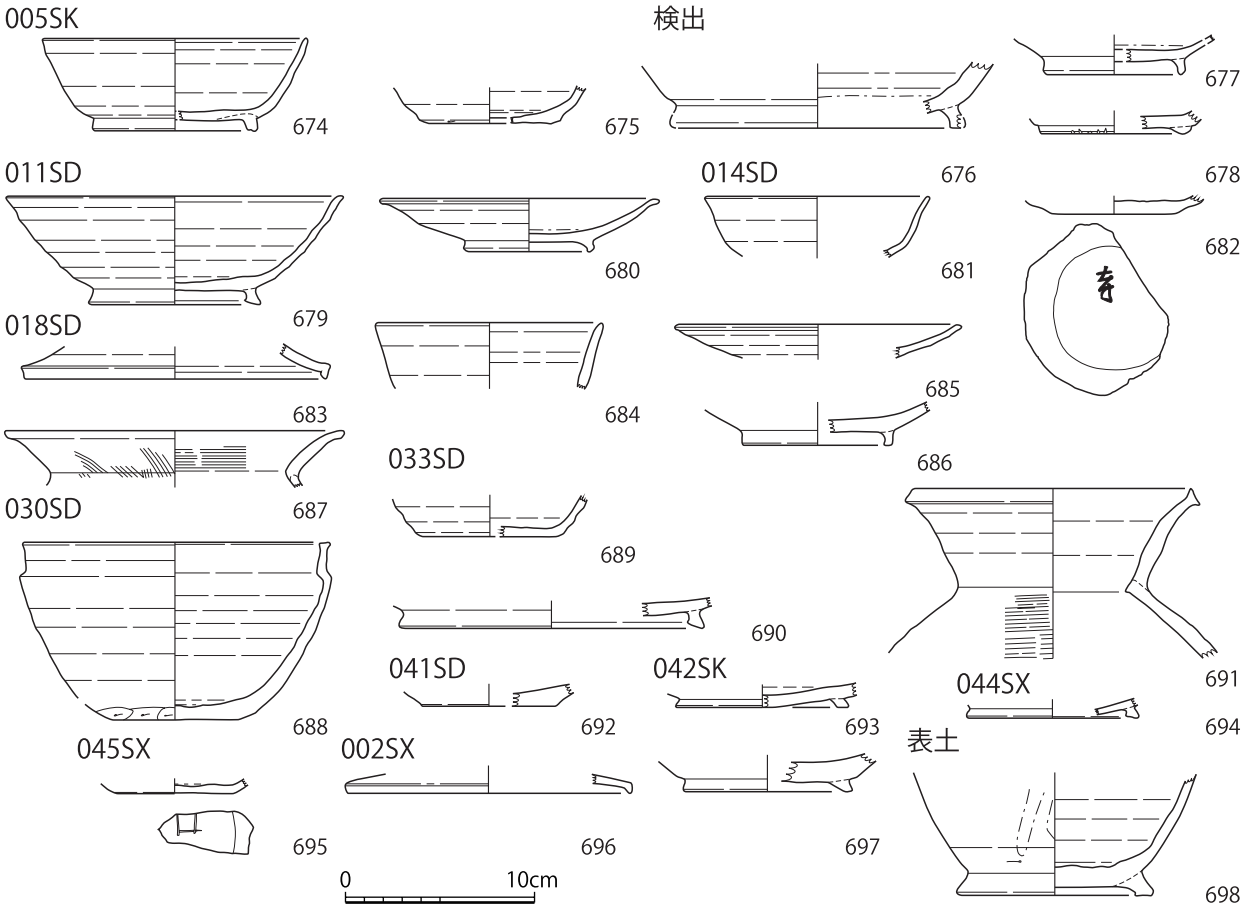
08B 区 020SP 出土遺物（第 77 図 661）　661 は土師器椀で、内面に放射状の暗文、外面に疎らなヘラミガキがなされる。産地は不明である。7 世紀後半～ 8 世紀前半であろう。

08B 区 015SK 出土遺物（第 77 図 662）　662 は灰釉陶器椀。K-90 号窯期で 9 世紀後半。

08B 区 002SX・065SX・その他の出土遺物（第 79 図 663 ～ 673）　近世の掘り込み 002SX には須恵器なども混入している。663 は須恵器無台椀、664 は厚みのある椀で体部に融着がある。665 は甕の胴部。同じく 065SX でも須恵器椀（671）・灰釉陶器椀（672）が出土している。検出面では 8 世紀前



第 79 図　B期の出土遺物（2）



第 80 図　B 期の出土遺物（3）

半と考えられる須恵器杯（666）から K-90 号窯期で 9 世紀後半と考えられる灰釉陶器椀（667）までの遺物が出土している。量が極端に多いわけではないが O-10 号窯期で 8 世紀後葉と考えられる須恵器（668・670・673）が目立っており、08B 区の遺構の主要な時期を示しているものと解される。

09A 区 005SK 出土遺物（第 80 図 674・675）674・675 は須恵器有台・無台杯でいずれも O-10 号窯期古段階で 8 世紀後葉に位置づけられる。

09A 区その他の出土遺物（第 80 図 676 ～ 678）676 は須恵器瓶類の底部であるが、復元される底径から平瓶の可能性が考えられる。O-10 号窯期以降で 8 世紀末～ 9 世紀代である。677 は灰釉陶器椀で K-90 号窯期。678 は山茶碗で底径から初期段階とみられる。

09B 区 011SD 出土遺物（第 80 図 679・680）679 は須恵器椀。O-10 号窯期。下層の 030SD で出土した破片と接合しており、広口壺（688）とほぼ同じ時期に使用されたものであろう。680 は灰釉陶器皿。小さく三日月高台で口縁は玉縁となる。K-90 号窯期古段階で 9 世紀中葉。破片は併行する 029SD やそれを切り込む 014SD などでも出土している。029SD・030SD として掘られた斜行溝の埋没時期を示すと考えられる。

09B 区 014SD 出土遺物（第 80 図 681）680 はもともと 029SD に含まれていたものものである。681 は須恵器椀。遺構の重複関係から 014SD は 680 よりも新しい時期と考えられるが、直接それを示す遺物の出土はない。

09B 区 018SD 出土遺物（第 80 図 682 ～ 687）出土遺物は小片が多い。682 は須恵器無台杯で底部全面をヘラケズリする。底部外面に「寺」墨書がある。O-10 号窯期古段階で 8 世紀後葉に位置づけられる。683・684 は須恵器の蓋・杯で O-10 号窯期。685 は灰釉陶器皿。686 も灰釉陶器椀で K-90 号窯期。018SD が埋没した時期の上限を示すものと考えられる。687 は土師器甕。口縁内外面にハケ調整痕がみられる。古墳時代中期もしくは 7 世紀後半～

8 世紀前葉の長胴甕の可能性がある。

09B 区 030SD 出土遺物（第 80 図 688） 688 は須恵器広口壺。胴部立ち上がりにヘラケズリがなされる。頸部の屈曲が少なく、時期は 8 世紀中葉とみられる。

09B 区 033SD 出土遺物（第 80 図 689 ～ 691） 689 は須恵器無台杯、O-10 号窯期。690 は須恵器杯もしくは盤。038SD や 042SK 出土の破片もこれに接合した。691 は須恵器甕。口縁端部は斜めで胴部外面に平行タタキ痕がみえる。

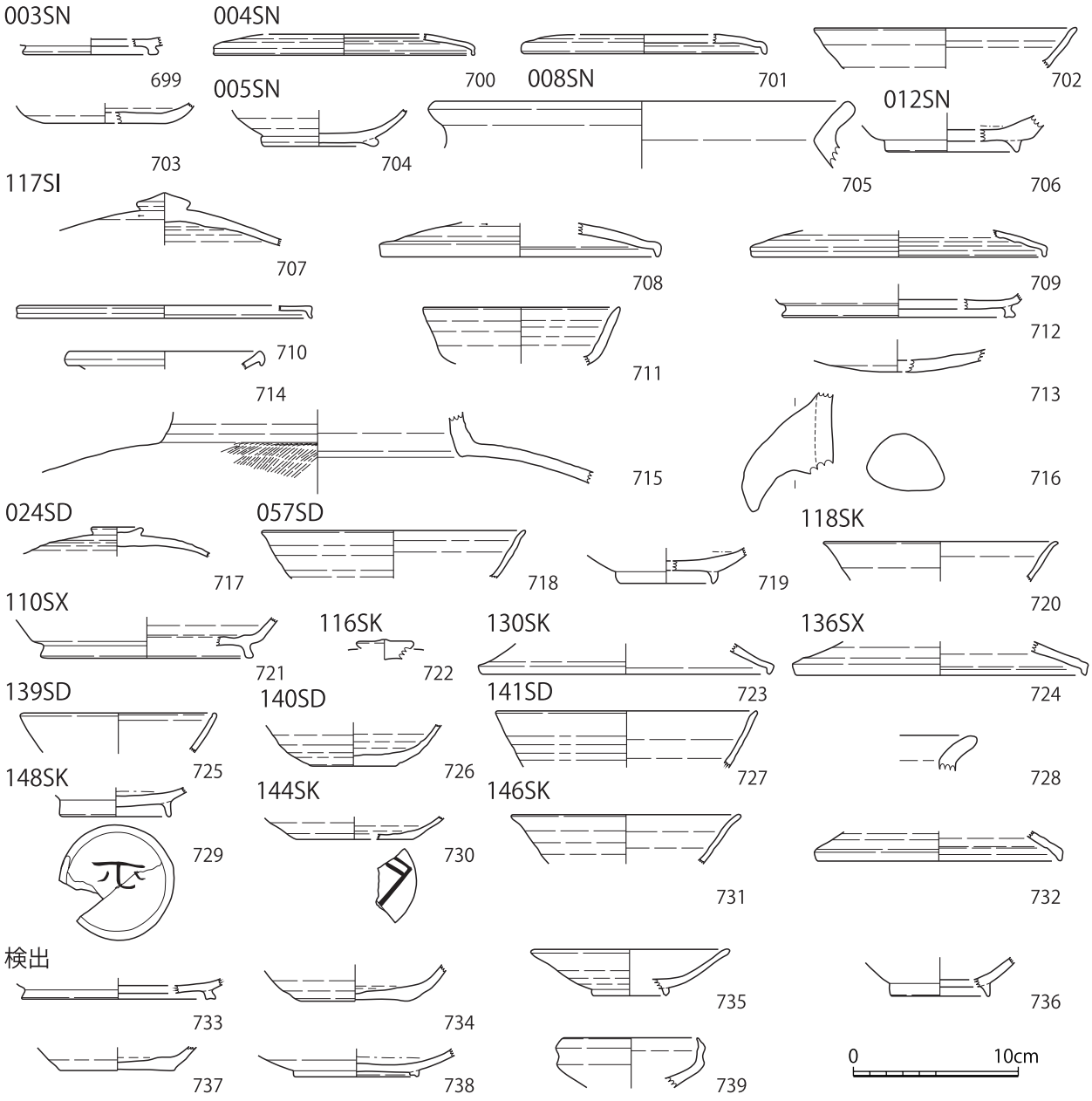
09B 区 041SD 出土遺物（第 80 図 692） 692 は須恵器無台杯。

09B 区 042SK 出土遺物（第 80 図 693） 693 は須恵器杯もしくは盤の底部。高台より底部がやや下へ突出する。8 世紀代とみられる。

09B 区 044SX 出土遺物（第 80 図 694） 694 も 693 と同様である。8 世紀代の可能性が考えられる。

09B 区 045SX 出土遺物（第 80 図 695） 695 は須恵器無台杯の底部。外面に焼成前の刻書がある。「＃」のようである。

09B 区 002SX 出土遺物（第 80 図 696） 須恵器蓋である。滑らかな曲線でかえりも小さい。8 世紀前



第 81 図　B 期の出土遺物（4）

半である。

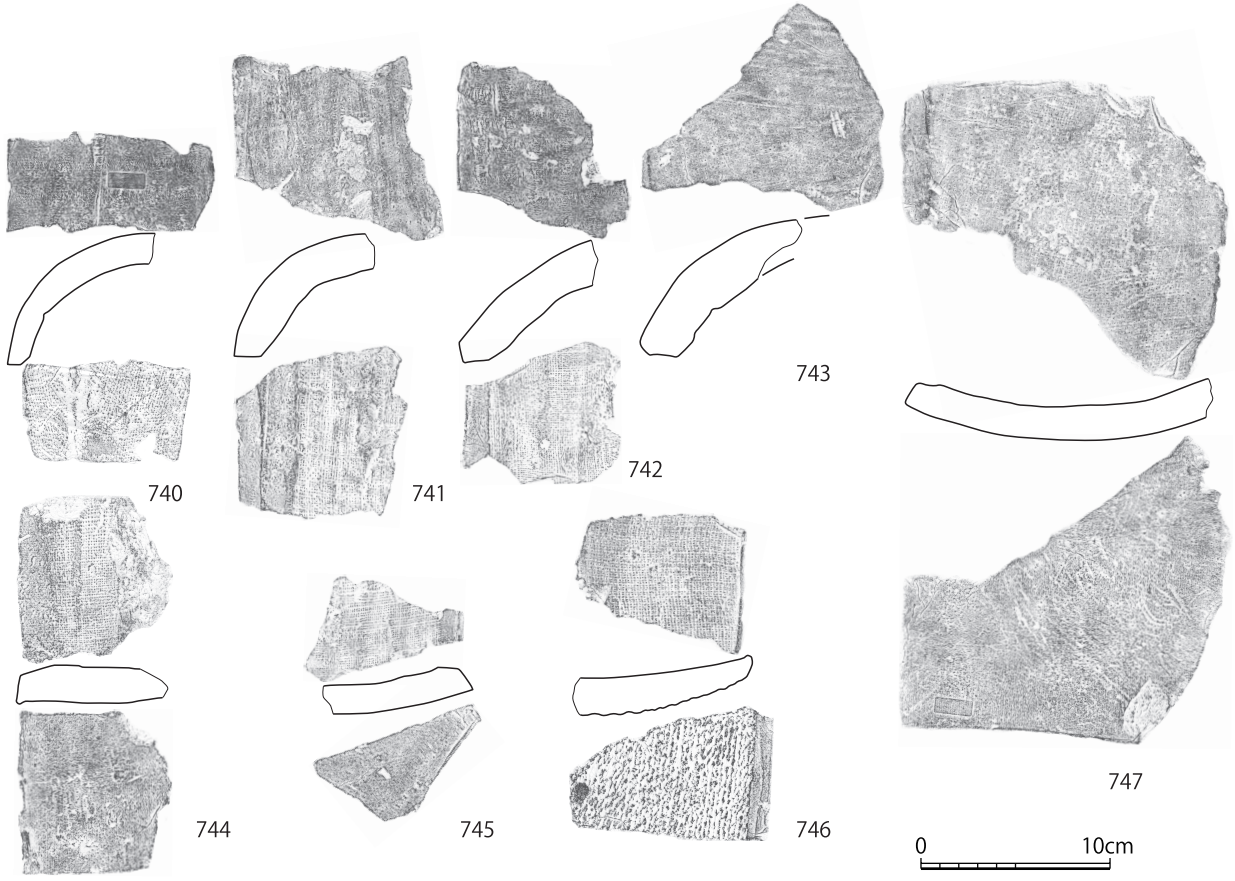
09B 区検 1・表土の出土遺物（第 80 図 697・698）

697 は山茶碗であるが、貼付けの高台が明瞭で比較的初期段階のものである。09C 区水田遺構で出土したもの（675）に近い。11 世紀後半を中心とする時期である。698 は須恵器水瓶の底部である。外面に自然釉が流下する。8 世紀末～ 9 世紀代である。

09C 区水田遺構（SN）出土遺物（第 81 図 699 ～ 706）　水田遺構を検出した黒色粘土層は、その下面で検出された古代の集落遺構に関わる遺物包含層である。したがって、出土遺物の大半は須恵器（699 ～ 703）・土師器（705）・灰釉陶器（704）である。須恵器は概ね 8 世紀前半で、土師器は 9 世紀後半の三河型甕である。灰釉陶器は H-72 号窯期であろう。そして注目されるのが水田遺構である擬似畦畔直上で出土した初期段階の山茶碗（706）で、出土遺物の時期幅の下限に位置している。水田が機能していた時期の一定点を示す資料である。

09C 区 117SI 出土遺物（第 81 図 707 ～ 716）　須恵器と土師器がある。須恵器は蓋（707 ～ 710）と杯（711 ～ 713）と瓶類の口縁部（714）と甕（715）がある。いずれも小片であるが、8 世紀前葉～中葉のものであり、117SI の時期を示していると考えられる。土師器は把手部分であるが大きさから移動式竈の把手と考えられる。117SI では造り付け竈跡は検出されなかったことから、こうした移動式竈を使用していた可能性も考えられる。

09C 区土坑・ピット出土遺物（第 81 図 717 ～ 731）　竪穴建物以外からは散発的に小片が出土する程度である。概観すると須恵器・灰釉陶器が大半で若干の土師器（728）がある。須恵器無台椀（726）などは 8 世紀後葉の可能性があるがこの時期の遺物はごく少数である。注目されるのは掘立柱列とその周辺で墨書土器 2 点が出土していることである。729 は灰釉陶器で、K-90 号窯期～ O-53 号窯期の椀の底部外面に明瞭な墨書がある。「心」にも読めるが、変形させて花押のような使い方をしていたのかもしれない。730 は須恵器無台椀の底部外面墨書である。門構えの一部のようでもあるが判読不明。器自体は薄く緩い立ち上がりで 9 世紀中葉のものと



第 82 図　B 期の出土遺物（5）

考えられる。

09C 区検出面・その他の出土遺物（第 81 図 732 ～ 739） 検 2 面は古代集落遺構の検出面であり、出土遺物は須恵器・灰釉陶器がほとんどである。須恵器（732 ～ 734）は概ね 8 世紀前葉～中葉である。灰釉陶器（735・736）は 9 世紀後半以降で、8 世紀後葉～ 9 世紀前半の空白期間があることがわかる。トレンチ出土遺物も同様の傾向を示すが、739 のように一見須恵質な焼成で白色を呈する土器については時期等不明な点がある。中世以降のものかもしれない。

瓦（第 82 図 740 ～ 747） 瓦は総破片で 83 点出土しており、全てが古代のものである。当該遺跡の南西約 300m には 7 世紀後半創建の古代寺院である寺領廃寺があり、そこで使用された瓦と共通する点が多い。そのため寺領廃寺への供給瓦が流出した可能性も考えられるが、これまでの発掘調査で、04C 区では比較的大きな破片の丸・平瓦が 75 点出土しており、ここを中心として遺跡内に瓦葺き建物があった可能性を想定しておく必要がある。ここでは丸瓦と平瓦に大別して報告するが、丸・平瓦を通じた傾向として、凸面のナデをおこなうものが多い点が指摘されよう。

740 は無段式丸瓦である。裁頭円錐形模骨に粘土板を巻き付けて成形したもので、凸面は全面横方向ヘラナデでタタキは不明。凹面は布目痕と分割界線、側縁はヘラケズリによる面取りがみられる。08B 区 003NR 第 2 層出土。741 は有段式もしくは無段式丸瓦である。一木の模骨に粘土板を巻き付けて成形したもので、凸面は縦方向の指ナデ、凹面は布目痕と側縁のヘラケズリによる面取りがみられる。色調は明灰褐色で焼成は硬質である。08B 区の包含層出土。742 は無段式丸瓦である。側板連結模骨に粘土板を巻き付けて成形したもので、凸面は全面指ナデするものの格子タタキらしき痕跡がみえる。凹面は模骨の側板痕と布目痕がある。側縁は 2 度ヘラケズリによる面取りをする。色調は青灰色で焼成は硬質である。08B 区の包含層出土。743 は無段式丸瓦である。裁頭円錐形模骨に粘土板を巻き付けて成形したもので、凹面に粘土板切り出し時の糸切痕と、分割の目印を刻み込むために模骨に付属させた紐痕（分割界線）がみえる。凸面を全面ナデておりタタキは不明。色調は暗灰褐色で焼成は硬質である。側縁は凸・凹面で 2 度のヘラケズリによる面取りをする。08Aa 区 003NR 出土。

744 は反りが全くなく、熨斗瓦の可能性が考えられる。桶巻き作りで成形し、凹面に布目と側縁にヘラケズリによる面取りがみられる。凸面は横方向ヘラナデしておりタタキは不明。色調は明橙色で焼成は硬質。08B 区包含層出土。745 は桶巻き作りで成形し、凸面は丁寧な指ナデでタタキは不明。08Ab 区 003NR 出土。746 は凸型成形台による一枚作りである。凹面は布目のみみられ、凸面は側縁平行の縄タタキ痕がある。凸面側縁をヘラケズリによる若干の面取りをする。色調は灰色で焼成は硬質である。08Aa 区 003NR 出土。747 は桶巻き作りで成形し、凹面に布目とかすかに模骨痕がみえる。凸面は斜位の縄タタキののちナデ消している。色調は灰白色で焼成は硬質である。08B 区の包含層出土。（永井邦仁）

（3） C 期

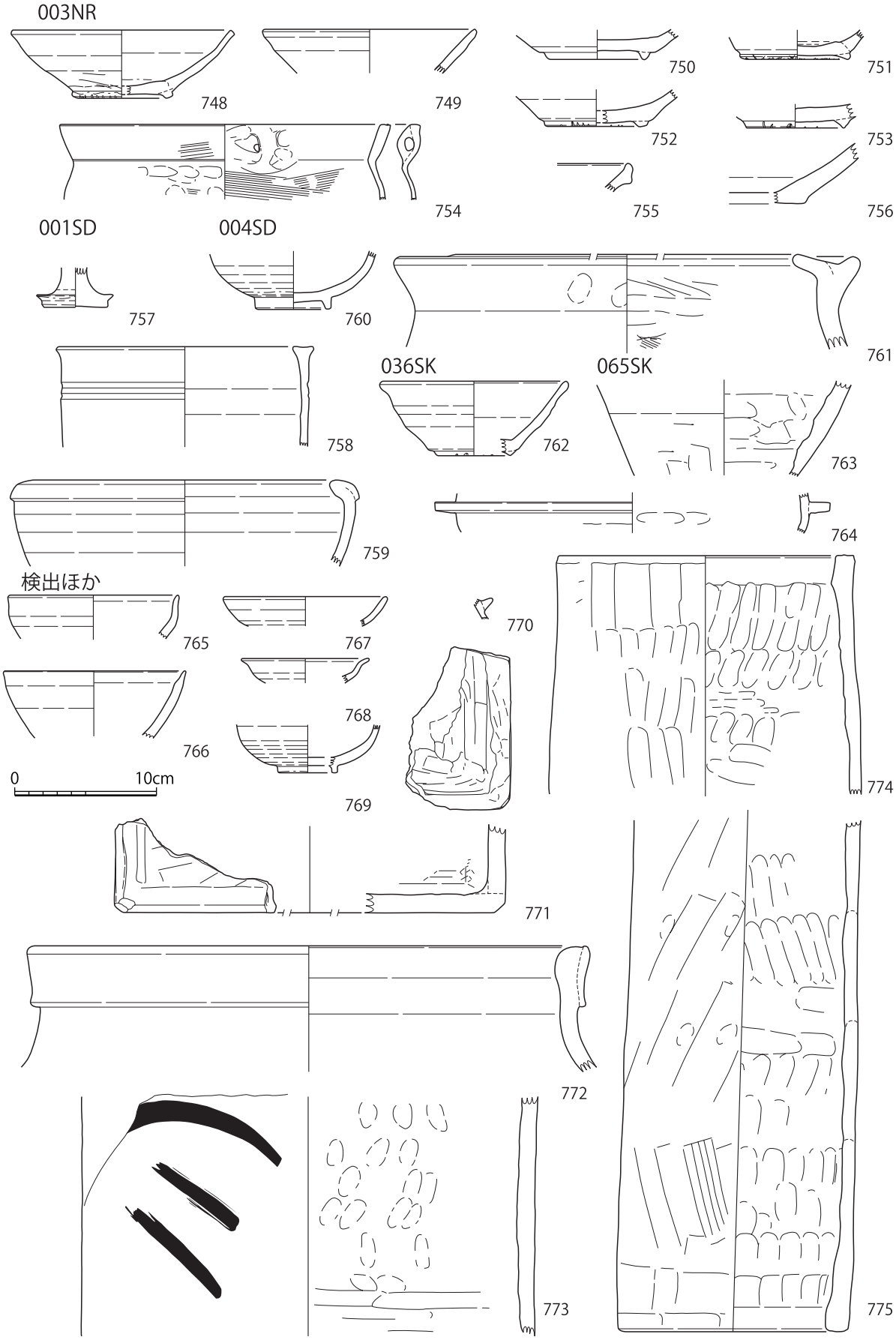
08Aa 区・08B 区 003NR 出土遺物（第 83 図 748 ～ 756） 003NR では第 1 層を中心に中世以降の遺物が出土しているが、概ね 9 世紀後半～ 10 世紀前半に属する第 2・3 層からも新しい資料が散見される。748 ～ 753 は尾張型山茶碗で概ね第 5 型式から第 6 型式に属する。754 は土師器内彎形内耳鍋で、口縁部が直線的にやや開くもので、16 世紀前半頃に位置づけられる。755 は瀬戸・美濃窯産陶器擂鉢で大窯前半。756 は常滑窯産陶器赤物製品の底部であり、16 世紀以降のものであろう。

08B 区 001SD 出土遺物（第 83 図 757 ～ 759） 757 瀬戸・美濃窯産陶器鉄釉秉燭、758 は瀬戸窯産陶器鉄釉半胴甕、758 は瀬戸窯産陶器灰釉火鉢で、いずれも 19 世紀前半に位置づけられる。

08B 区 004SD 出土遺物（第 83 図 760・761） 760 は瀬戸・美濃窯産陶器灰釉丸碗、761 は常滑窯産陶器赤物甕で概ね 18 世紀の属する。

09B 区 036SD 出土遺物（第 83 図 762） 762 は第 7 型式に属する尾張型山茶碗である。

08C 区 065SX 出土遺物（第 83 図 763・764） 763 は古瀬戸製品の壺または瓶類、764 は土師器羽付釜の鍔部である。764 は 15 世紀後半～ 16 世紀



第 83 図　C 期の出土遺物

に属する。

その他の出土遺物（第 83 図 765 ～ 775） 765・766 は瀬戸・美濃窯産陶器天目茶碗で、前者は 08C 区深掘調査、後者は 08B 区表土から出土している。767 は大窯第２段階の灰釉丸皿、768 は大窯第１段階の灰釉端反皿、769 は腰錆茶碗で 08A 区の出土資料である。770 は 09A 区から出土した土師器内彎型羽釜の鍔部である。771 ～ 775 は常滑窯産陶器赤物製品で、771・773 は 08B 区、772 は 08A 区、774・775 は 08C 区 068NR の上層から出土した。771 は平面長方形の火鉢類、772 は赤羽中野編年 11 型式に属する甕、773 は外面に墨書が記された井筒？、774・775 は土管である。（鈴木正貴）

第２節　木製品

木製品の所属時期は出土遺構から、深掘調査：古井式期？、08Aa 区・08B 区 003NR 第 5 層：廻間Ⅱ式期、08Aa 区・08B 区 003NR 第３層：古代（10 世紀？）、08C 区 068NR・08B 区 002SX：江戸時代後期と考えられる。

以下、古い時期から順を追って記述を進めていくが、最後に古代の木簡を紹介する。

（1）深掘調査出土木製品（第 84 図 776 ～ 779）

概ね古井式期に属する資料である。776 はコナラ節の芯持ち材で、上端部が二又に分かれることから、竪穴建物の柱材である可能性が高い。777 と 778 は幅の狭い板で、樹種は 777 がヒノキ、778 がタケ亜科。779 は残材で、樹種はエノキ属。

（2）08Aa 区・08B 区 003NR 第 5 層出土木製品

廻間Ⅱ式期に属する木製品は 82 点で、掘削具（780 ～ 788）、農具（789）、工具（790・791）、調度品（792）、容器（793 ～ 797・799）、祭祀具・威儀具（798・800）、建築部材（801 ～ 813）、土木材（814・819・820）、丸棒（815 ～ 817・821 ～ 823）、角棒（824 ～ 828）、板（829 ～ 848）、分割材（849 ～ 857）、丸太（858 ～ 860）がある。

掘削具（第 85 図 780 ～ 788） 780 は伊勢湾型曲柄鍬の軸部で、筆者分類の D 類に属する（樋上 2000）。樹種がコナラ節であることから、曲柄平鍬であることがわかる。783・784・786・787 はいずれも伊勢湾型曲柄平鍬の刃部で、筆者分類の I 類にあたる。すべて樹種はコナラ節。781 は伊勢湾型曲柄三又鍬で、樹種はアカガシ亜属。782 は伊勢湾型曲柄四又鍬で、軸部は C 類。樹種はアカガシ亜属。785・788 は上記曲柄鍬の膝柄で、いずれもサカキの枝分かれ部分を用いる。

農具（第 86 図 789） 789 は臼で、周囲３方向に棒状の把手を残して透かし彫りを入れる、いわゆる把手臼である。樹種はケヤキの芯持ち材を用いている。

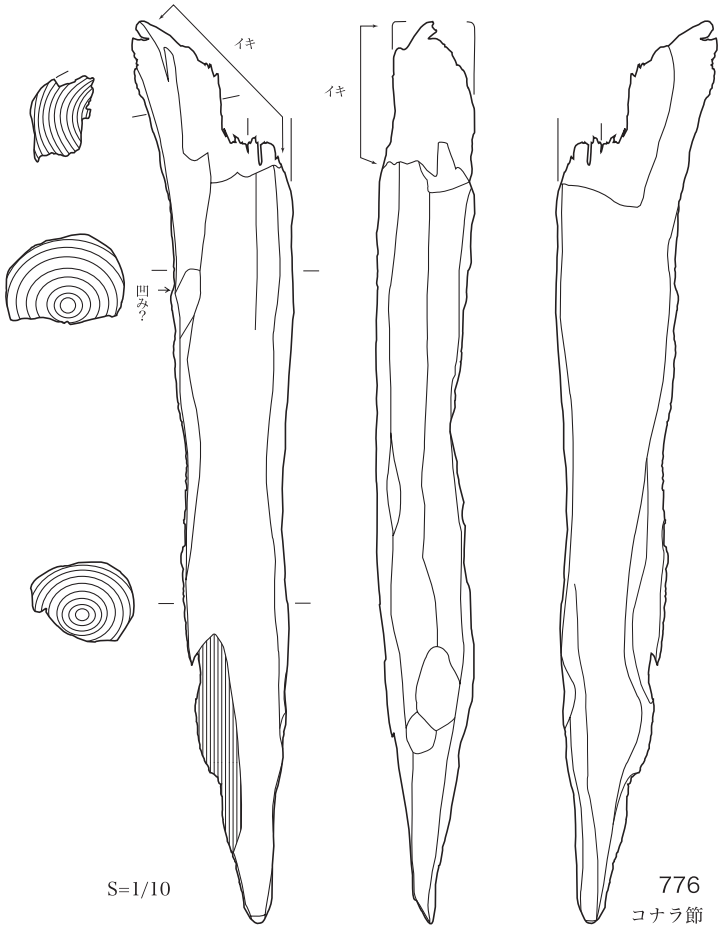
工具（第 86 図 790 ～ 791） 790 は横斧柄で、台部の先端には袋状鉄斧を装着するよう、作られている。台部には一条、凸帯をめぐらせ、鉄斧装着部分も丁寧にヤリガンナで加工をほどこすなど、通常の横斧柄とは異なるきわめて精巧なつくりである。樹種はアカガシ亜属の枝分かれ部分を用いる。

791 はヒノキの柾目板で、図面上の中央から下端部にかけて、薄く仕上げられていることから、ヘラと判断した。

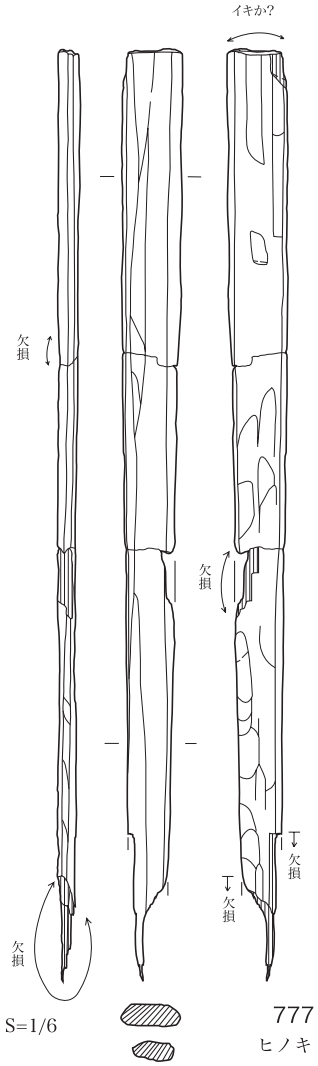
調度品（第 86 図 792） 792 は案（肘掛け）で、両端部付近に脚部を差し込むための、方形の穿孔をほどこす。樹種はツブラジイの板目材。

容器（第 87・88 図 793 ～ 797・799） 799 は長軸 8.2cm、短軸 4.4cm、高さ 2.0cm で、平面が楕円形を呈し、わずかな立ち上がり部分の周囲には 15 カ所の穿孔があり、さらに底部中央にも穿孔をほどこす。立ち上がり部分の穿孔からカゴ状のものを編んで立ち上げたものと考えられることから、カゴの底板としている。樹種はヒノキ。愛知県内では、春日井市勝川遺跡と一宮市八王子遺跡からほぼ同形のものが出土しているが、この両者については、底部中央の穿孔はない（愛知県埋蔵文化財センター 1992・2001）。

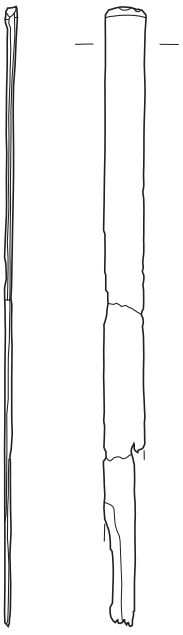
796 は破片資料で接合する部分はほとんどないが、底部の 4 カ所に低い脚がつく槽である。平面形は隅丸長方形になると思われる。樹種はクスノキの 2 分の 1 分割材からの横木取り。794 はクリの横木取り 2 分の 1 分割材を用いた槽で、平面は長方形を呈する。793・795 もクスノキの横木取り 2 分の 1 分割材から作った槽で、平面形は長楕円形を呈し、793 には破損後に再接合をおこなったとみられる穿



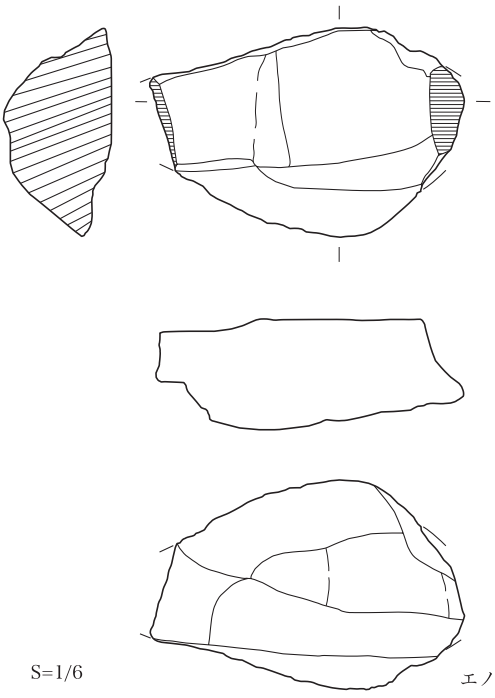
776
コナラ節



777
ヒノキ

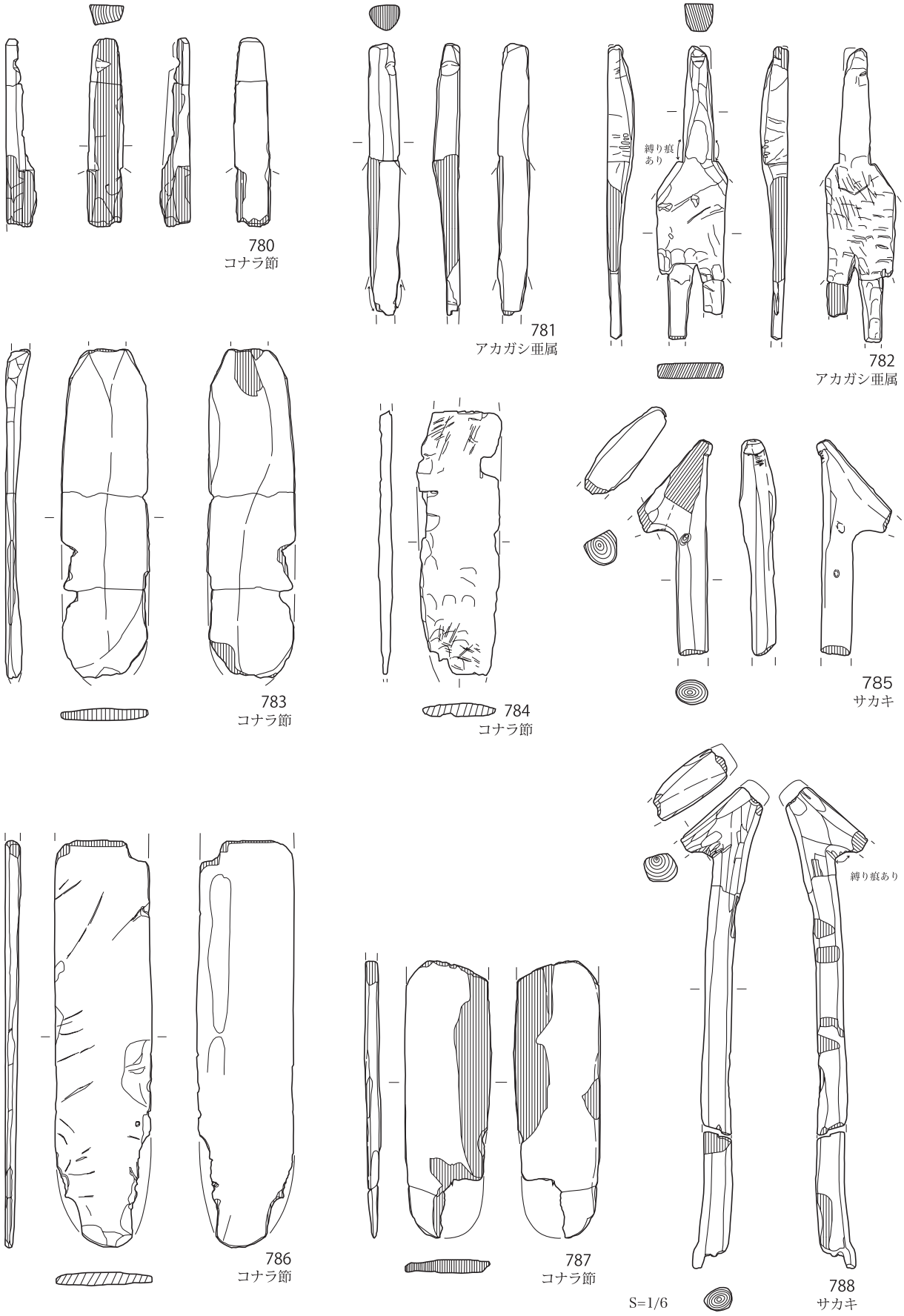


778
タケ亜科

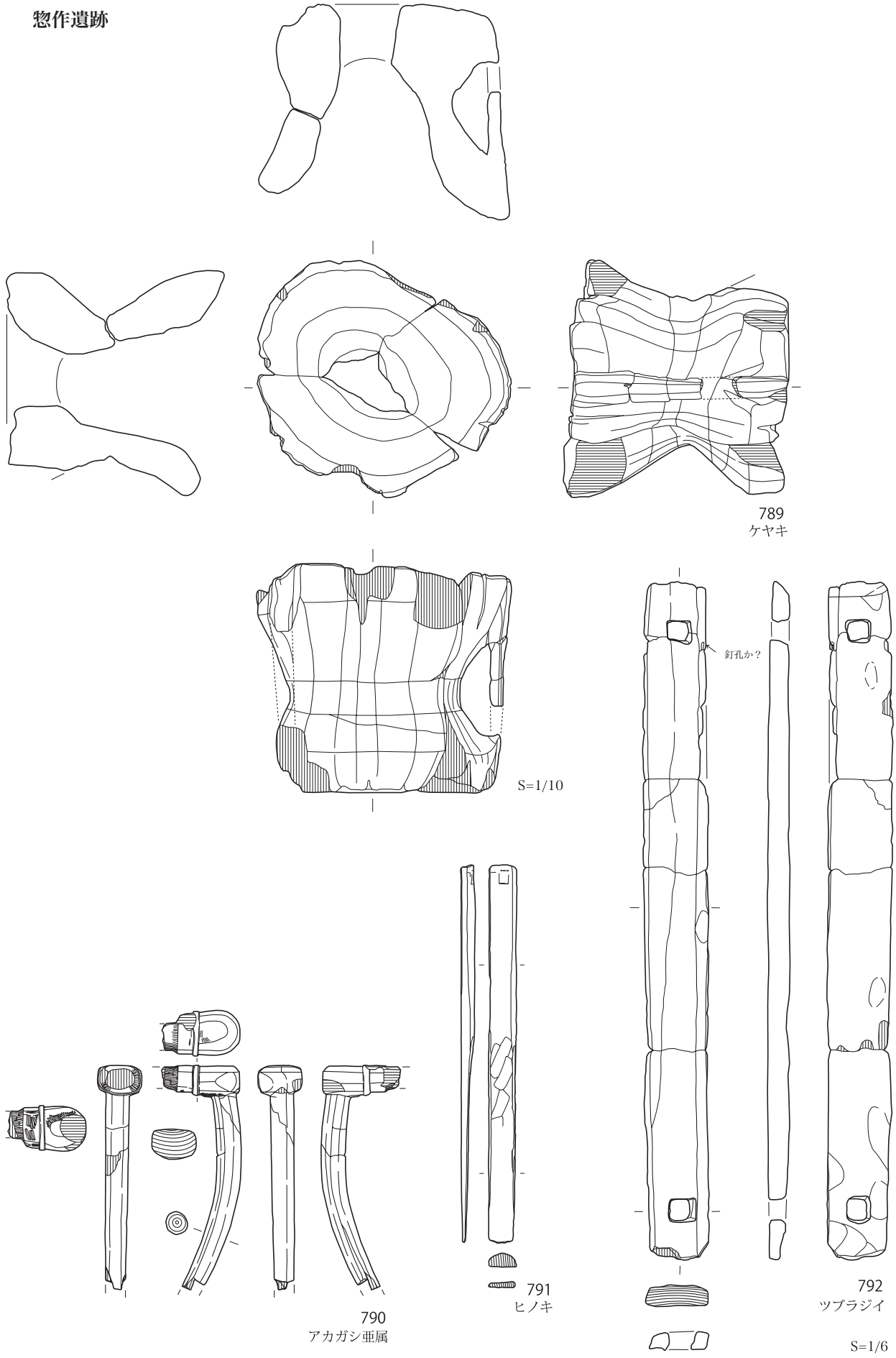


779
エノキ属

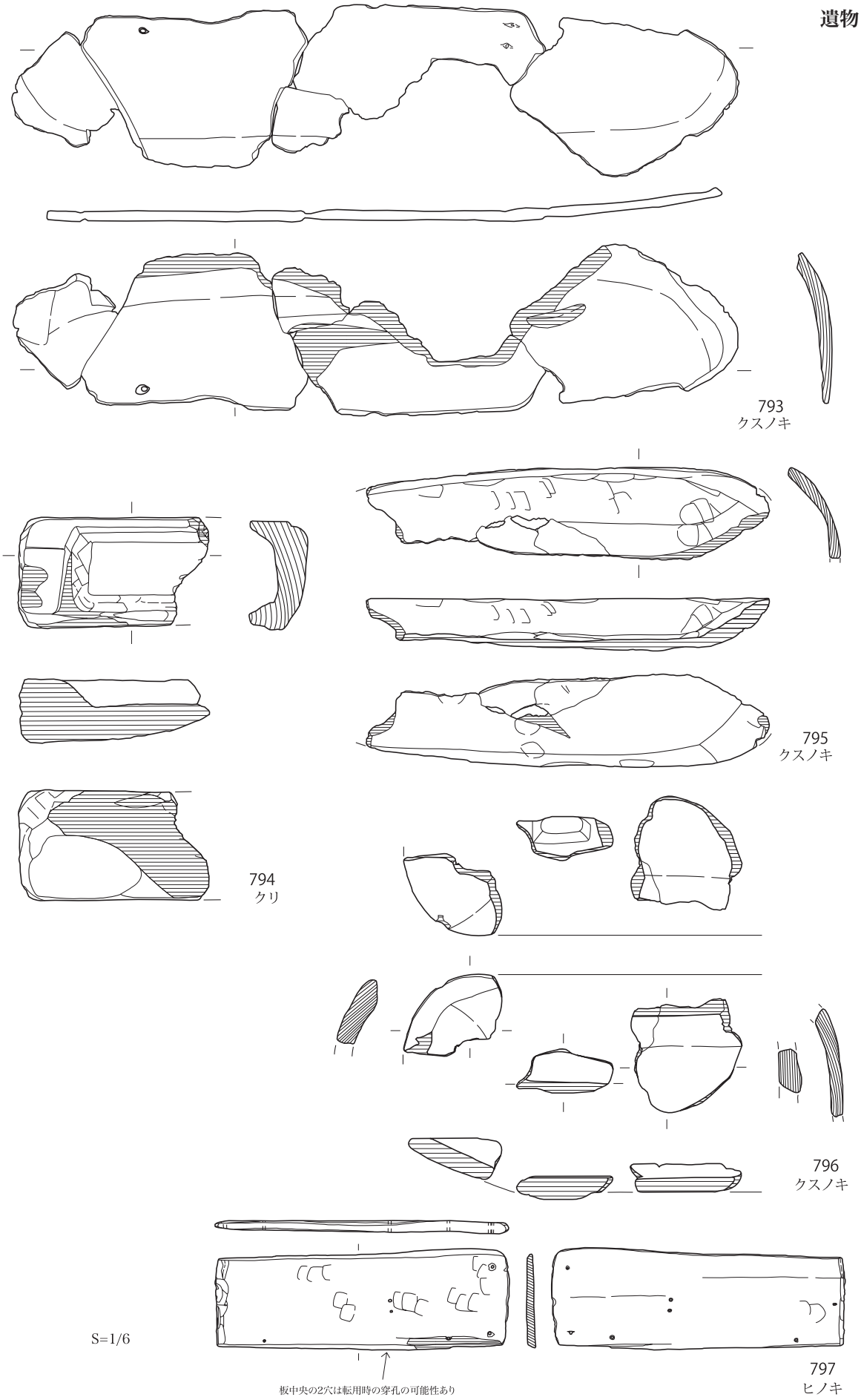
第 84 図　木製品（1）


780
コナラ節
781
アカガシ亜属
縛り痕
あり
782
アカガシ亜属
783
コナラ節
784
コナラ節
785
サカキ
縛り痕あり
786
コナラ節
787
コナラ節
S=1/6
788
サカキ

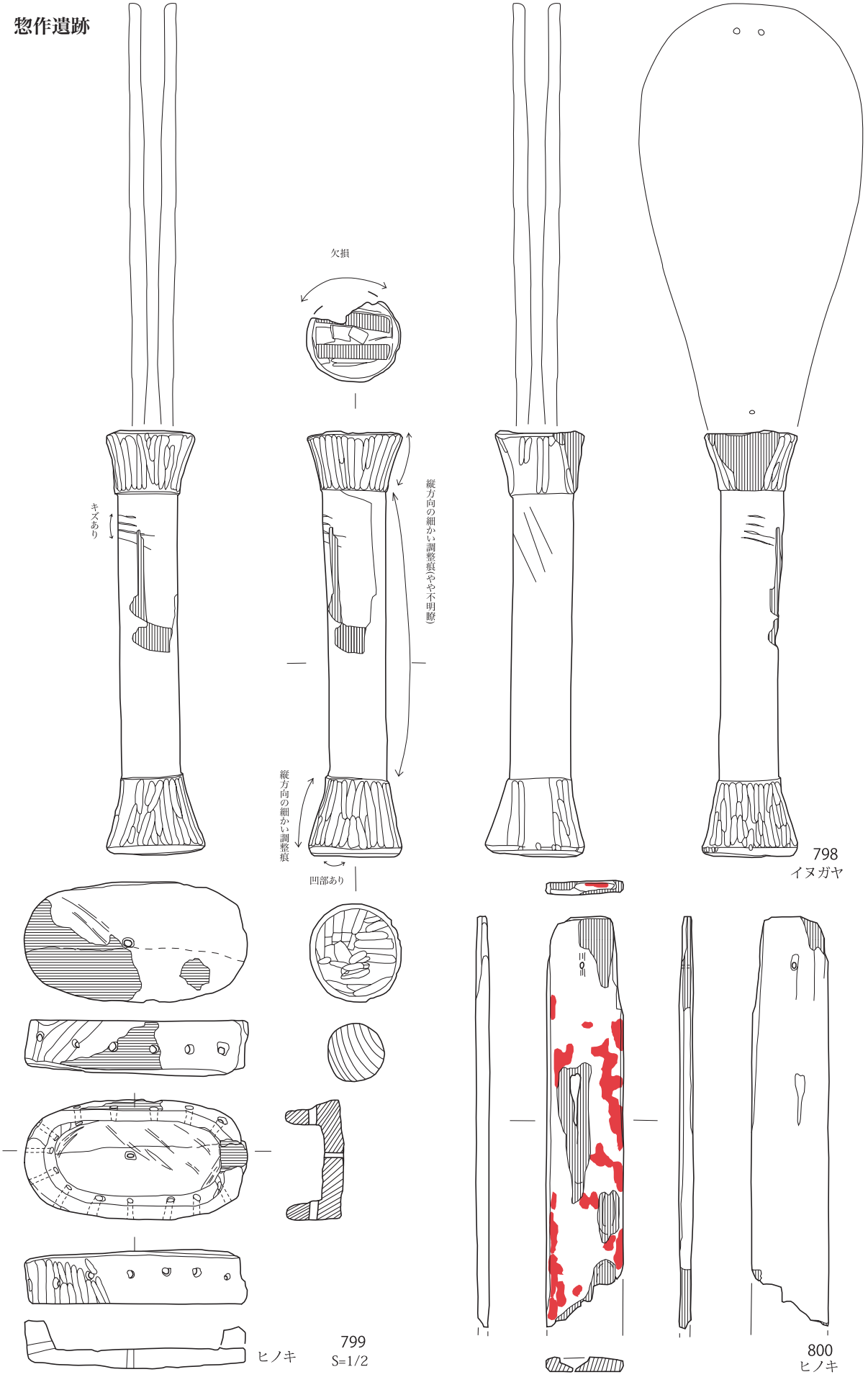
第 85 図　木製品（2）



第 86 図　木製品（3）


793
クスノキ
795
クスノキ
794
クリ
796
クスノキ
S=1/6
板中央の2穴は転用時の穿孔の可能性あり
797
ヒノキ

第 87 図　木製品（4）


欠損
キズあり
縦方向の細かい調整痕(やや不明瞭)
縦方向の細かい調整痕
凹部あり
798
イヌガヤ
799
S=1/2
ヒノキ
800
ヒノキ

第 88 図　木製品（5）

孔がある。

797 は箱の側板で、短辺は片側に 2 カ所、もう一方に 1 カ所の穿孔、長辺は底部にあたる辺に 2 カ所の穿孔があり、さらに中央付近にも縦方向に 2 カ所の穿孔をほどこす。樹種はヒノキの柾目材。

祭祀具・威儀具（第 88 図 798 ～ 800） 798 は団扇形木製品で、獣毛や鳥の羽などを挟み込んだと考えられる 2 枚の板からなる要部は欠損しているが、受部の上面に要部の痕跡が残っている。握部はほぼ直線的で、受部と鐓部はわずかに段をなしてハの字状に広がる。受部と鐓部には縦方向のヤリガンナ痕が明瞭に残る。残存長は 15.6cm で、鈴木裕明氏による団扇形木製品の分類では、③類に属する。鈴木氏によると、これまで出土している③類の団扇形木製品はいずれも樹種がヒノキの心去り材（分割材）を用い、畿内中枢部で製作されたとしている（鈴木 2001）。しかし本遺跡例はイヌガヤの分割材で樹種が異なるうえ、鈴木氏の実見でも他の③類と少し異なり、在地で製作した可能性を指摘されている。

800 はヒノキの柾目板で、片面と図面上の上側面に赤彩をおこない、上端付近に穿孔をほどこす。用途は不明だが、何らかの祭祀具である可能性が高い。

建築部材（第 89 ～ 91 図 801 ～ 813） 801 ～ 805 は柱で、うち 802 ～ 804 は上端部に段を設ける。801 は丁寧に面取りをほどこす。樹種は 801 がマキ属、802・803・805 がコナラ節、804 がクヌギ節で、いずれも芯持ち材。

806・807 は垂木で、樹種は 807 がマキ属、806 はクスノキ科の芯持ち材。

811 はマグサあるいは蹴放しで、樹種はクリの板目材。両側に辺付が入る方形の穿孔部とそれに続く方立をはめ込む溝があり、図面上の左側に扉の軸穴が方立の溝に接して開いている。扉の軸穴は方形で、片側にしかないことから、片開きの扉であることがわかる。軸穴が貫通していないことから、蹴放しである可能性が高い（奈良国立文化財研究所 1993）。扉を止めるための扉当りはない。

810 は梯子で、2 段のステップが残る。樹種はマツ属の芯持ち材。809 は輪なぎこみの細工をほどこす建築部材で、樹種はヒノキの 4 分の 1 分割材。808 はヒノキの板目材を用いた棒状品で、3 カ所に別材が当たった痕跡と思われる凹みがある。812 はマキ属の 2 分の 1 分割材で、面取りした両側縁に別材を接合するための太栓をはめ込む穴を 2 カ所ずつ開けている。非常に分厚い床板あるいは壁材と考えられる。813 はコナラ節の芯持ち材で、2 カ所に切れ込みが入る。横架材として用いられた可能性が高い。

土木材（第 92 図 814・819・820） 814・819・820 は杭。樹種は 814 がコナラ節、819 がスダジイ、820 がガマズミ属で、いずれも芯持ち材。

丸棒（第 92 図 815 ～ 817・821 ～ 823） 815 は有抉丸棒で、コナラ節の芯持ち材。同様の有抉丸棒が姫下遺跡からも 2 点出土している。817・818 はヒノキ、816・821・822 はマキ属、823 はアカガシ亜属の丸棒。

角棒（第 93 図 824 ～ 828） 824 はマキ属の有頭角棒。825 は 2 カ所に穿孔を有するスギの角棒。826 はヒノキ、827 はスギ、828 はアカガシ亜属の角棒。

板（第 93・94 図 829 ～ 848） 830・831 はヒノキ、829・832 ～ 834 はツブラジイの穿孔板。835 ～ 844・846 はヒノキ、845 はサワラ、847・848 はクリの板。

分割材（第 95・96 図 849 ～ 857） 849 はクヌギ節の 2 分の 1 分割材で、両端部付近に浅く方形の溝を彫る。850 はクヌギ節の 8 分の 1 分割材。851 はヒノキ、852 はクリ、853 はツブラジイ、855 はエノキ属、854 はムクノキの 4 分の 1 分割材。856・857 はムクノキの 2 分の 1 分割材。

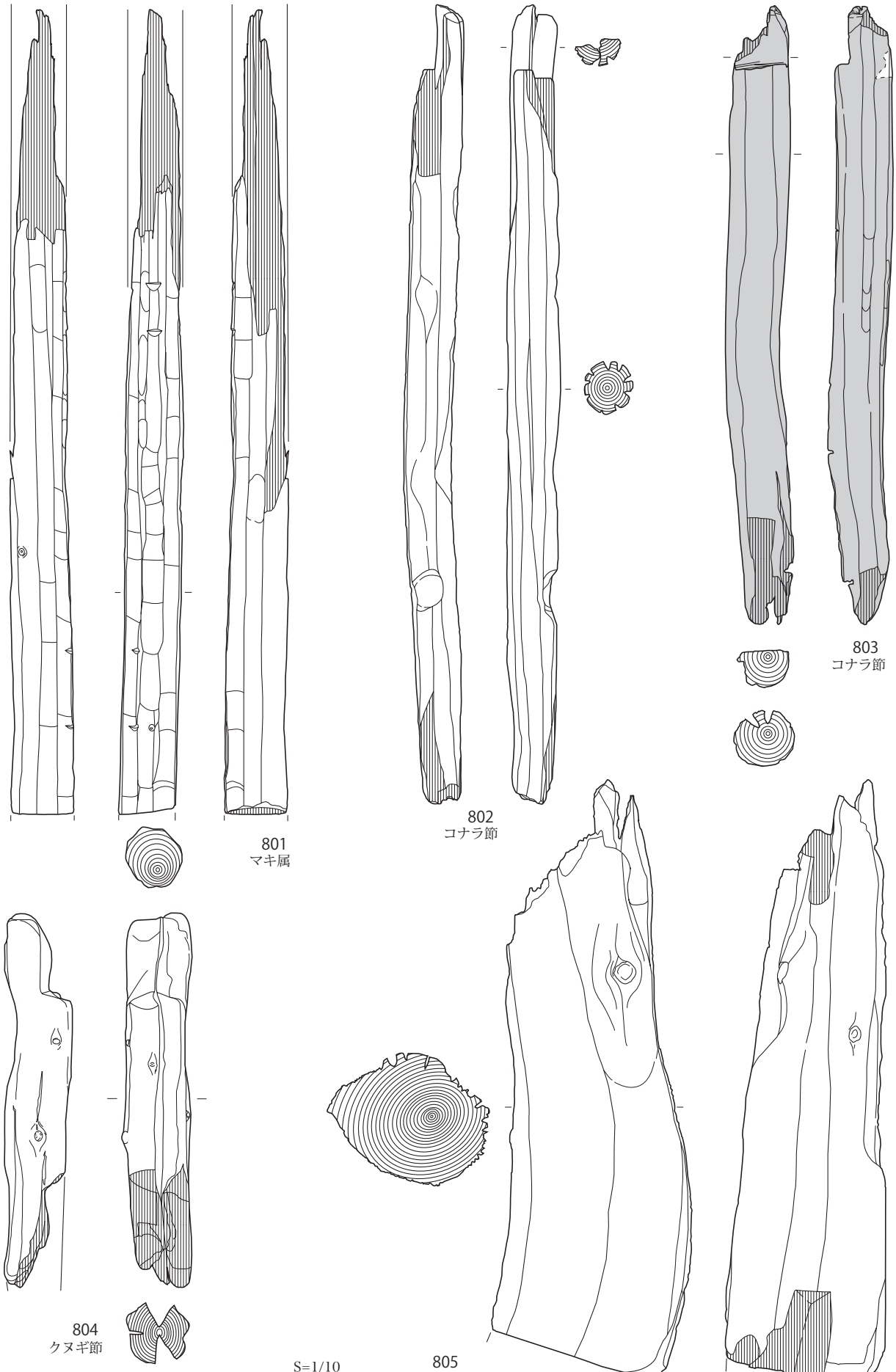
丸太（第 96 図 858 ～ 860） 859 はコナラ節、858 はクリ、860 はムクノキの丸太。

（3）08Aa 区・08B 区 003NR 第 3 層出土木製品

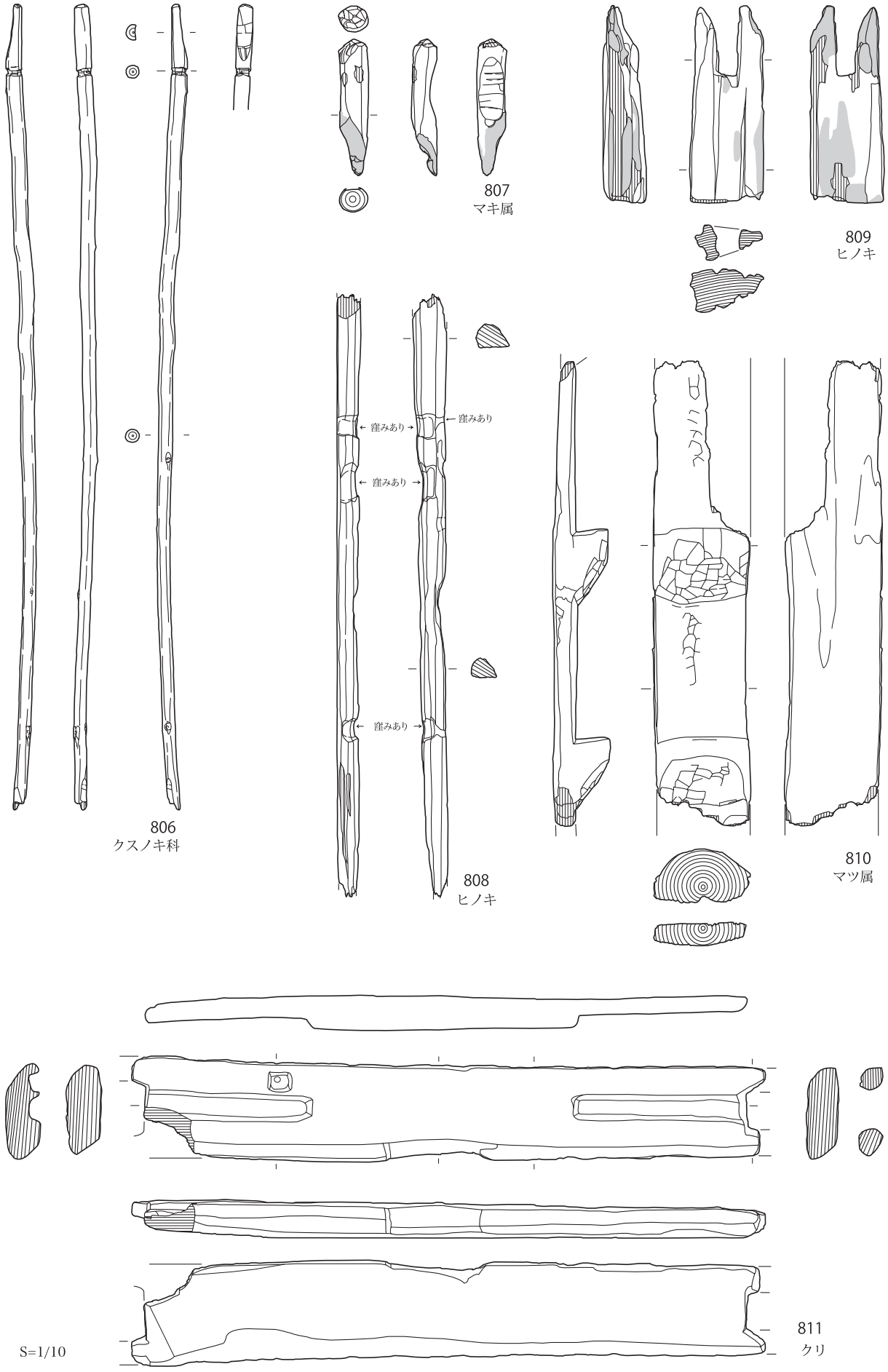
古代に属する木製品は 32 点で、工具（861）、容器（862 ～ 873）、祭祀具（874）、土木材（875・876）、角棒（878・880・881）、板（877・879・882 ～ 889）、残材（891）、その他（890）がある。

工具（第 97 図 861） 861 はヒノキの角棒で上面・下面ともに刃物傷が多数残ることから、作業台として使用された可能性が高い。

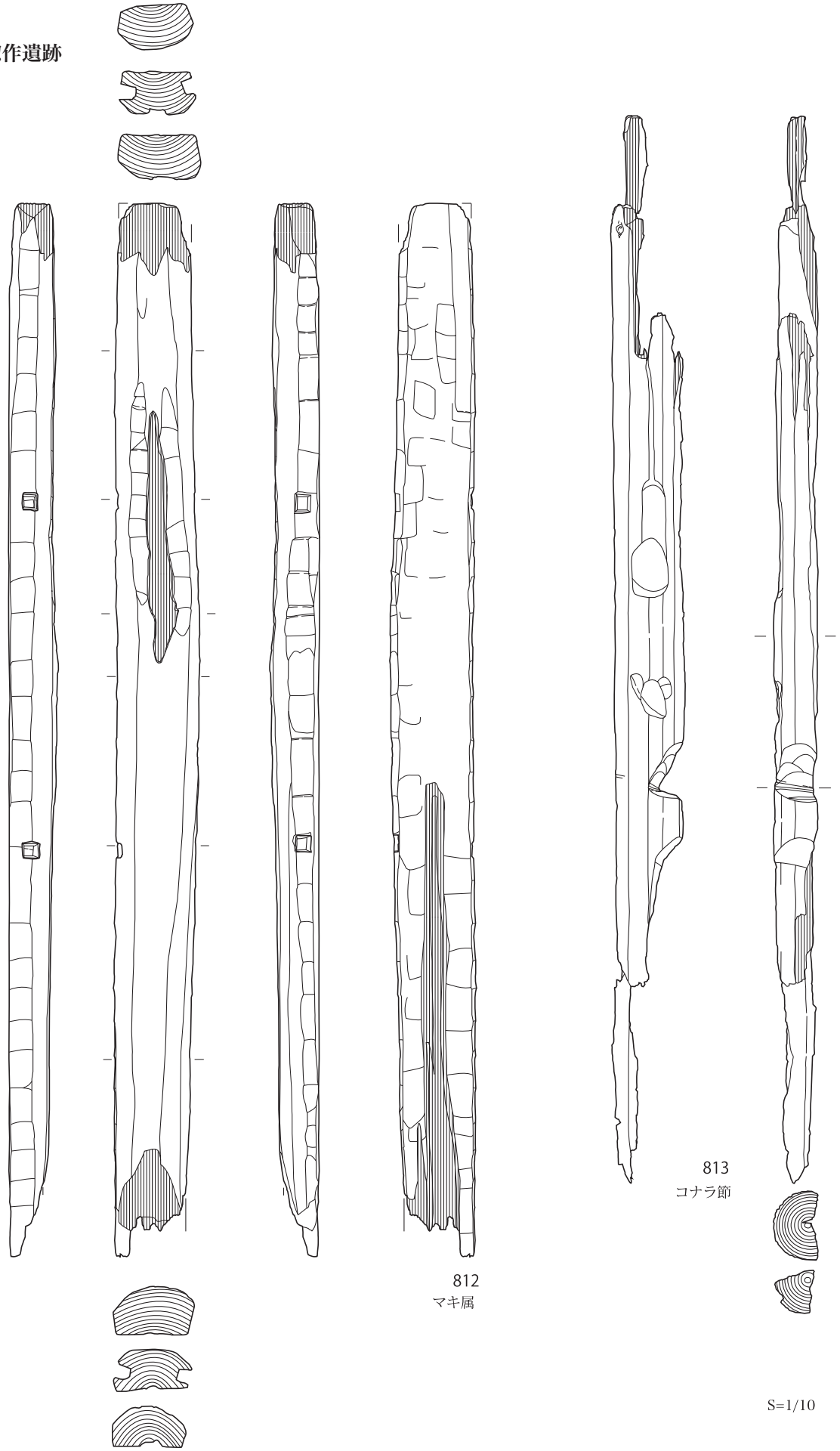
容器（第 97・98 図 862 ～ 873） 862 ～ 869 は曲物底板、870 ～ 872 は曲物側板で、いずれも樹種はヒノキ。うち、862 は大型品で、細く割ったのち両端部付近に穿孔をほどこす。863・864 は平面



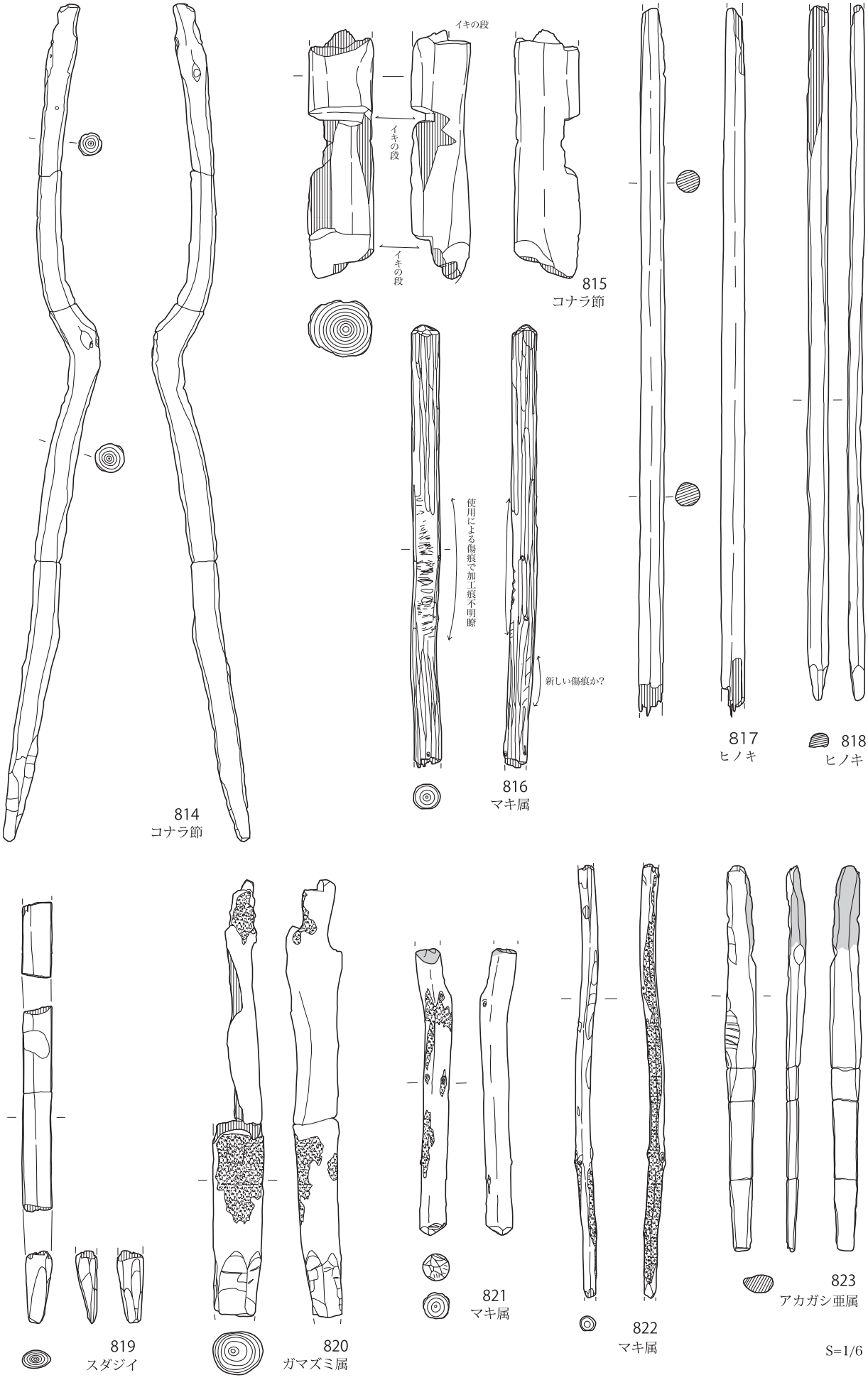
第 89 図　木製品（6）


806
クスノキ科
807
マキ属
809
ヒノキ
窪みあり
窪みあり
窪みあり
窪みあり
808
ヒノキ
810
マツ属
811
クリ
S=1/10

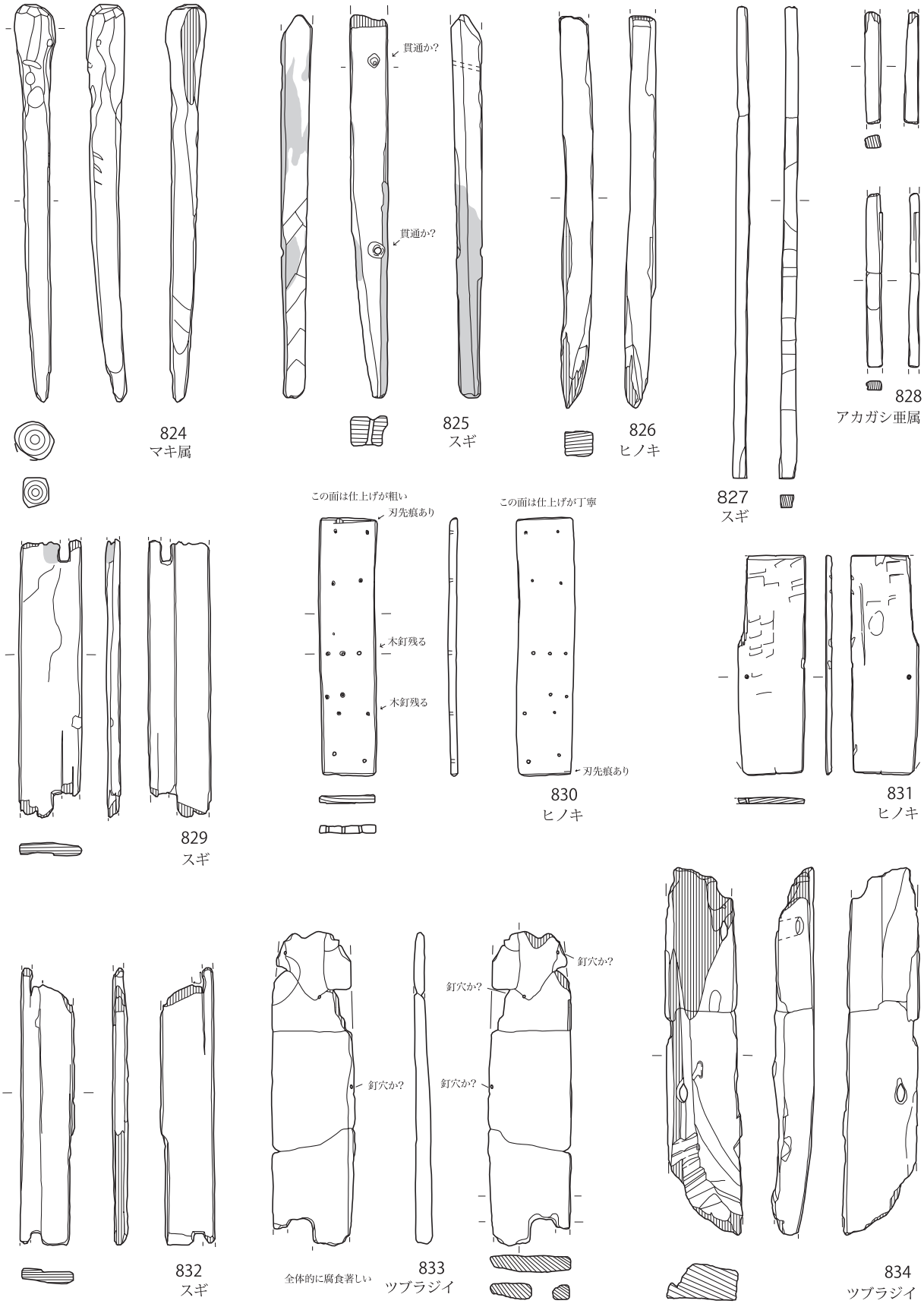
第 90 図　木製品（7）



第 91 図　木製品（8）

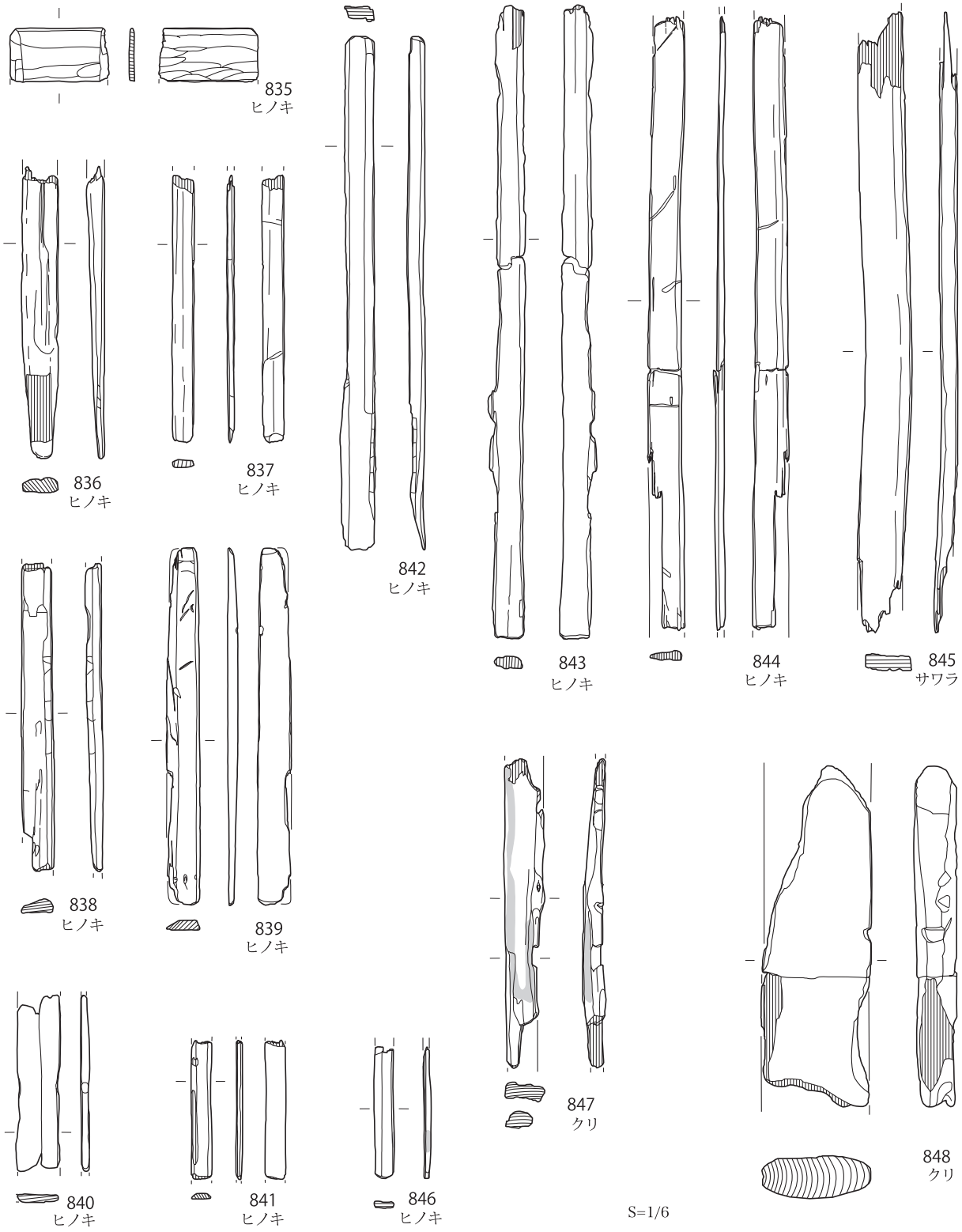

イキの段
イキの段
イキの段
815
コナラ節
使用による傷痕で加工痕不明瞭
新しい傷痕か?
816
マキ属
817
ヒノキ
818
ヒノキ
814
コナラ節
819
スダジイ
820
ガマズミ属
821
マキ属
822
マキ属
823
アカガシ亜属
S=1/6

第 92 図　木製品（9）

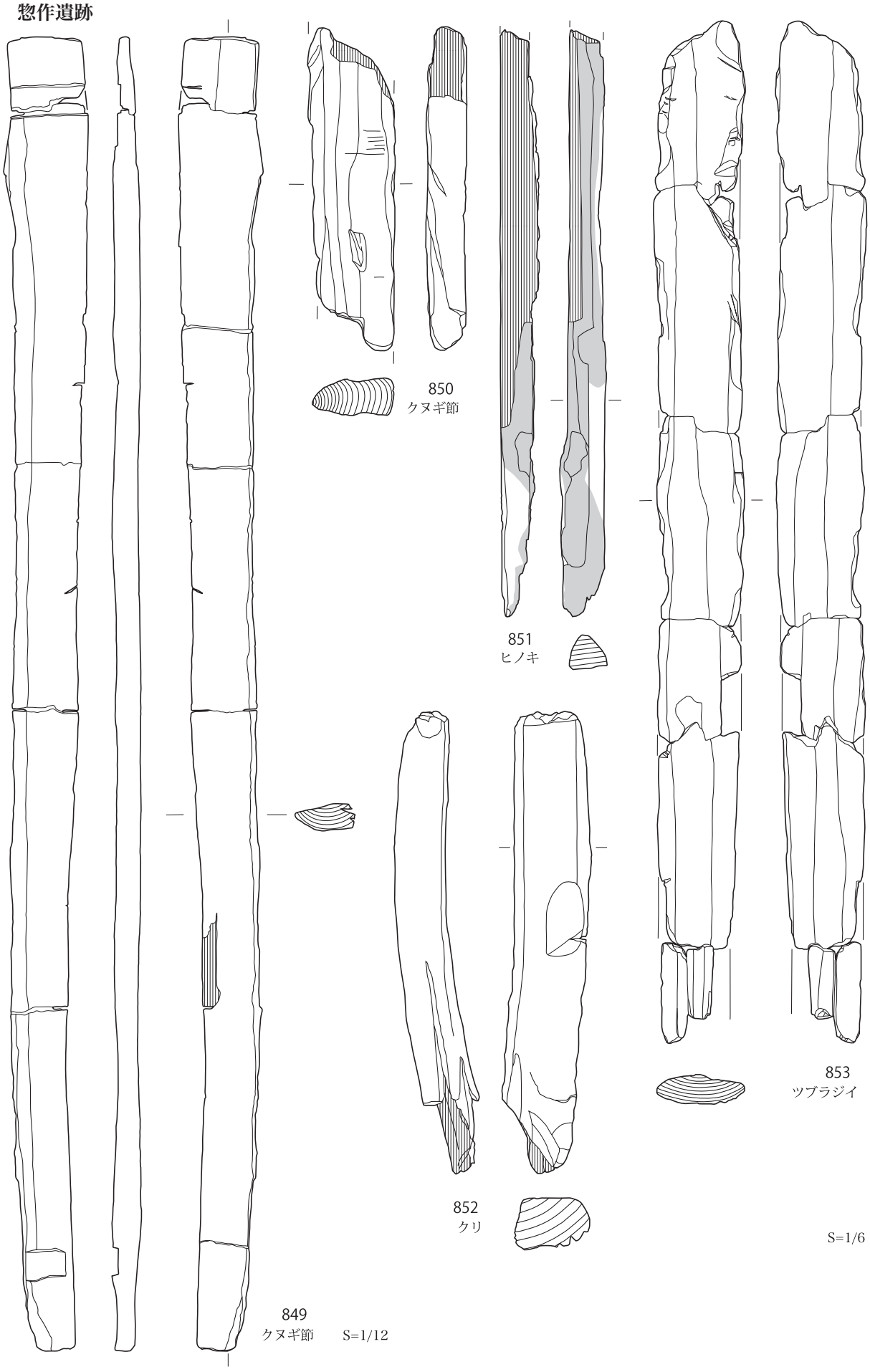


S=1/6

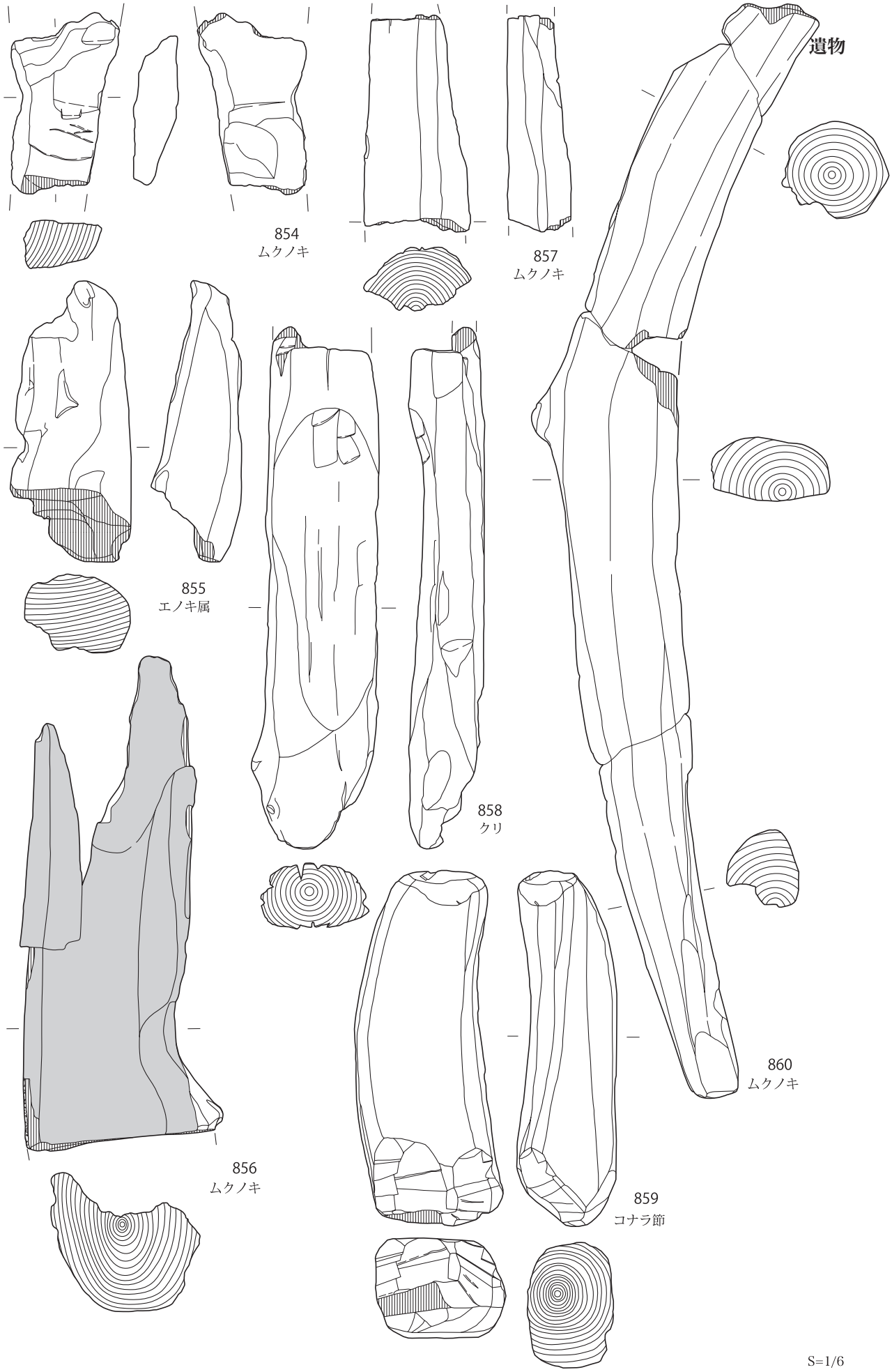
第 93 図　木製品（10）


835
ヒノキ
836
ヒノキ
837
ヒノキ
838
ヒノキ
839
ヒノキ
840
ヒノキ
841
ヒノキ
842
ヒノキ
843
ヒノキ
844
ヒノキ
845
サワラ
846
ヒノキ
847
クリ
848
クリ
S=1/6

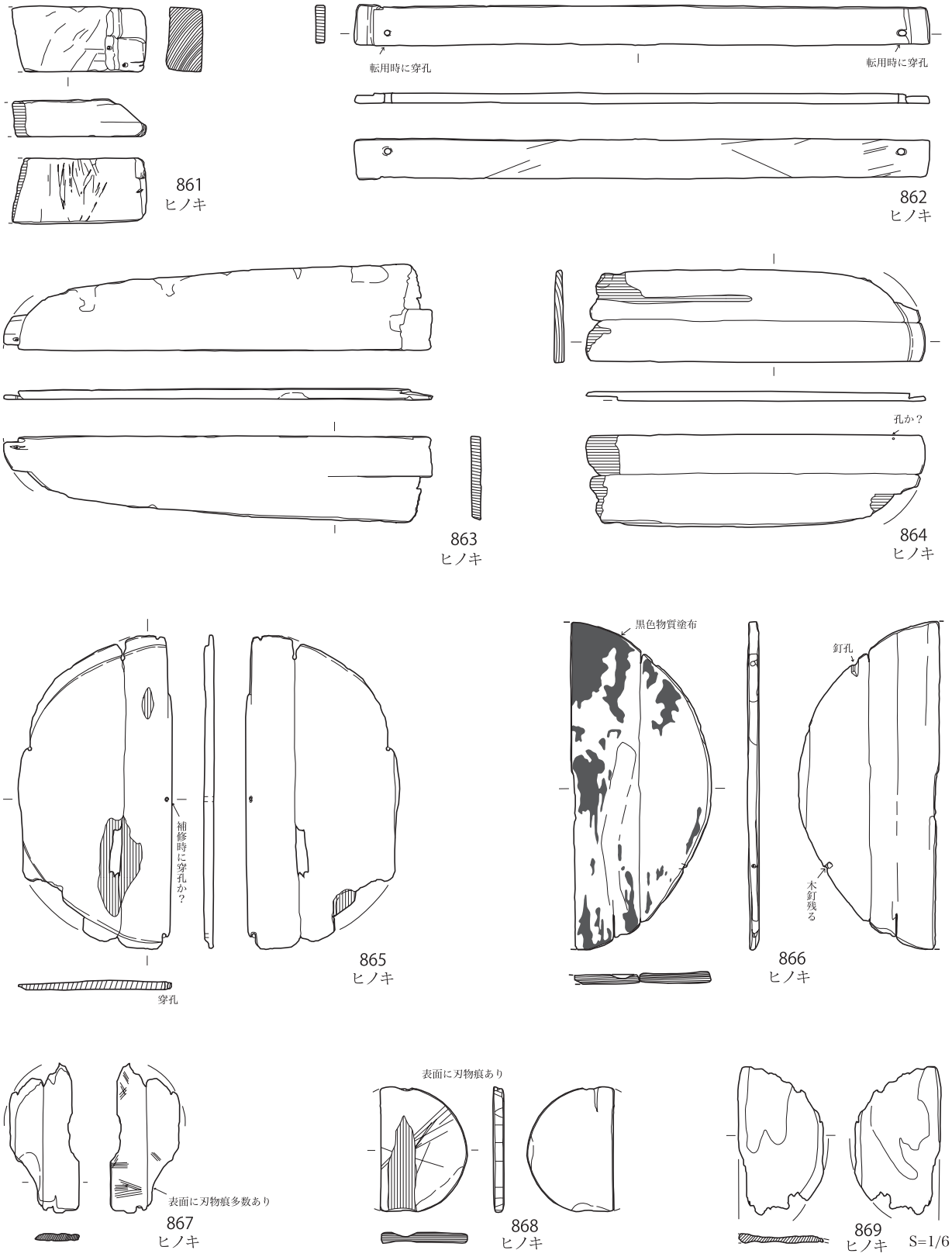
第 94 図　木製品（11）



第 95 図　木製品（12）


遺物
854
ムクノキ
857
ムクノキ
855
エノキ属
858
クリ
860
ムクノキ
856
ムクノキ
859
コナラ節
S=1/6

第 96 図　木製品（13）


転用時に穿孔
転用時に穿孔
861
ヒノキ
862
ヒノキ
863
ヒノキ
孔か？
864
ヒノキ
補修時に穿孔か？
穿孔
865
ヒノキ
黒色物質塗布
釘孔
木釘残る
866
ヒノキ
表面に刃物痕多数あり
867
ヒノキ
表面に刃物痕あり
868
ヒノキ
869
ヒノキ
S=1/6

第 97 図　木製品（14）

が楕円形を呈する。865 は中央部に補修孔とみられる小孔が開く。867・868 は表面に刃物傷がつく。866 は内面に黒色物質を塗布する。

873 はスギの板目材で、わずかに湾曲することから、結桶の部材と考えられ、所属時期は中世以降か。

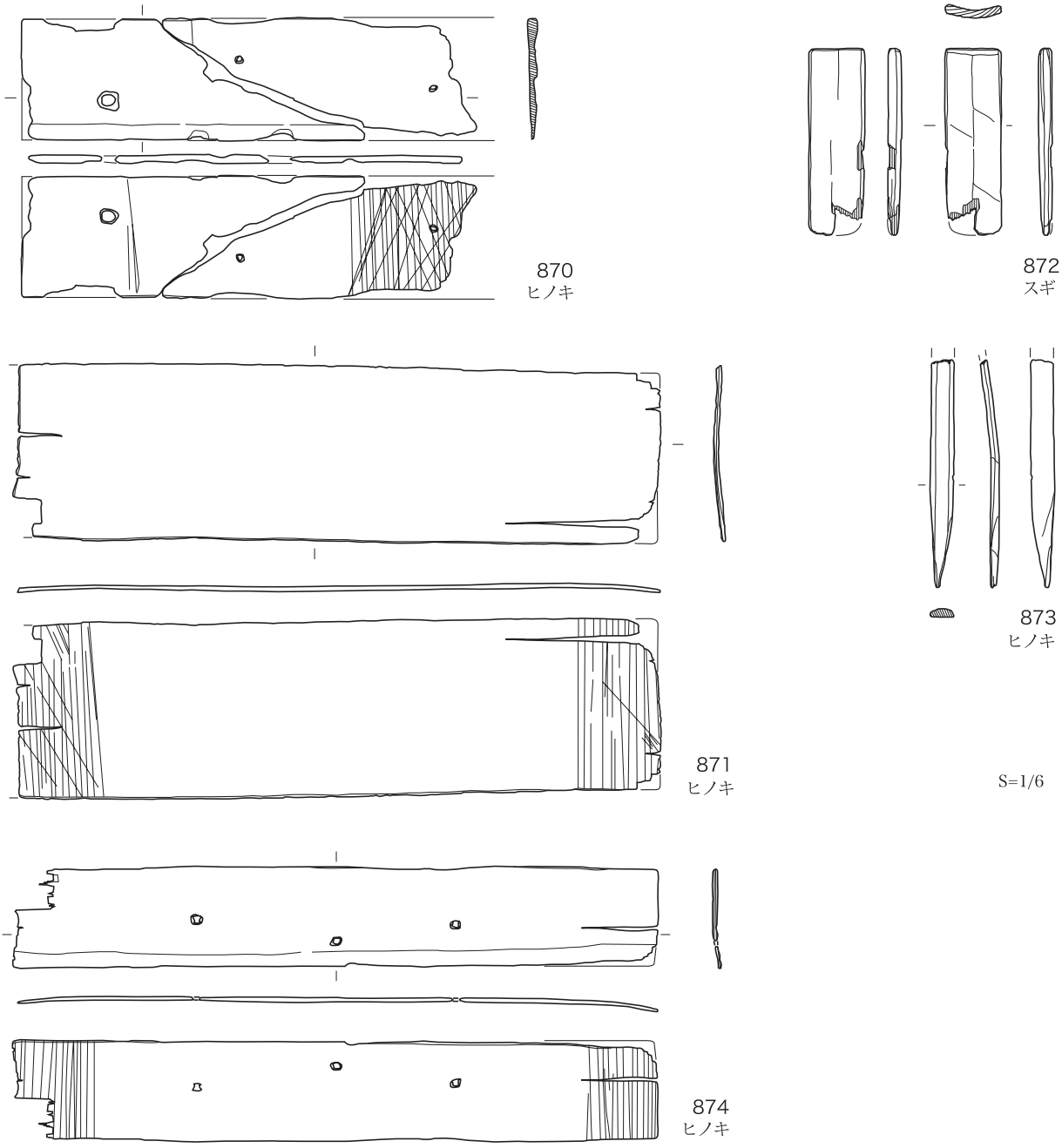
祭祀具（第 98 図 874） 874 はヒノキの柾目材で、下端を尖らせる。斎串である可能性が高い。

土木材（第 99 図 875・876） 876 はマツ属、875 はクヌギ節の芯持ち材を用いた杭。

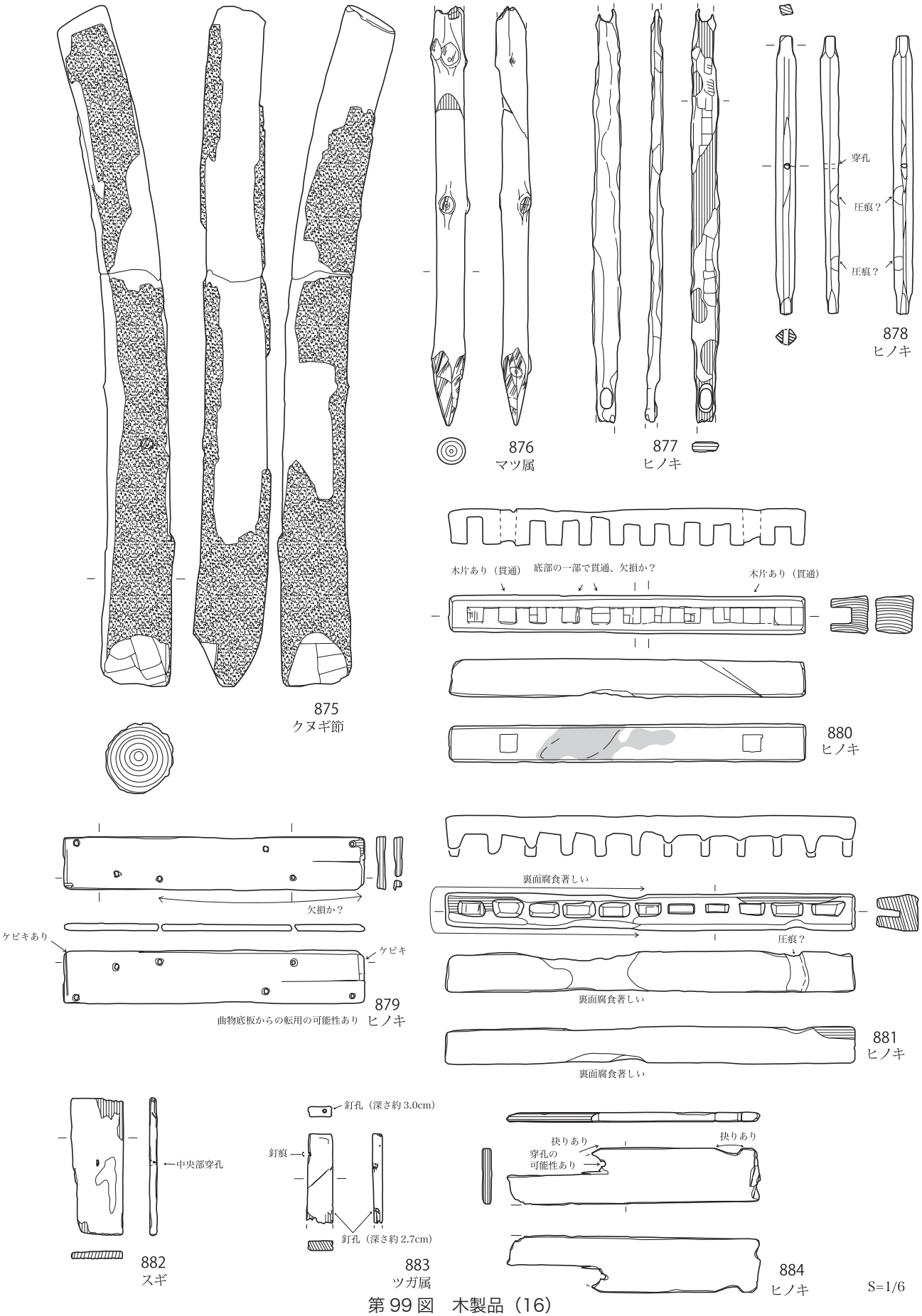
角棒（第 99 図 878・880・881） 878 はヒノキの 4 分の 1 分割材で、丁寧に断面を正方形に面取りしたうえ、両端を細くし、中央に穿孔をほどこす。用途は不明。

880・881 はヒノキの角棒で、それぞれ図面上の横一列に 11 カ所、方形の穿孔をほどこす。この穿孔のうち、880 の両端より一つ内側の穿孔はいずれも貫通させたうえに別材を埋め込んでいるのに対し、それ以外の穴はすべて未貫通である。一見すると、連子窓の窓枠のようだが、用途は不明。

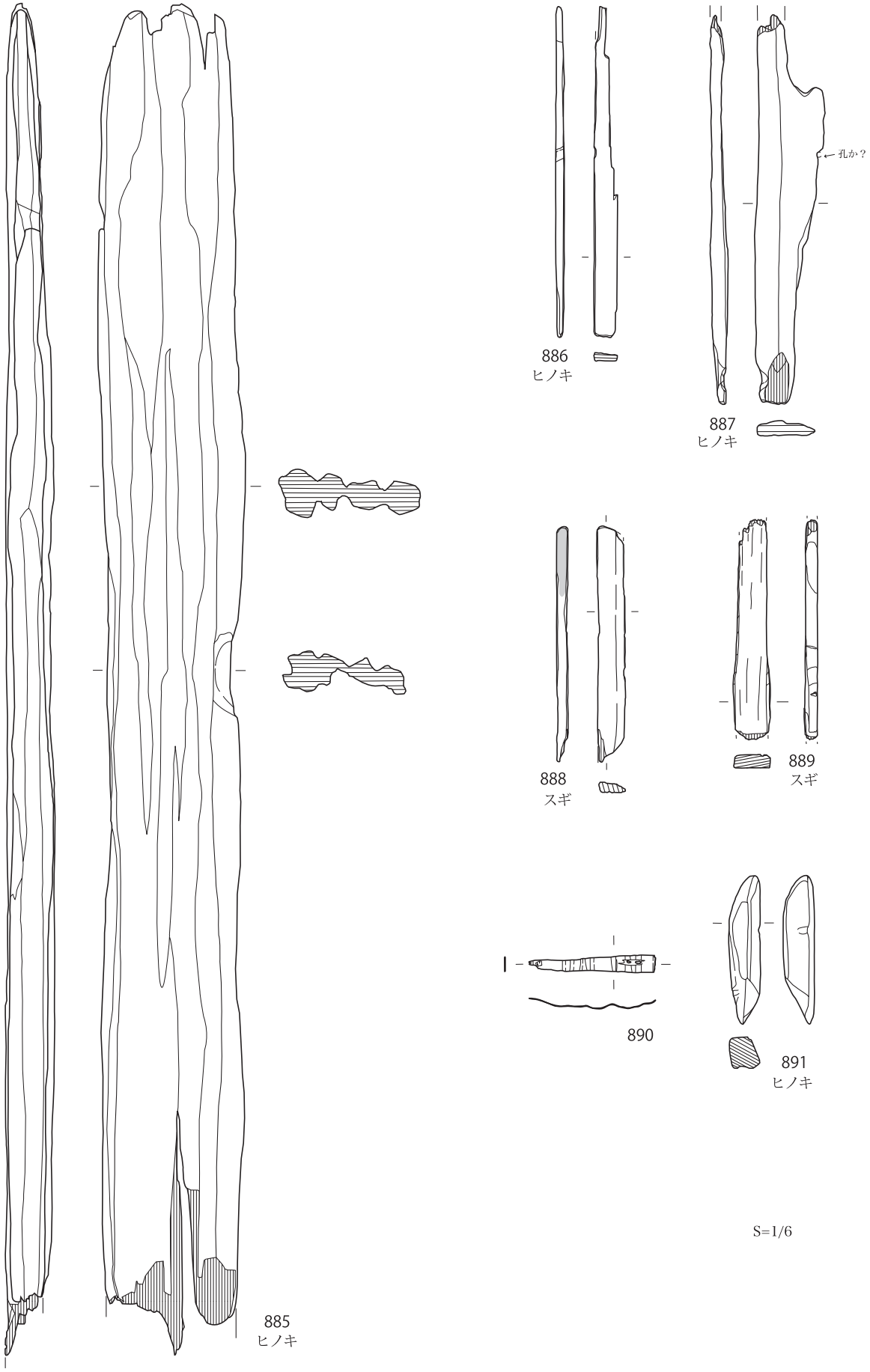
板（第 99・100 図 877・879・882 ～ 889） 879



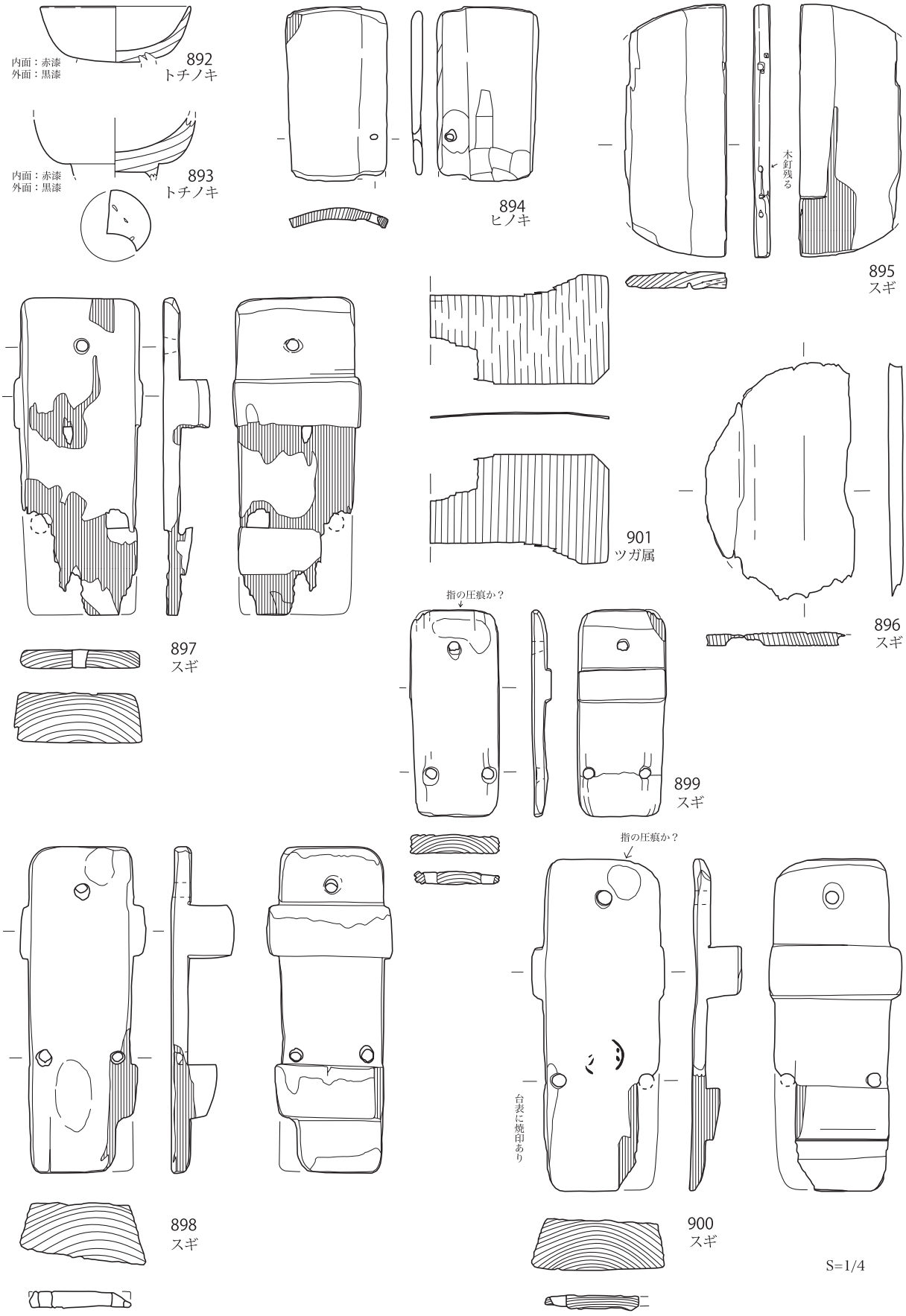
第 98 図　木製品（15）


穿孔
圧痕？
圧痕？
878
ヒノキ
876
マツ属
877
ヒノキ
875
クヌギ節
木片あり（貫通）
底部の一部で貫通、欠損か？
木片あり（貫通）
880
ヒノキ
欠損か？
ケビキあり
ケビキ
879
曲物底板からの転用の可能性あり
ヒノキ
裏面腐食著しい
圧痕？
裏面腐食著しい
881
ヒノキ
裏面腐食著しい
中央部穿孔
882
スギ
釘孔（深さ約3.0cm）
釘痕
釘孔（深さ約2.7cm）
883
ツガ属
抉りあり
穿孔の
可能性あり
抉りあり
884
ヒノキ
S=1/6

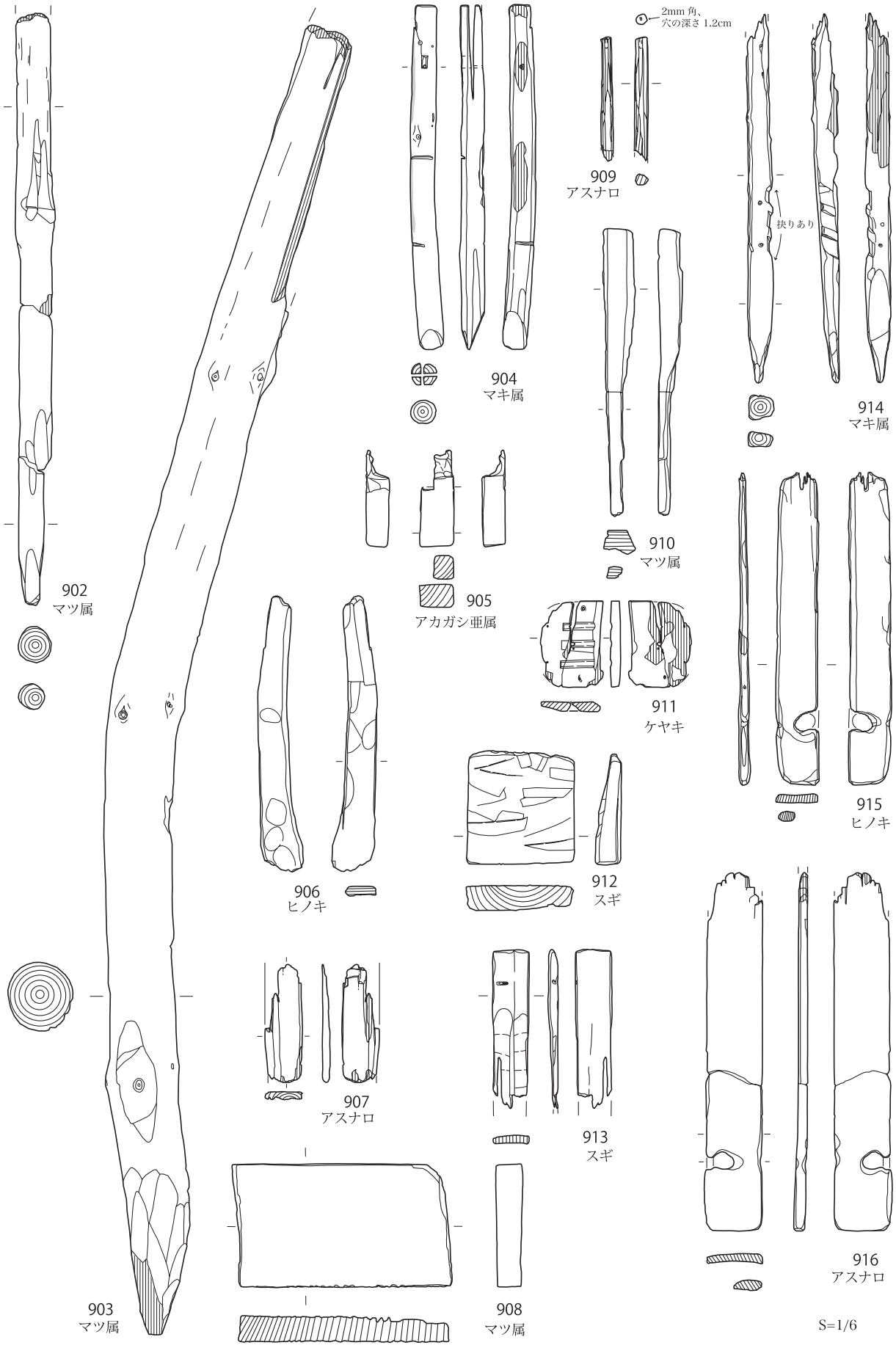
第99図　木製品（16）



第 100 図　木製品（17）


内面：赤漆
外面：黒漆
892
トチノキ
内面：赤漆
外面：黒漆
893
トチノキ
894
ヒノキ
木釘残る
895
スギ
901
ツガ属
896
スギ
897
スギ
指の圧痕か？
899
スギ
指の圧痕か？
台表に焼印あり
898
スギ
900
スギ
S=1/4

第 101 図　木製品（18）


2mm 角、
穴の深さ 1.2cm
909
アスナロ
904
マキ属
914
マキ属
抉りあり
902
マツ属
910
マツ属
905
アカガシ亜属
911
ケヤキ
915
ヒノキ
906
ヒノキ
912
スギ
907
アスナロ
913
スギ
916
アスナロ
903
マツ属
908
マツ属
S=1/6

第 102 図　木製品（19）

はヒノキの板目材で、平面が長方形の板。小孔が 6 カ所、ランダムに開いている。877 もヒノキの板目材による穿孔板で、両端付近に楕円形の穿孔をほどこす。

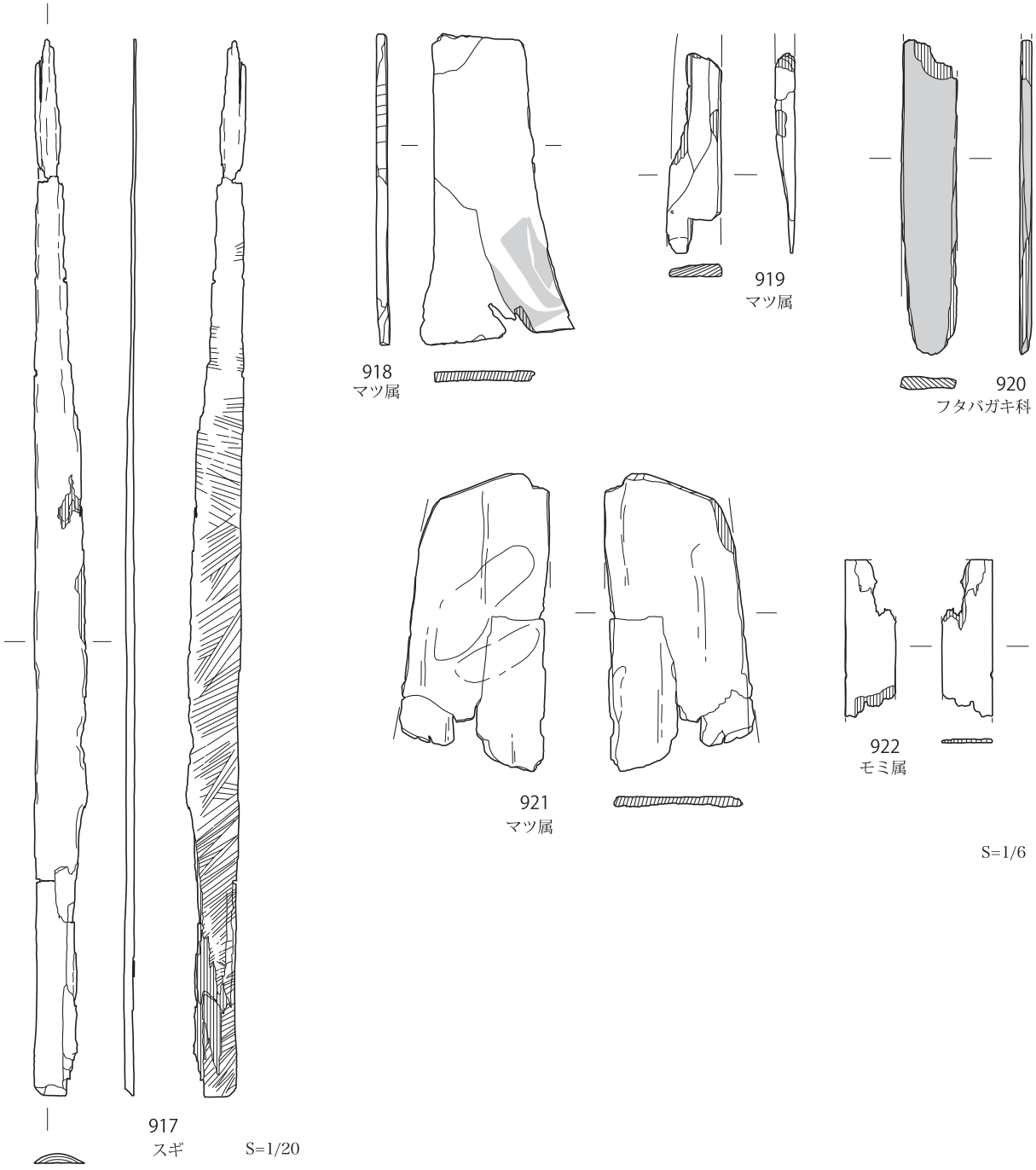
882 はスギの柾目材による穿孔板で、中央に小孔が開く。883 はツガ属の柾目材による穿孔板で、側面に 2 カ所目釘穴が開く。884 はヒノキの板目材による有抉板。885 ～ 887 はヒノキ、888・889 はスギの板。

残材（第 100 図 891） 891 はヒノキの残材。

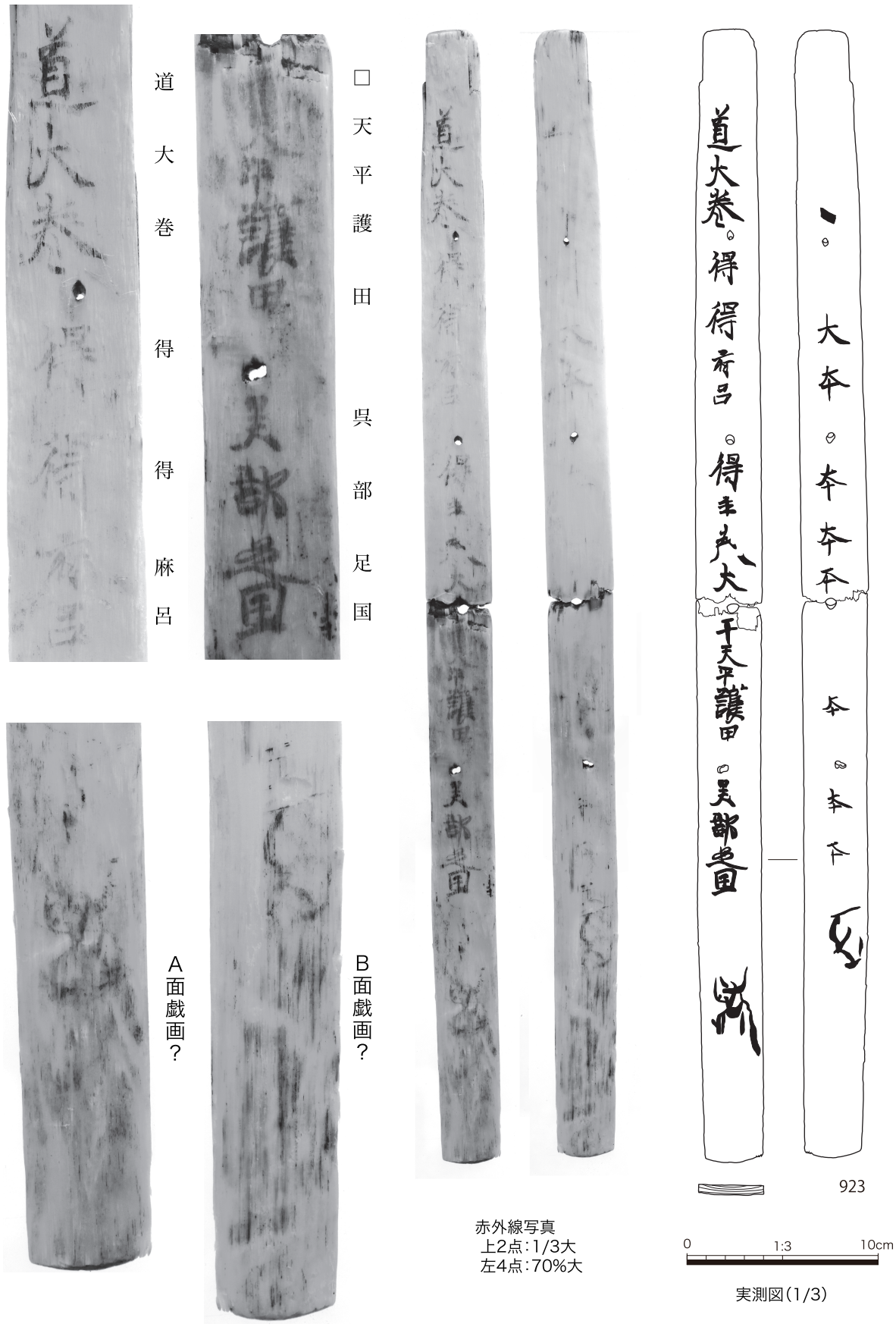
その他（第 100 図 890） 890 はカバ皮で、樹種は不明。

（4）08C 区 068NR・08B 区 002SX 出土木製品

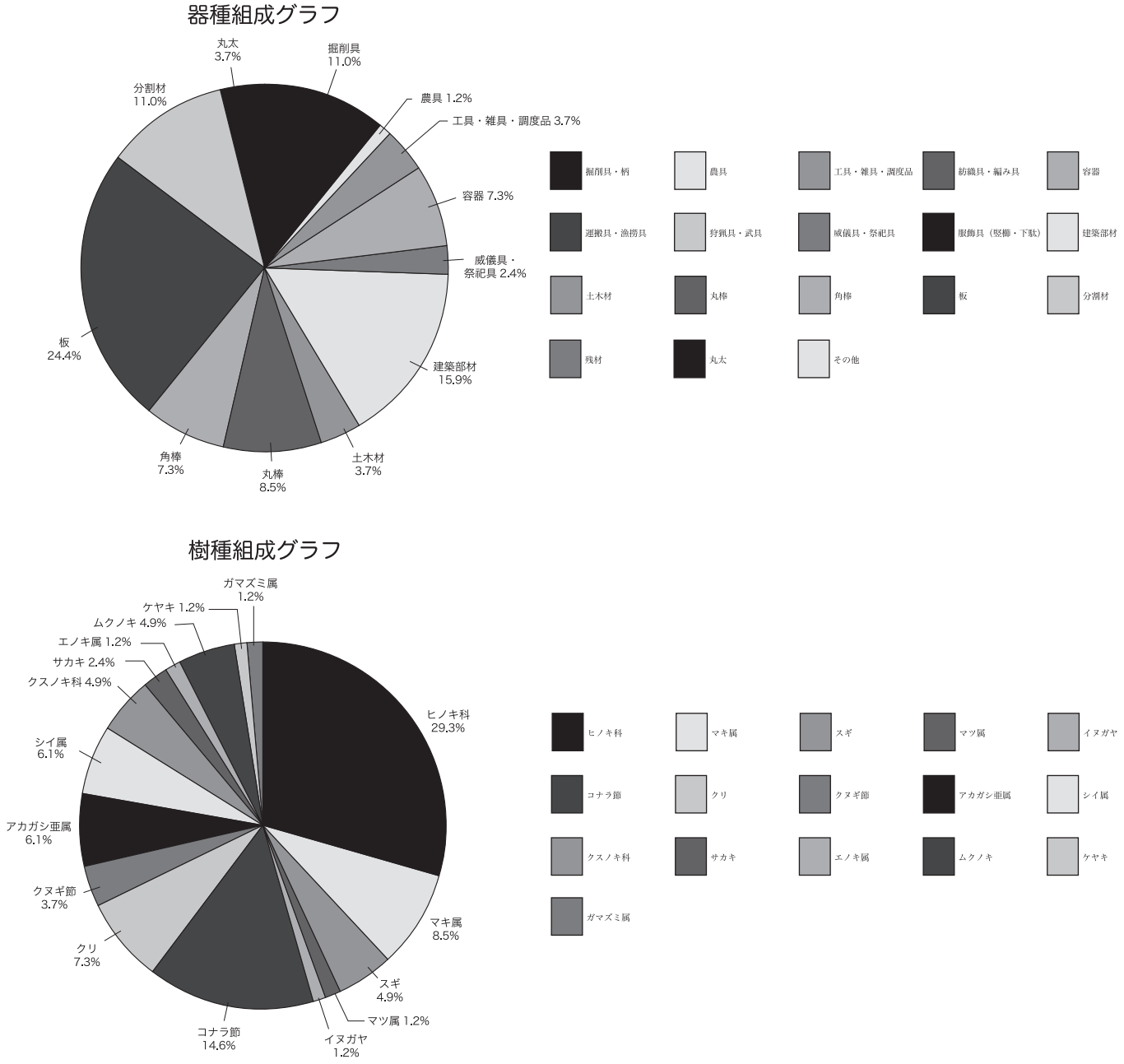
江戸時代後期に属する木製品は 31 点で、容器（892 ～ 896・901）、服飾具（897 ～ 900）、土木材（902・903）、丸棒（904・909）、角棒（905・910・914）、 板（906 ～ 908・912・913・915・916・918 ～ 922）がある。



第 103 図　木製品（20）


道大巻得得麻呂
□天平護田呉部足国
A面戯画？
B面戯画？
赤外線写真
上2点：1/3大
左4点：70%大
923
0
1:3
10cm
実測図（1/3）

第 104 図　木製品（21）



第 105 図　木製品器種・樹種組成図（1）

容器（第 101 図 892 ～ 896・901）　892・893 は漆椀で、内面は赤色漆、外面には黒色漆を塗る。トチノキの 2 分の 1 分割材からの横木取り。

894 は結桶の側板で、ヒノキの柾目材。896 は曲物底板で、樹種はスギ。895 は断面に接合のための目釘が残り、結桶底板。樹種はスギである。901 は曲物側板で、樹種はツガ属。

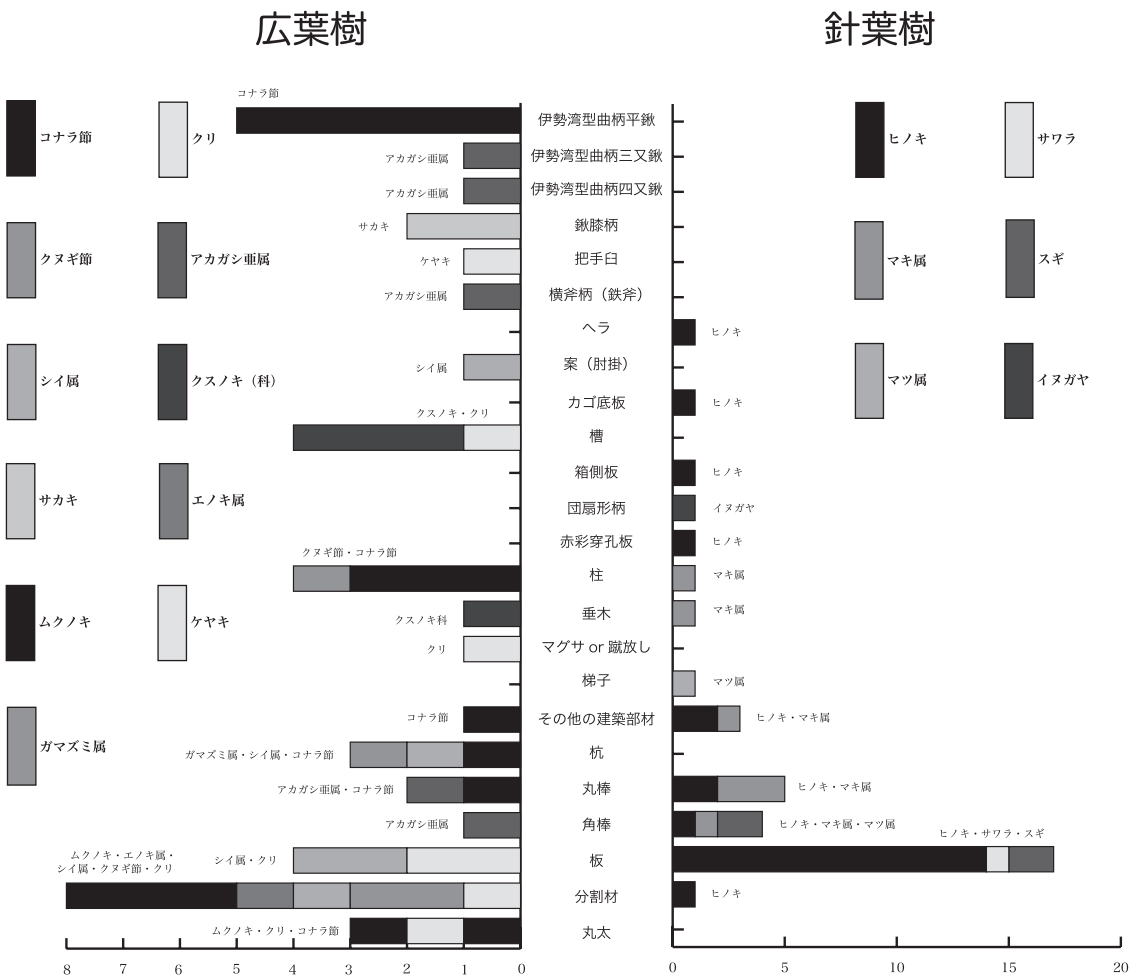
服飾具（第 101 図 897 ～ 900）　897 ～ 900 はスギの板目材による下駄。899 のみ子供の右足用で、他は大人の左足用。

土木材（第 102 図 902・903）　902・903 はマツ属の芯持ち材による杭。

丸棒（第 102 図 904・909）　904 は図面上の下端部を尖らせ、上端部には十字に切れ目を入れたうえ、横から穿孔をほどこしている。マキ属の芯持ち材で、用途は不明。

909 はアスナロの柾目材で、図面上の上端部に小孔を開ける。用途は不明。

角棒（第 102 図 905・910・914）　905 はアカガシ亜属 4 分の 1 分割材の角棒で、図面上の上端部



第 106 図　木製品器種・樹種組成図（2）

に穿孔をほどこす。910 はマキ属の芯持ち材で、図面上の中央やや下に 2 カ所穿孔と溝を刻む。914 はマツ属の板目材による角棒。

板（第 102・103 図 906 ～ 908・912・913・915・916・918 ～ 922）915 はヒノキの柾目板で、図面上の下端部付近に穿孔をほどこす。916 はアスナロの柾目材で、122 同様、穿孔をほどこす。911 はケヤキの柾目板で、片面に 3 条、浅い溝を平行に彫る。

906 はヒノキ、907 はアスナロ、912・913・917 はスギ、908・918・919・921 はマツ属、922 はモミ属、920 はフタバガキ科の板。（樋上昇）

（5）木簡（第 104 図 923）

木簡は、流路堆積 08A 区 003NR で出土した。木製品の集積に混じって出土し、ほぼ中央で切り折られ 2 片に離断した状態であった。なお、2 片は 10cm 以下の近接した距離で出土していることから、廃棄後に水流によって移動した可能性はほとんどないと考えられる。したがって出土地点がほぼ廃棄地点としうる。

木簡の全長は 57.3cm、幅は 3.2cm、厚さは 0.7cm である。やや厚みのある長い板状である。9.3cm ～ 10.0cm の間隔で直径約 0.4cm の穿孔が 4 か所にみられ、それらを避けて墨書がなされている。このことから、何らかの機能をもった木製品を木簡に転用したものと考えられるが、元の木製品については不明である。墨書は両面になされている。仮に第 1 面・第 2 面とする。

第 1 面はほぼ全体で墨痕が認められ、釈文は・「道大巻　得得麻呂　得□□［巻カ］大　□天平護田　呉部足国　＝＝　（戯画カ）」である。文意はなく繰り返しがあることから習書とみられる。筆致は明瞭で一字ずつ丁寧に記している。年号と思われる「天平」はやや小さめで、人名と考えられる「呉部足国」は自身の氏名で書き慣れているためか筆致に軽さが感じられる。最下部に判読不明な墨痕があるが、筆

先を整えたのかあるいは戯画の可能性も考えられる。

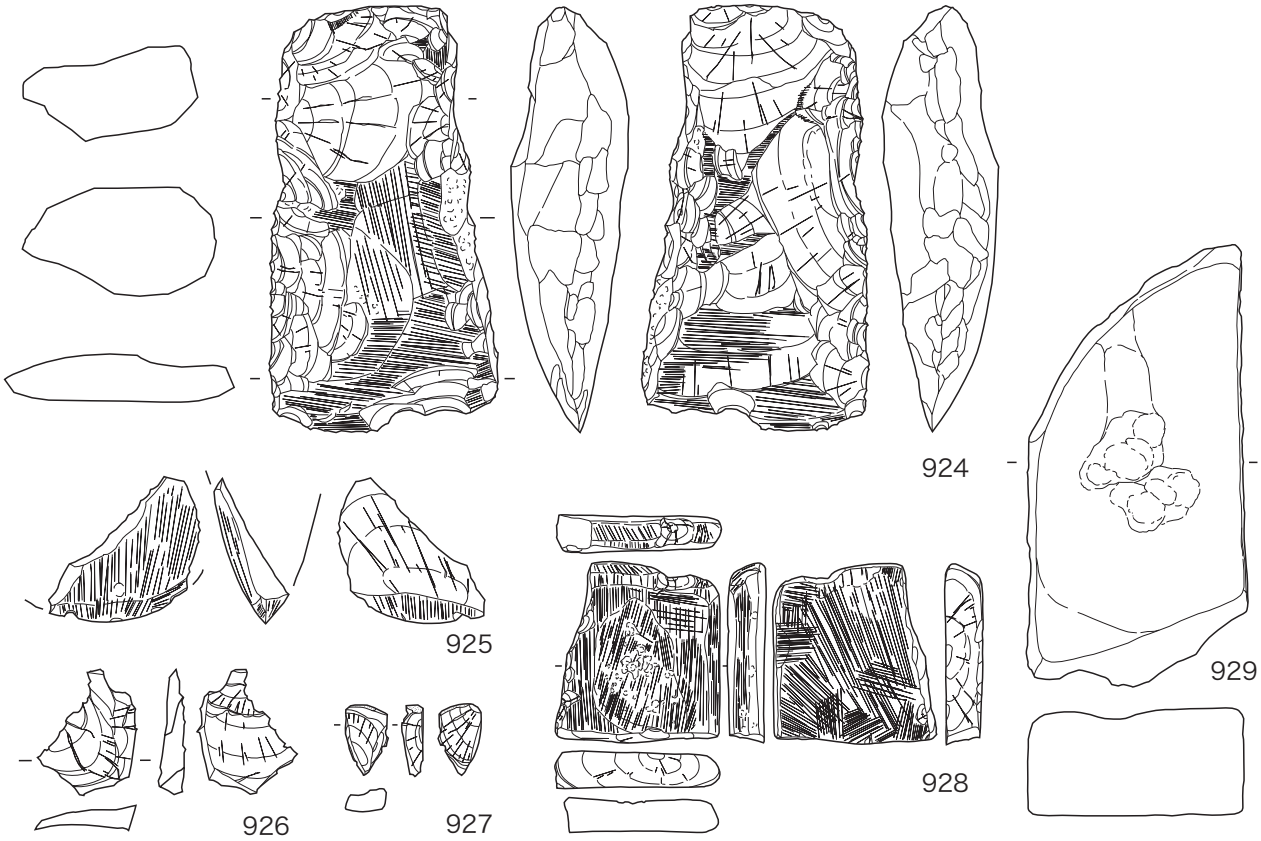
第２面は、特に上半部で墨痕は視認できないが、表面の腐食が進むなかで墨の部分の腐食が遅れることからそこが逆に浮き上がって判読することができる。釈文は・「　□　　大本　本本本　　本　本　本＝＝（戯画カ）」である。

記載の内容については以前報告したとおりで（永井邦仁 2011）、分類上は習書木簡と位置づけられ、木簡学会による分類型式は 065 型式である。（永井邦仁）

（6）まとめ

最後に、廻間Ⅱ式期の惣作遺跡出土木製品について、簡単にまとめておく（第 105・106 図）。

器種組成に関しては、紡織具（編み具）・運搬具（漁撈具）・狩猟具（武具）・残材などを欠くとともに、



924～927 は 1/2
928・929 は 1/4

第 107 図　石器

農具が少ない（臼のみ）ことが指摘できる。

また横斧柄が、同時期に他の遺跡で出土するものとは次元の異なる装飾性豊かで精巧なつくりであり、日常的な木工作業に用いたものとは考えにくい。ただ、分割材や丸太が出土していることから、本遺跡で木製品生産をおこなっていたことは疑いない。

団扇形木製品は上記のように、型式分類としては近畿中枢部から出土するものと共通するが、樹種など細かな点で異質なところもあり、この惣作遺跡ないしは周辺の遺跡で作られたものである可能性が高い。団扇形木製品のほかに、用途は不明だが赤彩をほどこした穿孔板なども出土していることから、前述の横斧柄と併せて、廻間Ⅱ式期の惣作遺跡には上位階層者が居住していた可能性を窺わせる。

樹種組成では、ヒノキ科（ヒノキ・サワラ）・コナラ節・マキ属・クリ・アカガシ亜属・シイ属・スギ・クスノキ科・クヌギ節の順となる。マキ属・コナラ節・クリが多いのは下懸遺跡・姫下遺跡と共通する特徴で、遺跡西側の碧海台地上の植生を反映しているものと考えられる（樋上 2009a）。

特定器種の用材法では、伊勢湾型曲柄平鍬にはコナラ節、鍬膝柄にはサカキを用いる点が尾張低地部と共通するが、臼にクスノキではなくケヤキを使用しているのはきわめて珍しい（樋上 2009b）。

その他、姫下遺跡や下懸遺跡との比較、鹿乗川流域遺跡群全体での評価などは、総括において論じることとしたい。（樋上昇）

第３節　石器

今回の調査では、７点の石器が出土した。古墳時代・古代の層などから出土している資料があるものの、概ね弥生時代中期の古井式期に属するものと考えられる。すべてについて写真を掲載し、６点は図化を行なった（第 107 図 924 ～ 930）。

924・925 は磨製石斧（両刃石斧）である。924 は全形のわかる資料で、全面の敲打・剥離調整がよく残り、刃部・身部を中心に部分的な研磨が施されたものである。断面形状は丸みを帯びたやや扁平な形状を呈するものである。塩基性岩製。925 は刃部のみの残存である。塩基性岩製。926・927 は小型剥片石器に対応する剥片と考えられる。926 の石材はチャートで、927 は下呂石円礫である。下呂石について、安城市域では時期を問わずに円礫が主体になるようである。928・930 は砥石である。928 は平面・側面ともによく使用されており、磨滅による線状痕が著しい。平面には敲打による使用痕が認められる。側辺が欠損しているのも、このような使用による作用が原因のようである。花こう岩製。930 は平面部分に溝状の使用痕が認められるものである。砂質凝灰岩製。929 は凹石と考えられる。長さ 23.2cm と大きな礫の中央部に 5 × 3cm 大の凹みを有するものである。凹みの断面形状は、緩い U 字状を呈する。片麻岩製。（川添和暁）

引用文献

愛知県埋蔵文化財センター 1992『勝川遺跡Ⅳ』

愛知県埋蔵文化財センター 2001『八王子遺跡』

鈴木裕明 2001「団扇形木製品と塵尾」『日本考古学の基礎研究』茨城大学考古学研究室

永井邦仁 2011「安城市下懸遺跡・惣作遺跡出土の木簡」『研究紀要第 12 号』愛知県埋蔵文化財センター

奈良国立文化財研究所 1993『木器集成図録　近畿原始篇（解説）』

樋上　昇 2001「3 ～ 5 世紀の地域間交流―東海系曲柄鍬の波及と展開―」『日本考古学』第 10 号、日本考古学協会

樋上　昇 2009a「弥生後期～古墳初頭の下懸遺跡出土木製品に対する評価」『下懸遺跡』愛知県埋蔵文化財センター

樋上　昇 2009b「弥生時代の木材利用」『中部の弥生時代研究』中部の弥生時代研究刊行委員会

第４章　自然科学的分析

第１節　惣作遺跡のプラント・オパール

鈴木　茂（パレオ・ラボ）

（１）はじめに

安城市木戸町の鹿乗川左岸に所在する惣作遺跡は、自然堤防およびその後背湿地に立地している。この惣作遺跡おいて行われた発掘調査で、平安時代～江戸時代の水田層と推測される土層が検出され、土壌試料が採取された。以下に、採取された土壌試料について行ったプラント・オパール分析の結果を示し、水田稲作および遺跡周辺のイネ科植生について検討した。

（２）試料と分析方法

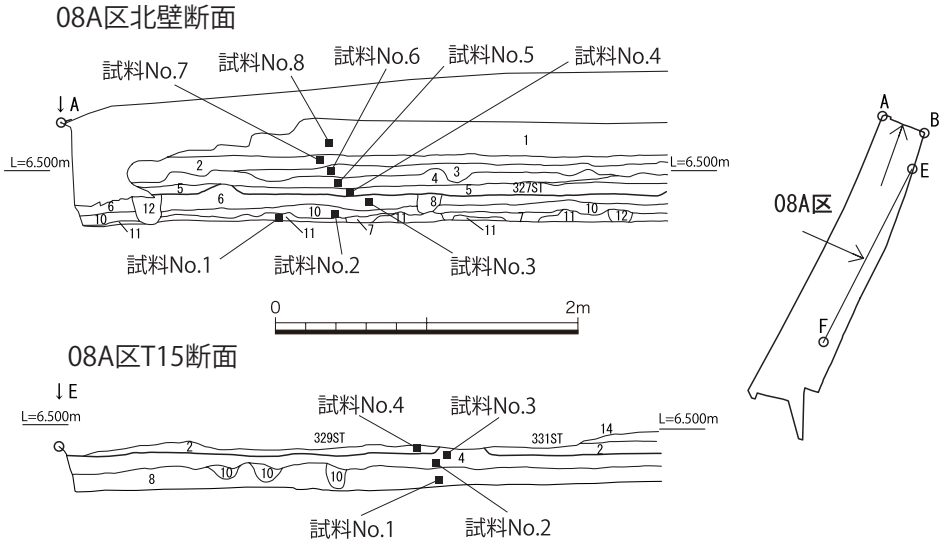
分析用試料は、北壁断面より採取された８試料（試料 No.1 ～ 8）と T15 断面より採取された４試料（試料 No.1 ～ 4）の 12 試料である（第 108 図）。各試料について、北壁断面の試料 No.1（11 層）は灰色粘土、試料 No.2（10 層）は黒褐色粘土と灰色粘土のブロック混在層、試料 No.3（6 層）は黒褐色粘土、試料 No.4（5 層）はやや砂質の黒褐色粘土、試料 No.5（4 層）は黒褐色粘土、試料 No.6（3 層）も黒褐色粘土、試料 No.7（2 層）はやや砂質の紫灰色～黒褐色粘土、試料 No.8（1 層）は灰黄色の砂質粘土である。また、T15 断面の試料 No.1（8 層）は緑灰色の砂質シルト質粘土、試料 No.2（4 層）は黒褐色～褐色の粘土、試料 No.3（4 層）も黒褐色～褐色の粘土、試料 No.4（2 層）は紫灰色の粘土である。時期について、北壁断面の試料 No.4,5 が平安時代、試料 No.6,7 が中世？、試料 No.8 が江戸時代と考えられている。プラント・オパール分析はこれら 12 試料について以下のような手順にしたがって行った。

秤量した試料を乾燥後再び秤量する（絶対乾燥重量測定）。別に試料約 1g（秤量）をトールビーカーにとり、約 0.02g のガラスビーズ（直径約 0.04mm）を加える。これに 30% の過酸化水素水を約 20 ～ 30cc 加え、脱有機物処理を行う。処理後、水を加え、超音波ホモジナイザーによる試料の分散後、沈降法により 0.01mm 以下の粒子を除去する。この残渣よりグリセリンを用いて適宜プレパラートを作製し、検鏡した。同定および計数はガラスビーズが 300 個に達するまで行った。

（３）分析結果

同定・計数された各植物のプラント・オパール個数とガラスビーズ個数の比率から試料 1g 当りの各プラント・オパール個数を求め（第 1 表）、それらの分布を第 109 図（北壁断面）と第 110 図（T15 断面）に示した。以下に示す各分類群のプラント・オパール個数は試料 1g 当りの検出個数である。

北壁断面：検境の結果、試料 No.3 より上位でイネのプラント・オパールが観察され、最上位の試料 No.8 の 3,500 個を除くと 8,000 個以上と多く検出されているが、上位に向かい減少する傾向が認



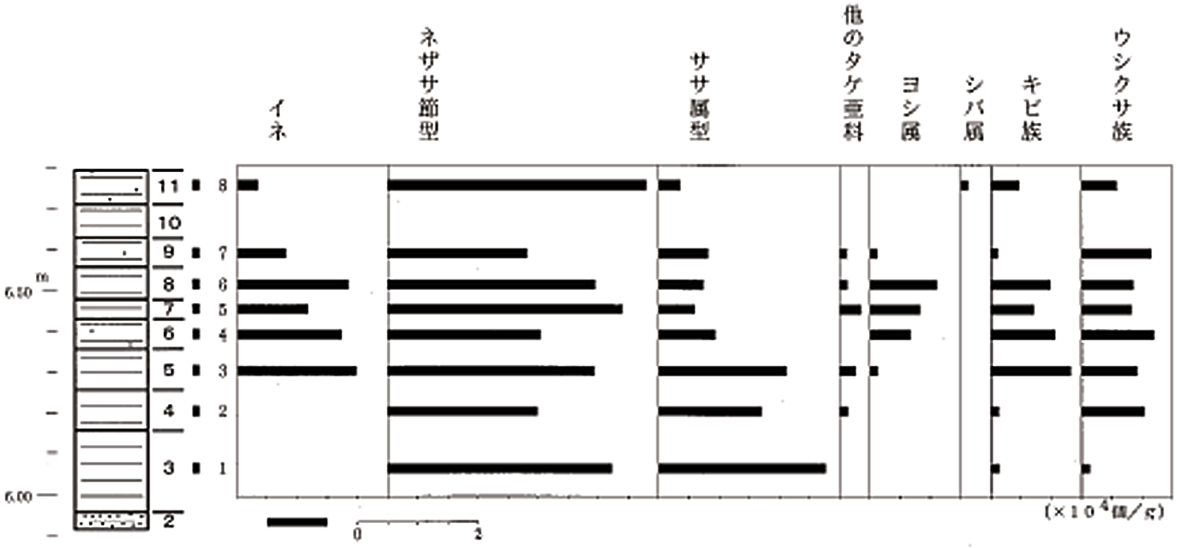
第 108 図　プラント・オパール分析試料採取位置

められる。最も多く検出されたのはネザサ節型で、20,000 個以上の検出個数を示している。ササ属型は、下部試料では 20,000 個前後と比較的多く観察されているが、上部では 7,000 個前後と検出個数を下げている。ウシクサ族は最上部と最下部を除き 10,000 個前後を示し、キビ族はイネが検出され始める試料 No.3 より急増するが、上部では減少している。ヨシ属も試料 No.3 より上位に向かい急増するが、上部では急減している。その他では、シバ属が最上部試料で若干観察されている。

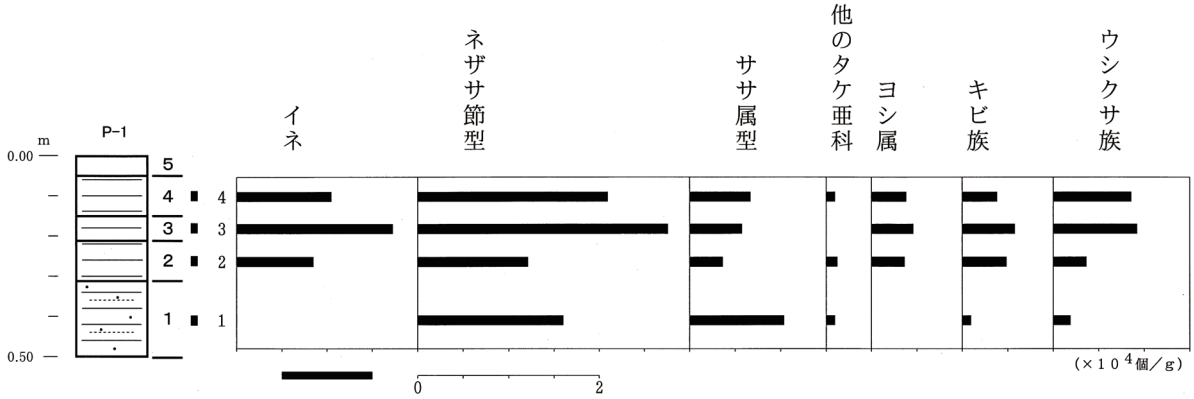
T15 断面：上位 3 試料で 10,000 個前後のイネのプラント・オパールが得られている。最も多く検出されたのはやはりネザサ節型で、上位 2 試料では 20,000 個以上を示している。ウシクサ族も上位 2 試料で 10,000 個弱とやや多く検出され、ササ属型は最下部試料で 10,000 個を超えているが、その後急減し、再び上位に向かい漸増している。キビ族は北壁断面と同様にイネが検出され始める試料より急増しており、ヨシ属も上位 3 試料で観察されている。

（4）稲作について

上記したように、北壁断面では試料 No.3（6 層）より上位で、また、T15 断面では試料 No.2（4 層）より上位でイネのプラント・オパールが検出され、おおむね 8,000 個以上の検出個数を示している。ここで検出個数の目安を示すと、イネのプラント・オパールが試料 1g 当り 5,000 個以上検出された地点から推定された水田址の分布範囲と実際の発掘調査とよく対応する結果が得られている（藤原 1984）。このことから稲作の検証としてこの 5,000 個を目安に遺構の状況をふまえて判断されている。先にも記したが、北壁断面の 6 層（試料 No.3）～ 2 層（試料 No.7）では 8,000 個を超えるイネのプラント・オパールが検出されており、これらの層準において稲作が行われていた可能性は高いとプラント・オパール分析からは判断される。この 6 層の時期については不明であるが、直上の 5 層が鎌倉時代と考



第 109 図　北壁断面試料のプラント・オパール分布図



第 110 図　T15 断面試料のプラント・オパール分布図

えられていることから、北壁断面周辺では鎌倉時代かそれよりも少し前の時期より稲作が行われるようになったと推測される。同様に、T15 断面周辺では 4 層（試料 No.2）堆積期より稲作が行われるようになったとみられるが、詳しい時期については不明である。なお、北壁断面の最上部の試料 No.8 では 3,500 個と 5,000 個に達していないことから、この 1 層において稲作が行われていた可能性は低いとプラント・オパール分析からは判断される。しかしながら、少ないながらもイネのプラント・オパールが検出されていることから、発掘状況や花粉分析等、本層準における稲作についてはさらに検討が必要と考える。

（5）遺跡周辺のイネ科植物

最も多く検出されているネザサ節型のササ類（ケネザサ、ゴキダケなど）は開けた日の当たるところでの生育が考えられる。そのうちケネザサ（ミヤコネザサ）は現在、名古屋市周辺の丘陵のやや平坦な台状地においてススキ－ケネザサ群集といった草地を形成している（愛知県 1995）。こうしたことから遺跡周辺の丘陵部空き地や森林の林縁部などに上記のようなネザサ節型のササ類やウシクサ族が多く生育していたと推測される。一方、ササ属型のササ類（スズタケ，ミヤコザサなど）については、遺跡周辺に成立していたと考えられる落葉広葉樹林（花粉分析の項参照）の下草的存在で生育していたとみられる。しかしながら北壁断面では稲作が始まって以降ササ属型は大きく減少している。これについて、稲作の始まり等による遺跡の発展に伴い遺跡周辺の森林は一部切り開かれ、そうしたことによってササ属型のササ類も生育地を狭めたことが考えられよう。

キビ族についてはその形態からアワ、ヒエ、キビといった栽培種か、エノコログサ、スズメノヒエ、イヌビエなどの雑草類かについて現時点では分類できず不明である。しかしながら稲作が考えられる層準においてキビ族の多産がみられることから、少なくともこれらの層準におけるキビ族についてはタイヌビエなどの稲作に伴う雑草類の可能性が高いと思われる。

ヨシやツルヨシといったヨシ属もイネが検出されている層準において観察されており、稲作地周辺の水路などに生育地を広げたと推測される。しかしながら北壁断面の上位試料においてヨシ属は激減している。これについて、稲作の発展に伴う集約化などで稲作地周辺は整備されるなどの影響で生育地を狭めたことが考えられよう。

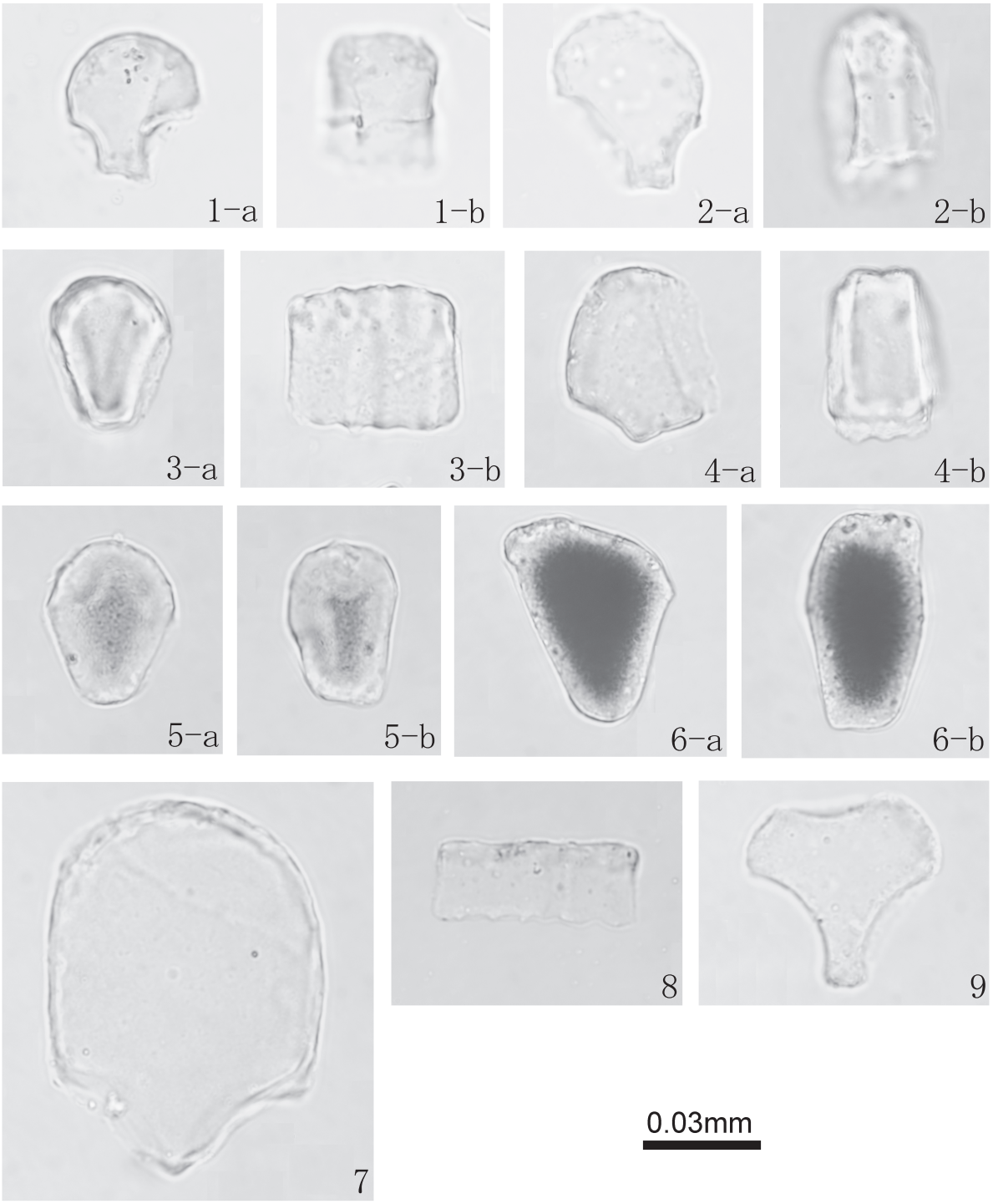
引用文献

愛知県 1995『愛知県の植物相』南川幸編，328 p.

断面	試料番号	イネ（個/g）	ネザサ節型（個/g）	ササ属型（個/g）	他のタケ亜科（個/g）	ヨシ属（個/g）	シバ属（個/g）	キビ族（個/g）	ウシクサ族（個/g）	不明（個/g）
北壁	1	0	37,300	27,600	0	0	0	1,400	1,400	2,800
	2	0	24,800	17,000	1,300	0	0	1,300	10,500	3,900
	3	19,800	34,300	21,100	2,600	1,300	0	13,200	9,200	2,600
	4	17,300	25,300	9,300	0	6,700	0	10,700	12,000	6,700
	5	11,800	39,000	5,900	3,500	8,300	0	7,100	8,300	8,300
	6	18,400	34,400	7,400	1,200	11,100	0	9,800	8,600	7,400
	7	8,100	23,100	8,100	1,200	1,200	0	1,200	11,500	4,600
	8	3,500	42,900	3,500	0	0	1,200	4,600	5,800	8,100
T15	1	0	16,000	10,400	900	0	0	900	1,900	3,800
	2	8,500	12,100	3,600	1,200	3,600	0	4,800	3,600	7,300
	3	17,300	27,600	5,800	0	4,600	0	5,800	9,200	5,800
	4	10,500	20,900	6,700	1,000	3,800	0	3,800	8,600	10,500

第１表　試料１ｇ当たりのプラント・オパール個数

第 111 図　惣作遺跡のプラント・オパール



図版　惣作遺跡のプラント・オパール

1、2：イネ（ａ：断面、ｂ：側面）　1：試料No. 4、　2：試料No. P-1-2

3：ネザサ節型（ａ：断面、ｂ：側面）　試料No. P-1-2

4：ササ属型（a：断面、ｂ：側面）　試料No. P-1-4

5：他のタケ亜科（a：断面、ｂ：側面）　試料No. 5

6：ウシクサ族（ａ：断面、ｂ：側面）　試料No. P-1-4

7：ヨシ属（断面）　試料No. 5

8：キビ族（側面）　試料No. 3

9：シバ属（断面）　試料No. 5

第２節　惣作遺跡出土木製品の樹種同定

黒沼保子（パレオ・ラボ）

（１）はじめに

惣作遺跡は安城市木戸町の鹿乗川左岸に所在する遺跡で、弥生時代から江戸時代までの様々な遺構や遺物が確認されている。ここでは 08A 区～ 08C 区から出土した木製品および木材 181 点の樹種同定を行なった。なお、樹種同定に際しては、独立行政法人森林総合研究所木材特性研究領域の能城修一氏にご指導いただいた。

（２）試料と方法

試料は、調査区 08Aa 区から 6 点、08Ab 区から 27 点、08B 区から 117 点、08C 区から 31 点の出土木製品および木材で、合計 181 点である。

方法は、剃刀を用いて試料の 3 断面（横断面・接線断面・放射断面）から切片を採取し、ガムクロラールで封入してプレパラートを作製した。これを光学顕微鏡で観察・同定し、写真撮影を行った。

（３）結果

樹種同定の結果、針葉樹はモミ属、カラマツ、マツ属複維管束亜属、ツガ属、スギ、ヒノキ、サワラ、アスナロ、マキ属、イヌガヤの 10 分類群、広葉樹はヤナギ属、クリ、ツブラジイ、スダジイ、アカガシ亜属、クヌギ節、コナラ節、ムクノキ、エノキ属、ケヤキ、クスノキ、クスノキ科、フタバガキ科、サカキ、バラ属、アカメガシワ、トチノキ、ガマズミ属の 18 分類群、タケ亜科 1 分類群の合計 29 分類群が確認された。樹種別に集計したものを第２表に、樹種同定結果の一覧を第３表に示す。

以下に同定根拠となった木材組織の特徴を記載し、光学顕微鏡写真を第 112 ～ 117 図に示す。

1）モミ属　*Abies*　マツ科　第 112 図 1a-1c(No.140)

仮道管および放射組織からなる針葉樹である。早材から晩材への移行は緩やかである。放射組織においてじゅず状末端壁がみられる。分野壁孔はスギ型で、1 分野に 1 ～ 4 個存在する。

モミ属は暖帯から温帯にかけて生育する常緑高木で、ウラジロモミ・シラベ・トドマツなど 5 種ある。材は柔軟で加工容易であるが割れやすく、狂いが出て保存性が低い。

2）カラマツ　*Larix kaempferi* (Lamb.) *Carrière*　マツ科　第 112 図 2a-2c(No.2)

仮道管、垂直・水平樹脂道、放射組織、放射仮道管からなる針葉樹である。早材から晩材への移行は比較的緩やかである。大型の樹脂道を薄壁のエピセリウム細胞が囲んでいる。分野壁孔はヒノキ型で、放射組織の上下に放射仮道管があり、壁孔縁は丸みを帯びる。

カラマツは宮城県以南の温帯に分布する落葉高木である。材は水湿に強い。

3）マツ属複維管束亜属　*Pinus* Subgen. *Diploxylon*　マツ科　第 112 図 3a-3c(No.58)

仮道管、垂直・水平樹脂道、放射組織、放射仮道管からなる針葉樹である。早材から晩材への移行はやや急で、晩材部は広い。大型の樹脂道を薄壁のエピセリウム細胞が囲んでいる。分野壁孔は窓状で、放射仮道管の水平壁は内側へ向かって鋸歯状の突起がみられる。

マツ属複維管束亜属は暖帯から温帯下部に分布する常緑高木で、アカマツとクロマツがある。材は油気が多く、靭性は大である。

樹種	計
モミ属	1
カラマツ	1
マツ属複維管束亜属	9
ツガ属	2
スギ	19
ヒノキ	53
サワラ	1
アスナロ	3
マキ属	10
イヌガヤ	1
ヤナギ属	2
クリ	7
ツブラジイ	5
スダジイ	1
アカガシ亜属	7
クヌギ節	7
コナラ節	19
ムクノキ	11
エノキ属	6
ケヤキ	2
クスノキ	3
クスノキ科	1
フタバガキ科	1
サカキ	3
バラ属	1
アカメガシワ	1
トチノキ	2
ガマズミ属	1
タケ亜科	1
合計	181

第２表　樹種別集計

4）ツガ属　Tsuga　マツ科　第 112 図 4a-4c(No.100)

仮道管、放射組織、放射仮道管からなる針葉樹である。早材から晩材への移行は急である。分野壁孔はスギ型～ヒノキ型で 1 分野に 2 ～ 4 個存在する。放射組織の上下に放射仮道管がある。

ツガ属は暖帯から福島県以南の温帯に生育する常緑高木で、ツガとコメツガがある。材はやや強い程度で耐朽・保存性は中庸、割裂・乾燥は容易である。

5）スギ　*Cryptomeria japonica* (L.f.) D.Don　スギ科　第 112・113 図 5a-5c(No.102)・6a-6c(No.134)

仮道管、放射組織、樹脂細胞からなる針葉樹である。早材から晩材への移行はやや急で、晩材部の幅は広い。樹脂細胞は主に晩材部に接線状に配列する。分野壁孔は大型のスギ型で、1 分野に通常 2 個並ぶ。

スギは暖帯・温帯下部に生育する。材は比較的軽軟で切削加工は容易、保存性は中庸で、割裂性は大きい。

6）ヒノキ　*Chamaecyparis obtusa* (Siebold et Zucc.) Endl.　ヒノキ科　第 113 図 7a-7c(No.17)・8a-8c(No.87)

仮道管、放射組織、樹脂細胞からなる針葉樹である。早材から晩材への移行はやや急である。樹脂細胞は晩材部に散在する。分野壁孔はトウヒ型～ヒノキ型で 1 分野に 2 個存在する。

ヒノキは温帯から暖帯に分布する。材は加工容易で割裂性は大きく、耐朽性・耐湿性は著しく高く、狂いが少ない。

7）サワラ　*Chamaecyparis pisifera* (Siebold et Zucc.) Endl.　ヒノキ科　第 113 図 9a-9c(No.94)

仮道管、放射組織、樹脂細胞からなる針葉樹である。ヒノキによく似ており、早材から晩材への移行はやや急で晩材部は狭い。樹脂細胞は年輪界付近にまばらに散在する。分野壁孔はやや大型のヒノキ型～スギ型で、1 分野に普通 2 個存在する。

サワラは岩手県以西の温帯山中に生育する常緑高木である。材は耐朽・保存性は中庸だが、水湿にはよく耐える傾向がある。

8）アスナロ　*Thujopsis dolabrata* Sieb. et Zucc.　ヒノキ科　第 113 図 10a-10c(No.71)

仮道管、樹脂細胞、放射組織からなる針葉樹である。早材部から晩材部への移行は比較的緩やかで、樹脂細胞が豊富である。分野壁孔は小型のスギ型～ヒノキ型で、1 分野に不揃いに 3 ～ 4 個存在する。

アスナロは温帯に分布する常緑高木である。材の加工性・割裂性は中庸だが、耐朽・保存性が高い。

9）マキ属　*Podocarpus*　マキ科　第 113・114 図 11a-11c(No.24)

仮道管、放射組織、樹脂細胞からなる針葉樹である。早材から晩材への移行は緩やかで、年輪界はやや不明瞭である。樹脂細胞は豊富で年輪にほぼ均等に散在する。分野壁孔はヒノキ型で 1 分野に 1 ～ 2 個存在する。

マキ属は関東以西の暖帯、亜熱帯に生育する常緑高木で、イヌマキ、ナギの 2 種がある。材は耐朽性があり、樹脂が多く耐水性がある。

10）イヌガヤ　*Cephalotaxus harringtonia* (Knight ex Forbes) K.Koch　イヌガヤ科　第 114 図 12a-12c(No.22)

仮道管、放射組織、樹脂細胞からなる針葉樹である。仮道管は薄壁で、晩材部の幅は非常に狭い。樹脂細胞は豊富で早材・晩材を通じて平等に分布する。分野壁孔はトウヒ型で 1 分野に 1 ～ 2 個存在する。仮道管にらせん肥厚がみられる。

イヌガヤは岩手県以南の暖帯から温帯に生育する常緑の低木または小高木である。材は堅硬・緻密である。

11）ヤナギ属　*Salix*　ヤナギ科　第 114 図 13a-13c(No.178)

やや小型の道管が単独もしくは数個複合してやや密に散在する散孔材である。道管の穿孔は単一である。放射組織は単列の異性で、道管放射組織間の細胞では円形の壁孔が明瞭である。

ヤナギ属は暖帯、温帯、寒帯に広く生育する落葉高木または低木で、ケショウヤナギ、コゴメヤナギ、シダレヤナギなど日本では 90 種ほどある。材は全般に軽軟で強度は低いが、靭性があり、切削加工は容易である。

12）クリ　*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.　ブナ科　第 114 図 14a-14c(No.116)

大型の道管が年輪界に並び、晩材部では薄壁で角張った小道管が火炎状に配列する環孔材である。道管の穿孔は単一で、軸方向柔組織はいびつな線状となる。放射組織は同性で主に単列である。

クリは温帯下部から暖帯に分布する落葉高木で、材は耐朽性・耐湿性に優れ、保存性が高い。

13）ツブラジイ　*Castanopsis cuspidata* (Thunb.) Schottky　ブナ科　第 114 図 15a-15c(No.38)

環孔性の放射孔材で、年輪の始めの道管は単独でやや大きく、接線方向に連続しない。晩材部では徐々に径を減じた小型で薄壁の小道管が集団をなして火炎状に配列する。軸方向柔組織はいびつな線状である。道管の穿孔は単一となる。放射組織は単列同性で、集合放射組織がみられる。

ツブラジイは暖帯に分布する常緑高木である。材はやや重硬で割裂性・乾燥は中庸、耐久性は著しく低い。

14）スダジイ　*Castanopsis sieboldii* (Makino) Hatus. ex

T.Yamaz. et Mashiba　ブナ科　第 114 図 16a-16c(No.46)

環孔性の放射孔材で、年輪の始めの道管は単独でやや大きく、接線方向に連続しない。晩材部では徐々に径を減じた小型で薄壁の小道管が集団をなして火炎状に配列する。道管の穿孔は単一となる。軸方向柔組織はいびつな線状である。放射組織は単列同性である。

スダジイは福島県・新潟県佐渡以南の暖帯に生育する常緑高木である。材はやや重硬で割裂性・乾燥・耐朽性は中庸だが狂いが出やすい。

15）コナラ属アカガシ亜属 *Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*　ブナ科　第 115 図 17a-17c(No.118)

円形でやや大型の道管が単独で放射方向に配列する放射孔材である。軸方向柔細胞は短接線状～いびつな線状となる。道管の穿孔は単一である。放射組織は同性で単列のものと広放射組織がある。

アカガシ亜属は主に暖帯に分布する常緑高木で、イチイガシ、アカガシ、ハナカガシ、ツクバネガシ、アラカシなど 8 種がある。材はきわめて堅硬、弾性強く強靱で、水湿に強い。

16）コナラ属クヌギ節　*Quercus* sect. *Aegilops*　ブナ科　第 115 図 18a-18c(No.151)

年輪界はじめに大型の道管が並ぶ環孔材で、晩材部では急に径を減じた円形で厚壁の小道管が単独で放射方向に配列する。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管の穿孔は単一である。放射組織は同性で、単列と広放射組織の 2 種類がある。

クヌギ節は暖帯に生育する落葉高木で、クヌギ・アベマキがある。材は全体的に重硬である。

17）コナラ属コナラ節　*Quercus* sect. *Prinus*　ブナ科　第 115 図 19a-19c(No.40)・20a-20c(No.45)

年輪界はじめに大型の道管が並ぶ環孔材で、晩材部では急に径を減じた薄壁で角張った小道管が火炎状に配列する。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管の穿孔は単一である。放射組織は同性で、単列と広放射組織の 2 種類がある。

コナラ節は温帯下部および暖帯に分布する落葉高木で、カシワ・ミズナラ・コナラ・ナラガシワがある。材は全体的に重硬である。

18）ムクノキ　*Aphananthe aspera* (Thunb.) Planch.　ニレ科　第 115・116 図 21a-21c(No.131)・22a-22b(No.180)

中型の径で厚壁の道管が単独ないし 2 ～ 3 個複合し、年輪を通じて均等に分布する散孔材。軸方向柔組織は周囲状～ 5 列幅程度の帯状となる。道管の穿孔は単一である。放射組織は 1 ～ 6 細胞幅で、方形細胞が上下端に 2 細胞程度連なる異性である。

ムクノキは関東以西の暖帯、亜熱帯に生育する落葉高木である。材は堅く密で強靱である。

19）エノキ属　*Celtis*　ニレ科　第 116 図 23a-23c(No.155)

大型の道管が年輪界のはじめに配列し、晩材部では径を減じた薄壁の小道管が集団をなして接線～斜線状に配列する環孔材である。軸方向柔組織は周囲状～翼状となる。道管の穿孔は単一である。放射組織は 3 ～ 8 列幅の異性で鞘細胞がみられ、膨らんだ細胞中に結晶を含む。

エノキ属は温帯から熱帯分布する落葉性の小高木から高木で、エゾエノキやエノキなど 4 種がある。材はやや硬いが強度や耐朽性は比較的低く、狂いが出やすい。

20）ケヤキ　*Zelkova serrata* (Thunb.) Makino　ニレ科　第 116 図 24a-24c(No.78)

大型の道管が年輪界のはじめに 1 列に並び、晩材部では小道管が集団をなして接線～斜線状に配列する環孔材である。道管の穿孔は単一である。小道管にはらせん肥厚がみられる。放射組織は 4 ～ 8 列幅程度の異性で、上下端の細胞に大きな結晶を含む。

ケヤキは暖帯下部に分布する落葉高木で、肥沃地や渓畔によく生育する。材は重硬で狂いが出にくい。

21）クスノキ　*Cinnamomum Camphora* Sieb.　クスノキ科　第 116 図 25a-25c(No.43)

径の大きい道管が単独ないし 2 ～ 4 個複合して散在する散孔材であるが、晩材部では道管径を減じ、半環孔状となる。軸方向柔組織は周囲状～翼状で、道管の穿孔は単一である。放射組織は異性で 1 ～ 3 細胞幅で大型の油細胞がある。

クスノキは暖帯から亜熱帯に分布する常緑高木である。材はやや軽軟なものから中庸程度まで幅広いが、切削加工は容易、耐水性・耐朽性・耐虫性は極めて高い。

22）クスノキ科　*Lauraceae*　第 116 図 26a-26c(No.52)

径中庸の道管が単独ないし 2 ～ 4 個複合してまばらに散在する散孔材である。軸方向柔組織は周囲状～翼状となる。道管の穿孔は単一である。放射組織は 1 ～ 3 細胞幅の異性で油細胞がある。

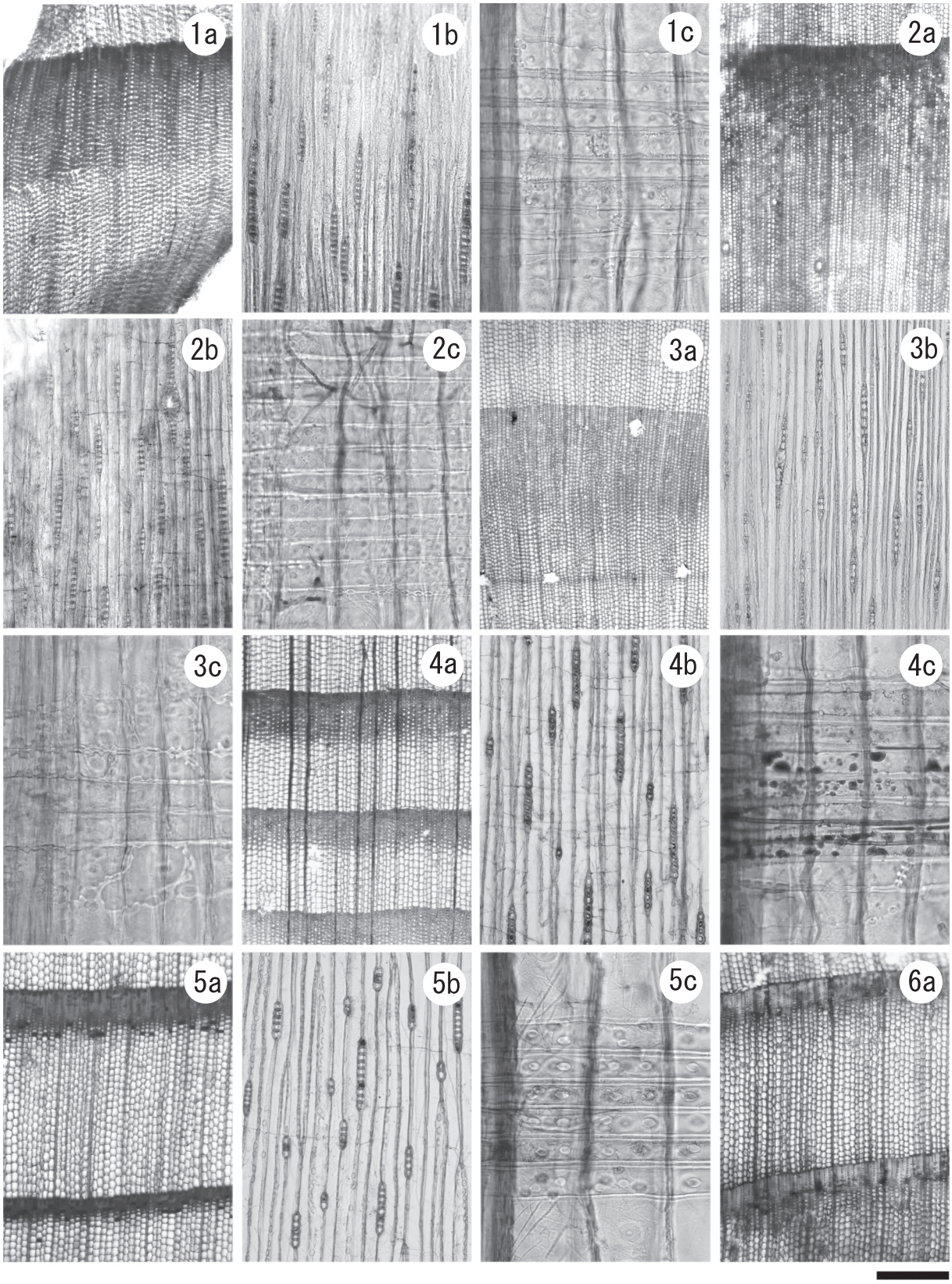
クスノキ科は熱帯から温帯に分布する常緑または落葉の高木もしくは低木である。ニッケイ属、タブノキ属、クロモジ属など 8 属がある。木材組織からはクスノキ以外は識別困難なため、クスノキを除いたとクスノキ科する。

23）フタバガキ科　*Dipterocarpaceae*　第 116 図 27a-27c(No.148)

大型で円形の道管が、単独で散在する散孔材である。年輪界は不明瞭で、晩材部に垂直樹脂道がみられる。軸方向柔組

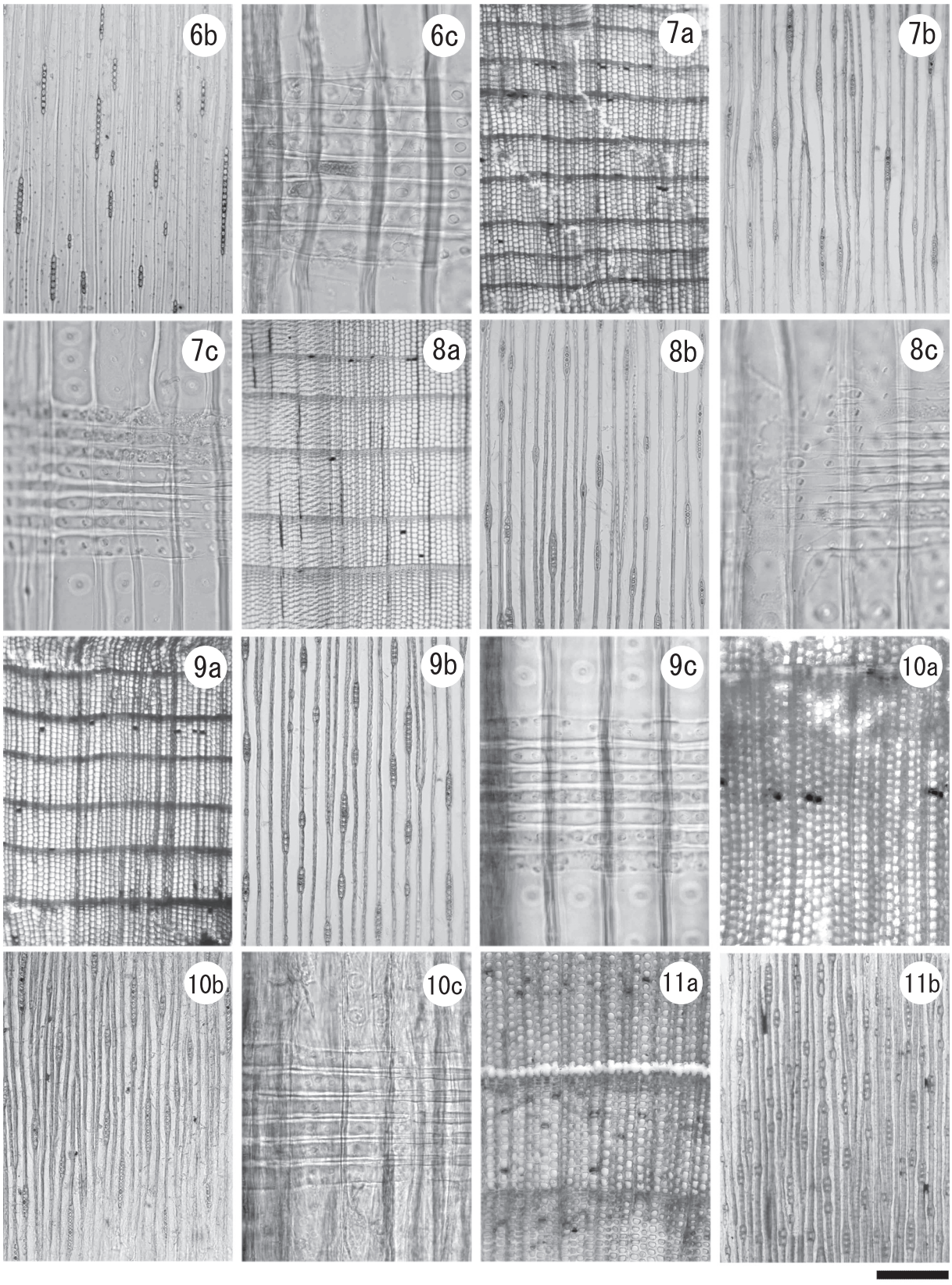
樹種	整理No.	調査区	取上No.	グリッド	遺構	器種	樹種
1	144	08Aa	1134	-	-	杭	マツ属複維管束亜属
2	178	08Aa	-	10E5d	攪乱	穿孔板	カラマツ
3	183	08Aa	1140	-	-	穿孔板	ヒノキ
4	1	08Ab	928/929	-	003NR	木簡	ヒノキ
5	3	08Ab	909	-	003NR	建築部材	マキ属
6	6	08Ab	919	-	003NR 4層	曲物側板	ヒノキ
7	45	08Ab	904/921	-	003NR	曲物底板	ヒノキ
8	46	08Ab	914	-	068NR	曲物底板	ヒノキ
9	57	08Ab	938	-	003NR	作業台	ヒノキ
10	113	08Ab	902	-	003NR	建築部材	ヒノキ
11	129	08Ab	936	-	003NR	曲物底板	ヒノキ
12	130	08Ab	920	-	003NR	曲物底板	ヒノキ
13	131	08Ab	932	-	003NR	有快角棒（穿孔）	ヒノキ
14	132	08Ab	913	-	003NR	曲物底板	ヒノキ
15	137	08Ab	959	-	003NR	有頭棒	マキ属
16	138	08Ab	962	-	003NR	有快板	ヒノキ
17	139	08Ab	951	-	003NR	穿孔板	ヒノキ
18	141	08Ab	954	-	003NR	曲物底板	ヒノキ
19	142	08Ab	937	-	003NR	杭	クヌギ節
20	180	08Ab	987	-	003NR	窓枠？	ヒノキ
21	181	08Ab	906	-	003NR	穿孔板	ヒノキ
22	2	08B	612	-	003NR	団扇柄	イヌガヤ
23	7	08B	243	-	003NR 5層	曲物底板	ヒノキ
24	12	08B	467(2/2)	-	003NR 5層	有快丸棒	マキ属
25	16	08B	121	-	003NR	柱	コナラ節
26	17	08B	231	-	003NR	分割材	クヌギ節
27	21	08B	222	-	003NR	柱	コナラ節
28	22	08B	131/132	10E13b	003NR 5層	柱	マキ属
29	23	08B	465	-	003NR 5層	柱	コナラ節
30	29	08B	345	-	003NR 5層	建築部材	コナラ節
31	43	08B	644	-	深掘	箱側板	ヒノキ
32	48	08B	605	-	068NR	穿孔板	ヒノキ
33	49	08B	-	-	003NR 5層	カゴ底板	ヒノキ
34	51	08B	457	-	003NR 5層	曲柄四又鍬	アカガシ亜属
35	58	08B	401	-	-	横斧柄	アカガシ亜属
36	59	08B	002	10D19q	-	漆椀	トチノキ
37	60	08B	003	10D19q	-	漆椀	トチノキ
38	62	08B	196/197	10D13t	003NR 5層	穿孔板	ツブラジイ
39	64	08B	124/125	10E13d	003NR	桶側板	スギ
40	68	08B	337	-	003NR 5層	曲柄平鍬	コナラ節
41	79	08B	420	-	003NR 5層	案（肘掛）	ツブラジイ
42	80	08B	600	-	003NR 5層	斎串	ヒノキ
43	83	08B	588	-	003NR 5層	槽	クスノキ
44	88	08B	591	-	003NR 5層	穿孔板	スギ
45	89	08B	621	-	003NR 5層	曲柄鍬	コナラ節
46	91	08B	584	-	003NR 5層	杭	スダジイ
47	92	08B	546	-	003NR 5層	曲柄鍬（転用）	コナラ節
48	97	08B	572	-	003NR 5層	穿孔板	スギ
49	99	08B	460	-	003NR 5層	ヘラ	ヒノキ
50	100	08B	533-1	-	003NR 5層	槽	クリ
51	101	08B	467-1	-	003NR 5層	鍬膝柄	サカキ
52	102	08B	499	-	003NR 5層	垂木	クスノキ科
53	106	08B	347	-	003NR 5層	杭	コナラ節
54	133	08B	421	-	003NR 5層	梯子	マツ属複維管束亜属
55	134	08B	148	-	003NR 5層	敷居	クリ
56	135	08B	-	-	003NR 5層	槽	クスノキ
57	150	08B	-	10D13t	003NR 5層	曲柄鍬	アカガシ亜属
58	151	08B	-	10D19q	002SX 埋土	杭	マツ属複維管束亜属
59	152	08B	-	10D19q	002SX 埋土	柱	クヌギ節
60	153	08B	-	10D12a	003NR 5層	曲柄平鍬	コナラ節
61	154	08B	-	10E13d	003NR 4層	槽	クスノキ
62	159	08B	-	10E13t	003NR 5層	建築部材	コナラ節
63	176	08B	-	10D19p	003NR 3層	桶側板	ヒノキ
64	182	08B	477	10E13a	003NR	鍬膝柄	サカキ
65	179-1	08B	423	10E13a	003NR 5層	臼	ケヤキ
66	42	08C	-	1D6m	003NR 5層	柱	コナラ節
67	44	08C	819	-	深掘	下駄	スギ
68	47	08C	805	-	068NR	下駄	スギ
69	50	08C	814	-	003NR 5層	曲物底板	スギ
70	52	08C	-	1D12i	003NR	赤彩板	ヒノキ
71	53	08C	-	1D12i	068NR	丸棒	アスナロ
72	56	08C	802	-	068NR	下駄	スギ
73	108	08C	828	-	068NR	穿孔板	アスナロ
74	109	08C	823	-	068NR	穿孔角棒	アカガシ亜属
75	122	08C	803	-	068NR	穿孔板	ヒノキ
76	125	08C	799	-	068NR	下駄	スギ
77	128	08C	801	-	068NR	有快角棒	マキ属
78	157	08C	-	1D14h	068NR	有溝板	ケヤキ
79	145	08Aa	1141	-	-	板	ヒノキ
80	4	08Aa	916	-	003NR	板	ヒノキ
81	5	08Ab	983	-	003NR	分割材	ヒノキ
82	10	08Ab	923	-	003NR 4層	板	ヒノキ
83	111	08Ab	905	-	003NR	板	ヒノキ
84	136	08Ab	941	-	003NR	板	ヒノキ
85	146	08Ab	981	-	003NR	板	ヒノキ
86	172	08Ab	-	10E10a	5層	板	スギ
87	173	08Ab	-	10E11c	-	板	ヒノキ
88	8	08B	543	-	003NR 5層	丸棒	ヒノキ
89	9	08B	606	-	003NR 5層	丸棒	ヒノキ
90	11	08B	-	10E13b	003NR 5層	丸棒	マキ属
91	15	08B	532	-	003NR 5層	角棒	クリ
92	18	08B	098/099	10D19q	002SX	丸太	マツ属複維管束亜属
93	26	08B	321	-	003NR 5層	分割材	ヒノキ
94	33	08B	459	-	003NR 5層	板	サワラ
95	35	08B	344	-	003NR 5層	分割材	ムクノキ
96	39	08B	623	-	003NR 5層	分割材	クリ
97	55	08B	611	-	003NR 5層	板	ヒノキ
98	61	08B	173～177	10D12t	003NR 5層	分割材	クヌギ節
99	65	08B	124/125	10E13d	003NR 5層	板	スギ
100	66	08B	124/125	10E13d	003NR 5層	板	ツガ属
101	67	08B	126/127	10E13d	003NR	丸太	エノキ属
102	69	08B	206	10E13b	003NR	板	スギ
103	70	08B	259	-	003NR 5層	板	コナラ節
104	72	08B	365	-	003NR	板	ヒノキ
105	75	08B	416	-	003NR 5層	丸棒	マキ属
106	76	08B	427	-	003NR 5層	分割材	ムクノキ
107	77	08B	424	-	003NR 5層	分割材	ツブラジイ
108	78	08B	422	-	003NR 5層	丸太	コナラ節
109	81	08B	614	-	003NR 5層	板	ヒノキ
110	82	08B	593	-	003NR 5層	板	ヒノキ
111	84	08B	614-1	-	003NR 5層	板	ヒノキ
112	85	08B	609	-	003NR 5層	角棒	ヒノキ
113	86	08B	620	-	003NR 5層	丸太	ガマズミ属
114	90	08B	617	-	003NR 5層	丸棒	マキ属
115	93	08B	582	-	003NR 5層	板	ヒノキ
116	96	08B	561	-	003NR 5層	板	クリ
117	98	08B	545	-	003NR 5層	板	ヒノキ
118	103	08B	430	-	003NR 5層	丸棒	アカガシ亜属
119	104	08B	553	-	003NR 5層	角棒	アカガシ亜属
120	107	08B	533	-	003NR 5層	板	クリ
121	120	08B	638	-	003NR 5層	板	ヒノキ
122	121	08B	622	-	003NR 5層	板	ツブラジイ
123	143	08B	981-1	-	003NR	残材	ヒノキ
124	149	08B	208	-	003NR 5層	丸太	ムクノキ
125	155	08B	-	10D13e	003NR 5層	板	ヒノキ
126	156	08B	-	10D13e	003NR 5層	角棒	スギ
127	158	08B	-	10E13d	003NR 4層	板	ヒノキ
128	162	08B	-	10D13t	003NR 5層	板	ヒノキ
129	163	08B	-	10E13b	003NR 5層	角棒	スギ
130	164	08B	-	10E13d	003NR 4層	板	ヒノキ
131	165	08B	-	10E13b	003NR 5層	残材	ムクノキ
132	167/169	08B	-	10E13d	深掘	板	ヒノキ
133	171	08B	-	10E14e	深掘	残材	エノキ属
134	41	08C	869	1D13i	深掘	板	スギ
135	54	08C	813	-	068NR	板	スギ
136	112	08C	804	-	068NR	板	スギ
137	114	08C	871	1D13i	深掘	板	マツ属複維管束亜属
138	115	08C	827	-	068NR	板	アスナロ
139	116	08C	870	1D13i	深掘	板	マツ属複維管束亜属
140	117	08C	697	1D12i	TR12	板	モミ属
141	118	08C	697-1	1D12i	TR12	丸棒	マキ属
142	119	08C	711	1D12i	TR12	苛	スギ
143	123	08C	793	-	068NR	角棒	マツ属複維管束亜属
144	124	08C	794	-	068NR	板	マツ属複維管束亜属
145	126	08C	798	-	068NR	板	マツ属複維管束亜属
146	127	08C	795	-	068NR	板	ヒノキ
147	161	08C	-	1D14h	068NR	板	ツガ属
148	166	08C	-	1D8o	検1	板	フタバガキ科
149	168	08C	-	1D11j	深掘	板	タケ亜科
150	148	08Aa	1153	10E4f	291SE	丸棒	マキ属
151	140	08Ab	970	-	003NR	丸太	クヌギ節
152	147	08Ab	976	-	003NR	丸太	クヌギ節
153	14	08B	429	-	003NR 5層	丸太	アカメガシワ
154	19	08B	536	-	003NR 5層	分割材	ヒノキ
155	20	08B	630	-	003NR 5層	丸太	エノキ属
156	24	08B	-	10E12a	003NR 5層	丸太	クリ
157	25	08B	227	-	003NR 5層	丸太	ムクノキ
158	27	08B	471	-	003NR 5層	丸太	クヌギ節
159	28	08B	129/130	-	003NR 5層	丸太	アカガシ亜属
160	30	08B	631	-	003NR 5層	丸太	ヤナギ属
161	31	08B	346	-	003NR 5層	丸太	コナラ節
162	32	08B	218	-	003NR 5層	丸太	コナラ節
163	34	08B	484	-	003NR 5層	丸太	エノキ属
164	36	08B	-	10E14e	深掘	分割材	エノキ属
165	37	08B	-	10E13d	深掘	分割材	ムクノキ
166	38	08B	-	10E13d	深掘	分割材	ムクノキ
167	40	08B	-	10E13c	深掘	分割材	ムクノキ
168	63	08B	141	10D13t	003NR 5層	丸太	コナラ節
169	71	08B	374	-	003NR	丸太	コナラ節
170	73	08B	354	-	003NR	丸太	コナラ節
171	74	08B	336	-	003NR	丸太	ムクノキ
172	87	08B	585	-	003NR 5層	丸太	コナラ節
173	94	08B	476	-	003NR 5層	分割材	ツブラジイ
174	95	08B	570	10D15s	深掘	丸太	バラ属
175	105	08B	553	-	003NR 5層	分割材	サカキ
176	110	08C	829	-	068NR	分割材	スギ
177	174	08C	-	1D12j	TR12	板	スギ
178	160	08B	-	10E12a	003NR 5層	丸太	ヤナギ属
179	13	08B	340	-	003NR 5層	丸太	ムクノキ
180	170	08B	-	10E13c	深掘	丸太	ムクノキ
181	175	08B	-	10D16s	003SD北,3層	炭化材	エノキ属

第３表　樹種同定結果一覧（なお図化遺物については番号下に樹種を記載している）



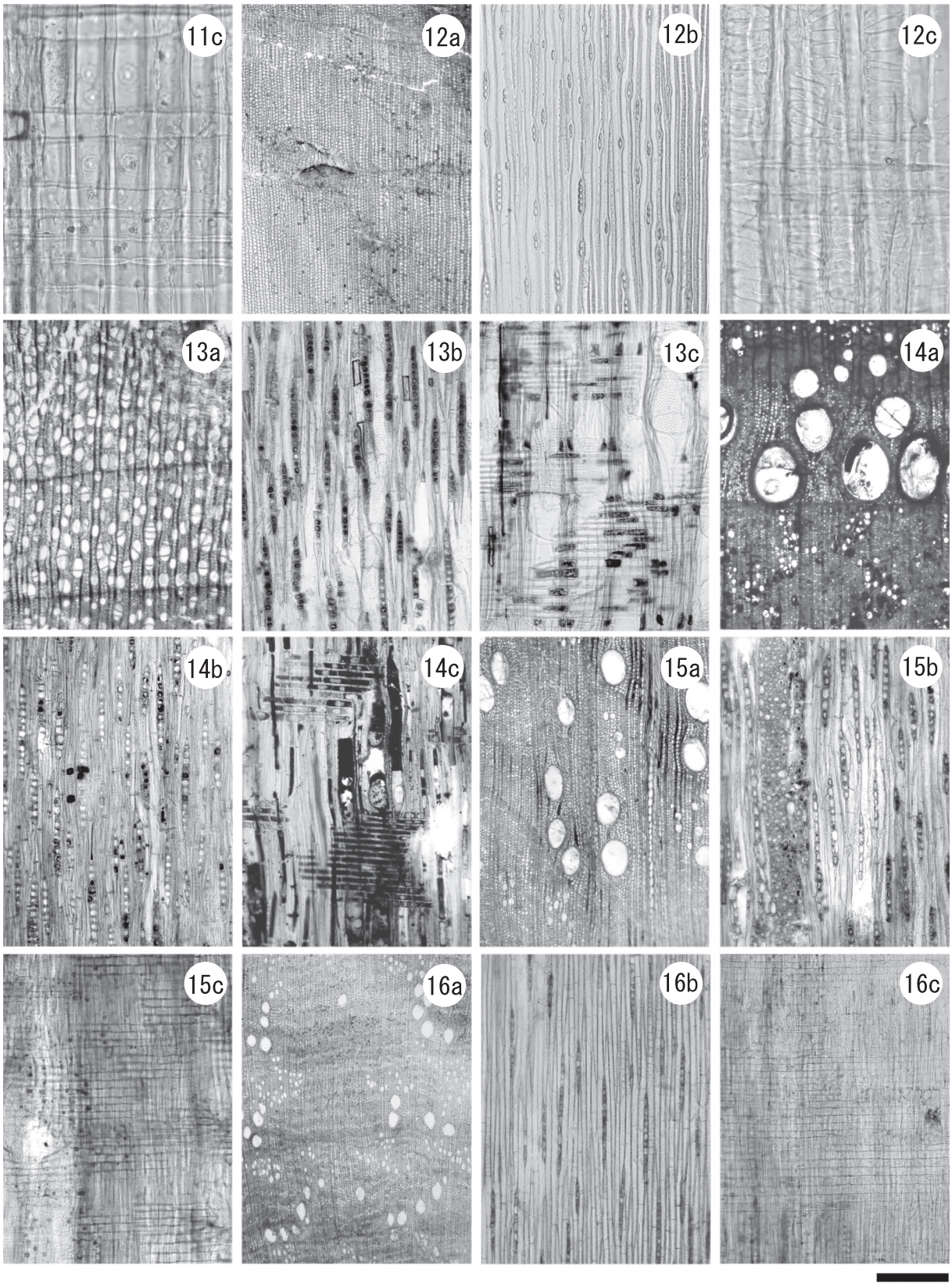
第 112 図　惣作遺跡出土材の光学顕微鏡写真（1）

1a-1c. モミ属（№ 140）、2a-2c. カラマツ（№ 2）、3a-3c. マツ属複維管束亜属（№ 58）、4a-4c. ツガ属（№ 100）、5a-5c. スギ（№ 102）、6a. スギ（№ 134）
a: 横断面（スケール =500 μ m）、b: 接線断面（スケール =200 μ m）、c: 放射断面（スケール =50 μ m）



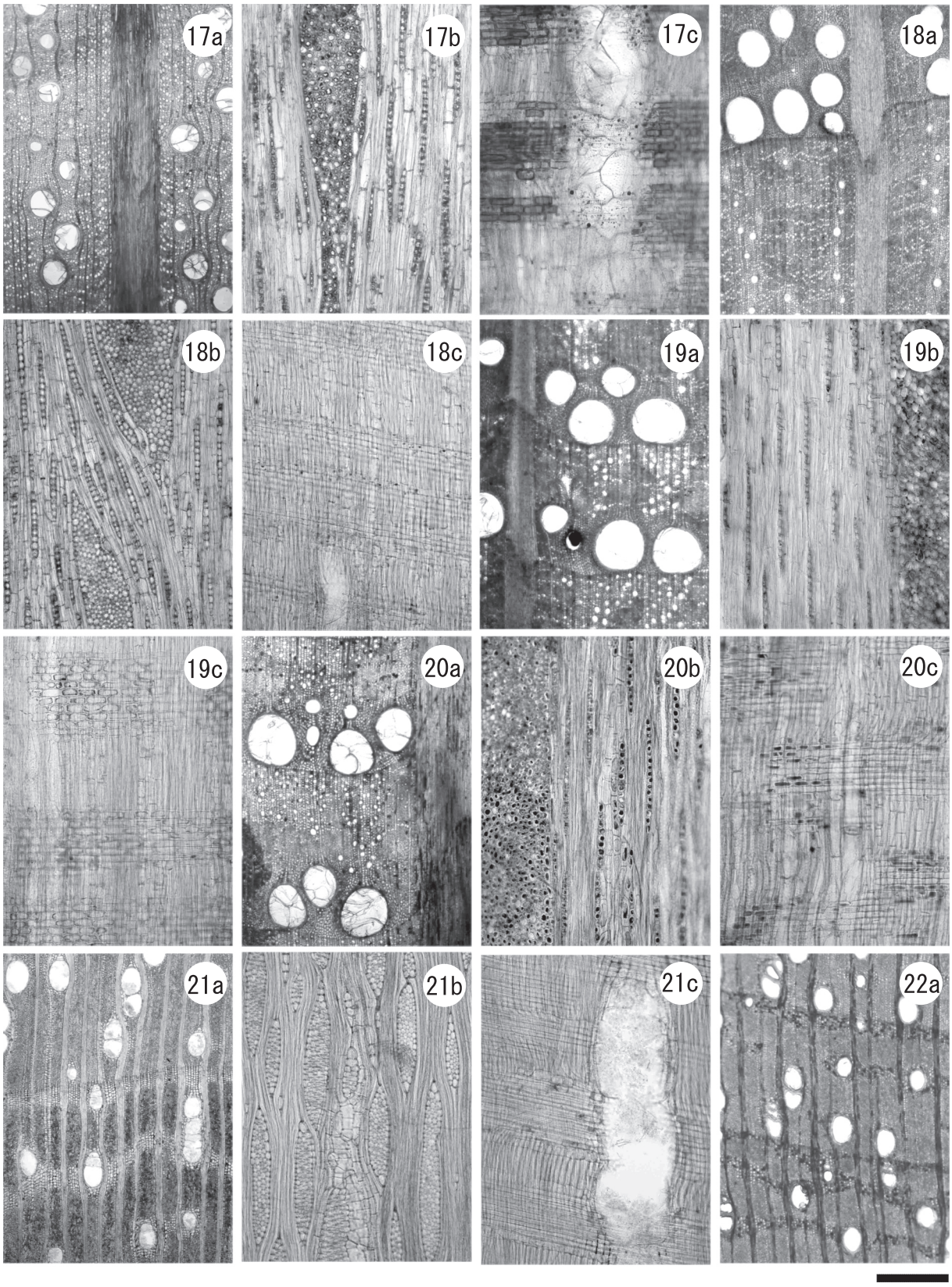
第 113 図　惣作遺跡出土材の光学顕微鏡写真（2）

6b-6c. スギ（№ 134）、7a-7c. ヒノキ（№ 17）、8a-8c. ヒノキ（№ 87）、9a-9c. サワラ（№ 94）、10a-10c. アスナロ（№ 71）、11a-11b. マキ属（№ 24）
a: 横断面（スケール =6a-9a:500 μ m、10a-11a:200 μ m）、b: 接線断面（スケール =200 μ m）、c: 放射断面（スケール =50 μ m）



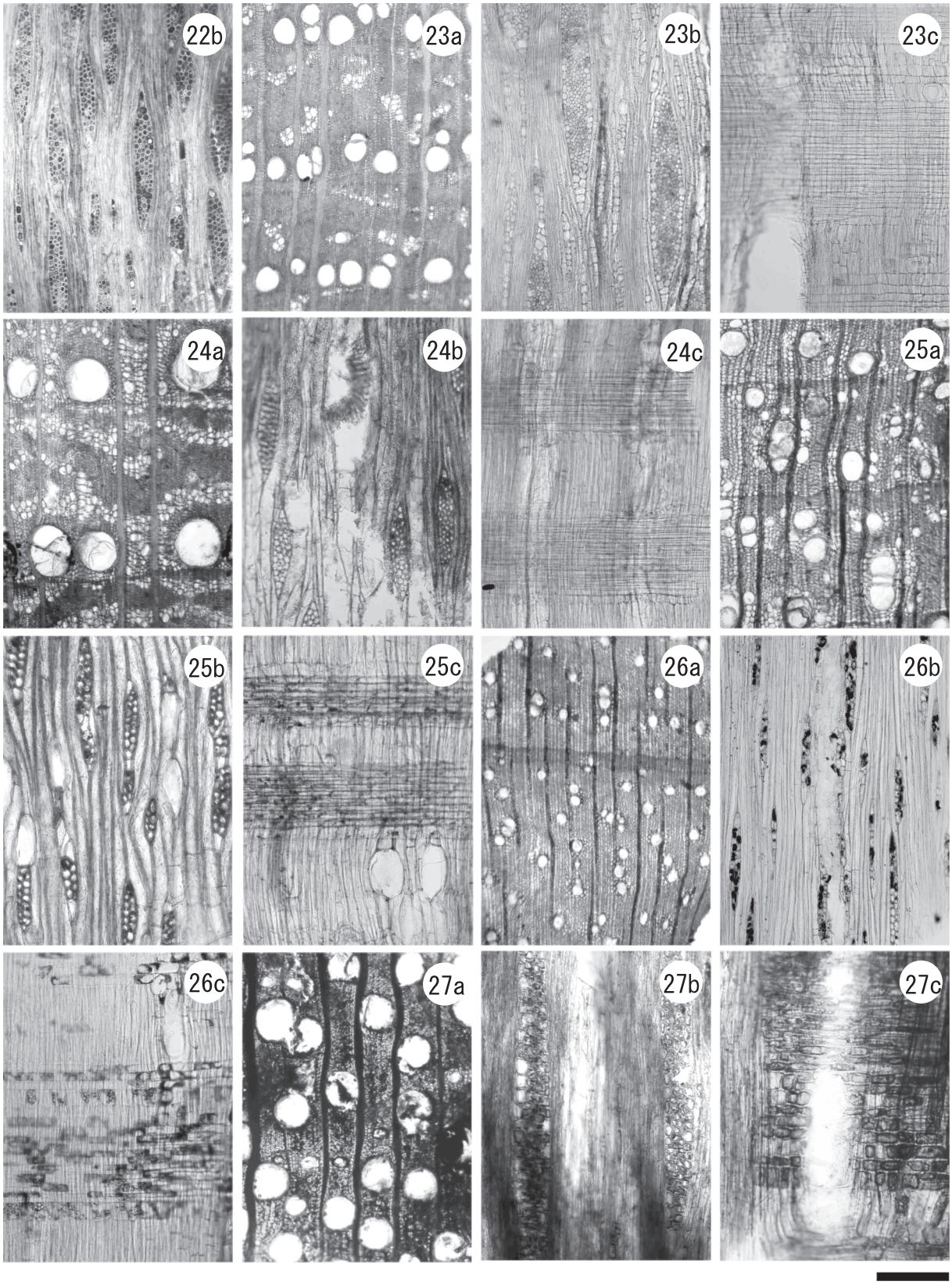
第 114 図　惣作遺跡出土材の光学顕微鏡写真（3）

11c. マキ属（№ 24）、12a-12c. イヌガヤ（№ 22）、13a-13c. ヤナギ属（№ 178）、14a-14c. クリ（№ 116）、15a-15c. ツブラジイ（№ 38）、16a-16c. スダジイ（№ 46）
a: 横断面（スケール =500 μ m）、b: 接線断面（スケール =200 μ m）、c: 放射断面（スケール =11c-12c:50 μ m 、13c-16c:200 μ m）



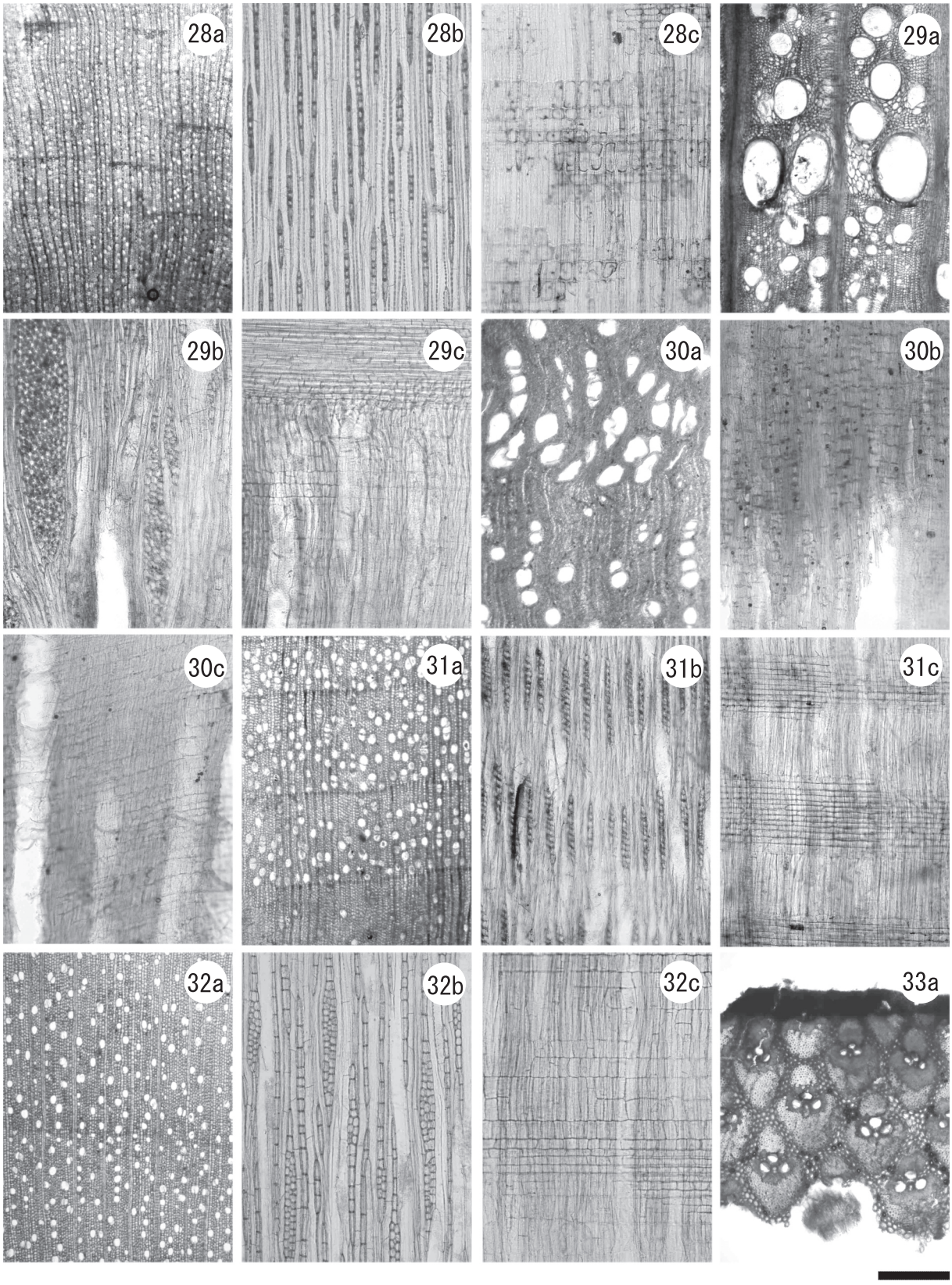
第 115 図　惣作遺跡出土材の光学顕微鏡写真（4）

17a-17c. コナラ属アカガシ亜属(№ 118)、18a-18c. コナラ属クヌギ節(№ 151)、19a-19c. コナラ属コナラ節(№ 40)、20a-20c. コナラ属コナラ節（№ 45)、21a-21c. ムクノキ（№ 131)、22a. ムクノキ（№ 180）
a: 横断面（スケール =500 μ m)、b: 接線断面（スケール =200 μ m)、c: 放射断面（スケール =200 μ m）



第 116 図　惣作遺跡出土材の光学顕微鏡写真（5）

22b. ムクノキ（№ 180）、23a-23c. エノキ属（№ 155）、24a-24c. ケヤキ（№ 78）、25a-25c. クスノキ（№ 43）、26a-26c. クスノキ科（№ 52）、27a-27c. フタバガキ科（№ 148）
a: 横断面（スケール =500 μ m）、b: 接線断面（スケール =200 μ m）、c: 放射断面（スケール =200 μ m）



第 117 図　惣作遺跡出土材の光学顕微鏡写真（6）

28a-28c. サカキ（№ 175）、29a-29c. バラ属（№ 174）、30a-30c. アカメガシワ（№ 153）、31a-31c. トチノキ（№ 37）、32a-32c. ガマズミ属（№ 113）、33a. タケ亜科（№ 149）
a: 横断面（スケール =500 μ m）、b: 接線断面（スケール =200 μ m）、c: 放射断面（スケール =200 μ m）

織は周囲状～翼状となる。道管の穿孔は単一である。放射組織は 3 ～ 6 列幅程度の異性で、細胞高は 1mm を超える。

フタバガキ科は東南アジア、アフリカ、南米などの熱帯に分布する常緑高木である。日本には自生しないが、ラワン材として多く持ち込まれている。

24）サカキ　*Cleyera japonica* Thunb.　ツバキ科　第 117 図 28a-28c(No.175)

小径で角張った道管が単独で均等に分布する散孔材である。道管の穿孔は 20 段程度の階段状である。放射組織は異性でほぼ 1 列である。

サカキは暖帯から亜熱帯に分布する常緑の小高木である。材は硬く強靭、割裂は困難である。

25）バラ属　*Rosa*　バラ科　第 117 図 29a-29c(No.174)

やや大型の道管が年輪界に並ぶ環孔材で、晩材部の小道管はほぼ単独である。道管の穿孔は単一で、道管壁にはらせん肥厚がみられる。放射組織は異性で、単列のものと広放射組織がみられ、細胞高が 1mm を超えるものもある。

バラ属は亜熱帯から亜寒帯に分布する落葉の低木である。ノイバラ節、ハマナシ節、サンショウバラ節などに分かれ約 15 種があるが、変種や園芸種も多い。

26）アカメガシワ　*Mallotus japonicas* (Thunb. ex Murray) Muell. Arg. トウダイグサ科　第 117 図 30a-30c(No.153)

やや厚壁の道管が晩材部に向けて徐々に径を減じ、晩材部では小道管が放射方向に配列する半環孔材である。軸方向柔組織は短接線状である。道管の穿孔は単一で、道管放射組織間の壁孔は円形である。放射組織は単列の異性である。

アカメガシワは宮城県・秋田県以西の温帯から暖帯に分布する落葉高木で、日当たりのよい二次林にふつうに生育する。材は軽軟で耐久性が低く、器具材・薪炭材などに用いられる。

27）トチノキ　*Aesculus turbinata* Blume　トチノキ科　第 117 図 31a-31c(No.37)

やや小型の道管が単独もしくは数個放射方向に複合して均等に分布する散孔材である。道管の穿孔は単一である。放射組織は単列の同性で、接線断面において層界状に配列する。

トチノキは温帯から暖帯に分布する落葉高木で、やや湿り気のある肥沃な土地の深い谷間や中腹の緩傾斜地によく生育する。材は柔らかく緻密であるが、保存性はない。

28）ガマズミ属　*Viburnum*　スイカズラ科　第 117 図 32a-32c(No.113)

小型の道管が単独で年輪内に均等に散在する散孔材である。道管の穿孔は 20 段程度の階段状である。放射組織は異性で、1 ～ 4 細胞幅で細胞高が高い。

ガマズミ属は温帯から熱帯に分布する落葉または常緑の高木または低木で、日本にはカンボク・オオカメノキ・ヤブデマリ・ガマズミなど 16 種ある。

29）タケ亜科　*Gramineae* subfam. Bambusoideae　イネ科　第 117 図 33a(No.149)

柔細胞と維管束で構成される単子葉類で、維管束が柔細胞中に散在する不斉中心柱である。タケ亜科は 12 属が含まれるが、稈の組織のみから属や種を識別することは難しい。

二次肥大成長を行わないため木本とはいえないが、高木化するために木材のように用いられる。割裂性が非常に大きい。

（4）まとめ

全体ではヒノキが最も多く、針葉樹ではスギ、マキ属が続く。広葉樹ではコナラ節やムクノキが多い。広葉樹は 18 分類群が検出されているが、その多くは数点のみの検出である。1 点検出されたフタバガキ科は日本には生育しない南洋材であるため、おそらく後世に持ち込まれたラワン材が混入したものと思われる。

ヒノキやマキ属の割合が多いのは、下懸遺跡など近隣遺跡における樹種組成と類似しており、遺跡周辺にこれらの樹種が豊富に存在していたと推測される（植田・野村 2009）。

本遺跡のある地域周辺は照葉樹林帯に属しており、本遺跡においてもシイ属、アカガシ亜属といった常緑広葉樹が確認できることから、シイ－カシ林があったと推測される。同様にクスノキやサカキやマキ属も暖温帯に生育する樹種である。

一方、クヌギ節やコナラ節、アカメガシワ、マツ属複維管束亜属は二次林的要素が強く、ガマズミ属もクヌギ－コナラ林によく生育する低木であることから、自然植生の利用に伴った二次林の存在も伺える。さらにムクノキやエノキ属なども日当たりの良い土地を好むことから、やや開けた土地が遺跡周辺に存在したと考えられる。

また、針葉樹であるモミ属のモミ、ツガ属のツガなどは暖温両帯にまたがって広葉樹と混生し、モミは谷地に、ツガは尾根に分布する傾向がある。また、カラマツはやや標高の高い位置に分布する針葉樹であるため、これらの樹種は周辺の山地から採取されたものと思われる。

引用文献

植田弥生・野村敏江 2009「樹種同定」『下懸遺跡』愛知県埋蔵文化財センター P102-103

第３節　惣作遺跡から出土した大型植物遺体

佐々木由香・バンダリ スダルシャン（パレオ・ラボ）

（1）はじめに

安城市木戸町の鹿乗川左岸に所在する惣作遺跡は、自然堤防およびその後背湿地に立地している。標高は約 7m である。調査では、古墳時代から中世と推測される遺構が検出され、遺構内や河川跡から土壌試料が採取された。以下に、古墳時代の土器内と古代（平安時代か）の畑などで採取された土壌試料について行った大型植物遺体の同定結果を示し、利用植物および周辺の植生について検討した。

（2）試料と方法

試料は土壌試料 25 試料である。採取位置と試料数の内訳は、08Aa 区の柱穴である 128SP と 162SP（採取位置の詳細は不明）から採取した 2 試料、08Ab 区の河川跡である 003NR 出土土器 P988 の内部から採取した 2 試料、08B 区の 003NR の 5 層出土土器（P328, P392, P402, P407, P409（2 試料あり）, P443, P444, P446, P450, P490, P496, P500, P511, P604）の内部から採取した 15 試料、同じく 5 層出土の土器だが遺物番号は不明の 1 試料、003NR 出土だが出土層位が不明な土器（P107, P116）の内部から採取した 2 試料、08C 区の性格不明遺構である 071SZ から採取した 2 試料、08Aa 区の溝群（詳細な出土位置不明）から採取した 1 試料である。試料番号は収納されたコンテナごとに No.1 から付してあったが、ここでは便宜的に試料番号の前にコンテナ番号を付けて区別した。試料の一覧を第 4 表に示す。試料の時期は土器内の土壌が弥生時代中期および古墳時代前期で、溝群の土壌が平安時代？で、そのほかは古代～中世である。

土壌の水洗量は、溝群が 1000cc、これ以外については 300cc を基準とし、300cc に採取量が満たない試料は採取量のほぼ全量を水洗した（128SP と 162SP は 100cc、P392 は 75cc、P407 と P328 は 200cc）。ただし、P107 内部の土壌量は 10g 未満であったため、水洗せずに土壌中の種実の有無を確認した。2 試料に分けて採取してあった試料はどちらか一方の試料を水洗した。水洗は最小 0.25mm 目の篩を用いて行った。大型植物遺体の抽出および同定は肉眼および実体顕微鏡下で行った。計数困難な分類群はおおよその産出数を記号（+）で示した。試料は愛知県埋蔵文化財センターに保管されている。

（3）結果

同定の結果、大型植物遺体が産出した試料は OO3NR 出土の土器内部採取試料と溝群採取試料のみで、08Aa 区の 128SP と 162SP、08C 区の 071SZ からは種実が全く得られなかった。OO3NR 出土の土器内部から得られた木本植物は、ナラガシワ殻斗・未熟果と、ミズナラ - ナラガシワ殻斗・幼果、コナラ属コナラ節果実、ムクノキ核、エノキ果実・核、クワ属核、アオツヅラフジ種子、ヒサカキ属種子、バラ属果実・核、アカメガシワ種子、サンショウ種子、ブドウ属種子、クサギ種子、ウコギ属核、ニワトコ核、ガマズミ属核の 16 分類群、草本植物はカナムグラ核と、ミズヒキ果実、ヤナギタデ果実、イヌタデ果実、ボントクタデ果実、タデ属 A 果実、タデ属 B 果実、ウシハコベ種子、アカザ属種子、キケマン属種子、マメ科炭化種子、カタバミ属種子、ノブドウ種子、スミレ属種子、メロン仲間種子、ヒョウタン仲間種子、スズメウリ種子、ゴキヅル種子、ウリ科種子、ヒシ属果実、ヤブジラミ属総

試料No.	調査区	グリッド	遺構名	層位	遺物No.	備考	時期
16-1	08Aa		128SP				古代～中世？
16-2	08Aa		162SP				古代～中世？
16-3	08B		003NR	5層	P409	(1/2)	古墳時代前期
16-4	08B		003NR	5層	P409	(2/2)	古墳時代前期
16-5	08B		003NR	5層	P443		古墳時代前期
16-6	08B		003NR	5層	P490		古墳時代前期
16-7	08B		003NR	5層	P496		古墳時代前期
16-8	08B		003NR	5層	P604		古墳時代前期
17-1	08Ab		003NR		P988	(1/2)	古墳時代前期
17-2	08Ab		003NR		P988	(2/2)	古墳時代前期
17-3	08B		003NR	5層	P407		古墳時代前期
17-4	08B		003NR	5層	P444		古墳時代前期
17-5	08B		003NR	5層	P450		古墳時代前期
18-1	08B	10E13b	003NR	5層			古墳時代前期
18-2	08B	10E13c	003NR		P107		古墳時代前期
18-3	08B		003NR		P116		古墳時代前期
18-4	08B		003NR	5層	P328		古墳時代前期
18-5	08B		003NR	5層	P392		古墳時代前期
18-6	08B		003NR	5層	P402		古墳時代前期
18-7	08B		003NR	5層	P446		古墳時代前期
18-8	08B		003NR	5層	P500		古墳時代前期
18-9	08B		003NR	5層	P511		古墳時代前期
18-10	08C	1D8p	071SZ				弥生時代中期
18-11	08C	1D9p	071SZ				弥生時代中期
-			溝群				古代（平安か）

第４表　大型植物遺体試料一覧

惣作遺跡

苞、メハジキ属果実、シソ属果実、ナス属種子、キク科果実、ヘラオモダカ種子、イボクサ種子、ヒルムシロ属核、アサザ種子、イヌビエ属有ふ果、キビ有ふ果、アワ有ふ果、スゲ属A果実、スゲ属B果実、カヤツリグサ属果実、ホタルイ属果実、ミクリ属核の37分類群の計53分類群であった。これらのほ

	調査区	08B										08Ab		08B																			
	遺構名	003NR																															
	グリッド																	10E13b															
	遺物No.	P409		P443		P490		P496		P604		P988		P407		P444		P450		–		P116		P328		P392		P402		P446		P500		P511	
	層位	5層										–		5層								–						5層					
	試料No.	16-3		16-5		16-6		16-7		16-8		17-1		17-3		17-4		17-5		18-1		18-3		18-4		18-5		18-6		18-7		18-8		18-9	
分類群	水洗量(cc)	300		300		300		300		300		300		200		300		300		300		300		200		75		300		300		300		300	
ナラガシワ	殻斗					1		1																					(4)						
	未熟果					1		2										1										1							
ミズナラ-ナラガシワ	殻斗		(5)																																(2)
	幼果		(2)																											(1)					
コナラ属コナラ節	果実																												(5)						
ムクノキ	核					1			(2)								(1)	1	(13)	1	(5)					1			(1)		(6)		(1)		(1)
エノキ	果実										(1)																								
	核				(3)										(3)						(3)						(1)	1			(1)			1	(1)
クワ属	核	1				2	(1)							1				1		2		1		2	(1)									1	
アオツヅラフジ	種子					1											(1)		(1)				(1)								(1)				
ヒサカキ属	種子	1		1																1	(1)	1												1	
バラ属	果実	1		2		2								1										1	(1)										
	核		(2)		(4)	1	(1)									6	(4)	1	(3)							1	(2)			(2)				3	(2)
アカメガシワ	種子												(1)						(1)																(1)
サンショウ	種子														(3)																				
ブドウ属	種子														(1)					1															
クサギ	種子					1																													
ウコギ属	核	6						1		9		1						1												2				2	
ニワトコ	核			1				6	(1)							2			(1)					1		1				2				3	
ガマズミ属	核									1										1								1							
カナムグラ	核					1			(7)							1			(5)						(1)										
ミズヒキ	果実					1																1	(1)			1				(1)					
ヤナギタデ	果実			2		1	(2)			2		4	(3)		(1)	1				1				1	(1)			2		1					
イヌタデ	果実																							1				1				1			
ボントクタデ	果実																													1					
タデ属A	果実					2		1						2						5		2												1	
タデ属B	果実												(6)						(1)				(1)												(1)
ウシハコベ	種子							5	(1)					2				3		1		3												2	
アカザ属	種子									1				2								2												1	
キケマン属	種子					1								1								2		2											
マメ科	炭化種子							1																											
カタバミ属	種子							1						1																					
ノブドウ	種子	1					(4)	2	(20)		(4)					1		1	(21)		(6)		(1)		(4)										(6)
スミレ属	種子			1															(1)																
メロン仲間	種子	1		1	(2)				(1)					1					(3)	1	(2)								(3)						
ヒョウタン仲間	種子																	2																	
スズメウリ	種子												(1)																						
ゴキヅル	種子														(7)				(1)																
ウリ科	種子																													1					
ヒシ属	果実		(3)												(6)			1	(18)	1	(7)		(1)				(1)			1	(31)			1	
ヤブジラミ属	総苞								(2)									1																	
メハジキ属	果実															1																			
シソ属	果実	1																																	
ナス属	種子	1				2		1		1				2		1				1				3						1		1			
キク科	果実					1																													
ヘラオモダカ	種子																											1							
イボクサ	種子	3		7		1	(1)	12				19		3				24	(2)	4		1						2		23	(1)	2		8	
ヒルムシロ属	核	2												3		1		5		1				1						3					
アサザ	種子													1																					
イヌビエ属	有ふ果											1																							
キビ	有ふ果									1																									
アワ	有ふ果																					1													
スゲ属A	果実	1		1		2						3			(1)					1		1	(1)	1						2		1			
スゲ属B	果実			1				15	(1)	1				1		1		5		7				3										2	
カヤツリグサ属	果実																			1															
ホタルイ属	果実											1																1							
ミクリ属	核	2				1								2				11		1				1						2				1	
不明	炭化種実																	1																	
	芽	+		++		++		++		+		+		+		+		++		+		+		+		+		+		++		+		+	
昆虫			(++)		(++)		(++)		(++)		(++)		(+)		(++)		(+)		(++)		(++)		(++)		(+)		(+)		(+)		(++)		(+)		(++)

第5表　003NRから出土した大型植物遺体（括弧は破片を示す）

スケール 1, 2, 11, 12：5mm, 3, 4−10, 13：1mm

第 118 図　惣作遺跡 003NR から出土した大型植物遺体 (1)

1. ナラガシワ未熟果（P496、No.16-7）、2. ナラガシワ殻斗（P496、No.16-7）、3. バラ属果実（P443、No.16-5）、4. バラ属核（P444、No.17-4）、5. ブドウ属種子（No.18-1）、6. ウコギ属核（P604、No.16-8）、7. ガマズミ属核（P604、No.16-8）、8. タデ属 A 果実（No.18-1）、9. タデ属 B 果実（P988、No.17-1）、10. マメ科炭化種子（P496、No.16-7）、11. メロン仲間種子（No.18-1）、12. ヒョウタン仲間種子（P450、No.17-5）、13. スズメウリ種子（P988、No.17-1）

第 119 図　惣作遺跡 003NR から出土した大型植物遺体 (2)

14. ゴキヅル種子（P407、No.17-3）、15. ウリ科種子（P446、No.18-7）、16. ヒシ属果実（P446、No.18-7）、17. キク科果実（P490、No.16-6）、18. アサザ種子（P407、No.17-3）、19. イヌビエ属有ふ果（P988、No.17-1）、20. キビ有ふ果（P604、No.16-8）、21. アワ有ふ果（P116、No.18-3）、22. スゲ属 A 果実（No.18-1）、23. スゲ属 B 果実（No.18-1）、24. カヤツリグサ属果実（No.18-1）、25. 不明炭化種実（P450、No.17-5）

かに、科以下の同定ができなかった不明の炭化種実と芽があった。種実以外には昆虫遺体が含まれていた。003NR 出土の大型植物遺体同定結果の一覧を第 5 表に示す（ただし、大型植物遺体が得られなかった P107 は除く）。溝群サンプルからはシソ属炭化果実が 1 点得られた。

図版に主要な大型植物遺体の写真を示し、同定の根拠とする。記載は省略する。

（4）考察

土壌試料 25 試料を水洗した結果、大型植物遺体が得られたのは河川跡である 003NR 出土の土器内採取試料と溝群採取試料のみであった。003NR から出土した大型植物遺体はほとんど未炭化の種実のため、河川跡の水成堆積物内に堆積した種実が残存し、河川跡以外の陸地の遺構では、炭化して無機物となった種実以外は残存しにくかったと推定される。河川跡の堆積状況や土器がどのように出土したかは不明だが、主体は未炭化種実であり、入っていた土器と直接関係があるというよりも、河川跡の堆積物が土器内に入り込んだ可能性が高いと考えられる。

古墳時代の土器の出土位置は不明のため、出土位置による傾向については議論できないが、5 層堆積当時に利用されていた栽培植物として、スモモとメロン仲間、ヒョウタン仲間、キビが挙げられる。メロン仲間は藤下（1984）によると、種子の大きさからおおむね次の 3 群に分けられるとしている。長さ 6.0mm 以下は雑草メロン型、長さ 6.1 ～ 8.0mm はマクワウリ・シロウリ型、長さ 8.1mm 以上はモモルディカメロン型である。図版に示したメロン仲間の大きさは、長さ 7.3mm、幅 3.5mm で、大きさで分類するとマクワウリ・シロウリ型であった。他の栽培植物としては、出土層位は不明の P116 内から出土したアワがある。キビやアワの出土部位は未炭化の有ふ果であるため、遺構付近で脱穀作業を行っていた可能性や、付近に畑作地があり、自然の営力で流れ込んだ可能性などが考えられる。クワ属とバラ属、マメ科には栽培種と野生種があり、マメ科は大きさ（長さ 4.7mm、幅 2.5mm）と形態から野生種と考えられる。クワ属とバラ属については、形態から両者の区別をつけるのは困難である。このほか、食用可能な分類群としては、ナラガシワとサンショウ、ニワトコ、ヒシ属、シソ属が産出した。ミズナラ - ナラガシワの殻斗や幼果は小片で両者の区別ができなかったが、遺跡立地を考慮すると、ナラガシワである可能性が高い。同様に、コナラ属コナラ節の果実も破片のため形態からはナラガシワとミズナラ、カシワ、コナラの識別ができないものの、破片の形状と遺跡立地を考慮するとナラガシワかコナラである可能性が高い。ナラガシワは殻斗や未熟果が産出しており、河川跡のごく近くに生育していたと推定される。

そのほかの植物では、ムクノキやエノキ、アカメガシワといった陽地を好む落葉性の樹木が多く、それらにアオツヅラフジやブドウ属、カナムグラ、ノブドウ、スズメウリなどのつる性植物が絡まっていたと推定される。河川跡周辺は落葉樹が生育しているものの、明るく開けた場所であったと考えられる。ただし、ミズヒキのように林内に生育する分類群もみられるため、付近にある程度森林とよべる林分があり、そこからもたらされた種実もあったと推察される。

草本植物では、浮葉性の水草であるヒルムシロ属やアサザ、ヒシ属、抽水植物であるヘラオモダカやホタルイ属、ミクリ属などが一定量みられるため、河川跡はある程度水深があり、ほとんど流れがない池のような状況の場所があったと考えられる。河川跡の周辺の乾いた草地にはイヌタデなどのタデ類やウシハコベ、アカザ属、カタバミ属などが生育していたと推定される。

古代（平安時代か）の溝群ではシソ属の炭化果実（長さ 1.8mm、幅 1.6mm）が 1 点産出したのみで、穀類などは検出されなかった。当時の未炭化の栽培植物は畑には残存しないと考えられるため、何らかの要因で炭化した種実のみが偶発的に残存したと考えられる。

引用文献

藤下典之 1984「出土遺体よりみたウリ科植物の種類と変遷とその利用法」『古文化財に関する保存科学と人文・自然科学―総括報告書』同朋舎出版 .P638-654

第５章　考察・まとめ

第１節　出土木製品からみた弥生時代後期～古墳時代前期の鹿乗川流域遺跡群

（１）鹿乗川流域遺跡群における集落と古墳の分布

鹿乗川流域遺跡群は矢作川右岸を碧海台地の縁辺にほぼ並行して流れる河道（古鹿乗川）に沿うかたちで南北約 5km、東西約 1km にわたって展開する遺跡群である。遺跡群の形成は、下橋下遺跡や堀内貝塚など縄紋時代後期～晩期の遺跡を除けば、おおむね弥生時代中期前葉に始まり、古墳時代中期にはほぼ終焉を迎える。おおむね碧海台地上の東端に古墳が築かれ、台地直下の沖積低地に集落群が広がっている。

第 120 図をみる限り、台地から古鹿乗川に流れ出る谷筋が３本認められる。古墳・集落の分布状況から、亀塚遺跡と姫下遺跡の間で大きく二群に分かれることは間違いない。さらに亀塚遺跡より北側の集落群のうち、坂戸遺跡～古井堤遺跡と宮下遺跡～亀塚遺跡が、両者を隔てる谷筋によってさらに二群に分けられる可能性が高い。すなわち鹿乗川流域遺跡群は、坂戸遺跡～古井堤遺跡を北群、二タ子遺跡～亀塚遺跡を中央群、姫下遺跡から惣作遺跡を南群とする３つの集落群によって形成された複合的な遺跡群とみることができる。

古墳もまた、塚越古墳（全長 46m、前方後円墳 or 前方後方墳）を盟主墳とする北群、二子古墳（全長 69m、前方後方墳）を盟主墳とする中央群、姫小川古墳（全長 69m、前方後円墳）を盟主墳とする南群に分けられる。

これまでの調査で木製品が出土している遺跡は、北から坂戸遺跡･上橋下遺跡･釈迦山遺跡･彼岸田遺跡（以上、北群）・二タ子遺跡・桜林遺跡・宮下遺跡・中狭間遺跡・亀塚遺跡（以上、中央群）・姫下遺跡・下懸遺跡・惣作遺跡（以上、南群）である。うち本稿では、愛知県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施し、筆者が整理・報告をおこなってきた南群の３遺跡を中心に、出土木製品の器種組成・樹種組成などさまざまな視点から分析を進めていきたい。

（２）出土木製品の器種組成からわかること

第６表と第 121 図は鹿乗川流域遺跡群において、出土木製品の時期がある程度限定できる遺跡について、器種の大分類に従って数値化したものである。

第 121 図をみると、まず廻間Ⅰ～Ⅲ式期の下懸遺跡と廻間Ⅲ～松河戸Ⅰ式期の姫下遺跡は、他と較べて木製品の出土点数が格段に多いことがわかる。それゆえ、かつての調査ではあまり取り扱ってこられなかった丸棒～丸太の比率が高くなるとともに、掘削具～矢板の器種組成についてもより複雑で、掘削具の占めるパーセンテージが５％程度と低い。ただし、出土点数が極端に少ない古井式期の姫下遺跡と惣作遺跡を除けば、どの遺跡も器種組成そのものはよく似ていることがわかる。

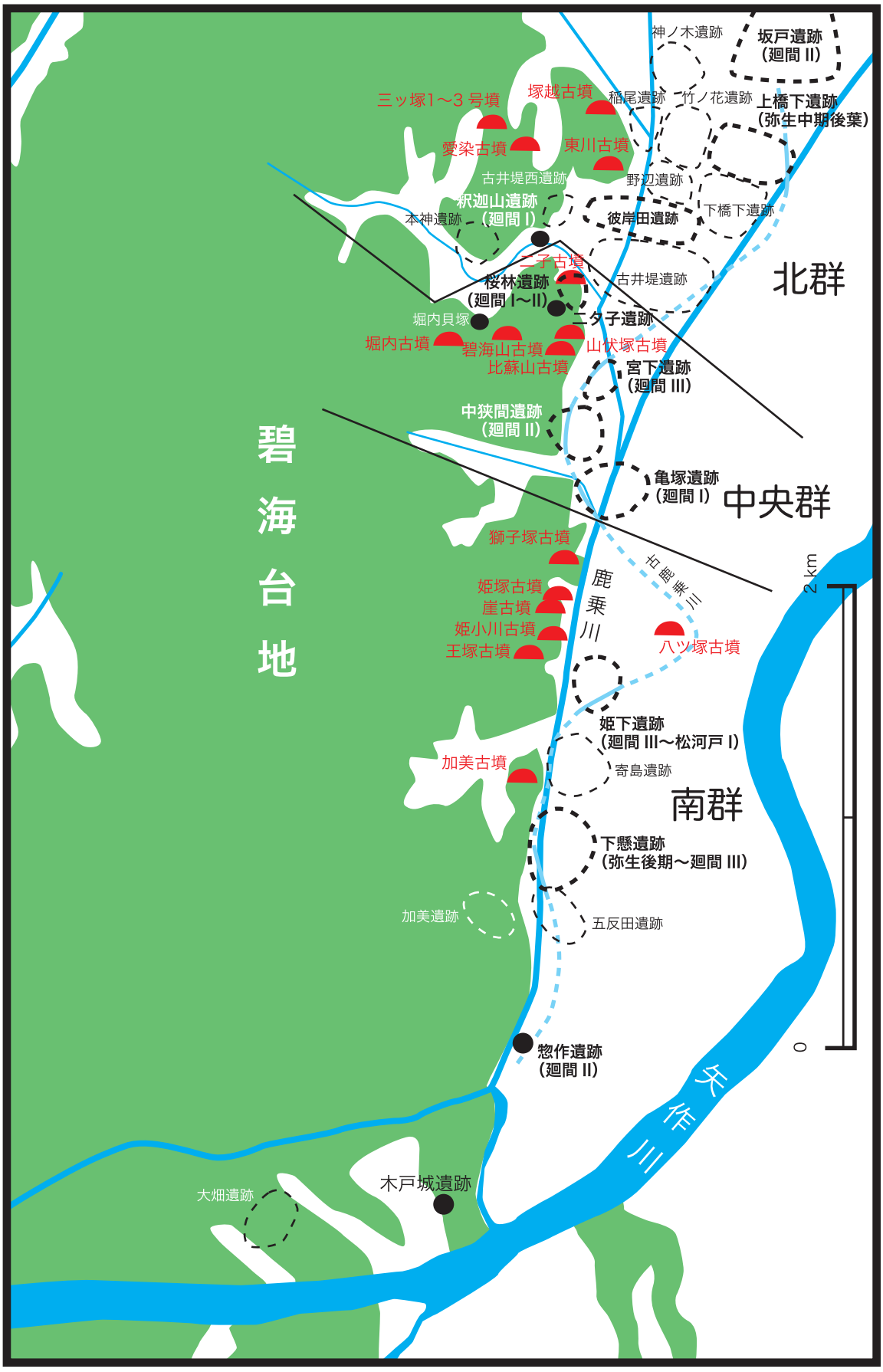
次に、姫下・下懸・惣作遺跡から出土している木製品について検討する。

掘削具では、直柄横鍬・曲柄平鍬・曲柄二又鍬・曲柄多又鍬・一木平鋤などの器種が、複数の遺跡から出土している（第 122 図）。伊勢湾型曲柄鍬に関しては、軸部の形態から尾張系（004）・東三河～遠江系（162）・伊勢系（166）に分類が可能である。このうち、下懸遺跡と惣作遺跡では尾張系と東三河～遠江系が、姫下遺跡では３つの系統がともに出土している。姫下遺跡ではさらに、近畿系と考えられるナスビ形曲柄二又鍬（167）が出土している。ただ、樹種にはコナラ節を用いていることから、近畿や伊勢からの搬入品ではなく、姫下遺跡で製作されたとみて間違いない。いずれの遺跡においても、コナラ節・クヌギ節などの板・分割材・丸太が出土していることから、基本的に掘削具はそれぞれの遺跡で製作されていた。このことは姫下・下懸・惣作の３遺跡のみならず、鹿乗川流域遺跡群の北群および中央群の木製品出土遺跡すべてにおいて同様である。

また、台輪の可能性を有する中央に半円形の刳り込みをほどこした大型の板（姫下 038 と下懸 1441）や、用途不明の穿孔円盤（姫下 159 と下懸 1586）のように、きわめてよく似た木製品が姫下遺跡と下懸遺跡からそれぞれ出土していることは、両遺跡の木製品生産において、何らかの共通する需要と技術的基盤があったことを示している（第 125 図）。

手工業生産に関しては木製品生産以外に、姫下遺跡において桙（014）・綛かけ（187）など複数の紡織具が出土していることが重要である。特に綛かけは、東村純子による分類では絹繊維用とされるＢ類に属する（東村 2011）。

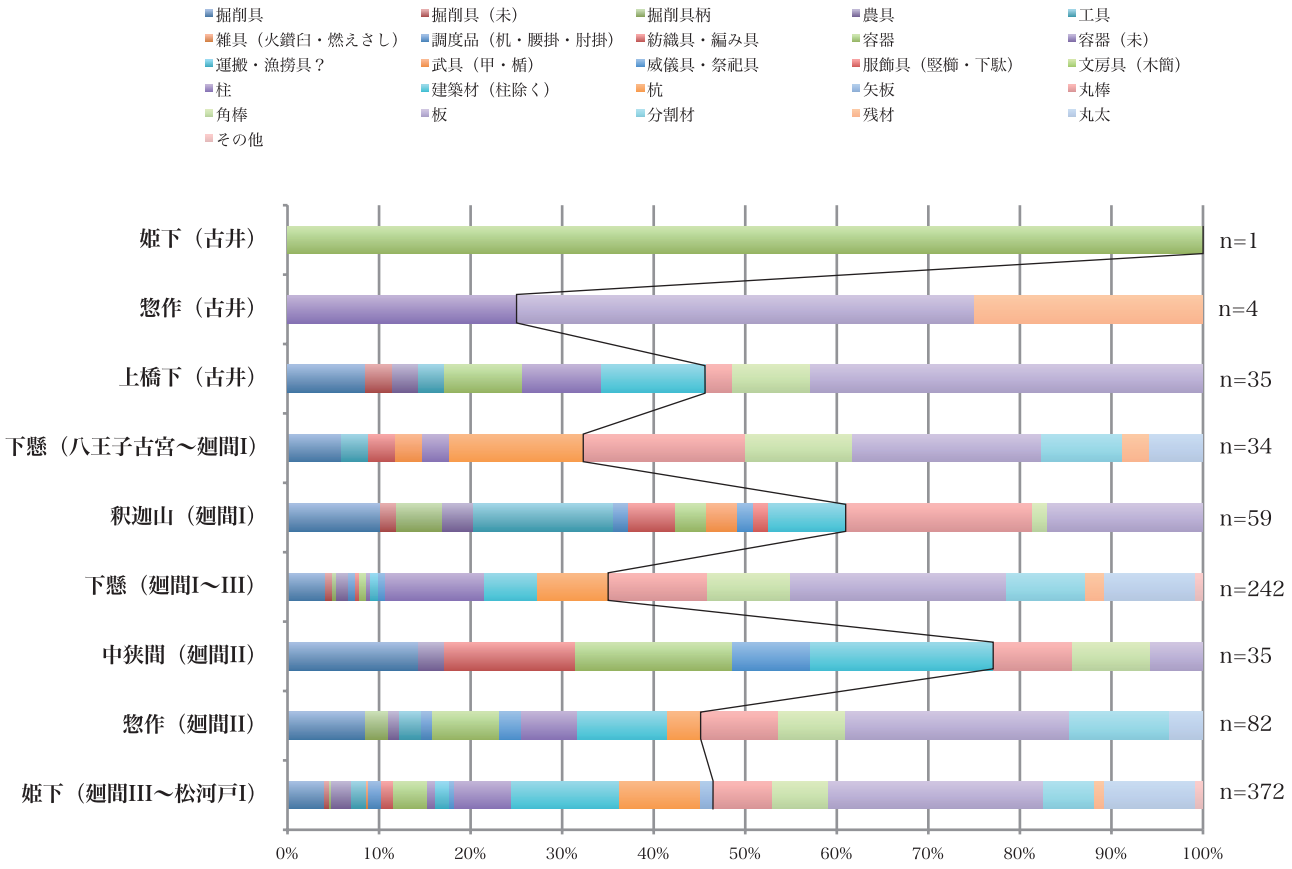
姫下･下懸･惣作遺跡からは、それぞれ上位階層者（首長や王）が用いるのにふさわしい木製品が出土している。下懸遺跡では弥生時代後期前半（八王子古宮式期）の装



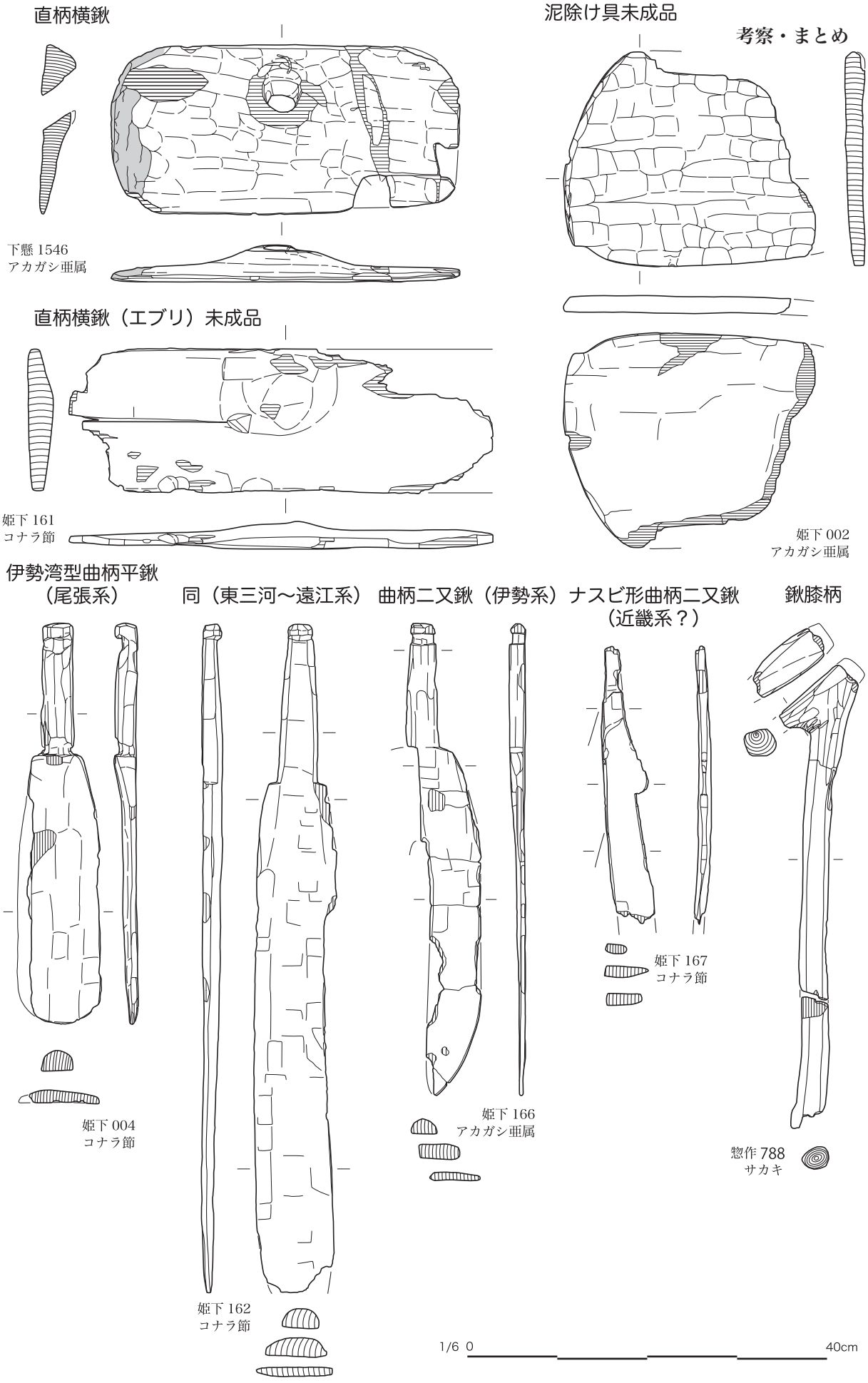
第 120 図　鹿乗川流域遺跡群の遺跡分布（S ＝ 1:25000）

第６表　弥生～古墳時代の木製品器種組成比較

	上橋下（古井）	姫下（古井）	惣作（古井）	下懸（八王子古宮～廻間I）	釈迦山（廻間I）	下懸（廻間I～III）	中狭間（廻間II）	惣作（廻間II）	姫下（廻間III～松河戸I）	計
掘削具	3			2	6	10	5	7	15	48
掘削具（未）	1				1	2			2	6
掘削具柄					3	1		2	1	7
農具	1				2	3	1	1	8	16
工具	1			1	9			2	6	19
雑具（火鑽臼・燃えさし）									1	1
調度品（机・腰掛・肘掛）					1	2		1	5	9
紡織具・編み具				1	3	1	5		5	15
容器	3	1			2	2	6	6	14	34
容器（未）						1			3	4
運搬・漁撈具？						2			6	8
武具（甲・楯）				1	2					3
威儀具・祭祀具					1	2	3	2	2	10
服飾具（竪櫛・下駄）					1					1
文房具（木簡）										
柱	3		1	1		26		5	23	59
建築材（柱除く）	4				5	14	7	8	44	82
杭				5		19		3	33	60
矢板									5	5
丸棒	1			6	12	26	3	7	24	79
角棒	3			4	1	22	3	6	23	62
板	15		2	7	10	57	2	20	87	200
分割材				3		21		9	21	54
残材			1	1		5			4	11
丸太				2		24		3	37	66
その他						2			3	5
合計	35	1	4	34	59	242	35	82	372	864



第 121 図　弥生～古墳時代の木製品器種組成比較



第 122 図　鹿乗川流域遺跡出土掘削具ほかの集成 (S=1/6)

飾甲（1401-1）、惣作遺跡では廻間Ⅱ式期の団扇形（798）と赤彩板（800）、姫下遺跡では廻間Ⅲ～松河戸Ⅰ式期の漆塗り丸棒（204）がそれである（第 123 図）。

下懸遺跡の装飾甲は、神谷正弘の分類で弥生時代の短甲式木甲とされており、本例を含めてこれまで全国でも 11 例しか認められていない（神谷 2010）。惣作遺跡の団扇形も、全国で 20 例に満たない貴重品である（鈴木 2001・2003）。また、惣作遺跡の横斧柄や姫下遺跡の机天板（185）も優品で、後者は特に食膳具を載せて饗宴などに用いた案とされている（長友 2005）。

これら優品の所属する時期が、それぞれ遺跡ごとにずれている点がきわめて重要である。下懸遺跡は廻間Ⅰ～Ⅲ式期の木製品も大量に出土しているが、大型建物の建築部材以外はすべて日常的なもので、廻間Ⅰ式期以降に上位階層者がいた可能性は低い。すなわち鹿乗川流域遺跡群において、特別な木製品を所持する人物は、複数ある集落のそれぞれに同時併存して居住していたのではなく、南群の各集落を束ねる役割を担って、弥生時代後期以降、下懸遺跡→惣作遺跡→姫下遺跡とその居住地を移動していた可能性を示している。なかでも姫下遺跡は、ほとんどの木製品が廻間Ⅲ式期～松河戸Ⅰ式期に属しており、それが姫小川古墳の築造時期（4 世紀前半頃、三田 2005）に近いことから、姫小川古墳の被葬者は姫下遺跡に居住していた可能性がきわめて高い。

建築部材についても、第 124 図のような格の高い掘立柱建物の部材がそれぞれの遺跡から出土している。このうち下懸遺跡の 1455 は廻間Ⅰ～Ⅱ式期で 1557 は廻間Ⅱ～Ⅲ式期、惣作遺跡の 812 は廻間Ⅱ式期、姫下遺跡の 206・217・221 は廻間Ⅲ～松河戸Ⅰ式期に属する。つまり惣作遺跡と姫下遺跡では、上位階層者が居住した時期にのみ、大型掘立柱建物の部材が出土している。特に姫下遺跡では各種部材がよく揃っていることも、3 世紀後半～ 4 世紀前半頃における王の居住地としてふさわしい。一方、下懸遺跡の大型建築部材は他の集落で解体されたものが、再転用のためにここでストックされていた可能性も考えられる。

（3）出土木製品の樹種組成からわかること

まずは、器種ごとの樹種組成からみていく（第 126 図・第 127 図）。いずれの遺跡も掘削具・農具には広葉樹材を、建築部材（柱を除く）には針葉樹材を優占的に用いている。特に掘削具は、コナラ節・クヌギ節・アカガシ亜属とサカキ（膝柄）にほぼ使用樹種が限定される。柱材は八王子古宮～廻間Ⅰ式期の下懸遺跡を除けば、広葉樹（特にコナラ節）が多く用いられている。比較的その地域の植生が反映される杭は、惣作遺跡以外でマキ属の使用がめだつ。それ以外の器種では、特定の樹種が優占されることはないが、針葉樹ではヒノキ科・マキ属・スギ、広葉樹ではコナラ節・クリ・クヌギ節が多方面に用いられている。また分割材・丸太は広葉樹が多いものの、残材は針葉樹が多数を占めることから、姫下・下懸・惣作遺跡おける木製品生産は、いずれかの樹種に限定されるものではなかったことがわかる。

樹種別の器種組成グラフ（第 128 図・第 129 図）においても、ヒノキ科・マキ属・スギ・コナラ節・クリ・クヌギ節の用途が多様であったことが確認できる。このなかで特にコナラ節は掘削具・柱を含む建築部材・杭、マキ属・クリもまた建築部材・杭としての利用が多い。一方アカガシ亜属は、下懸・姫下遺跡では掘削具が半数以上を占めることから、尾張低地部ほどではないにせよ、多用途に使えるほど碧海台地には豊富に自生していなかった可能性がある。シイ属（ツブラジイ・スダジイなど）は、各遺跡でアカガシ亜属と同等の出土量はあるが、半数以上は用途が特定できない板である。クワ属（ヤマグワ）は、弥生時代の西日本では主に精製の刳物容器（高杯・鉢・椀など）に用いられるが、ここでは容器としての利用例はない。ケヤキもまた、東日本では刳物容器としての使用例が多いが、ここでは惣作遺跡の臼が 1 点あるのみである。

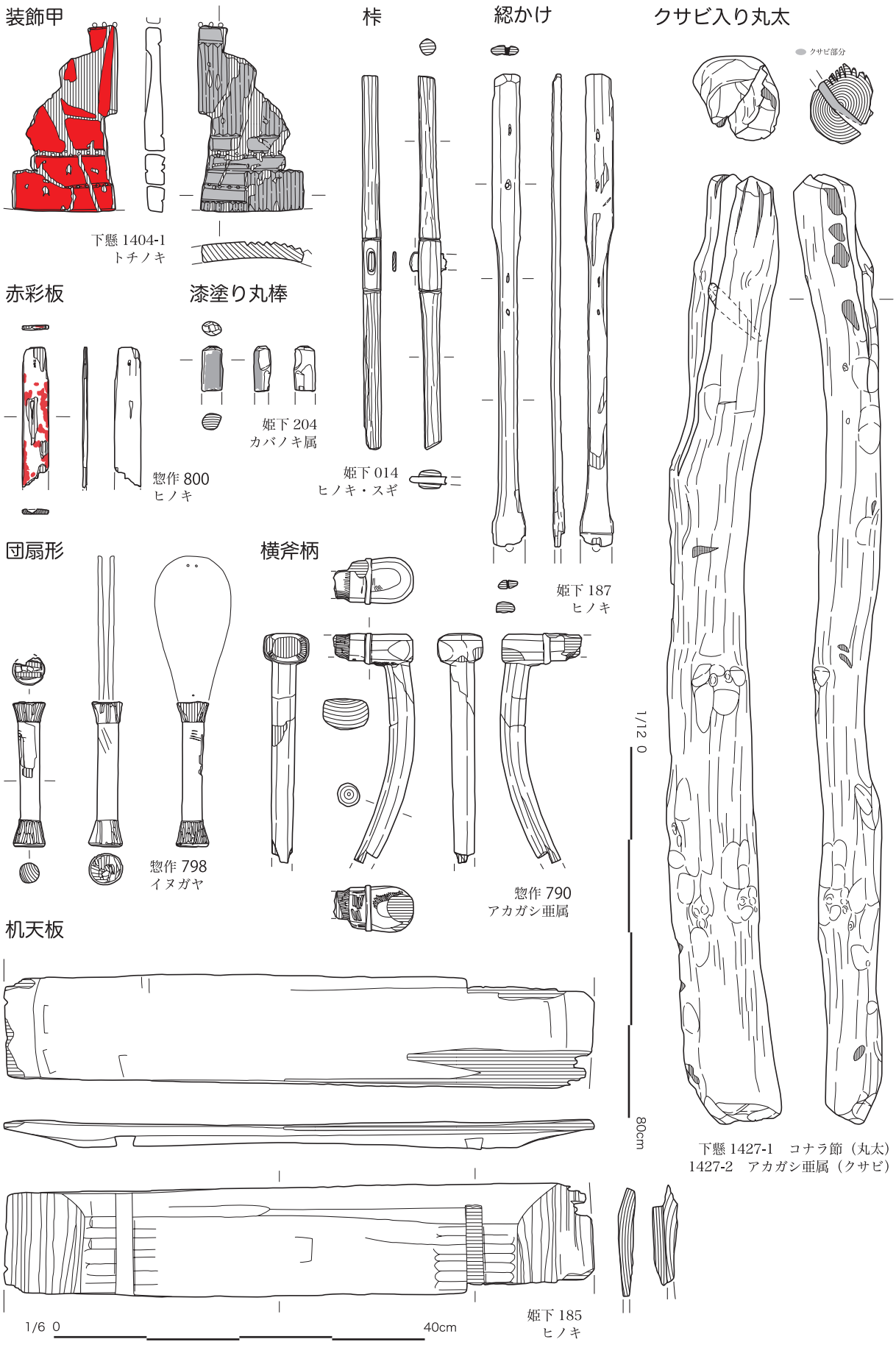
（4）出土木製品の樹種別木取りからわかること

第 130 図・第 131 図は樹種別に、出土木製品の木取りをグラフ化したものである。グラフ上で、左から芯持ち丸木材・1/2 分割材・1/4 分割材・1/8 分割材・柾目材・追柾目材・板目材の順となっている。これはおおよそ左の方がより木材の加工度が低く、右にいくほど加工度が高くなる（加工の手順が進んでいる）ことを示している。

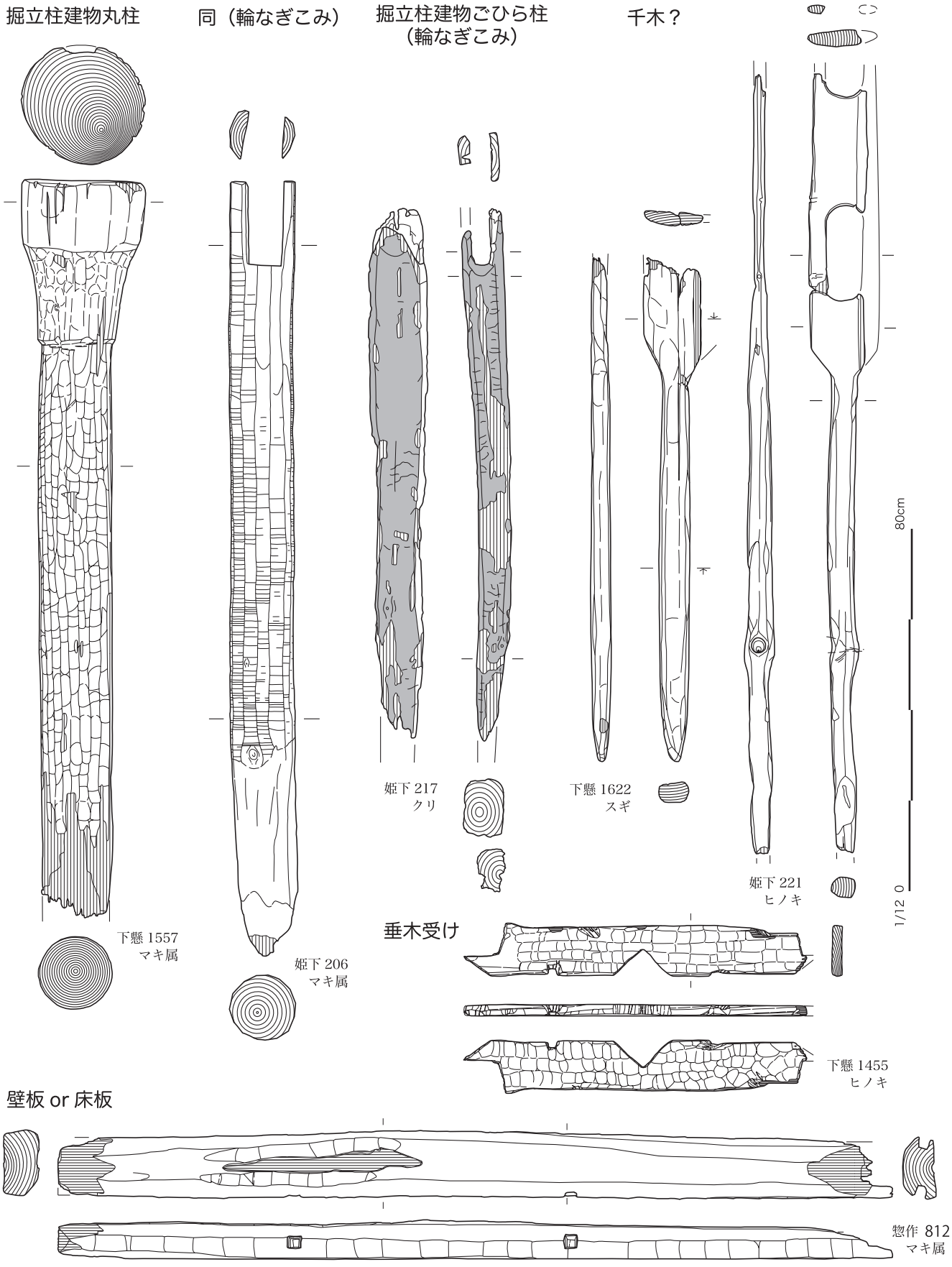
またグラフでは、上の樹種ほど芯持ち丸木の比率が高く、下の樹種ほど板目材の比率が高くなるように配置している。そして、出土点数が多い（二桁のもの）樹種はゴチック体の太字で示している。

これをみてわかるのは、3 遺跡ともにコナラ節・マキ属・クリ・クヌギ節は芯持ち丸木の比率が高く、ヒノキ科・スギ・アカガシ亜属は低いということである。

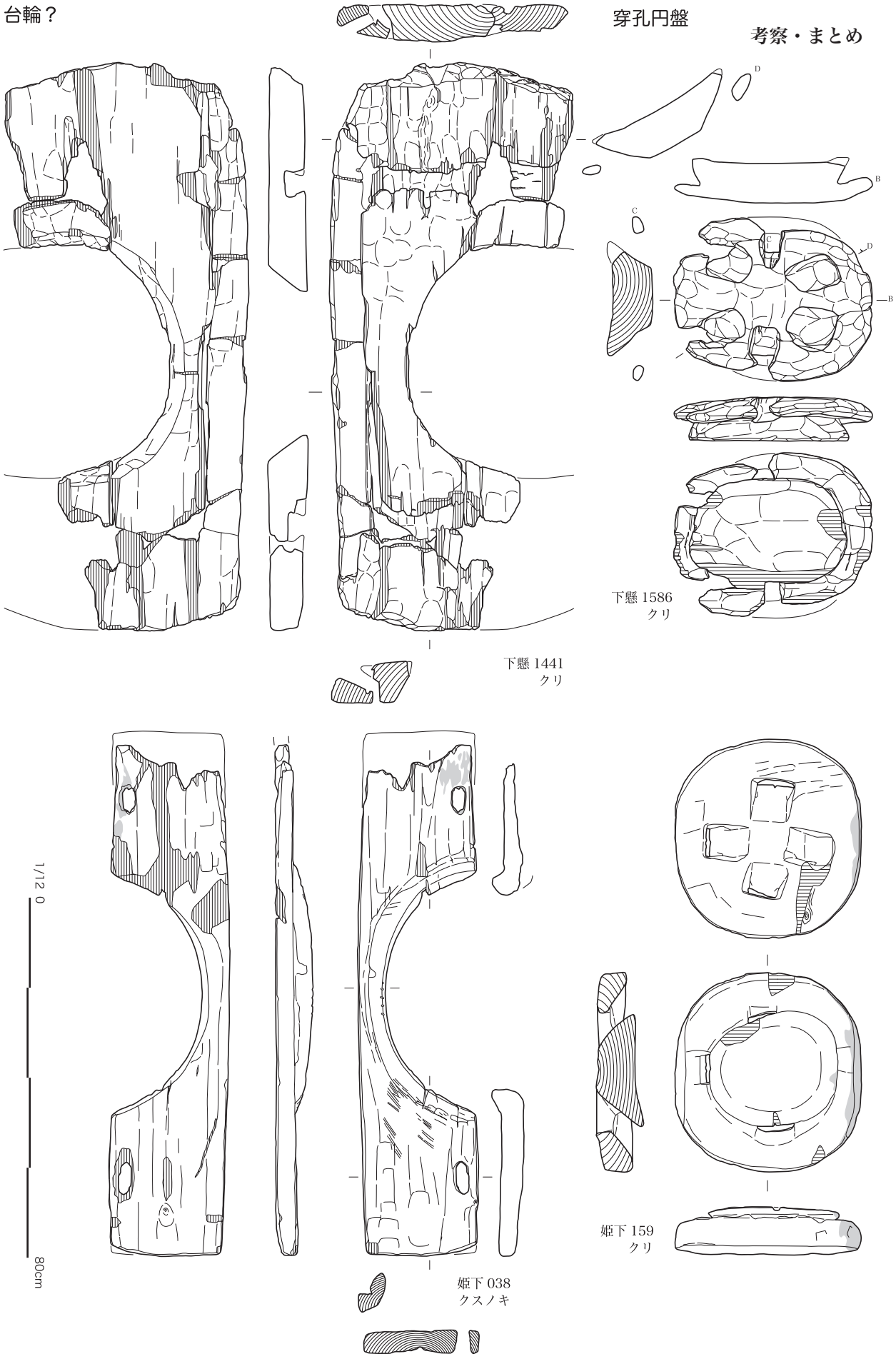
芯持ち丸木の方が、伐採された材がそのままに近い状態で使用されている（特に樹皮付き）ことから自生地に



第 123 図　鹿乗川流域遺跡群出土威儀具ほかの集成 (S=1/6)



第 124 図　鹿乗川流域遺跡群出土建築部材の集成 (S=1/6)



第 125 図　鹿乗川流域遺跡群出土その他の木製品の集成 (S=1/6)

近いことを示し、柾目材や板目材はすでに別の場所で伐採・加工されたものが持ち込まれている可能性がより高くなる。特に板目材の場合は、径の限られた材から効率よく幅広の板を採ることができる用材法であるため、地元で入手しにくい樹種ほど板目材になる率が高いと考えられる（もちろん、針葉樹は板目に採りやすく、広葉樹は板目に採りにくいという材の分割方法は踏まえた上でのことだが）。

このようにみてくると、やはり3遺跡に近い碧海台地縁辺部は、コナラ節・マキ属・クリ・クヌギ節を主体とした二次林的植生（雑木林）であり、ヒノキ科・スギ・アカガシ亜属はやや遠隔地からある程度加工がなされた状態で持ち運ばれた可能性が高いといえる。

（5）材の復元径・年輪数からわかること

第132～135図は、3遺跡から出土した木製品のうちで、木取りなどから本来の材径が復元できるものを抽出し、その材径と、計測した年輪数から伐採時におけるおおよその年輪数を計算し、樹種ごとにグラフ化したものである。各図ともに、上が復元材径、下が復元年輪数のグラフで、横軸がそれぞれ材径と年輪数となっており、棒グラフは下が針葉樹で上が広葉樹である。

八王子古宮～廻間Ⅰ式期の下懸遺跡と廻間Ⅱ式期の惣作遺跡では、材径の復元が可能だった木製品は、すべて直径30cm以下に収まっている。復元年輪数でも40年以下のものが多い。下懸遺跡で年輪数が100年近い樹種はヒノキ科で、惣作遺跡で100年を超えるものはコナラ節である。マキ属にも80年近いものもあり、全体に材径に対して年輪数が多い、つまり年輪幅が詰まった木が多く用いられている。

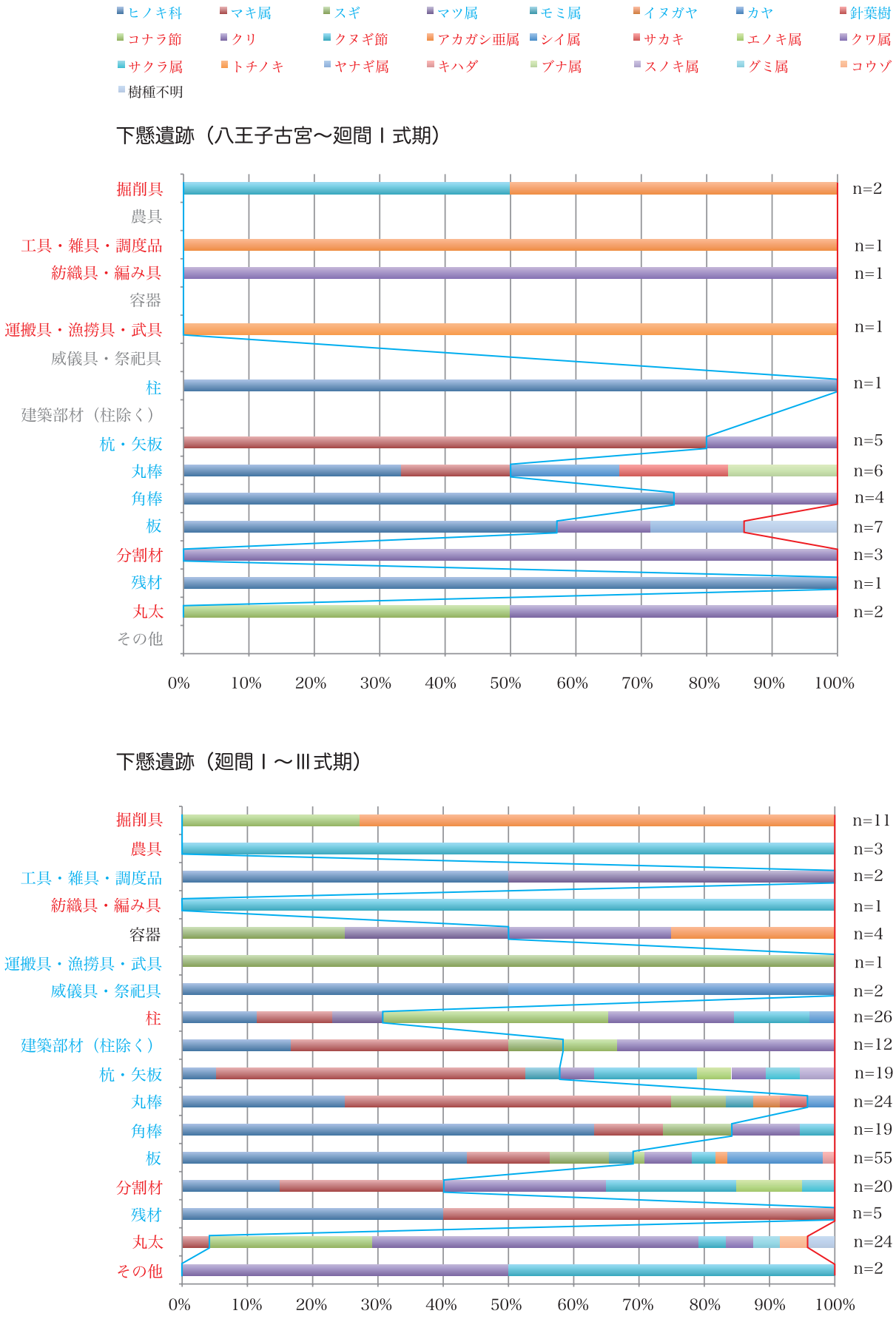
一方、廻間Ⅰ～Ⅲ式期の下懸遺跡と廻間Ⅲ～松河戸Ⅰ式期の姫下遺跡では、資料数が多いこともあり、材径・年輪数ともに大きくばらつく。両遺跡を併せてみた場合、材径では20cm以下、30～50cm、60cm以上の3つのピークを認めることができる。これはそれぞれ、筆者の分類による小径木・中径木・大径木にほぼ相当している（樋上2010）。樹種ごとにみていくと、小径木にはマキ属・コナラ節・クリがめだつが、コナラ節とクリは中・大径木にもわずかに認められる。ヒノキ科とスギは、前述のように加工が進んだものが多いために材径の復元できたものは少ないが、小径木から大径木まで各種サイズがまんべんなく利用されている。アカガシ亜属で材径復元が可能なものは、やはり大径木が多い。

年輪数では、20～30年を高いピークとする正規分布と、70～110年の低い山、そして130年以上のものがだらだらと250年以上に連なっている。年輪数30年以下の樹種では、材径と同じくマキ属・コナラ節・クリ・クヌギ節がめだつ。これらの樹種は、前節でも触れたとおり、碧海台地の縁辺に二次林として存在しており、20～30年のサイクルで伐採され、芯持ち丸木のまま加工して、柱や建築部材・杭などに用いられていたことを示している。

中径木に対応する年輪数70～110年の木材のうち、コナラ節は曲柄平鍬など刃部幅の狭い掘削具に、大径木にあたる年輪数130年以上のヒノキ科は大型の建築部材に、アカガシ亜属は曲柄二又鍬などの掘削具に利用されている。

現地性の高いコナラ節やクリには、まれに年輪数が150年を超えるような材も存在するが、ほとんどは復元径が50cmに満たない中径木である。

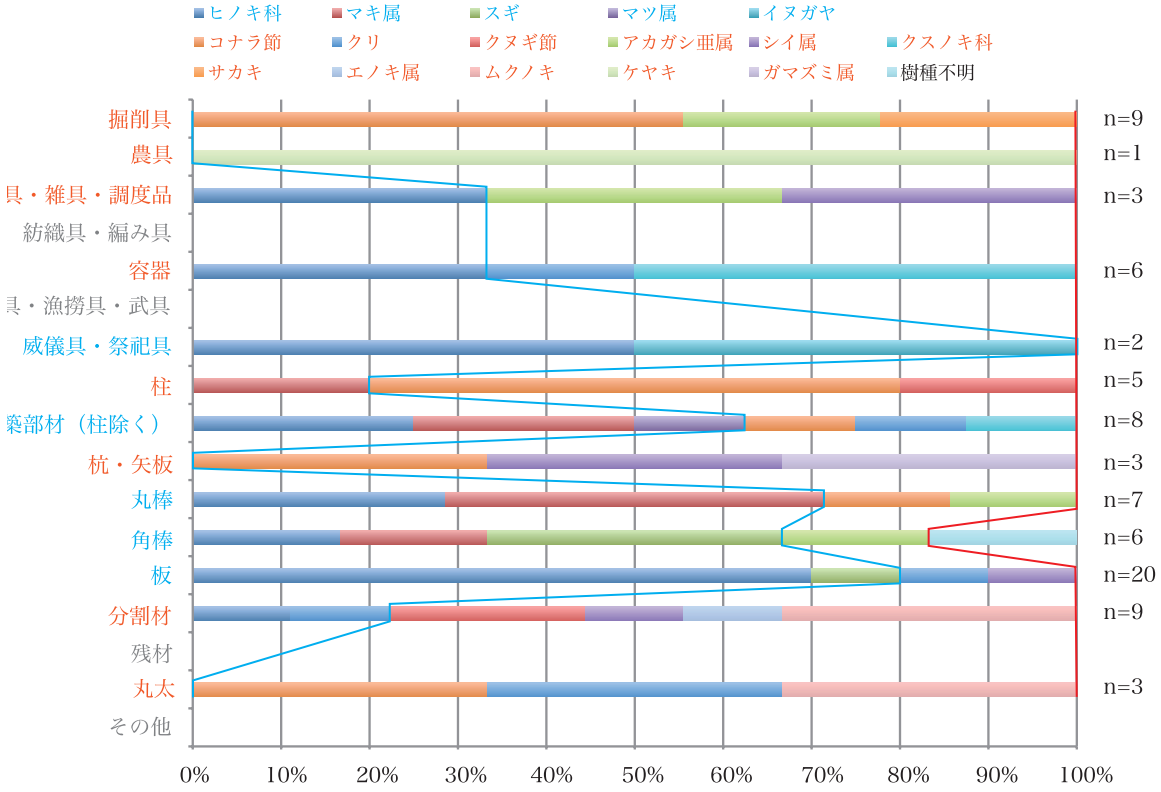
下懸遺跡は弥生時代後期前半（八王子古宮式）から廻間Ⅲ式期まで、ほぼ途切れることなく継続しているのに対し、惣作遺跡は廻間Ⅱ式期、姫下遺跡は廻間Ⅲ～松河戸Ⅰ式期と、集落の時期幅が比較的限定されている。第120図をみると、姫下遺跡・下懸遺跡・惣作遺跡はそれぞれ500～600mの間隔で立地している。このうち特に姫下遺跡と下懸遺跡の間には、碧海台地に大きく谷が入り込んでいることから、この両集落では、伐採の際に利用する森林のエリアはほとんど重ならなかったと思われる。惣作遺跡もまた、下懸遺跡からは600mほど離れているうえに、存続時期が他の2遺跡に較べて短いことから、下懸遺跡の伐採エリアとは微妙にかぶらなかった可能性がある。少なくともこの3遺跡に限定した場合、碧海台地上の森林利用としては、利用度が高いマキ属・コナラ節・クリ・クヌギ節のうち、コナラ節・クリの一部を中～大径木になるまで残したうえで、他は20～30年のサイクルで伐採を繰り返していたと考えられる。そして、周辺に利用可能な樹木が乏しくなると、今度は集落ごと移動した可能性が高い。こういった材径と年輪数から復元できる伐採のサイクルと集落移動の状況は、近世の木地師（渡辺1977）や焼畑（福井1974）が20～30年ほどの間隔をあけて同じ場所に戻ってくるという民俗事例と一致している。これは伐採後、20～30年間放置することにより、再び利用（伐採）できるだけの森林資源が再生することを示している。あるい



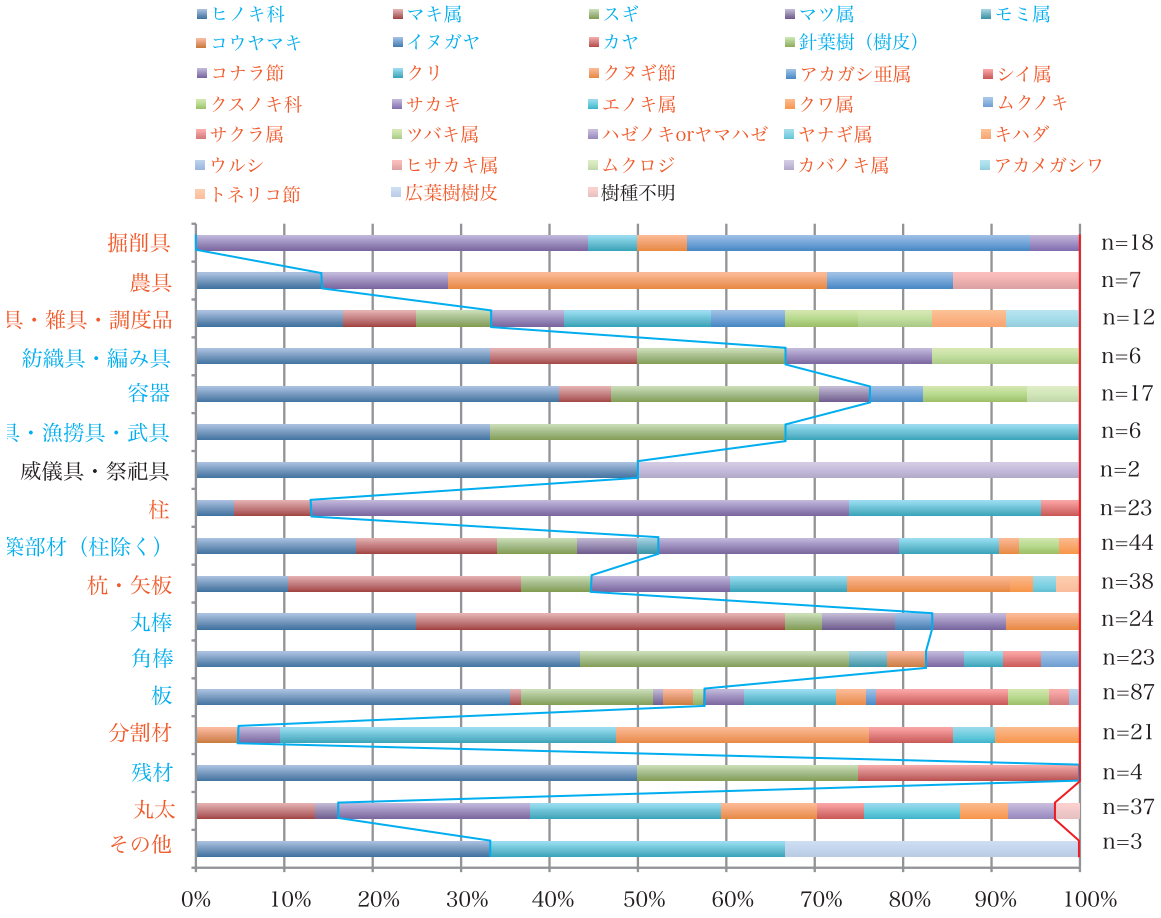
第 126 図　下懸遺跡出土木製品器種別樹種グラフ

惣作遺跡

惣作遺跡（廻間Ⅱ式期）



姫下遺跡（廻間Ⅲ～松河戸Ⅰ式期）

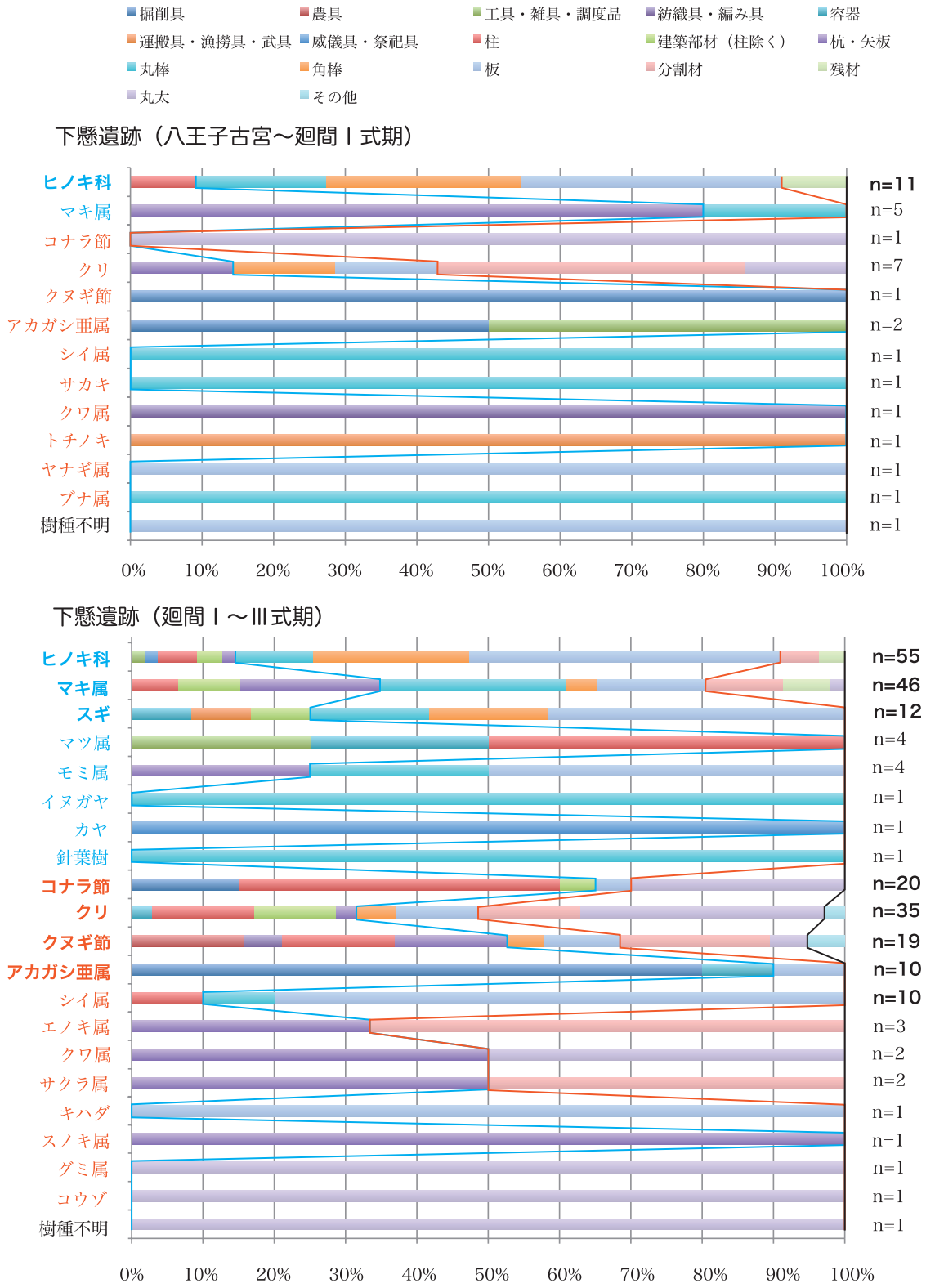


第 127 図　惣作・姫下遺跡出土木製品器種別樹種グラフ

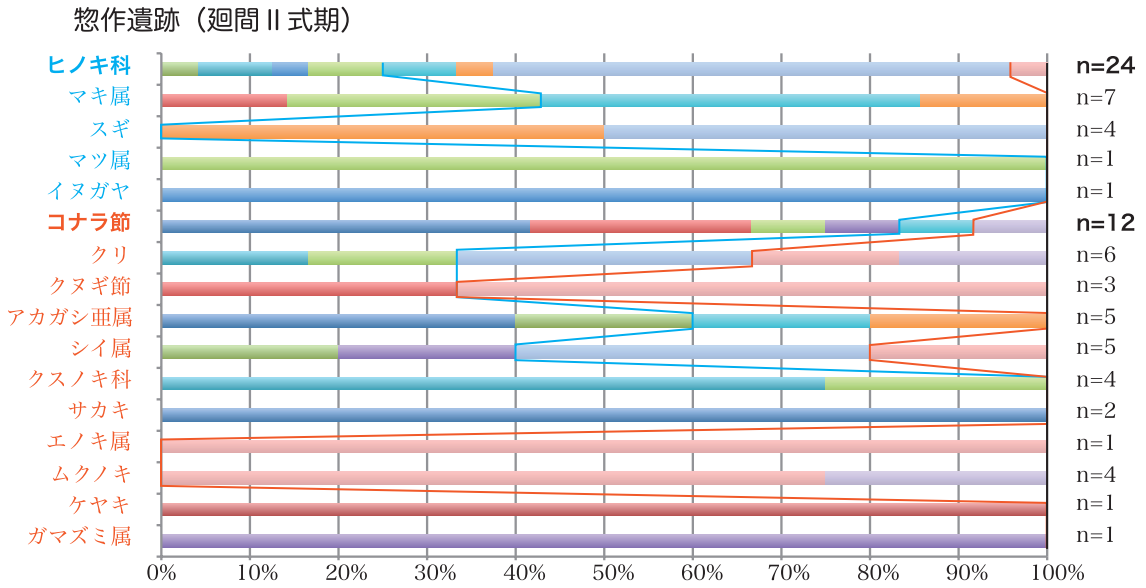
は伐採を行ったあとの碧海台地上にも火入れをおこない、焼畑として数年間利用していた可能性も十分に考えられる。

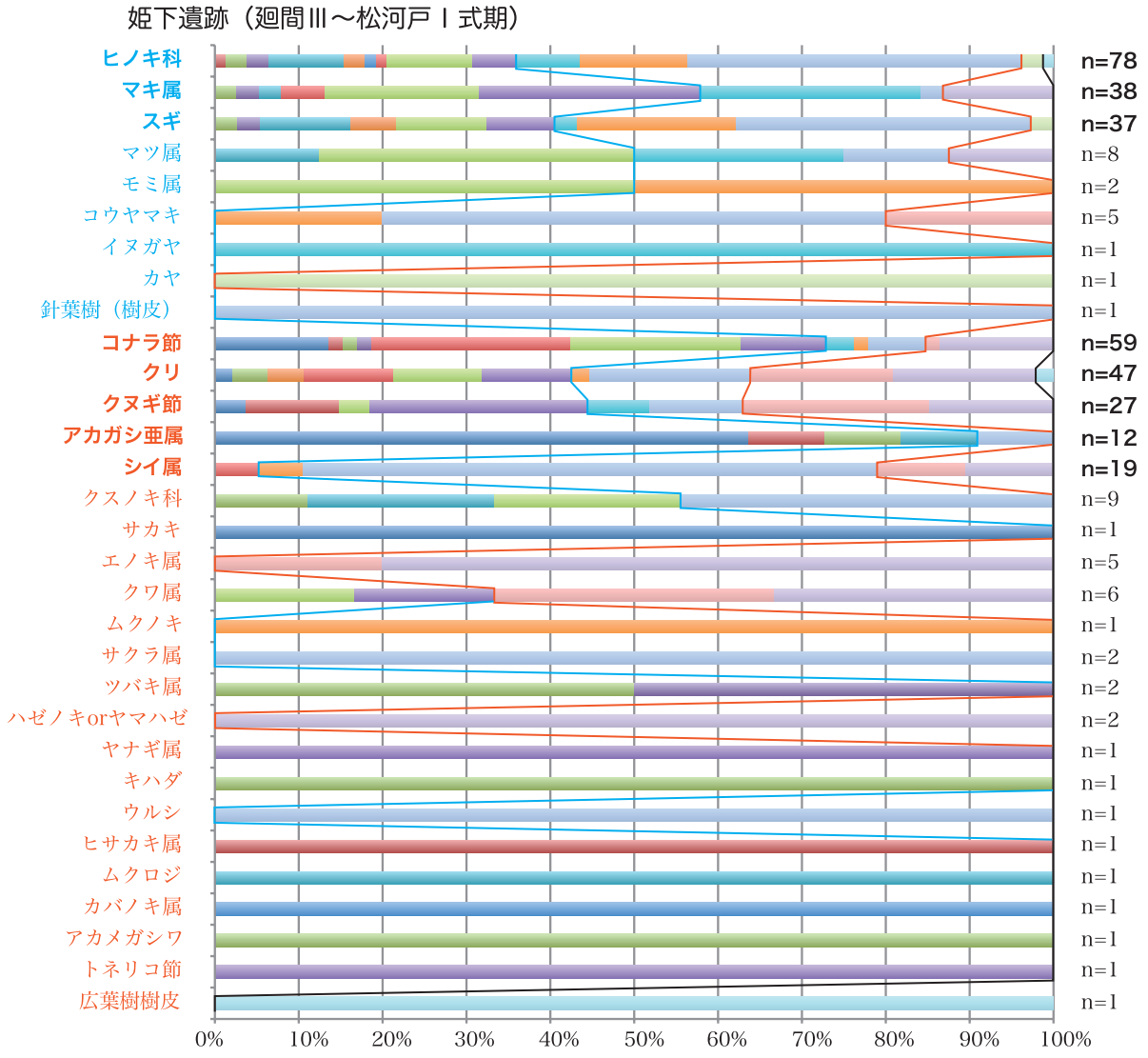
（6）鹿乗川流域遺跡群における植生と使用樹種の変遷

ここまでは、主として南群の３遺跡（姫下・下懸・惣作遺跡）について、出土木製品からみた弥生時代後期～古墳前期における集落の階層性と、碧海台地上の植生についてみてきた。最後に、さらに時代幅を古井式期（弥生時代中期後葉）から江戸時代までに広げて、鹿乗川流域遺跡群における植生および使用樹種の変遷について確

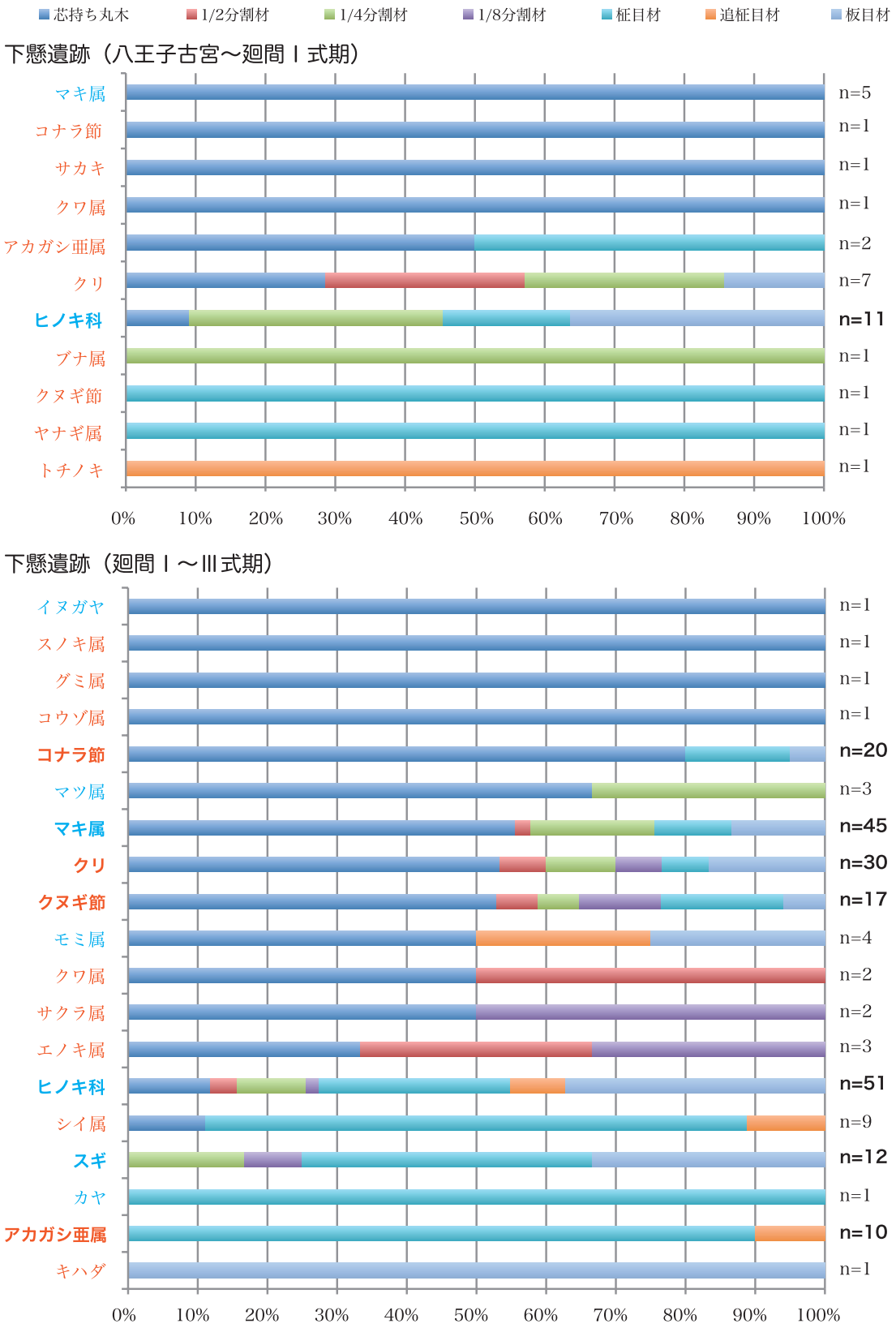


第 128 図　下懸遺跡出土木製品樹種別器種グラフ





第 129 図　惣作・姫下遺跡出土木製品樹種別器種グラフ



第 130 図　下懸遺跡出土木製品樹種別木取りグラフ

惣作遺跡

第 131 図　惣作・姫下遺跡出土木製品樹種別木取りグラフ

認しておきたい。

第７表は上橋下・中狭間・姫下・下懸・惣作の５遺跡について、古井式期から江戸時代後期までの使用樹種と、姫下遺跡の廻間Ⅲ～松河戸Ⅰ式期における樹種サンプル（自然木および低加工の棒・板など）を、時代順にまとめたものである。

まず姫下遺跡の樹種サンプルでは、これまで検討してきた樹種のうち、コナラ節・クヌギ節・クリ・シイ属・マキ属・ヒノキ科・クワ属などが多いのに対し、スギ・アカガシ属・クスノキ科・サカキは非常に少ない。ヒノキ科を例外とすれば、前者は碧海台地上で容易に調達できた樹種であり、後者は外部から持ち運ばれた樹種であったことを示している。前者のグループにはヤナギ属・エノキ属も含まれる。ヤナギ属は姫下遺跡の杭に用いられていることからも、やはり入手しやすい樹種であったことがわかる。エノキ属もまた、各遺跡から確実に出土しているが、下懸遺跡の杭以外は用途不明品ばかりであることから、豊富にはあるが、あまり使いみちがない樹種だったのかもしれない。

第136図のグラフで姫下遺跡の樹種サンプルをみれば一層あきらかなように、古墳時代前期の碧海台地上の植生は広葉樹が圧倒的に多く、なかでもコナラ節・クヌギ節・クリ・シイ属・ヤナギ属・エノキ属で全体の約75%を占めている。一方、針葉樹はヒノキ科・マキ属・マツ属を除くと非常に少ない。ヒノキ科は、針葉樹としては多い部類に入るのだが、それでも樹種全体のわずか3%に満たない。

ところが使用樹種におけるヒノキ科の比率をみると、弥生中期後葉～廻間Ⅰ式期では15%、廻間Ⅰ～松河戸Ⅰ式期では23%、古代では77%、鎌倉時代では79%、江戸時代では23.5%と非常に高く、なかでも古代と鎌倉時代は、樹種の４分の３以上をヒノキ科が占めるにおよんでいる。以上のことからも、使用樹種としてのヒノキ科は、やはり他地域から搬入されたものである可能性が高く、さらに時代を追うごとにヒノキ科への依存度がより増していることがわかる。古墳時代までは、一部の必要な樹種（ヒノキ科・スギ・アカガシ亜属など）を外部に依存する以外は、基本的に在地で入手が容易な樹種を用いているが、古代以降の用材選択は、ほぼ全面的に外部（矢作川上流域か）からの搬入品（製品としての搬入品も多い）に頼っており、もはや遺跡所在地周辺の植生を全く反映していないことが、この鹿乗川流域遺跡群の分析からみてとることができる。

（７）まとめ

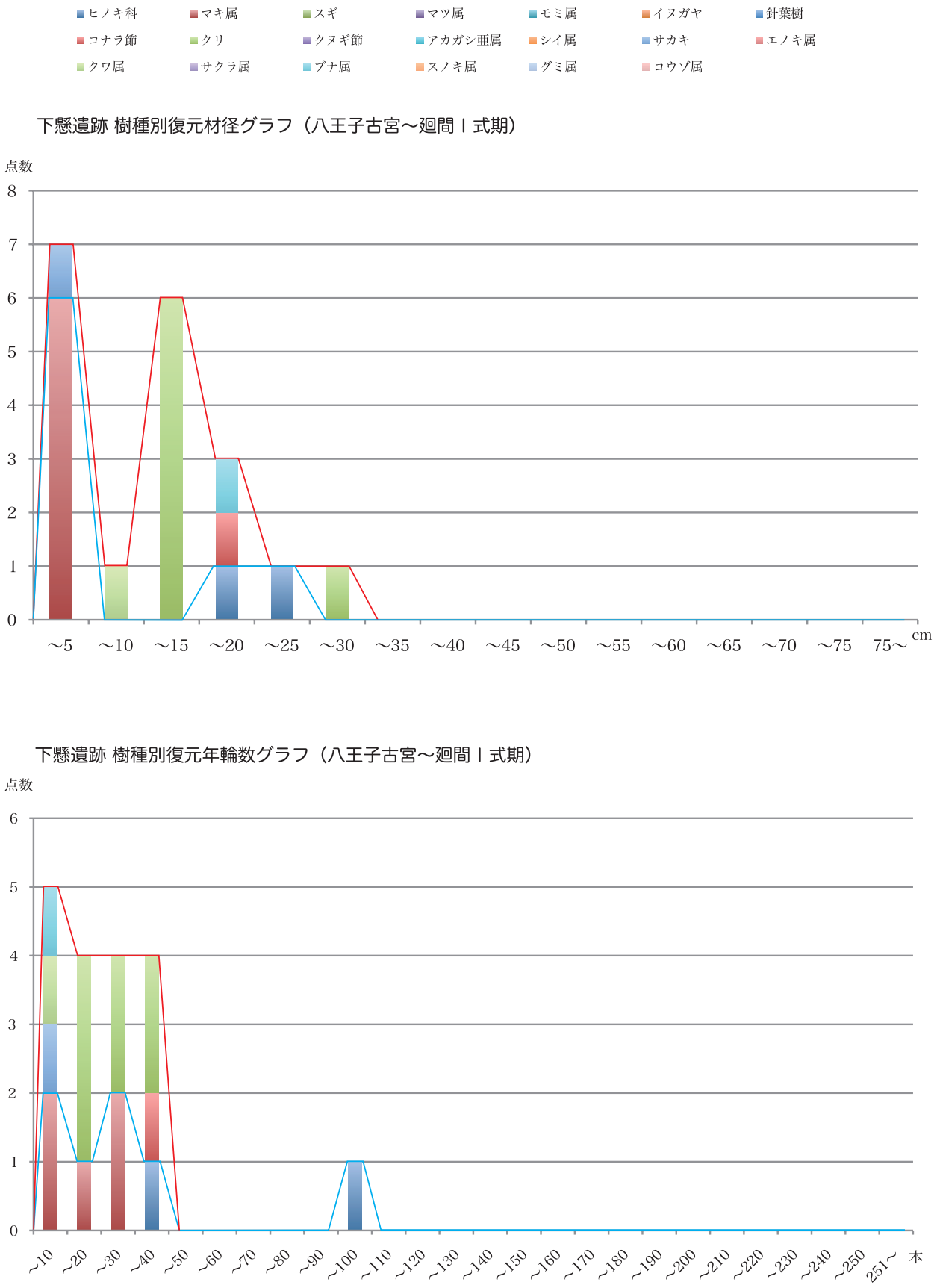
南北約5km、東西約1kmにおよぶ鹿乗川流域遺跡群は、碧海台地に入り込む谷筋と台地上に展開する古墳の分布状況からみて、北群・中央群・南群という３つの遺跡群からなる複合的な遺跡群と考えられる。北群は坂戸遺跡から古井堤遺跡までで、塚越古墳を盟主墳とする墓域を有する。中央群の範囲はやや狭いが、二タ子遺跡から亀塚遺跡までで、二子古墳を盟主墳とする墓域がある。南群は姫下遺跡から惣作遺跡（あるいは大畑遺跡）までで、姫小川古墳を盟主墳とする墓域を有する。

南群では愛知県埋蔵文化財センターの調査によって、姫下遺跡・下懸遺跡・惣作遺跡から多量の木製品が出土しており、所属時期は古井式期（弥生時代中期後葉）から江戸時代後期におよんでいる。この３遺跡のうち、時期を弥生時代後期から古墳時代前期に絞ると、下懸遺跡が八王子古宮式期（弥生時代後期前半）から廻間Ⅲ式期（3世紀後半頃）と最も長期間にわたる木製品が出土しており、惣作遺跡は廻間Ⅱ式期（3世紀前半頃）、姫下遺跡は廻間Ⅲ～松河戸Ⅰ式期（3世紀後半～4世紀前半頃）に属している。

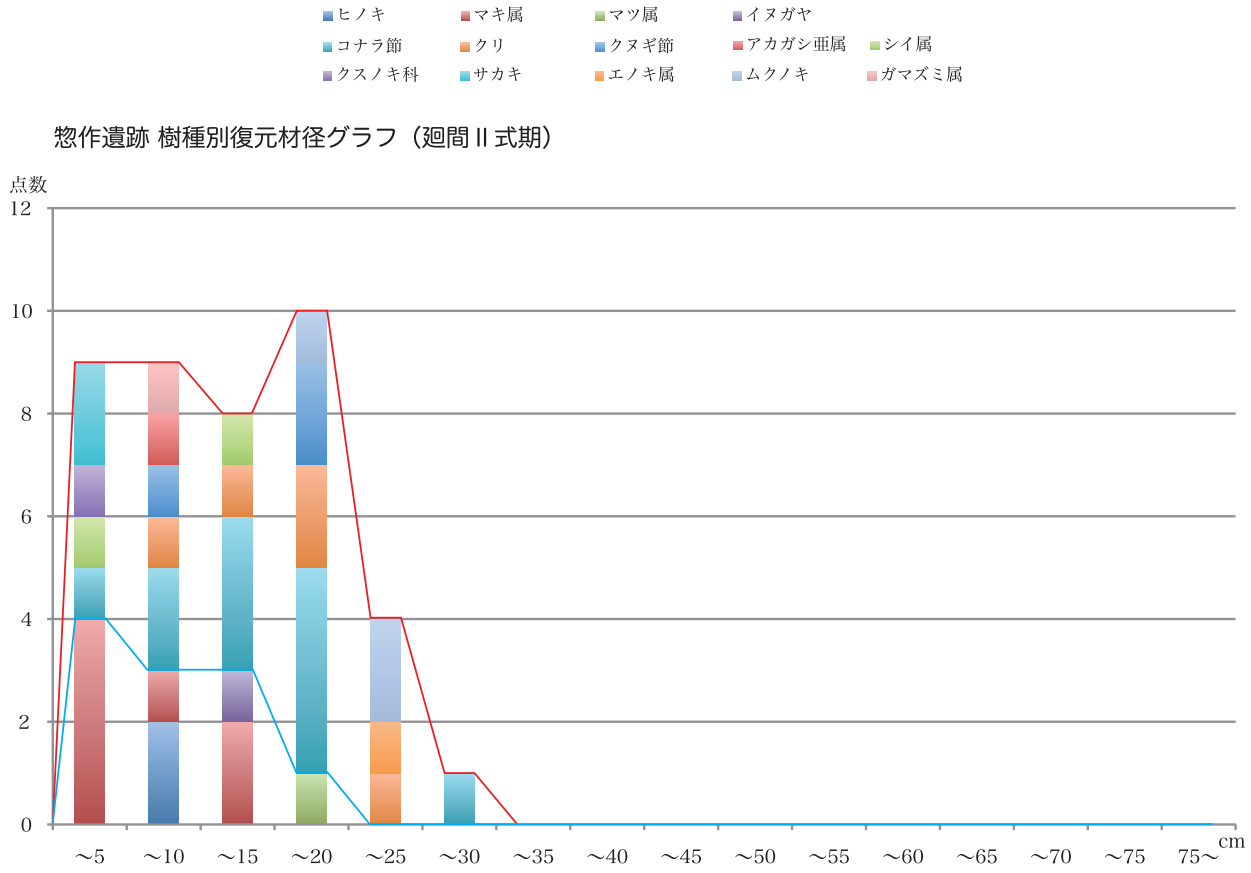
このうち、八王子古宮式期の下懸遺跡から赤彩甲片、惣作遺跡から団扇形と赤彩板、姫下遺跡から漆塗り丸棒・机天板・大型掘立柱建物建築部材など、上位階層者（首長・王）の居住を示す木製品が出土している。このことから鹿乗川流域遺跡群の南群では、複数集落を束ねた上位階層者は、下懸遺跡→惣作遺跡→姫下遺跡と居住地を移動させていた可能性が高い。そして姫下遺跡の存続時期が姫小川古墳（全長69mの前方後円墳）の築造時期（4世紀前半頃）にきわめて近いことから、姫下遺跡は姫小川古墳被葬者（王）の生活の場であり、王の管轄下の元に木製品生産のほか、絹繊維の紡織作業もおこなわれていた。一方、下懸遺跡については、惣作・姫下遺跡の時期にも居住域があり、木製品生産もおこなっていることから、ここには一般層が継続して居住していたと考えられる。

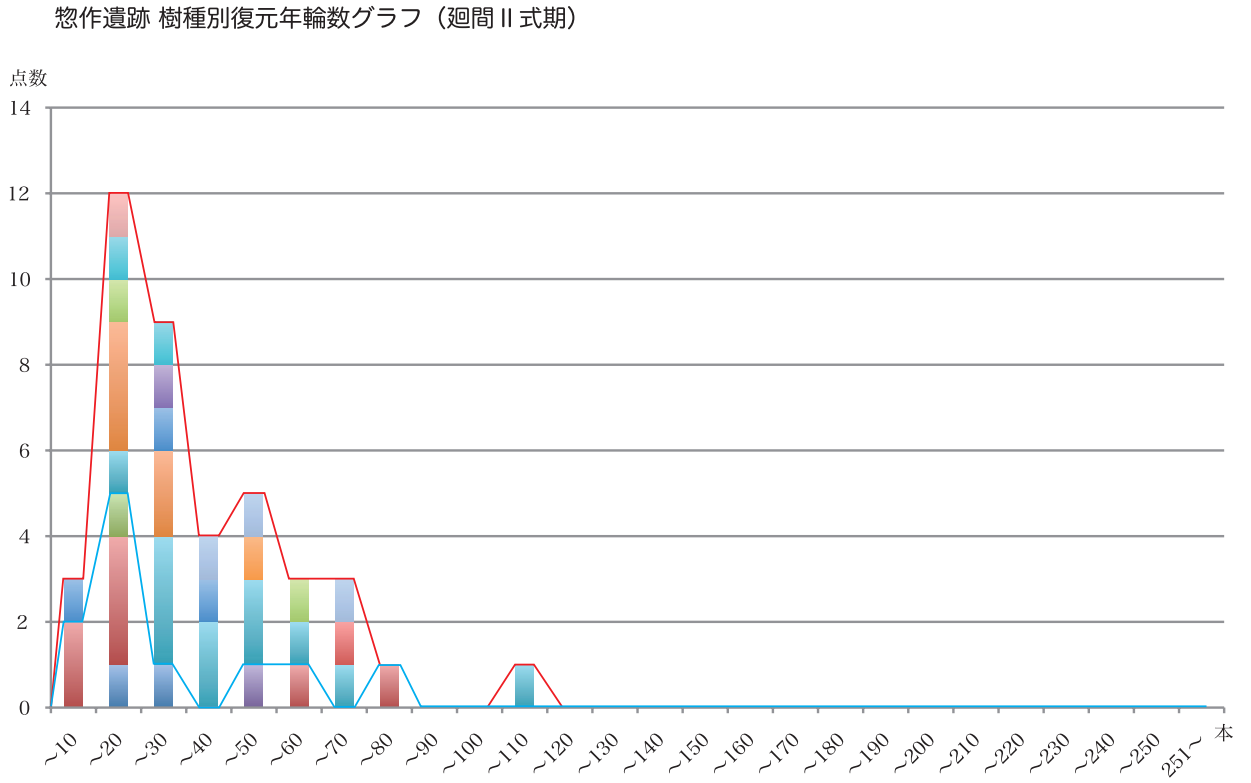
こういった集落変遷の要因の一つには、近接する碧海台地での木材利用が絡んでいた可能性がきわめて高い。上記３遺跡から出土した木製品について、樹種・復元径・復元年輪数を検討すると、碧海台地上にはコナラ節・クリ・クヌギ節・シイ属・マキ属などを主体とする森林が存在していたことがわかる。この森林は、およそ20～

惣作遺跡



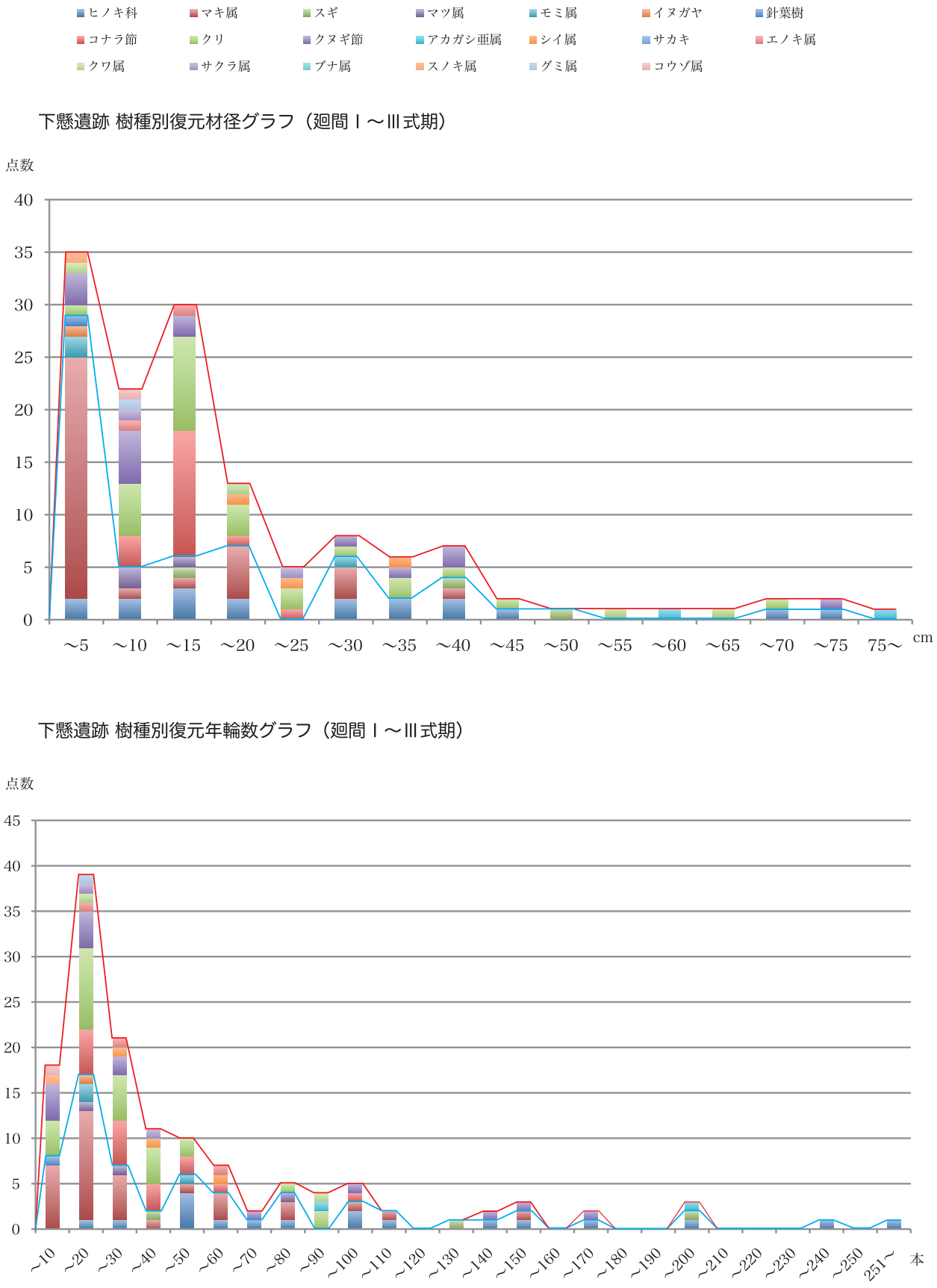
第 132 図　下懸遺跡出土弥生時代木製品の復元径 - 年輪数グラフ



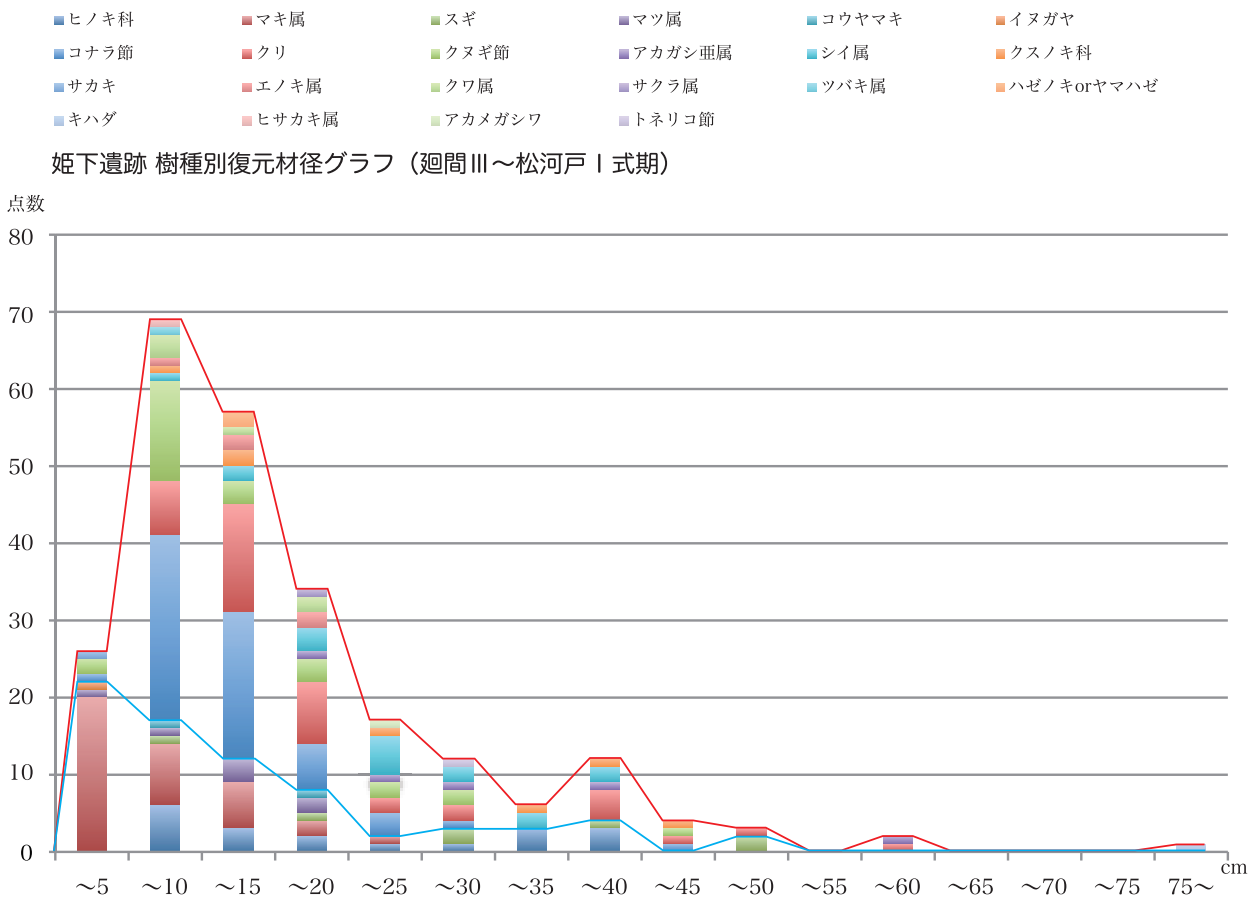


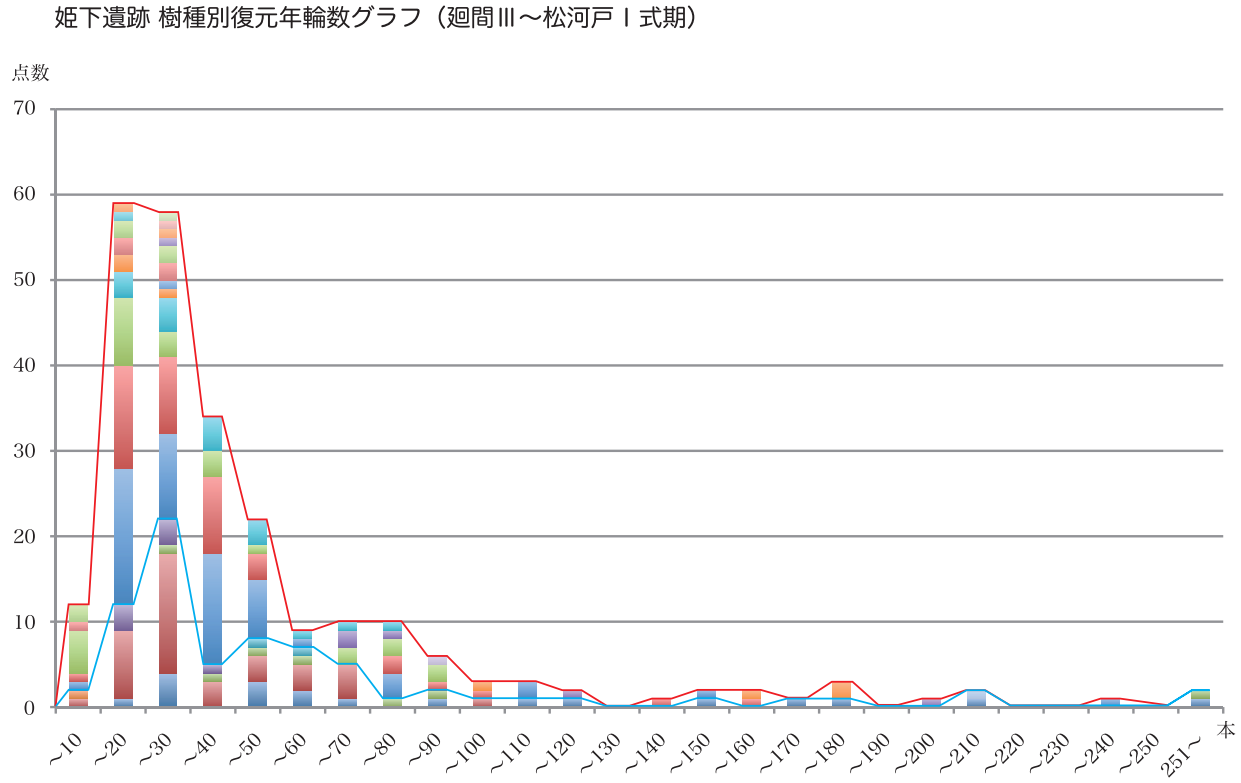
第 133 図　惣作遺跡出土木製品の樹種別復元径 - 年輪数グラフ

惣作遺跡



第 134 図　下懸遺跡出土古墳時代木製品の復元径 - 年輪数グラフ

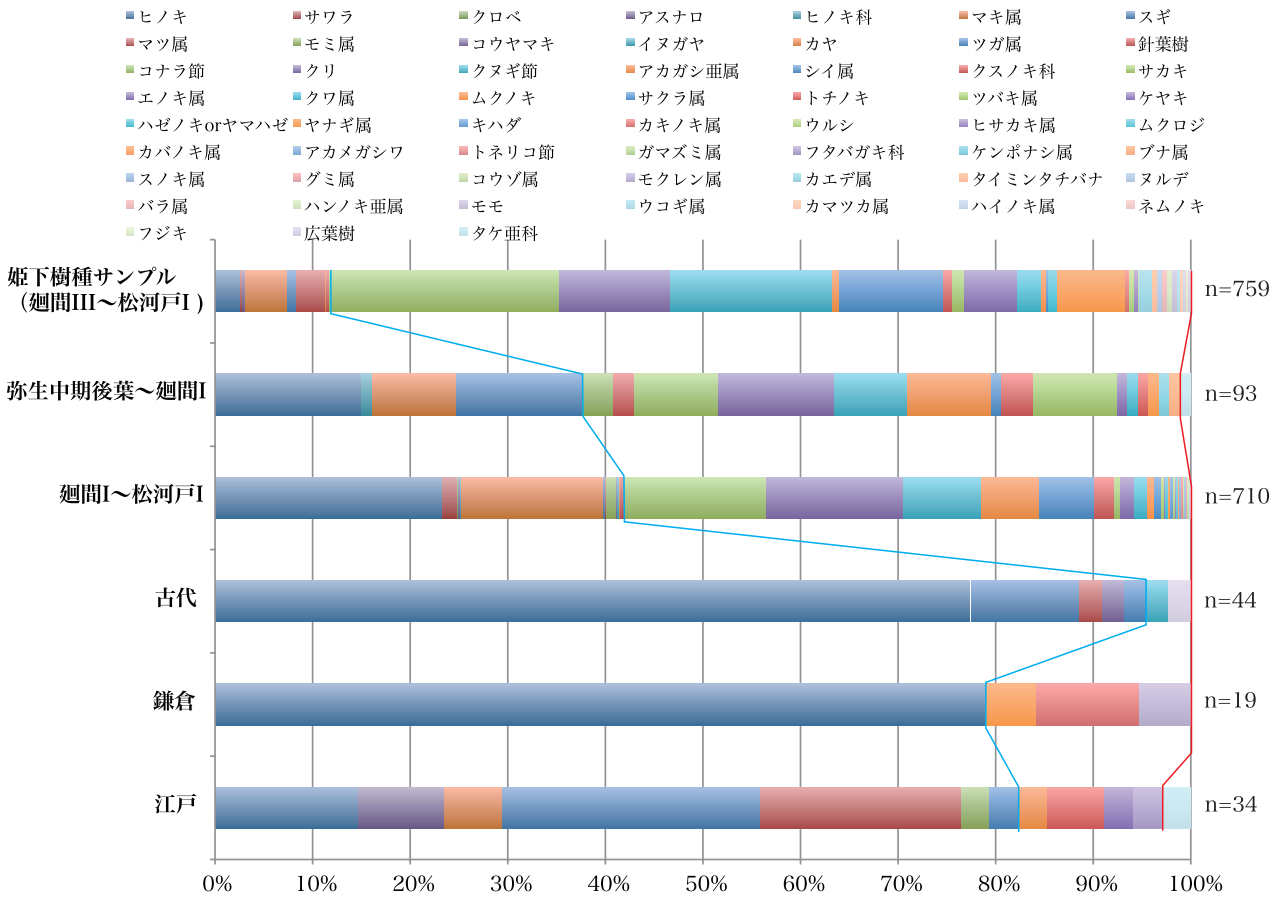




第 135 図　姫下遺跡出土木製品の器種別復元径 - 年輪数グラフ

	上橋下（古井）	姫下（古井）	惣作（古井）	下懸（八王子古宮）	下懸（山中～廻間I）	釈迦山（廻間I）	下懸（廻間I～II）	中狭間（廻間II）	惣作（廻間II）	下懸（廻間II～III）	姫下（廻間III）	姫下（廻間III～松河戸I）	姫下（時期不詳）	下懸（時期不詳）	姫下（古代）	下懸（古代）	惣作（古代）	上橋下（鎌倉）	上橋下（江戸）	惣作（江戸後期）	合計	姫下樹種サンプル（廻間III～松河戸I）
ヒノキ		1	1	2	8	2	31	4	23	12	41	29	2	4	2	7	25	15	2	3	212	20
サワラ							4		1	1		3									9	1
クロベ							1														1	
アスナロ											1	2								3	6	3
ヒノキ科					1		4			2											7	
マキ属	3				5		24		7	22	20	18								2	101	32
スギ	12						7	2	4	5	17	19	1	2		1	4			9	83	7
マツ属								3	1	3	2	6					1			7	23	23
モミ属	2					1	3			1	1	1								1	10	
コウヤマキ												5		1		1					7	
イヌガヤ							1		1		1										3	
カヤ							1				1										2	1
ツガ属																	1			1	2	
針葉樹	2						1				1										4	2
コナラ節	2		1		1	4	12		12	8	18	40	1								99	179
クリ	4				7		22		6	13	25	21	1								99	86
クヌギ節	2			1		4	14		3	5	6	20	1	1			1				58	126
アカガシ亜属	4				2	2	5	9	5	5	4	8		1						1	46	6
シイ属				1			3		5	7	8	11		1							36	81
クスノキ科	3								4		6	3									16	7
サカキ					1	7			2		1			1							12	9
エノキ属			1				3		1		2	3									10	41
クワ属					1		1			1	1	5									9	19
ムクノキ									4		1										5	4
サクラ属							1			1		2									4	1
トチノキ				1																2	3	
ツバキ属												2									2	
ケヤキ									1											1	2	
ハゼノキorヤマハゼ												1	1								2	7
ヤナギ属					1						1							1			2	53
キハダ										1		1									2	
カキノキ属																		2			2	3
ウルシ											1										1	4
ヒサカキ属												1									1	3
ムクロジ												1									1	
カバノキ属												1									1	
アカメガシワ												1									1	
トネリコ節												1									1	
ガマズミ属									1												1	1
フタバガキ科																				1	1	
ケンポナシ属	1																				1	
ブナ属					1																1	
スノキ属							1														1	
グミ属							1														1	
コウゾ属										1											1	
モクレン属																		1			1	
カエデ属																						10
タイミンタチバナ																						4
ヌルデ																						4
バラ属																						4
ハンノキ亜属																						4
モモ																						4
ウコギ属																						2
カマツカ属																						2
ハイノキ属																						2
ネムノキ																						1
フジキ																						1
広葉樹											1						1				2	2
タケ亜科			1																1		1	
樹種不明					1	39		17	1			1		3							62	3
合計	35	1	4	5	29	59	140	35	82	88	160	206	7	14	2	9	33	19	3	31	962	762

第7表　鹿乗川流域の遺跡別樹種組成表



第 136 図　鹿乗川流域遺跡群の樹種組成比較グラフ

30 年を一つのサイクルとして伐採から再生までを繰り返しており、近傍で使用できる木材が枯渇すると集落を移動していた可能性がある。このサイクルは近世の木地師や焼畑とほぼ一致していることから、碧海台地上の伐採をおこなったエリアについては、一定期間焼畑をおこなっていた可能性もある。

また、遺跡周辺の碧海台地上にはあまりなかったヒノキ科・スギ・アカガシ亜属などの樹種については、現在の豊田市域（佐々木・松葉・植田 2005）より矢作川の水運を利用して搬入していたとみられる。さらに時期が下って古代以降になると、ヒノキ科への依存度が急激に高まる一方、逆に碧海台地上の森林は、燃料材以外の用材供給地としてほとんど顧みられなくなっていった。

（樋上　昇）

引用文献

愛知県埋蔵文化財センター 2007『上橋下遺跡・鹿乗川流域遺跡群（高圧線鉄塔移設地点』

愛知県埋蔵文化財センター 2009『下懸遺跡』

安城市教育委員会 1999『中狭間遺跡』

安城市教育委員会 2001『釈迦山遺跡』

神谷正弘 2010「日本出土の木製短甲・組合せ木甲・補襠木甲について」『古文化談叢』第 65 集、九州古文化研究会

佐々木由香・松葉礼子・植田弥生 2005「水入遺跡出土木材の樹種同定」『水入遺跡』愛知県埋蔵文化財センター

三田敦司 2005「塚越古墳・二子古墳・姫小川古墳」伊藤秋男・赤塚次郎編『愛知県史　資料編 3　古墳』愛知県

鈴木裕明 2001「団扇形木製品と塵尾」茨城大学考古学研究室 20 周年記念論文集『日本考古学の基礎研究』

鈴木裕明 2003「古墳時代前期の団扇形木製品の展開とその背景」石野博信編『初期古墳と大和の考古学』学生社

長友朋子 2005「弥生時代から古墳時代への食事様式の変化とその歴史的意義」『待兼山考古学論集―都出比呂志先生退官記念―』大阪大学考古学研究室

東村純子 2011「糸をつくり、経を揃える」『考古学からみた古代日本の紡織』六一書房

樋上　昇 2010「木工技術と地域社会」『木製品から考える地域社会―弥生から古墳へ―』雄山閣

福井勝義 1974『焼畑のむら』朝日新聞社

渡辺久雄 1977『木地師の世界―個人と集団の谷間―』創元社

第２節　総括

（１）惣作遺跡における弥生時代中期の甕の変遷

惣作遺跡の遺構変遷については、すでに『惣作遺跡』（宮腰編 2009）により簡潔にまとめられている。今回の調査成果は概ねこれに合致するものであったが、新たな知見として、(1) 流路岸で古墳時代前期の遺物が多量に出土したことと、(2) 古代末から中世にかけての水田遺構を発見したことが加えられよう。一方, これとは別に『惣作遺跡』2009 の遺構変遷ではＡ－２期が前半と後半に大別されているものの、その区分以上に目まぐるしく遺構が変遷するという問題が内在していた。そこで、具体的な遺構変遷を考察する前に惣作遺跡Ａ－２期の細分を試みることとしたい。

Ａ－２期の時期を細分するために今回は弥生土器甕に着目した。Ａ－２期は弥生時代中期後葉のいわゆる古井式を中心とする時期だが、西三河地域の古井式期の土器の変遷については、三河地域の様式と編年をまとめた論考（前田・鈴木 2002）、岡島遺跡を分析した松井直樹（松井 1998）、川原遺跡を対象とした石黒立人（石黒 2001）、台付甕の成立を議論した鈴木とよ江（鈴木 2000）らの論考がある。鹿乗川流域遺跡群を対象とした先行研究はなく、上述した研究を参考にし、主に器形を中心に分類を試みて段階設定を行った。なお、各々の一括資料には前後の時期の土器が混入しているものが多く、分析の際はこれを恣意的に除外していることを断っておきたい。

ａ段階（深掘調査出土資料≒ 04D 区 SD59）：深鉢形の甕で体部が直線的に開き口縁部は２回短く外折するもの（１類：214 など）と、甕形の甕で体部が直立気味になり口縁部が短く外折するもの（２類:217 など）がある。体部外面はイタナデ調整が基本となり、台付甕の脚も伴う。古井式の最古相に相当する。

ｂ段階（09B 区 072SK 出土資料）：深鉢形の甕で体部が直立気味になり口縁部は２回の短い外折が緩いもの（３類：153 など）と、同じプロポーションで口縁部がやや長く１回外折するもの（４類：154 など）もある。体部外面はハケ調整が基本となり、体部がやや彎曲して甕形に近づいている。

ｃ段階（09B 区 028SI・08C 区 073SD 出土資料）：体部は彎曲する甕形の甕で２回外折してやや長い口縁部に至るもの（５類：89 など）と、甕形の甕で体部上位はやや直線的で口縁部の外折が目立たずに大きく外反するもの（６類：96 など）もある。５類が主体で、２回の外折により内面に形成された頸部（口縁部と体部の間）の面が最も発達する。体部外面はハケ調整に加えイタナデ調整が多くなる。脚はやや高くなる。なお、ｃ段階の後半として 071SZ 出土資料を考えておきたい。

ｄ段階（09B 区 019SI ≒ 028SI 上層・08C 区 066SB 出土資料）：甕形の甕で２回外折して形成された口縁部が長く水平に近くなるもの（７類：80 など）が主体となる。口縁部が受口様に内面が凹むものさえみられる。体部外面はハケ調整とイタナデ調整の両者がある。脚は高くなる。066SB の上位に構築された 049SB 出土資料などがあり、前後２区分される可能性があるが、今回は具体的な区分には至らなかった。ｃ段階とｄ段階が古井式中相に相当するだろう。

ｅ段階（09B 区 045SX 出土資料）：図には示さなかったが、体部が緩く彎曲する甕形の甕で１回外折し長い口縁部を持つもの（８類：127 など）がある。７類と８類は形状の差が大きいように感じられ、本来はｄ段階とｅ段階の間にいくつかの段階が含まれている可能性が考えられる。古井式最新相に当たるか。

以上のａ段階からｄ段階までの変遷は、出土遺構の重複関係（08C 区で深掘調査 → 073SD → 071SZ → 066SB → 049SB および 09B 区で 072SK → 028SI → 019SI）とも矛盾しない。なお、この変遷案は西三河の古井式成立に関する問題に少なからず影響するものと推察されるが、紙幅と筆者の力量が不足しているためここでは触れず、後考に委ねたい。

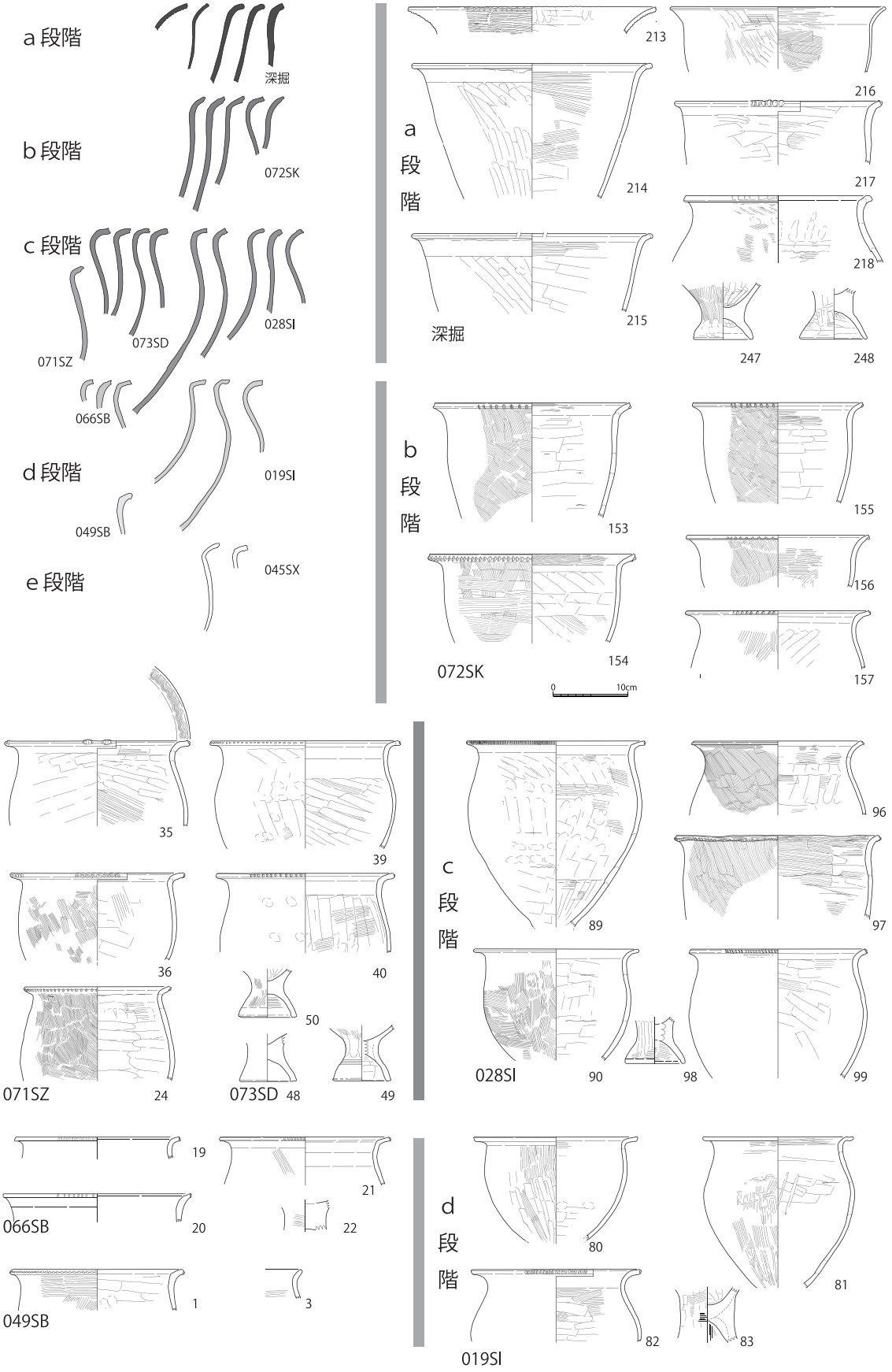
（２）惣作遺跡の遺構変遷

上記の検討を踏まえ遺構変遷をまとめておきたい。

Ａ―１期：04D 区と 04E 区を中心とする微高地に集落が展開すると思われ、西は流路、東は後背湿地となる。今回の報告では遺物が散見されたものの、遺構変遷では特に新知見はみられない。

Ａ―２期ａ段階：河道（谷地形）が遺跡西半部で蛇行しながら南流する。粗い砂が厚く堆積することから激しい流れであったと思われ、04D 区 SD59 や今回の深掘調査の出土資料からみて、人々の営みが近在していたことが推定されるに過ぎない。

Ａ―２期ｂ段階：09B 区 072SK の存在から河道（谷地形）の埋積が進み微高地が西へ拡がったと思われる。た



第 137 図　A－2 期における甕の変遷

だ 072SK 以外の遺構がほとんどないことから、依然として人々の営みが近在した程度であろう。

Ａ―２期ｃ段階：09B 区 028SI・08C 区 073SD・04C 区 SU05 などから、拡大した微高地上に竪穴建物・溝・土器埋設遺構などが展開した。04C 区 SZ01 や 08C 区 073SD を方形周溝墓とみることには疑問があるものの、土器埋設遺構 04D 区 SX13・04D 区 SX13・08C 区 071SX・08C 区 072SX などは土器棺墓の可能性があり、微高地西側の河道近接部が墓域であったと推定できる。調査区東部の微高地中央は居住域と思われる。

Ａ―２期ｄ段階：08C 区 066SB・同 066SB・09B 区 019SI ？などからみて、微高地西側の墓域と推定されたエリアでも居住域となったと考えられる。

Ａ―２期ｅ段階～Ａ―４期：今回の調査ではＡ―２期ｅ段階～Ａ―３期の知見を加えることはあまりできなかったが、微高地北側に推定されていた河道の様相が具体的に判明した。結果、廻間Ⅱ式併行期（Ａ―４期）に河道南岸で木製品の生産と水辺の祭祀を想定させる状況が確認された。多量の土器を含むことから、微高地上に展開した居住域はこれまでの想定よりも長く廻間Ⅱ式併行期まで盛行し、最終的には松河戸式併行期（09B 区 026SK）まで継続していたと思われる。

Ｂ―１期：廻間Ⅱ式併行期で河道の埋積は進み、松河戸式併行期から岩崎 17 号窯式期までは様相は不明で人々の営みを見いだすことは難しい。鳴海 32 号窯式期に出土遺物が増加し、井ヶ谷 78 号窯式期には河道南の微高地に溝で囲まれた区画に掘立柱建物が建ちその周辺にも遺構が展開した。河道北側の微高地も安定してきたとみられ、8 世紀後半から竪穴建物が認められるようになる。「呉部足国」の人名が記された木簡もこの時期に相当し、仏教や寺院に関わりの深い渡来系氏族が所在し、寺領廃寺に関係したものと想定される。

Ｂ―２期：折戸 53 号窯式期には河道南の微高地にあった区画は消えるが、河道の南北両微高地で竪穴建物や掘立柱建物が展開したと思われる。河道 08 区 003NR も 10 世紀前半南までの遺物を含んでいるが、それ以降の様相は不明瞭となる。

Ｃ―１期：河道北の微高地では掘立柱建物などの遺構が廃絶した後に水田遺構が検出されている。鎌倉時代には河道北の微高地から後背湿地に至る部分で水田が営まれたことが判明した。

Ｃ―２期：戦国時代から江戸時代では 2004 年度の調査でいくつかの遺構が確認されたが、今年度の調査では新しい知見を得ることはできなかった。

Ｃ―３期：江戸時代後期以降では、遺跡南西部を中心に 08C 区 068NR など大型の遺構（または自然地形）が確認された。現鹿乗川に近い流路本体かその付近の不安定な立地を示しているものと思われる。（鈴木正貴）

引用文献

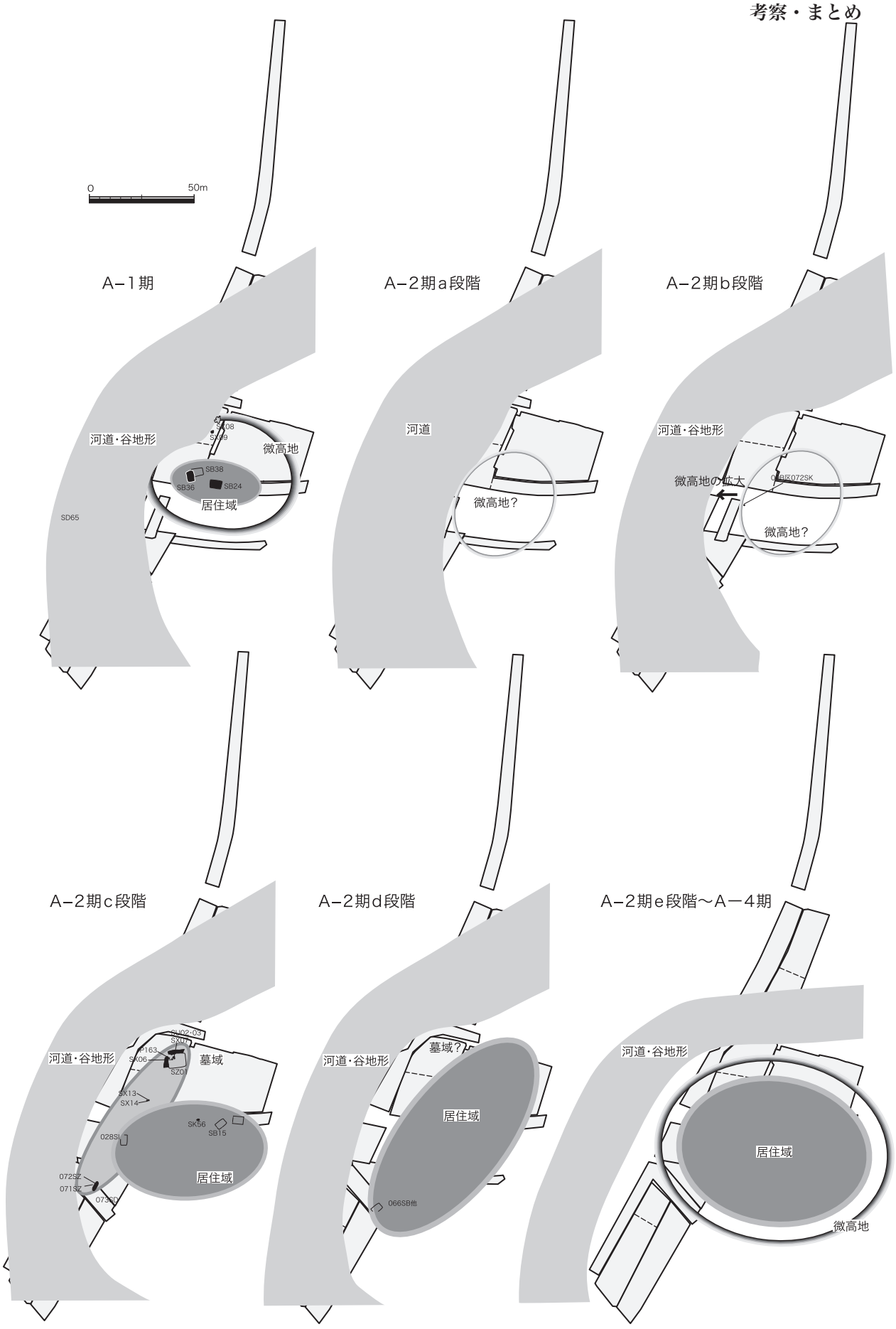
石黒立人 2001「矢作川流域における弥生中期土器編年の再検討」『川原遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 91 集

鈴木とよ江 2000「西三河地方の台付甕の成立をめぐって」『三河考古第 13 号』

前田清彦・鈴木とよ江 2002「三河地域」『弥生土器の様式と編年　東海編』木耳社

松井直樹 1998「弥生時代中期後葉段階の「古井式土器」について」『岡島遺跡・毘沙門遺跡』西尾市教育委員会

宮腰健司編 2009『惣作遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 158 集



第 137 図　惣作遺跡の遺構変遷

報告書抄録

ふりがな	そうさくいせき　2
書　　名	惣作遺跡Ⅱ
副　書　名	
巻　　次	
シリーズ名	愛知県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第172集
編著者名	鈴木正貴、永井邦仁、樋上昇、川添和暁、鈴木茂、黒沼保子、佐々木由香、バンダリ スダルシャン
編集機関	公益財団法人　愛知県教育・スポーツ振興財団　愛知県埋蔵文化財センター
所在地	〒498-0017 愛知県弥富市前ヶ須町野方802-24　TEL0567(67)4161
発行年月日	西暦 2012年 3月 31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
そうさくいせき 惣作遺跡	あんじょうし　きどちょう 安城市木戸町	23213	540132	34度 53分 60秒	137度 05分 38秒	20080901～ 20091130	2100㎡	鹿乗川河川改良工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
惣作遺跡	集落	弥生時代～古墳時代前期	竪穴建物、自然河道、土器棺墓など	弥生土器、土師器木製品など	弥生時代中期から平安時代の集落
		奈良時代～平安時代	竪穴建物、掘立柱建物、溝、土坑など	須恵器、土師器灰釉陶器、木製品など	
		鎌倉時代～江戸時代	掘立柱建物、溝、水田など	山茶碗類、瀬戸美濃窯産陶器、木製品など	古墳時代前期の良好な一括資料と木簡

文書番号	発掘届出(20埋セ第57号・2008.8.19)　(21埋セ第41号・2009.7.15) 通知(20教生第1360号・2008.9.9)(21教生第1033号・2009.8.6) 終了届・保管証・発見届(20埋セ第94号・2009.12.24)(21埋セ第78号・2009.10.28)

要約

今回の調査で確認された遺構や遺物は3期に大別される。弥生時代中期から古墳時代前期では、竪穴建物を中心とした集落が展開したとみられ、古墳時代前期の自然流路から多量の土器と木製品が出土した。奈良時代から平安時代には竪穴建物と掘立柱建物も伴う集落が営まれ、年号と人名が記された木簡も1点出土した。鎌倉時代以降は居住域ではなくなったようで、水田や河道などの土地利用が確認された。

鹿乗川流域遺跡群の南部に所在する本遺跡は、周辺に点在する他の遺跡との関連が注目される。

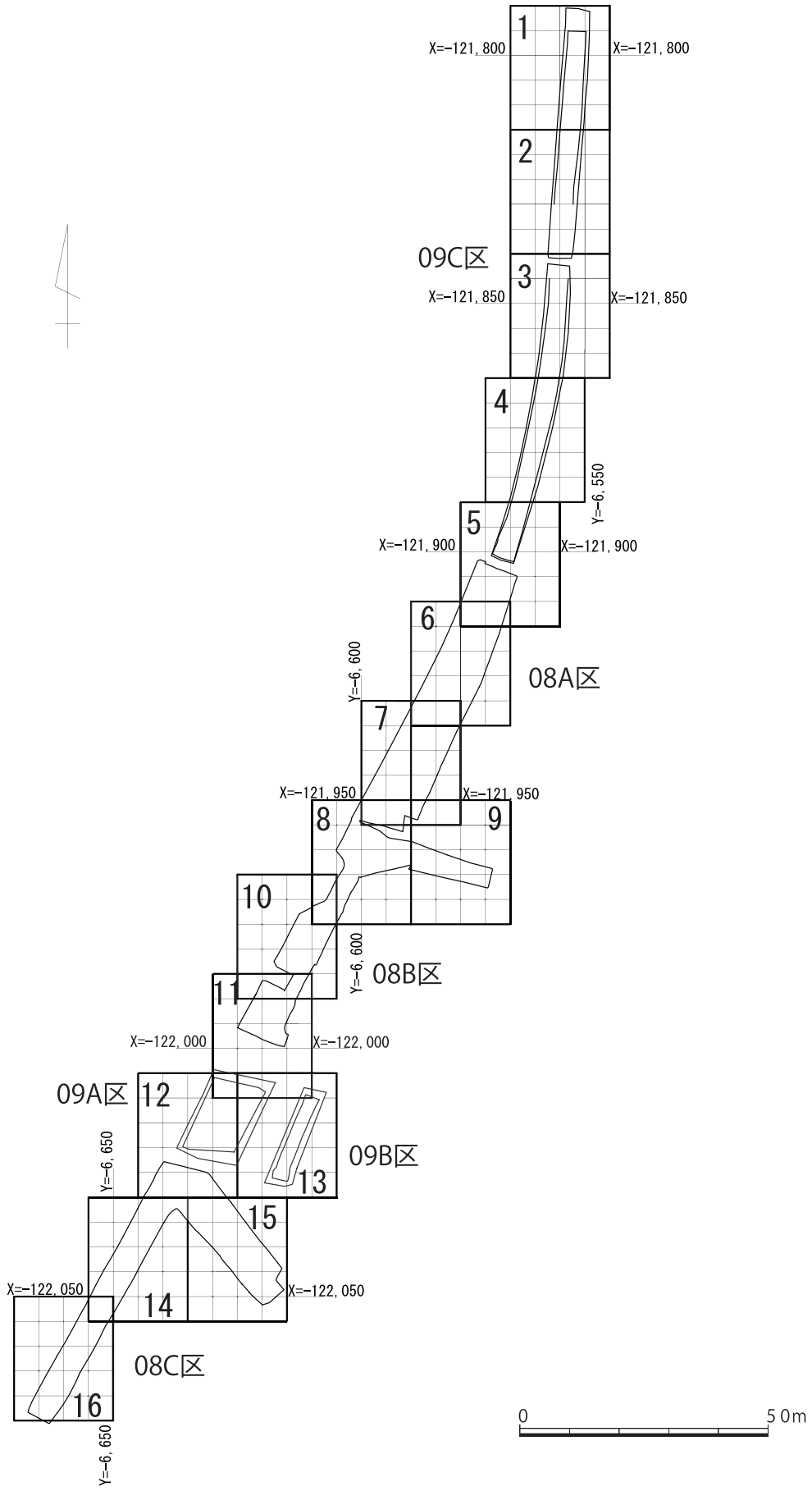
遺構図版

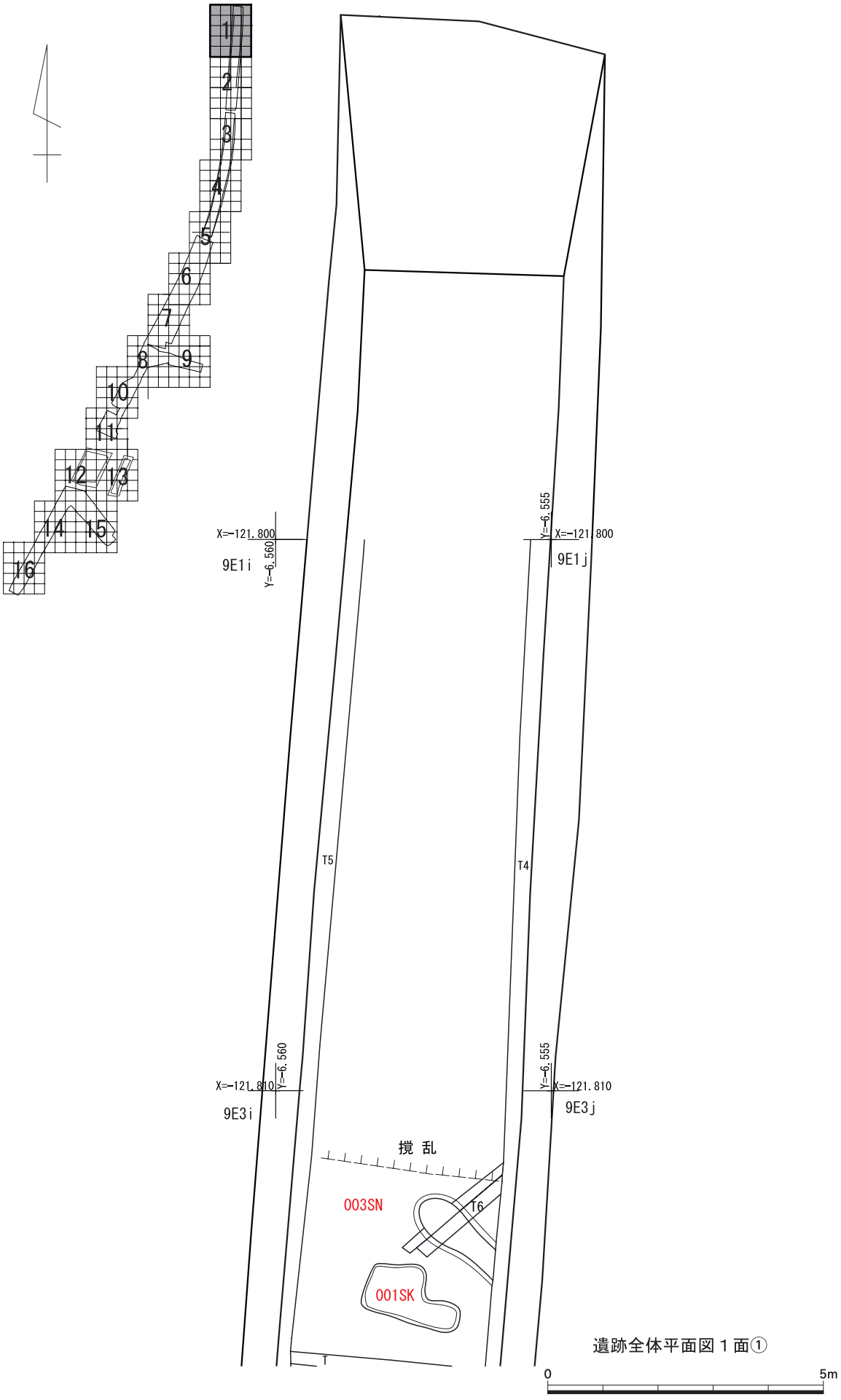
遺構図版割付

第１面遺構（1 ～ 16　縮尺 1:100）

第２面遺構（1 ～ 16　縮尺 1:100）

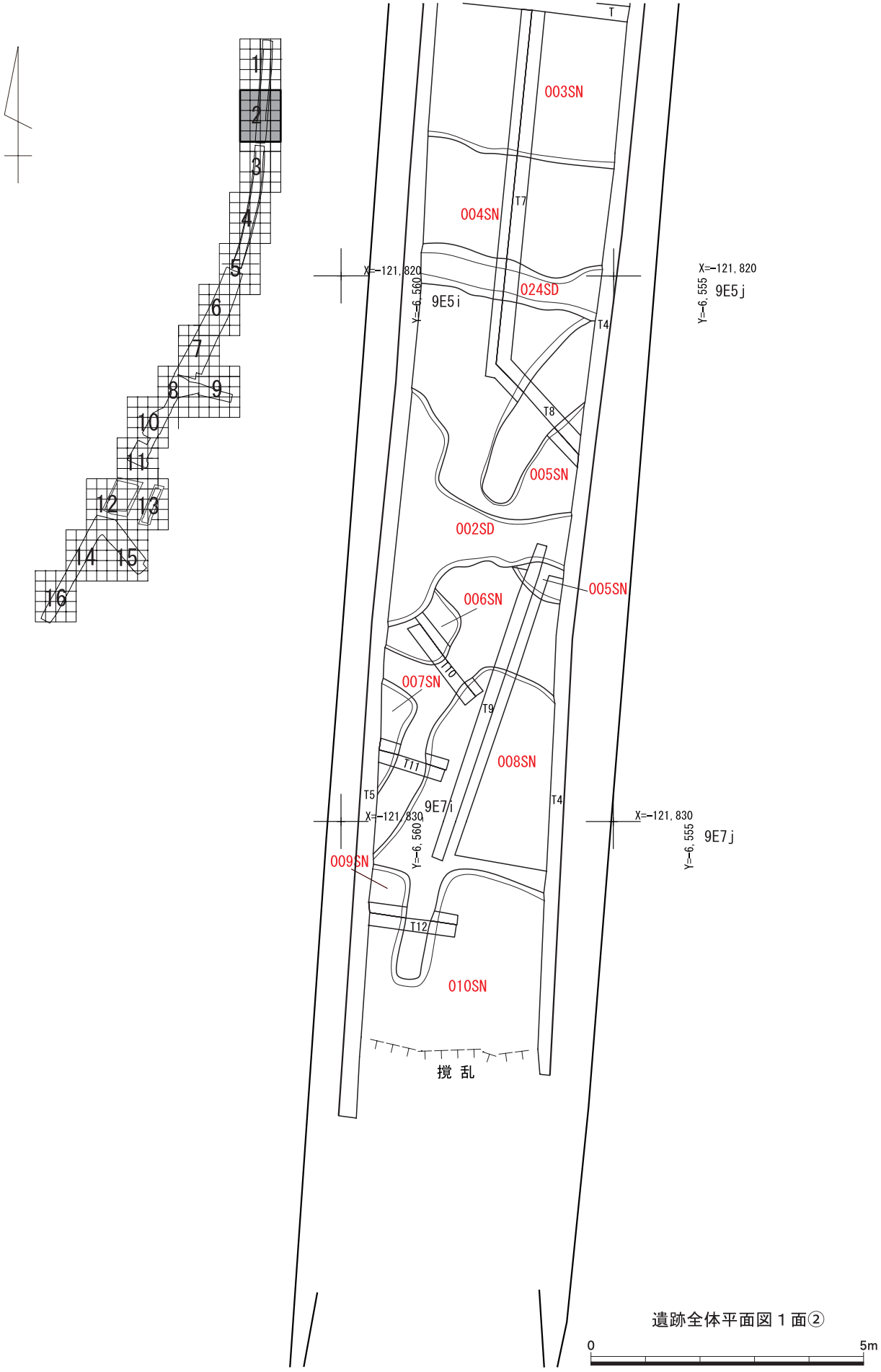
遺構図版 1


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
X=-121, 800
X=-121, 800
09C区
X=-121, 850
X=-121, 850
Y=-6, 550
X=-121, 900
X=-121, 900
Y=-6, 600
08A区
X=-121, 950
X=-121, 950
Y=-6, 600
08B区
X=-122, 000
X=-122, 000
09A区
09B区
Y=-6, 650
X=-122, 050
X=-122, 050
08C区
Y=-6, 650
0
50m

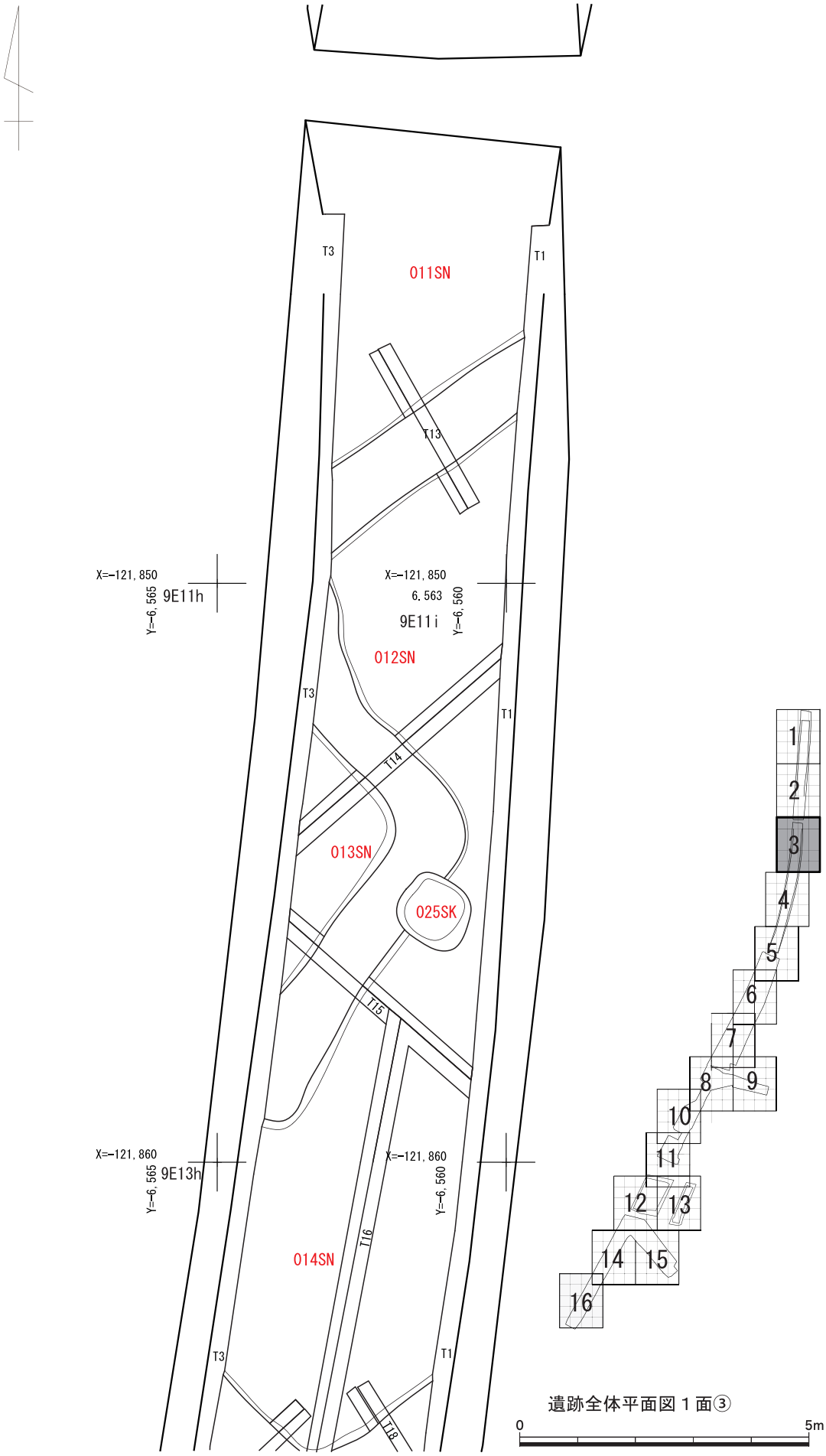

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
X=-121.800
Y=-6.560
9E1i
Y=-6.555
X=-121.800
9E1j
T5
T4
X=-121.810
Y=-6.560
9E3i
Y=-6.555
X=-121.810
9E3j
撹 乱
003SN
T6
001SK
T
0
5m

遺跡全体平面図１面①

遺構図版 3

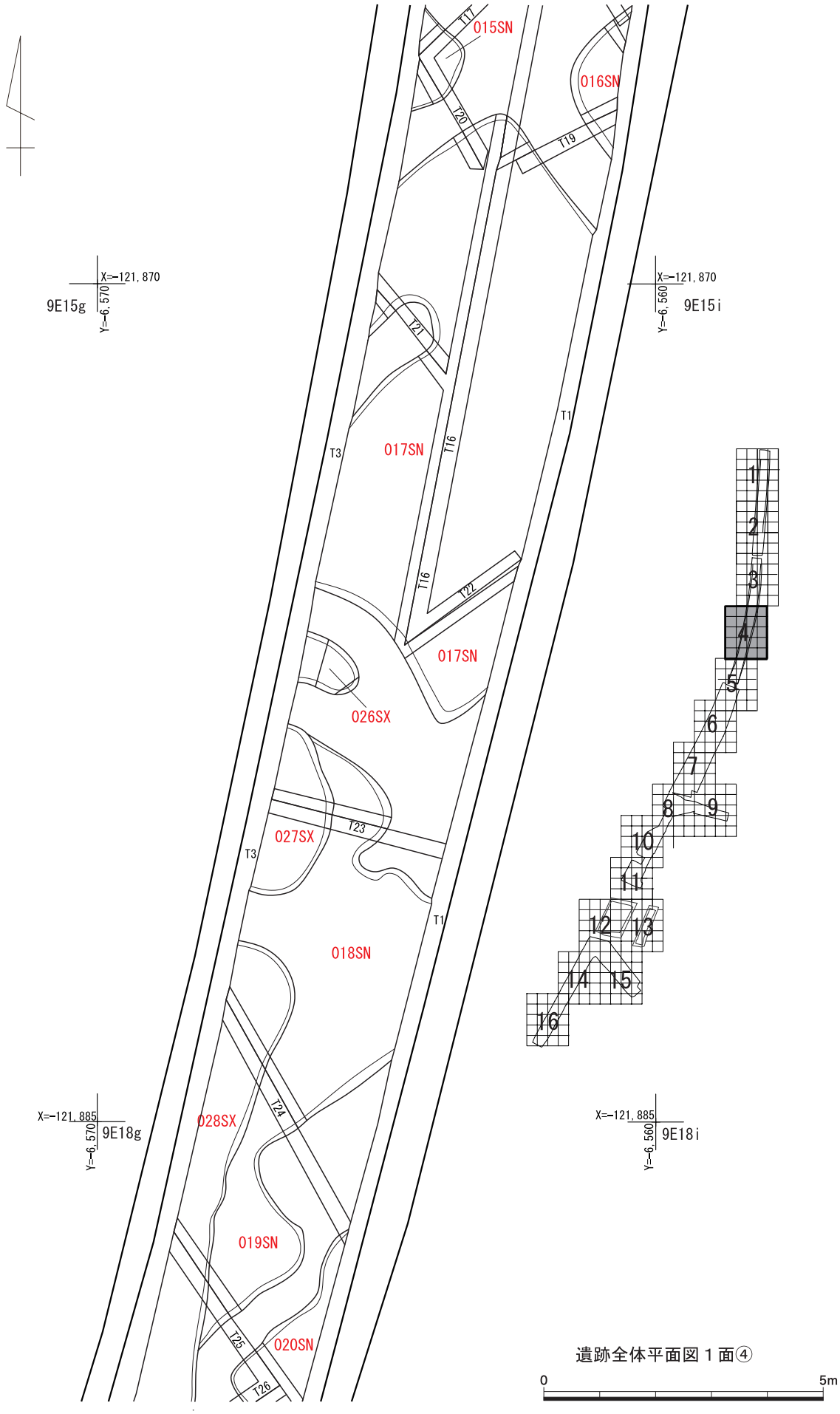


遺跡全体平面図１面②

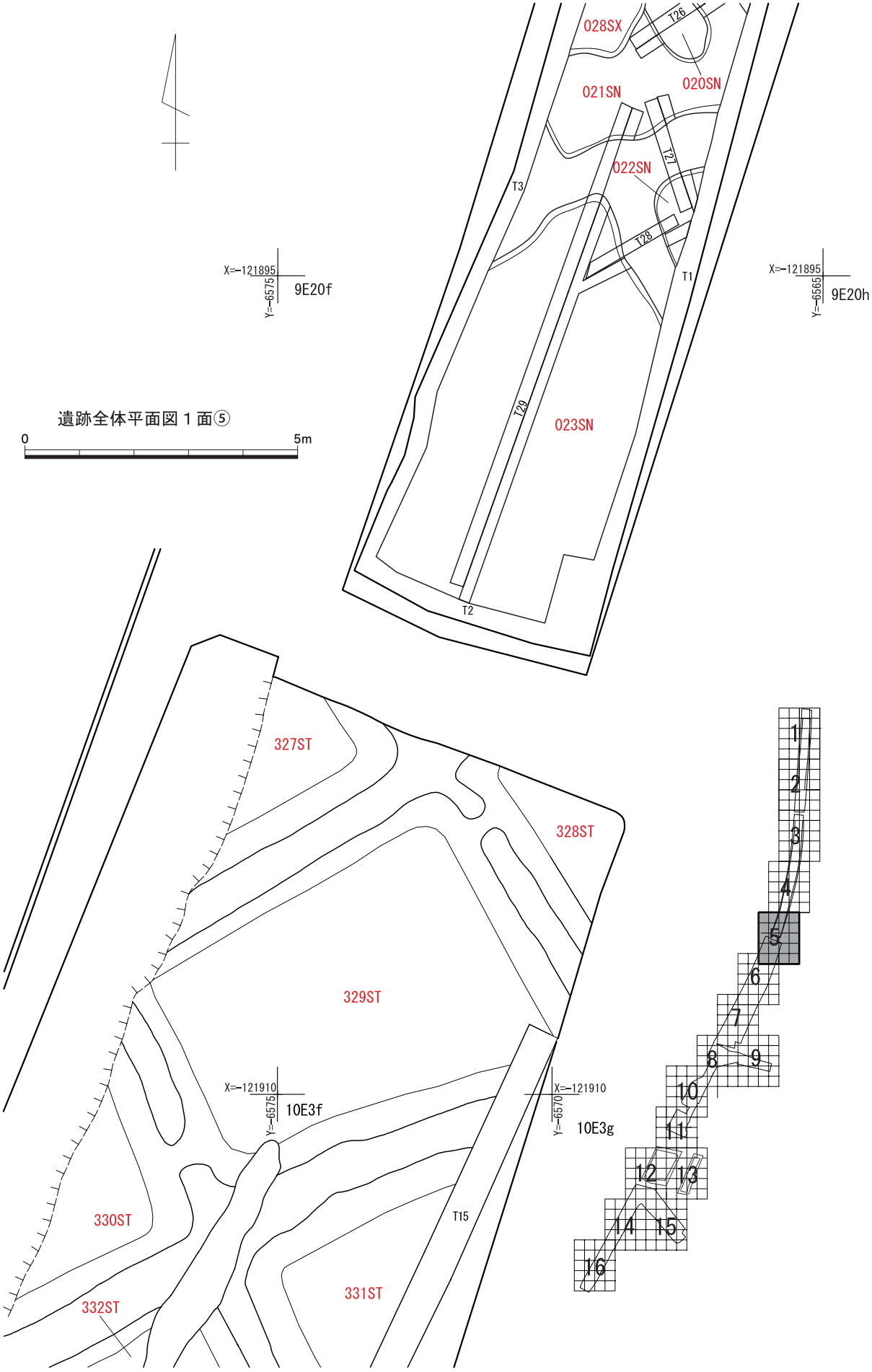

011SN
012SN
013SN
014SN
025SK
T1
T3
T13
T14
T15
T16
T18
X=-121,850
Y=-6,565
9E11h
X=-121,850
6,563
9E11i
Y=-6,560
X=-121,860
Y=-6,565
9E13h
X=-121,860
Y=-6,560
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
0
5m

遺跡全体平面図１面③

遺構図版 5



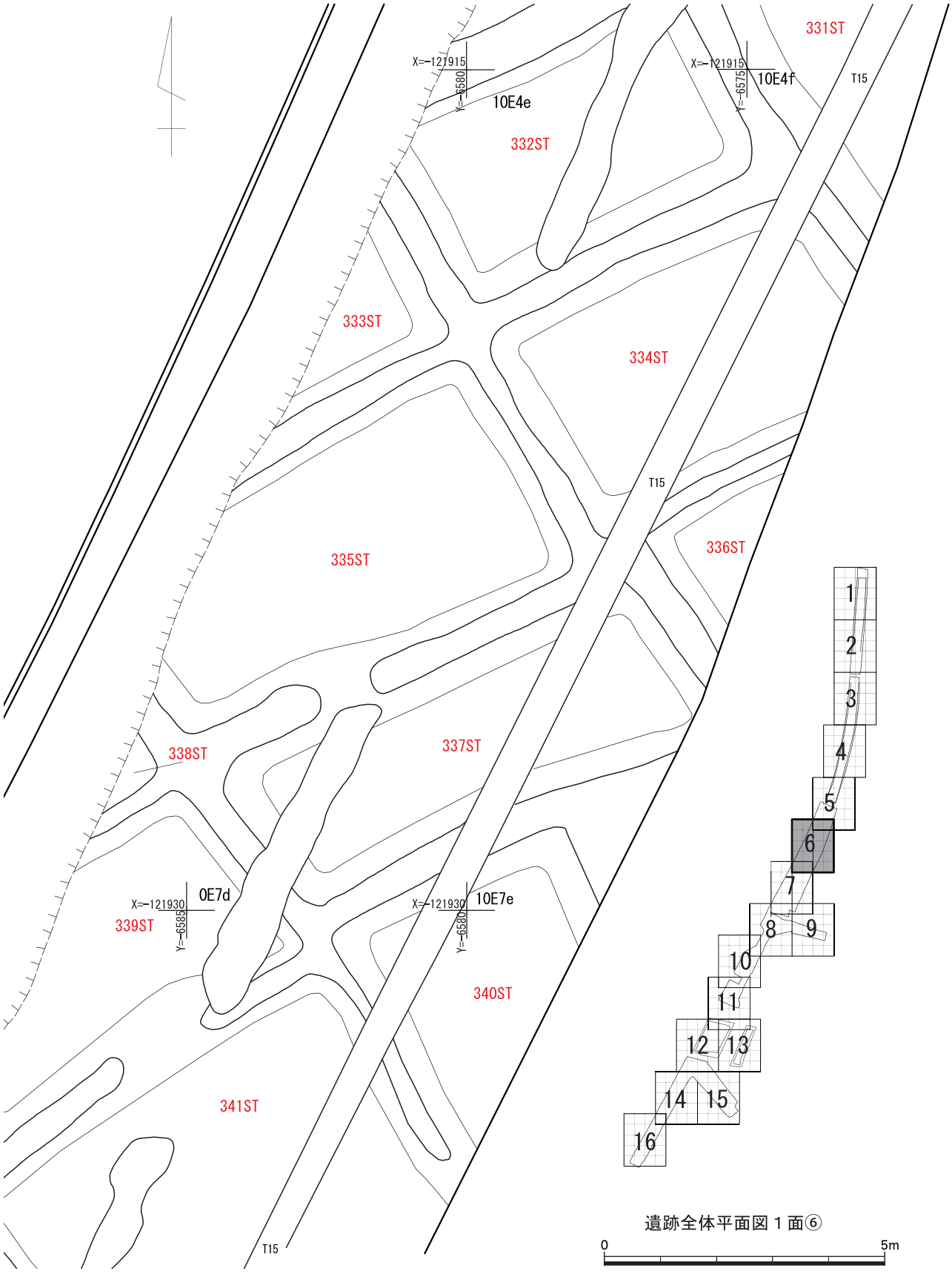
遺跡全体平面図１面④



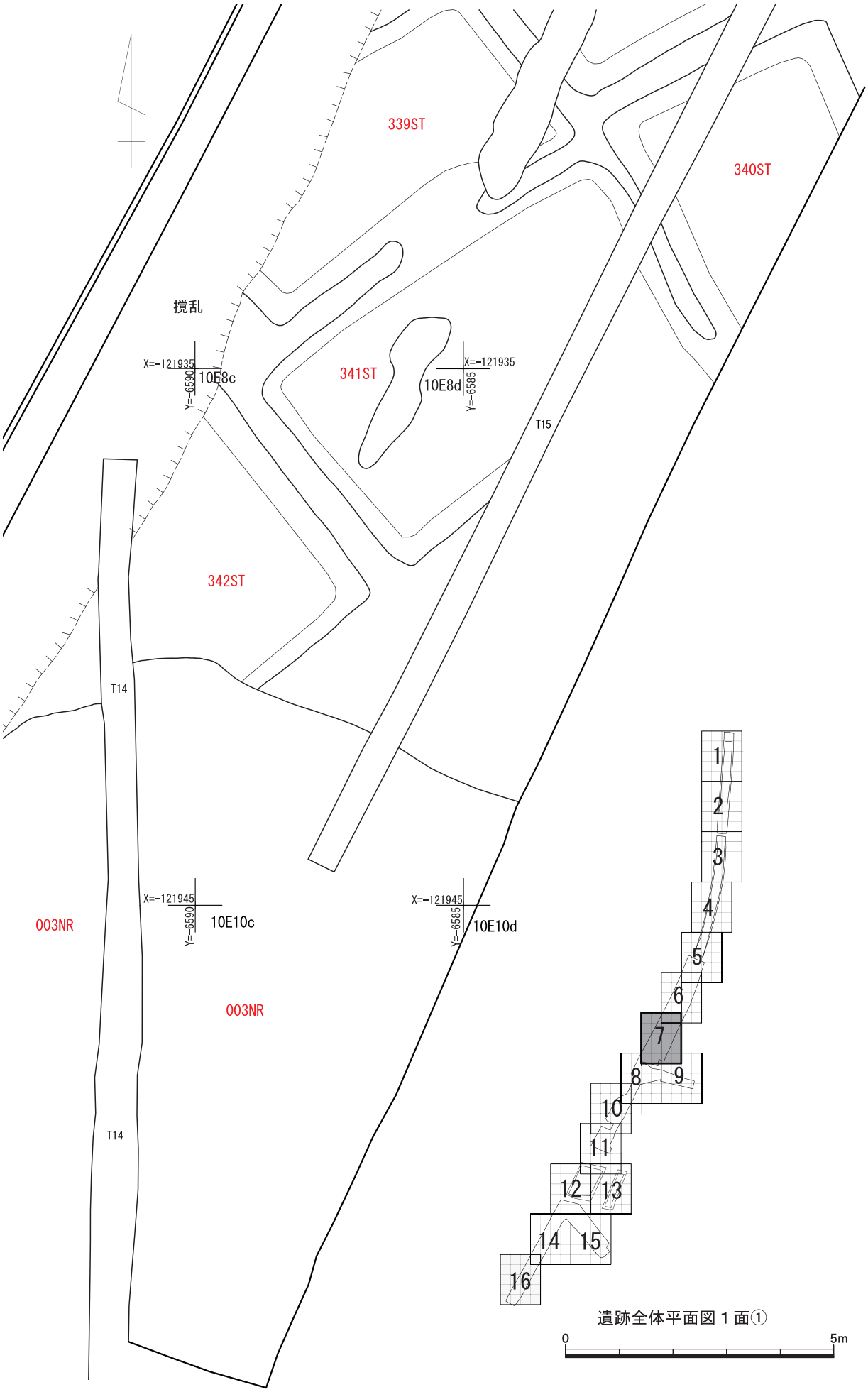
遺跡全体平面図１面⑤

0 5m

遺構図版７



遺跡全体平面図１面⑥



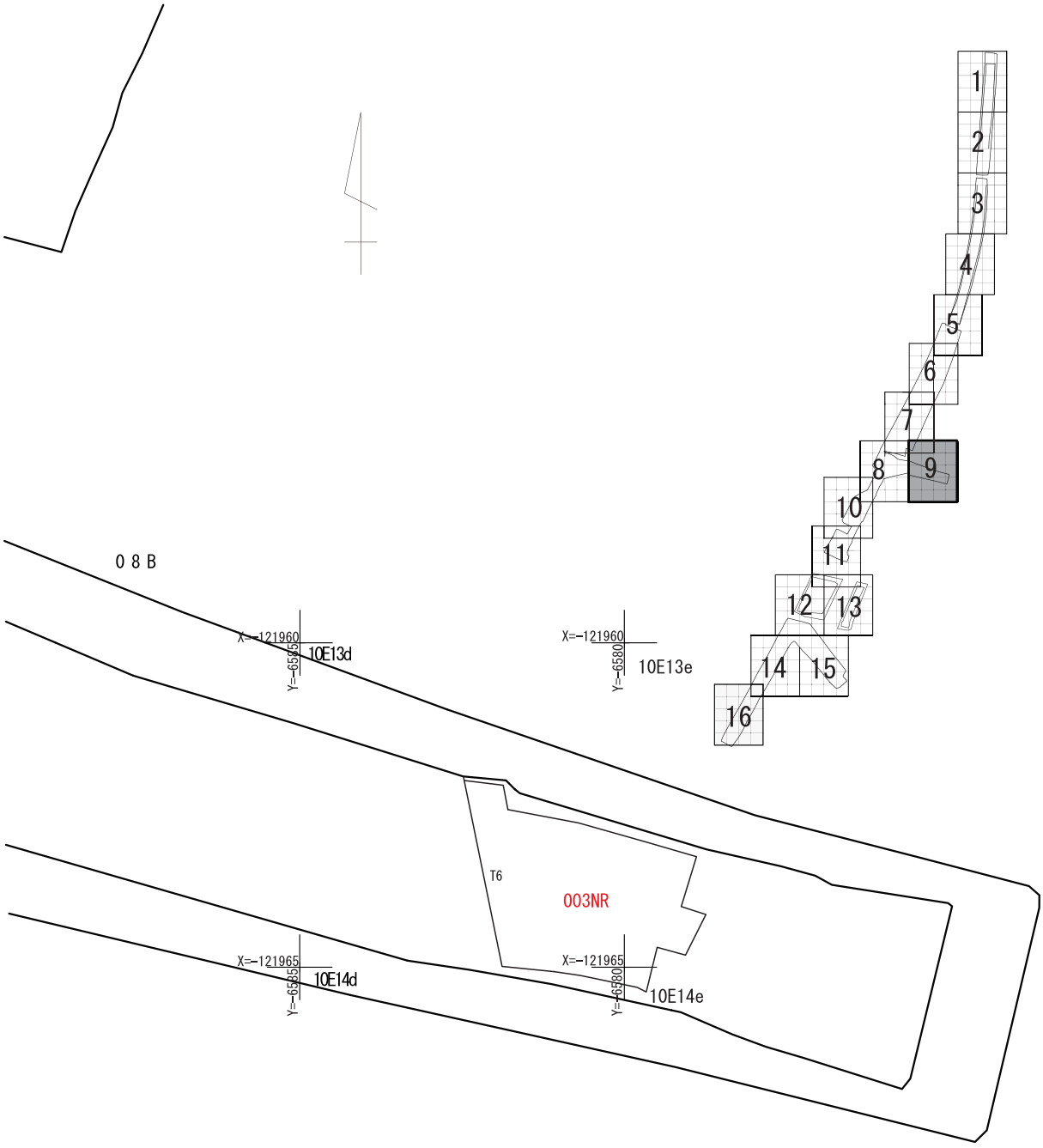
遺跡全体平面図１面①

0 5m

遺構図版９

遺跡全体平面図１面①

0 5m



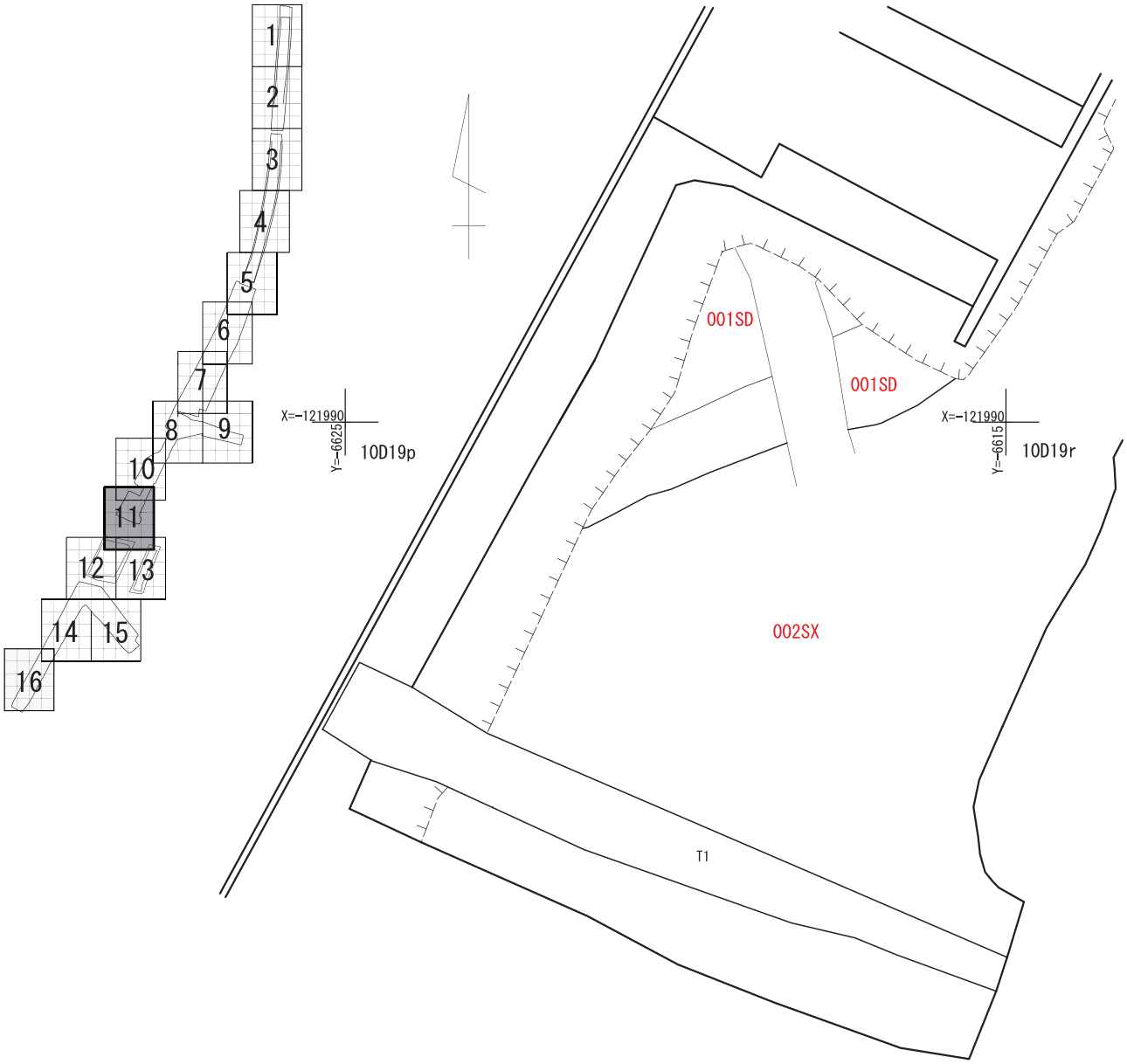
遺跡全体平面図１面⑨

0 5m

遺構図版 11

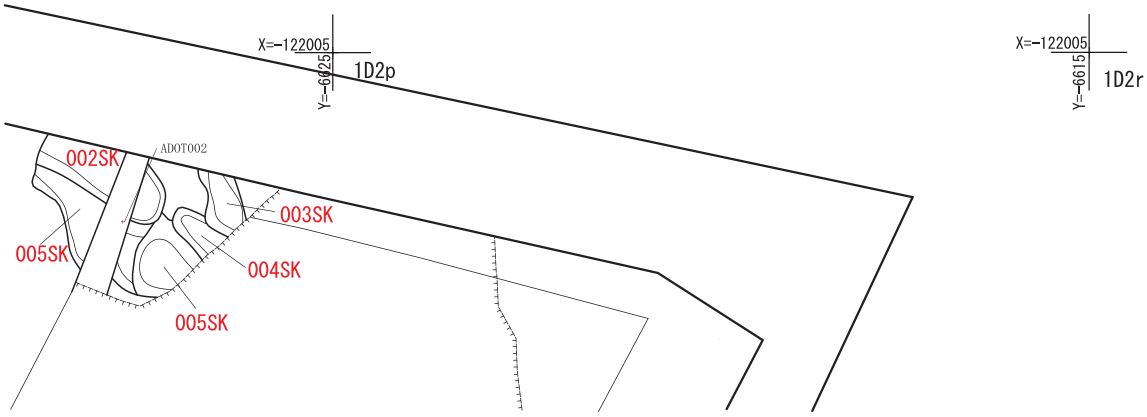
遺跡全体平面図１面⑩

0 5m

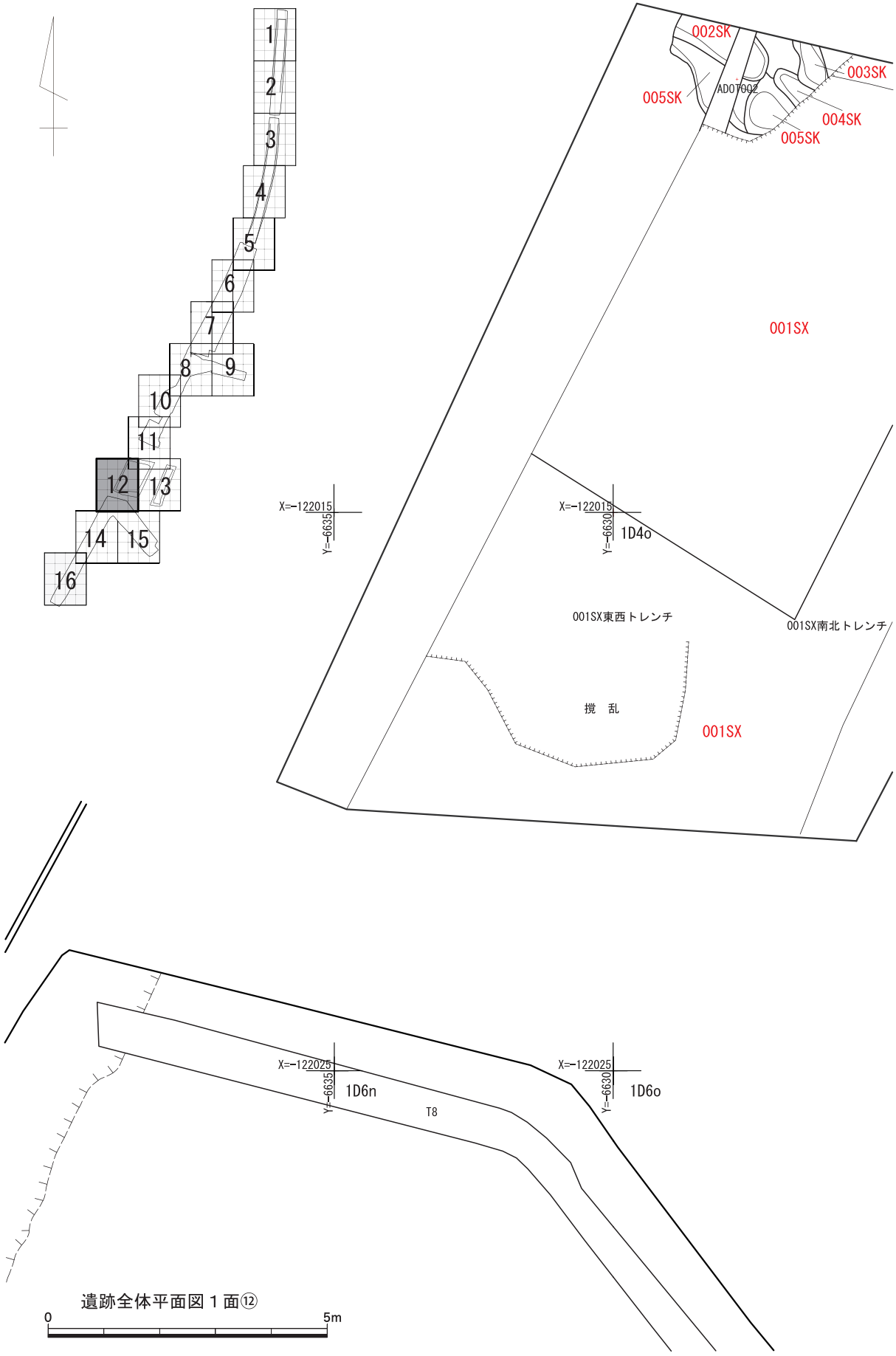


遺跡全体平面図１面11

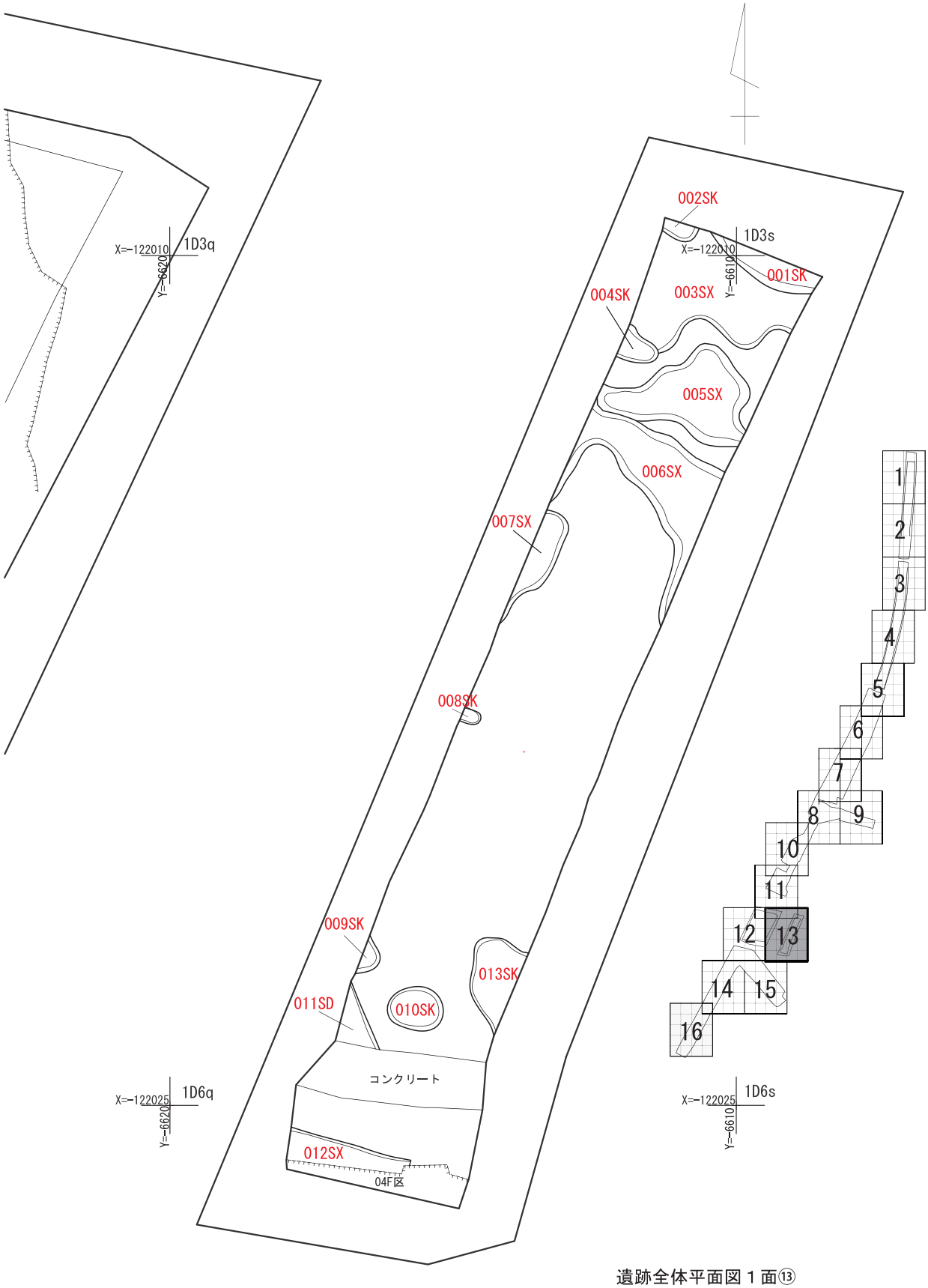
0 5m



遺構図版 13



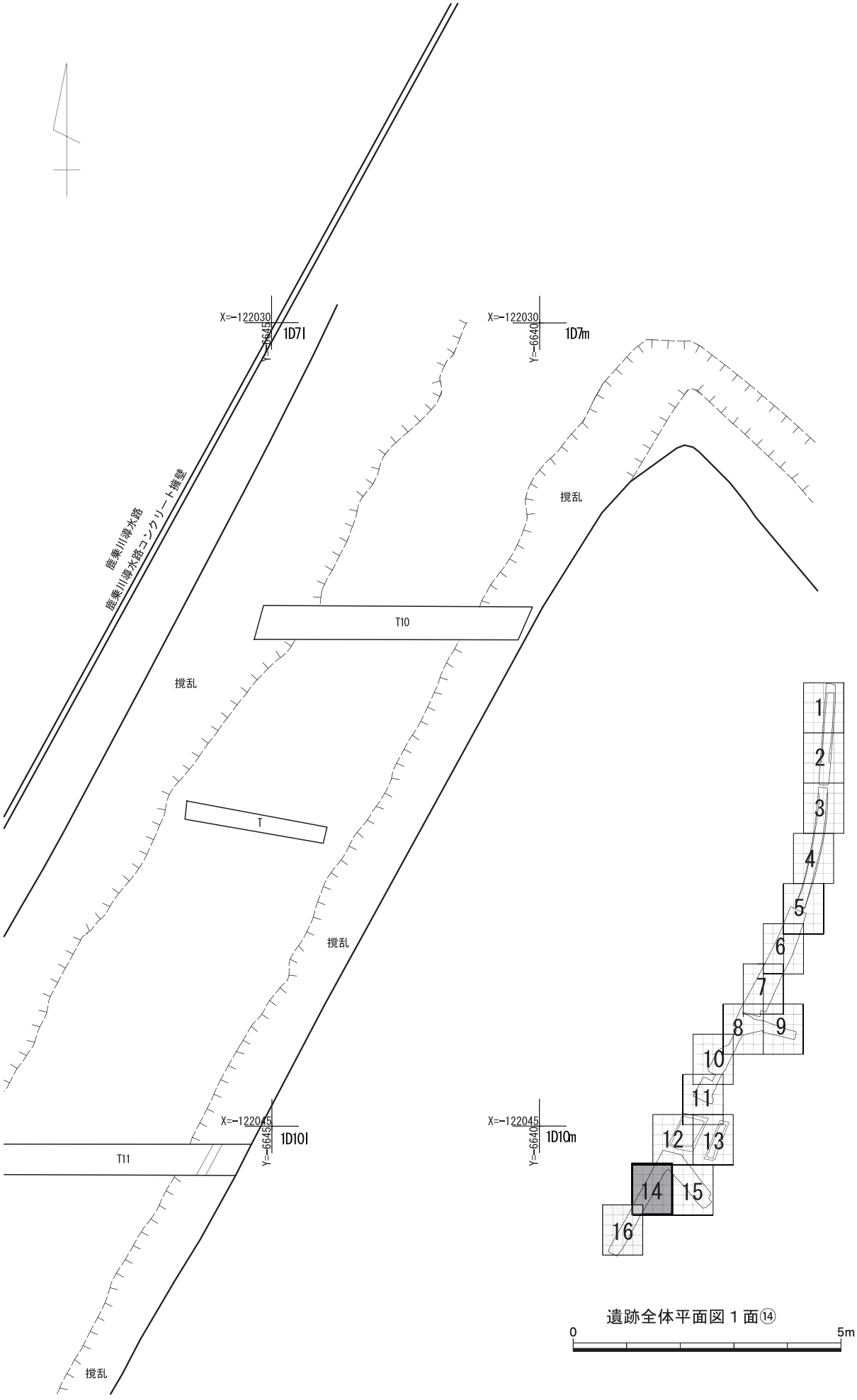
遺跡全体平面図１面⑫



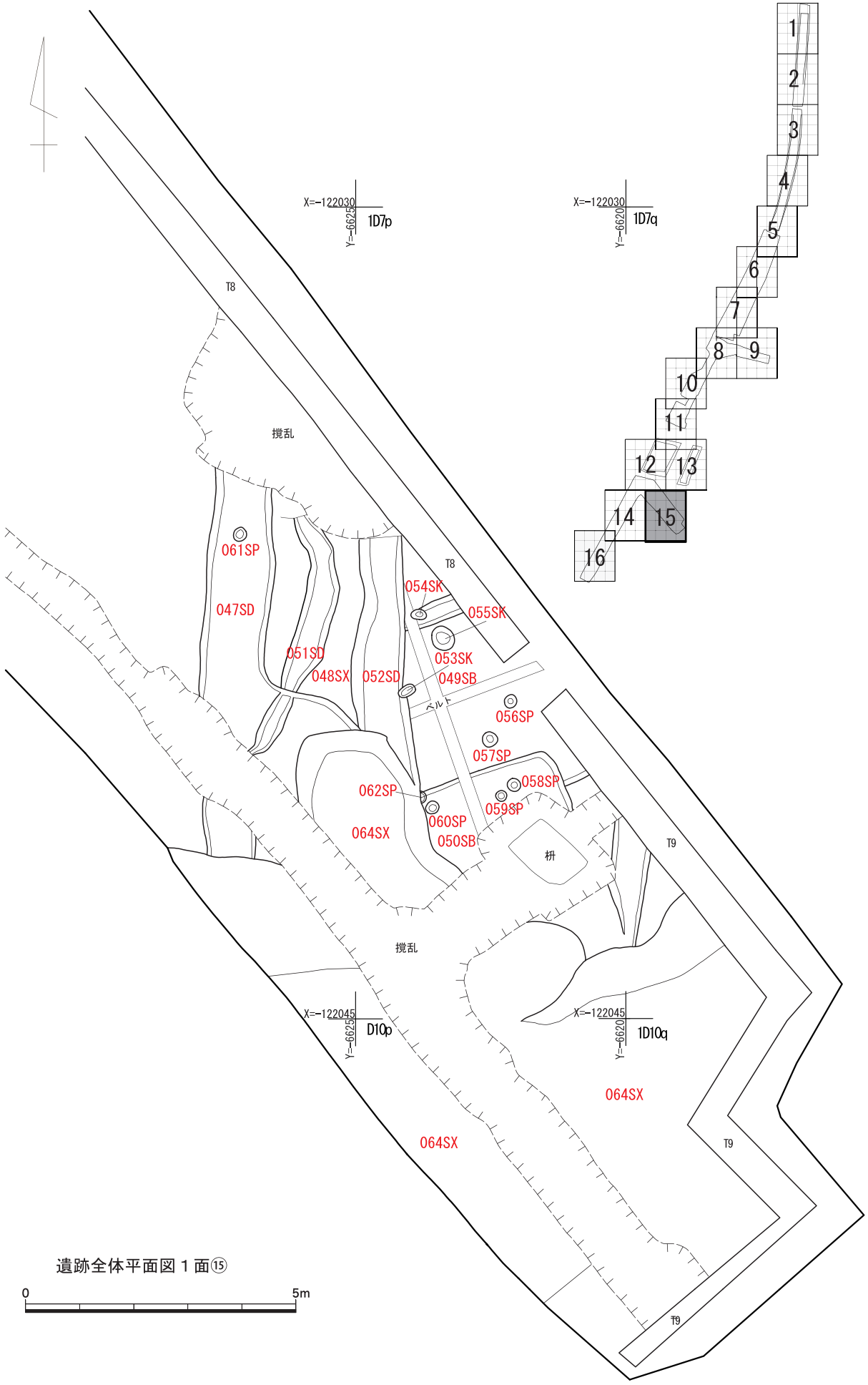
遺跡全体平面図１面⑬

0 5m

遺構図版 15

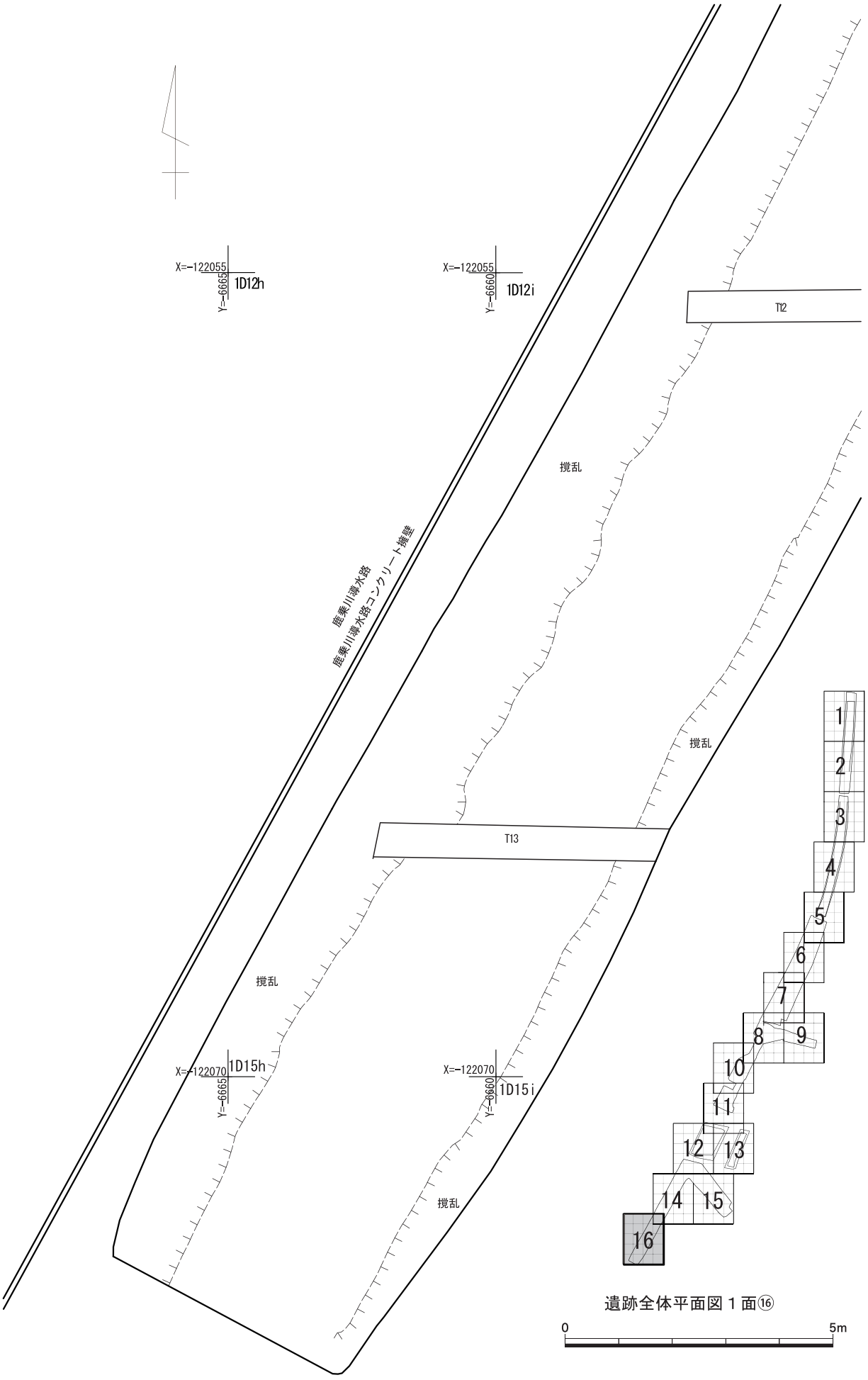


遺跡全体平面図１面⑭

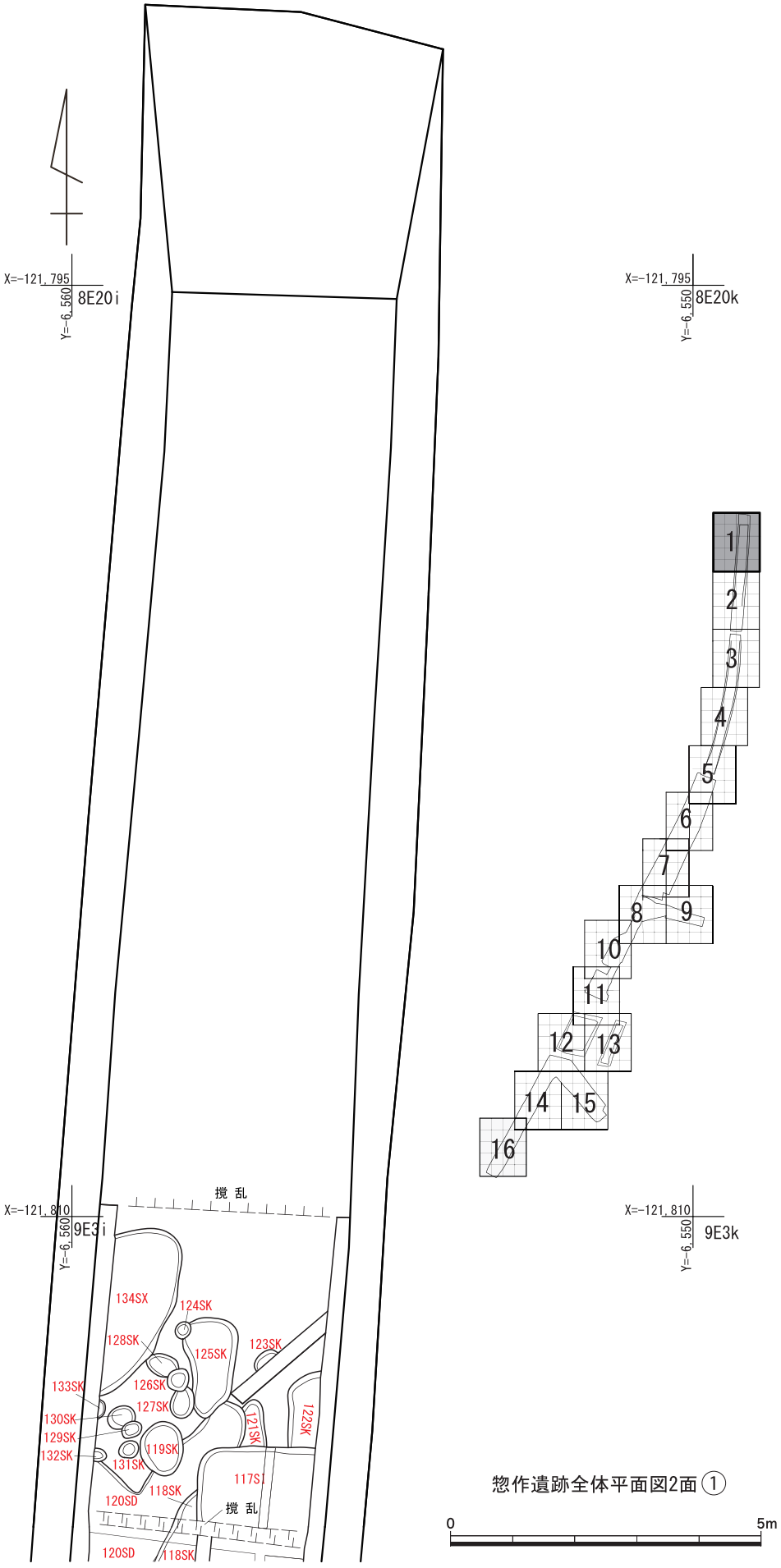


遺跡全体平面図１面⑮

0 5m


X=-122055
Y=-6665
1D12h
X=-122055
Y=-6660
1D12i
T12
撹乱
鹿乗川導水路
鹿乗川導水路コンクリート擁壁
撹乱
T13
撹乱
X=-122070
Y=-6665
1D15h
X=-122070
Y=-6660
1D15i
撹乱
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
0
5m

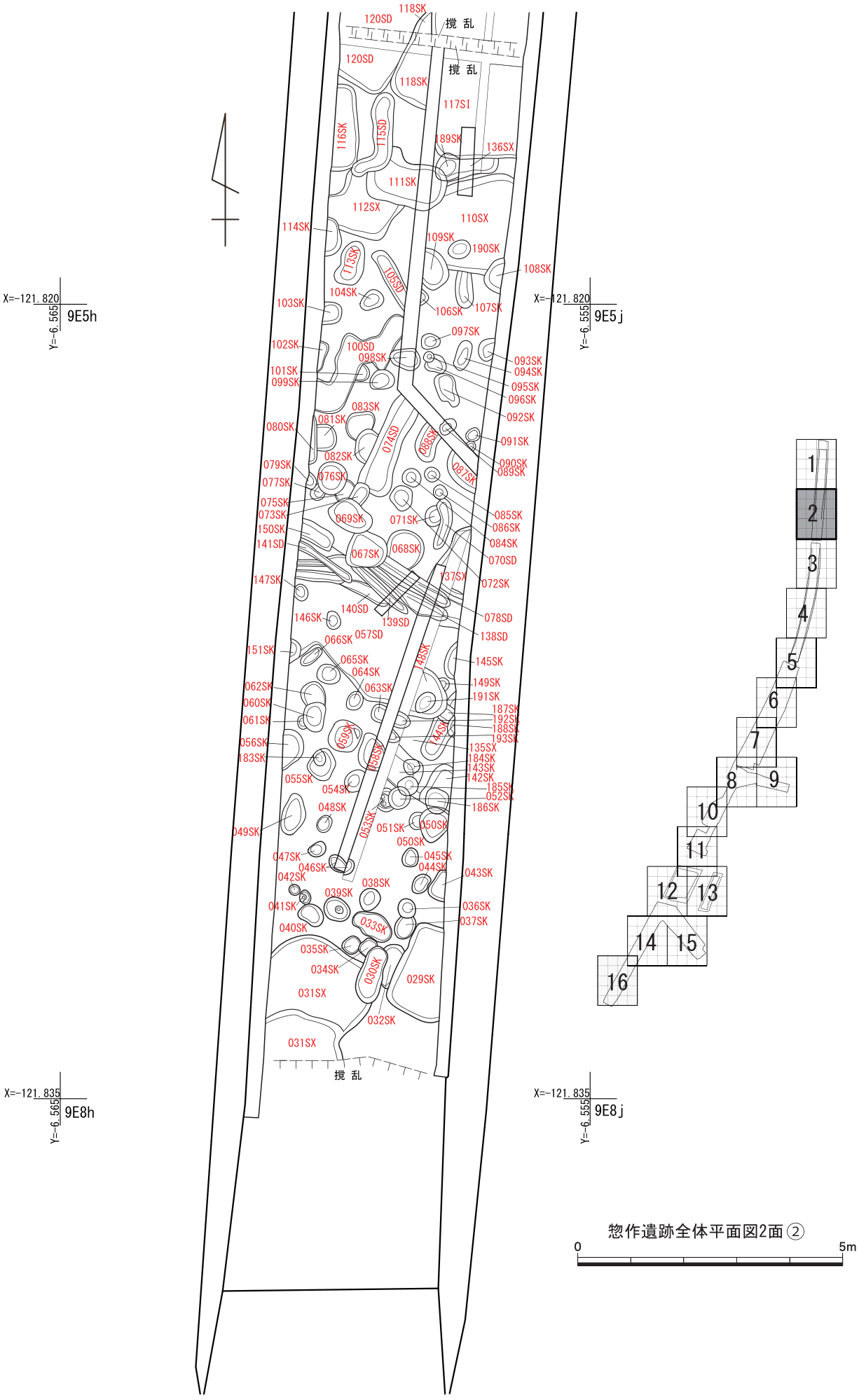
遺跡全体平面図１面⑯



惣作遺跡全体平面図2面①

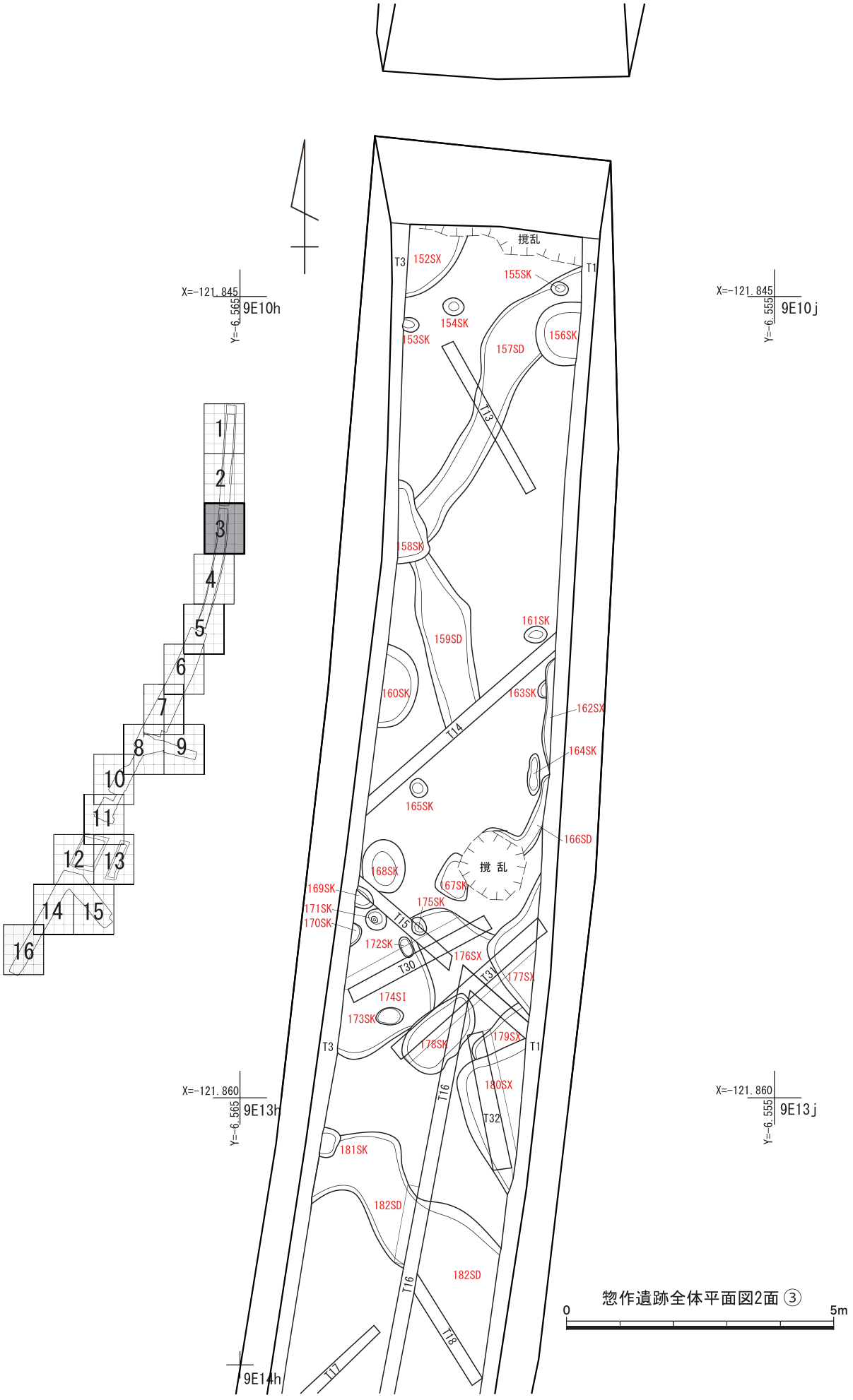
0 5m

遺構図版 19



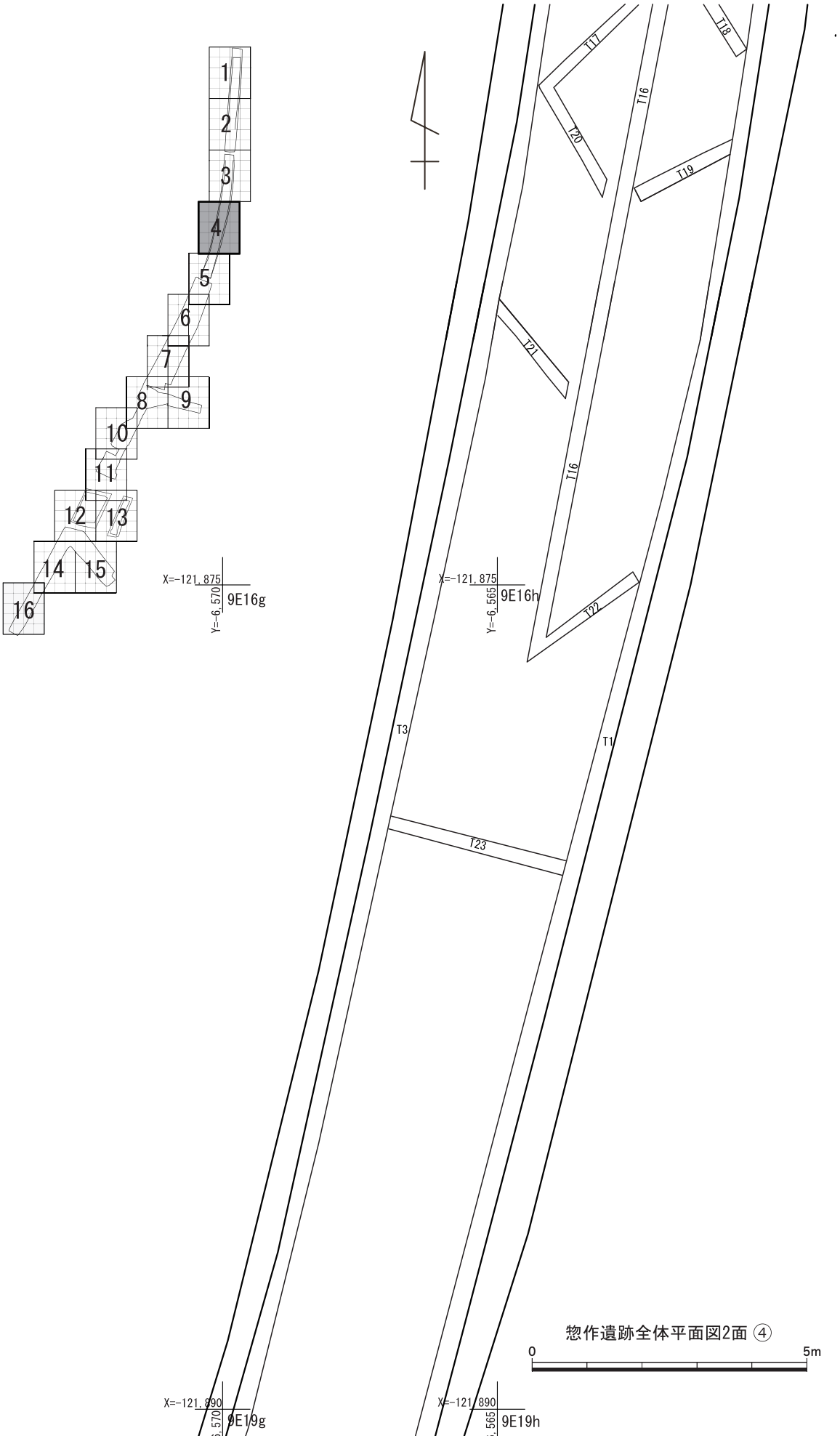
惣作遺跡全体平面図2面②

0 5m

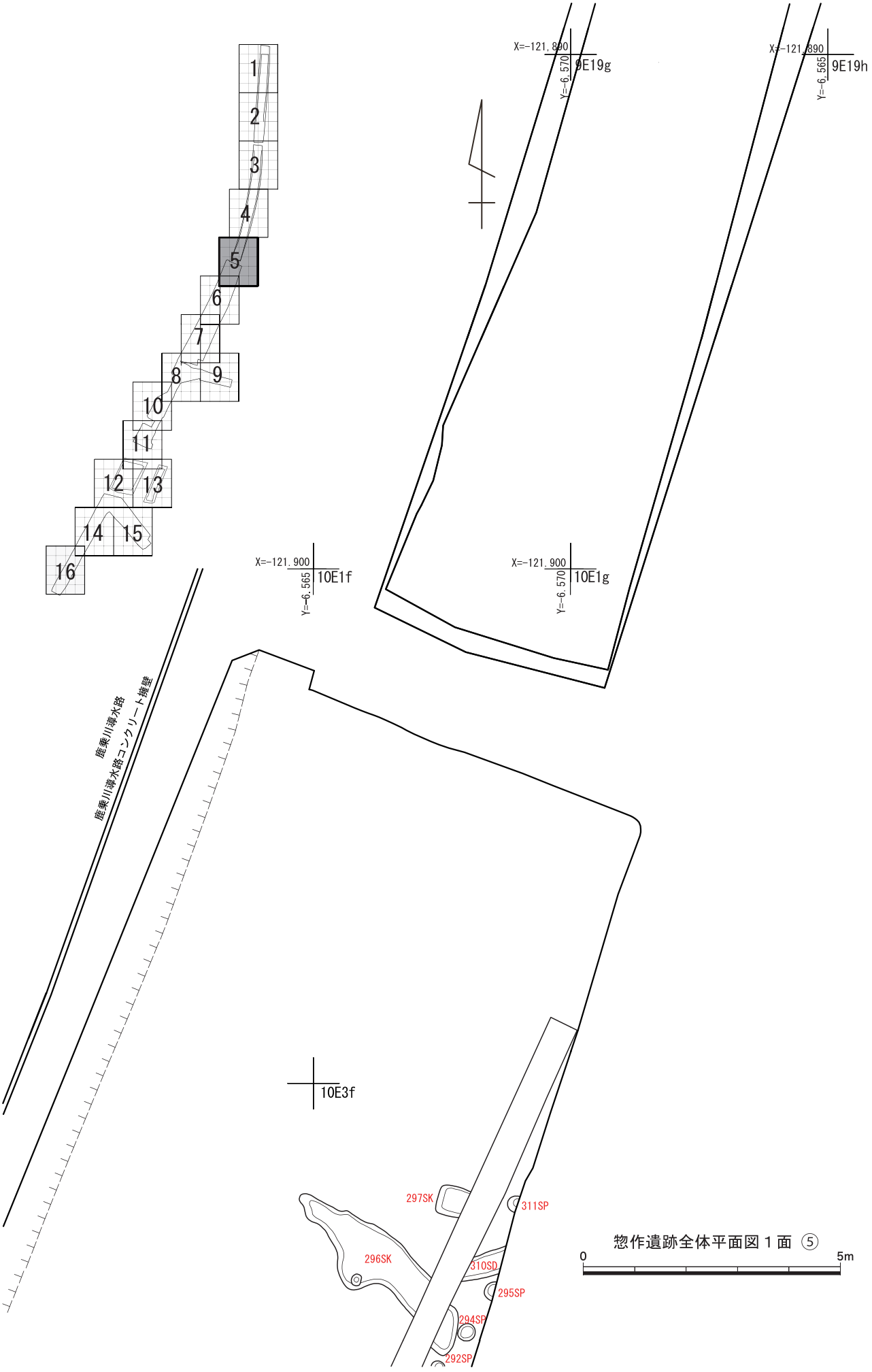


惣作遺跡全体平面図2面 ③

遺構図版 21

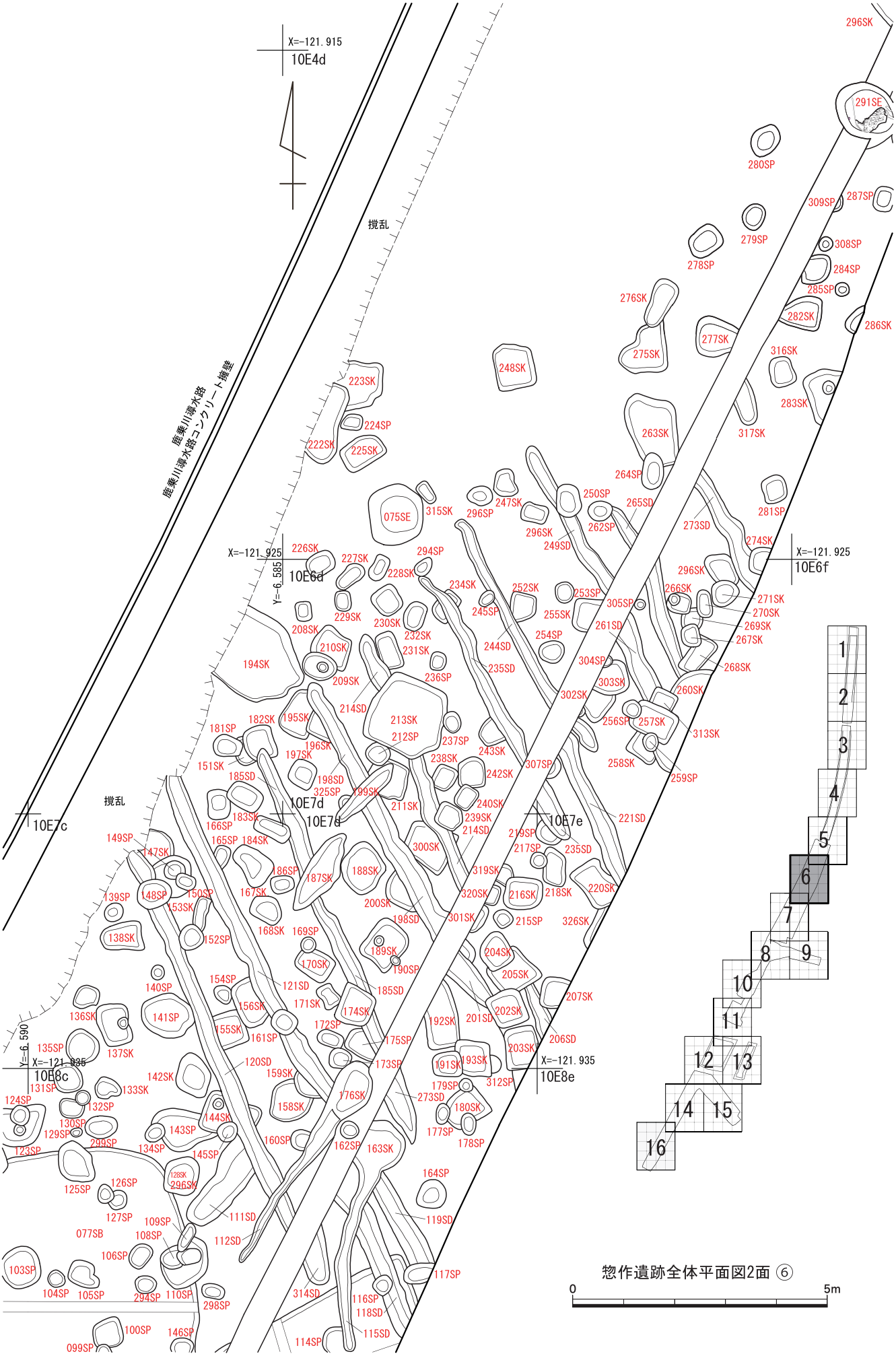


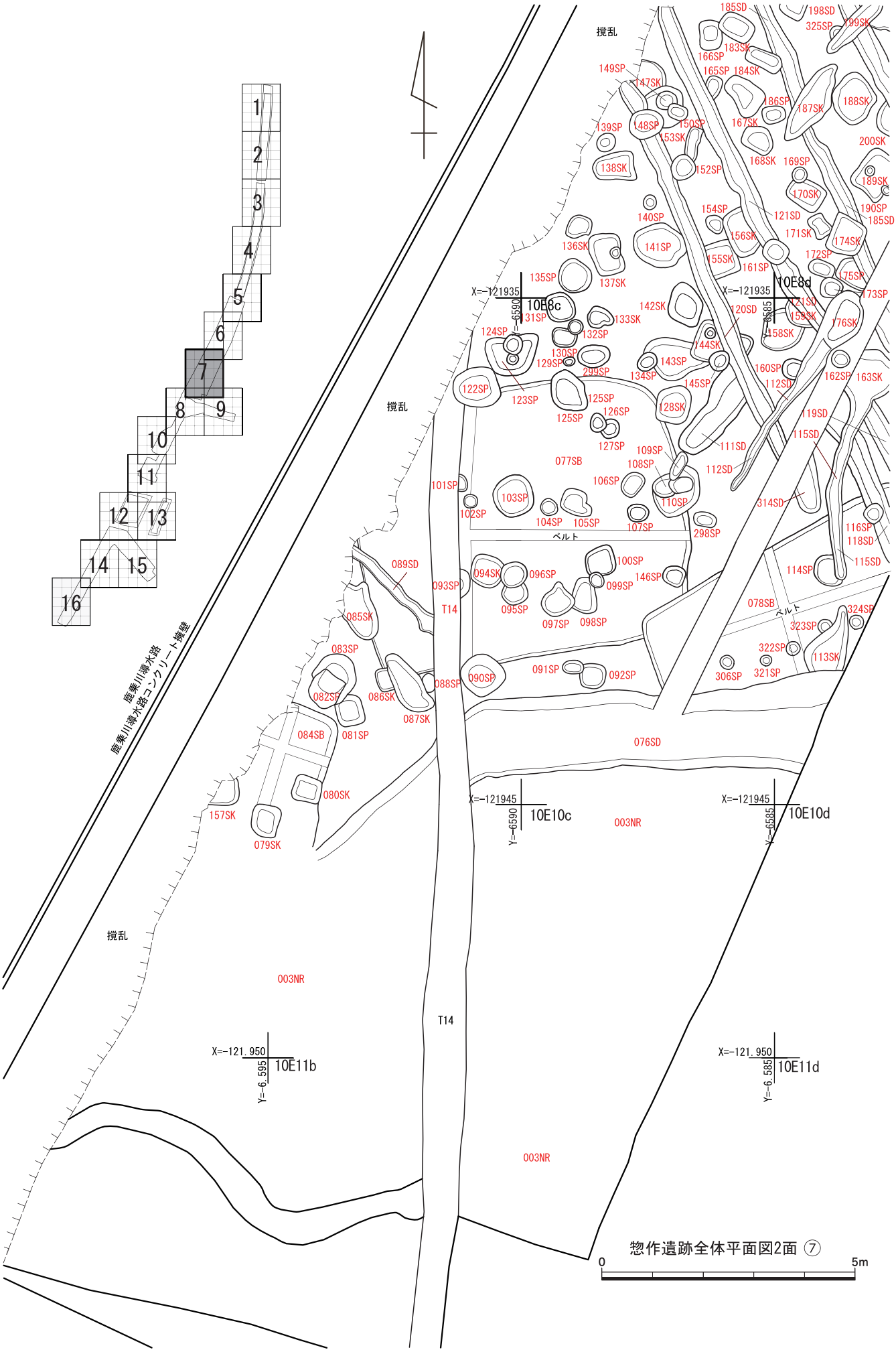
惣作遺跡全体平面図2面 ④



惣作遺跡全体平面図１面 ⑤

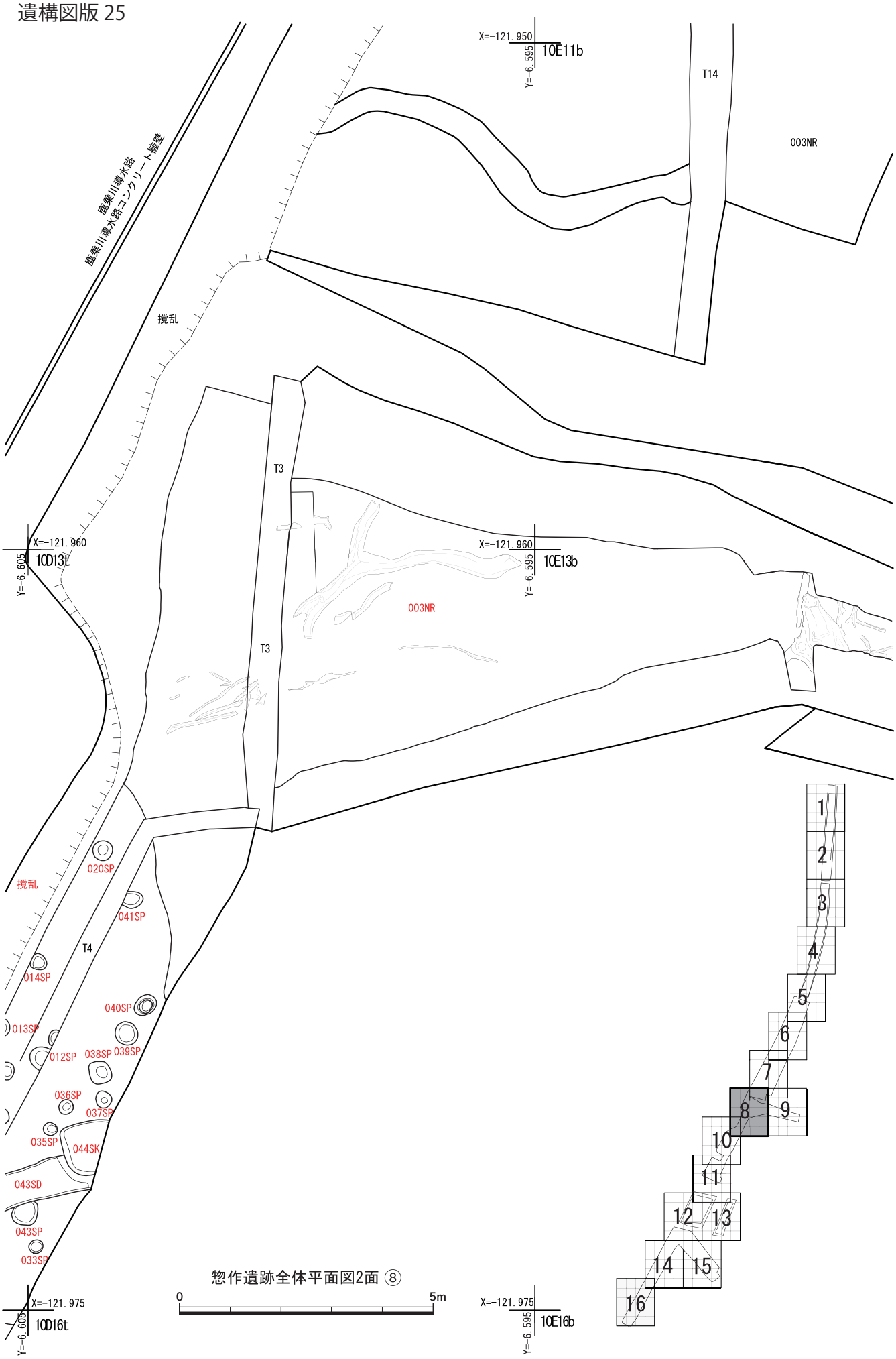
遺構図版 23


X=-121.915
10E4d
撹乱
鹿乗川導水路
鹿乗川導水路コンクリート擁壁
X=-121.925
10E6d
Y=-6.585
X=-121.925
10E6f
10E7c
撹乱
10E7d
10E7e
10E8c
X=-121.935
Y=-6.590
X=-121.935
10E8e
296SK
291SE
280SP
309SP
287SP
279SP
308SP
278SP
284SP
285SP
276SK
282SK
286SK
277SK
316SK
275SK
248SK
283SK
223SK
317SK
224SP
222SK
225SK
263SK
264SP
075SE
315SK
296SP
247SK
250SP
265SD
281SP
262SP
273SD
296SK
249SD
274SK
226SK
227SK
294SP
228SK
234SK
252SK
253SP
296SK
266SK
271SK
270SK
269SK
267SK
229SK
230SK
245SP
255SK
305SP
261SD
208SK
232SK
254SP
210SK
231SK
244SD
268SK
194SK
235SD
304SP
209SK
236SP
303SK
302SK
260SK
214SD
213SK
256SP
257SK
181SP
182SK
195SK
212SP
237SP
313SK
196SK
243SK
197SK
238SK
258SK
151SK
185SD
242SK
307SP
259SP
198SD
325SP
199SK
211SK
240SK
221SD
183SK
239SK
166SP
214SD
219SP
217SP
235SD
149SP
147SK
165SP
184SK
300SK
186SP
187SK
188SK
319SK
139SP
148SP
150SP
167SK
216SK
218SK
220SK
153SK
200SK
320SK
198SD
301SK
215SP
326SK
138SK
168SK
169SP
152SP
189SK
204SK
170SK
190SP
205SK
154SP
121SD
185SD
140SP
156SK
171SK
174SK
207SK
136SK
141SP
172SP
192SK
201SD
202SK
155SK
161SP
175SP
203SK
206SD
135SP
137SK
120SD
173SP
191SK
193SK
131SP
142SK
159SK
179SP
312SP
133SK
176SK
273SD
124SP
132SP
158SK
180SK
130SP
144SK
129SP
143SP
177SP
178SP
299SP
123SP
134SP
160SP
162SP
163SK
145SP
128SK
296SK
164SP
125SP
126SP
127SP
111SD
119SD
109SP
077SB
108SP
112SD
106SP
103SP
117SP
104SP
105SP
294SP
110SP
298SP
314SD
116SP
118SD
100SP
146SP
115SD
099SP
114SP
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
惣作遺跡全体平面図2面 ⑥
0
5m

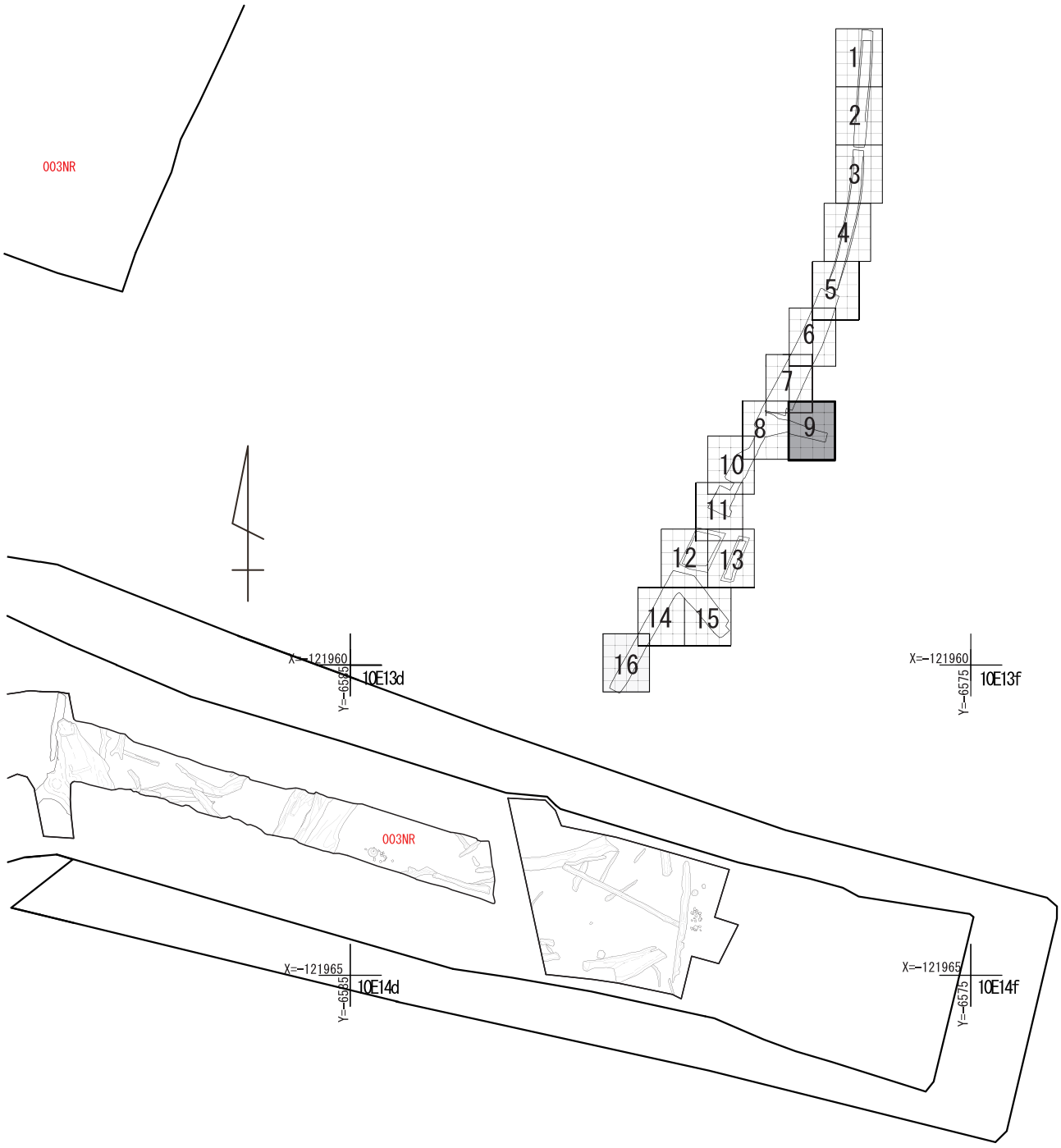


惣作遺跡全体平面図2面 ⑦

遺構図版 25



惣作遺跡全体平面図2面 ⑧

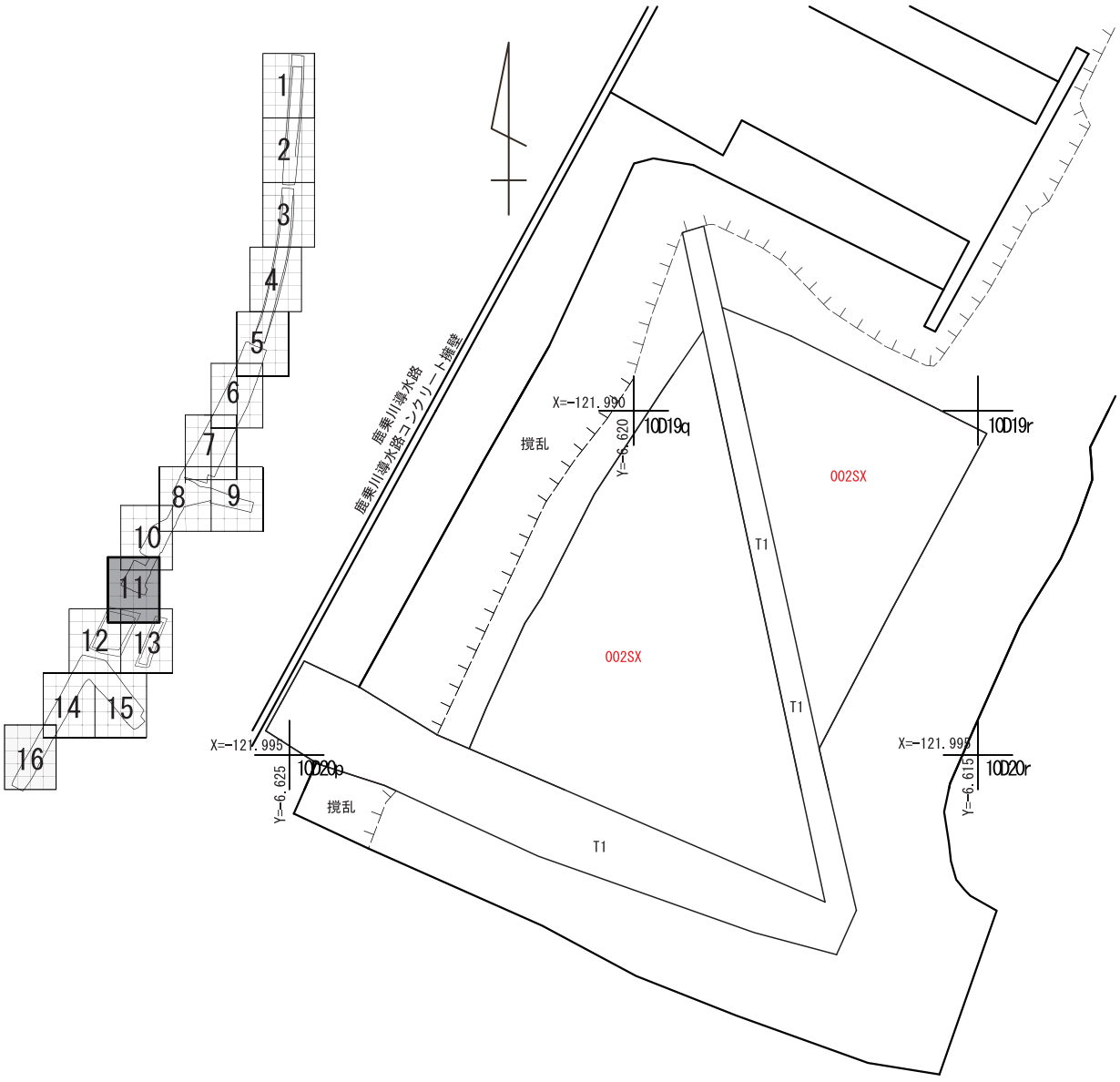


惣作遺跡全体平面図2面⑨

0 5m

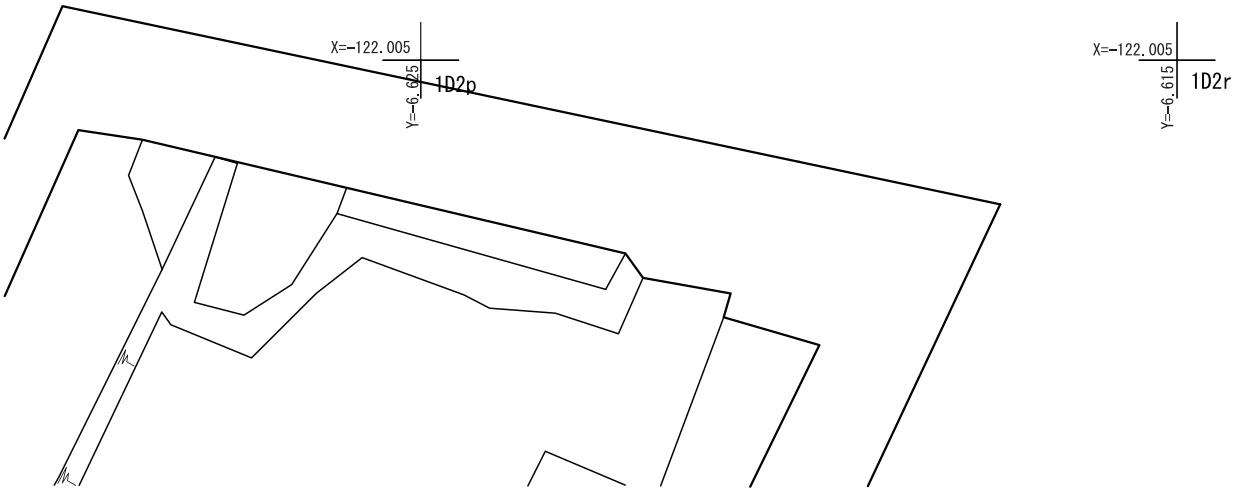
遺構図版 27

惣作遺跡全体平面図2面⑩

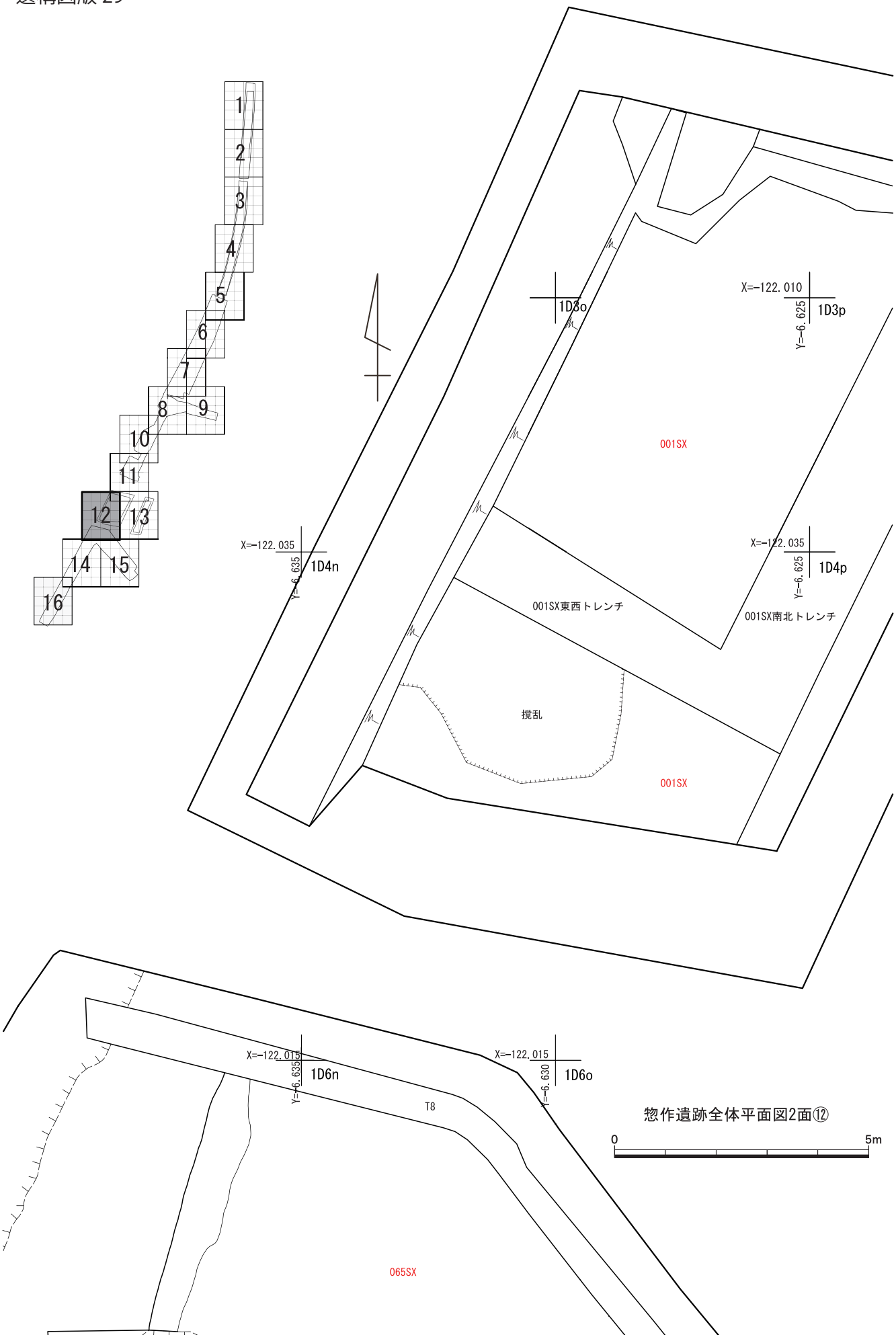


惣作遺跡全体平面図2面⑪

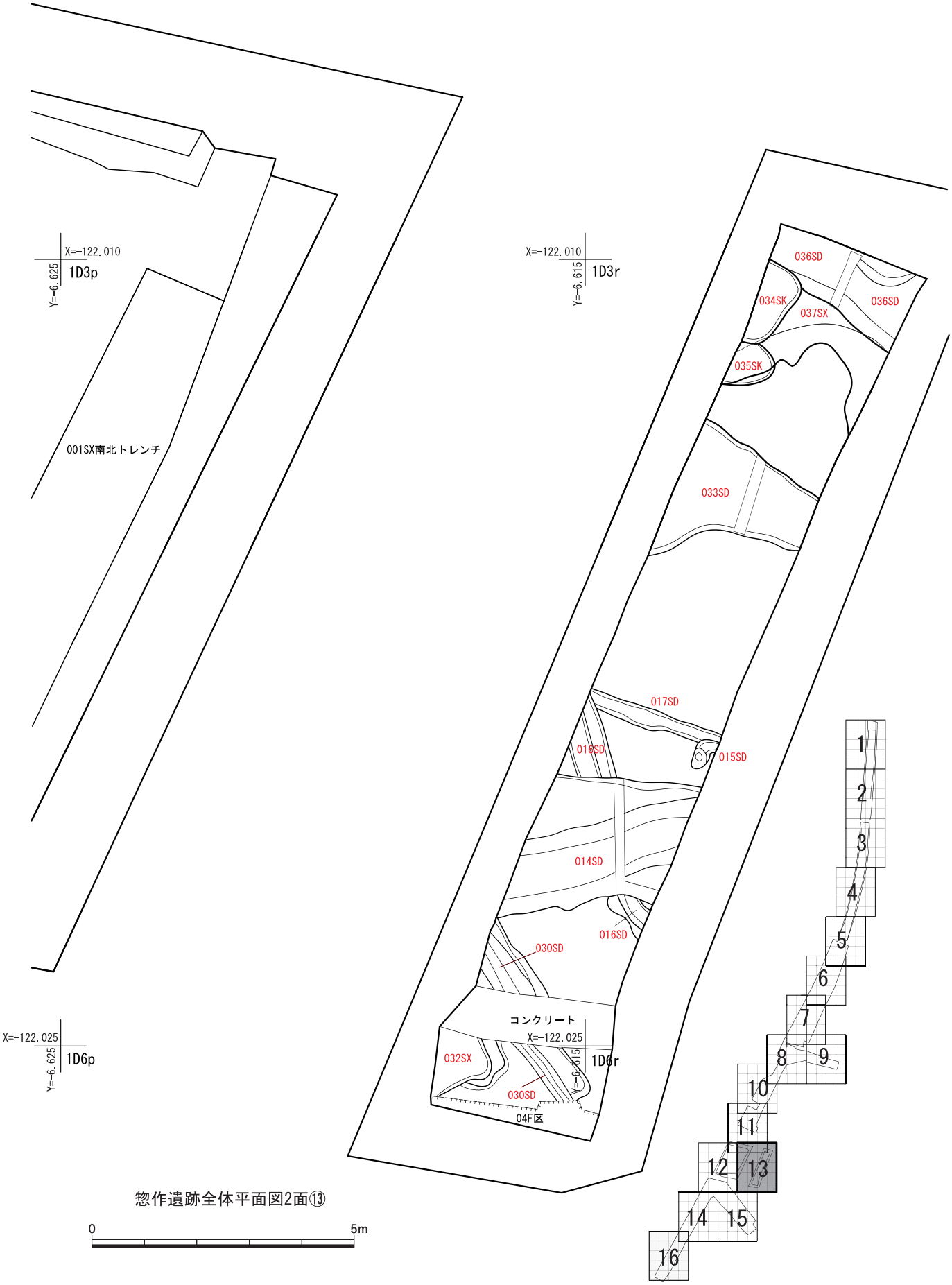
0 5m



遺構図版 29

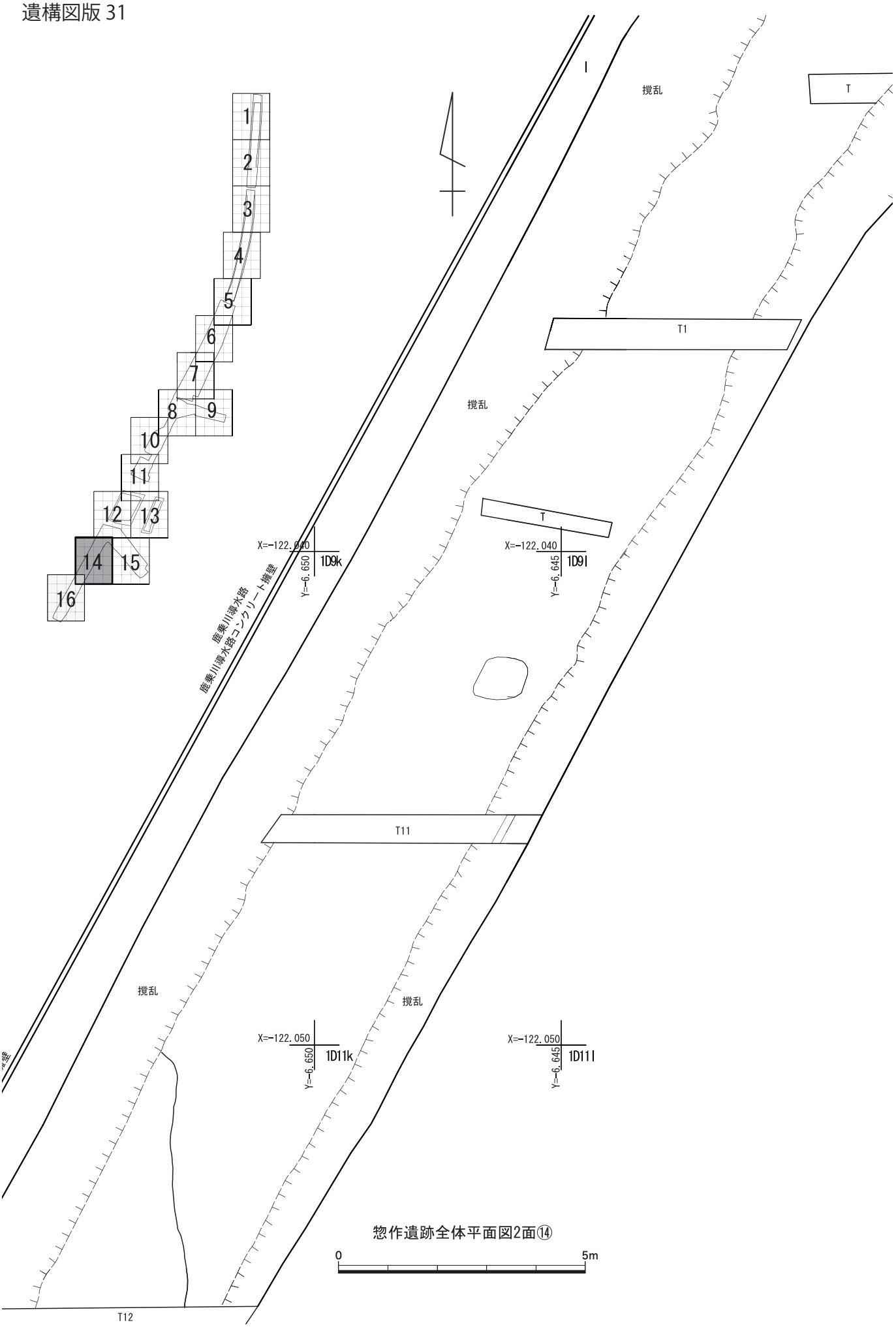


惣作遺跡全体平面図2面⑫

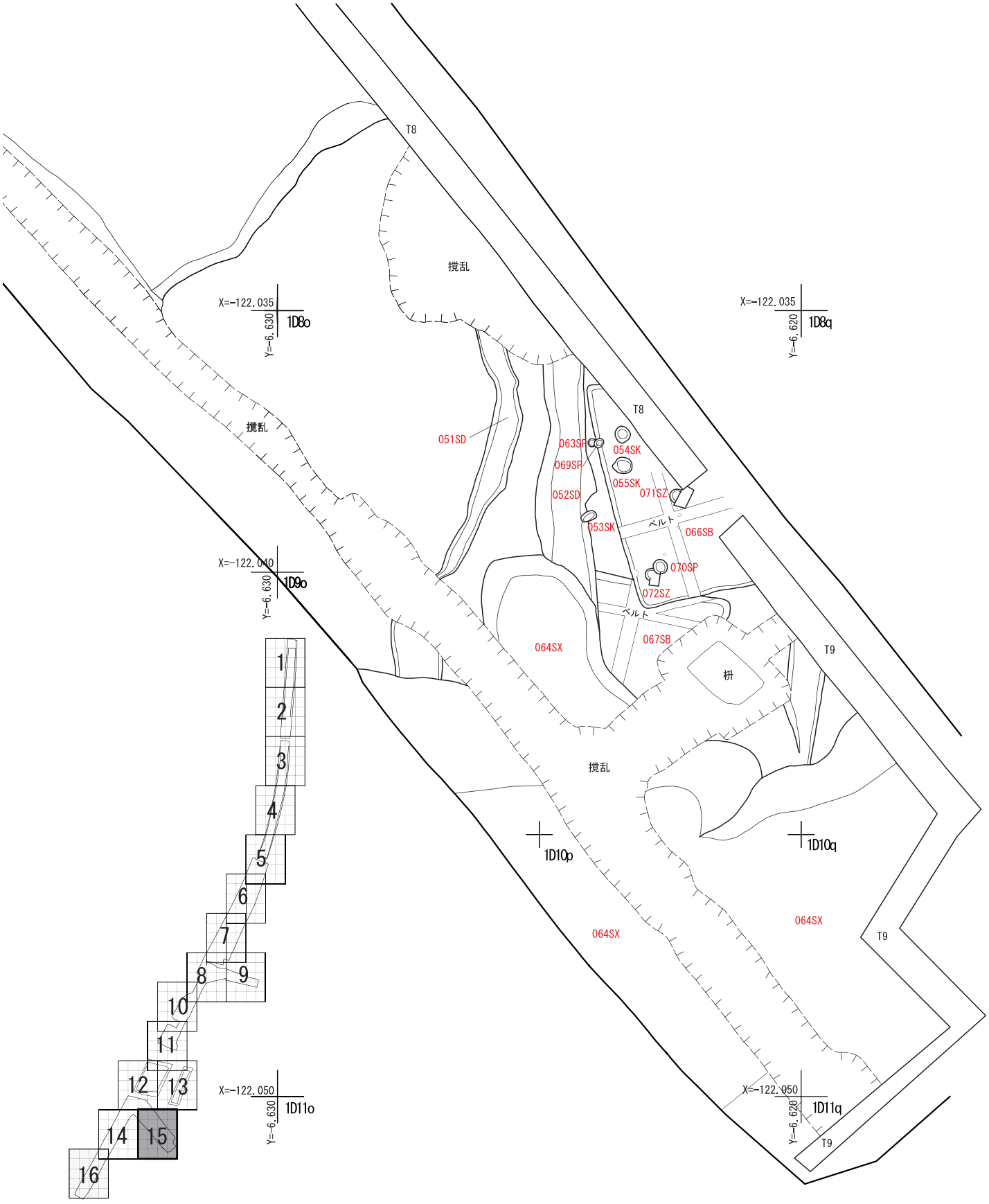


惣作遺跡全体平面図2面⑬

遺構図版 31

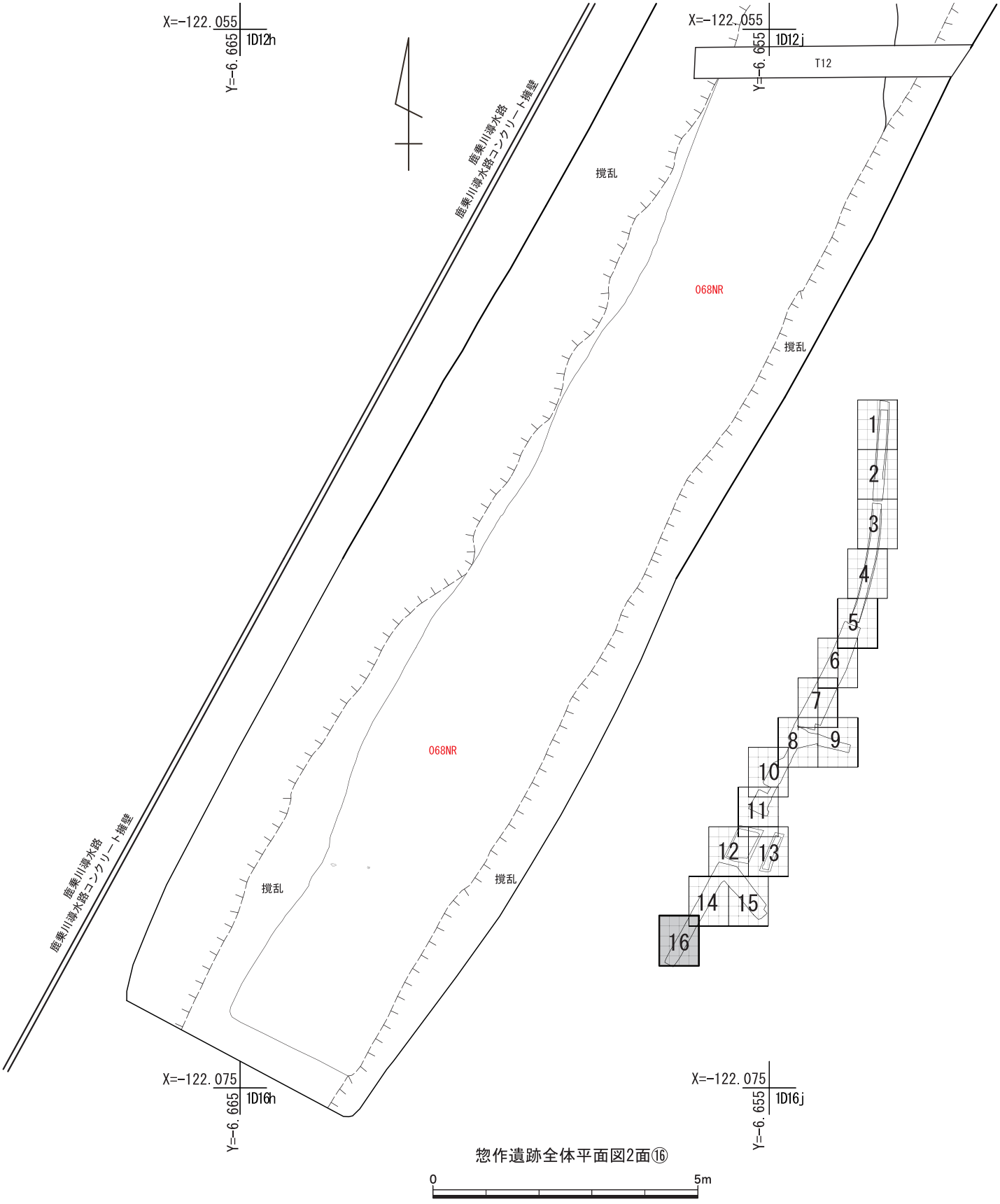


惣作遺跡全体平面図2面⑭



惣作遺跡全体平面図2面⑮

0 5m



惣作遺跡全体平面図2面⑯

0 5m

遺跡遠景（南からみる）

08Aa 区 1 面遠景（東からみる）

08C 区遠景（南からみる）

08Aa 区 2 面遠景（北からみる）

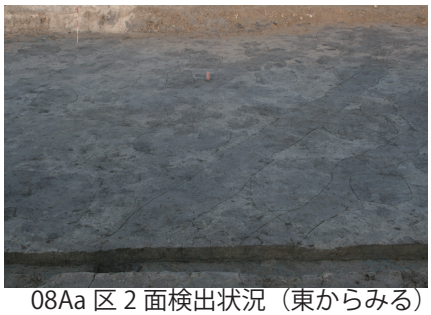
09B 区遠景（南西からみる）

08B 区遠景（北からみる）

09C 区遠景（北からみる）

写真図版 2

08Aa 区 2 面全景（西からみる）



08Aa 区 2 面検出状況（東からみる）

08Aa 区溝群（南東からみる）

08Aa 区 098SP 土層断面（南からみる）

08Aa 区 077SB 土層（南からみる）

08Aa 区 078SB（南からみる）

08Aa 区 291SE 編物出土状況

08Aa 区 1 面遺構検出（南からみる）

08Aa 区 1 面中央部（東からみる）

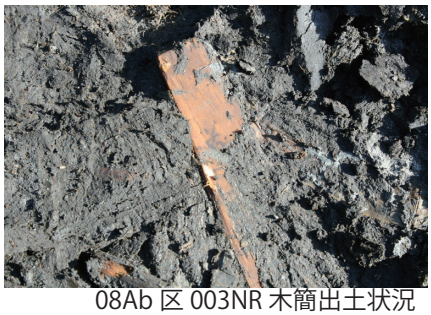
08Aa 区 075SE 土層断面

08Aa 区北壁土層断面（南からみる）

08Ab 区 2 面全景（南西からみる）

08Ab 区 2 面全景（北からみる）

08Ab 区 003NR 土器出土状況


08Ab 区 003NR 木簡出土状況

08Ab 区 003NR 木製品出土状況

08Ab 区 003NR 木製品出土状況

08B 区南壁土層断面（北からみる）

08B 区 003NR 須恵器出土状況

08B 区 007SB（南からみる）

08B 区 004SD（西からみる）

08B 区 002SX（南からみる）

08B 区 001SD（南西からみる）

08B 区 003NR 土層断面（西からみる）

08B 区 003NR 遺物出土状況

08B 区 003NR 遺物出土状況

08B 区 003NR 遺物出土状況

08B 区 003NR 横斧柄出土状況

08B 区 003NR 遺物出土状況

08B 区 003NR 土器出土状況

08B 区 003NR 団扇形木製品出土状況

08B 区 003NR 土器出土状況

08B 区 003NR 土器出土状況

08B 区 003NR 曲柄鍬出土状況

08B 区 003NR 遺物出土状況

08C 区 066SB･067SB 土器出土状況（北東からみる）

08C 区 049SB・050SB 土層断面

08C 区 049SB・050SB 完掘

08C 区 066SB 土層断面

08C 区 067SB 土層断面

08C 区 073SD（南からみる）

08C 区 066SB 土器出土状況

08C 区 072SZ 土器出土状況

08C 区 071SZ 土器出土状況

08C 区 068NR 遺物出土状況（南からみる）

08C 区 068NR 下駄出土状況

08C 区深掘り調査状況

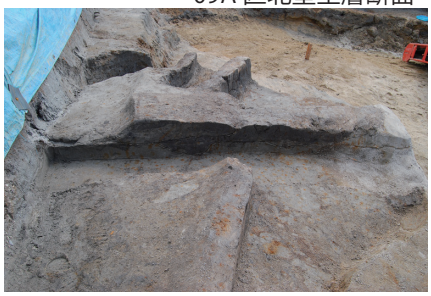
写真図版 6

09A 区・09B 区全景（南からみる）

09A 区北壁土層断面

09A 区東壁土層断面

09A 区灰色粘土堆積状況



09A 区 002SK・005SK 土層断面

09A 区 002SK ～ 005SK 完掘

09A 区 2 面（南からみる）

09B 区 1 面全景（北からみる）

09B 区 1 面北半（北西からみる）

09B 区 2 面南半（北東からみる）

09B 区 018SD・038SD

09B 区 060SD 遺物出土状況

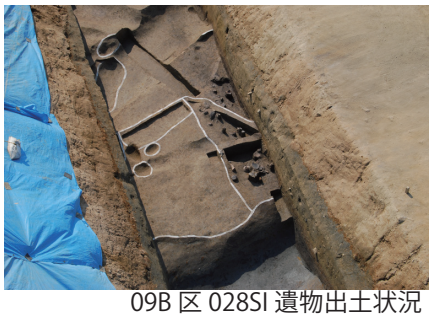
09B 区 018SD・041SD 土層断面

09B 区 3 面全景（北東からみる）

09B 区 4 面全景（北からみる）

09B 区 3 面遺構検出状況

09B 区 018SD



09B 区 028SI 遺物出土状況

09B 区 4 面全景（北からみる）

09B 区 026SK・072SK 遺物出土状況

09B 区遺物出土状況

09B 区 028SI 遺物出土状況（東からみる）

09B 区 028SI 下層遺物出土状況

09B 区東壁土層断面

09C 区 1 面北半部（南からみる）

09C 区 1 面北半遺構検出状況

09C 区 1 面北半遺構検出状況

09C 区 1 面全景（南からみる）

09C 区トレンチ 12 土層断面

09C 区トレンチ 29 土層断面

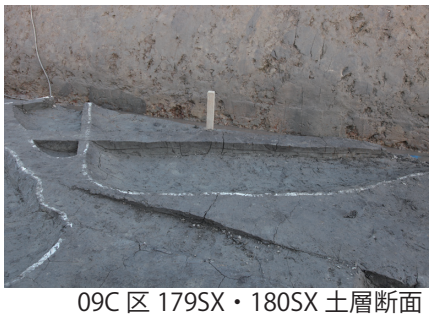
09C 区東壁土層断面（西からみる）

09C 区 2 面北半部（北からみる）

09C 区 2 面北半部検出状況

09C 区 2 面北半部検出状況

09C 区 2 面南半部検出状況



09C 区 179SX・180SX 土層断面

09C 区 117SI･118SI 土器出土状況 (東からみる）

09C 区 025SK 土層断面

09C 区 024SD 土器出土状況

09C 区 117SI 完掘

09C 区掘立柱列

09C 区 110SX 出土状況

294

175

62

31

81

89

90

39

48

24

171

50

43

82

247

35

154

294

42

254

246

47

255

203

177

143

18

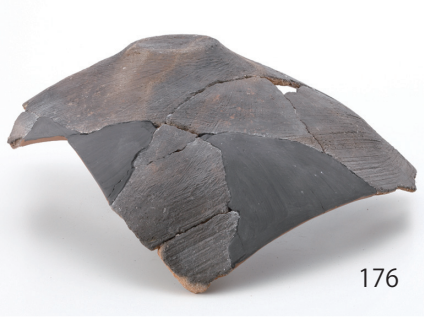
201

145

294

294

8


176

9

112

136

188

152

474

142

146

475

195
195
196
196
234
272
276
231
226
224
172
300
99
64
296
295
256
223
228
287

364

412

365

410

538

509

390

385

409

453

388

375

384

402

422

387

391

454

396

383

414

411

363

417

462

446

427

444

455

477

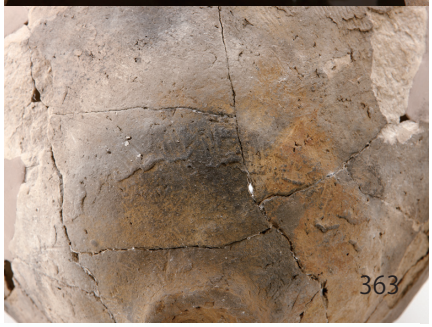
420

572

363

445

573


363

507

542

512

556

514

546

513

508

544

522

551

545

536

557

543

511

558

540

321

317

315

323

566

316

322

565

311

357

563

312

569

568

707

629

652

679

630

657

673

670

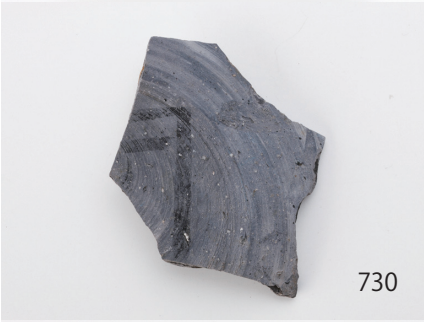
653

636

674

645

688


730

680

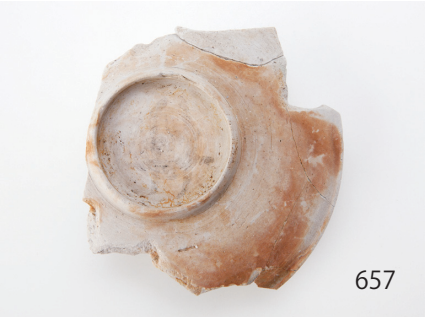
682

625

644

614

623


657

729

738
755
624
642
719
650

746
747
744

740
742
743
741

628
669
716

746
747
744

740
742
743
741

748

760

757

766
772

773

775

782

783

785

788

294

798

798

799

789

794
795

801

806

811

813

812

802

792

803

845

849

800

777

810

923

866 865

861

797 830 879

895 896

864 863 862 874 878

880 881

880 881

892

893

909

892

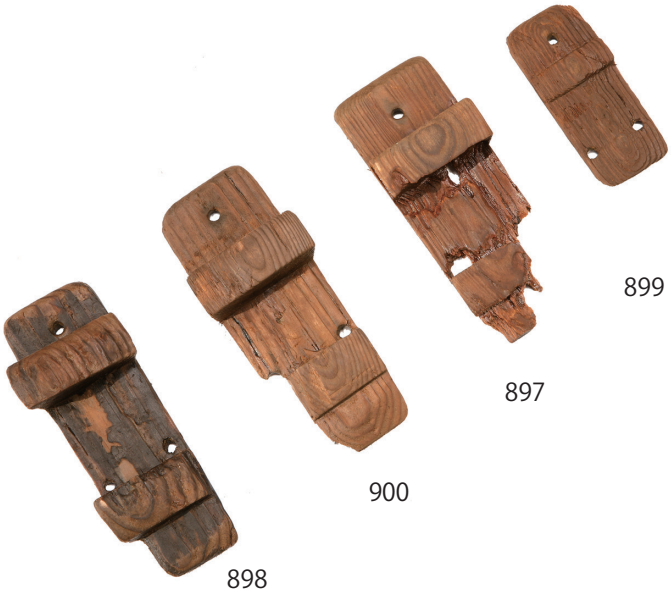
893

909

911

904

914



愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第172集

惣作遺跡Ⅱ

2012年３月31日

編集・発行　公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団
愛知県埋蔵文化財センター

印　　刷　新日本法規出版株式会社